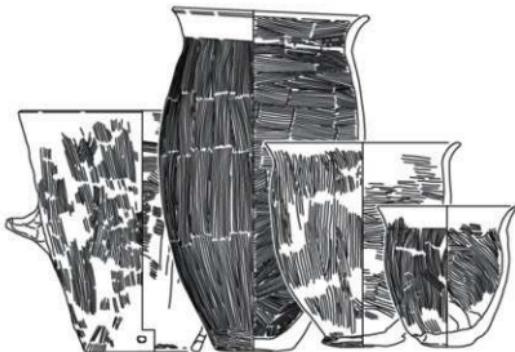


上梅沢遺跡 水橋金広・中馬場遺跡 発掘調査報告 新堀西遺跡

—北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告VI—



2013年

**上梅沢遺跡
水橋金広・中馬場遺跡 発掘調査報告
新堀西遺跡**

—北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告VI—

2013年

公益財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

序

北陸新幹線は、日本海沿いに上越市、富山市、金沢市、福井市等の主要都市を経由し、東京と大阪を結ぶ路線として計画され、現在、敦賀市までの建設が進められています。その建設に先立ち、当事務所では、計画路線内の遺跡で平成13年度から発掘調査を実施してまいりました。

本書は平成19年度から21年度にわたって調査を実施した滑川市上梅沢遺跡と富山市水橋金広・中馬場遺跡、新堀西遺跡の成果をまとめたものです。

これらの遺跡は常願寺川右岸の扇状地上に立地します。上梅沢遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の円形周溝墓や飛鳥時代の竪穴建物により、県東部の古墳出現期や飛鳥時代の集落の様子が明らかとなりました。水橋金広・中馬場遺跡では弥生時代中期から近世までの遺構や遺物から、長期間にわたって人々の生活が営まれていたことが分かりました。新堀西遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の建物群と多くの土器がみつかり、当時の暮らしぶりを示す貴重な発見となりました。

こうした発掘調査の成果が、文字の記録には現れることのない人々の生活をひもとく一助となり、地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いです。

本書をまとめるにあたり、ご協力とご指導を頂きました関係機関および関係諸氏に厚くお礼申し上げます。

平成25年3月

公益財團法人富山県文化振興財團
埋蔵文化財調査事務所

所長 岸 本 雅 敏

例　　言

1 本書は富山県滑川市上梅沢地内に所在する上梅沢遺跡、富山市水橋中馬場・水橋金広・水橋清水堂地内に所在する水橋金広・中馬場遺跡、同新堀地内に所在する新堀西遺跡の発掘調査報告書である。

2 調査は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構からの委託を受けて、公益財団法人富山県文化振興財団が行った。

3 本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

調査期間	上梅沢遺跡	平成20（2008）年10月14日～10月29日 平成21（2009）年8月5日～9月17日
	水橋金広・中馬場遺跡	平成19（2007）年5月24日～9月8日 平成20（2008）年5月26日～9月24日 平成21（2009）年7月4日～10月8日
	新堀西遺跡	平成19（2007）年7月26日～10月31日 平成20（2008）年9月2日～10月16日

整理期間

平成22（2010）年4月1日～平成25（2013）年3月31日

4 本書の編集は青山　晃が担当し、本文執筆は青山の外、町田賢一が担当した。執筆分担は文末に記した。

5 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示・ご協力を得た。記して謝意を表したい。（敬省略、五十音順）

富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、富山市教育委員会、滑川市教育委員会

凡　例

- 1 本文・挿図で扱った遺構・遺物は、一覧表に掲載している。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。
- 3 挿図の縮尺は下記を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。
遺構　堅穴建物：1/80、建物：1/100、溝：1/40・1/80、土坑：1/40・1/80
遺物　土器・土製品：1/3～1/4、木製品：1/4～1/8、石製品：2/3～1/3、金属製品：1/2
- 4 遺構の略号は以下のとおりである。
S B：建物、S D：自然流路・溝、S E：井戸、S F：道路、S I：堅穴建物、S K：土坑
S P：柱穴、S X：不明遺構
- 5 遺構番号は、調査時において地区ごとに番号を付した。各遺跡は複数の年度や地区に分かれての調査であったため、地区数や遺構数が多い場合、数値の加算によって最終的な遺構番号とはせず、新たな遺構番号を付与する。各遺跡の遺構番号については次の通りとする。
上梅沢遺跡　A地区：加算せず、B地区：+1000
水橋金広・中馬場遺跡　遺構種類毎に新遺構番号を付与、旧遺構番号は一覧表に示す
新堀西遺跡　遺構種類毎に新遺構番号を付与、旧遺構番号は一覧表に示す
- 6 遺物は種類に関わらず連番を付し、本文・挿図・一覧表・写真図版の遺物番号は全て一致する。
- 7 遺跡の略号は、市町村番号に遺跡名を統一、上梅沢遺跡では「06KU-地区名」、水橋金広・中馬場遺跡では「01MN-地区名」、新堀西遺跡では「01SBN-地区名」とし、遺物の注記には略号を用いた。
- 8 遺構の地山及び炭化物層及び赤彩等は以下のとおりに示す。これ以外については、図中に凡例で示した。



- 9 土層及び遺構埋土の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参照した。
- 10 遺構一覧及び本文中で用いる遺構についての用語は以下の文献を参考にした。
堅穴建物：富山県文化振興財団 2006『下老子塙川遺跡発掘調査報告』
掘立柱建物：奈良国立文化財研究所 1976『平城宮発掘調査報告VII』
井戸：宇野隆夫 1982「井戸考」『史林』第65巻第5号
- 11 遺物のうち、珠洲・輸入陶磁器・瀬戸美濃・中世土師器・越中瀬戸の分類と編年に関する用語は以下の文献を参考にした。
珠　洲：吉岡 康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
輸入陶磁器：山本 信夫 2000『太宰府市の文化財第49集 太宰府条坊跡 XV 陶磁器分類編』太宰府市教育委員会
森田 勉 1982『14～16世紀の白磁の形式分類と編年』『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会

- 上田 秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の形式分類について」『貿易陶磁研究No.2』
日本貿易陶磁研究会
- 瀬戸 美濃：藤沢 良祐 2005 「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸
相生産技術の展開と編年』中央大学文学部日本史研究会
- 中世土師器：越前 慎子 1996 「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発
掘調査報告』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 越中瀬戸：宮田 進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究
会編
- 12 遺構一覧・遺物一覧の凡例は以下のとおりである。
- ①遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、備考欄に新>古のように記号で示す。
 - ②規模の（ ）内は現存長を表す。
 - ③法量の（ ）内は復元値を表す。残存部が少なく計測不能なものは空欄とした。
 - ④重量はg単位で示す。計測は大きさにより台秤と電子秤を使い分けた。
 - ⑤胎土色調・釉色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票
監修『新版標準土色帖』・財団法人日本規格協会『標準色表 光沢版』を使用し、釉調の和名は
小学館『色の手帳』より似たものを使用した。なお、陶磁器のうち複数の色が見られる場合は
最も多く使用されている色を記し、その他は特記事項に記す。但し透明釉の場合は記入しない。

目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘作業の経過と方法	4
3 整理作業の経過と方法	6
4 普及活動	6
第Ⅱ章 位置と環境	7
1 地理的環境	7
2 歴史的環境	7
第Ⅲ章 上梅沢遺跡	12
1 概要	12
2 層序	12
3 遺構	13
4 遺物	19
5 自然科学分析	49
6 総括	65
第Ⅳ章 水橋金広・中馬場遺跡	77
1 概要	77
2 層序	77
3 遺構	78
4 遺物	93
5 自然科学分析	164
6 総括	193
第Ⅴ章 新堀西遺跡	221
1 概要	221
2 層序	221
3 遺構	222
4 遺物	228
5 自然科学分析	277
6 総括	282

報告書抄録

挿図目次

第1図 調査位置・遺跡位置	2	第63図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	128
第2図 調査地区区割図	5	第64図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	129
第3図 地形図	9	第65図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	130
第4図 周辺の遺跡	10	第66図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	131
第5図 上梅沢遺跡 基本層序	12	第67図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	132
第6図 上梅沢遺跡 遺構全体図	25	第68図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	133
第7図 上梅沢遺跡 遺構全体図	26	第69図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	134
第8図 上梅沢遺跡 遺構全体図・遺構実測図	27	第70図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	135
第9図 上梅沢遺跡 遺構実測図	28	第71図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	136
第10図 上梅沢遺跡 遺構実測図	29	第72図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	137
第11図 上梅沢遺跡 遺構実測図	30	第73図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	138
第12図 上梅沢遺跡 遺構実測図	31	第74図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	139
第13図 上梅沢遺跡 遺構実測図	32	第75図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	140
第14図 上梅沢遺跡 遺構実測図	33	第76図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	141
第15図 上梅沢遺跡 遺構実測図	34	第77図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	142
第16図 上梅沢遺跡 遺構実測図	35	第78図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	143
第17図 上梅沢遺跡 遺構実測図	36	第79図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	144
第18図 上梅沢遺跡 遺構実測図	37	第80図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	145
第19図 上梅沢遺跡 遺構実測図	38	第81図 水橋金広・中馬場遺跡	遺構実測図	146
第20図 上梅沢遺跡 遺構実測図	39	第82図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	147
第21図 上梅沢遺跡 遺構実測図	40	第83図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	148
第22図 上梅沢遺跡 遺物実測図	41	第84図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	149
第23図 上梅沢遺跡 遺物実測図	42	第85図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	150
第24図 上梅沢遺跡 遺物実測図	43	第86図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	151
第25図 上梅沢遺跡 遺物実測図	44	第87図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	152
第26図 上梅沢遺跡 遺物実測図	45	第88図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	153
第27図 上梅沢遺跡 遺物実測図	46	第89図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	154
第28図 上梅沢遺跡 遺物実測図	47	第90図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	155
第29図 上梅沢遺跡 遺物実測図	48	第91図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	156
第30図 上梅沢遺跡の植物珪酸体分析結果	52	第92図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	157
第31図 上梅沢遺跡の花粉ダイアグラム(1)	60	第93図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	158
第32図 上梅沢遺跡の花粉ダイアグラム(2)	61	第94図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	159
第33図 上梅沢遺跡B地区構造変遷図		第95図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	160
礫物石出土位置分類図・量法分布図	66	第96図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	161
第34図 上梅沢遺跡 穴式建物出土土器組成図	68	第97図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	162
第35図 水橋金広・中馬場遺跡 基本層序	77	第98図 水橋金広・中馬場遺跡	遺物実測図	163
第36図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図	101	第99図 水橋金広・中馬場遺跡A12地区における		
第37図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図	102	植物珪酸体分析結果		169
第38図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図	103	第100図 水橋金広・中馬場遺跡A12地区における		
第39図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図	104	花粉ダイアグラム		171
第40図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図	105	第101図 水橋金広・中馬場遺跡における層年較正結果(1)	191	
第41図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図	106	第102図 水橋金広・中馬場遺跡における層年較正結果(2)	192	
第42図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図	107	第103図 水橋金広・中馬場遺跡の構造変遷図	194	
第43図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図	108	第104図 水橋金広・中馬場遺跡 1~4期の土器	195	
第44図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図	109	第105図 水橋金広・中馬場遺跡 5期の土器	196	
第45図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図	110	第106図 水橋金広・中馬場遺跡 6~7期の土器・陶磁器	197	
第46図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図	111	第107図 水橋金広・中馬場遺跡 古代道路と周辺図	199	
第47図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図	112	第108図 新堀西遺跡 基本層序	221	
第48図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図	113	第109図 新堀西遺跡 壊の分類図	230	
第49図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	114	第110図 新堀西遺跡 壺・台付壺・器皿・高杯の分類図	231	
第50図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	115	第111図 新堀西遺跡 鉢・壺・ミニチュアの分類図	232	
第51図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	116	第112図 新堀西遺跡 遺構全体図	237	
第52図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	117	第113図 新堀西遺跡 遺構全体図	238	
第53図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	118	第114図 新堀西遺跡 遺構全体図	239	
第54図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	119	第115図 新堀西遺跡 遺構実測図	240	
第55図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	120	第116図 新堀西遺跡 遺構実測図	241	
第56図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	121	第117図 新堀西遺跡 遺構実測図	242	
第57図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	122	第118図 新堀西遺跡 遺構実測図	243	
第58図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	123	第119図 新堀西遺跡 遺構実測図	244	
第59図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	124	第120図 新堀西遺跡 遺構実測図	245	
第60図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	125	第121図 新堀西遺跡 遺構実測図	246	
第61図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	126	第122図 新堀西遺跡 遺構実測図	247	
第62図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図	127			

第123図	新堀西遺跡	遺構実測図	248	第140図	新堀西遺跡	遺物実測図	265
第124図	新堀西遺跡	遺構実測図	249	第141図	新堀西遺跡	遺物実測図	266
第125図	新堀西遺跡	遺構実測図	250	第142図	新堀西遺跡	遺物実測図	267
第126図	新堀西遺跡	遺構実測図	251	第143図	新堀西遺跡	遺物実測図	268
第127図	新堀西遺跡	遺構実測図	252	第144図	新堀西遺跡	遺物実測図	269
第128図	新堀西遺跡	遺構実測図	253	第145図	新堀西遺跡	遺物実測図	270
第129図	新堀西遺跡	遺構実測図	254	第146図	新堀西遺跡	遺物実測図	271
第130図	新堀西遺跡	遺構実測図	255	第147図	新堀西遺跡	遺物実測図	272
第131図	新堀西遺跡	遺構実測図	256	第148図	新堀西遺跡	遺物実測図	273
第132図	新堀西遺跡	遺物実測図	257	第149図	新堀西遺跡	遺物実測図	274
第133図	新堀西遺跡	遺物実測図	258	第150図	新堀西遺跡	遺物実測図	275
第134図	新堀西遺跡	遺物実測図	259	第151図	新堀西遺跡	遺物実測図	276
第135図	新堀西遺跡	遺物実測図	260	第152図	新堀西遺跡における暦年較正結果	282	
第136図	新堀西遺跡	遺物実測図	261	第153図	新堀西遺跡	構造変遷図	283
第137図	新堀西遺跡	遺物実測図	262	第154図	新堀西遺跡	竪穴建物出土土器組成図(1)	286
第138図	新堀西遺跡	遺物実測図	263	第155図	新堀西遺跡	竪穴建物出土土器組成図(2)	287
第139図	新堀西遺跡	遺物実測図	264	第156図	新堀西遺跡	周辺遺跡の様相	289

表 目 次

第1表	既往の調査一覧		2
第2表	調査体制・調査一覧		4
第3表	整理体制		6
第4表	周辺の遺跡一覧		11
第5表	上梅沢遺跡における植物珪酸体分析結果		51
第6表	上梅沢遺跡A地区における花粉分析結果		59
第7表	上梅沢遺跡B地区における花粉分析結果		59
第8表	上梅沢遺跡における石材鑑定結果		64
第9表	上梅沢遺跡出土石器・石製品の種類別石材組成		64
第10表	上梅沢遺跡 円形周溝墓一覧		70
第11表	上梅沢遺跡 竪穴建物一覧		70
第12表	上梅沢遺跡 竪穴建物柱穴・地床炉一覧		70
第13表	上梅沢遺跡 掘立柱建物一覧		70
第14表	上梅沢遺跡 掘立柱建物柱穴一覧		70・71
第15表	上梅沢遺跡 土坑一覧		71
第16表	上梅沢遺跡 溝一覧		71・72
第17表	上梅沢遺跡 石製品一覧		72
第18表	上梅沢遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧		73~76
第19表	水橋金広・中馬場遺跡A12地区における植物珪酸体分析結果		169
第20表	水橋金広・中馬場遺跡A12地区における花粉分析結果		172
第21表	水橋金広・中馬場遺跡A12地区における栽培植物と環境		172
第22表	水橋金広・中馬場遺跡の樹種同定結果		177
第23表	水橋金広・中馬場遺跡の時期別器種別種類構成		177
第24表	水橋金広・中馬場遺跡における石材鑑定結果		181
第25表	水橋金広・中馬場遺跡出土石器・石製品の種類別石材組成		181
第26表	水橋金広・中馬場遺跡出土漆器と塗膜分析試料		182
第27表	生漆の赤外吸収位置とその強度		182
第28表	水橋金広・中馬場遺跡出土漆器類と塗膜分析結果		183
第29表	水橋金広・中馬場遺跡出土漆製品塗膜層のX線分析結果		183
第30表	水橋金広・中馬場遺跡の測定試料および処理		189
第31表	水橋金広・中馬場遺跡の放射性炭素年代測定および暦年較正の結果		190
第32表	水橋金広・中馬場遺跡 掘立柱建物一覧		202
第33表	水橋金広・中馬場遺跡 横列一覧		202
第34表	水橋金広・中馬場遺跡 掘立柱建物・横列柱穴一覧		202~205
第35表	水橋金広・中馬場遺跡 井戸一覧		206
第36表	水橋金広・中馬場遺跡 土坑一覧		207・208
第37表	水橋金広・中馬場遺跡 溝一覧		208~210
第38表	水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧		211~219
第39表	水橋金広・中馬場遺跡 木製品一覧		220
第40表	水橋金広・中馬場遺跡 金属製品一覧		220
第41表	水橋金広・中馬場遺跡 石製品一覧		220
第42表	新堀西遺跡の樹種同定結果		278
第43表	新堀西遺跡における石材鑑定結果		279
第44表	新堀西遺跡出土石器・石製品の種類別石材組成		279
第45表	新堀西遺跡の測定試料および処理		281

第46表	新堀西遺跡の放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	282
第47表	新堀西遺跡 建物一覧	292
第48表	新堀西遺跡 建物柱穴・地床炉一覧	292・293
第49表	新堀西遺跡 土坑一覧	294
第50表	新堀西遺跡 構造一覧	294
第51表	新堀西遺跡 不明遺構一覧	294
第52表	新堀西遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧	295～307
第53表	新堀西遺跡 木製品一覧	308
第54表	新堀西遺跡 石製品一覧	308

写真図版

図版1	上梅沢遺跡 全景 出土土器	図版44	水橋金広・中馬場遺跡 据立柱建物
図版2	水橋金広・中馬場遺跡 全景 出土土器	図版45	水橋金広・中馬場遺跡 据立柱建物 柱穴 井戸
図版3	水橋金広・中馬場遺跡 全景 古代道路跡	図版46	水橋金広・中馬場遺跡 全景
図版4	新堀西遺跡 遠景 全景	図版47	水橋金広・中馬場遺跡 井戸
図版5	新堀西遺跡 全景 建物群	図版48	水橋金広・中馬場遺跡 土坑
図版6	新堀西遺跡 出土土器群	図版49	水橋金広・中馬場遺跡 器
図版7	上梅沢遺跡 航空写真	図版50	水橋金広・中馬場遺跡 土器
図版8	上梅沢遺跡 全景	図版51	水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器
図版9	上梅沢遺跡 全景	図版52	水橋金広・中馬場遺跡 土器
図版10	上梅沢遺跡 全景	図版53	水橋金広・中馬場遺跡 土器
図版11	上梅沢遺跡 全景	図版54	水橋金広・中馬場遺跡 土器
図版12	上梅沢遺跡 円形周溝墓・土坑・溝	図版55	水橋金広・中馬場遺跡 土器
図版13	上梅沢遺跡 穴穴建物	図版56	水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器
図版14	上梅沢遺跡 穴穴建物 道路跡	図版57	水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器
図版15	上梅沢遺跡 穴穴建物	図版58	水橋金広・中馬場遺跡 木製品
図版16	上梅沢遺跡 穴穴建物 溝	図版59	水橋金広・中馬場遺跡 木製品
図版17	上梅沢遺跡 柱穴 溝	図版60	水橋金広・中馬場遺跡 木製品・石製品・金属製品
図版18	上梅沢遺跡 全景 土坑 溝	図版61	水橋金広・中馬場遺跡 石製品
図版19	上梅沢遺跡 土器	図版62	新堀西遺跡 航空写真
図版20	上梅沢遺跡 土器	図版63	新堀西遺跡 遠景
図版21	上梅沢遺跡 土器	図版64	新堀西遺跡 全景 建物群
図版22	上梅沢遺跡 土器	図版65	新堀西遺跡 全景
図版23	上梅沢遺跡 土器	図版66	新堀西遺跡 全景
図版24	上梅沢遺跡 土器	図版67	新堀西遺跡 穴穴建物
図版25	上梅沢遺跡 土器	図版68	新堀西遺跡 布掘建物
図版26	上梅沢遺跡 土器・陶磁器	図版69	新堀西遺跡 穴穴建物 溝
図版27	上梅沢遺跡 石製品	図版70	新堀西遺跡 溝 不明遺構
図版28	水橋金広・中馬場遺跡 航空写真	図版71	新堀西遺跡 土坑
図版29	水橋金広・中馬場遺跡 遠景	図版72	新堀西遺跡 土器
図版30	水橋金広・中馬場遺跡 遠景	図版73	新堀西遺跡 土器
図版31	水橋金広・中馬場遺跡 全景	図版74	新堀西遺跡 土器
図版32	水橋金広・中馬場遺跡 全景	図版75	新堀西遺跡 土器
図版33	水橋金広・中馬場遺跡 全景	図版76	新堀西遺跡 土器
図版34	水橋金広・中馬場遺跡 全景	図版77	新堀西遺跡 土器
図版35	水橋金広・中馬場遺跡 全景	図版78	新堀西遺跡 土器
図版36	水橋金広・中馬場遺跡 全景	図版79	新堀西遺跡 土器
図版37	水橋金広・中馬場遺跡 全景	図版80	新堀西遺跡 土器
図版38	水橋金広・中馬場遺跡 溝	図版81	新堀西遺跡 土器
図版39	水橋金広・中馬場遺跡 土坑 溝	図版82	新堀西遺跡 土器
図版40	水橋金広・中馬場遺跡 道路跡 井戸	図版83	新堀西遺跡 土器
図版41	水橋金広・中馬場遺跡 溝	図版84	新堀西遺跡 土器
図版42	水橋金広・中馬場遺跡 井戸 溝	図版85	新堀西遺跡 木製品・石製品
図版43	水橋金広・中馬場遺跡 据立柱建物		

第Ⅰ章 調査の経過

1 調査に至る経緯

(1) 調査の契機

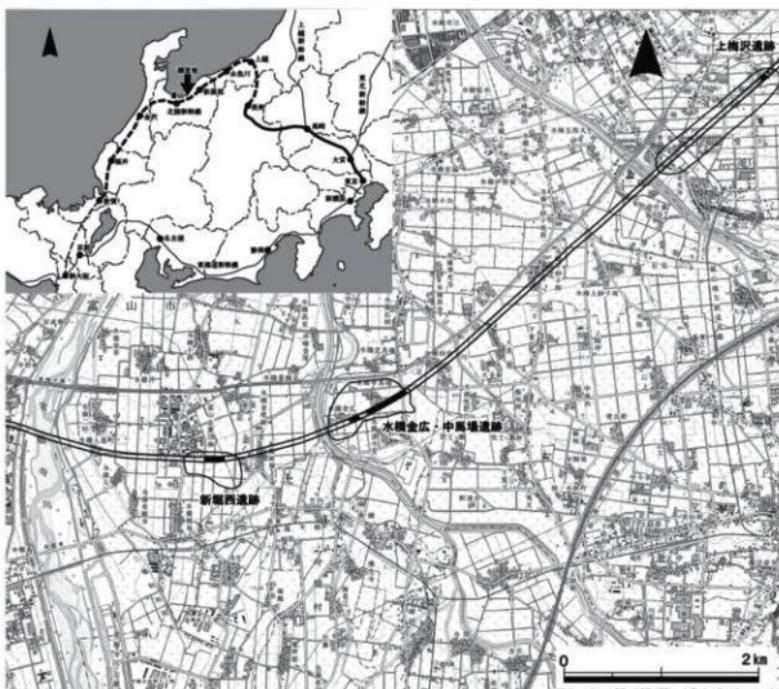
北陸新幹線は、東京を起点として高崎、長野、富山、金沢、福井を経由し大阪に至る延長約700kmの路線である。昭和48(1973)年に整備計画が決定し、全国新幹線鉄道整備法のもと建設工事が進められている。平成13(2001)年には上越・富山間、平成17(2005)年には富山・金沢間、平成24(2012)年には金沢・敦賀間の建設工事がフル規格で着工している。金沢までは平成26(2014)年度、敦賀までは平成37(2025)年度の完成が予定されている。

北陸新幹線の富山県内における駅及びルートの概要は、昭和60(1985)年に日本鉄道建設公団(現独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、以下、鉄道・運輸機構)から富山県教育委員会(以下、県教委)に示され、路線予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて、日本鉄道建設公団北陸新幹線第二建設局(現鉄道・運輸機構)・県教委・富山県埋蔵文化財センター(以下、県センター)により協議が行われた。その結果、埋蔵文化財の分布状況を把握するため、路線敷の用地買収完了地域で早急に分布調査を実施することとなった。

昭和60(1985)年、県教委と県センターにより路線敷全長63.9kmのうち約38kmについて分布調査が行われ、周知の埋蔵文化財包蔵地(以下、包蔵地)を含め県東部で16箇所、県西部で11箇所の包蔵地が確認された。平成7(1995)年、平成14(2002)年には、県センターと当該市町村教委により県東部の未調査部分で分布調査が実施された。その結果、新たに包蔵地4箇所が発見され、周知の包蔵地6箇所が再確認された。また、県西部においては、平成18(2006)年の分布調査で6箇所の包蔵地が新たに確認され、4箇所で包蔵地の範囲が拡大した。

北陸新幹線建設に先立ち、用地内における包蔵地の確認調査の要望が鉄道・運輸機構から県教委に出された。両者の協議の結果、確認調査を財団法人(現公益財団法人)富山県文化振興財団(以下、財団)が受託することとなった。これを受け、平成8(1996)年、財団は小矢部市下川原遺跡において確認調査を実施した。平成11(1999)年以降は、県東部から順次確認調査を実施している。なお、本書に所収した遺跡を含んだ確認調査は、平成18(2006)年度に8遺跡⁽¹⁾、平成19(2007)年度に10遺跡、平成20(2008)年度に24遺跡、平成21年度に14遺跡で実施した。

確認調査の結果を受けて、鉄道・運輸機構から範囲の確定している包蔵地について本調査の要望が出された。鉄道・運輸機構と県教委、財団の協議の結果、平成13(2001)年度から財団が北陸新幹線関連の本調査を受託することとなった。平成13年度に、新黒部駅・富山駅間の工事認可が下りるとともに、工事の急がれる新黒部駅以東の朝日町竹ノ内II遺跡・柳田遺跡・下山新遺跡の本調査を実施した。以後、工事の進捗状況に対応し、県内各地での本調査を実施している。本書に所収した遺跡の本調査は、上梅沢遺跡では平成20・21(2008・2009)年度、水橋金広・中馬場遺跡では平成19~21(2007~2009)年度、新堀西遺跡では平成19・20(2007・2008)年度に実施した。



第1図 調査位置・遺跡位置図（1：50,000）

遺跡名	分布調査			確認調査			本調査			
	年度	調査主体	文献	年度	調査主体	調査面積(m ²) (対年面積)	文献	年度	調査主体	調査面積(m ²) (文献)
上越沢	昭和60	県教委		平成7	鶴川市教委	215(1,501)	8	平成20	財団	348 4
	平成14	県教委		平成8	鶴川市教委	41(2,396)	9	平成21	財団	833 6
	平成15	鶴川市教委		平成9	鶴川市教委	29(1,653)	11			
	平成16	鶴川市教委		平成10	鶴川市教委	341(1,433)	12			
	平成17	鶴川市教委		平成11	鶴川市教委	256(5,041)	13			
	平成18	鶴川市教委		平成12	鶴川市教委	531(2,265)	17			
	平成19	財団		平成13	鶴川市教委	680(20,400)	1			
	平成20	財団		平成14	鶴川市教委	39(1,270)	5			
	平成21	財団		平成15	鶴川市教委	97(1,710)	7			
	平成22	鶴川市教委								
木橋金広・中馬場	昭和60	県教委		平成10	富山市教委	85 21				
	平成9	富山市教委		平成11	富山市教委	115(1,144)	10	平成11	富山市教委	1,200 22
	平成10	富山市教委		平成12	富山市教委	73(1,578)	12	平成12	富山市教委	920 22
	平成11	富山市教委		平成13	富山市教委	60(1,494)	14	平成14	富山市教委	3,427 23
	平成12	富山市教委		平成14	富山市教委	23(370)	16	平成14	富山市教委	344 24
	平成13	富山市教委		平成15	富山市教委	107(2,116)	17	平成15	富山市教委	880 23
	平成14	富山市教委		平成16	富山市教委	740(15,400)	1	平成16	富山市教委	800 23
	平成15	財団		平成17	富山市教委	40(800)	3	平成17	富山市教委	47 24
	平成16	財団		平成18	富山市教委	80(1,280)	5	平成18	財団	5,724 2
	平成17	富山市教委		平成19	富山市教委	73(1,324)	19	平成19	富山市教委	40 24
新堀西	平成21	富山市教委		平成20	富山市教委	50(2,416)	20	平成20	財団	3,068 4
	平成22	富山市教委		平成21	財団			平成21	財団	1,163 6
	平成23	富山市教委								
	平成24	富山市教委								
	平成25	富山市教委								
	平成26	富山市教委								

※確認調査年次の面積は合算して提示

※本調査年次同年次の面積は合算して提示

第1表 既往の調査一覧

(2) 既往の調査

上梅沢遺跡は県教委と県センターによる北陸新幹線路線予定地内の分布調査により「HS-12 遺跡」と仮称登録された後、「上梅沢遺跡」と命名された。その後、開発行為に伴う確認調査が滑川市教育委員会によって随時実施されたが、本調査には至っていない。平成18・20・21年度の北陸新幹線建設に伴う確認調査により遺跡範囲の北東部において遺構・遺物を確認し、本調査対象地区となった。

水橋金広・中馬場遺跡では北陸新幹線路線予定地内の分布調査により「HS-07 遺跡」が周知の遺跡であった「水橋中馬場遺跡」の東西に広がるような範囲に設定された。その後、平成9年度以降に県営農免農道（上条南部地区）の整備に伴う確認調査や本調査が富山市教育委員会により実施され、平成12年度には若王子塚古墳・宮塚古墳を含む現在の遺跡範囲となり、名称も「水橋金広・中馬場遺跡」となった。県営農免農道に関連した本調査は平成10~12・14~16年度に実施され、中近世の集落や館跡が確認され、安土桃山時代の双六盤などが出土している。その他にも開発行為に伴う確認調査や本調査が実施されている。平成18~20年度の北陸新幹線建設に伴う確認調査では、部分的に遺構・遺物が確認されず本調査の対象外となる範囲があったものの、遺跡をほぼ東西に貫くような本調査対象地区が設定された。

新堀西遺跡は北陸新幹線路線予定地内の分布調査により、周知の遺跡であった「新堀遺跡」の西側に設定された。その後、開発行為に伴う確認調査が富山市教育委員会によって随時実施されたが、本調査には至っていない。平成12年度には西側が「水橋入部遺跡」として分離し、現在の遺跡範囲となつた。平成18・19年度の北陸新幹線建設に伴う確認調査では、遺跡範囲の北から北東部において遺構・遺物を確認し、本調査対象地区とした。

文献

- 財団法人富山県文化振興財団 2007『北陸新幹線関連埋蔵文化財包蔵地調査報告(7)』
- 財団法人富山県文化振興財団 2008『平成19年度埋蔵文化財年報』
- 財団法人富山県文化振興財団 2008『北陸新幹線関連埋蔵文化財包蔵地調査報告(8)』
- 財団法人富山県文化振興財団 2009『平成20年度埋蔵文化財年報』
- 財団法人富山県文化振興財団 2009『北陸新幹線関連埋蔵文化財包蔵地調査報告(9)』
- 財団法人富山県文化振興財団 2010『平成21年度埋蔵文化財年報』
- 財団法人富山県文化振興財団 2010『北陸新幹線関連埋蔵文化財包蔵地調査報告(10)』
- 富山県埋蔵文化財センター 1996『富山県埋蔵文化財センター年報 平成7年度』
- 富山県埋蔵文化財センター 1997『富山県埋蔵文化財センター年報 平成8年度』
- 富山県埋蔵文化財センター 1998『富山県埋蔵文化財センター年報 平成9年度』
- 富山県埋蔵文化財センター 1999『富山県埋蔵文化財センター年報 平成10年度』
- 富山県埋蔵文化財センター 2000『富山県埋蔵文化財センター年報 平成11年度』
- 富山県埋蔵文化財センター 2001『富山県埋蔵文化財センター年報 平成12年度』
- 富山県埋蔵文化財センター 2002『富山県埋蔵文化財センター年報 平成13年度』
- 富山県埋蔵文化財センター 2004『富山県埋蔵文化財センター年報 平成15年度』
- 富山県埋蔵文化財センター 2006『富山県埋蔵文化財センター年報 平成17年度』
- 富山県埋蔵文化財センター 2007『富山県埋蔵文化財センター年報 平成18年度』
- 富山県埋蔵文化財センター 2008『富山県埋蔵文化財センター年報 平成19年度』
- 富山県埋蔵文化財センター 2010『富山県埋蔵文化財センター年報 平成21年度』
- 富山県埋蔵文化財センター 2011『富山県埋蔵文化財センター年報 平成22年度』
- 富山市教育委員会 1999『富山市 HS-07 遺跡』
- 富山市教育委員会 2001『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書—県営農免農道（上条南部地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）』
- 富山市教育委員会 2006『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書Ⅱ—県営農免農道（上条南部地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（3）』
- 富山市教育委員会 2009『水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書—市道水橋中馬場線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』

2 発掘作業の経過と方法

調査の作業工程及びその方法・内容は、平成16（2004）年10月に文化庁から示された『行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準(報告)』に則って進めた。

発掘調査の基準となるグリッドの座標は、国土座標（平面直角座標系第7系）を基に設定した。南北方向をX軸、東西方向をY軸とし、グリッドは2m方眼とした。各グリッドは北東角のX軸、Y軸の座標で呼称した。なお、日本測地系を基に基点を定めたので、国土地理院のWeb版TKY2JGDの変換プログラムにより世界測地系に変換した。

遺跡名	日本測地系	世界測地系
上梅沢遺跡	X 82450, Y 17050	X 82796.5658, Y 16780.3799
水橋金広・中馬場遺跡	X 78950, Y 12950	X 79296.6380, Y 12680.3690
新堀西遺跡A地区	X 78610, Y 11460	X 78956.6185, Y 11190.3850
新堀西遺跡B地区	X 78600, Y 11350	X 78946.6175, Y 11080.3865

発掘範囲は、上梅沢遺跡でX39~89・Y46~84、水橋金広・中馬場遺跡でX10~182・Y6~309、新堀西遺跡A地区でX6~17・Y5~54、新堀西遺跡B地区でX9~14・Y2~56である。

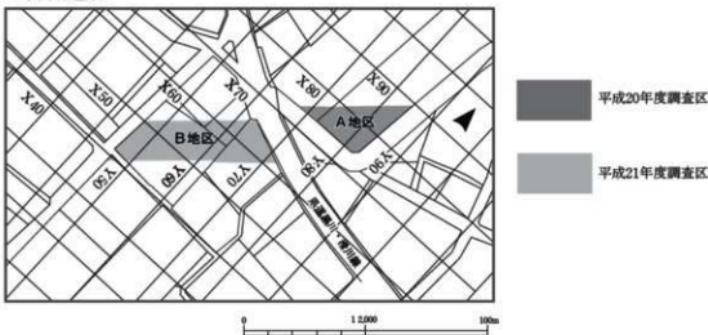
地区割は、上梅沢遺跡では県道黒川・滑川線を境に北東側をA地区、南西側をB地区とした。水橋金広・中馬場遺跡はA 1～12 地区まで分かれている。調査区域の南西側で市道水橋北馬場清水堂線より南側にA 1・2 地区が位置する。調査区域中央で市道水橋北馬場清水堂線より北側にA 3～5・9～12 が位置する。調査区域の北東側で主要地方道立山・水橋線より東側にA 6～8 S・N 地区が位置する。新堀西遺跡では農道を境にA・B 地区に分けた。

複数年次・調査区にわたる調査体制・一覧については第2表を参照されたい。

実施年度	平成 19 年度					平成 20 年度					平成 21 年度				
	所長	岸本 那敏		副所長	岸本 那敏		所長	岸本 那敏		副所長	岸本 那敏		所長	岸本 那敏	
調査事業担当		主査・副所長	山本 正敏		主査・副所長	山本 正敏		副所長・秘書課長	加藤 盛次郎		副所長・秘書課長	加藤 盛次郎		副所長	竹中 健一
チーフ 主 任	浅地 正代		チーフ 主 任	浅地 正代		チーフ 主 任	岩田 扱紀		チーフ 主 任	岩田 扱紀		チーフ 主 任	竹中 健一		
調査第一課長	河西 隆二		調査組長	久々 忠義		調査第一課長	久々 忠義		調査組長	久々 忠義		調査第一課長	河西 隆二		
チーフ 調査員	森 鳩		チーフ 調査員	青山 真		チーフ 調査員	青山 真		チーフ 調査員	青山 真		チーフ 調査員	町田 賢一		
道 緯	地区	調査期間		面積(㎡)		調査担当		検出機会		出土遺物		出土遺物		出土遺物	
上海市 (66KU)	A	H20. 10.14~10.29		348		青山 里・泉 美穂		円形周溝壙・整い穴建物・断立柱建物・土坑・偶・道路		弥生土器・古墳時代土器類・古代土器類・古代土器類・中世土器類・陶器・灰陶・瓶・罐・罐・中腹窓・木製品・石製品		弥生土器・古墳時代土器類・古代土器類・古代土器類・中世土器類・陶器・灰陶・瓶・罐・中腹窓・木製品・石製品		弥生土器・古墳時代土器類・古代土器類・古代土器類・中世土器類・陶器・灰陶・瓶・罐・中腹窓・木製品・石製品	
	B	H21. 8. 5~9. 17		833		河西隆二・町田賢一・松永知重		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
水様企画、中間報告 (01MN)	A 1	H19. 5. 24~6. 7. 17		1,113		森 鳩・泉 美穂		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
	A 2	H19. 5. 24~7. 17		741		森 鳩・泉 美穂		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
	A 3	H19. 6. 8~9. 8		1,613		森 鳩・泉 美穂		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
	A 4	H19. 6. 4~9. 8		1,406		青山 里・泉 美穂		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
	A 5	H20. 7. 11~8. 8		364		青山 里・泉 美穂		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
	A 6	H20. 7. 3~9. 8		849		森 鳩・泉 美穂		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
	A 7	H20. 5. 26~7. 10		1,053		青山 里・泉 美穂		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
	A 8 S	H20. 7. 17~9. 24		458		森 鳩・泉 美穂		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
	A 8 N	H20. 7. 17~9. 24		494		森 鳩・泉 美穂		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
	A 9	H20. 5. 29~7. 7		113		青山 里・泉 美穂		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
	A 10	H20. 6. 16~8. 6		566		森 鳩・泉 美穂		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
	A 11	H21. 7. 4~8. 5		919		森 鳩・泉 美穂		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
	A 12	H21. 9. 8~10. 8		244		河西隆二・町田賢一・松永知重		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	
新宿西 (01BN)	A	H19. 7. 26~10. 31		1,757		青山 里・泉 美穂		整穴建物・布石建物・土坑・自然流域・道路		土坑・自然流域・道路		土坑・自然流域・道路		土坑・自然流域・道路	
	B	H20. 9. 2~10. 16		834		青山 里・泉 美穂		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路		自然流域・道路	

第2表 調査体制・調査一覧

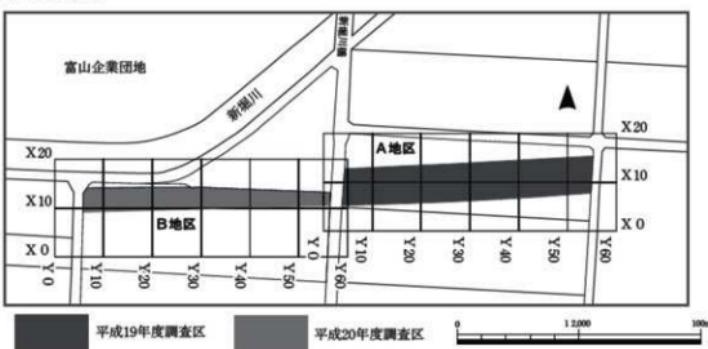
上梅沢遺跡



水橋金広・中馬場遺跡



新堀西遺跡



第2図 調査地区区割図

3 整理作業の経過と方法

出土遺物は、現地及び埋蔵文化財調査事務所において洗浄・パインダー処理・注記・分類を行った。木製品・石製品・金属製品についてはメモ写真を撮影し、整理台帳を作成した。調査概要については『埋蔵文化財年報』(平成19~21年度)として発刊している。

報告書刊行に向けての本格的な室内整理作業は、平成22年4月に開始した。平成22年度は一部の遺跡の自然科学分析を行った。23年度は土器の接合・復元・実測、木製品・石製品・金属製品の実測及び写真撮影、自然科学分析を行った。24年度は土器の写真撮影、挿図作成、図版作成、原稿執筆及び編集、印刷と校正を行った。遺物の洗浄・パインダー処理・注記は現場整理作業員及び室内整理作業員が行った。土器・陶磁器の接合・復元・色塗りは室内整理作業員が行った。遺物の実測は、土器を調査員及び室内整理作業員が行い、木製品・石製品・金属製品は業者に委託した。遺構実測図及び写真は、各台帳を作成して整理し、遺構カードとともにパソコンコンピューターを使用してデータ入力を行った。データ入力は職員が行い、整理作業員が補足した。遺構・遺物のデータは観察表として掲載している。遺構・遺物の挿図は業者に委託し、デジタルデータ化を行い印刷原稿とした。遺物の写真撮影は、業者委託し、デジタルカメラで撮影し、写真図版には、データを使用した。自然科学分析は、専門業者に委託し、結果報告を掲載した。また、劣化が懸念される遺物については、24年度に保存処理を専門業者に委託して行った。

実施年度	平成22年度			平成23年度			平成24年度		
	組織	所長 岸本 雅敏	副所長 鹿野 正男	組織	所長 岸本 雅敏	副所長 鹿野 正男	組織	所長 岸本 雅敏	副所長 鹿野 正男
整埋事業担当	組織	所長 岸本 雅敏	副所長 鹿野 正男	組織	所長 岸本 雅敏	副所長 鹿野 正男	組織	所長 岸本 雅敏	副所長 鹿野 正男
	組織	副所長 鹿野 正男	組織	副所長 鹿野 正男	組織	副所長 鹿野 正男	組織	副所長 鹿野 正男	組織
	組織	組織	組織	組織	組織	組織	組織	組織	組織
	組織	組織	組織	組織	組織	組織	組織	組織	組織
	組織	組織	組織	組織	組織	組織	組織	組織	組織
	組織	組織	組織	組織	組織	組織	組織	組織	組織

第3表 整理体制

4 普及活動

発掘調査結果を広く一般に公開するために、調査の工程・進捗状況を検討しながら対象地区を選定して現地説明会を実施した。

上梅沢遺跡では平成21年9月12日(土)にB地区を会場とし、約260名の参加があった。

水橋金広・中馬場では平成19年9月1日(土)にA3・4地区を会場とし、約80名の参加があった。平成20年9月27日(土)にA8S・N地区を会場とし、約40名の参加があった。

新堀西遺跡では平成19年10月6日(土)にA地区を会場とし、約70名の参加があった。

いずれの会場においても、見学ルートを設定し、各所で遺構の解説を行った。あわせて出土遺物の展示・解説も行った。

註

- (1) 平成18(2006)年度の包蔵地調査報告に際しては、「上梅沢遺跡」を「上梅沢館跡」として報告している。誤りであり、ここで訂正しておく。

第Ⅱ章 位置と環境

1 地理的環境

上梅沢遺跡の所在する滑川市は富山県の東部に位置し、東は魚津市、西は富山市、南は上市町に接する。北に面する富山湾沿岸は国の天然記念物「ホタルイカの群遊海面」として指定を受けている。

水橋金広・中馬場遺跡と新堀西遺跡の所在する富山市は富山県の中央部に位置する。北は富山湾に面し、東は滑川市・上市町・立山町・舟橋村、西は射水市・砺波市・南砺市に接している。平成17(2005)年の周辺町村との合併により、南は岐阜県飛騨市・高山市、東では長野県大町市との県境まで広がった市域は約1,242km²に及び、本州では9番目の広さとなる。

これら2市に分布する3遺跡は、地理的には富山県の中央部を流れる常願寺川以東に形成された常願寺川・早月川などによる複合扇状地の先端部付近に位置している。

常願寺川は立山連峰に連なる立山・淨土山・北の又岳を源流とする河川が合流し、上流域では山地を激しく浸食しつつ西流する。中流域で山地を抜け、中・低位段丘を形成しつつ富山湾に向北流し、下流域では広大な扇状地を形成する。かつては白岩川に合流していたが、明治時代の河川改修により分離され、富山湾へ流入する流路となった。

早月川は剣岳を源流とし、上～中流域では山地を北西へ流れ、中流域では段丘を形成する。山地を抜けると扇状地を形成しつつ富山湾へ流れ込む。

この2つの河川により形成された扇状地の間を、その後背にある大辻山付近を源流とする上市川・白岩川が流れる。上市川は近世初めまでは白岩川へ合流していた。両河川ともに平野部での蛇行が顕著で、近世や近代の河川改修を経て現在の流路に至るもの、各所に旧河道の地形を残している。

上梅沢遺跡は早月川扇状地西側の先端部にあり、西は上市川下流域の平野が広がる。本調査対象地では標高16.0m～16.1mを測る。

水橋金広・中馬場遺跡と新堀西遺跡は常願寺川扇状地東側の先端部にあり、水橋金広・中馬場遺跡は白岩川右岸、新堀西遺跡は白岩川左岸に位置する。本調査対象地での標高は、水橋金広・中馬場遺跡で8.2m～9.5m、新堀西遺跡では8.4m～8.5mを測る。

2 歴史的環境

今回報告する遺跡が位置する常願寺川右岸の地域では、常願寺川や早月川により形成された段丘・扇状地・平地に多くの遺跡が分布している。段丘上においては、古くは旧石器時代の吉峰遺跡や不水掛遺跡がある。縄文時代以降、近世に至るまで段丘上のみならず扇状地や平地へと遺跡群は展開していく。特に白岩川流域では濃密に遺跡群が分布しており、水橋金広・中馬場遺跡と新堀西遺跡はこれらの遺跡群の動態と関連しつつ形成・展開していったと考えられる。上梅沢遺跡については、早月川扇状地に立地するものの、位置的には上市川右岸に近接しており、その流域の遺跡群との関連を注視すべきであろう。こうした観点から、ここでは主に白岩川と上市川の中～下流域における周辺の遺跡について概観していきたい。

縄文時代では後期～晩期の遺跡が確認される。水橋金広・中馬場（旧水橋金広遺跡）では、建物が

検出され、石冠やヒスイ垂玉などが出土している。この他、金尾遺跡・小出城跡・金尾新遺跡・魚躬遺跡も挙げられる。

弥生時代では中期以降、遺構・遺物が確認され始め、後期から終末期にかけて多くの遺跡が展開する。中期においては正印新遺跡で建物跡、放土ヶ瀬北遺跡では方形周溝墓の可能性がある溝が検出される。後期以降では江上A遺跡で集落、飯坂遺跡で方形周溝墓群が検出され、その他にも清水堂南遺跡・魚躬遺跡などの遺跡が存在する。こうした弥生時代中期～終末期における白岩川・上市川流域の遺跡群は、その分布から複数のまとまりがあることが指摘されている（久々1981）。

古墳時代では白岩川流域に、前方後方墳の竹内天神堂古墳、円墳の稚子塚古墳・塚越古墳・清水堂大塚古墳・若王子古墳、方墳の宮塚古墳が造営される。この他に、現存の地名から削平古墳の存在も示唆（鹿島2001）されており、さらに多くの古墳が分布していた可能性もある。集落としては、利田横枕遺跡・仏生寺城跡・本江遺跡において建物跡が検出されている。

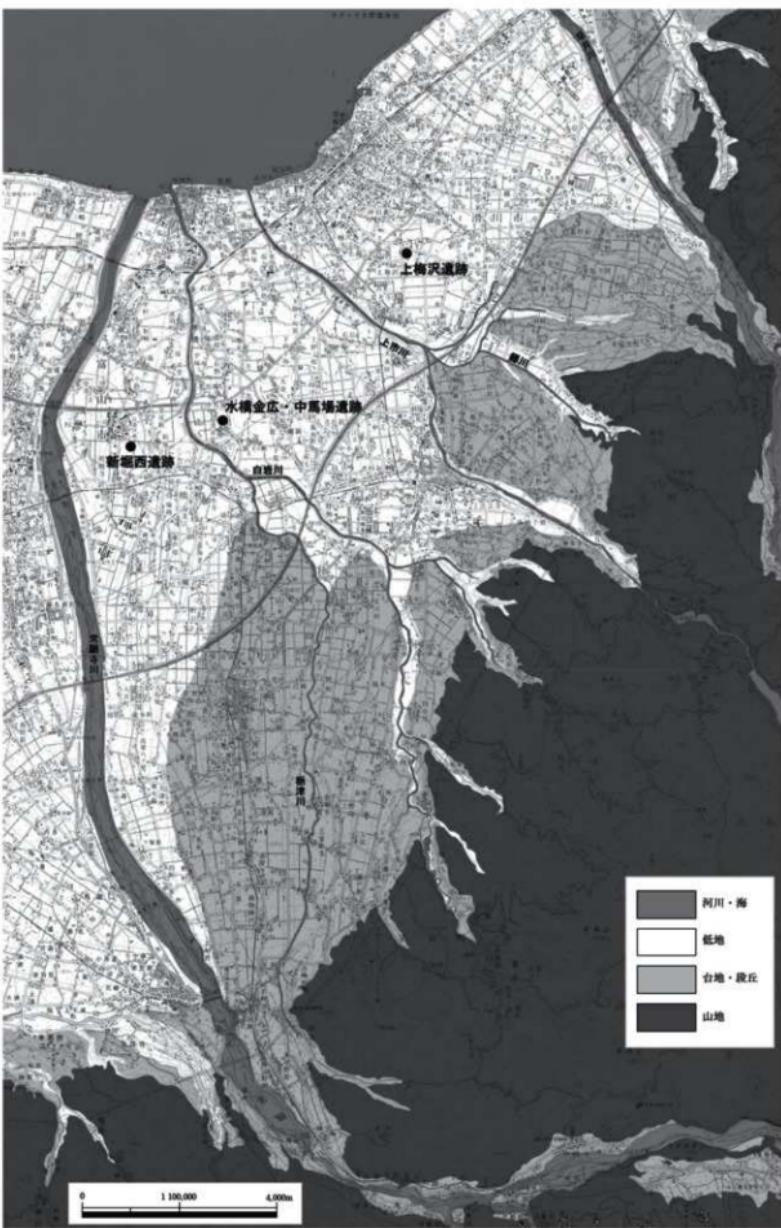
古代では古代北陸道に設置された「水橋駅」と推定される水橋荒町・辻ヶ堂遺跡が常願寺川河口付近に位置している。また、「里正」木簡が出土した辻遺跡や、東大寺丈部荘や大藏荘の比定地（石原1956・1971、藤田1988）が存在し、律令期における政治機構や開発行為の広がりを物語る。その他に、建物が確認された水橋二杉遺跡・仏生寺城跡といった集落や、堤谷窯跡・山王窯跡・万年寺谷窯跡などの生産遺跡も分布している。

中世では仏生寺城跡・小出城跡・竹内館跡・堀江城跡・上梅沢館跡・有金館跡などの城・館跡が分布する。この内、仏生寺城跡は中世高野荘に関わり、城主は細川曾十郎と伝えられる（舟橋村教育委員会2001）。白岩川の対岸にその馬場があったことから「中馬場」、家臣の金広某が開墾に携わったことから「金広」の地名が付く由来となったとされる（水橋町1966）。水橋金広・中馬場遺跡では溝により区画された館跡が確認され、荘園経営に関係していたと推測されている。上梅沢館跡は中世堀江荘に関わり、堀江城城主であった土肥氏の一族や家臣の館跡と推測されており（滑川市1985）、土星が一部残る。

近世では水橋金広・中馬場遺跡で集落が存続し、金属製のヤスやヤスの線刻を施した木摺臼が出土している。文献史料から白岩川流域の村落には「鮭役」が課せられており、出土遺物も併せた検討から川魚漁も含めた近世集落における生業活動の一つのあり方が示されている（鹿島他2003）。

参考文献

- 石原与作 1956 「東大寺領新川郡大藏庄と丈部庄」『越中史壇』第7号 越中史壇会
 石原与作 1971 「東大寺領新川郡大藏庄と丈部庄（其の2）」『富山県地学地理学研究論集』第5集 富山県地理学会
 鹿島昌也 2001 「I 遺跡の位置と環境」『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告』富山市教育委員会
 鹿島昌也・安達志洋 2003 「世の館から豊漁を祈る近世集落へ」『大境』第24号 富山考古学会
 久々忠義 1988 「II 総括 C江上弥生遺跡群について」『北陸自動車道遺跡調査報告-上市町木製品・総括編-』上市町教育委員会
 高瀬重雄他 1994 「富山県の地名」日本歴史地名体系16 平凡社
 滑川市 1985 「滑川市史 通史編」
 深井三郎 1981 「I 地形分類図」「土地分類基本調査 五百石」富山県
 深井三郎 1983 「I 地形分類図」「土地分類基本調査 魚津」富山県
 藤田富士夫 1990 「東大寺領大藏荘の現地比定と遺跡」『森浩一70の疑問 古代探求』中央公論社
 藤田富士夫 2001 「東大寺領越中國在園「丈部荘」の現地比定と若干の考察」『富山史壇』第135・136号 富山史壇会
 水橋町編 1966 「水橋町郷土史」第二巻



第3図 地形図 (1 : 100,000)

※地形分類は土地分類基本調査（森井1981・1983）を参考とした。



第4図 周辺の遺跡 (1 : 75,000)

No.	遺跡名	遺跡名	所在地	場所	時代	備考
1	206051 上梅沢	津川市 上梅ヶ丘・有金	敷石地	古代、中世、近世		
2	201251 水橋合金・馬場	富山市 水橋中馬場	集落	縄文(後)、弥生(後・後)、古墳。古代、中世、近世		
3	201254 新堀西	富山市 水橋新堀・水橋明堀	施設	古代、中世		
4	206045 水不曲	津川市 東美郷寺野	集落	旧石器、縄文(後・中)		
5	206008 魚釣	津川市 魚釣・高月町	集落	縄文(後)、弥生(後・後)、古墳(前・中)、平安、中世、近世		
6	206012 有金前野	津川市 有金	城跡	中世		
7	206013 丹波穴門跡	津川市 上梅沢	城跡	平安、中世、近世		
8	201254 田代城跡	富山市 田代	城跡	平安		
9	206015 田代	富山市 田代	集落	古墳、奈良、平安、中世		
10	206026 安田下木	津川市 安田	施設	縄文(後)、弥生(後)、奈良、平安、中世		
11	206024 安田古窯	津川市 安田・小原町・改美野	散石地	縄文(後)、中世		
12	20602・322009 本江	津川市 本江・上町・広野	集落	縄文(後)、中世、弥生(後)、古墳(前)	昭和 47 年度指定史跡	
13	322015 砂林岡北	上市町 砂林岡	集落	弥生(後)、奈良(後・前)、古墳(前)	古代	
14	206037 万年寺谷	津川市 本江	生け垣	平安		
15	206038 水橋瓦窯跡	富山市 水橋瓦窯	散石地	平安、中世、近世		平成 6 年町指定史跡
16	201058 水橋桜木	富山市 水橋桜木・水橋伊勢屋・水橋小出	散石地	平安(後)、奈良、平安、中世、近世		
17	201060 水橋伊勢屋	富山市 水橋伊勢屋	散石地	古代、中世		
18	201055 小出城跡	富山市 水橋小出	城跡	散石地	縄文、弥生(後)、古墳(前)	古代、中世、近世
19	201056 水橋小出	富山市 水橋小出	散石地	縄文		
20	201230 水橋等元寺	富山市 水橋等元寺	散石地	弥生(後)、古墳(後)	古代、中世、近世	
21	201228 金屋	富山市 水橋金屋・水橋平翠	散石地	縄文(後)、奈良(中・後)、古墳(前)	古墳(後)、近世	
22	301229 宮坂古墳	富山市 水橋中馬場	古墳	古墳		
23	201240 本江子塚古墳	富山市 水橋中馬場	古墳	古墳(前)、古代、中世、近世		
24	201585 三伏・佐野竹	富山市 田伏	散石地	縄文、弥生、古墳	古代、中世、近世	
25	201243 清水寺古墳	富山市 水橋寺水堂	古墳	古墳		
26	201245 清水堂古墳	富山市 水橋寺水堂	古墳	弥生(後)	古代、中世、近世	
27	322107 放々ヶ丘北	上市町 放々ヶ丘	散石地	弥生(後)、古墳(前)	古代	
28	322061 萩江上	上市町 萩江上	集落	古墳		
29	322002 江上北	上市町 江上	集落	縄文(中・後・晚)、弥生(中・後)、古墳(前)	中世、近世	
30	322003 江上A	上市町 江上	集落	弥生(中・後)	中世、近世	
31	322004 飯坂	上市町 飯坂	墓	縄文(後)、弥生(中・後)、古代、中世		
32	322005 中小屋	上市町 中小屋	集落	弥生(前)、中・後)、飛鳥白鳳、奈良、中世		
33	322006 下種田	上市町 下種田	散石地	縄文(後)、弥生(後)、平安、中世		
34	322007 正印新	上市町 下種田	集落	縄文(後)、弥生(前・中・後・鉄)、平安、中世		
35	322076 稲田C	上市町 稲田	集落	平安		
36	322068 道神子A	上市町 道神子・鶴島	集落、散石地	散石地、弥生(後)、古墳(後)	古代、中世	
37	322052 道神寺	上市町 道神寺	集落	縄文(後)		
38	322053 桑原城跡	上市町 桑原城跡	散石地	古墳		昭和 34 年町指定史跡
39	322067 桑原古墳群	上市町 桑原古墳群	古墳	古墳		
40	322093 桑原城跡	上市町 桑原	城跡(引)地	中世		
41	322084 蛇谷京跡	上市町 蛇谷京谷	生産(廃)	古代		
42	322079 中山王室跡群	上市町 中山王室	牛廻(廃)	奈良		
43	322078 五庄城跡	上市町 五庄城跡	城跡	縄文(中・後・晚)、弥生、古代、中世、近世		昭和 34 年町指定史跡
44	322085 日弓寺跡	上市町 大日寺・日弓寺	石碑(弘法(廃))	平安		昭和 5 年町指定史跡
45	322088 荘荷谷古跡跡	上市町 大日寺	石碑(引)地	平安		
46	201044 水橋荒町・比少庄	富山市 水橋荒町・水橋比少・水橋川原町	集落	縄文(中・後・晚)、弥生(後)、古墳(後)、飛鳥・奈良、古墳	古墳(後)、飛鳥・奈良	古墳(後)、飛鳥・奈良
47	201052 水橋池田跡	富山市 水橋池田跡・水橋伊勢屋・水橋伊勢屋跡・水橋中村・水橋中村・水橋時崎	散石地	古墳、古代、中世		
48	201217 水橋二移	富山市 水橋二移・水橋入門跡・水橋中村	集落	縄文(後)、弥生(後・鉄)、古代、中世、近世		
49	201602 水橋入部	富山市 水橋新御・水橋開闢・水橋入部町	散石地	弥生(後)、古墳		
50	201223 新御	富山市 水橋新御	散石地	縄文(後)、弥生(後)、古墳(後)、古代、中世		
51	321004 竹内筋跡	舟橋村 竹内	城跡	中世		
52	321003 竹内天神堂古墳	舟橋村 竹内	古墳	弥生、古墳、古墳	古代、中世、近世	
53	321002 佐生牛舎跡	舟橋村 佐生牛舎	城跡	縄文、弥生(中・後)、古墳(前)、古代、中世、近世		
54	321017 竹内東芦原	舟橋村 竹内・東芦原	集落、散石地	縄文(後)、弥生(前・後)、古墳(前・後)、古代、中世		
55	322009・322002 壱城I	舟橋村 朝霞・立山町 壱城	散石地	縄文(後)、弥生(中・後)、古墳(前)、古代、中世、近世		
56	322001 壱城古墳	立山町 壱城	古墳	古墳		
57	321011・323006 利田横積	舟橋村 東芦原・立山町 利田	集落	縄文(後)、弥生(後)、古墳(前)、古代、中世、近世		
58	321019 古海老江	舟橋村 古海老江	集落	縄文(後)、弥生(後)、古墳(前)、古代、中世		
59	321005・322030 潟田	舟橋村 舟橋・立山町 潟田	集落	縄文(後)、弥生(中・後)、飛鳥白鳳、平安、中世、近世		
60	323002 二ツ塚	立山町 二ツ塚	集落	縄文(早・中・後・晚)、弥生(後)、古墳(前・中・後)、古代、中世、近世		昭和 39 年町指定史跡
61	323003 稲荷寺古墳	立山町 稲荷寺	古墳	縄文(中)、弥生(中・後・鉄)、古墳(中)、平安、中世		昭和 40 年町指定史跡
62	322008 神田	上市町 神田	集落	古墳、古代、中世、近世		
63	322089・322045 若宮II	上市町 新御・立山町 若宮	集落	縄文(後)、弥生(後)、古墳(後)、古代、中世、近世		
64	323044 若宮I	立山町 若宮	集落	縄文(後)、中・後・鉄)、古墳(後)、古代、中世		
65	322090・323046 辻	立山町 辻・上市町 神田	集落、城跡	弥生(後)、古墳(前・後)、奈良、平安、平安、中世、近世		
66	323049 二ツ塚の上	立山町 辻	集落	縄文(早・前・中)、古墳、奈良、平安、中世、近世		
67	323090 壱城古墳	立山町 日中	古墳	古墳		昭和 39 年町指定史跡
68	323069 金剛御	立山町 金剛御	集落	縄文(中・後・晚)、中世、近世		
69	323100 野沢瓦屋	立山町 野沢	集落	縄文(早・中・後・鉄)、弥生(後)、古墳(後)、近世		
70	323112 砥中浦古窯跡群	立山町 下瀬浦・芦見・中林	集落、生産(廃)	縄文(中・後)、古墳(後)、古代、中世、近世		
71	323118 上末古窯跡群	立山町 上末	生産(廃)	平安、平安		昭和 7 年町指定史跡
72	323123 古跡	立山町 下田	集落	旧石器、縄文(早・前・中・後・晚)		
73	323074 銀砂野	立山町 銀砂野	集落	縄文(早・後・晚)		

参考

富山県埋蔵文化財センター 2000『富山県埋蔵文化財包蔵地台帳』
富山県 GIS サイト <http://wwwgis.pref.toyama.jp/toyama/Main.aspx>

第4表 周辺の遺跡一覧

第III章 上梅沢遺跡

1 概 要

上梅沢遺跡で検出された遺構は円形周溝墓2基、竪穴建物6棟、掘立柱建物4棟、土坑154基、溝98条である。調査区はA・Bの2箇所に分かれている。A地区では中世から近世、B地区では弥生時代後期～古墳時代初頭・飛鳥時代～奈良時代の遺構・遺物を確認する。

弥生時代後期には天王山式の土器が出土する土坑が確認されたのみで、具体的な土地利用のあり方は不明である。弥生時代終末期～古墳時代初頭には円形周溝墓が造営されるが、主体部は確認されなかつた。飛鳥時代には竪穴建物群が形成される。竪穴建物埋没後には、自状遺構と考えられる南北・東西方向の溝群が多く掘削される。その溝群を切るように奈良時代の掘立柱建物が構築される。中世・近世では溝による区画や土坑が確認されるが、明確な建物は未検出である。

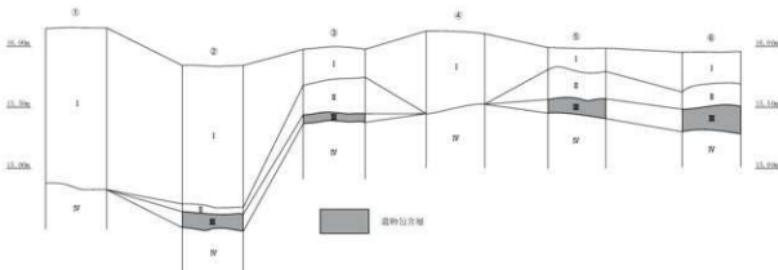
このように、弥生時代後期から土地利用の痕跡を残すが、遺構・遺物とともに少なく、その性格は判然としない。弥生時代終末期～古墳時代初頭には墓域として利用される。飛鳥時代～奈良時代には集落、生産域、集落の順に土地利用形態が変遷する。中世段階では、遺跡の近隣に中世城館である上梅沢館跡があり、それに関連する集落が形成されていた可能性がある。

2 層 序

基本層序はA・B地区で土色・土質が異なるが、I・II層：表土、III層：遺物包含層、IV層：地山に分層された（第5図）。

A地区ではI・II層とも黒褐色砂で、I層は現耕作土、II層は旧耕作土である。III層は灰黄色粗砂が混じる黒褐色砂で、古代～中世の遺物をわずかに包含する。IV層は灰～灰黄色の粗砂・細砂で、その上面にて遺構を検出した。IV層上面では標高14.4m～14.8mを測り、A地区的南側に向かって低く傾斜する。南にやや距離を置いて隣接するB地区との間は浅い谷状地形を呈していたと考えられる。

B地区ではI・II層ともに灰黄褐色を呈する。I層は砂質シルトで宅地盛土、II層はシルトで旧耕作土となる。III層は褐灰色シルトを基調とし、弥生時代～古代までの遺物を包含する。IV層はにぶい黄色～黄褐色のシルト・砂質シルトで、その上面で遺構を検出した。IV層上面では標高15.1m～15.6mを測り、南西方向に向かって緩やかに低く傾斜していく。（青山 見）



第5図 上梅沢遺跡 基本層序

3 遺構

(1) 弥生時代後期

1193号土坑（S X1193, 第8図, 図版12）

B地区北西端に位置する。周囲の擾乱に切られるが、平面形は不整形を呈する。内部から東北地方を由来とする天王山式土器の壺（4）が横倒しで出土する。4は口縁部と底部を欠くものの、約半分が残る。他に同時期の遺構が無く、単独の埋納遺構とみられるが土器内部の埋土には何も入っていないかった。同時期の在地土器（猫橋式）が無く、石川日出志氏の分類（石川2006）によれば類型Cにあたる。

(2) 弥生時代終末期～古墳時代初頭

A 円形周溝墓

1号円形周溝墓（S Z 1, 第9・10図, 図版12）

B地区的北東端に位置し、飛鳥時代の竪穴建物であるS I 6に切られる。周溝の幅は約1m、深さ約0.60mで断面箱形を呈する。調査区で平面形が弧状となる溝を検出し、円墳もしくは円形周溝墓と考え、トレンチを2か所設定し周溝の続きを確認した。結果、二つのトレンチ（T 1・2）いずれでも溝を確認し、トレンチ部分を含めて半円形の形状が確認されたため、溝が円形に巡るものと判断した。周溝底面の内側下端で計測すると直径17.5mの規模と推定され、やや不整な円形を呈していたと考えられる。周溝埋土の上方から、赤彩された蓋・鉢・高杯・装飾壺などが出土した。墳上祭祀後に周溝に落下したのだろう。周溝底面には長軸0.10m～0.20m、短軸0.05m～0.10mの楕円形を呈するくぼみが等間隔にあり、周溝掘削時の工具痕とみられる（河西2010）。トレンチ部分で周溝に囲まれた内部には炭化物を含む土坑（S K1250～1257）があり、出土土器が周溝と同時期であることから葬送祭祀に関わる施設と考えた。

今回確認したS Z 1は出土土器の時期と明確な墳丘が確認し得なかった点から、円形周溝墓として報告している。円形周溝墓の類例は、県内では下佐野遺跡（富山県文化振興財団2013）、杉谷A遺跡（富山市教育委員会1975）、百塚遺跡（富山市教育委員会2012）、清水堂南遺跡（富山市教育委員会2000）で報告されている。弥生時代終末期を中心とし、県東部に多い傾向がある。S Z 1は、県東部に分布する円形周溝墓の一つであるが、滑川市内では初となり、上市川流域でも初見となる。また、県東部では古墳は少ないものの、白岩川流域に立山町藤塚古墳（直径約20m）や稚子塚古墳（直径約46m）など円墳のみがつくられる傾向にある（高橋2007）。これらは古墳時代中期であるが、S Z 1はそれに先んじる時期に造営された円形を基調とする墳墓の事例となろう。

ただしS Z 1については、周溝の幅が1m以下と狭いこと、北側のトレンチ（T 1）検出溝から甕がつく甕がまとまって出土していること、内部施設とみたS K1250～1257の掘り込みが深く柱穴ともみえることなどから“周溝墓”ではなく“周溝をもつ建物”的可能性も考えられる。例えば弥生時代終末期～古墳時代初頭の周溝をもつ建物では、周溝の直径が20m前後に達するものが複数ある（岡本2006）。またT 1検出の溝は調査区内の周溝とT 2検出溝とは延長ラインでその向きが若干異なっているとともに出土遺物が前者は赤彩土器を含むのに対し、後者は日常煮炊具の甕ばかりと性質も異なり、同一遺構でない可能性もある。

2号円形周溝墓（1005号溝）（S Z 2（S D1105), 第10図, 図版12）

B地区西端に位置するS D1005として検出した。飛鳥時代の竪穴建物S I 5に東端を切られ、西

端は調査区外へと続くため、全形は明かでないが、調査区内では弧状を呈しており、円形に巡る可能性がある。また、出土遺物から S Z 1 と同時期であることから、S D1005 も同様の造構と考えられ、S Z 2 とする。周溝は幅約 0.40m、深さ約 0.30m を測り、埋土下方に壺・高杯などが横倒しで出土した。後世の造構に切られ、途切れ途切れに残存する程度で全容は不明だが、円形とすれば直径約 7 m の周溝となり、その 1/4 が残ることになる。ただし S Z 2 は S Z 1 よりも規模が小さく、出土土器は S Z 1 よりも古相で赤彩土器がないことから円形周溝墓と言い切るのは難しいかもしれない。

B 土坑

1250~1257号土坑 (SK1250~1257, 第 9・10 図)

トレチ T 2 にて検出された土坑である。いずれも円形を呈し、径は 0.31m~0.55m、掘り込みは 0.25m~0.60m となる。規模は一様でないが、掘り込みは明瞭で、柱穴状となる。S Z 1 に関わるものと考えられる。

(3) 飛鳥時代

A 壁穴建物

1号壁穴建物 (SI 1, 第 11・14 図, 図版 13・15)

B 地区北東端に位置する。一部を試掘トレチ・攪乱に壊され、北側は調査区外へ続くため形態・規模は確認できないが、現存値で (5.00)m × (4.52)m を測り、平面は方形を呈すると思われる。深さは 0.24m で、壁の立ち上がりは、やや傾斜を持つ。主軸方向は N-90°-E となる。壁溝は無い。床面は貼床をほぼ全面に施す。壁穴の堀方は床面より 0.06m~0.18m の深さで、ほぼ平坦に掘削する。

主柱穴は床面上で検出された P 1 ~ 4 となる。形状は梢円形か不整円形、直径は 0.52m~0.60m、深さは 0.70m~0.78m を測る。

造り付けカマド（以下カマド）は南東部に位置する。長さ 1.00m × 幅 1.20m、両袖だが南側を攪乱に切られ、北側のみ袖石 2 個が残る。天井部が部分的に残り、煙道の遺存が確認された。燃焼部から土製支脚（61）、その上に土師器甕（55）が置かれていた。南側に土師器甕（56）、焚口から北側に土師器小型甕（57）が床面上から出土する。

壁穴西側の床面上には K 1 がある。カマドの対面に位置し、浅いくぼみに焼土が入っていた。

カマド周辺以外の遺物出土状況は、土師器の甕（59）、小型甕（58）、甑（60）、高杯（62）、鉢（63）と、編物石（123）が床面上から散在して出土した。他に平坦面をもつ台石状の石が、ほぼ中央部から出土する。

2号壁穴建物 (SI 2, 第 12・14 図, 図版 15)

B 地区北東端に位置する。北側が調査区外へ続くため、全形は確認できない。現存値で 4.42m × (3.50)m を測り、約 4.4m 四方の方形を呈すると思われる。深さは 0.21m~0.23m で、壁の立ち上がりはほぼ直立する。主軸方向は N-78°-E となる。床面はほぼ全面に貼床を施し、壁溝が南西隅以外に巡る。壁溝は幅 0.14m~0.27m、深さ 0.10m~0.14m を測る。壁穴南西隅で P 1 を検出したが、斜位の掘り込みで主柱穴とは成り得ない。壁穴の堀方は、床面より 0.04m~0.14m の深さで、ほぼ平坦に掘削する。

カマドは東部に位置するが、大半が調査区外で袖の一部を検出したことにとまる。

壁穴中央部の床面上には K 1 がある。カマドの対面に位置し、浅いくぼみに焼土が入っていた。

編物石と考えられる細長い自然礫が南東隅にまとまって 4 点出土した。

他の竪穴建物でも、量に多少があるものの6棟すべてからこうした自然礫が出土している。S I 2～5では1箇所にまとまって出土しており、ほかに良好な状態で出土しているセット関係の土師器の出土状況から見るに、住居での生活痕跡をそのまま残すものとみられる。地山直下に礫層がないことや単なる廐棄礫としては規格が揃っており、編物石と考えた。県内では類例が少ないが、神奈川県では大塚健一氏によって集成されている（大塚 1999）。それによれば編物石とは、「竪穴住居跡の床面直上から1ヶ所もしくは複数ヶ所に複数個の礫が集中もしくは散漫な状況で検出され、しかもその礫はほぼ一定の形状を呈しているものを指す。」とあり、こうした出土状況を分類している（第33図：以下、大塚分類）。S I 2ではB型に該当する。

他に土師器の甕、壺、鉢（67）、高杯や平坦面をもつ台石状の石が出土する。また、埋土上層から須恵器65・66が出土するが、後述する奈良時代の遺構形成に関連して混入したと考えられる。

主柱穴はないものの方形の掘り込みに壁溝が巡り、南西隅に斜位のピットを持つなど、他の竪穴住居とは異なる上屋が想定される。

3号竪穴建物（S I 3、第12・14図、図版15）

B地区の北東部に位置する。上面を後世の削平、東側の一部をSD1008に切られているものの、ほぼ全形が分かる。平面は方形を呈し、規模は5.08m×4.74m、24.08m²の面積を測る。深さは0.03m～0.14mで、壁の立ち上がりはやや外開きである。主軸方位はN-76°-Eとなる。床面はほぼ全面に貼床を施し、壁溝がカマド部分を除きほぼ全周する。壁溝は幅0.08m～0.28m、深さ0.02m～0.06mを測る。主柱穴は床面上で検出されたP1～4である。いずれも不整円形を呈し、直径は0.57m～0.67m、深さは0.61m～0.79mを測る。竪穴の掘方は床面から深さ0.04m～0.26mで、ほぼ平坦に掘り込まれる。

カマドは南東部に位置する。両袖だが袖端部をSD8に切られる。燃焼部には土製支脚（71）が設置されていた。

SD1008掘削時に移動があるものの編物石7点が北東部からまとめて出土しており、大塚分類ではB型となる。他に土師器の甕（68・69）、壺、鉢（67）、高杯（70）、砥石（120）が出土する。この内、69・70・120は編物石と同様に北東部の床面上から出土する。

4号竪穴建物（S I 4、第13・14図、図版13・15・16）

B地区的調査区中央部に位置する。上面を後世の削平、北側約1/4を攪乱に切られており全形は不明である。現存値で4.20m×(3.00)mを測り、おそらく4.2m四方の方形を呈していたと思われる。深さは最深部で0.13mとなるが、全体的に削平の影響で残りが悪く、壁の立ち上がりは明かでない。主軸方向はN-80°-Eとなる。床面はほぼ全面に貼床を施し、壁溝は無い。床面上でP1～5を検出し、この内P1～4が主柱穴となる。主柱穴の形状は不整円形、直径は0.40m～0.55m、深さは0.43m～0.60mを測る。竪穴の掘り方は、床面から深さ0.02m～0.11mで、ほぼ平坦に掘り込む。

カマドは南東部に位置する。規模は長さ0.70m×幅0.82mとなる。両袖で袖端部に袖石を1個ずつ配する。

編物石26点が北西部からまとめて出土しており、大塚分類ではA-2型となる。また、削平のため下半を失った土師器甕（73）が北東部から倒位で出土する。他に土師器の甕、鉢（72）、土製支脚（74）が出土した。

5号竪穴建物（S I 5、第15図、図版14・16）

B地区的中央西部に位置する。上面を後世の構群、北側端部を攪乱に切られるが、平面は方形を呈

し、規模は $5.15m \times 4.88m$ を測る。深さは $0.16m \sim 0.24m$ 、壁の立ち上がりはほぼ垂直となる。主軸方向は $N - 85^\circ - E$ である。床面はほぼ全面に貼床を施し、壁溝がカマド部分を除きほぼ全周する。壁溝は幅 $0.20m \sim 0.25m$ 、深さ $0.12m \sim 0.15m$ を測る。床面上でP 1～18を検出し、この内のP 13～16が主柱穴となる。主柱穴の形状は不整円形で、直径 $0.39m \sim 0.45m$ 、深さ $0.51m \sim 0.63m$ を測る。なお、P 1・18は南西隅と南東隅に配されており、支柱穴の可能性がある。竪穴の掘方は、床面から深さ $0.11m \sim 0.20m$ で、ほぼ平坦に掘り込む。

カマドは南東部に位置する。規模は長さ $0.74m \times$ 幅 $1.08m$ となる。両袖で燃焼部から土製支脚(79)が直立して出土した。

編物石6点が西部壁溝脇からまとめて出土しており、大塚分類ではA-2型となる。埋土中からの出土も合わせると編物石は11点となる。他に土師器の甕(76)・小型甕(75)・甑(77)・壺・椀・高杯、製塙土器(78)、砥石が出土する。この内、75は南東隅、77は南西隅の床面上から出土した。また、炭化材が南東部を中心に残り、焼失住居と考えられる。

6号竪穴建物 (S I 6, 第13・14図, 図版16)

B地区の中央東部、T 2南部に位置する。調査区内では北西隅のみ検出し、T 2で南東部を確認した以外は調査区外であるため、全形は明かでない。平面形は方形、規模は $4.86m \times 4.60m$ 程になると思われる。深さは $0.28m$ 、壁の立ち上がりはほぼ垂直となる。主軸方向は $N - 90^\circ - E$ となる。床面はほぼ全面に貼床を施し、壁溝は無い。床面上でP 1・2を検出したが、規模と位置から主柱穴とはなり得ない。竪穴の掘方は深さ $0.01m \sim 0.07m$ で、ほぼ平坦に掘削する。

カマドは南東部に位置する。調査区外へ続くため全形は不明であるが、長さ $0.82m \times$ 幅 $0.94m$ 規模となる。両袖で東側に袖石2点が残る。燃焼部内から土師器の甕(82)が出土する。

カマド南側に土師器の甕(80・81)・小型甕(84・85)がまとめて出土した。カマド北側では土師器の椀(86・87)が出土している。他に埋土中からの出土遺物に編物石(129)がある。

(4) 奈良時代

当該期では掘立柱建物4棟を中心とし、畠のさく状遺構となる溝群(以下、畠状遺構)、道路側溝となる溝群(以下、道路状遺構)、区画目的の溝(以下、区画溝)、土坑からなる。出土遺物は少なく、個別の遺構について時期を決定することは難しいが、重複関係を基に以下の変遷を考えられる。

まず、畠状遺構が形成される。次いで畠状遺構を切って道路状遺構と区画溝が掘削される。この2者については調査区内での分布位置が離れており、前後関係は明かでない。これらの遺構を切るよう、掘立柱建物4棟が構築される。土坑については、各段階の遺構と重複関係にあるものは、前後関係が把握できるものの、その性格は不明であり、ここでは出土遺物があるものを中心提示しておく。

A 掘立柱建物

1号掘立柱建物 (S B 1, 第16図, 図版17)

B地区の中央北部に位置する側柱式の掘立柱建物である。攪乱により全形は明かでない。規模は3間以上(5.5m以上)×2間以上(3.2m以上)、面積が $17.60m^2$ 以上となる。東西棟とすれば、主軸方位は $N - 90^\circ - E$ となる。柱穴は隅丸方形もしくは不整円形を呈し、長軸 $0.34m \sim 0.52m$ 、深さ $0.15m \sim 0.34m$ を測る。柱穴埋土から土師器片が出土する。

大半を攪乱に切られ全容は不明だが、同様に東西方向に長軸をもつS B 3の状況からこれと同時期に並立し、3×2間とみられる。ただしS B 2とも並びが描っており、これとセットになる可能性も

ある。

2号掘立柱建物（SB2, 第16図, 図版17）

B地区の中央南部に位置する側柱式の掘立柱建物である。南側が調査区外へ続くため、全形は不明である。3間以上(7.9m以上)×2間(5.7m), 面積は45.03m²以上となる。南北棟で、主軸方位はN-0°である。柱穴は隅丸方形もしくは不整円形を呈し、長軸0.20m～0.93m, 深さ0.11m～0.45mを測る。柱穴埋土から土師器片が出土する。土師器の甕(88)はSP1089からの出土である。

配置からSB3とは重複するが、柱穴の切り合いは無いため前後関係は不明である。南側が調査区外にあるため全容は不明だが、同様に南北方向に長軸をもつSB4の状況から、これと同時期に並立し、4×2間とみられる。SB1とは並びがあり、SB4同様約5m離れた位置にあることからこれらがセットになる可能性もある。

3号掘立柱建物（SB3, 第17図, 図版17）

B地区的中央西部に位置する側柱式の掘立柱建物である。規模は3間(5.5m)×2間(3.2m), 面積が34.45m²となる。東西棟で、主軸方位はN-90°-Eとなる。柱穴は隅丸方形もしくは不整円形を呈し、長軸0.31m～0.57m, 深さ0.18m～0.65mを測る。柱穴埋土から土師器片出土。SP1173からは須恵器の甕も出土する。

配置からSB2とは重複するが、柱穴の切り合いは無いため前後関係は不明である。攪乱による影響を受けず全容がわかる唯一の掘立柱建物で、同様に東西方向に長軸をもつSB1と同時期に並立するものとみられる。

4号掘立柱建物（SB4, 第17図）

B地区的南西部に位置する側柱式の掘立柱建物である。東側が攪乱に壊され、南東隅が調査区外となるが、概ね全形が分かる。規模は4間(9.5m)×2間(5.5m), 面積が52.25m²となる。南北棟で、主軸方位はN-5°-Eとなる。柱穴は隅丸方形もしくは不整円形を呈し、長軸0.42m～0.66m, 深さ0.06m～0.59mを測る。柱穴埋土から土師器片が出土する。

ほぼ全容がわかる調査区で最も大きな掘立柱建物で、同様に南北方向に長軸をもつSB1と同時期に並立するものとみられる。

B 土 坑

1028号土坑（SK1028, 第19図）

B地区的東側に位置する不整形の土坑である。土師器、敲石(122)が出土する。SD1019と隣接し、同時期の可能性もある。その場合、畠状遺構の一部になると思われる。

1188号土坑（SK1188, 第19図）

B地区的中央やや西側に位置する不整形の土坑である。SB3の柱穴SP1192に切られる。土師器、須恵器、砥石(121)が出土する。不整形で畠状遺構との切り合いが分からず、SD1106の一部である可能性がある。

1011号土坑（SK1011, 第18図）

B地区的北西部に位置する不整形の土坑である。区画溝となるSD1008を切っており、掘立柱建物群と同時期の可能性がある。遺物が出土せず、隣接して関連遺構がないことから性格は不明。

C 溝

畠状遺構（第18・19図, 図版11）

調査区のほぼ全域に分布し、南北と東西方向の直線的な溝群により形成される。代表的なものを示

すと、南北方向では S D1019・1109・1110・1116～1121・1123・1145・1152・1155・1159・1160・1187・1219・1244 がある。東西方向では S D1108・1111～1114・1163・1168・1169・1224 が挙げられる。

いずれの溝も埋没した飛鳥時代の堅穴建物群を切り、奈良時代の掘立柱建物と重複する場合は、それらに切られる。溝 1 条の幅 0.30m～0.50m、深さ 0.03m～0.18m を測り、溝と溝との間隔は 0.40m～2.00m 程となる。調査区西側では、南北・東西の溝による区画によって形成された方形状の空間が基盤の目状に広がり、1 区画の面積は 0.1m²～0.7m² となる。溝からは土師器 (91)、須恵器 (90・92・93)、砥石が出土する。

埋土の植物珪酸体と花粉分析（本章：5 自然科学分析を参照）によりイネ科を主体とする畠状遺構と考えられる。この他にソバ属も数値が高い箇所がありイネ科だけでなく二毛作や連作障害を防ぐための転作を行っていた可能性が考えられる。調査区東側でも南北方向と東西方向の溝が交差している箇所がありこれも同時期と考えられるが後世の削平を大きく受けたせいか大きな区画しかない。

区画溝（第 18・19 図、図版 11）

B 地区の中央に分布し、S D1008・1060・1083・1178 が該当する。概ね南北方向の溝であるが、北側ではやや西寄り、南側ではやや東寄りを向き、ゆるく S 字状にカーブする。いずれの溝も埋没した飛鳥時代の堅穴建物群と奈良時代の畠状遺構を切る。また、奈良時代の掘立柱建物と重複する場合は、それらに切られる。溝 1 条の幅 0.30m～0.60m、深さ 0.05m～0.31m を測る。溝と溝との間隔は 6.2m～12.5m となる。S D1008 から須恵器の杯 (89)、S D1060 から土師器の櫃 (94) が出土する。

單一方向のみで上面削平により失われた可能性もあるがそれに直交するものがない。畠状遺構を構成する溝群と比べてややカーブしており、同様な遺構とは考えにくく、区画溝としておく。

道路状遺構（S F 1・2、第 20 図、図版 14・17）

B 地区の西端に位置する。並行する 2 条の溝により構成され、S D1125・1128（S F 1）と S D1127・1129（S F 2）の 2 組がある。S D1125・1128 は北側ではほぼ南北方向、南側になるにつれ西寄りへゆるくカーブする。S D1127・1129 は S D1125・1128 の南側と並行しており、南西方向へゆるやかに湾曲していくと思われる。溝 1 条の幅は 0.30m～0.50m、深さ 0.05m～0.24m を測り、溝と溝との間隔は 2.1m～2.3m となる。S D1125 から土師器、S D1128 から土師器、須恵器が出土する。

單一方向のみで直交するものが無く、区画溝と比べて溝間が狭く一定であることから、並行する 2 条の溝 S D1125・1128、S D1127・1129 がそれぞれ道路状遺構の側溝になると判断した。調査区及び遺跡範囲の西端にあたり境界を示す遺構でもある。埋土の植物珪酸体と花粉分析では畠状遺構と同様にイネ科を主体にソバ属が出土しており、その一端を兼ねていたかもしれない。（町田賛一）

（5）中近世

中近世の遺構は A 地区でのみ検出した。出土遺物は少なく、埋土も單一であったため、個別の遺構について時期を判断することは難しい。少ないながらも出土遺物の傾向を踏まえて考えると、調査区北半分では中世、南半分は近世の遺構であると考えられる。主な遺構として、中世では区画溝と柱穴の可能性がある土坑、近世では区画溝と性格不明の土坑がある。

A 土坑

21・27 号土坑（S K21・27、第 6・21 図）

A 地区の南側に位置する近世の土坑である。ともに調査区外へ続くため、全形は不明である。S K21 からは土師質土器 (110)・越中瀬戸、S K27 からは土師器・須恵器・瀬戸美濃 (111)・越中瀬戸

が出土する。

40・41号土坑（SK40・41、第21図、図版18）

A地区北側に位置する中世の土坑である。SK41には埋土に柱痕があり、柱穴と考えられる。SK40ではそうした埋土は確認されなかつたが、同等の規模であることから、同様の性格であった可能性もある。SD34による区画内で建物を構成していたことも考えられる。

53号土坑（SK53、第21図）

A地区北端に位置する。調査区外へ続くため全形は不明であるが、他に比べてやや大型となる中世の土坑である。SD34による区画内にあり、区画内での活動に関わるものと考えられる。板材が出土する。

B溝

22・23号溝（SD22・23、第6・21図、図版18）

A地区南側に位置する近世の溝である。SD22は北端ではSD23につながり、南北方向へ直線的に延び、調査区外へと続く。SD23は調査区を東西方向へ貫くが、ゆるやかな湾曲がある。SD23は直線的ではないものの、区画あるいは水路として掘削されたものと考えられる。SD22・23によつて画される調査区南西部では南北方向の細い溝群が形成される。畠状遺構の可能性があり、こうした耕作地の区画が目的の一つであったと思われる。SD22からは木製円盤、SD23からは土師器・須恵器・青磁・越中瀬戸（115）・伊万里・近世陶器が出土する。

34号溝（SD34、第6・21図、図版18）

A地区北側に位置する中世の溝である。南北と東西方向に屈曲するL字状の溝で、調査区外の北と西へ続く。その区画内には柱穴の可能性があるSK40・41があり、居住域の区画溝として機能していたと考えられる。そうした場合、調査区の北西側へ居住域が広がっていた可能性がある。土師器・中世土師器（112）・珠洲（114）・瀬戸美濃（113）・砥石が出土する。

（青山 晃）

4 遺物

（1）弥生時代後期の土器（第22図）

1～3は細かい縄文を施す小破片で、後述する4と同様に天王山式系統の土器とみられる。1・2は飛鳥時代以降の遺構への混入品、3は包含層出土である。

4は弥生時代後期前半天王山式の壺で、SX1193から出土した。口縁と底部を欠損。頸部に交互刺突文とみられる刺突文と3条1単位の並行沈線2本を配し、内部に背向する弧線を入れる。並行沈線下には下開きの連弧文を施す。体部は細かい継目縄文を施す。外面は煤が付着する。上市町飯坂遺跡に類例がある（岸本1982）。

天王山式土器の出土は、近隣の魚津市佐伯遺跡（上野1979）や飯坂遺跡にまとまった資料があるがいずれも遺物包含層出土であり、上梅沢遺跡の資料は滑川市で初出土とともに遺構に伴うものとしては県内でも高岡市下老子笠川遺跡（石川2006）ぐらいしかなく貴重な資料である。

7は長頸壺で、肩部に連続刺突を施す。後期後半の法仏式期と考えられる。飛鳥時代の溝への混入品である。

（町田賛一）

（2）弥生時代終末期～古墳時代初期の土器（第22・23図）

5・6・8は飛鳥時代以降の遺構への混入品であるが、その位置から本来はSZ1に関係していた

可能性が高い。5は赤彩を施す有段高杯の口縁部、6是有段器台、8は口縁部の外反する甕である。

9～11はS Z 2の周溝となるSD1005出土土器である。12・13は飛鳥時代以降の遺構への混入品であるが、その位置からSD1005に本来は関係していた可能性が高い。9は口縁部が直立気味の短頸甕、10は口縁端部の外側をわずかに摘み出す甕、11は底部外面が浅く凹む甕である。12は台付壺の胴部と思われ、突帯には山形状に連続する線刻が施される。13是有段となる短頸甕である。

S Z 1からは14～48が出土した。14～26は甕である。14是有段甕で、やや内傾気味に口縁部が立ち上がる。15～25は口縁端部に面を有する平縁甕である。口縁部の立ち上がりはくの字状に屈曲する16・19・21～23が中心となる。他に緩やかに外反する18・20・24、直立した後に端部を屈曲させる15・17がある。また、16～18は口縁端部をやや上方へ摘み上げる。19～24は端面をナデすることにより上下に拡張もしくは沈線上の凹みを形成する。26は口縁端部に丸みを帯びる丸縁甕で、広口の形態をとる。27是有段小型甕で被熱により煤の付着が認められる。28・29は蓋で、28は赤彩を施す有段甕、29は口縁部が直立する短頸甕となる。30・31は台付壺で、ともに赤彩が施される。30は扁平な胴部に突帯が巡り、突帯部には擬回線と上下端に刻目を施す。31は脚の内面まで赤彩がなされる。32是有孔鉢である。33～37は鉢で、33は無頸鉢、34是有段鉢、35は台付鉢、36・37は台付鉢の脚部と思われる。38～43は高杯である。38・39是有段高杯の杯部で、38は赤彩を施す。40は小型高杯で、杯部は小型の鉢形を呈する。41～43は高杯の脚部で、41・42は外反脚、43は棒状脚で短い裾部が開く形態を呈する。44～46は蓋で、44・45は紐部が残り、45・46はかえし付きの蓋となる。47は口縁部に擬回線を施す。下半を欠いており器形は不明であるが、器台もしくは壺の口縁部と思われる。48是有段の口縁部に半円状の耳部が貼り付けられる。下半を欠いており器形は不明であるが、壺もしくは鉢の口縁部と思われる。

包含層からは49～54が出土した。49是有段甕で、口縁端部を短く外傾させる。50は台付壺の胴部と思われ、突帯部が巡り、外面には赤彩が施される。突帯部とその上側の胴部には双葉状の連続刺突、さらにその上側には竹管による円形の連続刺突が巡る。51は高杯もしくは器台の脚部と思われ、有段状の裾部に擬回線と刻目の加飾、外面に赤彩を施す。52は外面に赤彩を施す器台の脚部で、小型器台と考えられる。53是有孔鉢、54は台付鉢の底部に穿孔を施す。

以上、S Z 1周溝とS Z 2周溝のSD1005出土の土器を中心とした土器群は、甕を中心に台付壺・有孔鉢・鉢・高杯・器台・蓋を中心に構成される。

この内、高杯の38・39は小型化が進み、40の小型高杯も認められる。台付壺はS Z 1の30の他、S Z 2に関係する可能性がある12や包含層からの50があり、当該期の土器組成に一定量存在していたことを示す。蓋にはかえし付きの45・46が含まれている。また、台付壺の12・30は突帯部に加飾を施している。さらに包含層からではあるが、小型器台52が出土している。こうした土器の様相から、漆町編年4～6群の時期幅におさまると考えられる。

甕で有段口縁となるものは14と小型甕の27で、その他はくの字状口縁を呈する。くの字口縁の端部は面取りや端部摘み上げを施す傾向がある。胴部の形態が分かる個体は少ないが、15・16では胴部最大径が肩付近にあり、やや肩の張った器形を呈することが分かる。当該期のくの字状口縁となる甕については、小田木治太郎氏による検討（小田木1989）がある。これを参考にすると、様相1～2に相当する。この様相1～2は、漆町編年4～6群に対応しており、先に見た高杯や台付壺などの様相と一致する。

以上の点から、S Z 1を中心とした土器群は漆町編年4～6群に比定される。これらについては、

田嶋明人氏による近年の検討（田嶋 2006・2007）により白江式として再設定されている。なお、小型化した高杯において口縁部の伸長が短くなっている傾向を重視すれば、6群を主たる時期とすべきかと思われる。ただし、S Z 1周溝における土器の出土状況は、埋土上層から破片で出土している。墳丘における祭祀後に破損・転落した可能性はあるが、周溝がある程度埋没した段階である。周溝掘削段階と埋没段階に時期幅がある可能性であることから、遺構の時期としては先に示した4~6群の時期幅を考えておきたい。

(3) 飛鳥時代～奈良時代の土器（第24~26図）

A 壺穴建物出土土器

55~84は壺穴建物からの出土土器である。以下、建物毎に見ていく。

S I 1からは55~64が出土した。61の土製品を除き、全て土師器である。55・56は長胴の甕で底部は平底となる。共に被熱により煤が付着し、56では外面下半の器面剥離が顕著である。57・58は器高の低い小型の甕で、平底となるが58の底面にはやや丸みがある。59は胴部に張りがある球胴の甕で、口縁部内面から胴部外面にかけてミガキを施す。60は瓶で把手が付き、底部は単孔である。胴部下端には2つの小孔が把手に対し直交方向の対角線上に穿たれる。61は土製支脚で、棒状を呈する。62は高杯で、杯部は外反して口縁部が立ち上がり、低い脚部が付く。63は鉢で、平らな底部から口縁部へ外反して立ち上がる。64は椀で、内面には黒色処理を施す。

S I 2からは65~67が出土した。65・66は須恵器で、壺穴埋没後の畠状遺構や区画溝形成に伴って、埋土上層へ混入したと考えられる。67は土師器の鉢である。

S I 3からは68~71が出土した。71の土製品を除き、土師器である。68・69は甕で、68は胴部径が大きく、球胴気味の形態となるが、頸部の括れは弱いため胴部の張りも弱い。69は長胴の甕である。70は脚部でハの字状に開く。71は土製支脚で、棒状を呈する。

S I 4からは72~74が出土した。72・73は土師器である。72は鉢で、内面には黒色処理を施す。73は胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形を呈し、甕の可能性がある。74は土製支脚で、棒状を呈する。

S I 5からは75~79が出土した。79の土製品を除き、土師器である。75は小型の甕で、底部は平底となる。76は長胴の甕と思われるが、胴部を大きく欠いており判然としない。77は瓶で、口縁端部がわずかに外反する。把手は欠損しているが、胴部への接合痕が残る。底部は単孔で、胴部下端には2つの小孔が把手とは直交方向の対角線上に穿たれる。78は製塙土器で、内面には粘土接合と指オサエ痕が残る。79は土製支脚で、棒状を呈する。

S I 6からは80~87が出土した。いずれも土師器である。80は長胴の甕で、底部はやや丸みを帯びる。82は胴部下半を欠いているが、長胴の甕と思われる。口縁部はハの字状に屈曲し、胴部にはやや張りがある。81・83~85は小型の甕で、底部はやや丸みを帯びるもの、おおむね平底となる。85は内面に粘土接合と指オサエ痕を残す粗雑な作りである。86・87は椀である。86は内面にミガキ、口縁部もヨコナデ調整を施すが、87はハケメのみを施した粗雑な作りとなる。

これら壺穴建物出土の土器は、一部含まれる後世の混入を除き、飛鳥時代の土器群である。土器群は須恵器を含んでおらず、須恵器編年を援用した時期の比定は難しい。当該期の土師器については池野正男氏による検討が行われている（池野 2011）。それによると、県東部では甕には平底や、やや平坦気味の丸底を呈するものが含まれることが指摘されている。そうした土器群の出土例である中名VI遺跡A地区（内田 2000、富山県文化振興財團 2005）では須恵器が併存しており、概ね7世紀前半

代と考えられる。これとそのまま合致する訳ではないが、上梅沢遺跡出土の土師器、さらには竪穴建物群の形成もそうした時期が想定されることとなる。

B 柱穴、溝、包含層出土の土器・土製品

88～94は竪穴建物よりも後出する掘立柱建物柱穴や溝からの出土である。88は土師器の甕で、S B 2 の柱穴である S P 1089 から出土した。口縁部はロクロナデを施し、端部を上方へ短く摘み上げる。89～94は畠状造構や区画溝を構成する溝からの出土である。89は須恵器の杯B、90・92・93は須恵器の杯Aである。91は土師器の杯で内面に黒色処理を施す。94は土師器の甕である。胸部はやや張りがあり、いわゆる砲弾型の器形を呈する。把手が付き、底部は単孔となる。

95～109は包含層からの出土である。95～99は須恵器である。95は杯A、96は杯B、97は壺蓋、98は高杯、99は横瓶となる。100～103は土師器である。100・101は椀で、内面にはミガキを施す。102・103は鉢である。102の口縁部は内湾し、2つの小孔が対角線上に穿たれる。103は口縁端部で短く外反する。104～109は土製品である。104・105は土製支脚で、棒状を呈する。106～108は土製カマドである。106では底面が残ることから底部、107は焚口として開口する部分の端面が残ることから焚口部となる。108は判然としないが器設部の破片と考えられる。109は用途不明の土製品で、全体に被熱している。中心に孔のある円錐状の土製品の一部に、硬化した粗砂が固着している。

これらの出土遺物は、竪穴建物と同時期の飛鳥時代のもの混入と、柱穴や溝の形成された奈良時代のものが含まれる。

飛鳥時代の所産には、91・98・100～105が挙げられる。91は竪穴建物出土の64・72と同様に黒色処理がなされた椀であり、その形態から東日本系（池野2011）と思われる。98は透かしの無い長脚の高杯で、県内では小杉流通業務団地内遺跡群No.7遺跡の窯跡や集落、同No.6遺跡の集落（富山県教育委員会1982）に同様な形態をみることが出来る。上野章氏により示された県内における7世紀代の須恵器変遷（上野2005）によれば、射水1期（新）～射水2期（古）に相当し、概ね7世紀第1四半期となろう。100～105は胎土や作りから竪穴建物出土の土器群と同時期のものと考えられる。

奈良時代の所産には、88・89・90・92・93～95・96がある。90・92・93・95の杯Aは口径約14cmを示す。婦負郡古沢窯を含めて新川郡の須恵器編年を検討した成果（田中他1989）では、8世紀中頃を境に口径が12cm程度まで縮小することが指摘されている。これを参考とすれば、おおむね8世紀前半代を想定することが出来よう。94の甕も同時期と考える。県東部では辻遺跡において8世紀前半に比定される土器群の中にもロクロ成形でない甕が存在している（立山町教育委員会1990）。出土遺構が竪穴建物より後出する区画溝であることから、8世紀前半代の時期を考えておきたい。ただし、当該期の遺物は出土量が少なく、全体的に時期が判然としない点も否めない。

106～108の土製カマドは、北陸地域での確認例には時期幅があり（田中2003）、今回の出土例も破片であることから時期は比定し難い。

（4）中世の土器・陶磁器（第27図）

中世の土器・陶磁器は出土量が少ないため、まとめて提示する。

110はSK21から出土した土師質土器の皿である。ロクロ成形で、硬質の仕上がりとなる。111はSK27から出土した瀬戸美濃の耳付水注である。鉄軸を施し、肩部に半円状の耳が付く後Ⅲ期～大黒期に比定される製品である。112～114はSD34から出土した。112は中世土師器皿で、浅い器形を呈し、端部は尖る。113は瀬戸美濃の香炉で、後期の製品である。口縁部内外面に灰釉を施し、底部は回転糸切り後に短い脚を貼り付ける。内面は被熱により煤の付着や変色が認められる。114は珠

洲の壺で、外面のタキ目は綾状形式となり、その角度からⅡ～Ⅲ期と考えられる。115はS D23から出土した越中瀬戸の擂鉢である。116～118は包含層からの出土である。116は中世土師器の皿で、底部は回転糸切りとなるが、全体に器面が荒れており、不鮮明である。117は越中瀬戸の皿で、灰釉を施すが内面に輪止めの段は無い。118は珠洲の壺でⅣ～Ⅴ期に比定する。

以上の様に、中世では珠洲Ⅱ～V期、瀬戸美濃後Ⅲ期～大窯期の製品が出土した。これらから13世紀～16世紀代の時期幅を考えることが出来る。中世土師器においてもロクロ成形の116はRE類で13世紀後半～15世紀後半、非ロクロ成形の112はN J類で15世紀後半～17世紀前半までの存続年代を持つ。このことから、A地区およびその周辺では中世全般に渡って何らかの活動が行われていた可能性が高いと考えられる。出土遺物は少なく、遺構の形成時期を明確に示すような出土状況はないが、SD34に112・113の16世紀代を前後する遺物があることから、中世後半にSD34が形成あるいは埋没したものと考えておきたい。その後、越中瀬戸の成立以降にSD23などのA地区南側の遺構が形成されたものと考えておきたい。

(5) 石製品 (第28・29図)

119はSD1155から出土した真岩の石核である。遺跡からはこの他に鉄石英の破片も出土しており、石材の加工を行っていた時期があると思われる。120・121は砥石で、120はSI3、121はSK1188からの出土である。120には溝状の擦痕が認められる。122はSK1028から出土した。複数箇所に敲打痕があり、敲石と思われるが、側縁に抉り状の部分があり石錐の可能性もある。

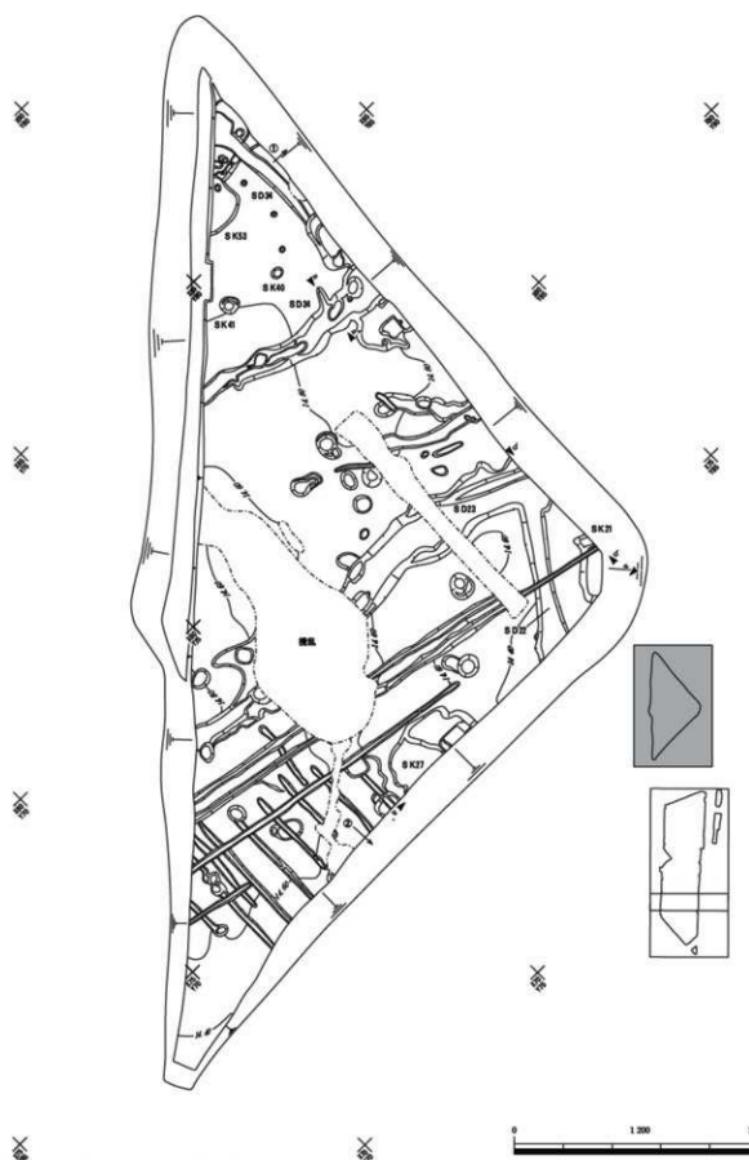
123～129は編物石である。123はSI1から、124はSI2からの出土である。125はSI3からの出土で、他6点出土があり、これらは長さ10cm～13cm、幅5cm～6cm、重量417g～546gの法量となる。126・127はSI4からの出土で、他24点出土があり、これらは長さ9cm～14cm×幅5cm～7cm、重量269g～700gの法量となる。128はSI5からの出土で、他10点出土があり、これらは長さ9cm～13cm×幅4cm～7cm、重量303g～536gの法量となる。129はSI6からの出土で、長さ10cm×幅5cm、重量385gとなる。編物石の石材は複数種あることが石材鑑定により確認され、いずれも在地で産する石材である(本章:5自然科学分析を参照)。

(青山晃)

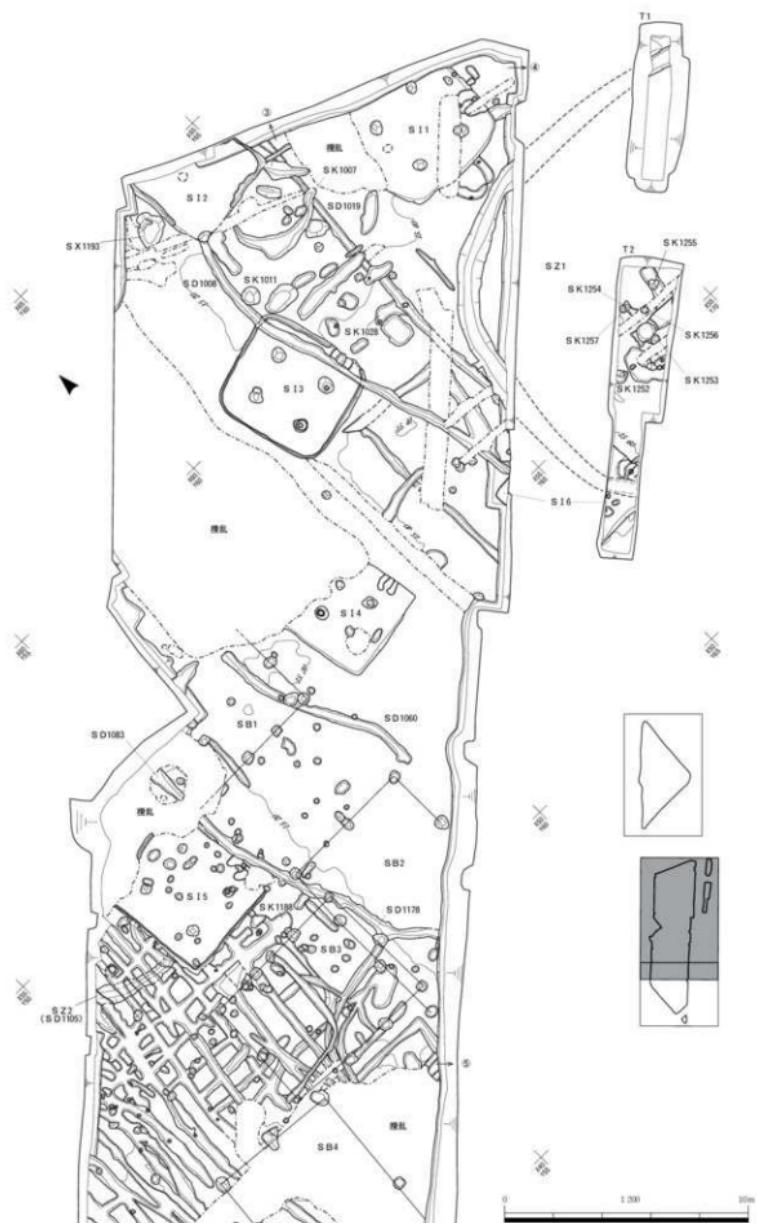
参考文献

- 石川日出志 2006『下老子篠川遺跡の天王山式土器がもつ意義』『下老子篠川遺跡発掘調査報告 第五分冊』富山県文化振興財団
- 池野正男 2011『7世紀の集落における須恵器食器の流通』『富山考古学研究』第14号 富山県文化振興財団
- 上野章 1979『弥生・古墳時代』『佐伯遺跡発掘調査概要』富山県教育委員会
- 上野章 2005『越中の7世紀の須恵器変遷について』『ふくおかの飛鳥時代を考える 資料集』福岡町教育委員会・富山考古学会
- 内田亜紀子 2000『越中帰農郡の古代土師器煮炊具』『富山考古学研究』第3号 富山県文化振興財団
- 大上周三 1998『堅穴住居跡』『下大槻峯遺跡(No.30)Ⅱ』(財)かながわ考古学財団
- 大塚健一 1999『編み物石について』『下大槻峯遺跡(No.30)Ⅲ』(財)かながわ考古学財団
- 岡本淳一郎 2006『周溝をもつ建物の分類と系譜』『下老子篠川遺跡発掘調査報告 第五分冊』富山県文化振興財団
- 小木田治太郎 1983『北陸東部における古墳時代開始期の土器様相』『北陸の考古学Ⅱ』石川県考古学研究会
- 河西健二 2010『堅穴住居、古墳、井戸状遺構』『富山考古学研究』第13号 富山県文化振興財団
- 岸本雅敏 1982『飯坂遺跡』『北陸自動車道遺跡調査報告ー上市町土器・石器編ー』上市町教育委員会
- 高橋浩二 2007『富山の古墳ー氷見・南晴の首長と日本海』富山県・日本海学推進機構
- 田嶋明人 2006『白江式再考』『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』桂書房
- 田嶋明人 2007『法式と影形』『石川県埋蔵文化財情報』第18号 石川県埋蔵文化財センター
- 田中昌樹 2003『北陸地域の肅形土製品について』『富山考古学研究』第6号 富山県文化振興財団

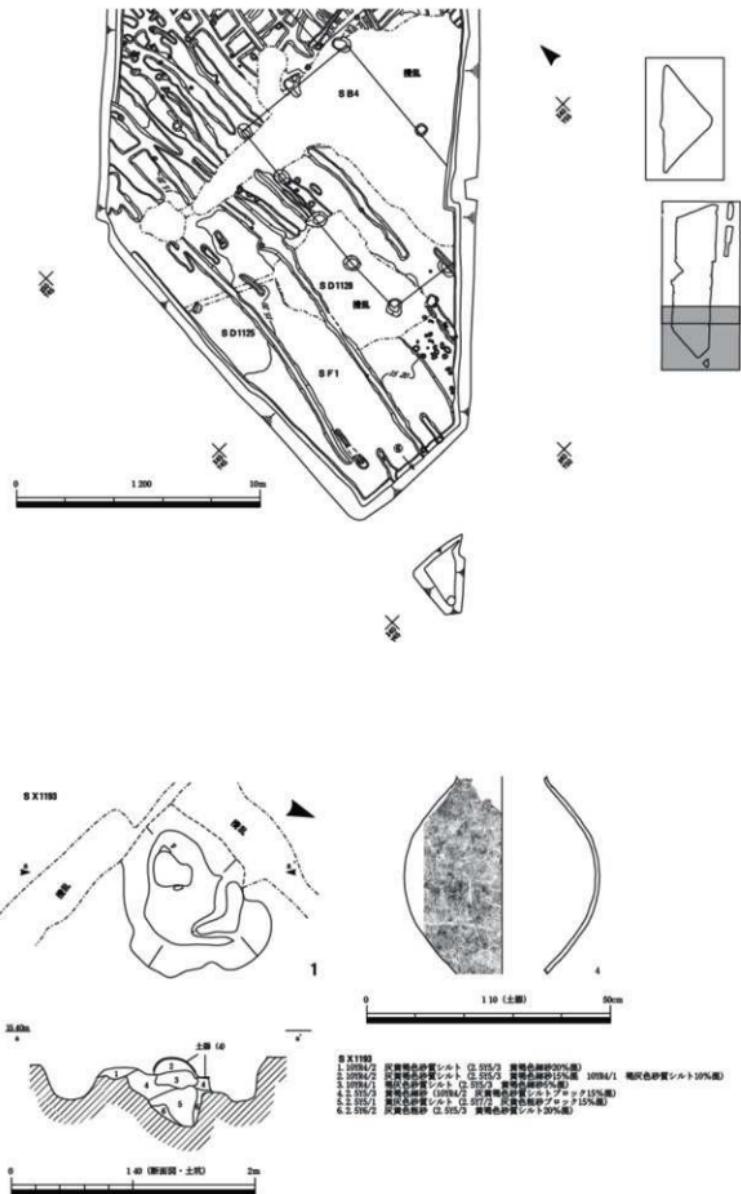
- 田中道子・宇野隆夫 1989「第5章考察 1 須恵器の編年と画期」『越中上末席』富山大学人文学部考古学研究室
富山県教育委員会 1982『富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺跡群 第3・4次緊急発掘調査概要』
富山県文化振興財團 2005『中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡発掘調査報告書』
富山県文化振興財團 2013『下黒田遺跡 下佐野遺跡 諏訪遺跡 蔵野町東遺跡 蔵野町遺跡 梶方南遺跡』
富山市教育委員会 1975『富山市 杉谷(A・G・H)遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2000『富山市 水橋清水堂南遺跡』
富山市教育委員会 2012『富山市 百塚遺跡発掘調査報告書』



第6図 上梅沢遺跡 遺構全体図 (1/200)

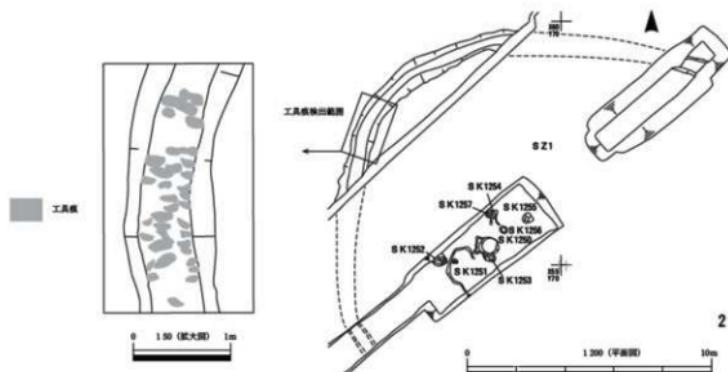
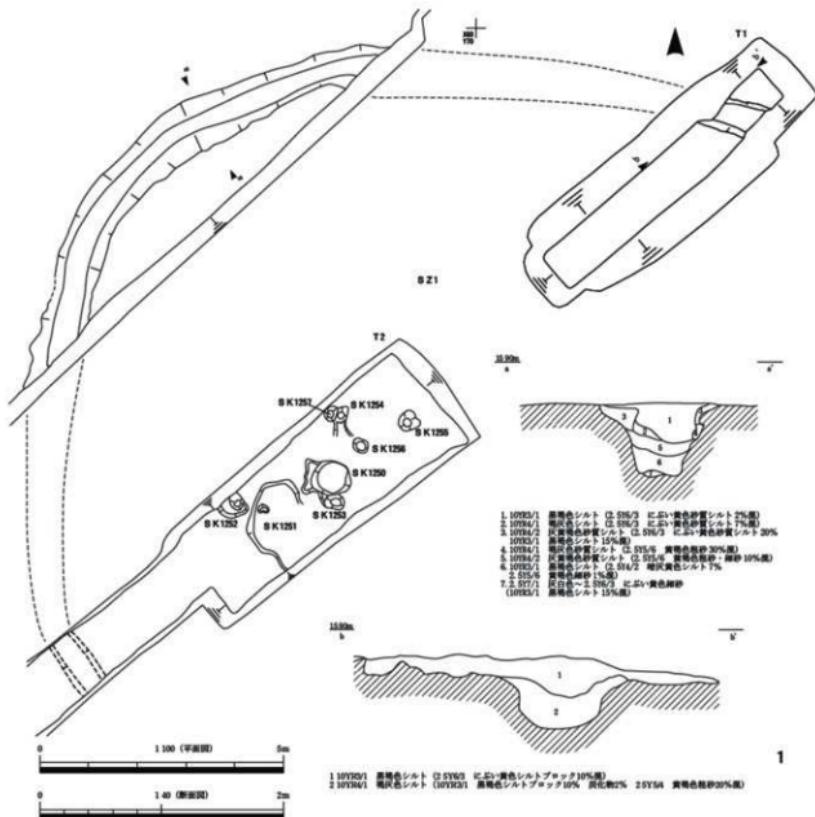


第7図 上梅沢遺跡 遺構全体図 (1/200)

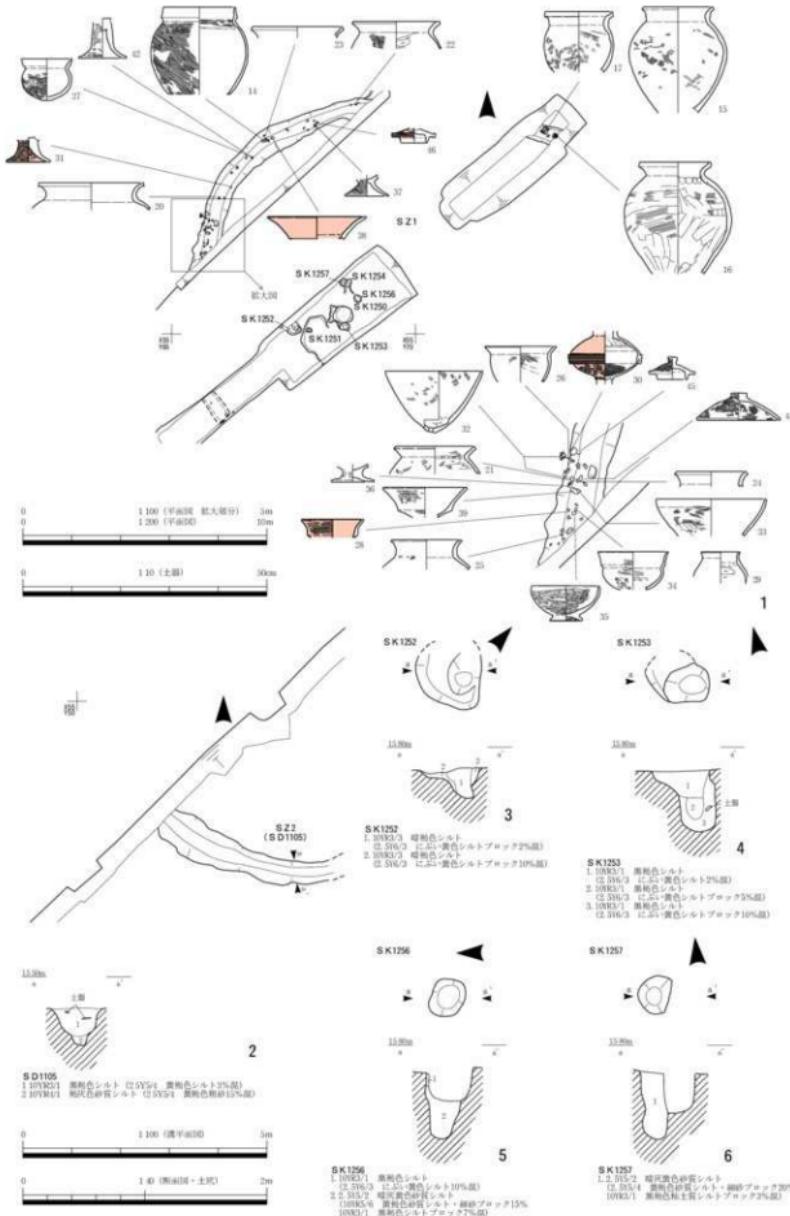


第8図 上梅沢遺跡 遺構全体図 (1/200)・遺構実測図

1.SX1193



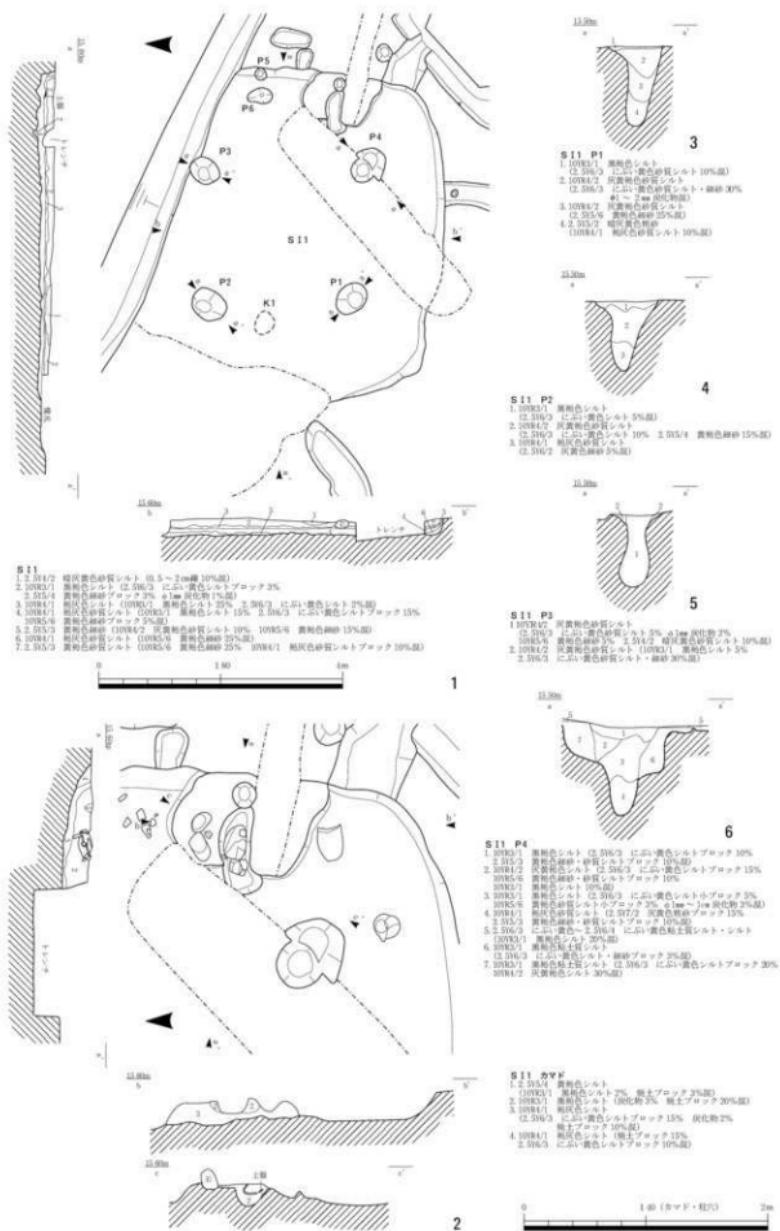
第9図 上梅沢遺跡 遺構実測図
 1. S.Z1 2. S.Z1掘削工具痕



第10図 上梅沢遺跡 遺構実測図

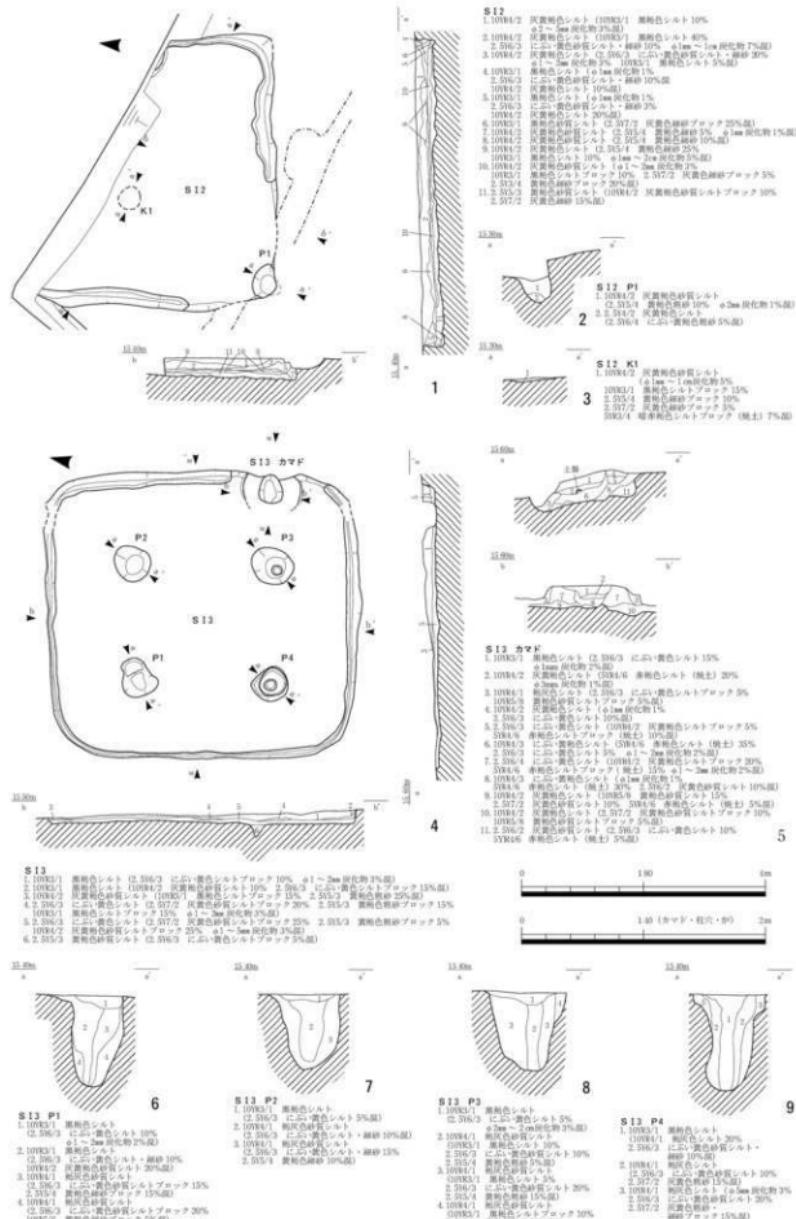
1. S Z1 遺物出土状況 2. S Z2 (S D1105) 3. S K1252 4. S K1253 5. S K1256 6. S K1257

SK1257
L.1.55-2 植物色番シルト
(2) 55/4 黄褐色番シルト・細砂ブロック20%
000013 黄褐色土質シルト・ロッカ25%他



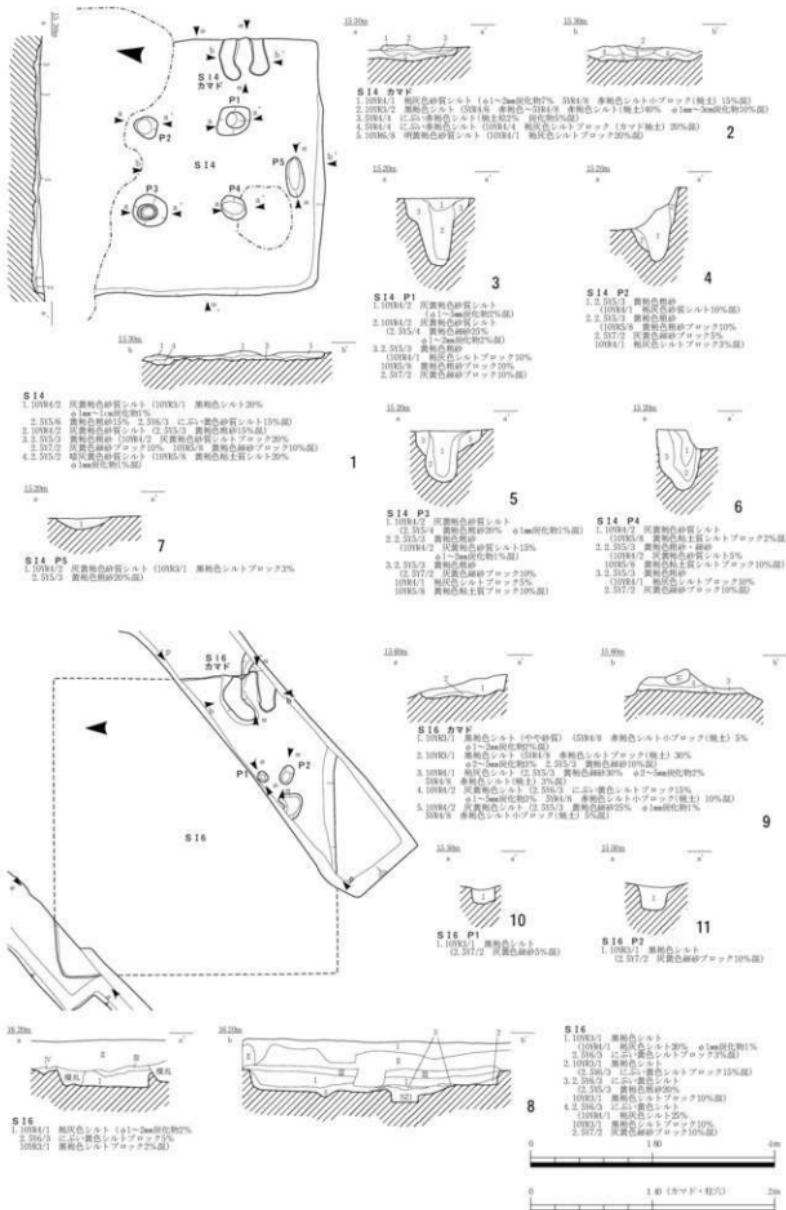
第11図 上梅沢遺跡 遺構実測図

1.S11 2.S11カマド 3.S11 P1 4.S11 P2 5.S11 P3 6.S11 P4



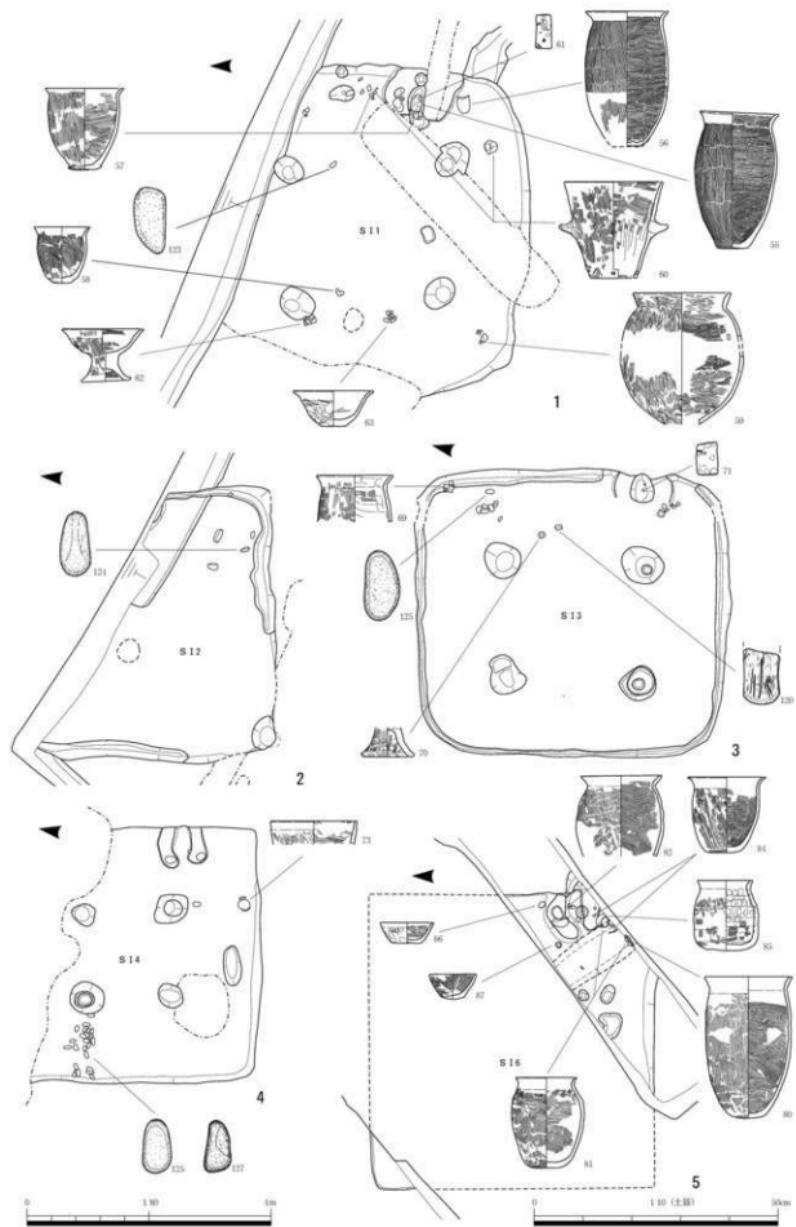
第12図 上梅沢遺跡 遺構実測図

1. S12 2. S12 P1 3. S12 K1 4. S13 5. S13 カマド 6. S13 P1 7. S13 P2 8. S13 P3 9. S13 P4



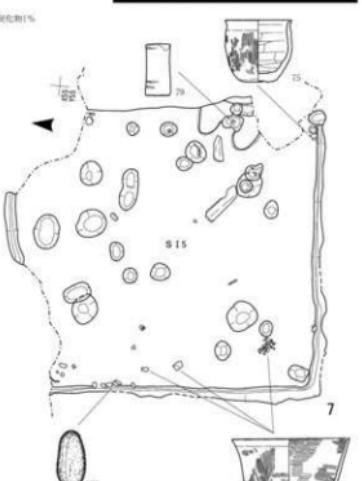
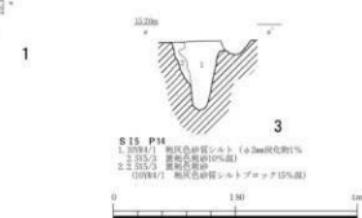
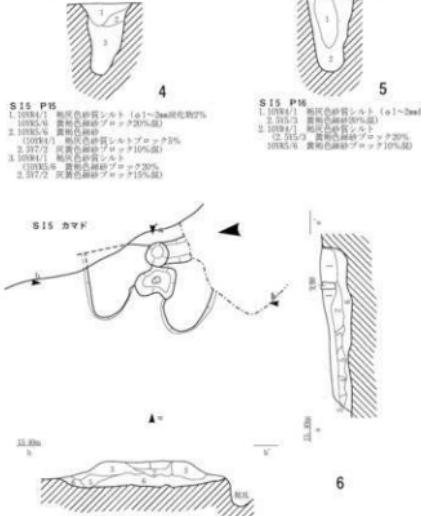
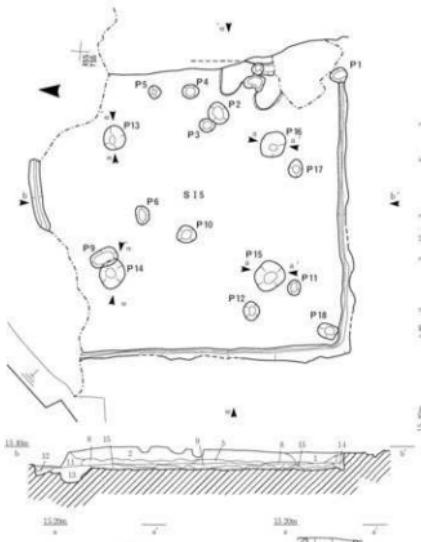
第13図 上梅沢遺跡 遺構実測図

1. S I4 2. S I4 カマド 3. S I4 P1 4. S I4 P2 5. S I4 P3 6. S I4 P4 7. S I4 P5
 8. S I6 9. S I6 カマド 10. S I6 P1 11. S I6 P2



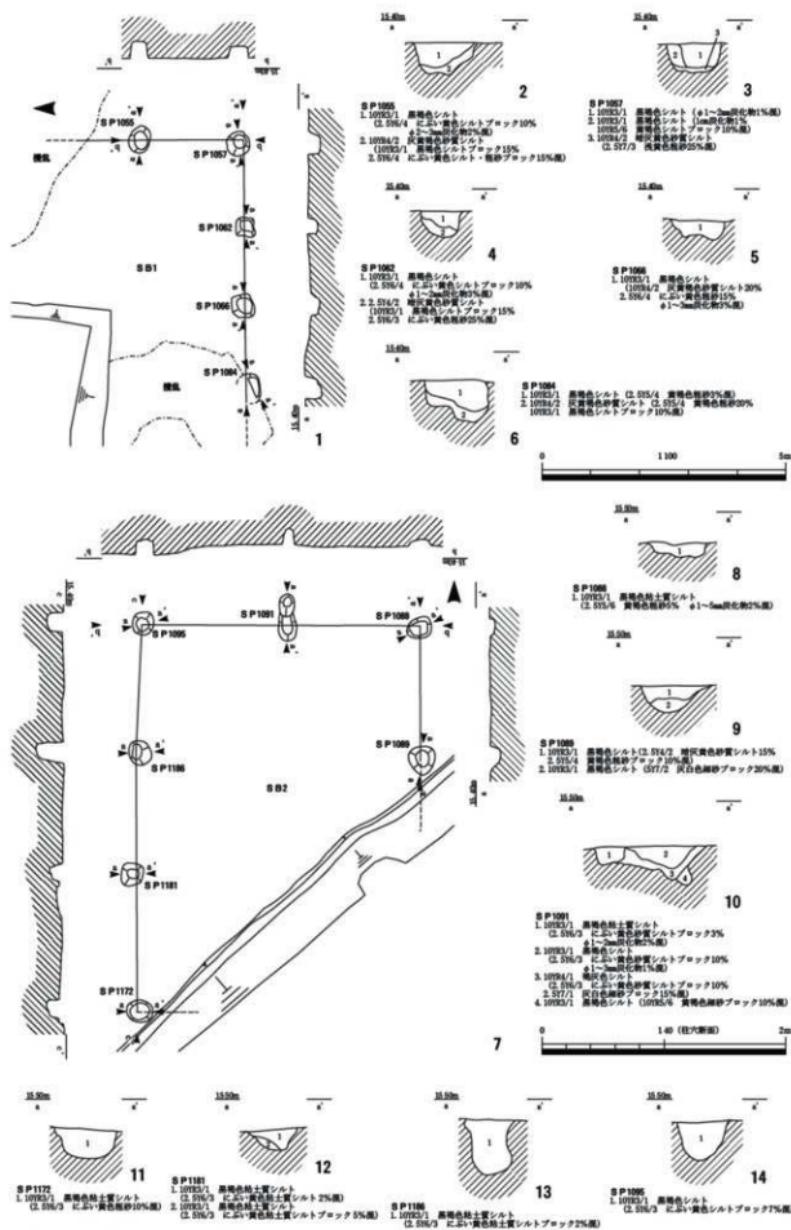
第14図 上梅沢遺跡 遺構実測図

1. S I 1 出土状況図 2. S I 2 出土状況図 3. S I 3 出土状況図 4. S I 4 出土状況図 5. S I 6 出土状況図



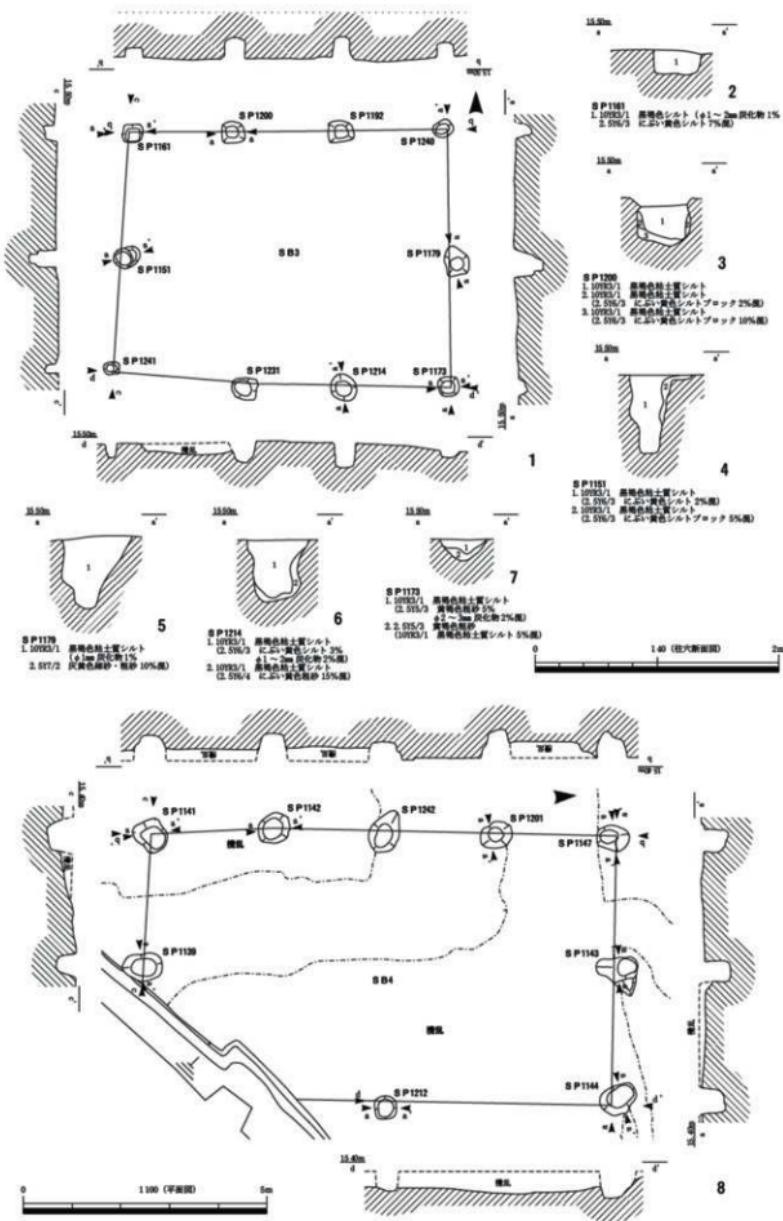
第15図 上梅沢遺跡 遺構実測図

1. S 15 2. S 15 P13 3. S 15 P14 4. S 15 P15 5. S 15 P16 6. S 15 カマフ 7. S 15 出土状況図



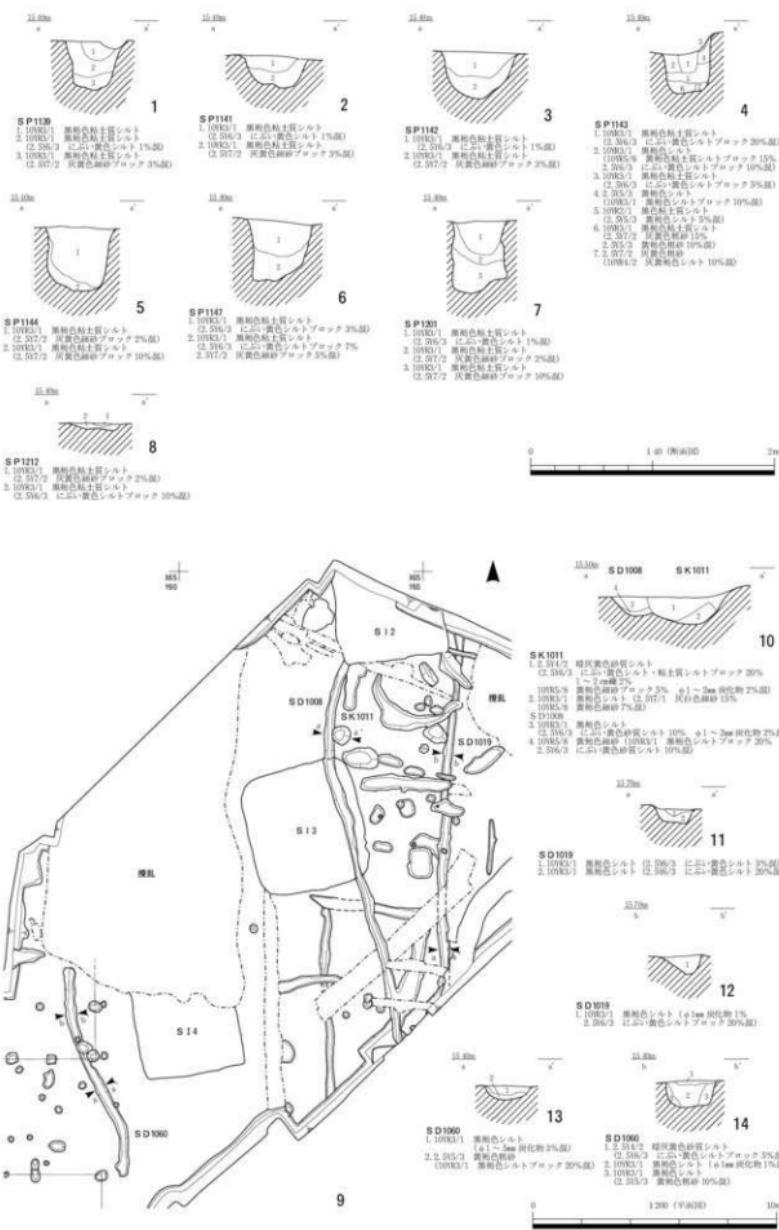
第16図 上梅沢遺跡 遺構実測図

1. S B1 2. S P 1055 3. S P 1057 4. S P 1062 5. S P 1066 6. S P 1084
7. S B2 8. S P 1088 9. S P 1089 10. S P 1091 11. S P 1172 12. S P 1181 13. S P 1186 14. S P 1095



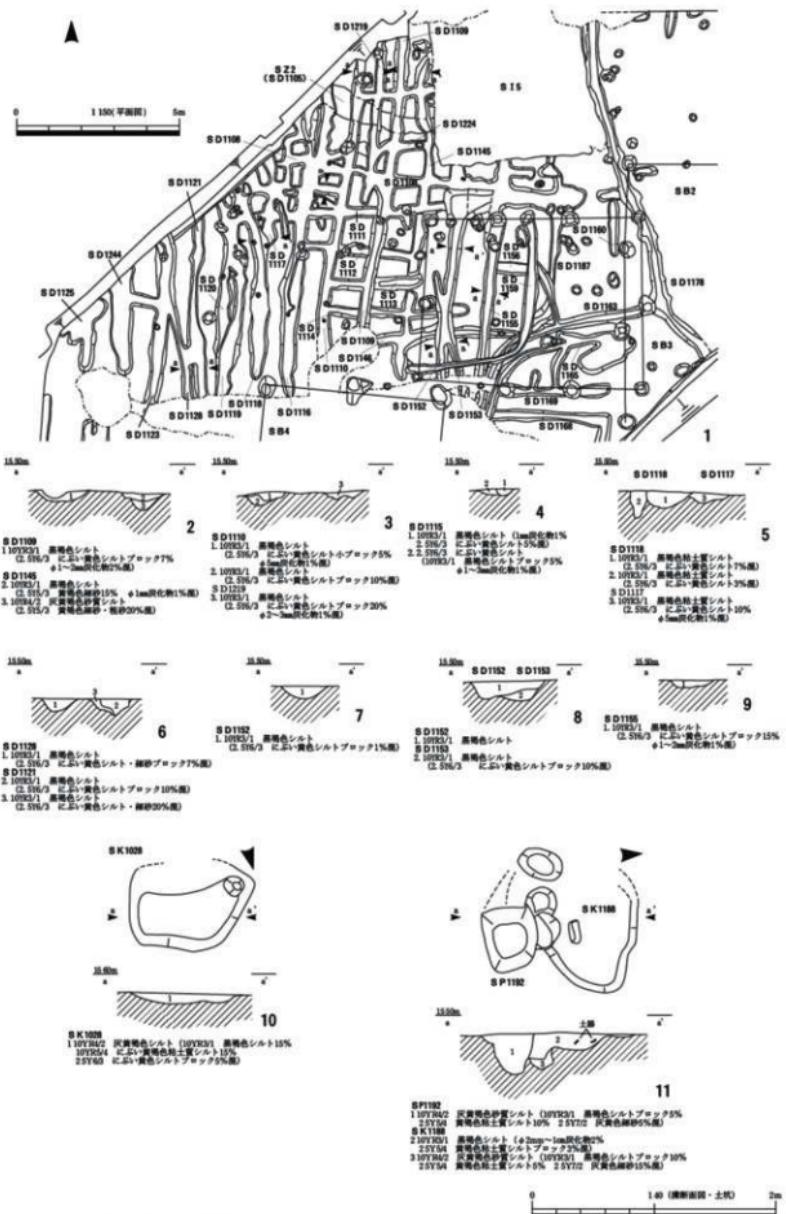
第17図 上梅沢遺跡 遺構実測図

1. S B3 2. S P1161 3. S P1200 4. S P1151 5. S P1179 6. S P1214 7. S P1173 8. S B4



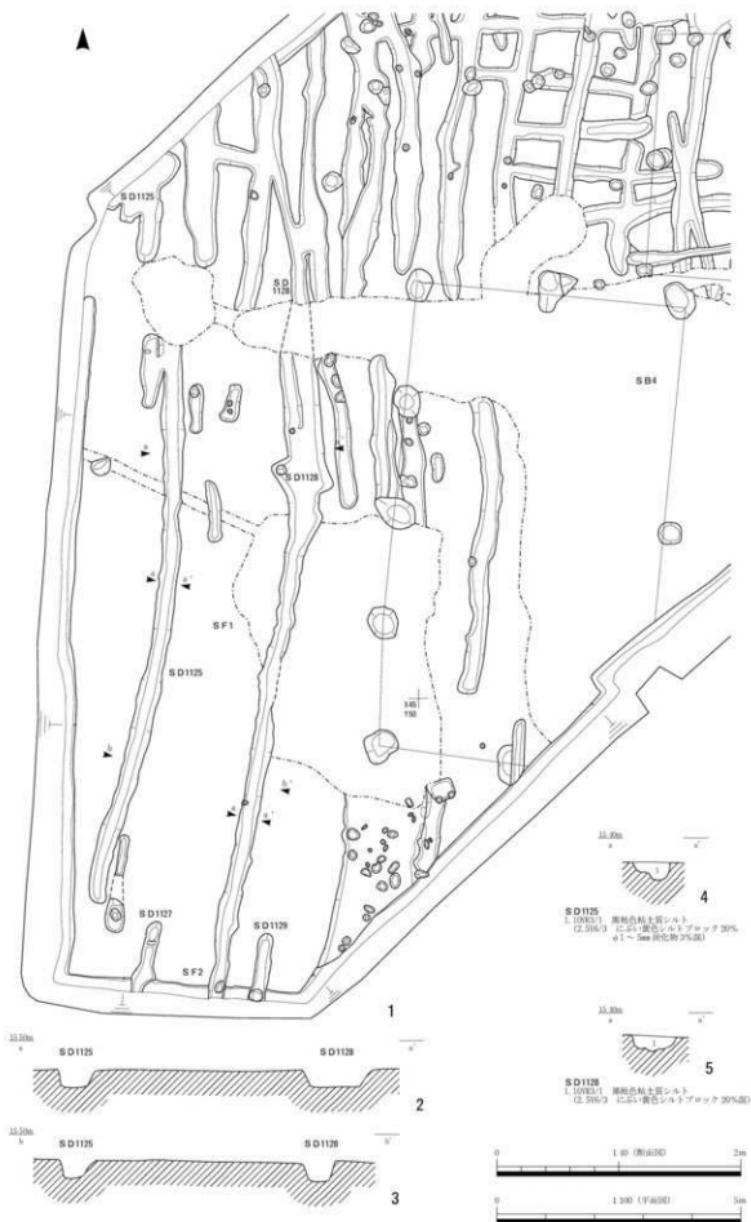
第18図 上梅沢遺跡 遺構実測図

1. S P1139 2. S P1141 3. S P1142 4. S P1143 5. S P1144 6. S P1147 7. S P1201 8. S P1212
9. S D1008 · S D1019 · S D1060 10. S D1008 · S K1011 11. · 12. S D1019 13. · 14. S D1060



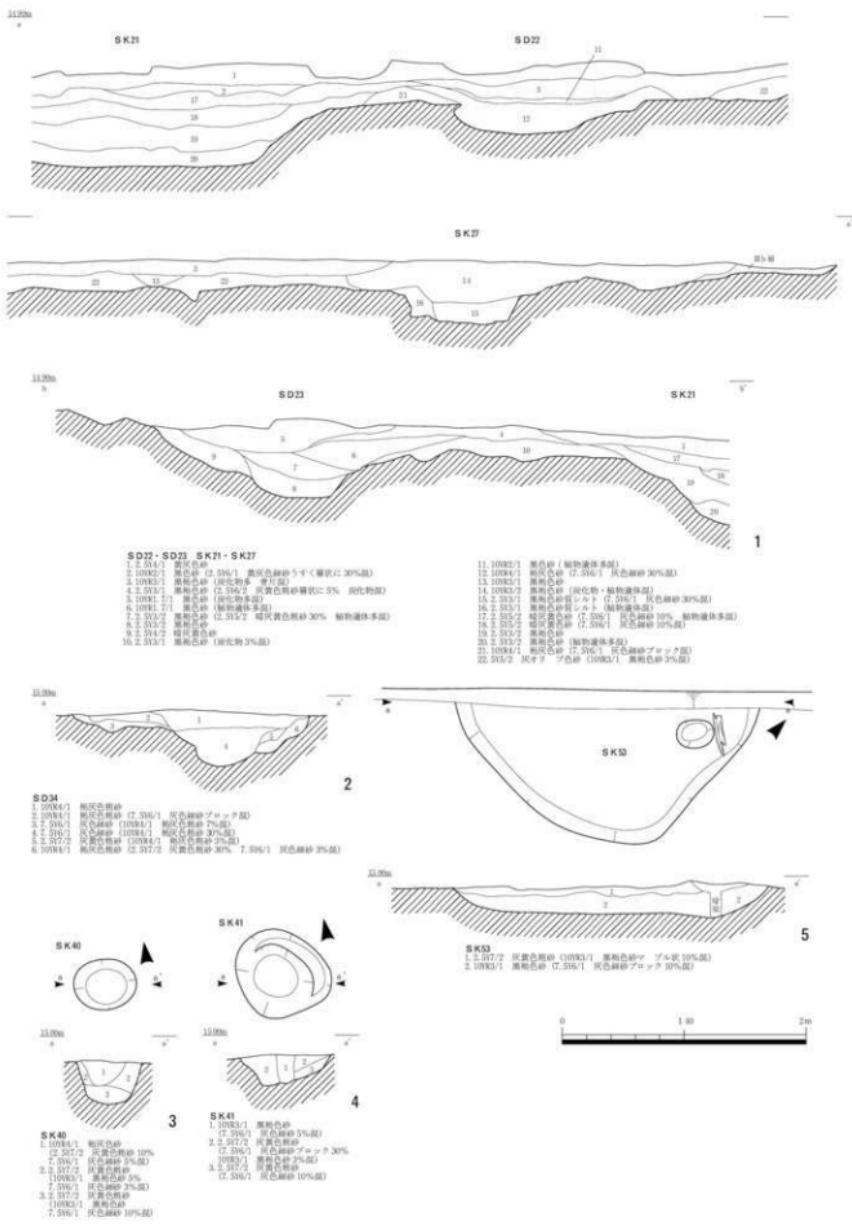
第19圖 上海沉遺跡 遺據寒測圖

1. さく状構造 2. SD1109・SD1145 3. SD1110・SD1219 4. SD1115 5. SD1117・SD1118 6. SD1121・SD1122 7. SD1152
8. SD1152・SD1153 9. SD1155 10. SK1028 11. SP1192・SK1188



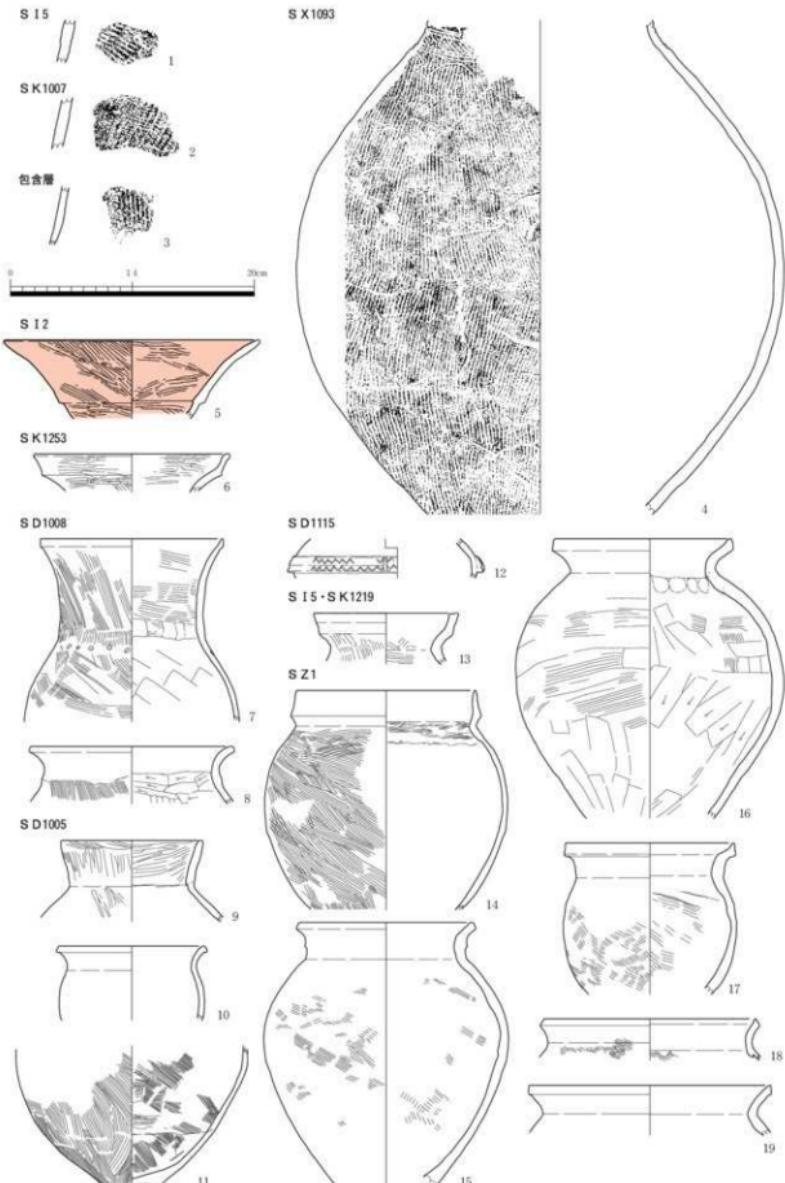
第20図 上梅沢遺跡 遺構実測図

1~3, SF1・SF2 4, SD1125 5, SD1128



第21図 上梅沢遺跡 遺構実測図

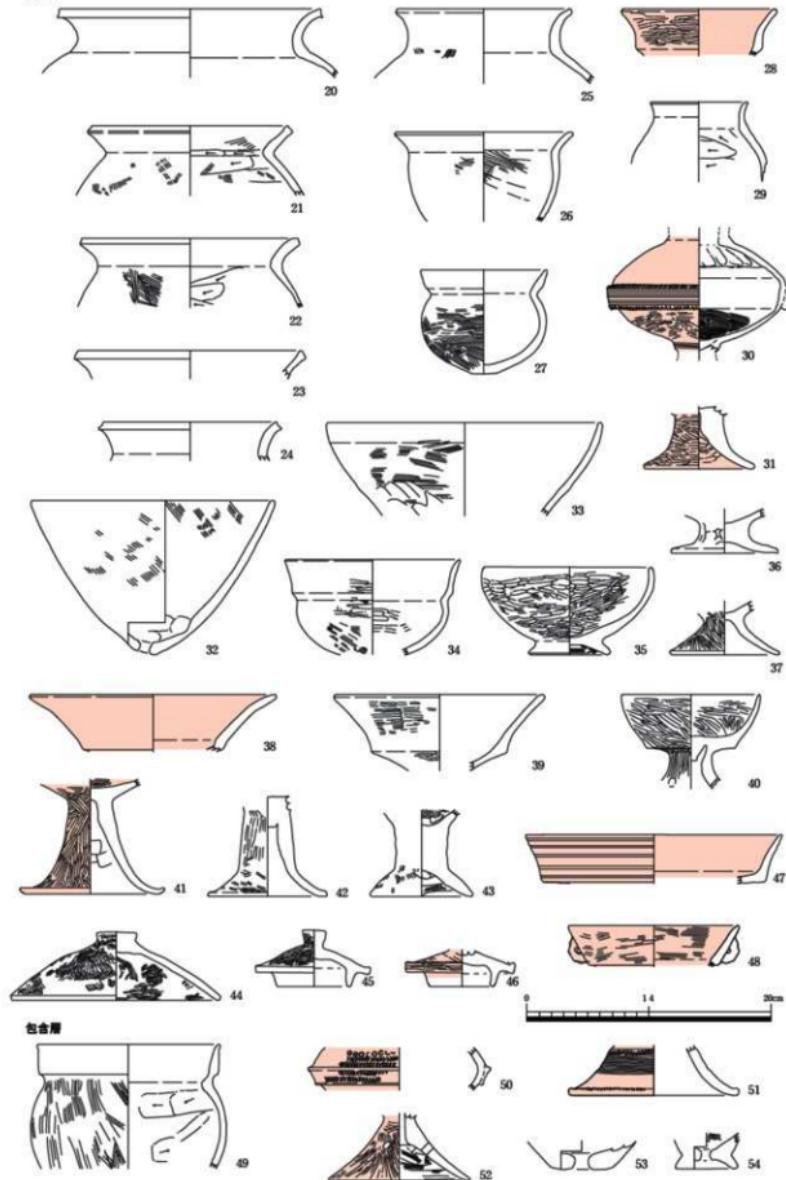
1. S D22 + SD23 SK21 + SK27 2. SD34 3. SK40 4. SK41 5. SK53



第22図 上梅沢遺跡 遺物実測図 (1/4)

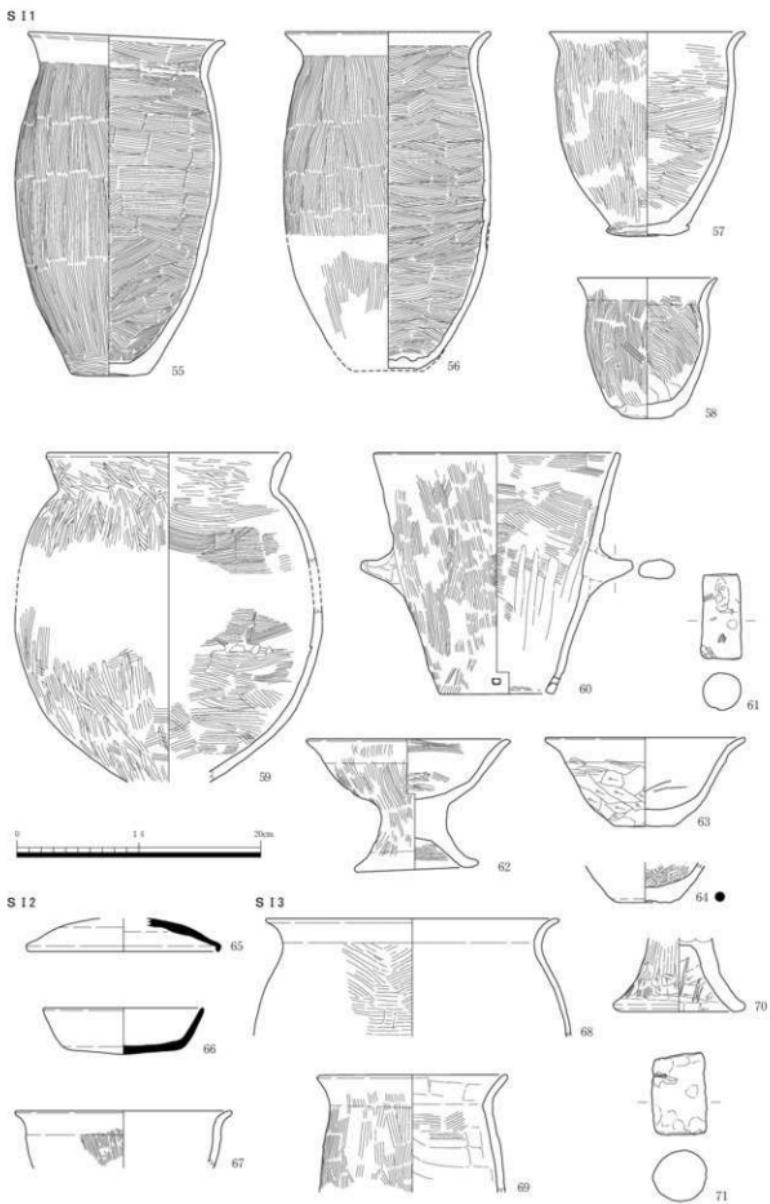
S Z1 (14~19) S D1005 (9~11) S D1008 (7・8) S D1115 (12) S 12 (5) S 15 (1) S 15・SK1219 (13)
 S K1007 (2) S K1253 (6) S X1093 (4) 包含層 (3)

S21

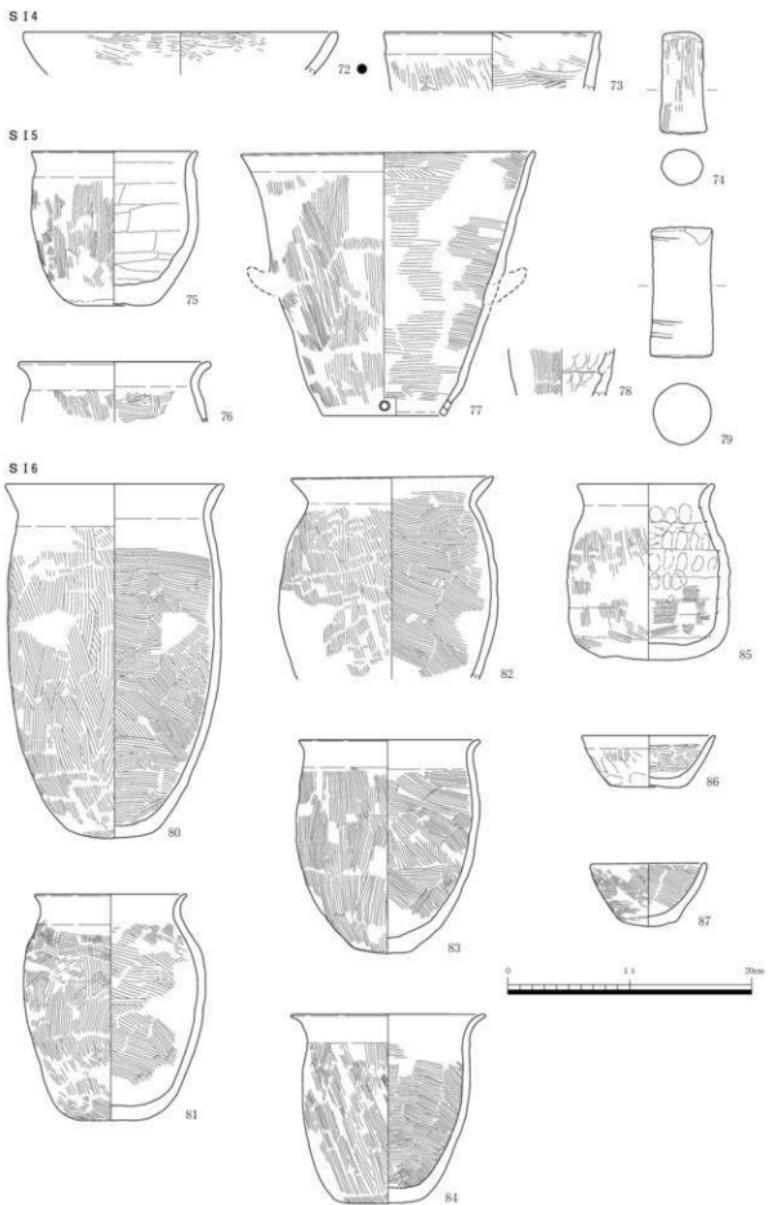


第23图 上梅泽遗迹 遗物实测图 (1/4)

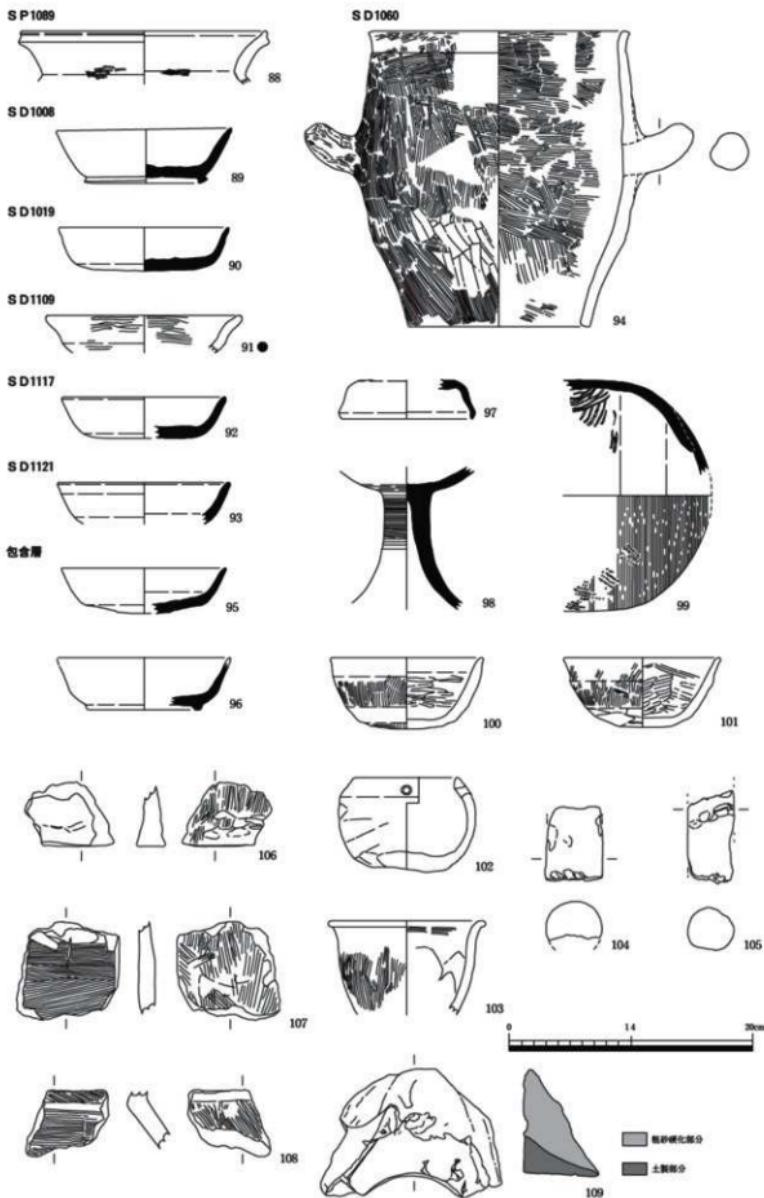
S21 (20~48) 包含层 (49~54)



第24図 上梅沢遺跡 遺物実測図 (1/4)
S 11 (55~64) S 12 (65~67) S 13 (68~71)

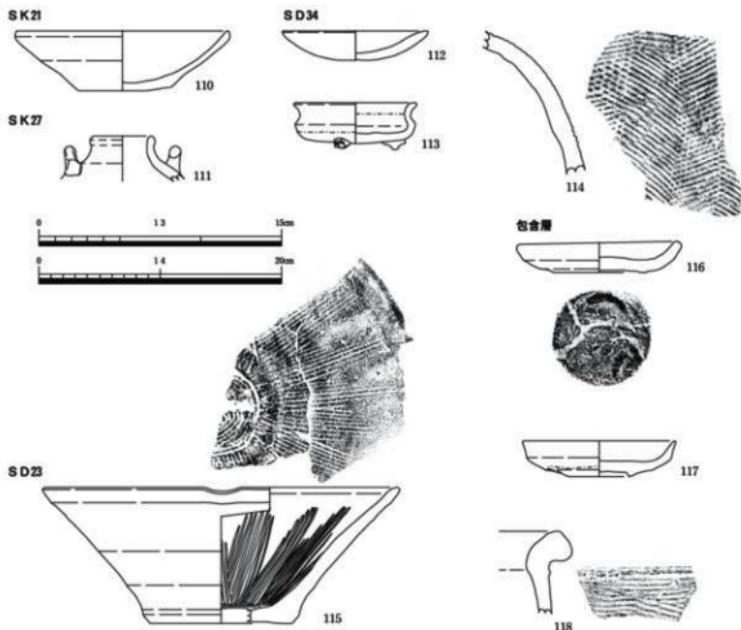


第25図 上梅沢遺跡 遺物実測図 (1/4)
S I 4 (72~74) S I 5 (75~79) S I 6 (80~87)

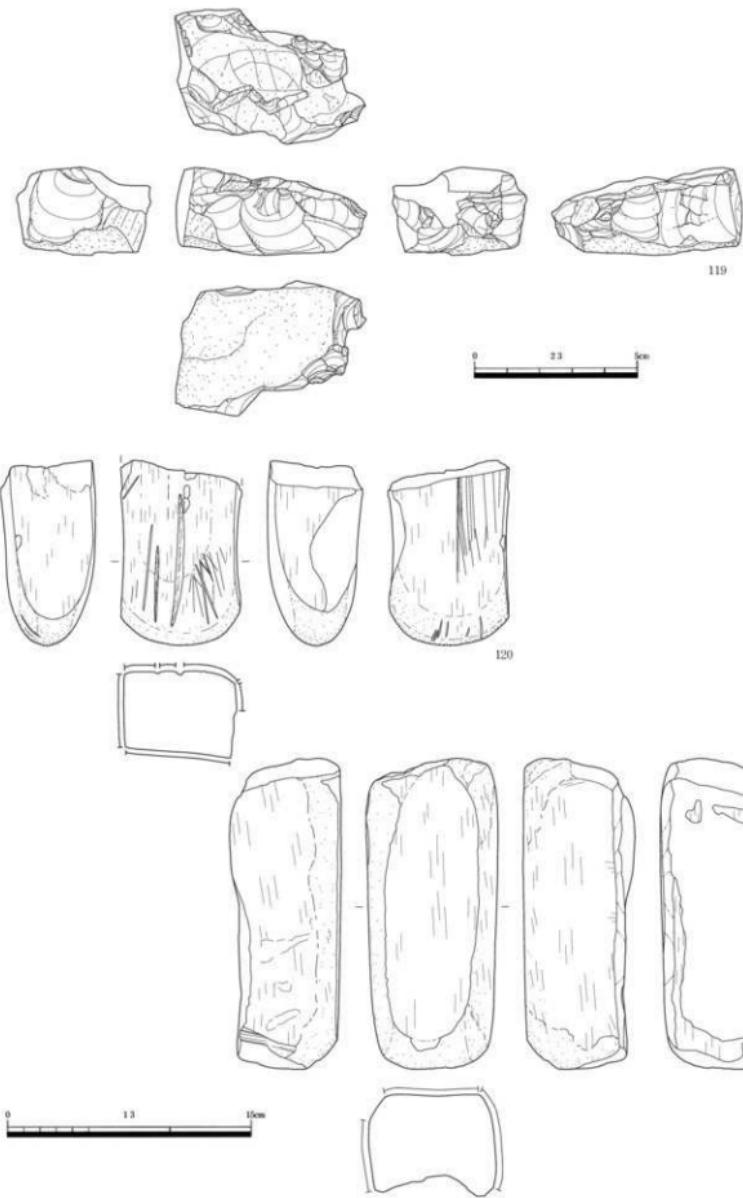


第26図 上梅沢遺跡 遺物実測図 (1/4)

SP1089 (88) SD1008 (89) SD1019 (90) SD1060 (94) SD1109 (91) SD1117 (92) SD1121 (93)
包含層 (95~109)

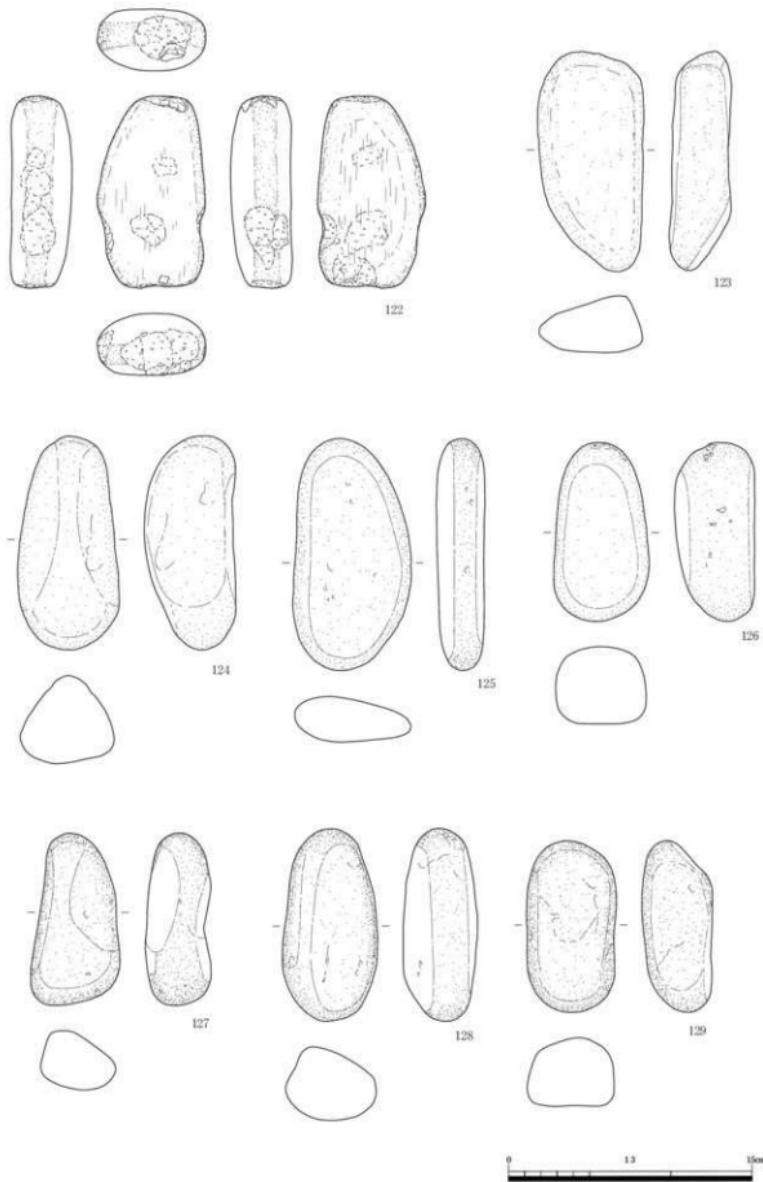


第27図 上梅沢遺跡 遺物実測図 (110~114・116~117 1/3, 115・118 1/4)
 SK21 (110) SK27 (111) SD23 (115) SD34 (112~114) 包含層 (116~118)



第28図 上梅沢遺跡 遺物実測図 (119 2/3, 120・121 1/3)

S I 3 (120) SK1188 (121) SD1155 (119)



第29図 上梅沢遺跡 遺物実測図 (1/3)

S 1 1 (123) S 1 2 (124) S 1 3 (125) S 1 4 (126・127) S 1 5 (128) S 1 6 (129) SK1028 (122)

5 自然科学分析

(1) 植物珪酸体分析

A はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プランツ・オバール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。

ここでは、上梅沢遺跡の古代から近世における農耕、植生および環境について、植物珪酸体分析により検討した。

B 試 料

調査対象は、A地区で検出された近世の溝（S D23）と中世の溝（S D34）、B地区で検出された古代の道路側溝（S D1122）、畠溝（S D1121、S D1120）、溝（S D1019）である。分析試料は、A地区では、近世の溝（S D23）の22層、24層、25層、26層より採取された4点、中世の溝（S D34）の3層、5層、6層より採取された3点、B地区では、北西壁において古代の道路側溝（S D1122）のⅢa層とⅢ層、古代畠溝（S D1121）のⅢ層、古代畠溝（S D1120）のⅢ層より採取された4点、南東壁において古代溝（S D1019）埋土より採取された1点の計12点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

C 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスピーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（ $550^{\circ}\text{C} \cdot 6$ 時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-6}g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山, 2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

D 分析結果

a : 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第5表および第30図1～4に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、シバ属、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科—タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

その他

b : 植物珪酸体の検出状況

1) A 地区溝 S D23（近世）

9 層から 7 層にかけては、イネが多く検出され、ミヤコザサ節型なども認められた。イネの密度は、9 層と 8 層では 5,800 個/g および 5,500 個/g と高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている 5,000 個/g（状況により 3,000 個/g とする場合もある）を上回っている。また、2 6 層でも 3,800 個/g と比較的高い値である。22 層では、イネが大幅に増加し、ヨシ属、シバ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、樹木（その他）なども認められた。イネの密度は 12,900 個/g とかなり高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、各層ともイネが優勢となっている。

2) A 地区溝 S D34（中世）

6 層から 3 層にかけては、イネ、ネザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出され、部分的にシバ属、ウシクサ族Aなども認められたが、いずれも比較的少量である。イネの密度は、5 层では 3,100 個/g と比較的高い値であり、その他の層では 2,200～2,400 個/g と比較的低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、各層ともイネが優勢となっている。

3) B 地区北西壁

古代道路側溝（S D1122）のⅢ層とⅢa 層では、イネ、ヨシ属、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも比較的少量である。イネの密度は、Ⅲ層では 3,400 個/g と比較的高い値であり、Ⅲa 層では 2,400 個/g と比較的低い値である。

古代畠溝（S D1121, S D1120）のⅢ層では、イネ、ヨシ属、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも比較的少量である。イネの密度は、いずれも 700 個/g と低い値である。なお、ムギ類やヒエ属（ヒエが含まれる）などのイネ科栽培植物に由来する植物珪酸体は検出されなかった。

4) B 地区南東壁

古代溝 S D1019埋土では、イネ、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、樹木（その他）などが検出されたが、いずれも少量である。イネの密度は 700 個/g と低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、ヨシ属が優勢となっている。

E 考 察

a : A 地区溝 S D23（近世）

9 層～7 層の堆積当時は、周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で溝内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。5 層では調査地点で稲作が行われていたと考えられ、周辺の温潤なところにはヨシ属など、比較的乾燥したところにはシバ属、キビ族、ススキ属などが生育し

ていたと推定される。

b : A地区溝 S D34 (中世)

6層～3層の堆積当時は、周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で溝内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属(メダケ節やネザサ節)やササ属(おもにミヤコササ節)などの竹笹類、シバ属、ウシクサ族などが生育していたと考えられる。

c : B地区北西壁

古代道路側溝(S D1122)のⅢ層とⅢa層の堆積当時は、周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。遺構内はヨシ属が生育するような温潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはウシクサ族、ササ属(ミヤコササ節)などが生育していたと推定される。

古代畠溝(S D1121, S D1120)のⅢ層では、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと考えられる。同層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような温潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはウシクサ族、ササ属(チマキササ節やミヤコササ節)などが生育していたと推定される。

第5表 上梅沢遺跡における植物珪酸体分析結果

分類群	学名	A地区							B地区(北西壁)						B地区(南東壁)		
		溝			溝			古代道路側溝			古代畠溝			古代溝			
		SD23	SD34	SD23	SD34	SD1122	SD1121	SD1120	SD1019	3	4	5	6	7	8	9	
イネ科	Gramineae																
イネ	Oryza sativa	129	58	55	38	24	31	22	24	34	7	7	7	7	7	7	
ヨシ属	Polygonum	14									6	14	7	13	14		
シバ属	Zizaniopsis	7				8	18	7									
キビ族	Panicinae type	7	7													7	
ススキ族	Miscanthinae type	7														7	
ウシクサ族A	Audiomagnesia A type	14		8	18	14		30	23	7	33	42					
タケモ科	Bambusoidae																
メダケ節型	Pleiochloinae sect. Nipponocalamus					6		7									
ネザサ節型	Pleiochloinae sect. Nezumia					43	25	7	6								
チマキササ節型	Sasa sect. Sasa etc.															28	
ミヤコササ節型	Sasa sect. Crossinodi	7	7	8	18	19	7	18	14	49	7	14					
未分類等	Others	14	7	8	61	25	22	49	21	56	13	21					
その他イネ科	Others																
表皮毛起源	Husk hair origin	14	14		18	12	14	30	28							14	
棒状茎節体	Rod shaped	41	36	34	49	19	36	97	83	49	33	56					
茎部起源	Stem origin	7	7														
未分類等	Others	88	65	96	61	37	62	101	127	145	98	125	70				
樹木起源	Abooreal																
その他	Others	7														7	
総植物珪酸体数	Total	333	195	212	129	294	191	239	288	365	279	244	286				
おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m ² cm) : 試料の比重を1.0と仮定して算出																	
イネ	Oryza sativa	3.80	1.70	1.61	1.11	0.72	0.91	0.64	0.71	1.01	0.20	0.19	0.21				
ヨシ属	Polygonum	0.86							0.38	0.87	0.44	0.83	0.88				
ススキ族	Miscanthinae type	0.06											0.08	0.09			
メダケ節型	Pleiochloinae sect. Nipponocalamus					0.07		0.08									
ネザサ節型	Pleiochloinae sect. Nezumia					0.21	0.12	0.03	0.03								
チマキササ節型	Sasa sect. Sasa etc.												0.05	0.05	0.05	0.21	
ミヤコササ節型	Sasa sect. Crossinodi	0.02	0.02	0.02		0.06	0.06	0.02	0.05	0.04	0.15	0.02	0.04				
カケモ科の比率(%)	Medakae ratio	21	60														
メダケ節型	Pleiochloinae sect. Nipponocalamus					62	68	25	35								
ネザサ節型	Pleiochloinae sect. Nezumia																
チマキササ節型	Sasa sect. Sasa etc.																
ミヤコササ節型	Sasa sect. Crossinodi	100	100	100	17	32	15	65	44	74	29	17					
メダケ率	Medakae ratio	0	0	0	53	68	85	35	0	0	0	0					

d : B地区南東壁

古代墳S1019の埋土の堆積当時は、周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。遺構内はヨシ属が生育するような温潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはキビ族、ススキ属、ウシクサ族、ササ属（チマキザサ節やミヤコザサ節）などが生育していたと推定される。また、遺跡周辺には何らかの樹木が生育していたと考えられる。

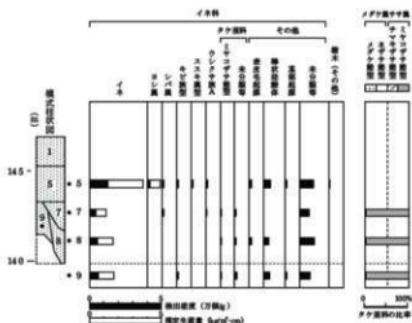
文献

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古墳境推定の基礎資料として一、考古学と自然科学、19, p.69-84.

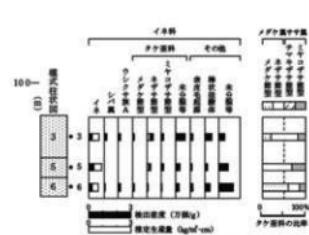
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社, p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法一、考古学と自然科学、9, p.15-29.

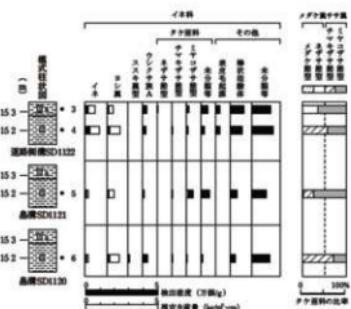
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－、考古学と自然科学、17, p.73-85.



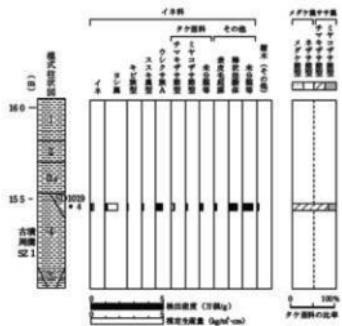
1：上梅沢遺跡A地区墳SD023における植物珪酸体分析結果



2：上梅沢遺跡B地区墳SD041における植物珪酸体分析結果



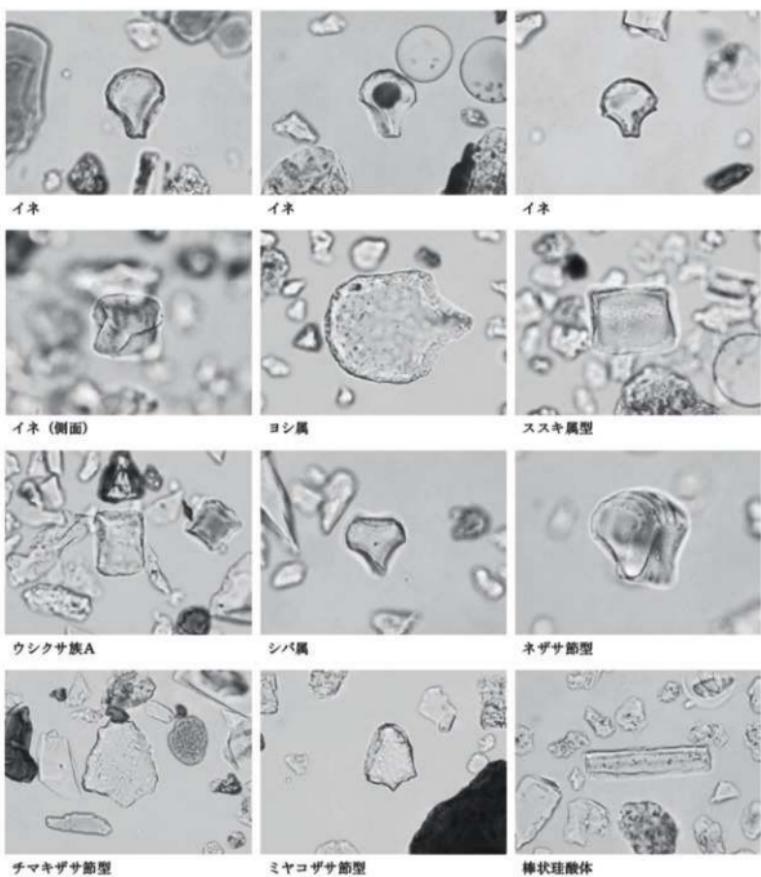
3：上梅沢遺跡B地区北壁における植物珪酸体分析結果



4：上梅沢遺跡B地区南東壁における植物珪酸体分析結果

第30図 上梅沢遺跡の植物珪酸体分析結果

上梅沢遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）

— 50 μ m

(2) 花粉分析

A はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

ここでは、上梅沢遺跡において花粉分析を行い、古墳時代初頭、古代、中世および近世における農耕、周辺植生さらに堆積環境について検討した。

B 試料

調査対象は、A地区で検出された近世の溝（SD23）と中世の溝（SD34）、B地区で検出された古代の道路側溝（SD1112）、畠溝（SD1121、SD1120）、溝（SD1019）、古墳時代初頭の周溝（SZ1）である。

分析試料は、A地区では、近世の溝（SD23）の9層、8層、7層、5層より採取された4点、中世の溝（SD34）の3層、5層、6層より採取された3点、B地区では、北西壁において古代の道路側溝（SD1122）のⅢa層とⅢ層、古代畠溝（SD1121）のⅢ層、古代畠溝（SD1120）のⅢ層より採取された4点、南東壁においてⅢa層、古代溝（SD1019）埋土、古墳時代初頭の周溝（SZ1）埋土の④層の上位と下位、⑤層より採取された5点の計16点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

C 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で穢など大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974、1977）を参考に、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。なお、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

D 結果

a : 分類群

出現した分類群は、樹木花粉20、樹木花粉と草本花粉を含むもの7、草本花粉20、シダ植物胞子2形態の計49である。これらの学名と和名および粒数を第6・7表に示し、花粉数が200個以上計数で

きた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基準とする花粉ダイアグラムを第31・32図に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示した。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、1分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

ツガ属、マツ属複維管束亞属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ヤナギ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亞属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属、ハイノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、トウダイグサ科、ウコギ科、ニワトコ属—ガマズミ属

〔草本花粉〕

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、タデ属、ギシギシ属、ソバ属、アザゼルヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属—フサモ属、チドメグサ亞科、セリ亞科、シソ科、タンボボ亞科、キク亞科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

日本海裂頭条虫（？） *Diphyllobothrium latum (nihonkaiense)* (?)

日本海裂頭条虫は、北半球に分布し、特に北欧、北米、東北アジア地域に多い。卵の大きさは、66～75×45～53 μmで楕円形、小蓋がある。ケンミジンコ類などの第1中間宿主を経て、第2中間宿主のマスやサケの生食によって感染する。

b : 花粉群集の特徴

1) A地区溝S D23 (9層、8層、7層、5層)：近世・第31図-1

花粉構成と花粉組成の変化について、下位より特徴を記載する。

9層では、樹木花粉と草本花粉の占める割合がほぼ同程度で、シダ植物胞子が約15%を占める。樹木花粉ではマツ属複維管束亞属、ハンノキ属を主に、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クリ、コナラ属コナラ亞属などが低率に出現する。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が優占し、カヤツリグサ科、アブラナ科、タンボボ亞科、ヨモギ属などが伴われる。

8層では、花粉構成と花粉組成とともに24層と類似した傾向を示す。樹木花粉ではハンノキ属、マツ属複維管束亞属を主に、スギ、コナラ属コナラ亞属などが出現する。草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科が伴われ、アブラナ科、タンボボ亞科、ヨモギ属などが低率に、ソバ属がわずかに出現する。

7層では、花粉密度が極めて低くなり、ほとんど検出されない。

5層では、樹木花粉、草本花粉、シダ植物胞子がほぼ同じ割合になる。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が増加し、カヤツリグサ科、アブラナ科、タンボボ亞科、ツリフネソウ属、ヨモギ属などが出現する。樹木花粉ではスギ、クリ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が増加し、マツ属複維管束亞属、ハンノキ属が減少する。日本海裂頭条虫（？）がわずかに出現する。

2) A地区溝S D34 (6層、5層、3層)：中世・第31図-2

花粉構成と花粉組成の変化について、下位より特徴を記載する。

6層と5層では、草本花粉の割合が高く約70%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、タンボポ亜科、アブラナ科などが伴われる。樹木花粉ではクリ、ハンノキ属、スギ、マツ属複雑管束亜属、コナラ属コナラ亜属などが低率に出現する。

3層では樹木・草本花粉のクワ科ーイラクサ科が特徴的に増加する。

3) B地区北西壁・第32図-1

①古代道路側溝S D1122（III層、IIIa層）

III層では、草本花粉の割合が高く、約65%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属が高率に出現し、次いでアザゼ科ヒユ科が多く、他にカヤツリグサ科、セリ亜科、タンボポ亜科、キク亜科などが低率に出現する。樹木・草本花粉ではクワ科ーイラクサ科がやや多い。樹木花粉ではハンノキ属、スギ、コナラ属コナラ亜属などが低率に出現する。

IIIa層では、草本花粉の占める割合が増加する。とくにイネ科（イネ属型を含む）が増加し、ソバ属がわずかに出現する。樹木・草本花粉のクワ科ーイラクサ科、樹木花粉のハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキが減少する。

②古代畠溝S D1121（III層）

草本花粉の割合が高く、約65%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属が高率に出現し、次いでアザゼ科ヒユ科が多い。他にカヤツリグサ科、キク亜科、ナデシコ科などが低率に出現する。樹木花粉ではハンノキ属、スギ、クリ、コナラ属コナラ亜属、樹木・草本花粉のクワ科ーイラクサ科が低率に出現する。

③古代畠溝S D1120（III層）

草本花粉の割合が高く、約70%を占める。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が高率に出現し、アザゼ科ヒユ科、キク亜科、アブラナ科などが伴われる。樹木花粉ではハンノキ属、スギ、クリ、コナラ属コナラ亜属、樹木・草本花粉のクワ科ーイラクサ科が低率に出現する。

4) B地区南東壁・第32図-2

古墳初頭周溝S Z 1埋土（⑤層、④層）、古代溝S D1019埋土、古代以降遺物包含層IIIa層について、下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

⑤層では、花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

④層では、草本花粉の占める割合が高く約50~65%を占め、下位ではシダ植物胞子が約25%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、次いでヨモギ属が多い。樹木花粉ではハンノキ属、スギ、コナラ属コナラ亜属などが出現する。

S D1019埋土では、樹木花粉の占める割合がやや増加する。樹木花粉ではハンノキ属、クリ、トチノキ、樹木・草本花粉のクワ科ーイラクサ科が微増する。草本花粉ではヨモギ属、アザゼ科ヒユ科、アブラナ科が増加し、イネ科、カヤツリグサ科が減少する。

IIIa層では、草本花粉が約70%を占め、とくにイネ科（イネ属型を含む）、カヤツリグサ科が増加する。また、ソバ属がわずかに出現する。

E 花粉分析から推定される植生と環境

それぞれの地点において花粉群集の特徴から植生と環境の復元を行う。

a : A地区溝S D23（9層、8層、7層、5層）

9層の時期は、近隣の森林はマツ属複雑管束亜属、ハンノキ属が優勢で、アカマツ二次林が形成さ

れ、低温なところにハンノキが湿地林として分布していた。堆積地周辺は、イネ科を主にカヤツリグサ科、アブラナ科、タンポポ亜科などが伴われる草本の多い環境であった。いずれも人里植物ないし耕地雑草の性格をもつ草本であり、人為環境が分布していたとみなされる。8層は9層と類似した花粉群集を示すことから、9層の時期と植生や環境に大きな変化はなかったと考えられる。栽培植物を多く含むアブラナ科、ソバ属がわずかに出現し、アブラナなどのアブラナ科植物やソバの畑作が行われていた。7層の時期は、花粉密度が極めて低くなり、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥した堆積環境であったか、堆積速度が速かったと考えられる。5層の時期は、イネ科にイネ属型が伴わることから、周辺において水田の分布が示唆される。

b : A地区溝S D34

6層と5層の時期は、イネ科（イネ属型を含む）が高率に出現しており、堆積地周辺には水田が分布していた。カヤツリグサ科、ヨモギ属、タンポポ亜科、アブラナ科などの草本がこれらの周囲に生育していたとみなされる。3層の時期は、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科が特徴的に増加する。生態上路傍や荒れ地に生育するカナムグラやカラムシなどの草本が考えられ、これらが溝の周囲に群生していたとみなされる。

近隣の森林は、マツ属複維管束亜属、スギの針葉樹林とクリ、ハンノキ属などを構成要素とする落葉樹林が分布していたと推定される。クリが多いことから二次林と考えられる。

c : B地区北西壁

1) 古代道路側溝S D1122

Ⅲ層の時期は、イネ科と乾燥した環境を好むヨモギ属、アカザ科-ヒユ科などの草本が主に生育する環境であり、他にカヤツリグサ科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科などの草本も混在していたとみなされる。樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科は、生態上草本のカラムシ、カナムグラなどが考えられる。周辺の森林には、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹とスギ林が分布していた。

Ⅲa層の時期になると、ハンノキ属が減少しイネ属型が増加することから、ハンノキ林が縮小し水田が拡大したと考えられる。また、ソバ属の出現からソバの畑も分布していた。

2) 古代畠溝S D1121

古代道路側溝S D1122のⅢ層とほぼ同じ花粉の出現傾向を示し、イネ科、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科を主とする草本の多い環境であったと考えられる。近隣の森林も同様にハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹とスギ林が分布していたと推定される。明らかな栽培植物は不明であるが、イネ科に含まれる雑穀類の栽培の可能性が考えられる。

3) 古代畠溝S D1120

古代道路側溝S D1122のⅢ層や古代畠溝S D1121のⅢ層とほとんど同じ状況であり、イネ科とヨモギ属が極めて多い。これらは同時期の堆積であると考えられる。

d : B地区南東壁

古墳時代初頭の周溝S Z 1⑤層の時期は、花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥した堆積環境であったか、堆積速度が速かったと考えられる。同④層の時期は、溝の周囲にイネ科、ヨモギ属などの草本が繁茂していたと考えられる。なお、④層上部ではイネ属型が出現し水田の分布も示唆される。近隣にはスギ林、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属を主要要素とする落葉樹林が生育していたとみなされる。

古代溝のS D1019の時期は、湿地林を形成するハンノキ属と、二次林要素のクリが増加する。人里植物であり耕地雑草でもあるクワ科—イラクサ科、ヨモギ属、アザ科—ヒユ科、アブラナ科が増加し、近接して人為環境が分布していた可能性が示唆される。

Ⅲa層の時期になると、雑草が減少する一方イネ属型が増加し、ソバ属も出現することから、農耕の集約性が高くなつたと推定される。

F まとめ

a：近世（A地区溝S D23）

樹木が比較的多く、アカマツ二次林が成立し、ハンノキ属の湿地林が分布していた。周囲には人里植物ないし耕地雑草の性格をもつ草本が繁茂していた。

b：中世（A地区溝S D34）

草本が多く、とくにイネ科（イネ属型を含む）が極めて多い。調査地周辺には水田が分布していた。樹木ではクリとハンノキ属が主となり、アカマツ二次林成立以前の二次林とみなされるが、樹木は少なく疎林化していたと考えられた。

c：古代以降（B地区北西壁）

古代道路側溝S D1122、古代畠溝S D1121、古代畠溝S D1120では、優勢する草本は同じ傾向を示し、イネ科と乾燥した環境を好むヨモギ属、アザ科—ヒユ科を主とする草本が分布していた。道路側溝および畠溝は、雨水が流れる以外は乾燥していたか、やや湿った程度の状況であったとみなされた。栽培植物としては古代道路側溝S D1122のⅢa層からソバ属が検出されており、また、各試料で優占するイネ科には雑穀類が含まれることから、それらの畑作の可能性が考えられた。

d：古墳時代以降（B地区南東壁）

古墳時代初頭の周溝S Z 1では、イネ科とヨモギ属が多く、周辺にはこれら草本が生育し、やや乾燥した環境であった。古墳周溝は湿った程度の環境であった可能性が示唆された。Ⅲa層の時期は雑草が減少し、イネ属型の増加とソバ属の出現から、農耕の集約性が高くなつたと推定された。

（株式会社古環境研究所 杉山真二・金原正子・松田隆二）

参考文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店、p.248-262。

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然博物館収蔵目録第5集、p.60。

中村純（1967）花粉分析。古今書院、p.82-102。

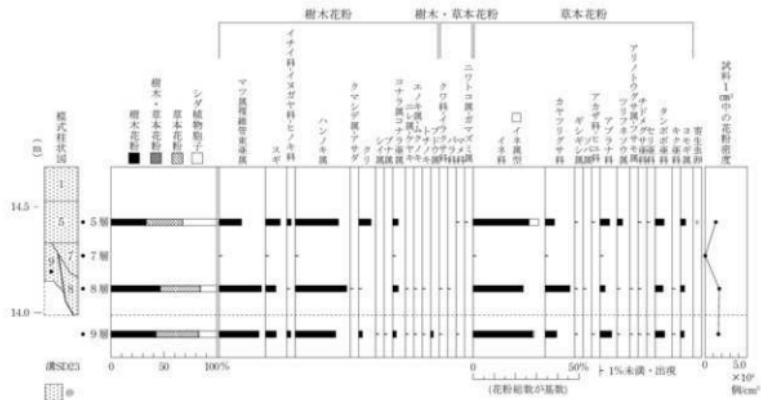
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として。第四紀研究、13、p.187-193。

中村純（1977）稻作とイネ花粉。考古学と自然科学、第10号、p.21-30。

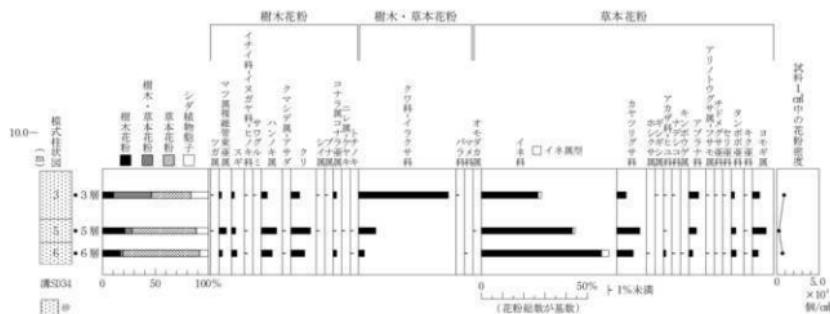
中村純（1980）日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集、p.91。

上梅沢遺跡A地区における花粉分析結果

第7表 上梅沢遺跡B地区における花粉分析結果

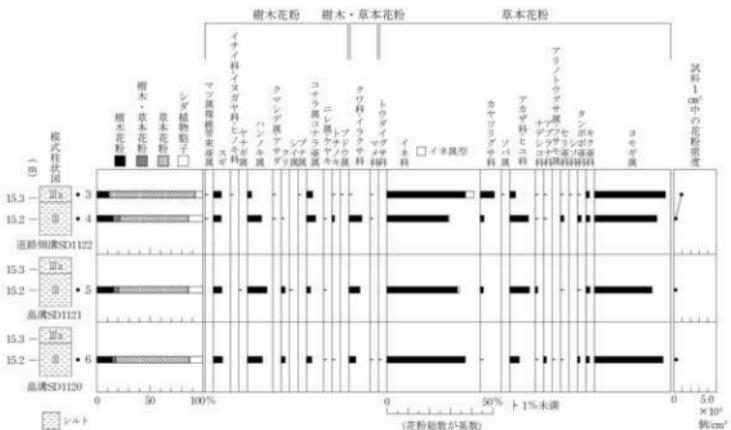


1：上梅沢遺跡A地区構SD23における花粉ダイアグラム

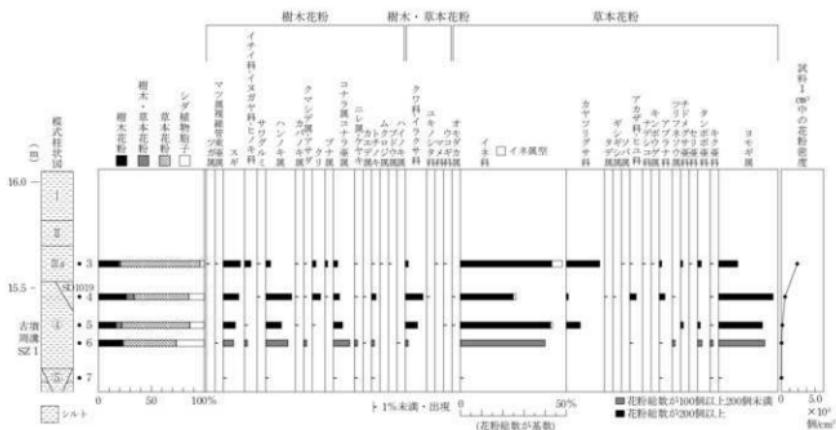


2：上梅沢遺跡A地区溝SD34における花粉ダイアグラム

第31図 上梅沢遺跡の花粉ダイアグラム（1）

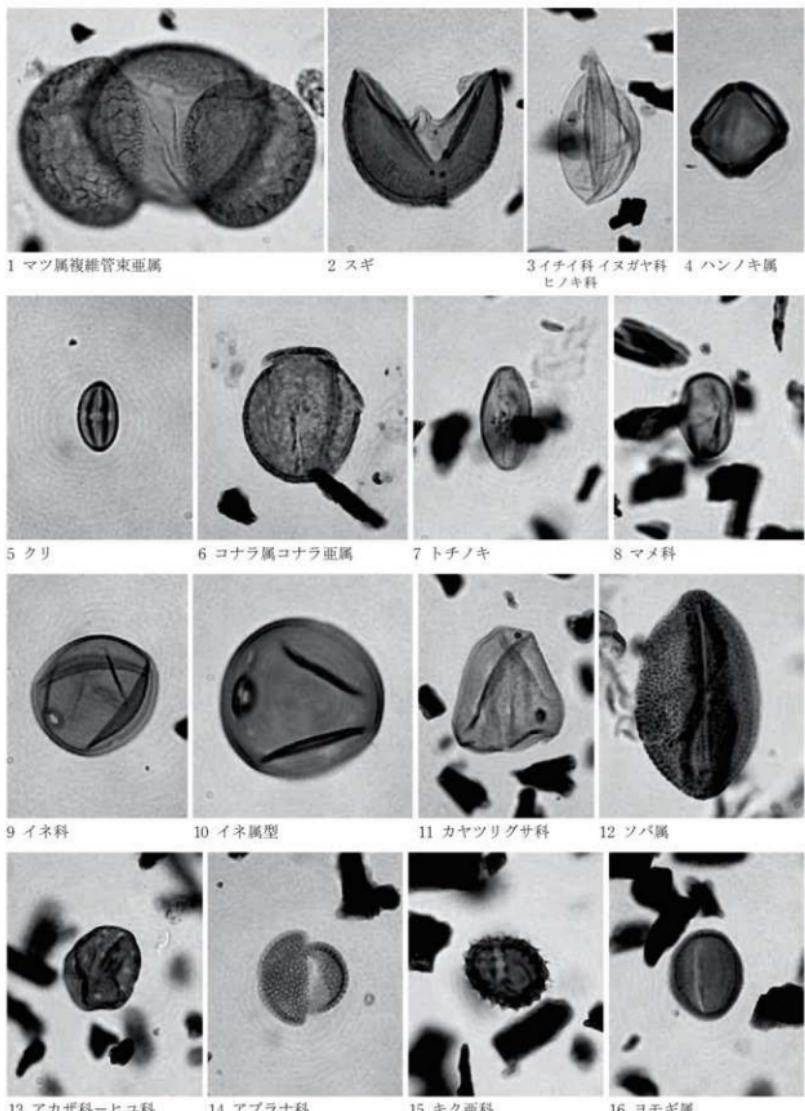


3：上梅沢遺跡B地区北西壁における花粉ダイアグラム



4: 上梅沢遺跡B地区南東壁における花粉ダイアグラム

上梅沢遺跡の花粉

— 10 μ m

(3) 石材鑑定

A はじめに

上梅沢遺跡は早月川扇状地に立地する。本報告では、石材鑑定結果と、前述した各遺跡の地理的位置および地質学的背景を参考として、石材の由来について検討を行った。

B 試 料

鑑定対象とされた石器・石製品は、弥生～古墳時代の石核1点、飛鳥時代の編物石6点、砥石1点、奈良時代の石錐・敲石1点および砥石1点の計10点である。各試料の詳細（実測番号、台帳番号、遺構コード、出土地点等）は、鑑定結果とともに表1に示した。また、確認された石質（岩種）のうち、代表的なものについては写真撮影を行い、写真図版に示した。

C 分析方法

鑑定は、野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。

D 結 果

石質の鑑定結果を第8表、種類および時代別に集計した石材組成を第9表に示す。

出土石材は、深成岩類の角閃石黒雲母花崗岩1点、黒雲母角閃石花崗岩1点、角閃石花崗閃緑岩1点および破碎状花崗岩1点、火山岩類の流紋岩1点、輝石安山岩（新第三紀）1点およびかんらん石輝石玄武岩1点、堆積岩類の砂岩1点および頁岩1点、変成岩類の花崗岩マイロナイト1点と鑑定された。なお、輝石安山岩については、変質鉱物の有無等から新第三紀の地質に由来すると判断されるものに「新第三紀」と付記した。

E 考 察

上梅沢遺跡は、中新川郡上市町を流れる上市川右岸の早月川扇状地上に位置する。遺跡周辺において採取できる石材は、上市川水系の地質のほかに、早月川水系の地質に起源していると考えられる。早月川や上市川流域の地質については、山田ほか（1989）の20万分の1地質図「高山」や原山ほか（1996）の20万分の1地質図幅「富山」に概略が示されている。これらに基づくと、上市川および早月川の上流域は、ジュラ紀の船津花崗岩類が主要な地質となっている。早月川においては、古生代中-末期の飛騨変成岩類も随伴している。中流域においては、前期白亜紀の堆積岩類を主体とする手取層群や流紋岩質凝灰岩等を含む古第三紀の太美山層群が小規模に分布する。これらを覆って中～下流域には、中新統が広く分布している。この地域の主要な中新統は、岩船層、黒瀬谷層、上滝砂岩層等であり、安山岩質の火砕岩類・溶岩、礫岩、砂岩、泥岩等が主要構成岩類となっている。

上市川および早月川の地質背景を考慮すると、出土石材はすべて在地性の石材が使用されていると考えることができる。飛鳥時代の編物石に多く認められる深成岩類の花崗岩類および変成岩類の花崗岩マイロナイトは、上流域に分布する船津花崗岩類に起源する典型的な在地性石材とみることができる。奈良時代の砥石に使われている火山岩類の流紋岩は、太美山層群に由来する石材と推定される。その他、火山岩類の輝石安山岩（新第三紀）、かんらん石輝石玄武岩、堆積岩類の砂岩、頁岩等の石材は、中新統に由来していると考えられる。

（パリノ・サーヴェイ株式会社 石岡智武）

引用文献

原山 智・浅沢文教・加藤硝一（1996）20万分の1地質図幅「富山」、地質調査所。

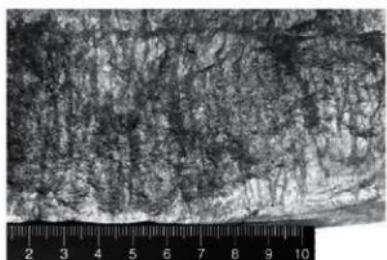
山田直利・野沢 保・原山 智・辻沢文教・加藤硝一・広島俊男・駒沢正夫 (1989) 20万分の1地質図「高山」、地質調査所。

第8表 上梅沢遺跡における石材鑑定結果

遺物番号	地区	遺構	出土地点	時 期	種 類	石 質	備 考
119	B	S D1155	X50Y54	弥生～古墳時代	石核	頁岩	
120	B	S I 3		飛鳥時代	砥石	砂岩	
121	B	S K1188		奈良時代	砥石	流紋岩	
122	B	S K1028	西鍋の小穴から	奈良時代	石錐・敲石	かんらん石輝石玄武岩	
124	B	S I 2	南西隅	飛鳥時代	編物石	角閃石花崗閃綠岩	
125	B	S I 3	北東隅	飛鳥時代	編物石	輝石安山岩(新第三紀)	
126	B	S I 4	北西隅	飛鳥時代	編物石	角閃石黑雲母花崗岩	
127	B	S I 4	北西隅	飛鳥時代	編物石	黑雲母角閃石花崗岩	
128	B	S I 5	北西隅	飛鳥時代	編物石	破碎状花崗岩	
129	B	S I 6	南西隅	飛鳥時代	編物石	花崗岩マイロナイト	

第9表 上梅沢遺跡出土石器・石製品の種類別石材組成

弥生～古墳	飛鳥時代				奈良時代	合計
	石核	編物石	砥石	石錐・敲石		
深成岩類						
角閃石黑雲母花崗岩	-	1	-	-	-	1
黒雲母角閃石花崗岩	-	1	-	-	-	1
角閃石花崗閃綠岩	-	1	-	-	-	1
破碎状花崗岩	-	1	-	-	-	1
火山岩類						
流紋岩	-	-	-	-	1	1
輝石安山岩(新第三紀)	-	1	-	-	-	1
かんらん石輝石玄武岩	-	-	-	1	-	1
堆積岩類						
砂岩	-	-	1	-	-	1
頁岩	1	-	-	-	-	1
変成岩類						
花崗岩マイロナイト	-	1	-	-	-	1
合計	1	6	1	1	1	10



06KU 121 I090301
奈良時代 砥石 流紋岩



06KU 127 I090320
飛鳥時代 編物石 黒雲母角閃石花崗岩

6 総 括

(1) 遺構変遷

上梅沢遺跡ではA地区で中近世、B地区で弥生時代後期～奈良時代の遺構を検出した。特にB地区では主要な遺構が、長期間に渡って形成されており、ここではB地区的遺構変遷をまとめておきたい。

B地区では、調査前に宅地があったため上面を削平や攪乱されている部分がいくつかあったが、滑川市内で数少ない弥生時代～古代の集落や墓域に關係する遺構が見つかった。遺構は大きく四つの時期に分けることができ、各時期によって性格も異なる（第33図）。

①弥生時代後期～古墳時代初頭 一墓域一

調査区中央より北側に分布する。遺構は弥生時代後期前半の天王山式系統の土器を埋設した土坑1基（S X1193）、弥生時代終末期～古墳時代初頭の円形周溝墓2基（S Z1・2）がある。遺跡の出現から古墳時代初頭までは墓域であった。

②飛鳥時代 一集落域一

前時期と同様に、調査区中央より北側に分布する。遺構は方形の竪穴建物6棟（S I 1～6）があり、集落が形成される。

竪穴建物は6棟あり、いずれも約5m四方の方形でほぼ北に主軸、南東部にカマドを持ち、S I 2を除き4本主柱穴など共通点が多くある。6棟は切り合いがなく、千鳥格子状の規則的に並び、出土土師器も同様であることから同時期併存と考えられる。この時期の竪穴建物が複数みられる例は県内では数少ない。また、カマド内部や周辺から土師器の甕・瓶や土製支脚、壁際に編物石がまとまっているなど竪穴内で使用されたままもしくは置かれたままに残っており良好な遺物出土状況も特筆すべきである。つまり、これらの建物群は同時期に併存・廃絶したことになる。この要因の一つとしてS I 5のみが炭化材が出土しており、火災が考えられる。ただし、焼土層があるわけではなく土師器や編物石にもその痕跡はないので激しい火災ではなかったのだろう。いずれにせよ、この後50年以上はこの地に人の住まいは築かれなかった。

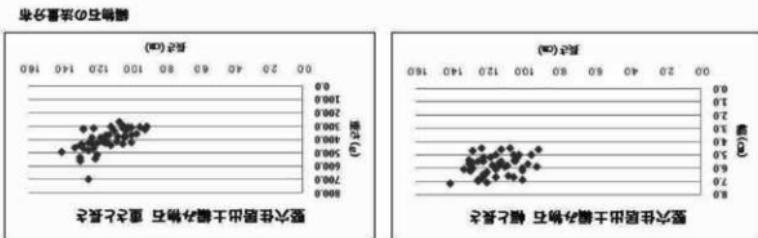
飛鳥時代の竪穴建物から出土する細長い自然礫については、編物石と考えられることは先述した（本章：3 遺構を参照）。上梅沢遺跡から出土した編物石の石材はすべて花崗岩質で、近隣の上市川や早月川などで採取可能な在地石材である。そのサイズは多少ばらつきがあるものの建物を異にしてもほぼ揃っており、建物の並びや遺物の時期から同一の集団が同一の時期に使用していたものと考えられる。編物石の用途は製品としては出土していないが、渡辺誠氏の分類（渡辺1981）によれば米俵・炭俵およびムシロ・各種のコモ・ミノ・ウエなどの第3群（重量160～300g）と雪囲いズやエリズなどの大型製品の第4群（重量360～880g）に相当する。これは民具の調査から考えられたもので飛鳥時代まで遡るものかどうかは不明である。しかし、少なくとも竪穴建物内か近辺でなんらかの編物をしていたのは確かであろうからその生活様式を考える上でヒントとなるだろう。

③奈良時代1 一生産域一

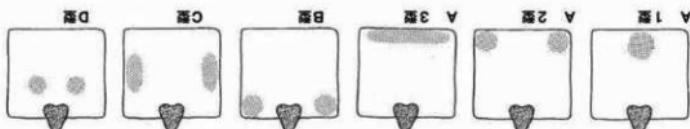
調査区ほぼ全域に分布する。遺構は構・土坑がある。溝はほぼ同規模で、南北方向が多いが一部で東西方向と交差する。埋土の花粉分析と植物珪酸体分析結果からイネ科植物を主体とする畠状遺構とみられる。西端にはこの並びと併行して2条1対の溝が2か所南北に走り道路状遺構（S F 1）と考えられる。建物はなく、東西南北方向に軸を揃えた整然とした畠を中心とする生産域となる。

④奈良時代2 一集落域一

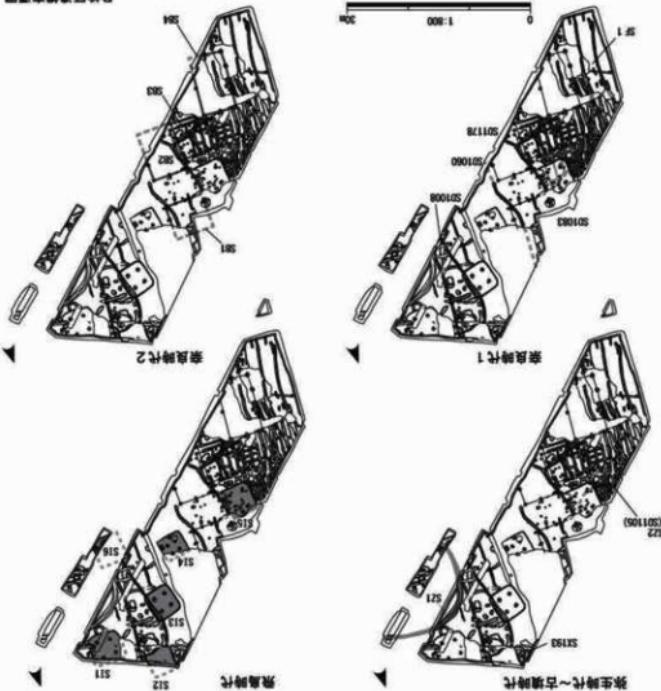
第33圖 上海某地區土壤分佈圖



(6661) 天王母聖母主教座堂



四庫全書



前時期の直後と考えられ、調査区ほぼ全域に分布する。遺構は掘立柱建物4棟（SB1～4）、溝、土坑である。

掘立柱建物は調査区中央より西側に立地する。南北方向に長軸を持つSB1・4と東西方向に長軸を持つSB2・3の2時期が考えられるが新旧関係は不明である。ただし、SB2を中心とみるとSB1・4がほぼ等間隔に位置しており、並びもいいことから同時期かもしれない。そうなればSB1・2・4とSB3とに分かれて時期差があることになる。いずれにせよ柱列構造が底のない側柱式で倉庫や特殊な建物ではなく一般的な集落であると言えよう。

（町田賢一）

（2）飛鳥時代の土器群

今回の調査で検出された飛鳥時代の竪穴建物の中でも、SI1では土器組成が把握できる一括資料が出土している。また、大部分が調査区外となるが、SI6もそれに準ずる資料と言えよう。以下、各竪穴建物出土の土器群（第34図）について、その様相や特徴をまとめておきたい。

A 竪穴建物毎の土器群とその出土状況

SI1では煮炊具の長胴甕2点、球胴甕1点、小型甕2点、瓶1点があり、土製支脚1点が伴う。食器は碗1点、鉢1点、高杯1点からなる。長胴甕（55）と土製支脚（61）はカマド内に設置された状態で出土しており、使用状況に近い。小型甕（57）もカマド内に設置されていた可能性がある。その場合、カマド内の奥には長胴甕と支脚、その手前には小型甕といった使用状況が復元される。こうしたカマド内に煮炊具を縦位並に設置するあり方は、全国的なカマドの検討（杉井1992）でも僅かな事例しか挙げられていない。57の出土位置を使用時とするか、建物廃絶時の片付け行為の結果とするかによって評価は分かれよう。長胴甕（56）と瓶（60）はカマド右脇⁽¹⁾にあり、保管状況を示す。56は被熱痕と器面の剥離が顕著で、ある程度の使用期間を経たものとみられる。竪穴南西隅にある球胴甕（59）はミガキを施し、貯蔵具の可能性もある。出土位置も他の甕がカマド周辺なのに對し、59のみ離れることも、用途の違いを反映している可能性を考える。鉢（63）・高杯（62）・小型甕（58）は竪穴内の西寄りに位置する地床炉K1周辺に分布する。小型甕のみでなく、食器も地床炉周辺にあり、地床炉による簡易な調理などの使用形態を示すと思われる。ただし、廃絶時の遺棄を考えるならば、竪穴廃絶時の祭祀行為も視野に入れておく必要があろう。このようにSI1の土器群はカマド内や床面上から出土しており、竪穴建物の廃絶時に遺棄されたと考えられる。カマド内の小型甕や地床炉周辺の土器はさらに検討を要するが、他はほぼ使用時の状況に近いものと思われる。

SI6ではカマド内からは長胴甕（82）が出土するが、支脚も無いことや他の土器に比べて遺存度も低いことから、竪穴埋没時の混入と思われる。カマド右脇には長胴甕（80）や小型甕（81・84・85）が、カマド左脇には碗（86・87）が床面上から出土する。

SI2・3・4では土器の出土は少なく、床面上の出土でも破片であり、土器組成は把握できない。ただ、注目しておきたいのはSI4の瓶（73）の出土状況である。カマド右脇からやや離れた位置の床面上にあり、削平により下半が欠いている。SI4からは多くの軽石が遺棄された状態で出土しており、73も最終的な竪穴廃絶時の状況に近いと考えられる。

SI5では土器の出土量は少ないものの、カマド内に支脚（79）があり、小型甕（75）がカマド右脇、瓶（77）が竪穴南西隅の床面上から出土している。

B 上梅沢遺跡における飛鳥時代の土器組成

以上のように、各竪穴建物の土器を概観した。出土状況を踏まえ、SI1の出土土器群は一括性が高いものと判断される。甕・瓶の煮炊具とそれに伴う土製支脚、鉢・高杯の食器からなる。SI6で

	甕(長嗣)	壺(球腹)	壺(小型)	瓶	支脚	碗・鉢	高杯
S 1.1							
S 1.2							
S 1.3							
S 1.4							
S 1.5							
S 1.6							
	</						

は瓶を欠くが、煮炊具・食器の構成が判る。他の堅穴建物では出土量が少ないと判然しないが、残された器種にS I 1・6のような土器組成の一例を見ることが出来る。

ここで、県東部における同時期の土器と比較しておきたい。出土例として北堀切遺跡（黒部市教育委員会 2007）、竹内東芦原遺跡（舟橋村教育委員会 2002）、利田横枕遺跡（立山町教育委員会 2001、舟橋村教育委員会 2001）がある。

北堀切遺跡では7世紀前半とされる堅穴建物S I 2に袖部に礎を多用したカマドが造り付けられ、支脚礎上に甕が設置されている。その他に堅穴内から甕が3点、包含層中から須恵器Hが出土する。

竹内東芦原遺跡では6世紀後半～7世紀前半の堅穴建物S I 1で、袖部先端に円筒形土器を用いたカマドが造り付けられる。カマド内や周辺から甕、他に堅穴内から碗・鉢と滑石製勾玉が出土する。

利田横枕遺跡では6世紀末～7世紀前半に集落が形成され、掘立柱建物2棟、堅穴建物3棟、素掘り井戸1基が検出される。堅穴建物からは須恵器Hや土師器甕・把手付鍋が出土し、包含層中からは甕や土製カマドも出土する。7世紀初頭の素掘り井戸SK 19からは製塙土器が集中的に出土する。

以上の様に、当該期の土器群では遺跡によって須恵器の有無があり、中心となる土師器は主に甕・瓶・鉢・碗となる。一括性の高いものとしては竹内東芦原遺跡S I 1があるが、堅穴の半分を欠いた検出状況である。利田横枕遺跡SK 19では製塙土器を中心に須恵器・土師器の出土もあるが、いずれも破片である。こうした中、上梅沢遺跡における土器群は、須恵器を伴っていないが、当該期の土器組成を端的に示す事例と言えよう。

また、上梅沢遺跡では堅穴内の利用形態を考える上でも良好な事例と言える。例えば、カマド周辺に出土する煮炊具では、S I 1・5・6のようにカマド右脇が多く、その保管状況を示唆する。甕が含まれる場合は、カマドよりやや離れ、カマド前面に位置する主柱穴近くの壁際付近であることがS I 1・4で認められる。一方、S I 5の甕はカマド対面の壁面近くであり、保管状況に堅穴毎の違いがあったことを示すが、いずれにしてもカマドの脇というより、距離を置くことは一致する。このように幾つかの屋内利用のあり方を見る事ができる。

なお、甕の特徴として、底部付近の小孔がある。この小孔は桟木を渡し、甕の子もしくは内容物の落下を防止する機能を想定する。こうした小孔のある甕は、県内では柄谷南遺跡（富山市教育委員会 2002）で2点報告されている。同遺跡は時期的に、後出するものである。周辺地域に目を転じると、新潟県の高田平野や新津丘陵で同時期の事例がある（春日 2007）。上梅沢遺跡の土器群では、甕の平底など東日本的な様相が認められ、小孔のある甕もそうした影響を考えておきたい。（青山 晃）

註

(1) カマド焚口側から見ての向きを示す。以降の本文中も同様である。

参考文献

- 春日真実 2007 「越後における古代の古代煮炊具について」『新潟考古第18号』新潟県考古学会
- 黒部市教育委員会 2007 「北堀切遺跡VI-1区発掘調査報告書」
- 杉井 健 1992 「甕研究の可能性—造り付け甕の地域性とその背景から—」『古墳時代の甕を考える』埋蔵文化財研究会立山町教育委員会 2001 「利田横枕遺跡」
- 富山市教育委員会 2002 「富山市 柄谷南遺跡発掘調査報告書III」
- 舟橋村教育委員会 2001 「富山県舟橋村 利田横枕遺跡発掘調査報告」
- 舟橋村教育委員会 2002 「富山県舟橋村 竹内東芦原遺跡発掘調査報告」
- 渡辺 誠 1981 「編み物用錐具としての自然石の研究」『名古屋大学文学部研究論集(史学)27』名古屋大学文学部

第10表 上梅沢遺跡 円形周溝墓一覧

遺構	地区	直径(m)	周溝(m)		出土遺物	備考	査定番号	写真回数
			幅	深さ				
SZ1	B	(17.50)	0.98	0.61	土師器・石製品	周溝に囲まれた内側にSK1250~1257(弥生間連施設?) < S16	9+10	12
SZ2	B	(7.00)	0.43	0.31	土師器	周溝に囲まれた内側にSD1105 < SD1109+SD1110+SD1116+SD1145+SD1219(古代漆器)	10	12

第11表 上梅沢遺跡 積穴建物一覧

建物	地区	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (m ²)	深さ (m)	方位	出土遺物	査定番号	写真回数
S11	B	(5.00)	(4.52)	22.74	0.24	N 90° E	土師器・石製品・石製品	11+14	13+15
S12	B	4.42	0.88	3.87	0.23	N 76° E	土師器・石製品	12+14	15
S13	B	5.08	4.74	24.08	0.14	N 76° E	土師器・石製品・石製品	12+14	15
S14	B	4.20	(3.08)	12.60	0.13	N 80° E	土師器・石製品・石製品	13+14	13+16
S15	B	(5.15)	4.88	24.90	0.24	N 85° E	土師器・石製品・石製品	15	14+16
S16	B	(4.80)	(4.88)	22.88	0.28	N 90° E	土師器・石製品	13+14	16

第12表 上梅沢遺跡 積穴建物柱穴・地床炉一覧

建物番号	遺構番号	規格(m)			種類	平面形	出土遺物	査定番号	写真回数
		長S	幅	深S					
S11	S11 P 1	0.57	0.45	0.72	柱穴	橢円			
	S11 P 2	0.60	0.49	0.57	柱穴	橢円			
	S11 P 3	0.50	0.40	0.60	柱穴	橢円			
	S11 P 4	0.63	0.540	0.76	柱穴	橢円			
	S11 P 5	0.29	0.18	0.18	柱穴	円			
	S11 P 6	0.41	0.27	0.10	柱穴	橢円			
S12	S12 K 1	0.40	0.35	0.06	地床炉	円			
	S12 P 1	0.56	0.40	0.20	柱穴	不規則			
S13	S13 P 1	0.65	0.50	0.74	柱穴	不規			
	S13 P 2	0.62	0.56	0.51	柱穴	円			
	S13 P 3	0.70	0.60	0.65	柱穴	円			
S14	S14 P 4	0.59	0.54	0.80	柱穴	不規			
	S14 P 1	0.54	0.47	0.56	柱穴	不規			
	S14 P 2	0.40	0.36	0.60	柱穴	不規			
	S14 P 3	0.58	0.51	0.42	柱穴	円			
	S14 P 4	0.40	0.38	0.50	柱穴	円			
S15	S15 P 5	0.66	0.29	0.09	柱穴	橢円			
	S15 P 1	0.38	0.24	0.25	柱穴	不規			
	S15 P 2	0.35	0.34	0.22	柱穴	円			
	S15 P 3	0.25	0.22	0.07	柱穴	円			
	S15 P 4	0.28	0.22	0.06	柱穴	円			
	S15 P 5	0.20	0.20	0.15	柱穴	円			
	S15 P 6	0.30	0.20	0.07	柱穴	橢円			
	S15 P 9	0.48	0.30	0.13	柱穴	橢円	>S15SP14		
	S15 P 10	0.35	0.28	0.08	柱穴	円			
	S15 P 11	0.28	0.22	0.07	柱穴	円			
S16	S15 P 12	0.32	0.28	0.11	柱穴	円			
	S15 P 13	0.40	0.37	0.51	柱穴	円			
	S15 P 14	(0.42)	(0.40)	0.56	柱穴	円			
	S15 P 15	0.50	0.50	0.58	柱穴	不規	< S15SP9		
	S15 P 16	0.49	0.49	0.63	柱穴	円	< S15SP7+8		
	S15 P 17	0.32	0.24	0.24	柱穴	橢円			
	S15 P 18	0.32	0.25	0.32	柱穴	橢円			
	S16 P 1	0.20	0.17	0.13	柱穴	円			
S16	S16 P 2	0.32	0.21	0.20	柱穴	橢円			

第13表 上梅沢遺跡 据立柱建物一覧

建物	地区	柱行 柱間	梁行 柱間	柱行 長(m)	梁行 長(m)	面積 (m ²)	方位	柱行柱間距離 (m)	梁行柱間距離 (m)	査定 番号	写真 回数
S1B1	B	3~3	3~3	(5.50)	(3.20)	(17.60)	N 90° E	1.75	1.70	2.10	16
S1B2	B	3	2	7.90	5.70	45.03	N 0°	2.60	2.50	2.80	16
S1B3	B	3	2	6.50	5.30	34.45	N 90° E	2.08	2.24	2.18	17
S1B4	B	4	2	9.30	5.50	52.25	N 5° E	2.50	2.30	2.50	2.70

第14表 上梅沢遺跡 据立柱建物柱穴一覧(1)

建物番号	柱穴番号	規格(m)			平面形	出土遺物	査定番号	写真回数
		長S	幅	深S				
SB1	SP 1055	0.55	0.40	0.26	橢円	土師器		
	SP 1057	0.48	0.48	0.25	円	土師器		17
	SP 1062	0.39	0.35	0.22	不規	土師器		16
	SP 1066	0.48	0.46	0.15	方	土師器		17
	SP 1084	(0.50)	(0.20)	0.36	方	土師器		17

第14表 上梅沢遺跡 堀立柱建物柱穴一覧 (2)

建物番号	柱穴番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考	補回番号	写真図版
		長さ	幅	深さ					
SB2	SP 1088	0.52	0.42	0.11	楕円	土師器			
	SP 1089	0.56	0.54	0.22	不規	土師器			17
	SP 1091	0.97	0.37	0.32	小盤	土師器			
	SP 1095	0.45	0.45	0.30	円	土師器		16	
	SP 1172	0.50	0.46	0.25	円				
	SP 1181	0.45	0.45	0.18	円				
	SP 1186	0.50	0.45	0.45	円	土師器			
SB3	SP 1151	0.55	0.40	0.64	不規	土師器			
	SP 1161	0.42	0.39	0.20	方	土師器	>SD1145		
	SP 1173	0.42	0.40	0.27	方	土師器・須恵器			17
	SP 1179	0.62	0.50	0.39	不規	土師器			
	SP 1192	0.52	0.43	0.43	方		>SK1188		
	SP 1200	0.46	0.46	0.34	方	土師器			
	SP 1214	0.54	0.52	0.50	円	土師器			
	SP 1231	0.50	0.43	0.42	不規				
	SP 1240	0.40	0.33	0.36	楕円				
SB4	SP 1241	0.34	0.25	0.30	楕円			17	
	SP 1139	0.82	(0.52)	0.49	楕円	土師器			17
	SP 1141	0.70	0.70	(0.25)	不規	土師器			
	SP 1142	0.70	0.65	(0.39)	円	土師器			17
	SP 1143	0.86	0.60	(0.50)	不規				
	SP 1144	0.90	0.62	(0.53)	楕円	土師器			
	SP 1147	0.68	0.53	0.52	楕円	土師器			
	SP 1201	0.68	0.50	0.60	不規				
	SP 1212	0.50	0.44	(0.05)	方	土師器			

第15表 上梅沢遺跡 土坑一覧

遺構	地区	規模(m)			平面形	出土遺物	時期	備考	補回番号	写真図版
		長さ	幅	深さ						
SK 21	A	(2.80)	(0.90)	0.50	不規	越中瀬戸・土師質土器	近世			
SK 27	A	4.04	(1.87)	0.52	不規	土師器・須恵器・瀬戸美濃・越中瀬戸	近世～			
SK 40	A	0.51	0.42	0.36	楕円		中世か?		21	
SK 41	A	0.76	0.73	0.25	円		中世か?・?		18	
SK 53	A	2.50	(1.10)	0.23	不規	板瓦	中世か?			
SK 1007	B	(0.57)	0.39	0.17	楕円	越文土器・土師器	飛鳥～奈良?			7
SK 1011	B	0.75	0.74	0.28	円		飛鳥～奈良?		18	
SK 1028	B	1.04	(0.57)	0.08	不規	土師器・石製品	飛鳥～奈良?	>SD1008		
SK 1188	B	(2.50)	(1.05)	0.22	不規	土師器・須恵器・石製品	飛鳥～奈良?	<SD1019		19
SK 1193	B	(1.37)	1.11	0.37	不規		弥生時代		8	12
SK 1252	B	0.55	(0.45)	0.25	円		古墳以前			
SK 1253	B	0.40	0.29	0.50	円	弥生土器	古墳以前			9+10
SK 1254	B	0.40	0.30	0.56	円		古墳以前			
SK 1255	B	0.44	0.40	0.52	円		古墳以前		7	
SK 1256	B	0.31	0.29	0.60	円		古墳以前			9+10
SK 1257	B	0.32	(0.26)	0.54	円		古墳以前			

第16表 上梅沢遺跡 溝一覧 (1)

遺構	地区	規模(m)			種類	出土遺物	時期	備考	補回番号	写真図版
		幅	深さ							
SD 22	A	0.82	0.32	渠	木製円盤		近世～			
SD 23	A	2.20	0.65	渠	上師器・須恵器・青磁・越中瀬戸・伊万里・近世陶器		近世		21	18
SD 34	A	1.26	0.25	渠	上師器・中世土師器・糞・越中瀬戸美濃・石製品	中世				18
SD 1008	B	0.80	0.16	渠	土師器・須恵器・石製品	飛鳥～奈良?	>SD6, <SK101			
SD 1019	B	0.35	0.11	渠	土師器・須恵器	飛鳥～奈良?			18	
SD 1060	B	0.42	0.23	渠	土師器	飛鳥～奈良?				16
SD 1083	B	0.56	0.21	渠		奈良	SD1178～続<		7	
SD 1109	B	0.45	0.10	渠	土師器・石製品	奈良	>SD105+1111+1113+1114			
SD 1110	B	0.35	0.11	渠	土師器・須恵器・石製品	奈良	>SD105			
SD 1115	B	0.32	0.06	渠	土師器	奈良	>SD1105			
SD 1117	B	(0.33)	0.08	渠	土師器・須恵器・石製品	奈良	<SD1118		19	
SD 1118	B	0.53	0.14	渠		奈良	>SD1117+1119			

第16表 上梅沢遺跡 満一覧 (2)

遺構	地区	規模(m)		種類	出土遺物	時期	参考	辨別番号	写真版
		幅	深さ						
SD 1121	B	0.35	0.13	鳥居	土師器・煮豆器	奈良		19	
SD 1125	B	0.32	0.15	築	土師器	奈良	SF1道路側塗	14・17	
SD 1127	B	0.28	0.19	築		奈良	SF2道路側塗	20	
SD 1128	B	0.38	0.14	築	土師器・煮豆器	奈良	SF1道路側塗	14・17	
SD 1129	B	0.30	0.09	築		奈良	SF2道路側塗		
SD 1145	B	0.36	0.14	鳥居	土師器・煮豆器	奈良	>SD1105, <SD1159		
SD 1152	B	0.37	0.11	鳥居	土師器	奈良	>SD1144+1146+1153, <SD1159		
SD 1153	B	(0.30) (0.07)	鳥居	土師器・石製品	奈良	>SD1146+1156, <SD1159			
SD 1155	B	0.34	0.06	鳥居	土師器・石製品	奈良	>SD1146+1156, <SD1159		
SD 1178	B	0.40	0.10	築		奈良	>SD1083~<SD1159	18・19	
SD 1219	B	0.34	0.07	鳥居	土師器	奈良	>SD1105	19	

第17表 上梅沢遺跡 石製品一覧

辨別番号	地名	地区	遺構	出土土地点	種類	法量(g)			参考	写真版		
						長さ	幅	厚さ				
119	B	SD1155	X36V54	石核		2.7	5.9	4.2	66.6			
120	B	SD1155	S13	砾石		11.3	7.4	5.8	700.0	44枚面、斜状面、一端欠損		
121	B	SK1188		砾石		18.8	8.0	6.8	1700.0	44枚面、斜状面+4枚面欠損		
122	27	B	SK1028	砾石		11.7	6.6	3.8	458.3	両側(四角)、両端崩壊		
123	B	S11	偏物G	13.3	6.1	3.3	463.2	平坦面1	Ab型、第4群	該当なし、後進、中央北		
124	B	S12	偏物G	13.0	6.2	5.6	562.2	平坦面1	Ab型、第4群	円型、渦巻、南東側		
125	B	S13	偏物G	10.9	5.8	4.9	417.2	平坦面1	Ab型、第4群	D型、集中、北東側		
B	S13	偏物G	11.3	5.8	3.5	430.7	S108下	Ab型、第4群	D型、集中、北東側			
B	S13	偏物G	12.8	6.0	3.4	466.5	S108下	Ab型、第4群	B型、集中、北東側			
B	S13	偏物G	10.0	6.0	4.0	423.2	S108下、平坦面1	Ab型、第4群	B型、集中、北東側			
B	S13	偏物G	12.9	6.2	3.5	436.7	S108下、平坦面1	Ab型、第4群	B型、集中、北東側			
B	S13	偏物G	12.1	6.5	3.8	546.0	S108下、平坦面1	Ab型、第4群	B型、集中、北東側			
B	S13	偏物G	12.3	6.8	3.0	431.6	S108下、平坦面1	Ab型、第4群	B型、集中、北東側			
B	S14	偏物G	14.1	7.2	3.0	495.7	平坦面1	Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	10.5	5.5	4.0	391.9	平坦面1	Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	12.5	7.0	4.8	700.0	両端(鋸)に崩壊	Ab型、第4群	D型、渦巻、南東側			
B	S14	偏物G	10.3	5.2	3.8	331.5		Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	9.2	5.9	3.0	326.8		Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	11.5	6.1	3.5	405.9		Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	12.2	6.5	3.7	468.9		Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	11.5	6.7	3.0	371.4	鏡6?	Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	12.5	6.9	2.8	426.8		Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	11.2	5.5	3.9	445.4	平坦面1	Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	10.0	6.9	3.0	369.1	平坦面1	Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	12.3	4.5	3.8	388.3	平坦面1	Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	12.5	5.5	4.5	483.4		Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	9.7	5.7	3.3	357.8		Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	12.2	5.5	4.7	437.3		Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	10.7	4.5	2.9	269.2	平坦面1、無端欠損	Ab型、第3群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	13.0	5.4	4.2	445.7	平坦面1	Ab型、第3群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	12.8	4.7	3.3	320.0	平坦面1	Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	10.5	5.0	4.0	434.8		Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	11.2	4.6	3.7	304.0	平坦面1	Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	10.2	5.0	3.5	308.3		Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	12.0	6.3	3.5	430.9	平坦面1	Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	12.8	5.6	2.9	324.9		Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	11.8	5.2	3.9	388.3		Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	10.8	6.6	3.1	378.4		Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S14	偏物G	10.0	6.2	3.7	311.5		Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S15	偏物G	11.7	5.8	4.5	416.6		Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S15	偏物G	12.0	7.1	3.2	515.7	平坦面1	Ab型、第4群	該当なし、後進、瓶方			
B	S15	偏物G	11.3	5.6	4.5	366.3		Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S15	偏物G	10.5	6.7	3.2	315.2		Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S15	偏物G	11.5	5.0	4.5	429.3	平坦面1	Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S15	偏物G	10.4	5.3	3.6	375.7		Ab型、第4群	A 2型、集中、北西側			
B	S15	偏物G	11.0	5.9	3.7	335.5		Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S15	偏物G	9.5	5.0	4.0	306.6		Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S15	偏物G	9.1	4.6	4.0	303.2		Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S15	偏物G	12.2	5.2	3.5	316.9	一端欠損	Ab型、第3~4群	A 2型、集中、北西側			
B	S15	偏物G	13.0	5.7	5.2	536.0		Ab型、第4群	該当なし、後進、中央北			
29	129	27	B	S16	偏物G	10.4	5.5	4.3	385.9	平坦面1	Ab型、第4群	B型、渦巻、南東側

第18表 上梅沢遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧 (1)

第18表 上梅汎遺跡 土器・陶磁器・土製品一覽 (2)

第18表 上梅沢遺跡 土器・陶磁器・土製品一覽 (3)

第18表 上海況遺跡 土器・陶磁器・土製品一覽（4）

件名 番号	器物名 別名	器物形態	備註	出土地點 名稱	器種										
					直徑 mm	高さ mm									
98 245(M101:35453), 245(M102:35454)	圓盤狀土製品	圓盤狀	A型	134.2 134.2											
99 246(M101:35455), 246(M102:35456)	圓盤狀	圓盤狀	B型	134.2 134.2											
100 247(M101:35457), 247(M102:35458)	圓盤狀	圓盤狀	C型	134.2 134.2											
101 248(M101:35459), 248(M102:35460)	圓盤狀	圓盤狀	D型	134.2 134.2											
102 249(M101:35461), 249(M102:35462)	圓盤狀	圓盤狀	E型	134.2 134.2											
103 250(M101:35463), 250(M102:35464)	圓盤狀	圓盤狀	F型	134.2 134.2											
104 251(M101:35465), 251(M102:35466)	圓盤狀	圓盤狀	G型	134.2 134.2											
105 252(M101:35467), 252(M102:35468)	圓盤狀	圓盤狀	H型	134.2 134.2											
106 253(M101:35469), 253(M102:35470)	圓盤狀	圓盤狀	I型	134.2 134.2											
107 254(M101:35471), 254(M102:35472)	圓盤狀	圓盤狀	J型	134.2 134.2											
108 255(M101:35473), 255(M102:35474)	圓盤狀	圓盤狀	K型	134.2 134.2											
109 256(M101:35475), 256(M102:35476)	圓盤狀	圓盤狀	L型	134.2 134.2											
110 257(M101:35477), 257(M102:35478)	圓盤狀	圓盤狀	M型	134.2 134.2											
111 258(M101:35479), 258(M102:35480)	圓盤狀	圓盤狀	N型	134.2 134.2											
112 259(M101:35481), 259(M102:35482)	圓盤狀	圓盤狀	O型	134.2 134.2											
113 260(M101:35483), 260(M102:35484)	圓盤狀	圓盤狀	P型	134.2 134.2											
114 261(M101:35485), 261(M102:35486)	圓盤狀	圓盤狀	Q型	134.2 134.2											
115 262(M101:35487), 262(M102:35488)	圓盤狀	圓盤狀	R型	134.2 134.2											
116 263(M101:35489), 263(M102:35490)	圓盤狀	圓盤狀	S型	134.2 134.2											
117 264(M101:35491), 264(M102:35492)	圓盤狀	圓盤狀	T型	134.2 134.2											
118 265(M101:35493), 265(M102:35494)	圓盤狀	圓盤狀	U型	134.2 134.2											
備考															
直徑 mm															

第IV章 水橋金広・中馬場遺跡

1 概要

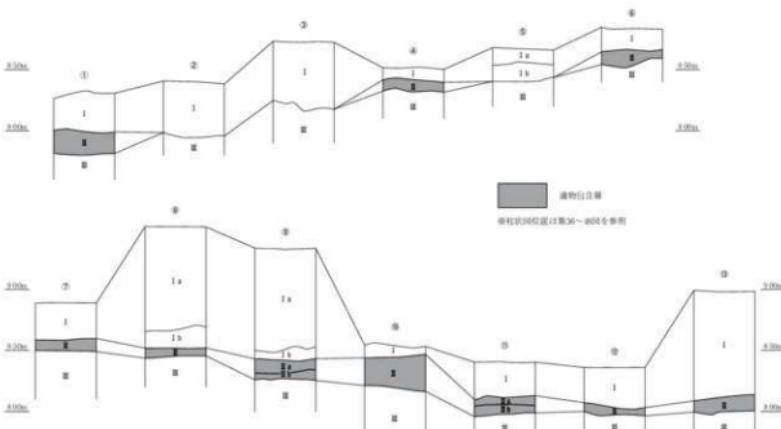
水橋金広・中馬場遺跡では、縄文時代、弥生時代～古墳時代、古代、中近世の遺構・遺物が確認された。検出された遺構は掘立柱建物 21 棟、柵列 2 条、井戸 37 基、土坑 1117 基、溝 625 条に及ぶ。

縄文時代は後期終末～晚期前葉の遺物が出土するのみで、遺跡内の具体的な活動は不明である。弥生時代は中期において土坑、弥生時代終末期～古墳時代にかけては溝が検出されるが、建物は確認されていない。古代では井戸・さく状遺構・道路跡が検出された。弥生時代・古墳時代・古代の溝には杭列があり、整備された用水路を利用して生産域を形成していたと考えられる。古代では一時期、道路が整備されており、その規模からみて越中国内の主要な官道の一つであった可能性がある。中世においては掘立柱建物・井戸・土坑・溝があり、溝により区画された屋敷地を主体として集落が展開する。近世では井戸・土坑・溝が認められ、柱根が遺存する柱穴もあることから建物を中心として集落が形成されていたと考えられる。このように長期間に渡って、人々の居住や生産の領域として利用されてきた。

2 層序

調査区は 13 地区に分かれ、東西両端の調査区では 680m の距離がある。このため、調査区によつて土色・土質に違いがあるものの、I 層：表土（現耕作土・宅地盛土）、II 層：遺物包含層、III 層：地山という基本的な層序は一致している（第 35 図）。

西側に位置する A1・2 地区（第 35 図①・②、以下の丸数字も同様）では、I 層は黄灰色～灰黄褐色の砂質シルト、II 層は黒褐色砂質シルトで A1 地区のみにある。III 層は黄褐色の砂～細砂となる。



第35図 水橋金広・中馬場遺跡 基本層序

中央に位置するA 3～5・9～12地区（③～⑨）においては、I層は灰黄褐色・褐灰色・灰色の砂質シルトを基調とする。ただし、A 10地区（④）I層とA 3地区 I a層（⑤）では黒褐色を基調とし、A 9・12地区（⑧・⑨）では宅地盛り土のI a層が存在する。II層は黒色～黒褐色を呈し、A 10地区（④）では粘質シルト、他は砂質シルトを基調とする。A 12地区（⑨）では黄灰色シルトのII a層が堆積する。III層は暗灰黄色～灰色の砂～砂質シルトとなる。

東側に位置するA 6～8地区（⑩～⑬）では、I層は褐灰色～灰黄褐色の砂質シルトとなる。II層は黒褐色～黒色を呈し、砂質シルトを基調とするが、地形が低くなるA 8 N地区（⑪）のII b層とA 7地区（⑫）のII層では粘土となる。III層は灰色～黄灰色の砂となる。

各地区ともに遺構はIII層上面で検出した。III層上面では標高7.8m～8.6mを測り、中央が高く、東西へ低く傾斜していく地形を呈する。

3 遺構

（1）弥生時代～古墳時代

A 土坑

1号土坑（SK 1, 第49図, 図版39）

A 8 S地区中央部に位置する。弥生土器（1～5）や石英が出土した。土器は破碎した状態で、炭化物を多く含む埋土下層からの出土である。

2号土坑（SK 2, 第49図）

A 8 S地区南東部に位置する。弥生土器の甕が出土した。

3号土坑（SK 3, 第49図, 図版39）

A 8 S地区南西部に位置する。検出時には径2.5m程有り、大型の土坑や井戸の可能性を考えたが、半蔵したところ直径約1m樹木根が確認された。樹木根の上部は炭化しており、倒木あるいは伐採後に燃やした可能性が考えられる。出土遺物は弥生土器の小破片のみで、遺構の時期は不明確であった。古代の道路側溝SD 22に切られていたことから、道路敷設時に樹木を伐採し、抜根せずに樹木根を除去するために焼却した可能性を考えた。しかし、整理作業段階で樹木根の放射性炭素年代測定を実施したところ、紀元前4C後半～前3C末の結果が得られ、古代道路の敷設とは無関係であることが判明した。また、樹木は樹種同定の結果、サワグルミであった（本章：5自然科学分析を参照）。サワグルミは川沿い等に生息する落葉高木で、当該期における調査区周辺の環境を示すものとなる。

4号土坑（SK 4, 第49図, 図版39）

A 5地区南部に位置する。土師器（7）が埋土の上層から、潰れた状態で出土した。

5号土坑（SK 5, 第54・55図）

A 8 S地区西部に位置する。柱痕状の土層が確認され、建物を構成していた可能性もある。

B 溝

1号溝A（SD 1 A, 第49・50図, 図版39）

A 5地区東部に位置する。南北に直線的な溝で、調査区外へ続く。古墳時代のSD 1 Aに、古代のSD 1 Bが重複している。SD 1 Aでは西肩付近の埋土下層から土師器（8～11）の出土がある。

2号溝（SD 2, 第49・50図）

A 5地区中央部に位置する。東西に直線的な溝で、調査区外へ続く。土師器が出土する。東端は調

査区外だが、東に隣接するSD1Aへ続いている可能性もある。

3号溝A・B (SD3A・B, 第49・50図)

A9地区に位置する。出土遺物からSD3Aは古墳時代後期、SD3Bは古墳時代前期の溝となる。SD3Aは東西に直線的で、西端で北西方向へ屈曲する。須恵器(12)、土師器(13)が出土する。SD3Bは北東方向へ直線的に延び、西端では北西へと屈曲する。土師器(14・15)が出土する。

4号溝 (SD4, 第50図)

A4地区的調査区南壁中央から東壁へ蛇行する溝である。土師器(17~20)が出土する。

5~8号溝 (SD5~8, 第51・52図, 図版39)

A6・7・8N地区の東部に位置する。SD5は南東から北西方向に向かって流れる溝であるが、わずかに東へ湾曲する。SD6~8はSD5の西側に沿って掘削される。重複関係からSD7がSD6・8よりも後出する。SD5の北側では杭と板材により護岸がなされる。SD5以外にも、A6~8地区で検出された溝では、杭の打設や板材を組み合わせた護岸が確認される場合がある。杭は形状から杭A~Dの4種類に分類した。

杭A 板状を呈する。断面形の「幅:厚み」は「3.0以上:1」となる。

杭B 角柱状を呈する。断面形の「幅:厚み」は「2.9~1.4:1」で、断面が長方形の角柱。

杭C 角柱状を呈する。断面形の「幅:厚み」は「1.3~1:1」で、断面が正方形に近い角柱。

杭D 円柱状を呈する。

以降の溝に関する記述に際しては、出土した杭については上記の分類を用いることとする。

SD5では杭A~Dが確認され、杭A9本、杭B17本、杭C6本、杭D6本からなる。西肩の溝外縁と、約1.4m内側の二重に設置された杭列のように、板を杭で固定した護岸を構築するため、角柱状の杭を多用したと考えられる。SD7にも杭B4本、杭C3本の打設がある。角柱状の杭のみだが、隣接するSD5と同様に板材の固定に用いられた可能性がある。SD7は配置関係からSD5と併存していた時期があると考えられ、そうした場合、SD5の西側にはSD7も含めて3重の護岸を施していたこととなる。当該期の主要な水路として管理されていた可能性が高い。出土遺物にはSD5から弥生土器(21~30)、SD6~8からも弥生土器がある。

9・12号溝 (SD9・12, 第51・52図)

A6・7・8N地区中央部に位置する。トレンチにより不明確であるが、SD12からSD9へ続いている可能性がある。SD12から土師器が出土している。重複関係からSD13よりは古い。

10・11号溝 (SD10・11, 第51・52図)

A7地区中央部に位置する。平行する長さ6m~7mの溝で、SD9を切る。

13~17号溝 (SD13~17, 第51・53図, 図版39)

A6・7・8N地区の西部に位置する。南東から北西方向へ向かって流れる溝群である。重複関係から、SD17→16→15→14→13の順で構築された。SD13はA7地区の中央・南側で杭の打設がある。中央では杭A20本、杭B13本、杭C1本あり、溝に対して斜め方向に2列が配置される。南側は杭A6本、杭B6本、杭C1本あり、溝の西肩に沿って設置される。両者共に板材はないが、板状の杭を多用し、50cm~70cm程の深さまで打ち込まれる。角柱状の杭も断面長方形の傾向が強く、板状の杭を中心で打設している。中央付近では溝内に設置されており、堰状の構造物を形成していた可能性もある。南側は護岸目的であったと思われる。出土遺物にはSD13で須恵器(31)がある他、各溝に土師器がある。また、繩文土器・弥生土器の混入も認められる。

(2) 古代

A 井戸

1号井戸 (S E 1, 第55図, 図版40・42)

A 8 S地区北部に位置する。縦板組隅柱横棟留めの木組み井戸で、井戸枠の規模は0.55m×0.55mを測る。縦板は0.3m遺存していたが、土層断面から埋没時にはさらに上部まで存在していたことが分かる。須恵器(57)・土師器(58)が出土した他、緑色凝灰岩の混入もある。須恵器は墨書き器であるが判読不能で、井戸内の底面から出土した。重複する古代のさく状造構を切る。

B 道路

1号道路 (S F 1, 第54・55図, 図版40)

A 8 S地区に位置し、N=50°-Wの方位で調査区を直線的に貫く側溝がある。側溝はS D20~21の3条があり、硬化面の広がりや硬化面と溝の重複関係から新古の2段階の変遷が想定される。

古段階はS D21・22が側溝となり、側溝中心間の距離は調査区南東で8.2m、中央で9mとなる。側溝間に道路南東側を中心に硬化面が残る。硬化面には遺構検出面よりも約0.15mの高まりとして残る箇所があり、道路機能時の路面高に近いと考えられる。S D21・22は共に幅0.5m前後、深さ0.15mの規模となる。ただし、深さは硬化面の高まりが本来の路面に近いとすれば、少なくとも0.30mの深さを有していたと考えられる。

新段階はS D20・21が側溝となる。側溝中心間の距離は調査区南西で5.2m、中央で6.2mへと縮小する。S D20は古段階に形成された硬化面を壊して掘削され、幅は0.8mとS D21・22に比べて幅広い。深さは0.18mで、古段階と同様に硬化面上から測ると、少なくとも0.33mの深さを有する。

硬化面は断ち割りしたところ、黒褐色砂質シルトがわずかに混入する地山の砂質シルトにより形成されている。意図的な路面の整地土や、いわゆる波板状凹凸は確認されない。

道路側溝からの出土遺物は極めて少ない。土師器の甕が出土するが、S D20で2点、S D21・22で各1点の破片が出土するのみである。図化可能であったのはS D20出土の88のみであった。

調査区内には古代の遺構として井戸・さく状造構がある。S E 1はS D21の北東に接する。硬化面の広がりがS E 1の南東側へ続くことから、道路が機能していた段階にも、S E 1周辺の硬化面形成に関わる活動がされた可能性があることから、S F 1に併存していたと推定する。さく状造構は東西方向・南北方向に形成される。前者はS D21に切られることからS F 1(古・新)に先行する。後者はS D20・22を切ることからS F 1(古・新)より後出する。

C 溝

1号溝B (S D1 B, 第49・50図, 図版39)

A 5地区東部に位置する。南北に直線的な溝で、調査区外へ続く。古墳時代のS D1 Aを切る。

18・19号溝 (S D18・19, 第54・56図, 図版41・42)

A 6・7・8 N地区西部に位置する。南から北西方向へ緩やかに湾曲する。重複関係からS D19→18の順で流路が変遷したと考えられる。S D19ではA 7地区において杭・板材、A 8 N地区で杭の打設が認められた。A 7地区では杭A15本、杭B34本、杭C11本、杭D5本がある。A 7地区的北側では板状の杭Aと、幅があり板状に近い杭Bを中心に用い、板材を固定した護岸がなされる。A 8 N地区では杭A8本、杭B25本、杭C12本、杭D1本の打設が確認された。こちらは板材の出土はなかったが、杭A・Bを多用する傾向はA 7地区と同様で、A 8 N地区でも板材を組み合わせた護岸がなされていた可能性がある。S D19の西側には古代のさく状造構が広範囲に分布しており、それ

に伴う水路として管理されていたと考えられる。S D18では護岸の痕跡は無かったが、同様の性格を引き継いでいったものと思われる。S D18・19の西隣には現在の水路に改修されるまで利用されていた水路跡があり、長期間に渡って水路を設置するのに適した地勢であったことを示している。S D18からは須恵器(63~66)・土師器(67~72)、S D19からは須恵器(73~77・84)・土師器(78~83・85~87)の他、縄文土器、弥生土器(42~44)などの混入もある。

23号溝(S D23、第54図)

A 8 S地区東側に位置する。S D18・19に平行しており、併存していた可能性がある。須恵器(89)が出土する。

24~98・102~104号溝(S D24~98・102~104、第43・45・54・55・57図、図版42)

A 4・5・8 S・8 N・9・12地区にかけて分布する南北・東西方向の溝群である。

A 4地区では南北方向を中心とするが、方位の異なる3つの溝群に分けることができる。西側はS D103・104を含む一群で、N-2°-Wの方位を示す。中央にはS D41~52があり、N-11°-Eと東に振れた方位となる。東側はS D53~66があり、N-7°-Wの方位と示し、S D59~61のようにやや湾曲した形状となる溝を含んでいる。

A 5地区では南北と東西の2方向がある。南北方向はN-5°-Wを示し、S D67~73などがある。東西方向はN-86°-Eを示し、S D102などで構成され、南北方向の溝群を切る。

A 9・12地区では、東西方向の溝は散見されるが、南北方向の溝群がほとんどを占める。A 9地区ではS D75~83などがあり、N-6°-Wの方位を示す。A 12地区にはS D84~86・88~98があり、N-7°-Wの方位を示す。S D87は湾曲した溝で、他よりも後出する溝である。

A 8 S地区では南側にS D37~40があり、N-1°-Eと南北方向を示す。A 8 S地区の北側からA 8 N地区の西側にかけては東西方向の溝群が形成される。S D24~28・31~36があり、N-82°-Eを示す。S D26~28より先行するS D29はN-28°-Wの方位を示す直線的な溝で、これに平行する溝も數条確認される。

こうした広範囲で検出される南北・東西方向に平行する溝群は、さく状遺構と考えられる。溝の埋土について植物珪酸体分析と花粉分析を実施した結果、イネの他、ソバ属やアブラナ科の栽培植物が示されており(本章:5自然化学分析を参照)、畠を中心とした生産域であったと考えられる。

南北方向の溝群には方位が大きく3つに分けられる。A 4地区西側・A 8 S地区南側には、ほぼ南北を示す一群がある。A 4地区中央ではN-11°-Eと、やや東に方位を振る一群がある。A 4地区東側・A 5地区・A 9地区・A 12地区ではN-5~7°-Wと、やや西に方位が振れる一群となる。これらには重複関係が無く、遺物の出土も少ないため時期を比較することは難しいが、方位の異なる溝群が形成時期が異なると考えれば、少なくとも3時期程度に変遷したこととなる。

東西方向はA 5地区とA 8 S地区北側~A 8 N地区西側の2箇所にある。共に東西からやや北に振れた方位を示すが、離れた配置であり、同時期に形成されたかは不明である。

出土遺物には、S D102・104から須恵器(97・99)、S D103から土師器(98)がある。

99号溝(S D99、第46・47図)

A 8 S地区中央部からA 12地区の北東端に位置し、東西に直線的な溝である。S F 1を切っており、同様にS F 1よりも後出するさく状遺構のS D37~40を区画する役割があったと思われる。

100号溝(S D100、第54・55図)

A 8 S地区南西部に位置し、S F 1の側溝S D22を切る。S F 1を切るS D37~40にS D100も

切られており、S D20 が道路側溝となる S F1 新段階に併存する可能性がある。

101号溝（S D101, 第46図）

A12 地区南東部に位置する。東西に直線的な溝で、南北方向のさく状遺構に切られる。須恵器(96)が出土する。

(3) 中近世

A 挖立柱建物

1号掘立柱建物（S B1, 第58図, 図版44）

A1 地区中央部に位置する中世の総柱建物である。南側は調査区外となり全形は不明だが、少なくとも 4×2 間で、南西に 1×1 間の張り出し部が付属する。柱穴埋土には柱根の遺存や土層断面での柱痕が確認された。S P4・11から中世土師器(139・140)が出土する。

2号掘立柱建物（S B2, 第59図, 図版43・44）

A1 地区西部に位置する中世の総柱建物である。 3×3 間で、南西側にS A1, 北西側にはS D117が平行して隣接する。建物範囲にS E3が重なっているが、前後関係は明らかでない。A1地区では最大面積の建物であり、建物群の中心的役割を考える。S P23から羽口(141)が出土する。

3号掘立柱建物（S B3, 第58図, 図版43）

A1 地区中央部に位置する中世の総柱建物である。南東隅の柱穴S P33が重複するS D107を切る。柱穴埋土は褐灰色砂質シルトを基調とし、近接するS B1・2とは異なっていることから、時期が異なる可能性がある。

4号掘立柱建物（S B4, 第60図, 図版43）

A1 地区西部に位置する中世の建物である。調査区外へ続くため全形は不明だが、 3×2 間以上の総柱建物になると思われる。S P36では柱根が遺存する。S B4の東側にはS E2・4・5が隣接しており、いずれかと併存していた可能性が高い。

5号掘立柱建物（S B5, 第60図）

A1 地区中央部に位置する中世の建物である。調査区外へ続くため全形や建物形式は不明である。南東隅の柱穴S P42は重複するS D112を切る。

6号掘立柱建物（S B6, 第60図）

A3 地区中央部に位置する中世の総柱建物である。 3×2 間の規模となる。S P49では礎板が遺存する。礎板はスギを材とする。建物範囲内、及び周辺には多数の井戸が分布している。また、東側にはS B7~11の建物も位置しており、いずれかと併存していたと考えられる。

7号掘立柱建物（S B7, 第61図, 図版44）

A3 地区中央部に位置する中世の総柱建物である。北西隅が調査区外となるが、 4×3 間の規模になると思われる。S K45と重複するS P65では礎板が遺存する。A3地区では最大面積の建物で、建物群の中心的役割を有していたと考えられる。S B10・11と位置が重複するが、直接的な柱穴の切り合いが無いため、前後関係は不明である。S P61・67から中世土師器(142~144)が出土する。

8号掘立柱建物（S B8, 第62図, 図版44）

A3 地区中央部に位置する中世の総柱建物である。南東隅の柱穴は確認されなかつたが、 2×2 間の規模と推定する。S P75はS K27と重複し、これを切る。

9号掘立柱建物（S B9, 第61図）

A3 地区中央部に位置する中世の側柱建物である。南西隅の柱穴は確認されなかつたが、 2×1 間

の規模と推定する。柱穴埋土は褐灰色砂質シルトを基調とし、周辺の建物とは異なる。S P84にはスギを用いた柱根が遺存する。

10号掘立柱建物（SB10、第62図、図版44）

A3地区中央部に位置する中世の総柱建物である。北西隅の柱穴は確認されなかったが、2×2間の規模と推定する。S P85には礎板、S P86・89・92には拳大礫の充填、S P90には礎石が確認された。建物基礎を複数の手法によって補強し、他の建物とは異なる。

11号掘立柱建物（SB11、第62図、図版44）

A3地区中央部に位置する中世の側柱建物である。北東隅の柱穴はSD132との重複により失われているが、3×1間の規模と推定する。S P95から珠洲（151）が出土する。

12号掘立柱建物（SB12、第63図、図版45）

A3地区北東部に位置する中世の総柱建物である。北西側は調査区外へ続くため全形は明かでないが、3×2間の規模と考えられる。柱穴ではS P100・104に柱根が遺存する。その他の柱穴でも土層断面に、黒褐色砂質シルトが柱痕として確認される。S P100の柱材はクリを用い、その底面は0.5mの深さまで達する。A3地区中央部の建物群とはやや距離が離れており、東部で形成された別の建物群を構成していたと考えられる。東側にはSE21～23の井戸があるが、SE21は位置が重複しており、SE22・23のいずれかが付属していた可能性が高い。

13号掘立柱建物（SB13、第63図、図版45）

A3地区北東部に位置する中世の側柱建物である。北西隅は調査区外だが、2×1間の規模と考えられる。S P110では柱痕が確認される。SB12と位置が重複するが、前後関係は不明である。

14号掘立柱建物（SB14、第63図、図版45）

A3地区東部に位置する中世の側柱建物である。2×1間の規模で、SB15とS P119を共有するが、土層断面では前後関係は不明であった。

15号掘立柱建物（SB15、第64図、図版45）

A3地区東部に位置する中世の側柱建物である。SD131との重複により南東の柱穴が失われているが、3×1間の建物と推定する。

16号掘立柱建物（SB16、第64図）

A3地区南東部に位置する中世の建物である。南側の調査区外へ続くため、規模などは不明である。少なくとも1×1間以上と思われる。S P125で遺存していた柱根はスギを用いている。

17号掘立柱建物（SB17、第65図、図版44）

A4地区西部に位置する中世の総柱建物である。南側が調査区外へ続くため、全形は不明であるが、4×3間の規模と推定する。S P135・140では土層断面に柱痕が明瞭に残る。SB18と配置が重複するが、前後関係は不明である。今回の調査で確認された掘立柱建物の中ではSB18に次ぐ面積となり、集落形成の中心的な建物であったと考えられる。

18号掘立柱建物（SB18、第66図、図版44）

A4地区西部に位置する中世の総柱建物である。南東側が調査区外へ続くが、4×3間の規模と推定する。S P145・150・151・155では土層断面に柱痕が確認される。今回の調査で確認された最大面積となり、集落形成の中心的な役割を担っていたと考えられる。北東側にSE26が隣接する。

19号掘立柱建物（SB19、第67図、図版45）

A4地区中央部に位置する中世の総柱建物である。3×2間の規模で、S P163・168の土層断面

には柱痕が認められる。

20号掘立柱建物（S B20, 第67図）

A 4地区北東部に位置する中世の側柱建物である。1×1間の規模となる。

21号掘立柱建物（S B21, 第64図, 図版45）

A 4地区中央部に位置する中世の側柱建物である。北西が調査区外となるが、4×1間の規模と推定する。柱穴は径1mを越え、他に確認された建物の柱穴に比べ大きい。出土遺物はS P175に弥生土器・土師器の破片がわずかにあるのみで、時期は判断し難い。古代のさく状遺構を切っていることから中世としたが、さく状遺構より後出する古代の遺構である可能性もある。

B 構列

1号柵列（S A 1, 第59図）

A 1地区西部に位置し、S B 2の南側に隣接する中世の柵列である。柱穴埋土は黒色砂・褐灰色粘土質シルトで、一様でない。S B 1とはやや方位を異にしており、併存しない可能性がある。

2号柵列（S A 2, 第64図）

A 3地区中央部に位置する中世の柵列である。S B14・15と配置が重複するが、前後関係は不明である。S P184～186に礎板が遺存する。S P184・185の礎板はスギを用いている。

C 井戸

2号井戸（S E 2, 第68図）

A 1地区中央部に位置する中世の井戸である。0.1m程の深さまでは楕円形の浅い掘り込みとなるが、それ以下は円形に掘り込まれる。木枠・曲物は確認されず、素掘り井戸の可能性が高い。埋土は上層が褐灰色砂質シルト、中・下層が黒褐色粘土質シルトとなる。調査区内では他の井戸は上層まで黒褐色系の土層により埋没しているのに対し、S E 2のみが上層に褐灰色の埋土が存在する。埋没過程や時期的な違いがあると思われる。出土遺物には珠洲・白磁（146）・箸がある。

3号井戸（S E 3, 第68図, 図版47）

A 1地区西部に位置する中世の井戸である。木枠・曲物は確認されず、素掘り井戸の可能性が高い。埋土下層に木片や人頭大の礫が廃棄されている。土師器・須恵器・中世土師器・珠洲が出土する。

4号井戸（S E 4, 第68図）

A 1地区中央部に位置し、S B 4やS E 5に隣接する中世の井戸である。隅柱を抜き取った痕があり、木組み井戸であったと考えられる。土師器・中世土師器（145）・珠洲（148）・箸（348）・板材が出土する。

5号井戸（S E 5, 第68図, 図版47）

A 1地区中央部に位置し、S E 4の東側に隣接する中世の井戸である。下半は方形基調の掘り込みであることから、木組みがなされていた可能性もある。出土遺物には中世土師器・箸（349）・曲物側板・編物製品（355）がある。355は埋土下層中からの出土である。

6号井戸（S E 6, 第68図）

A 1地区南西部に位置する中世の井戸である。下半が方形基調であることから、木組み井戸であつた可能性がある。埋土中位に井戸枠部材が出土するが、埋没が進んだ段階で廃棄されたものであり、S E 6の部材からは不明である。出土遺物には土師器・瀬戸美濃（149）・箸（350）がある。

7号井戸（S E 7, 第69図）

A 1地区南西部に位置する中世の井戸である。下半は円形基調の掘り込みとなり、壁の立ち上がり

は垂直になる。SE 8 を切る。出土遺物には中世土師器（150）がある。

8号井戸（SE 8, 第69図）

A 1 地区南西部に位置する中世の井戸で、SE 7 に切られる。下半は 0.9m × 0.6m の長方形基調に掘り込むことから、木組み井戸であった可能性がある。中世土師器が出土する。

9号井戸（SE 9, 第69図）

A 3 地区南西部に位置する中世の井戸である。不整形を呈し、壁も崩落により不規則な段差が生じている。本来は円形基調の掘り込みで、素掘り井戸であったと思われる。

10号井戸（SE 10, 第69図）

A 3 地区の中央部に位置する中世の井戸である。底面の北西側に曲物が設置される。裏込め土は灰黄色砂で、礫も部分的に配置して、曲物を固定する。中世土師器の出土がある。

11号井戸（SE 11, 第69図）

A 3 地区の中央部に位置する中世の井戸である。底部の中央に曲物が設置される。埋土中に板材や礫が出土するが、枠などの構造があったかは不明である。中世土師器・箸（352）の出土がある。

12号井戸（SE 12, 第69図）

A 3 地区の中央部に位置する中世の井戸である。井戸本体は 0.9m × 0.8m の円形を呈する。その部分には底面に曲物が設置されている。土師器・中世土師器（152）・珠洲・越前が出土する。

13号井戸（SE 13, 第69図、図版47）

A 3 地区の中央部に位置する中世の井戸である。掘方は不整な楕円形を呈し、その東側に 0.6m 四方の木枠を設置する。遺存状況は悪いが、枠材・板材が確認されることから縦板組隅柱横棟留めの構造であったと考えられる。出土遺物には土師器・中世土師器がある。

14号井戸（SE 14, 第69図）

A 3 地区の中央部に位置する中世の井戸である。北側を SE 15 に切られ全形は分からぬが、残存部から不整形であったと思われる。掘方の南側に 0.7m 四方の木枠を設置する。木枠は横板を方形に配置し、その対角線に長さ 1.2m の横板を配置し仕切る。北西隅からは SE 15 の方向へ向かい 0.8m の横板を配置する。杭は四方に配置した横板の中央付近にあり、隅柱とはならない。遺存状況が悪いため、本来の形状は把握し難いが、木枠により四方を囲まれた水溜状の構造も想定される。構築順は SE 15 が後であるが、同時併存し建物に関係する水場として機能していた可能性もある。出土遺物には土師器・中世土師器（153～156）・白磁がある。

15号井戸（SE 15, 第69図）

A 3 地区の中央部に位置する中世の井戸である。不整形の掘方で、その西側に直径 0.4m 程の曲物を設置する。周囲には部分的に縦板が打ち込まれ、曲物が土圧により破損しないための補強と思われる。出土遺物には土師器・中世土師器（157・158）・珠洲・漆器・円形板がある。

16号井戸（SE 16, 第70図）

A 3 地区の中央部に位置する中世の井戸である。底部から木枠の一部が出土し、木組み井戸であったと思われるが、構造は把握できない。土師器・中世土師器（159・160）・珠洲が出土する。

17号井戸（SE 17, 第70図）

A 3 地区の中央部に位置する中世の井戸である。不整形を呈し、壁は傾斜があり、断面擂鉢状となる。曲物等の出土もないが、底面からの湧水が認められたため、井戸としておく。中世土師器の出土がある。

18号井戸（S E18, 第70図）

A3地区の中央部に位置する中世の井戸である。S E17の南側に隣接する。曲物などの出土はなく、素掘り井戸であったと思われる。中世土師器（161～165）が出土する。

19号井戸（S E19, 第70図）

A3地区の中央部に位置する中世の井戸である。深さは0.36mと浅いが、底面からの湧水が認められたため、井戸としておく。中世土師器（166）が出土する。

20号井戸（S E20, 第70図）

A3地区の中央部に位置する中世の井戸である。曲物などの出土は無いが、底面からの湧水が認められたため、井戸としておく。中世土師器（167）が出土する。

21号井戸（S E21, 第70図、図版45）

A3地区の北東部に位置する中世の井戸である。曲物などの出土は無かったが、底面からの湧水が認められたため、井戸としておく。須恵器・中世土師器（168）の出土がある。

22号井戸（S E22, 第70図、図版45）

A3地区の北東部に位置する中世の井戸である。隅柱の抜き取り痕があり、木組み井戸であったと考えられる。土師器・須恵器・中世土師器（169・170）・珠洲（171）の出土がある。

23号井戸（S E23, 第71図、図版45）

A3地区の北東部に位置する中世の井戸である。掘方の中央に0.7m四方の縦板組隅柱横桟留めの木枠を設置する木組み井戸である。中世土師器（172）・珠洲が出土する。

24号井戸（S E24, 第70図）

A3地区中央部、S B8南側に隣接する中世の井戸である。曲物などの出土は無かったが、底面からの湧水が認められたため、井戸としておく。中世土師器（173）・珠洲が出土する。

25号井戸（S E25, 第71図、図版47）

A4地区西部に位置する中世の井戸である。S D140に切られ、下部のみが確認された。曲物などの出土は無かったが、底面からの湧水が認められたため、井戸としておく。

26号井戸（S E26, 第71図、図版47）

A4地区西部に位置する中世の井戸である。S D140に切られ、下部のみが確認された。井戸枠の基底部のみが遺存した状態で、井戸側の構造は明かでない。中世土師器（174）の他、板状・棒状の木製品が出土するが、井戸側の材であった可能性もある。

27号井戸（S E27, 第71図）

A4地区東部に位置する中世の井戸である。板材の出土はあるが、井戸側構造の存在は不明である。

28号井戸（S E28, 第71図、図版47）

A10地区西部に位置する中世の素掘り井戸である。埋土の上層に炭化物層が形成される。出土遺物には中世土師器がある。

29号井戸（S E29, 第72・73図）

A11地区中央部に位置する近世の素掘り井戸である。埋土下層は粘土混じりの砂利が堆積し、意図的な埋め戻しの可能性がある。土師器・珠洲・越中瀬戸（175・176）・唐津（177）が出土する。

30号井戸（S E30, 第72・73図）

A11地区中央部に位置する近世の素掘り井戸である。埋土は地山ブロックが混入した褐灰色粘土質シルトで、埋め戻しの可能性がある。中世土師器・珠洲・越中瀬戸（178）の出土がある。

31・32・33号井戸（S E31・32・33、第73図）

A11地区中央部に位置する。節を抜いた竹管とそれらと繋ぐ継ぎ手が設置されたSD158によって連結される。これらは導水施設で、S E31・32を通り南東から北西へ延びる直線が主要な配管で、S E31・32は「親井戸」から延びた導水管の中継をする「樽」部分に相当し、S E33がS E31より分岐した「取井戸」と推測されている（河西2010）。S E31の北西にSD158が接続する箇所では、竹管の先端に直径15.9cm、高さ17cmの樽が取り付けられる。この樽は取水口のフィルターと推測されている。こうした場合、調査区外に「親井戸」などの水源があり、S E31～33自体は水源とはならないため、厳密には井戸とは言い難い。

今回の調査では、後述するA3地区SK60でも竹管と樽を連結した施設が確認されている。また、竹管・継手を用いた構造は中名V遺跡（富山県文化振興財団2005）に時期不明であるが検出例がある。こうした事例とともに、村落における導水施設の様相を示す資料と言える。

34・35号井戸（S E34・35、第72図）

A11地区中央部に位置する。S E34では節を抜いた竹管を垂直に差し込むが、腐食により図化等の記録は不可能であった。井戸廃絶時のいわゆる「息抜き」を目的とした可能性もある。S E35はS E34に切られる。S E35からは越中瀬戸の出土から近世、S E34からは越前・越中瀬戸・伊万里の他に近代陶器も出土することから近代の所産となる。

36号井戸（S E36、第72図）

A11地区西部に位置する近代の素掘り井戸である。伊万里・近代陶器・箸（353）・櫛（342）が出土する。

37号井戸（S E37、第72図）

A11地区西部に位置する近世の素掘り井戸である。埋土中には、節を抜いた竹管が垂直に差し込まれており、S E34と同様の目的と思われる。

D 土坑**6号土坑（SK6、第74図）**

A1地区中央部に位置する中世の土坑である。珠洲（186）が出土する。

7号土坑（SK7、第74図）

A1地区中央部に位置する中世の土坑である。中世土師器（181・182）が出土する。

8号土坑（SK8、第74図、図版48）

A1地区東部に位置する中世の土坑である。中世土師器（183・184）・珠洲（185）が出土する。これらの土器は埋土下層から出土した。SD105に切られる。

9号土坑（SK9、第74図）

A1地区中央部に位置する中世の土坑である。浅い竪穴状土坑で、SB4の東側に分布する井戸群と関連する可能性もある。

10号土坑（SK10、第74図）

A1地区中央部に位置する中世の土坑である。浅い竪穴状土坑である。

11号土坑（SK11、第74図）

A1地区東部に位置する中世の土坑である。中世土師器（187）が出土する。

12～19号土坑（SK12～19、第74図、図版48）

A1地区東部に位置する中世の土坑群である。SK12は3.02m×2.41mと大型の不整形な土坑で、

その周間に柱穴状のSK13~19が巡る。SK12の周間に囲みや、何らかの上部構造が形成されていた可能性がある。SK12からは鉄滓(42.3g)が出土する。

20~22号土坑 (SK20~22, 第75図)

A3地区中央部で、SB7周辺に分布する中世の土坑群内に位置する。柱列は確認できなかったが、建物を構成する柱穴であった可能性もある。中世土師器(188~190)・羽口(191)が出土する。

23号土坑 (SK23, 第75図)

A3地区東部に位置する中世の土坑である。土層断面に柱痕状の黒色砂質シルトが確認される。

24号土坑 (SK24, 第75図)

A3地区西部に位置する中世の土坑である。中世土師器(192~194)が出土する。

25号土坑 (SK25, 第75図)

A3地区西部に位置する中世の土坑である。板材・円形版が出土する。

26号土坑 (SK26, 第75図)

A3地区西部に位置する中世の土坑である。長さ3.69mを測る大型の土坑で、中世土師器(195~201)・珠洲が出土する。

27・28号土坑 (SK27・28, 第75図)

A3地区中央部で、SB7の南東側に位置する浅い土坑である。SK27はSB8の柱穴SP75に切られる。SK28はSB7の東に隣接する。

29号土坑 (SK29, 第75図)

A3地区西部に位置する中世の土坑である。隅丸の方形を基調とする土坑で、埋土最下層に薄く炭化物の形成がある。中世土師器(203)が出土する。

30号土坑 (SK30, 第75図)

A3地区中央部で、SB7の南西側に位置する中世の土坑である。埋土下層に人頭大の礫が廃棄されている。出土遺物には土師器・中世土師器(204・205)がある。

31号土坑 (SK31, 第75図)

A3地区中央部で、SB6の西側に位置する中世の土坑である。中世土師器(206・207)が出土する。

32~37号土坑 (SK32~37, 第76図, 図版48)

A3地区中央部で、SB6の南西側に位置する中世の土坑群である。SK33・36が長軸0.9m程で、他は1.5m程となる。重複関係があり、複数回にわたって土坑が集中的に構築される場所であった。SK32からは中世土師器(208)の他、漆器・箸(351)・板材・円形版などの木製品が出土する。SK34からは土師器・中世土師器(209・210)・珠洲、SK37からは中世土師器(211~214)・白磁(215)・青磁(216)が出土する。

38号土坑 (SK38, 第76図)

A3地区中央部で、SB6の西側に隣接する中世の土坑である。規模は2.45m×1.65mとやや大型の土坑となる。中世土師器(217~219)が出土する。

39号土坑 (SK39, 第76図)

A3地区中央部で、SB9の範囲内に位置する中世の土坑である。中世土師器(220)が出土する。

40号土坑 (SK40, 第76図)

A3地区中央部で、SB7の範囲内に位置する中世の土坑である。中世土師器(221)が出土する。

41号土坑（SK41, 第76図）

A3地区中央部で、SB8の南側に隣接する中世の土坑である。須恵器・中世土師器（222）が出土する。

42号土坑（SK42, 第76図）

A3地区中央部で、SB7の南西側に隣接する中世の土坑である。土師器・中世土師器・珠洲・青磁（223）が出土する。

43号土坑（SK43, 第76図）

A3地区中央部で、SB10の範囲内に位置する中世の土坑である。中世土師器（224）が出土する。

44号土坑（SK44, 第76図）

A3地区中央部で、SB8の範囲内に位置する中世の土坑である。中世土師器（225）が出土する。

45号土坑（SK45, 第77図）

A3地区中央部で、SB7の範囲内に位置する中世の土坑である。SP65・95に切られることから、SB7・11よりも先行する土坑である。須恵器・中世土師器・珠洲の出土がある。

46号土坑（SK46, 第77図）

A3地区中央部に位置する中世の土坑である。土師器・中世土師器（226）の出土がある。

47号土坑（SK47, 第77図、図版48）

A3地区中央部で、SB8の範囲内に位置する中世の土坑である。埋土の底部に珠洲（231）の破片があり、その上からは複数の礫が出土した。その他、砥石の出土がある。

48号土坑（SK48, 第77図）

A3地区中央部に位置する中世の土坑である。長軸は3.81m以上、短軸は2.82mを測る大型の土坑となる。須恵器・中世土師器（227・228）・珠洲・白磁（229）・青磁（230）が出土する。

49・50号土坑（SK49・50, 第77図）

A4地区に位置する中世の土坑である。土師器（61・62）が混入する。

51号土坑（SK51, 第78図）

A10地区東部に位置する中世の土坑である。中世土師器・珠洲（232）の出土がある。

52・53・56・57号土坑（SK52・53・56・57, 第78図、図版48）

A11地区中央部に位置する近世の土坑である。SK52・56では柱根、SK53・57では土層断面に柱痕が確認される。SK52・53・56は南北方向の直線上にほぼ並び、柱間距離は約6mある。SK56・57を結ぶと東西方向で約5m間隔の柱列となる。この2つの柱列が建物を構成していたものかは判然としない。周辺には柱根・柱痕の確認は無いが、同等規模の土坑が分布しており、それらを含めて建物が形成されていた可能性もある。SK52から中世土師器の出土がある。

54号土坑（SK54, 第78図）

A11地区中央部に位置する近世の土坑である。中世土師器（233）が出土する。

55号土坑（SK55, 第78図）

A11地区東部に位置する近世の土坑である。出土遺物には越中瀬戸の他、ほぼ完形の唐津播鉢（240）が埋土上層から出土する。

58号土坑（SK58, 第78図）

A11地区中央部に位置する近世の土坑である。埋土中には人頭大の礫が多く出土するが、規則的な配置にはならない。越中瀬戸・下駄（344）の出土がある。

59号土坑（SK59、第78図）

A11地区西部に位置する近世の土坑である。攪乱により全形は不明であるが、長軸は3.45m以上と大型の土坑となる。中世土師器（234）・珠洲・越中瀬戸が出土する。

60号土坑（SK60、第78図、図版48）

A3地区西部に位置する近世の土坑である。不整形の土坑で、その北側からは直線的、南側からは湾曲した溝が調査区外へ続く。前者には節を抜いた竹管が埋設され、その東端には直径38cmの樽が接続される。竹管は西側へ徐々に低く傾斜しており、樽から西へ向かう導水施設の可能性がある。この場合、樽が取水源の役割を果たす。樽は蓋板・底板が遺存するが、竹管接続部の反対側の側板に直径8cmの孔が2箇所ある。穿孔部付近の側板外面には植物体の編物が遺存しており、本来は穿孔部を被覆していたと思われる。この編物により濾過された湧水を樽内に溜めていた可能性があるが、湧水の水位は調査段階では樽底面よりも低いため、本来どのように機能していたかは不明確である。

61号土坑（SK61、第36・79図）

A1地区中央部に位置する中世の土坑である。SD113に切られる。

62号土坑（SK62、第36・79図）

A1地区西部に位置する中世の土坑である。SD112に切られる。調査区外の西側へ続いており、隣接するSD118に平行する溝である可能性もある。

63号土坑（SK63、第37図）

A1地区東部に位置する中世の土坑である。SD109・110を切る。中世土師器（235）が出土する。

64号土坑（SK64、第41図）

A10地区東部に位置する中世の土坑である。調査区外へ続くため不明であるが、長軸8.5m以上と規模は大きい。掘り込みは0.3mで、浅い落ち込み状の地形であった可能性もある。中世土師器（236～238）・珠洲（239）の出土がある。

E 溝

105号溝（SD105、第79図）

A1地区東部に位置する中世の溝である。SD106と平行する。A1地区の東側には富山市による平成15年度の調査区（富山市教育委員会2006）があるが、そこにはSD105の続きは確認されていない。そのため、SD105は今回の調査区内で確認された9.5m程の長さと考えられる。

106・124号溝（SD106・124、第79図）

A1地区東部～中央部、A2地区南西部に位置する中世の溝である。A1地区では西端が屈曲し、調査区の北側へ続く。東端はさらに東へ延び、富山市の平成15年度調査区におけるSD5、さらにA2地区SD124に至る。SD124の東端では南へ屈曲し、調査区外へと続く。このことから、東西約45mに渡って直線的で、その西端では北側、東端では南側へ屈曲するクランク状を呈する区画溝であると考えられる。出土遺物には土師器・須恵器・中世土師器（241～247）・珠洲（248～250・259）・漆器（339・340）・板（343）・箸（345～347）木製品の出土がある。

107号溝（SD107、第79図）

A1地区中央部から東部に位置する中世の溝で、調査区を南北から北東へ湾曲しながら貫く。他の建物や溝に切れられ、調査区内でも古い段階の溝である。土師器・中世土師器・珠洲の出土がある。

108号溝（SD108、第79図）

A1地区東部に位置する中世の溝である。L字状に屈曲し、調査区外の南・東側へ続く。東側は富

山市による平成15年度調査区のSD6へと続く。少なくとも東西方向は約21mの範囲を区画していた溝となる。

109号溝（SD109, 第79図）

A1地区東部に位置する中世の溝である。南北に直線的だが、南端では南東方向へ屈曲する。中世土師器（251）が出土する。

110・111・160号溝（SD110・111・160, 第79図）

A1地区東部から中央部に位置する中世の溝である。南北に直線的で平行し、南端は調査区外へと続く。SD110・111では中世土師器、SD160から中世土師器（290）・珠洲の出土がある。

112号溝（SD112, 第79図）

A1地区中央部から西部に位置する中世の溝で、調査区を南西から北東へ湾曲しながら貫く。他の建物や溝に切られることはSD107と共通するが、湾曲する方向は逆となる。

113号溝（SD113, 第79図）

A1地区中央部に位置する中世の溝である。東西に直線的な溝の西端から、北西に向かって調査区外へと続く。土師器・中世土師器（254・255）・珠洲・白磁（253）の出土がある。

114・116号溝（SD114・116, 第79図）

A1地区中央部にSD114、西部にSD116が位置する。中世の溝で、SD107・112と平行するように、やや傾きがある。

115号溝（SD115, 第79図）

A1地区中央部に位置する中世の溝である。南北に直線的な溝で、北端から東と北西方向へ分岐する。東はSD106と合流し、北西はSD106と平行しながら調査区外へと続く。

117号溝（SD117, 第79図）

A1地区西部に位置する中世の溝である。SB2の西側に3mの間隔で平行する。

118号溝（SD118, 第79図）

A1地区西部に位置する中世の溝である。東西に直線的で、東・西端は調査区外へと続く。土師器・須恵器・珠洲（256）が出土する。

119号溝（SD119, 第79図）

A2地区北部に位置する近世の溝である。幅は6.4mと広いが、深さは0.2mと浅い。土師器・須恵器・珠洲（258）・越中瀬戸（257）が出土する。

120~122号溝（SD120~122, 第79図）

A2地区北部に位置する中世の溝である。SD121は幅1.54m~3.80mと幅広で、南西から北東へ直線的に調査区を貫く。SD120・122は幅0.3m~0.4mと細い溝で、SD121に平行する。SD122は北半のみにあり、SD120はSD121同様に調査区を貫く。

123号溝（SD123, 第79図）

A2地区南部に位置する中世の溝である。調査区を南北に貫くが、調査区内ではクランク状に屈曲する。SD121から続く溝の可能性もある。SD123はSD124に切られており、A1地区でみられたように、南西-北東の斜方向を示す溝が、東西方向の溝より先行する傾向が窺える。

125・145・146号溝（SD125・145・146, 第80図）

SD125はA3地区西端、SD145・146はA10地区的東端に位置する。出土遺物から近現代まで利用されていた水路跡と考えられる。それ以前の須恵器・珠洲（274）・青白磁（277）や磨製石斧（362）

も混入する。また、陶錐（260・276）の出土があり、当該期の生業の一端を示している。

126・130号溝（S D126・130, 第80図）

S D126・130はA3地区に位置する中世の溝である。S D126はA3地区の西端付近で直角に曲がった溝が、北と東へ直線的に延び、調査区外へと続く。東側へ延びた溝は、A3地区東部に位置するS D130へ続く可能性が高い。その場合、南北は不明だが、東西約56mを囲む区画溝であったと考えられる。S D126からは須恵器・中世土師器（262）・珠洲（261・263）・漆器（341）、S D130からは土師器・須恵器・中世土師器（265）・珠洲（264）・越前・木製品の出土がある。

127号溝（S D127, 第80図）

A3地区西端に位置する中世の溝である。S D125に切られる。

128・129号溝（S D128・129, 第80図）

A3地区西部に位置する中世の溝である。同規模の南北に直線的な溝が平行する。

131号溝（S D131, 第80図）

A3地区東部に位置する中世の溝である。弧状に湾曲し、東・西端ともに調査区の南側へ続く。

132・134号溝（S D132・134, 第80図）

A3地区中央部に位置する中世の溝である。南北に調査区を貫く直線的な溝である。

133号溝（S D133, 第80図）

A3地区中央部に位置する中世の溝である。一部途切れながら南北に直線的に延び、北側で東へと屈曲する。やや距離を置くが、東側に位置するS D137と共に区画を形成していた可能性がある。

135・136号溝（S D135・136, 第80図）

A3地区中央部に位置する中世の溝である。S D134から分岐し、東方向へ延びる。

137号溝（S D137, 第80図）

A3地区東部に位置する中世の溝である。東西に直線的で、S D133と共に区画を形成していた可能性がある。

138・140～143号溝（S D138・140～143, 第80図）

A4地区に位置する中世の溝で、調査区を南北に貫く直線的な溝である。S D141の埋土中層には灰黄色砂の堆積があり、S D140・143の下層にも同様の埋土がある。つまり、S D141がある程度埋没し、中層の埋土が形成されていた段階で、S D140・143の埋没が始まったこととなる。よって、これらS D140・141・143は、S D141が先行していた可能性はあるが、同時併存していた時期もあつたと考えられる。S D142はS D143に切られるため、最も古いか、S D141との併存も考えられる。S D138の埋土はS D140埋土上層と同質であり、最終的な埋没は同時期と考えられる。

139号溝（S D139, 第80図）

A4地区西端に位置する中世の溝である。東西に直線的で、S D138に切られる。

144号溝（S D144, 第44図）

A4地区東部に位置する近世の溝である。他の遺構を切り、一部が途切れながら東西に直線的に延びる。土師器が出土するが、重複関係や調査区壁で確認される掘削面から近世と判断される。

147～149号溝（S D147～149, 第81図）

A10地区中央部に位置する中世の溝である。東西方向に直線的で、S D148とS D149は約2mの間隔をあけて連続する。それらの北側でS D147が6mの間隔を開けて平行する。S D148から珠洲（278）が出土する。

150～153号溝（S D150～153, 第81図）

A11地区西部に位置する近世の溝である。東西方向のS D150・151, 南北方向のS D152・153があり、道路側溝の可能性がある。S D150・151では、それらの間、もしくは南側に位置する現在の道路部分に路面が形成されていたと思われる。S D152・153は溝の中心間で3.5mを測る。S D150から唐津（279）、S D151から唐津（280）・伊万里（281～283）などが出土する。

154号溝（S D154, 第81図）

A11地区西部に位置する近世の溝である。南北に直線的な溝であるが、北端では2方向へ分岐し、中央では東西方向への張り出し部分がある。南端はS D151に接続しており、S D151とともに区画を構成する溝であった可能性が高い。越中瀬戸・伊万里（284）・唐津（285）・不明陶器（286）が出土する。

155・156号溝（S D155・156, 第81図）

A11地区中央部に位置する近世の溝である。南北に直線的だが、南側ではクランク状に屈曲する。S D155から伊万里・唐津（287）が出土する。

157号溝（S D157, 第81図）

A11地区東部に位置する近世の溝である。屈曲部で途切れるが、L字状に曲がる溝である。銅製の匙（356）が出土する。

158号溝（S D158, 第73図）

A11地区中央部に位置する近世の溝である。S E31～33を繋ぐ溝で、竹管を埋設している。越中瀬戸・伊万里・金属製品が出土する。

159号溝（S D159, 第36図）

A1地区中央部に位置する中世の溝である。L字状に屈曲する溝で、何らかの区画をなしていたと思われる。珠洲（288）・青磁（289）が出土する。

4 遺 物

（1）縄文時代～古墳時代の土器（第82～85図）

S K1には弥生土器の甕（1・2）・壺（3～5）がある。1・2は口縁端部内面にヘラにより刻目を施す。3は口縁内面に綾杉状の連続刺突を施す。

S K2には弥生土器の甕（6）があり、口縁内面に棒状工具先端による連続刺突が施される。

S K4には土師器の壺（7）があり、口縁部は外反して広口に開口する。

S D1Aには土師器の甕（8・9）・壺（10・11）がある。8・9ともに口縁部は外反して、くの字状に立ち上がる。口縁端部は、8が丸縁、9が平縁状を呈する。

S D3Aには須恵器の杯身（12）、土師器の高杯（13）がある。12は口縁端部内面に段がある。13は脚部に2孔1組の穿孔が2箇所施される。

S D3Bには土師器の甕（14）・高杯（15）がある。14は平縁で、くの字状に屈曲する。15はわずかに内湾気味に口縁部まで立ち上がる。

S D4には土師器の甕（16・17）・壺（18）・高杯（19）・器台（20）がある。19・20の脚部はハの字状に開く。

S D5には弥生土器の甕（21～24）・無頸壺（25）・有孔鉢（26）・有段鉢（27・28）・壺

(29)・器台 (30) がある。21・22 は平縁で、くの字状に口縁部が屈曲するが、22 の屈曲は弱い。23 は擬回線を施す有段口縁である。

S D13 には須恵器の杯身 (31) があるが、受部の破片である。

S D15 には土師器の甕 (32~34)・高杯 (35~39)・椀 (40)・壺 (41) がある。32~34 はくの字状の口縁部を呈するが、32・33 は外反、34 は外傾して立ち上がる。35~37 は杯部底面から口縁部が屈曲して立ち上がり、35・37 には明瞭な段が生じる。高杯脚部ではハの字状となる 38 と、裾部で屈曲して開く 39 がある。40 は半球状を呈する椀で、口縁端部で短く外反する。

S D19 は古代の溝であるが、弥生土器の甕 (42・44)、壺 (43) が混入する。42 は擬回線甕である。43 は無頸甕で、綾杉状の連続刺突を施す口縁帶を有する。44 は甕で、小波状を呈する口縁部の内面には綾杉文の連続刺突、その下段に垂下する直線文を施す。胸部上半の外面には直線文・簾状文があり、その下端に沿ってヘラ状工具先端により三角文が巡る。

S D106・107・123・124・128 は中世の溝であるが、縄文土器 (46)・弥生土器 (48)・土師器 (45・47) が混入する。46 は深鉢の底部で、編物圧痕が不明瞭ながら残る。48 は壺で、胸部最大径は下半にあり、強く屈曲する器形を呈する。肩部に直線文・簾状文、その下端に沿って扇形文を施す。扇形文による文様帶には瘤状小突起と 2 個 1 組の円形刺突がそれぞれ 2 箇所確認されるが、器面の半分が剥離しているため全体の箇所数は不明である。

包含層からは縄文土器 (49)・弥生土器 (50~52)・土師器 (53~55)・須恵器 (56) が出土した。49 は深鉢で口縁部は波状、胸部下半に膨らみを有する。口縁部から胸部上半にかけて直線・弧状の沈線文を施す。八日市新保Ⅱ式～御経塚式期と思われる。50 は壺で、口縁部には綾杉状の連続刺突を施した口縁帶、頸部には刻目を施した 2 段の突帯を巡らせる。51 は甕の胸部破片を円盤状に加工している。割口は研磨により平滑となる。外面には直線・斜行短線文が施される。52 は台付壺の胴部と思われる。53・54 は高杯の脚部で、ハの字状に開脚する。55 は壺で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。56 は杯身となる。

(2) 古代の土器 (第 85~88 図)

S E 1 には須恵器の蓋 (57)・土師器の甕 (58) がある。57 は内面に墨書があるが判読できない。「工」の可能性もある。58 は小型甕で、底部外面もケズりがなされる。

S D18 には須恵器の杯 (63・64)・蓋 (65・66)、土師器の椀 (67~72) がある。63 は杯 A、64 は杯 B である。65 は頂部外面に回転ヘラケズリを施し、口縁端部は短く垂下する。66 の口縁端部は丸みを持つ。67~69 は底部を欠いているが、70~72 は底部回転糸切りの椀 A である。

S D19 には須恵器の杯 (73~77)・瓶 (84)、土師器の椀 (78~83)・鍋 (85)・甕 (86・87) がある。73・74 は杯 A、75~77 は杯 B で、74 には口縁部に煤が付着している。78~83 の椀は、内湾して口縁部まで立ち上がる 78・79・82、外傾して直線的に立ち上がる 80・81、口縁端部で短く外反する 83 の器形がある。84 は瓶の頸部から肩部で、肩部には 2 条の沈線が巡る。85 は平底を呈し、底面はヘラナデを施す。86 は口縁端部の内面に煤が付着する。87 は小型甕で、端部内側は丸みを持って肥厚する。

S D20 には土師器の甕 (88) がある。口縁部はやや直立気味に立ち、端部内側は丸みを持って肥厚する。

S D23 には須恵器の杯 (89) がある。口縁部は外傾し直線的に立ち上がり、深身の器形を呈する。

S D90・94・97・98・102~104 のさく状遺構からは、須恵器 (90・92~97・99)、土師器 (91・

98)の出土がある。90・93・94は杯B, 96は杯A, 95・99は底部を欠いた杯である。96は底部と体部の境が明瞭で、口縁部は外傾して立ち上がる。92・97は蓋で、短く垂下した口縁端部は丸みを帯びる。91・98は甕の口縁部で、端部内側は丸みを持って肥厚する。

中世のS P 141, S K 23・49・50, S D 139・141に59~62・100・101が混入する。59・61は土師器の椀で、59の底部は回転糸切りがなされる。60は須恵器で、双耳瓶の口縁部か。62は土師器の鍋で、被熱により変色する。100・101は土師器の甕で、100は口縁端部を上方へ折り曲げ、先端をやや尖り気味に仕上げる。101は口縁端部が上下に拡張し、丸みを帯びた端面を形成する。

包含層からは、須恵器(102~123)・灰釉陶器(125~127)・土師器(128~137)・製塙土器(138)の出土がある。102~109・111は杯Aで、底部から体部への立ち上がりが丸みを持つ102・103と、底部と体部の境が明瞭な104~109がある。後者は体部が外傾し、直線的に立ち上がるが、108・109は口縁端部で上方に屈曲する。103には不明文字、104には「千口(万)」の墨書が底部外面になされる。110は椀Aで、回転糸切りの底部から体部が内湾しつつ立ち上がる。111は杯Aの底部で、内面に漆の付着が認められる。112~118は杯Bで、身の深い112・113と、浅い114~117がある。117は底部外面に「万」の墨書がある。119・120は蓋で、口縁端部は短く垂下し、119では内側に巻き込み気味となる。121は壺の蓋である。122は瓶、123は横瓶、124は甕である。125~127の灰釉陶器は、灰オーリーブ色の釉が薄く掛かる。125は椀で口縁端部が強く外反する。K14窯式期に比定されるが、釉はほとんど剥落している。126は皿で、高台は下端がやや先細りし、断面は二等辺三角形状に近い角高台を呈する。器厚は薄く、内面見込みは重ね焼きのために無釉となる。こうした特徴からK90窯式期の1型式(斎藤2000)に比定される。127は瓶であるが、時期は不明である。128は椀A、129は皿である。130・131は小型甕で、130は外傾した口縁部の端面は、やや丸みを帯びた方形とする。131の口縁部は端部内側が丸みを持って肥厚する。132~136は甕である。132の口縁部の端面は、やや丸みを帯びた方形となる。133は口縁部の先端を上方へ引き上げる。134は口縁部の先端を上方へ引き上げた後、外方へ折り曲げることによって、端部外面に沈線が巡る。135は134の形態が鈍化したもの。136は口縁部の端部内側が丸みを持って肥厚する。137は鍋で口縁部の端部内側が丸みを持って肥厚し、端部外面には浅い沈線が巡る。138の製塙土器は棒状尖底を呈する。

(3) 中近世の土器・陶磁器(第88~94図)

A 捩立柱建物

S B 1の柱穴S P 4・11には中世土師器(139・140)があり、共にND II類である。

S B 2の柱穴S P 23には羽口(141)がある。内径は推定3.0cmとなる。

S B 7の柱穴S P 61・67には中世土師器(142~143)がある。142・143はND II類、144は口縁端部を摘み上げて三角形を呈するNC I類である。

S B 11の柱穴S P 95には珠洲の甕(151)がある。頭部から短い口縁部を水平に外方へ引き出す。II期に比定され、SK 27との接合関係がある。

B 井戸

S E 2には中世土師器(145)・白磁(146)がある。145はND II類、146は高台が高く直立し椀V類である。

S E 3では珠洲の擂鉢(147)があり、III期となる。

S E 4では珠洲の擂鉢(148)があり、口縁端部にかけてわずかに先細りとなることから、II~III期に比定する。

S E 6 では瀬戸美濃の鉢皿（149）がある。口縁部端面は外傾し、体部は直線的に立ち上がる。体部立ち上がりの外傾は強く、扁平な器形を呈していることから中Ⅲ～Ⅳ期に比定する。

S E 7 の中世土師器（150）は、やや深身となるND II類である。S E 12 の中世土師器（152）は、口縁端部に丸みを帯びるND II類である。

S E 14 には中世土師器（153～156）がある。153 は口縁端部に丸みを帯びるNC I類、154 は深身でNC III類、155・156 はND II類となる。

S E 15 には中世土師器（157・158）がある。157 は深身のNC III類、158 はND II類となる。

S E 16 には中世土師器（159・160）がある。159 はNC I類、160 はND II類となる。

S E 18 には中世土師器（161～165）がある。161 は口縁端部に面取りがなされ、平底を呈するNB II類で、S E 20 との接合関係がある。162 はNC I類、163 は深身でNC III類、164・165 は器高の低いND II類となる。

S E 19 の中世土師器（166）はNB I類で、口縁部と底部との境は明瞭で、低い段が生じる。S E 20 の中世土師器（167）はND II類となる。

S E 21 の中世土師器（168）はNB I類で、口縁端部には弱い面取りがなされる。

S E 22 には中世土師器（169・170）・珠洲（171）がある。169 はNB I類で口縁端部に面取りがなされ、170 はNC I類となる。171 は外反し方頭となる壺の口縁部で、II期に比定する。

S E 23 の中世土師器（172）はNB II類で、口縁端部には面取りがなされ断面方形を呈する。

S E 24 の中世土師器（173）はNB I類で、口縁端部を上方に摘み上げ断面三角形気味となる。

S E 26 の中世土師器（174）はロクロ成形のRB類である。体部から口縁部へ内湾して立ち上がる。

S E 29 には越中瀬戸の皿（175・176）・唐津の皿（177）がある。175 の底部外面には「O」の墨書きがある。177 の内面見込みは蛇の目釉剥ぎで、九州陶磁編年IV期となる。

S E 30 は越中瀬戸の皿（178）は口縁部が直立する「向付」の形態となる。

S E 34 には伊万里の椀（179）・信楽の灯明受皿（180）がある。179 は外面に丸文を施し、九州陶磁編年V～II期以降となる。180 は信楽焼編年4期以降（畠中2007）と考えられる。

C 土 坑

S K 6 の珠洲（186）は、口縁端部を外方へ引き出し嘴頭を呈する壺で、II期に比定する。

S K 7 には中世土師器（181・182）がある。181 はNB I類で、口縁端部は丸みを帯びる。182 はNB II類で、口縁端部が面取りされ方形を呈する。

S K 8 には中世土師器（183・184）・珠洲（185）がある。183 は口縁部に丸みを帯びるNB I類、184 はND II類となる。185 は壺で、底部には回転糸切り痕が残る。I～II期に比定する。なお、185 は181 と胎土・焼成が類似しており、同一個体の可能性もある。

S K 11 の中世土師器（187）はND II類となる。

S K 20 の中世土師器（188）はNB II類で、口縁端部は面取りがなされ断面方形を呈する。

S K 21 の中世土師器（189）はND II類であるが、深身の器形を呈し、NC III類の影響が窺える。

S K 22 にはNC I類の中世土師器（190）の他、羽口（191）がある。

S K 24 には中世土師器（192～194）があり、192・193 はND II類、194 は口縁端部に丸みを帯びるNB I類である。

S K 26 には中世土師器（195～201）がある。195～197 はNB I類であるが、195・196 は口縁端部に面取りがなされ、197 は丸みを持った仕上がりとなる。198～201 はND II類となる。

S K27 の珠洲（202）は口縁端部に波状文を施す擂鉢であるが、器厚は一定で、口縁端部は外傾する。御目も疎らに施されており、IV期と考えておく。

S K29 の中世土師器（203）はND II類で、口縁端部は面取りがされる。

S K30 の中世土師器（204・205）は、204 がNB II類、205 がND II類となる。共に口縁端部に面取りがなされる。

S K31 の中世土師器（206・207）は、浅く内湾ながら立ち上がる器形を呈し、NJ類となる。

S K32 の中世土師器（208）は深身でNC III類となるが、器厚はやや薄い。

S K34 の中世土師器（209・210）はND II類で、209 では口縁端部が短く摘み出される。

S K37 には中世土師器（211～214）・白磁（215）・青磁（216）がある。211・212 はNB I類、213・214 はND II類となるが、いずれの口縁端部も面取りがなされる。215 は見込みの巻線が小さな段となり、高台は露胎となることから椀IX-2 a類と考えられる。216 は龍泉窯系青磁で、蓮弁文に鑄はなく、椀II-a類となる。

S K38 には中世土師器（217～219）があり、217 はNC III類、218・219 はND II類となる。

S K39 の中世土師器（220）はND II類で、内面に煤が付着する。

S K40 の中世土師器（221）はNB I類で、口縁端部は丸みを帯びる。

S K41 の中世土師器（222）はND II類である。

S K42 には龍泉窯系青磁（223）があり、杯III-3 a類で、施釉は厚い。

S K43・44 の中世土師器（224・225）はロクロ成形のRB類で、底部に回転糸切り痕を残す。

S K46 の中世土師器（226）はND II類で、口縁端部はやや尖り気味となる。

S K47 には珠洲の甕（231）がある。口縁部は強く屈曲し水平近くになり、口縁部と胴部との境には段が生じる。III期～IV 1期に比定する。

S K48 には中世土師器（227・228）・白磁（229）・青磁（230）がある。227 はNB II類で、口縁端部を面取りし断面方形を呈する。228 はND II類となる。229 は体部破片で時期は特定し難いが、椀III～VII類のいずれかと思われる。230 は龍泉窯系青磁の椀II-b類である。

S K51 には珠洲の擂鉢（232）がある。内面に波状の御目があり、II期に比定される。

S K54 の中世土師器（233）はNJ類で、浅く内湾しながら立ち上がる器形を呈する。

S K55 の唐津（240）は九州陶磁編年V期の擂鉢で、見込みと高台外面に砂敷き重ね積み痕が残る。

S K59・63 の中世土師器（234・235）はND II類である。

S K64 には中世土師器（236～238）・珠洲（239）がある。236 はNB I類で口縁端部に面取りがなされ、237・238 はND II類となる。239 はII期の擂鉢で、口縁端部にかけて器厚を減じる。

D 溝

S D106 には中世土師器（241～246）・珠洲（248～250）がある。241～245 はNB I類で、口縁端部は丸みを帯びる。246 はND II類となる。248・249 は擂鉢で、248 はIII期、249 はI～II期となる。250 の甕は、くの字に外傾する短い方頭となり、V期に比定する。

S D109 の中世土師器（251）はNB I類で、口縁端部に面取りがなされる。

S D113 には中世土師器（254・255）・白磁（253）がある。254・255 はND II類である。253 は体部破片のため判然としないが、椀III～VII類が考えられる。

S D115 の青磁（252）は内面に点描文、外面に櫛目文を施す同安窯系青磁椀I-1 b類である。

S D118 の珠洲（256）はIII～IV期と思われる擂鉢である。

S D119 には珠洲 (258)・越中瀬戸 (257) がある。258 はⅣ期の擂鉢で、片口が付く。257 は「向付」形態の皿である。

S D124 の珠洲 (259) はⅢ期の甕で、円頭の口縁部を水平近くまで折り返す。

S D125 の陶錘 (260) は鉄軸が薄く掛かる。

S D126 には中世土師器 (262)・珠洲 (261・263) がある。262 はN J 類で口縁部は外反し、底部には 6×5 mm の方形に焼成後穿孔がなされる。261 はⅠ期の壺で、口縁端部を摘み上げる。263 はⅠ期の擂鉢で、先細りした口縁端部の内側を摘み出す。

S D130 には珠洲 (264)・中世土師器 (265) がある。264 は甕の口縁部で、くの字状に屈曲し、先端はやや先細りとなる。口縁内面には工具押圧痕が巡り、Ⅱ期に比定する。265 はND II 類となる。

S D133 の中世土師器 (266) はNB I 類で、口縁端部は丸みを帯びる。

S D137 には中世土師器 (267~269)・瓦質土器 (270) がある。267 はNB I 類で、口縁端部は面取りする。268 はNB II 類で、口縁端部は面取りし断面方形を呈する。269 はND II 類である。270 は足鍋で、外傾した口縁端部を上方へ折り返す。内面はヨコハケ、外面はナデを施す。外面には煤が付着し、被熱による器面の剥離も顕著である。

S D138 の中世土師器 (271・272) はロクロ成形のRB類で、271 はやや内湾気味に浅く開く器形を呈し、272 には回転糸切り痕が残る。

S D141 の中世土師器 (273) はロクロ成形のRB類で、回転糸切り痕が残る。

S D145 には珠洲 (274)・唐津 (275)・陶錘 (276) がある。274 はⅡ期の擂鉢で、口縁部に向かって先細りとなる。275 は九州陶磁編年Ⅲ期の擂鉢で、玉縁状の口縁部となる。276 は陶錘の約半分が残存した状態で 47.6 g である。

S D146 の青白磁 (277) は櫛状工具により渦文が施される瓶で、いわゆる梅瓶と思われる。

S D148 の珠洲 (278) は、口縁部をコの字状とし、嘴頭の口縁端部としたⅠ~Ⅱ期の甕である。

S D150 の唐津の鉢 (279) は九州陶磁編年Ⅳ期で、白化粧土による刷毛目文様が施される。

S D151 には唐津 (280)・伊万里 (281~283) がある。280 は見込みが蛇の目釉剥ぎの皿で、砂目などは無いことから、九州陶磁編年Ⅳ期に比定される。281・282 は見込みが蛇の目釉剥ぎの皿で、九州陶磁編年Ⅳ期に比定される。281 は二重格子文を施し、口縁部外縁を打ち欠く。282 は見込みに五弁花文のコンニャク印判を施す。283 は見込みが蛇の目釉剥ぎの端反椀で、九州陶磁編年Ⅴ期となる。

S D154 には伊万里 (284)・唐津 (285)・不明陶器 (286) がある。284 は見込みが蛇の目釉剥ぎとなる皿で、二重格子文を施し、九州陶磁編年Ⅳ期に比定される。285 は内面に囲線・波状の陰刻を施し、灰釉を施釉する。砂目積み痕があり、九州陶磁編年Ⅲ期とする。286 は底地不明の鉄釉椀で、胴部中位で括れを持つ。

S D155 の唐津 (287) は、九州陶磁編年Ⅳ期の椀である。

S D159 には珠洲 (288)・青磁 (289) がある。288 はⅡ期の甕で、口縁部をやや下方に引き出し、尖り気味に仕上げる。289 の龍泉窯系青磁は内面に片彫蓮弁文を施す椀 I~2 類である。

S D160 の中世土師器 (290) はNB II 類で、口縁端部に面取りし、断面方形に仕上げる。

E 包含層出土

中世土師器は 291~294 がある。291・292 はロクロ成形のRB類で、292 には回転糸切り痕が残る。293 はND II 類で、口縁端面に面取りがなされる。294 はN J 類で、浅く内湾しつつ立ち上がる。

珠洲は295～310がある。295～303は擂鉢である。295はI～II期で、内湾しつつ立ち上がり、器厚は口縁にかけてやや先細りとなる。296はII期で、先細りとなった口縁部の内面を摘み上げ気味に仕上げる。297～300はIII期で、胴部から口縁部まで均一な器厚となる。301・302はIV期で、口縁部がやや拡張する。303はV期で、内傾する口縁端面に波状文を施す。304の四耳壺はI～II期で、肩部には波状文を施す。305の壺はII期で、方頭のくの字状口縁となる。306～309は甕で、307・308はI～II期、309はII期、306はIII期に比定する。310は胴部破片を円盤状に加工した面子である。

八尾として311がある。口縁部は水平に外屈した後、端部を上方へ折り曲げる。明瞭なN字状の口縁形態まで至らない段階の製品であり、生産地の京ヶ峰窯における「第1群土器b類」(酒井1985)に相当する。

白磁には312～316がある。312は碗IV類で、大きな玉縁状の口縁を持つ。313はVI-2類で、口縁端部で水平に屈曲し、口径は13.9cmと小さい。314は内面に櫛目文を施し、碗V-1c・d類などに相当する。315は高台内のケズリは浅く、内面見込みには沈線が巡り、碗IV-1a類かと思われる。316は壺の胴部で、肩の屈曲が緩やかで、内面にも施釉が認められることからIII-1類に比定する。

青磁には317～322がある。317は同安窯系青磁I-1b類で、内面に点描文が認められる。318～322は龍泉窯系青磁で、318～320はII-b類、321はIV類、322はI-1c類となる。322の見込みには「金玉満堂」の印文が施される。

瀬戸美濃には323～325がある。323の底御皿は高台が高く、端部は丸みを持つことから前III～中I期と思われる。324・325は御皿で、詳細時期は不明である。

越中瀬戸には326～328・331がある。326・327は皿で、内面に釉止めの段は無い。328は小型の壺、331は擂鉢である。

唐津には329の皿があり、見込みが蛇の目釉剥ぎで、高台内に墨書があるが判読できない。九州陶磁編IV期に比定する。

土人形の330は片膝を立てた座像である。

(4) 木製品・石製品・金属製品 (第95～98図)

木製品として332～355がある。332～337は杭で、332は杭C、333～336は杭B、337は杭Aである。これらを含め溝に打設されていた杭13点を樹種同定したところ、全てスギを利用していた(以下の樹種同定結果については、本章：5自然科学分析を参照)。338は棒状を呈し、片端には抉り状の加工を施す。339～341は漆器である。339は碗で、高台は低い。340の皿は高台が低く、見込みには「丶」状の文様が描かれる。341の椀は器形が不明だが、内面に扇文様が描かれる。339はカツラ、他はケヤキを材に用いる。久々忠義氏による編年(久々1986)を参考にすると、339・340は器形からI期となる。341もI期に該当する器形の可能性があるが、扇文様からIIa期と考えておく。塗装膜分析によれば、全て炭粉下地層で漆2層塗りの製品であった(本章：5自然科学分析を参照)。342の櫛は背が直線的で、目は細かい。343は隅を斜めに切り落とした板材で、折敷の底板かと思われる。345～353は箸で、全てスギを用いる。354の曲物はSE15の水溜に転用されていたもの。355は薄く細い材を2本送り、2本潜りで編んだ編物で、籠状のものと思われる。材はアスナロを利用する。

金属製品には356の匙がある。部分的に炭化物の付着が認められる。

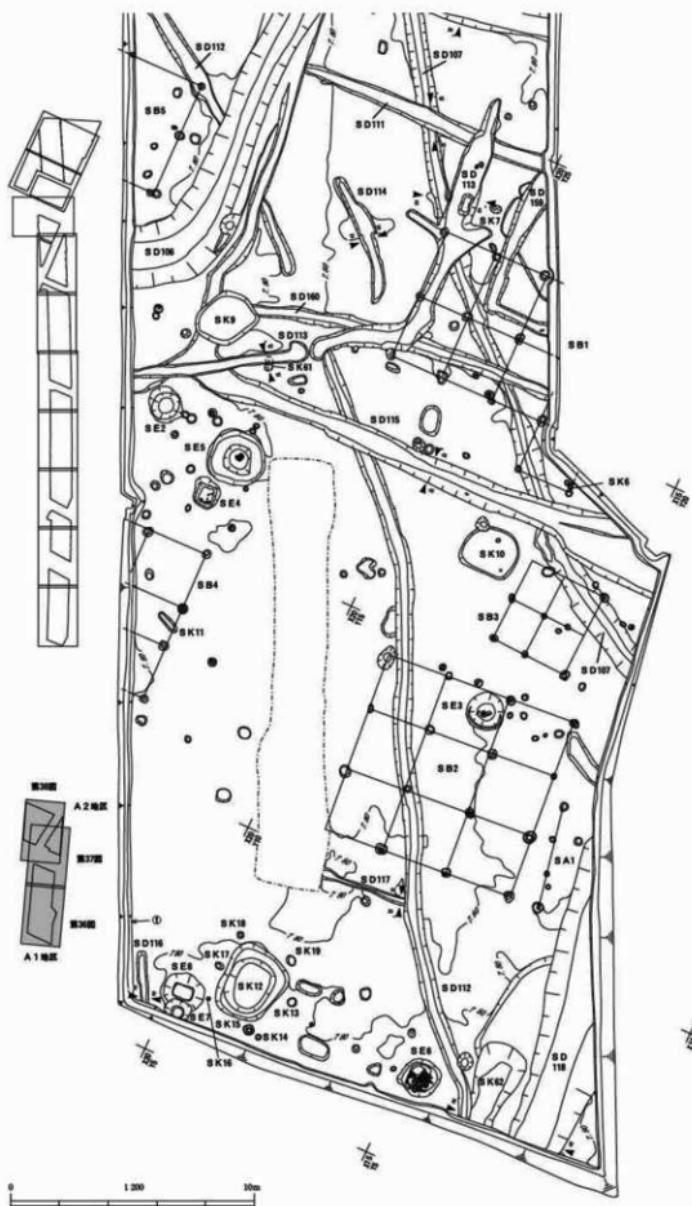
石製品として357～367がある。357～359は擦切石器で、側縁部に研磨痕が認められる。357は緑色片岩、358は粘板岩を石材とし、产地は不明だが県外からの搬入の可能性が高い(本章：5自然科学分析を参照)。360は緑色を呈する変質紋岩で、玉作りの石材となる。施溝分割のための擦り切

り痕が認められる。361は頁岩製の抉入柱状片刃石斧で、抉り部分は長さ3.9cmとやや長い。362の定角式磨製石斧は蛇紋岩を石材とし、産地は富山県と新潟・長野県の県境付近となる「青海一白馬岳地域」の可能性がある（本章：5自然科学分析を参照）。363～367は砥石で、出土遺構や地区的様相から、366は古代以前、その他は中近世の所産と思われる。

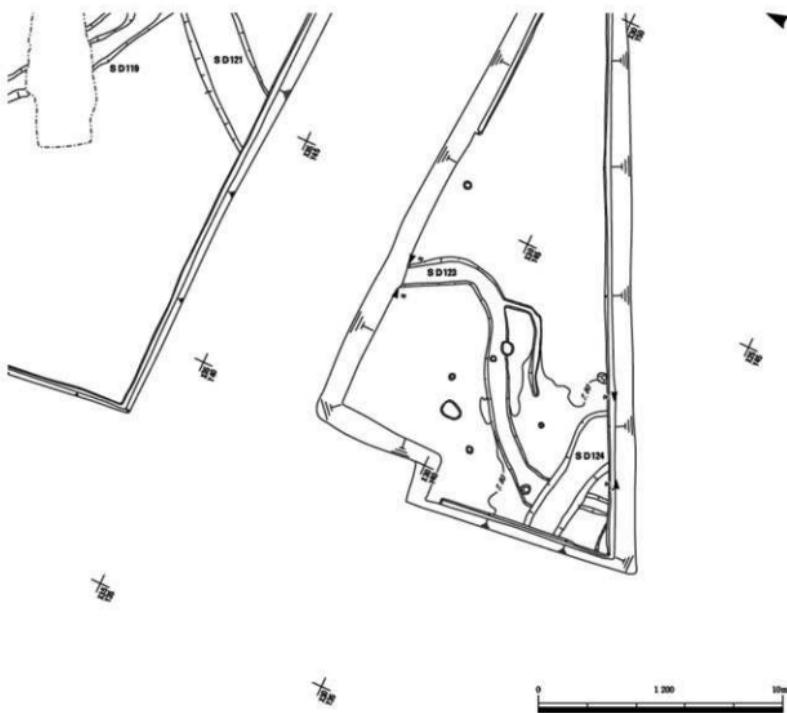
（青山 晃）

参考文献

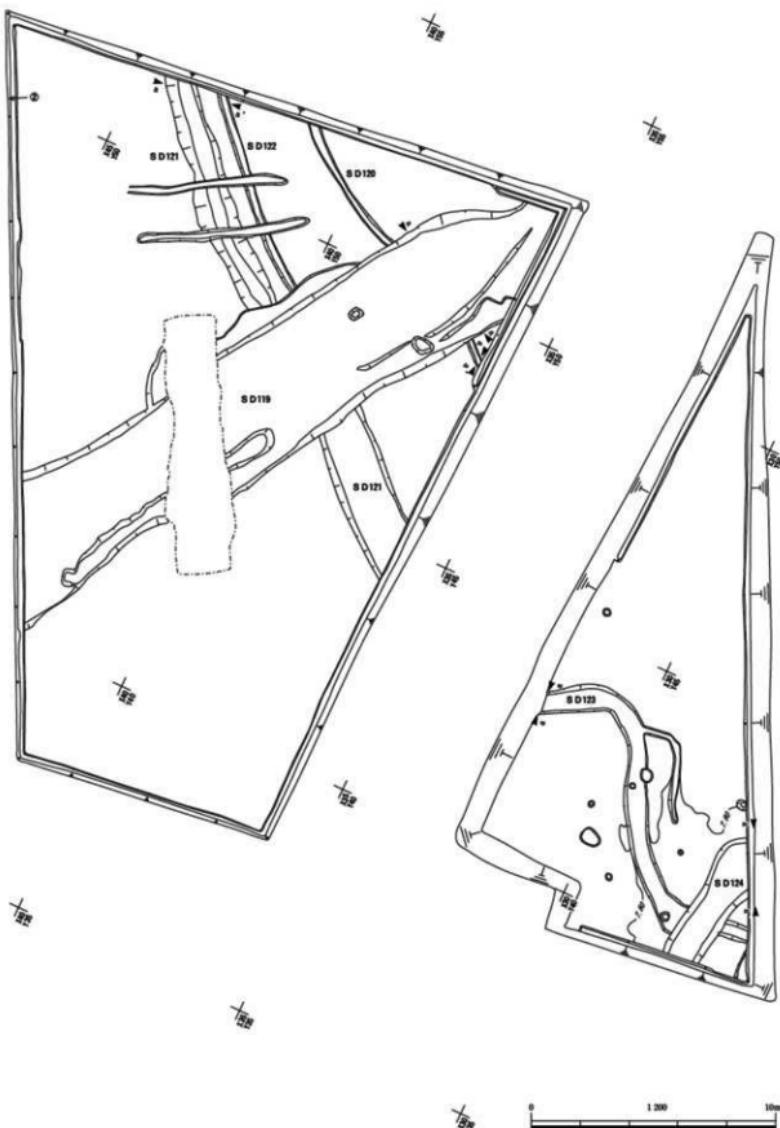
- 河西健二 2010 「堅穴住居、古墳、井戸状遺構－平成21年度の調査から－」『富山考古学研究』第13号 富山県文化振興財団
久々忠義 1980 「富山県内出土の漆器について」『大境』第10号 富山考古学会
齋藤孝正 2000 「附論 猿投窯出土の灰釉・綠釉陶器碗・皿類の変遷」『日本の美術』No.409 越洲窯青磁と綠釉・灰釉陶器
酒井重洋 1985 「Ⅲ 京ヶ峰古窯跡」『富山県八尾町 長山遺跡・京ヶ峰古窯跡』八尾町教育委員会
富山市教育委員会 2006 『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
畠中英二 2007 『続・信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版



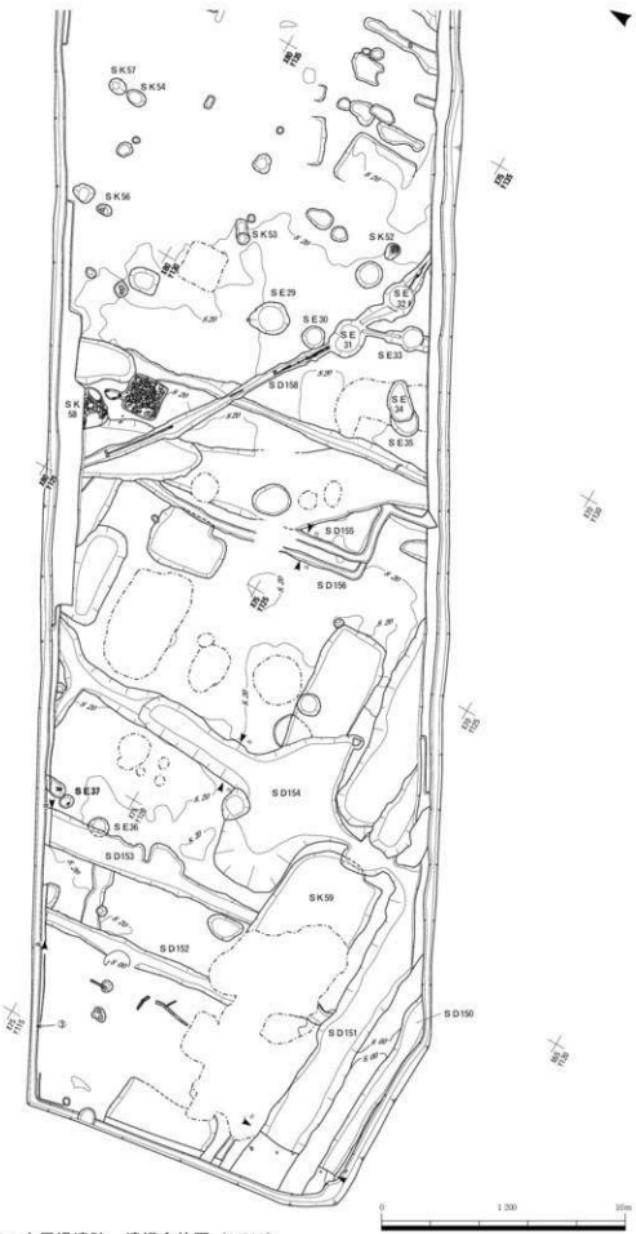
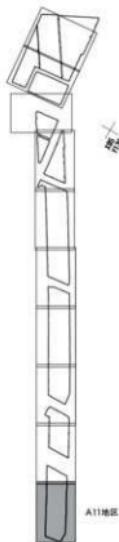
第36図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図 (1/200)



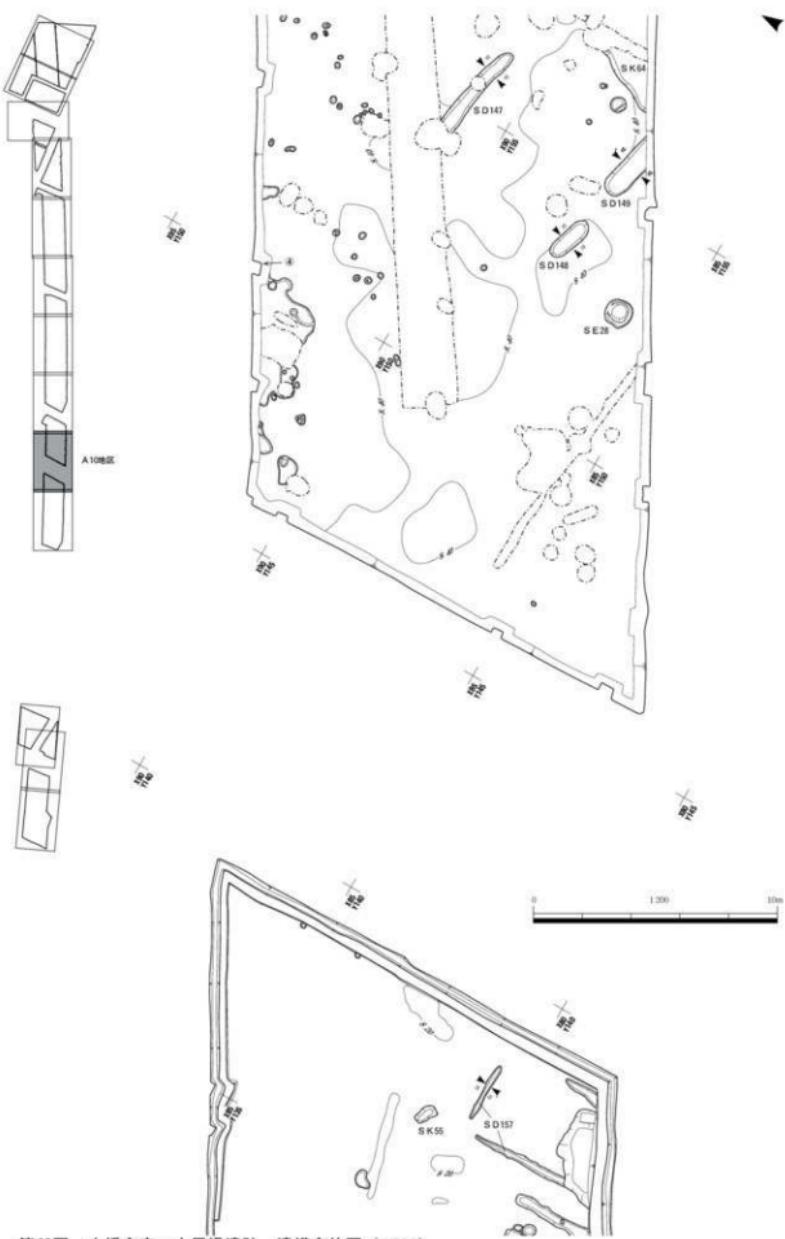
第37図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図 (1/200)



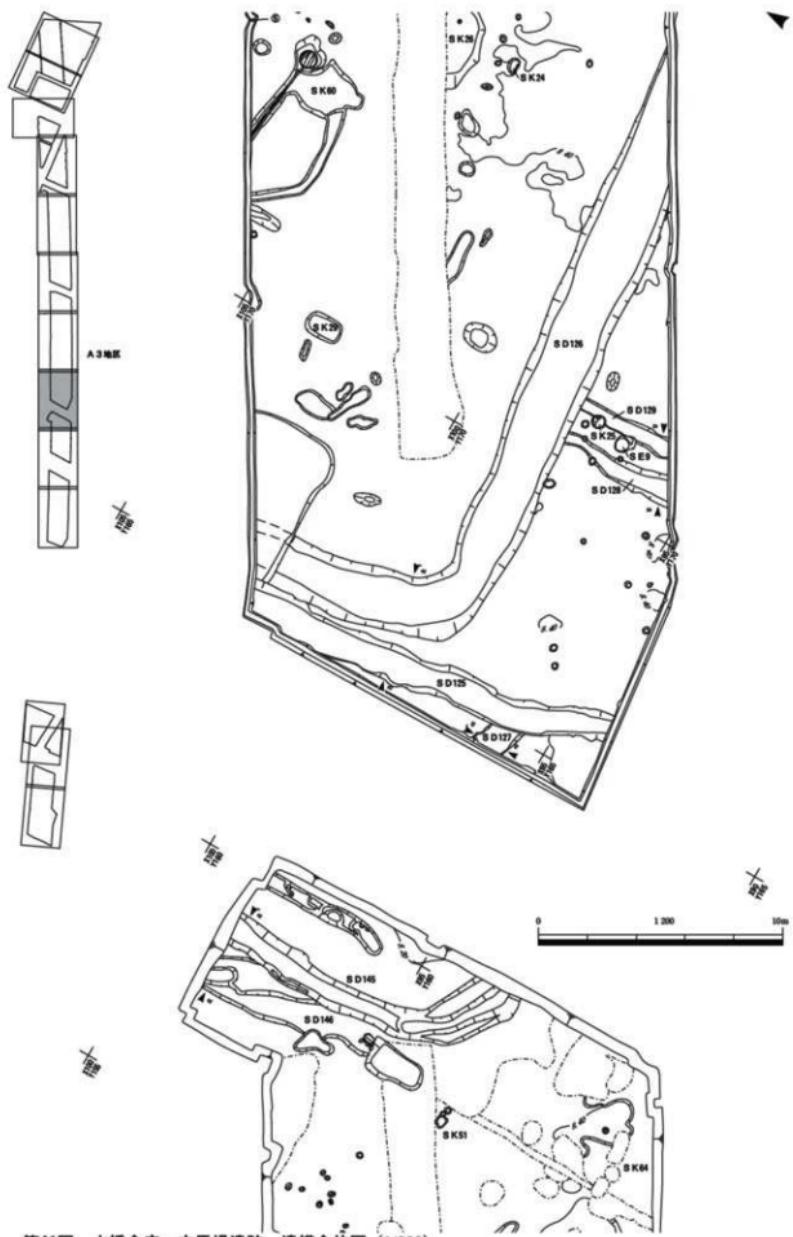
第38図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図 (1/200)



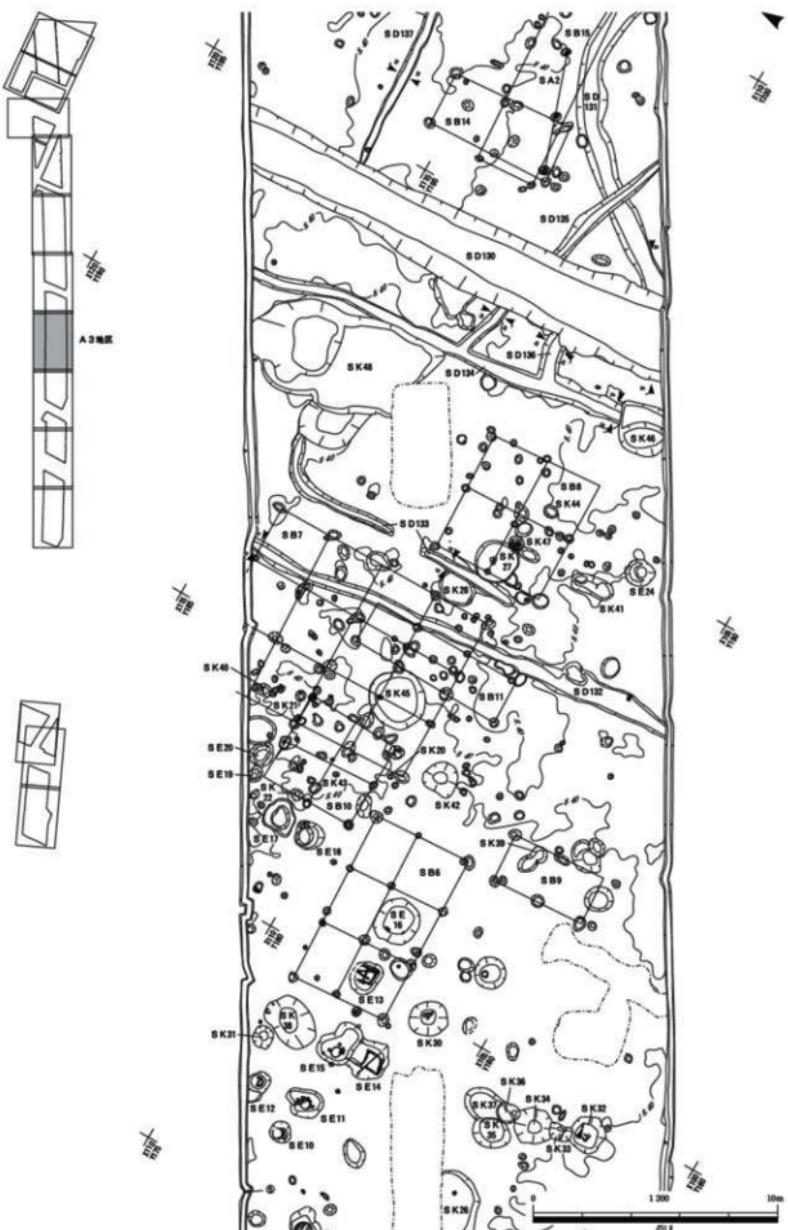
第39図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図 (1/200)



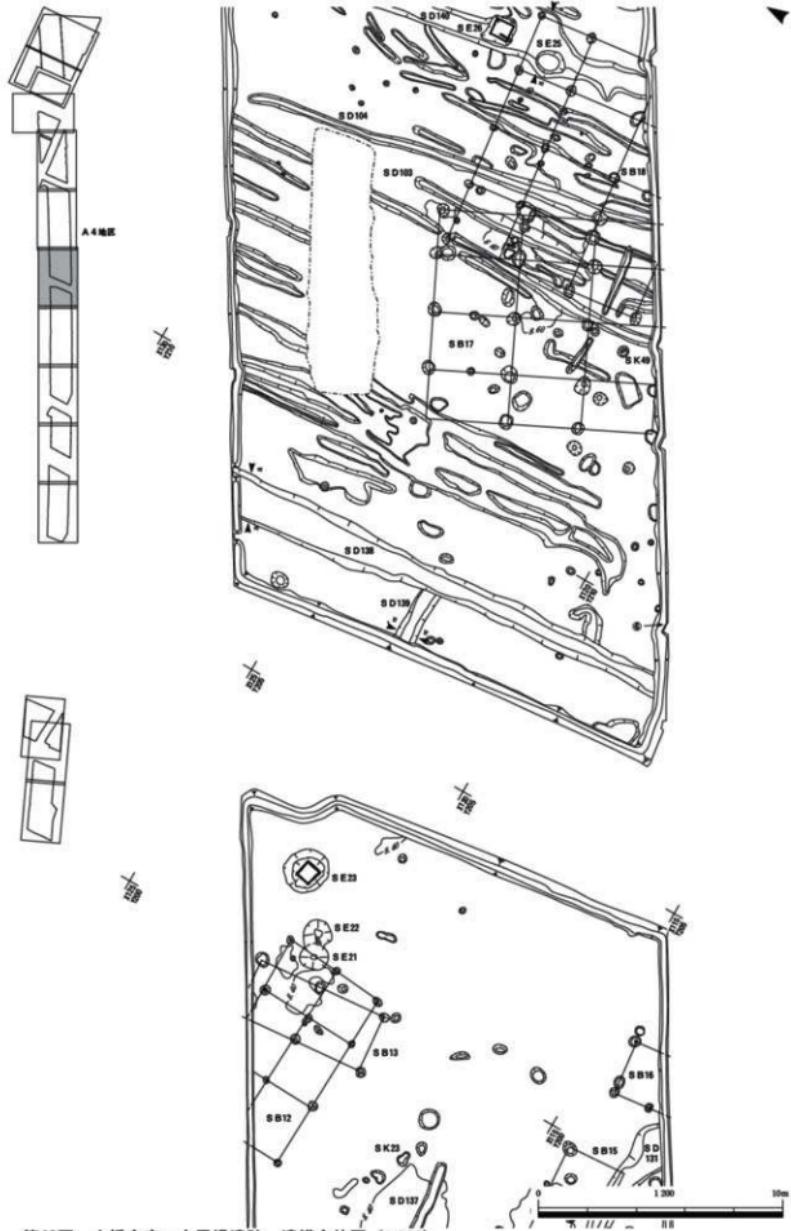
第40図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図 (1/200)



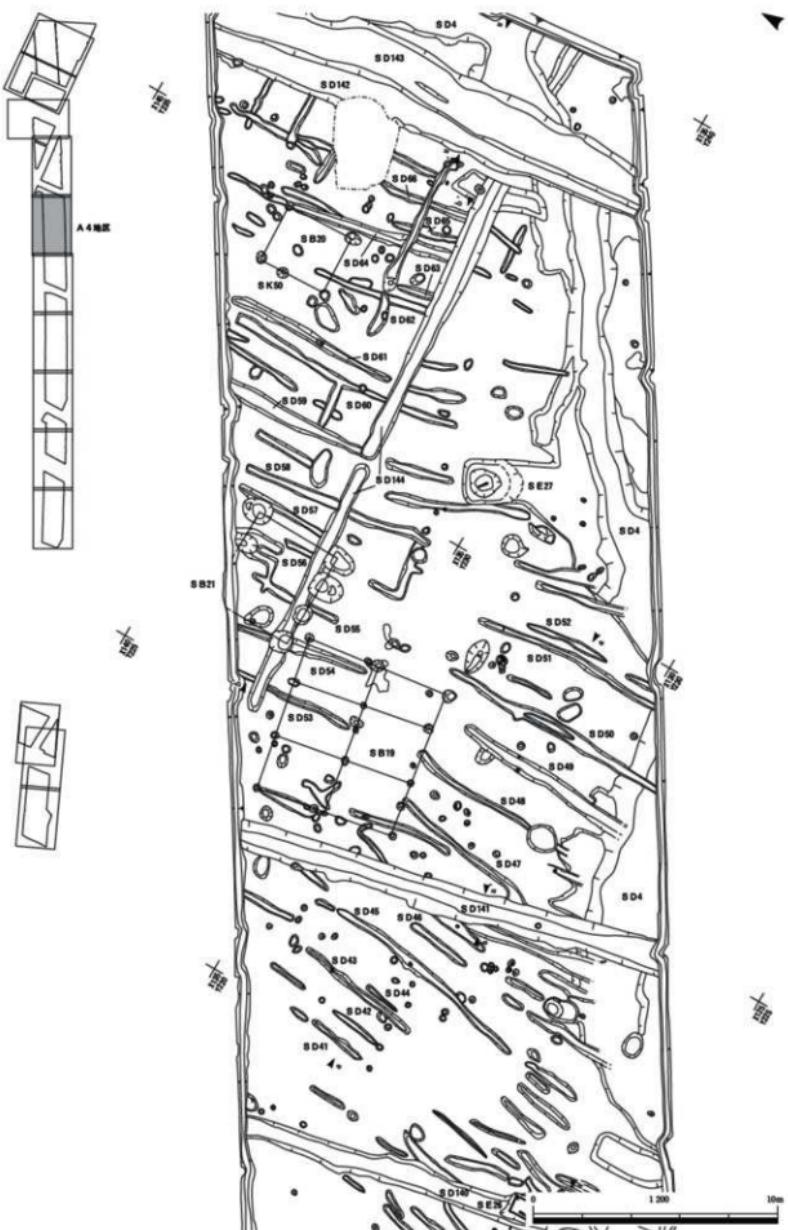
第41図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図 (1/200)



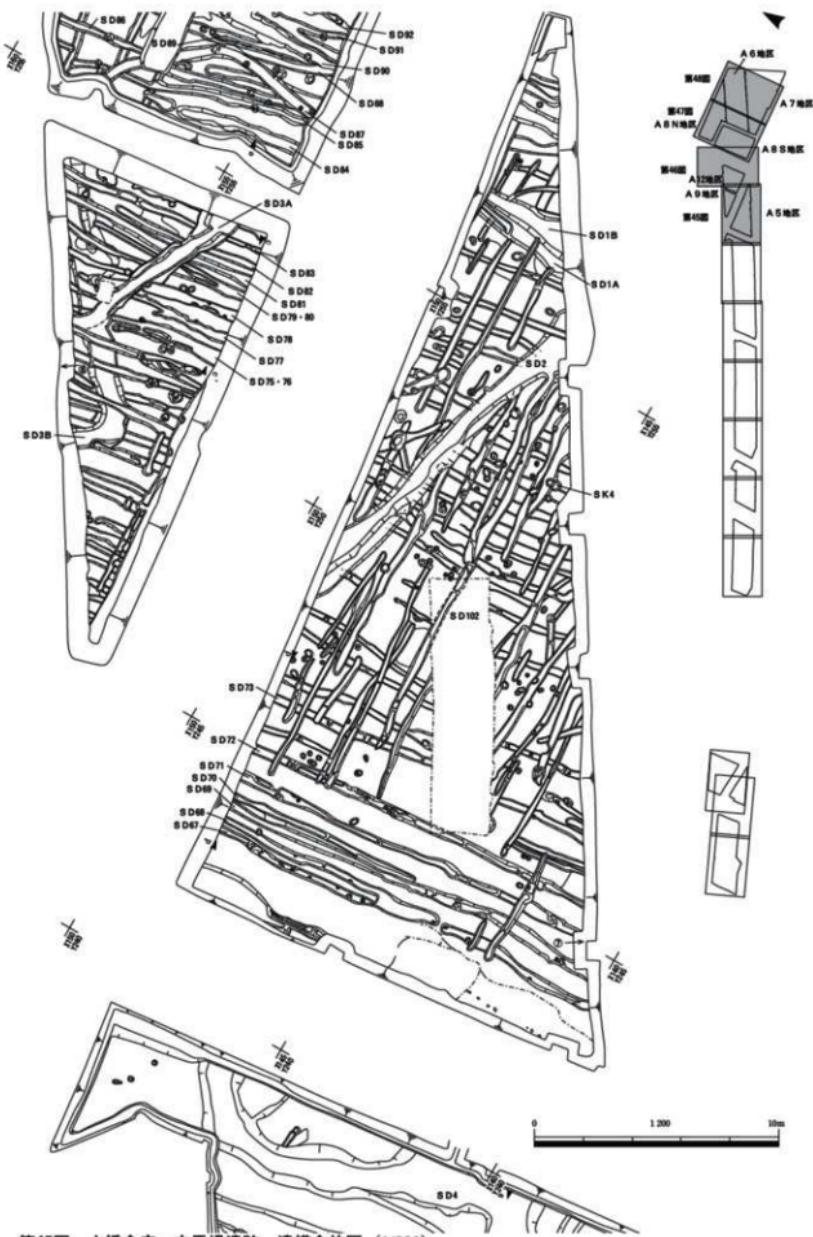
第42図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図 (1/200)



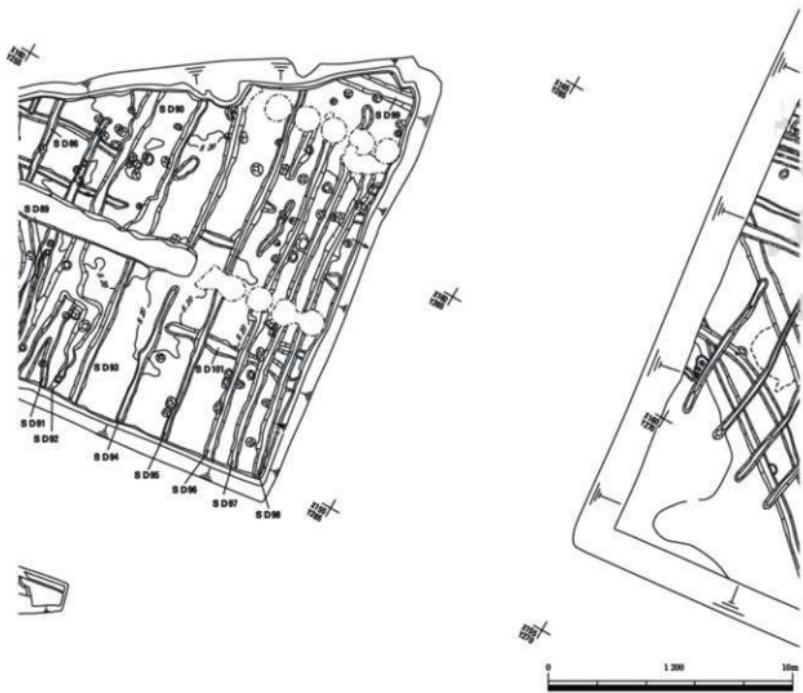
第43図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図 (1/200)



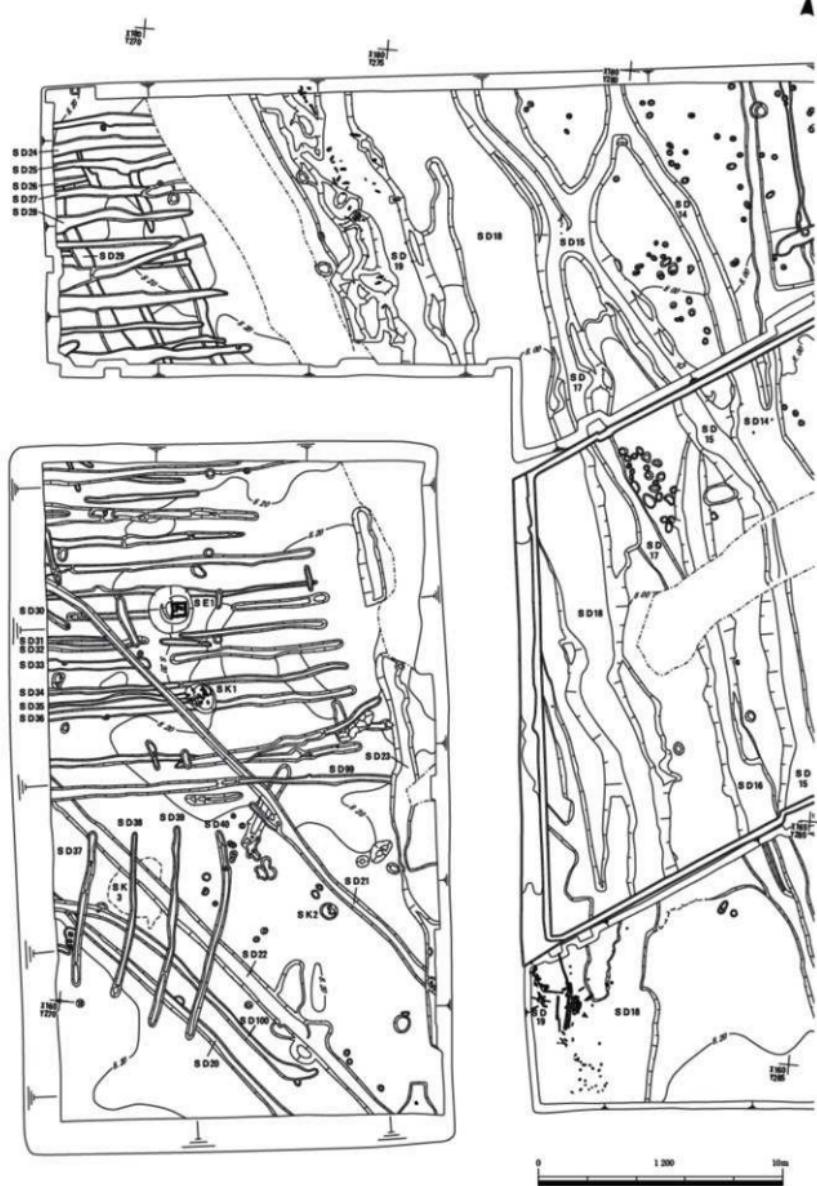
第44図 水横金広・中馬場遺跡 遺構全体図 (1/200)



第45図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図 (1/200)



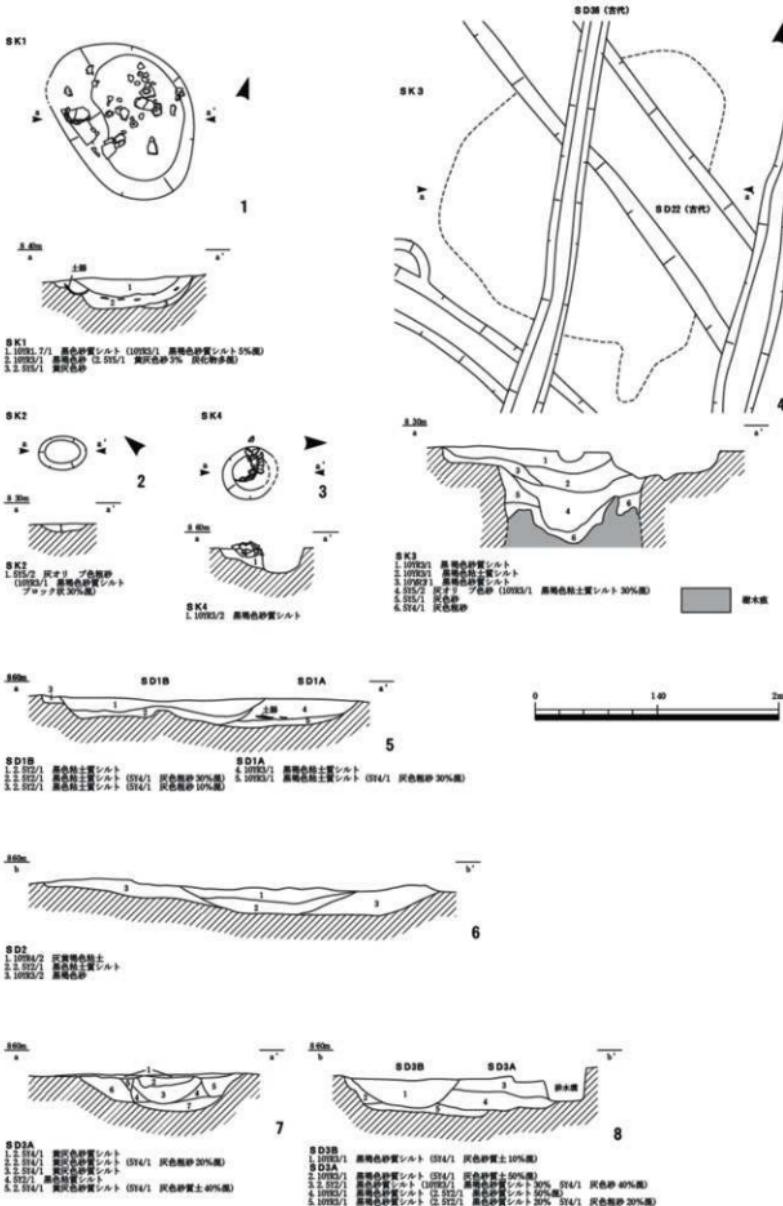
第46図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図 (1/200)



第47図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図 (1/200)

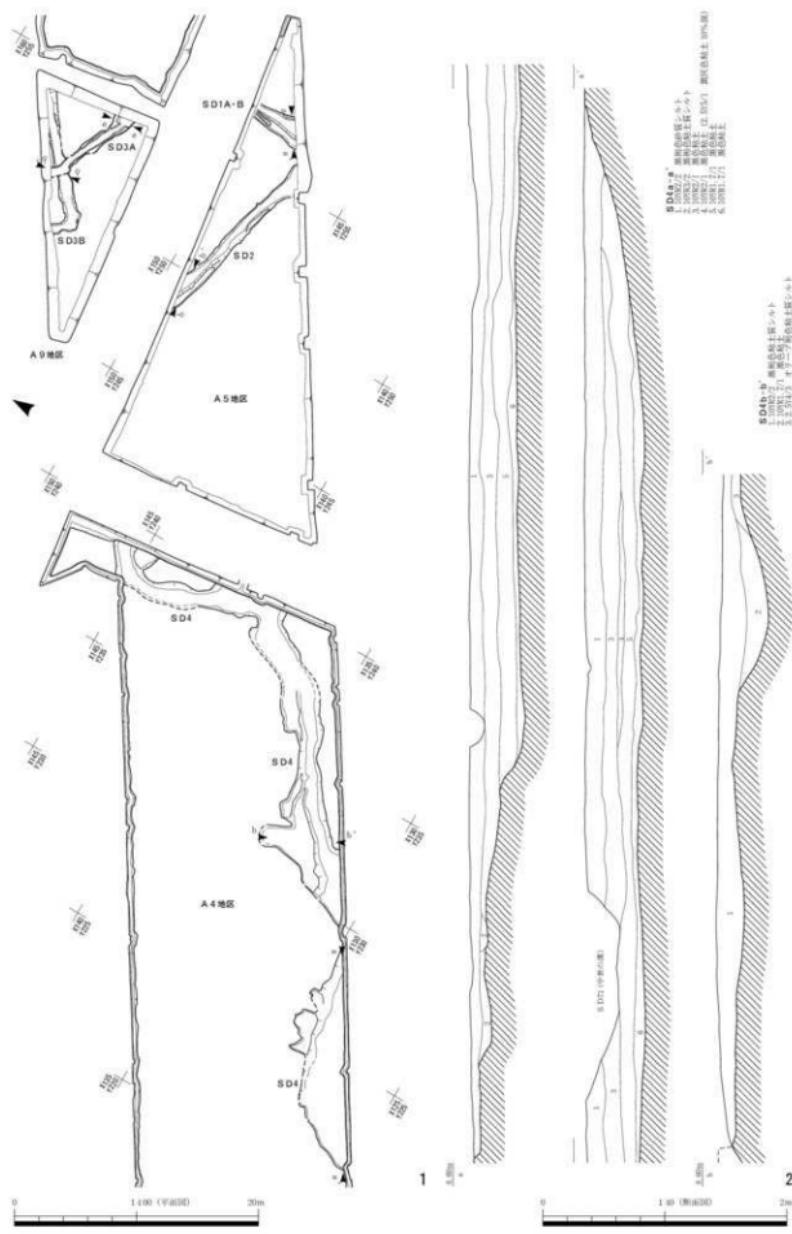


第48図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構全体図 (1/200)



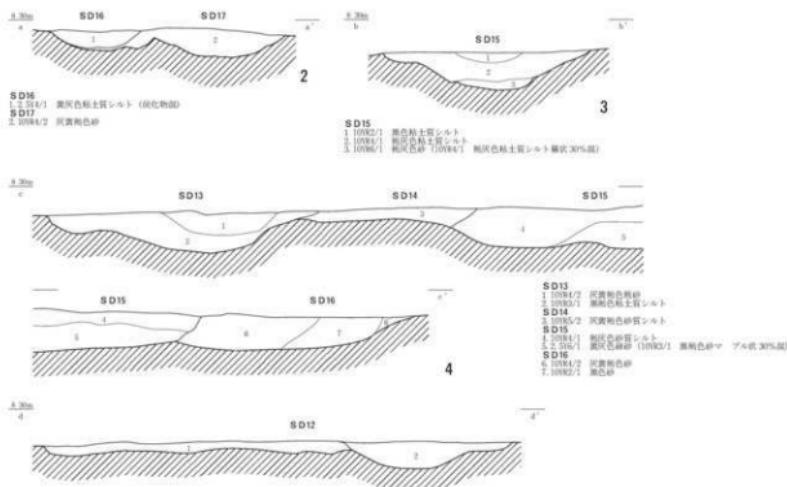
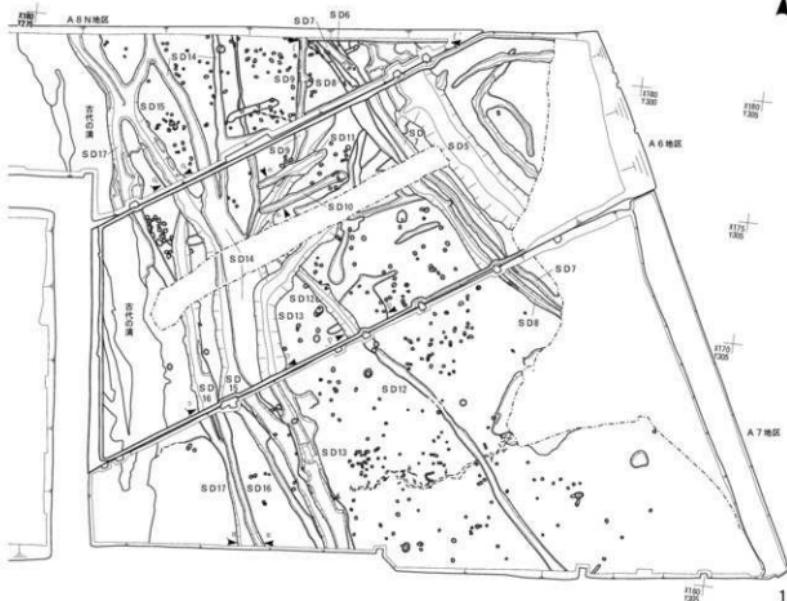
第49図 水槽金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. SK1 2. SK2 3. SK4 4. SK3 5. SD1A·SD1B 6. SD2 7. SD3A 8. SD3A·SD3B



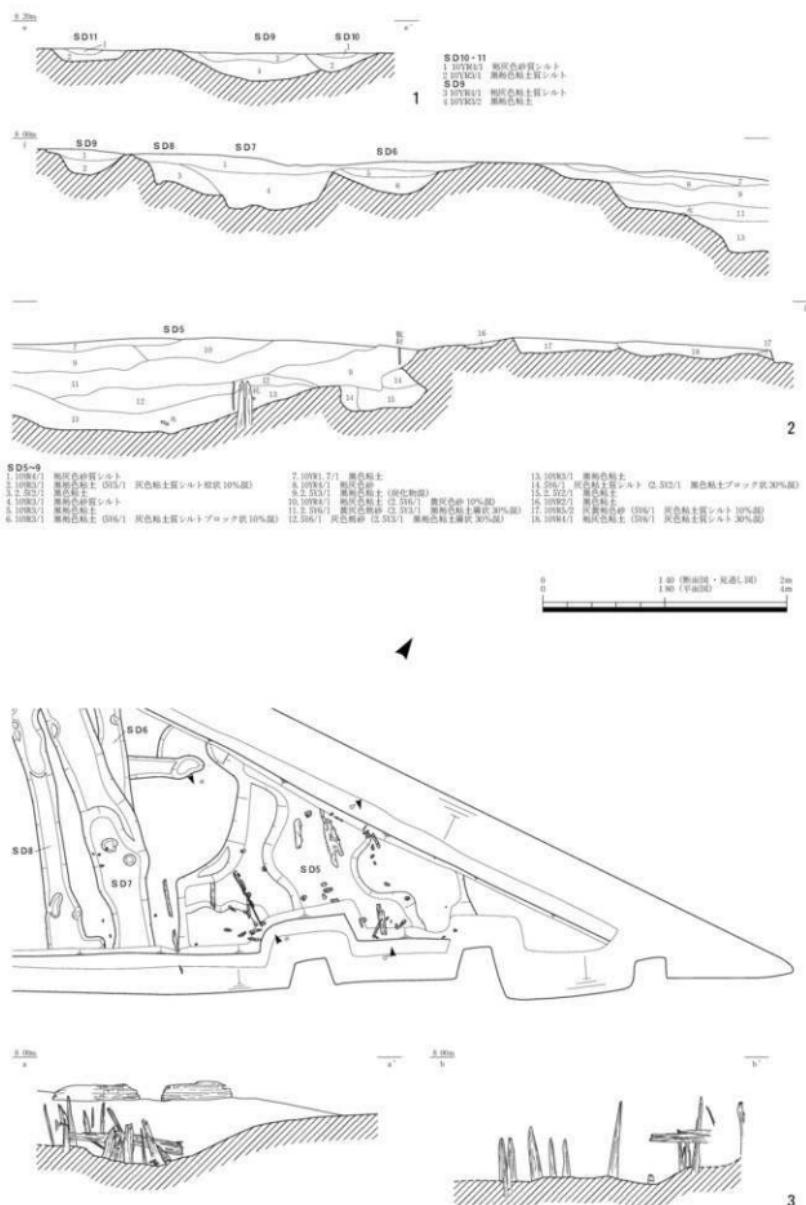
第50図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. SD1~SD4 2. SD4



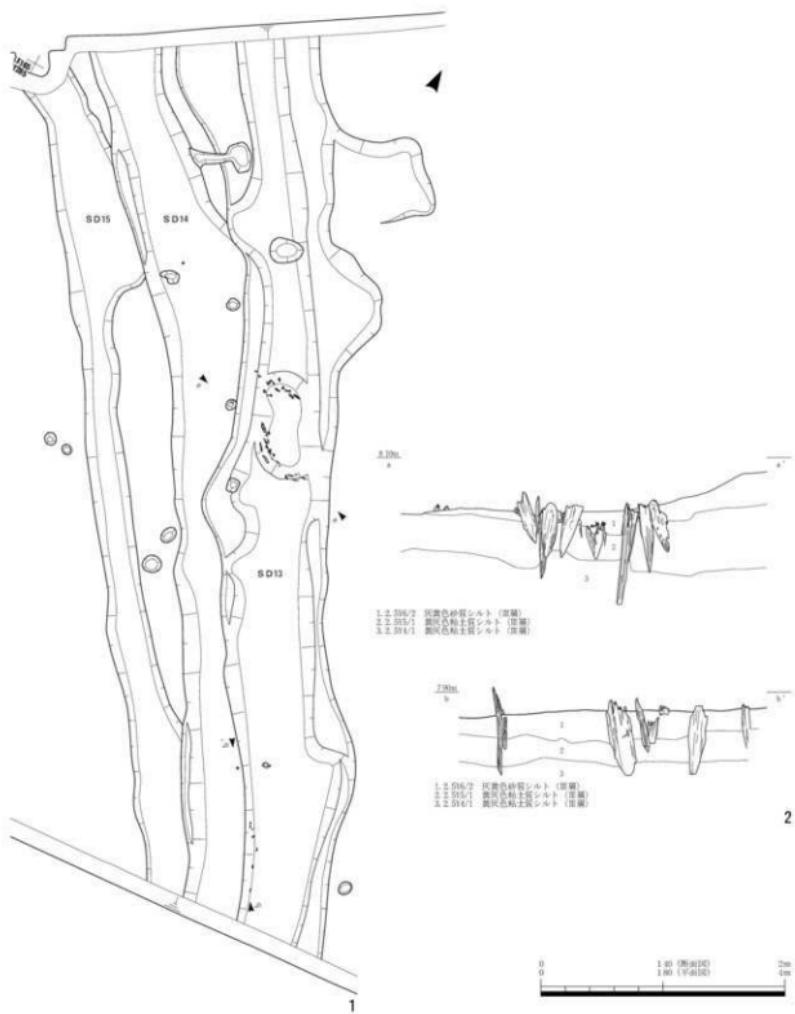
第51図 水横金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. SD5～SD17 2. SD16・SD17 3. SD15 4. SD13～SD16 5. SD12



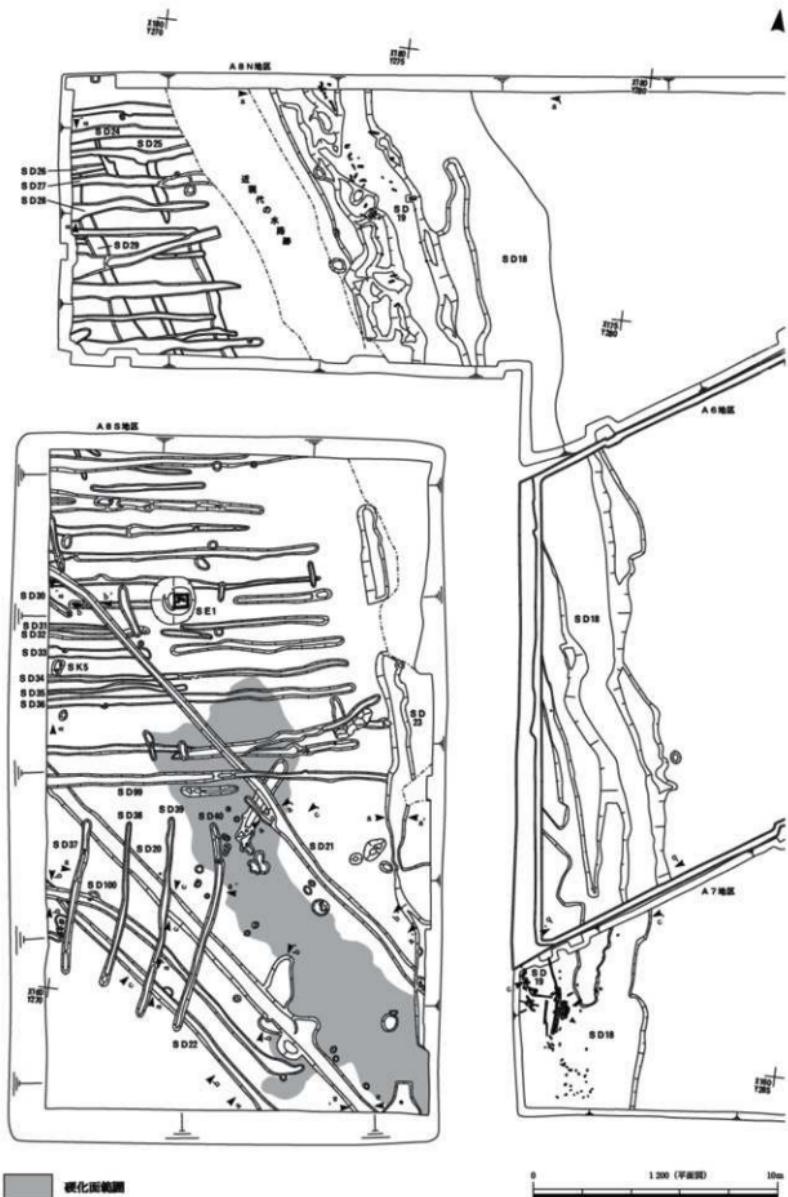
第52図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. SD9～SD11 2. SD5～SD9 3. SD5杭列検出状況



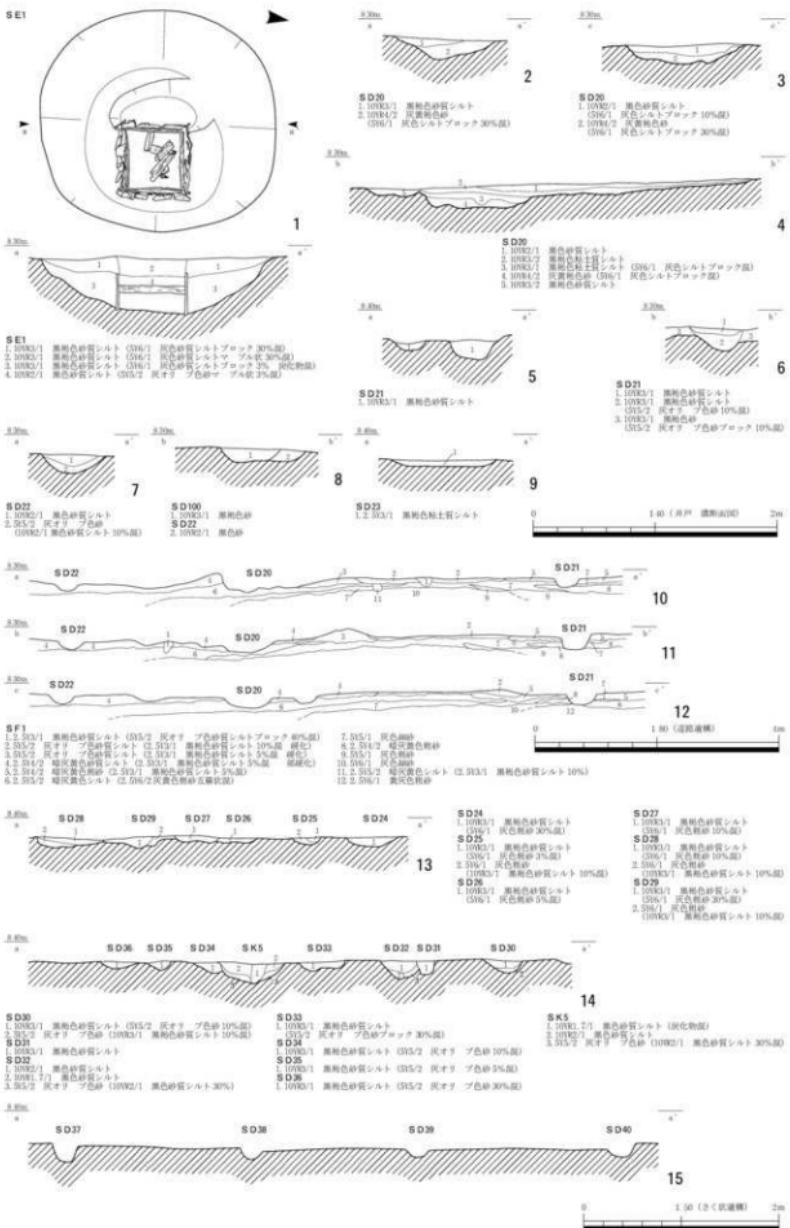
第53図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. S D13杭列検出状況 2. S D13杭列断面



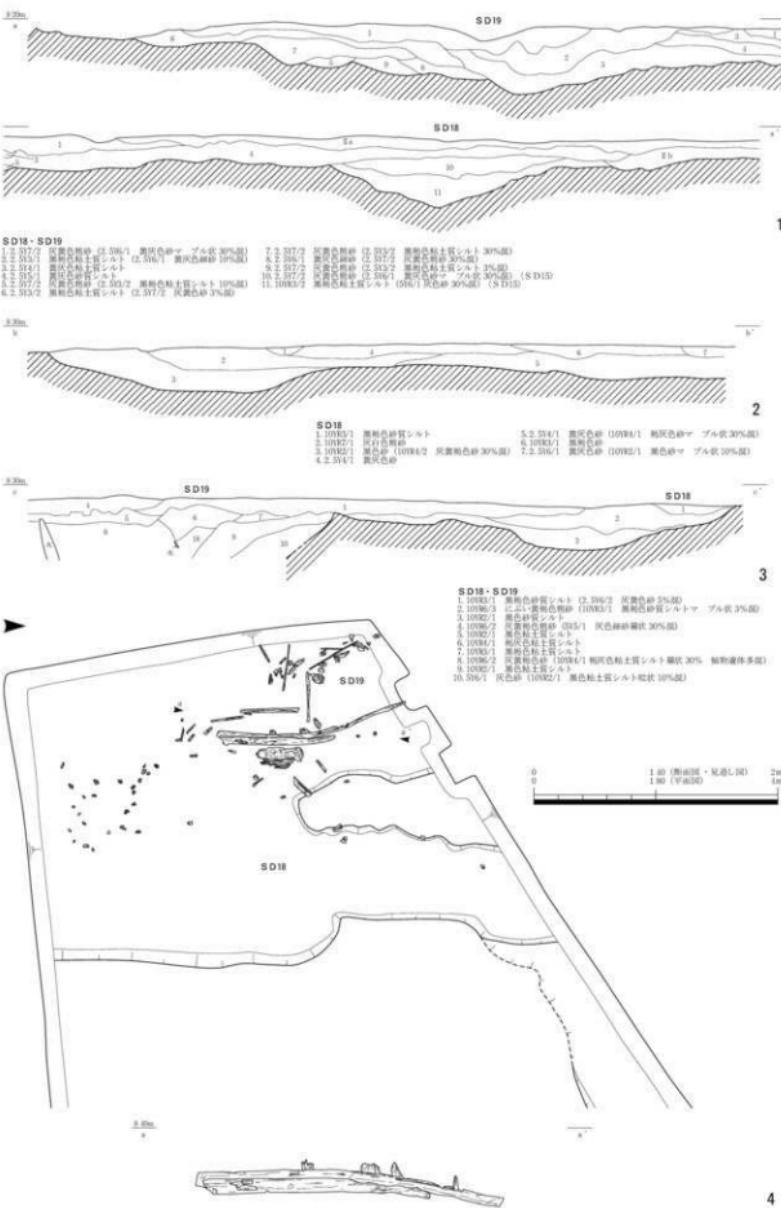
第54図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

A6·A7·ASN·A8S 地區 古代遺物圖



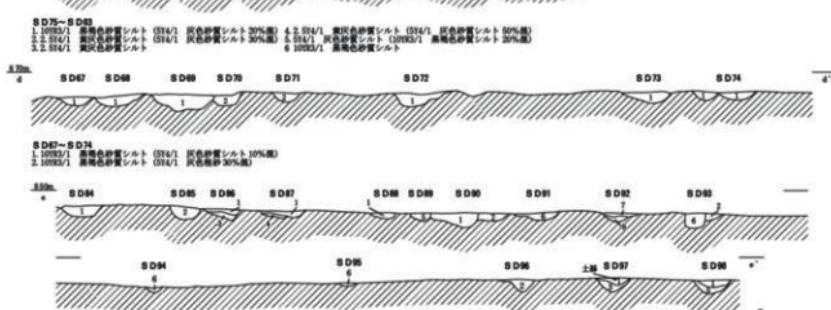
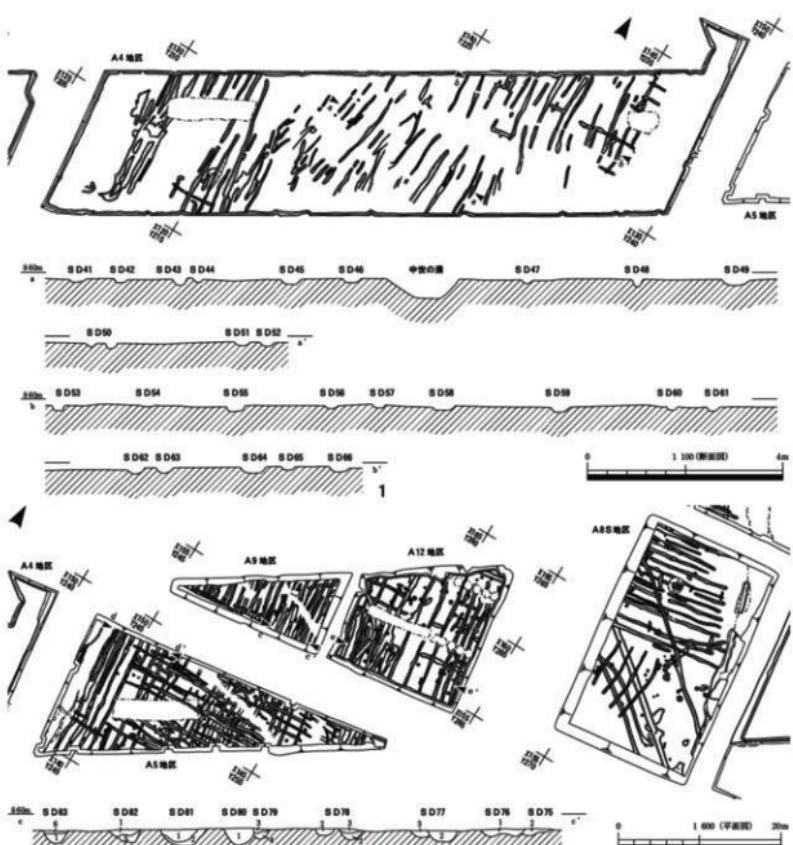
第55図 水橋金庄・中馬場遺跡 遺構実測図

1. S E1 2~4. S D20 5~6. S D21 7~8. S D22~S D100 9. S D23 10~12. S F1 13. S D24~S D29
14. S K5~S D30~S D36 15. S D37~S D40



第56図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1~3: SD18; SD19 4: SD18; SD19 框列输出状况



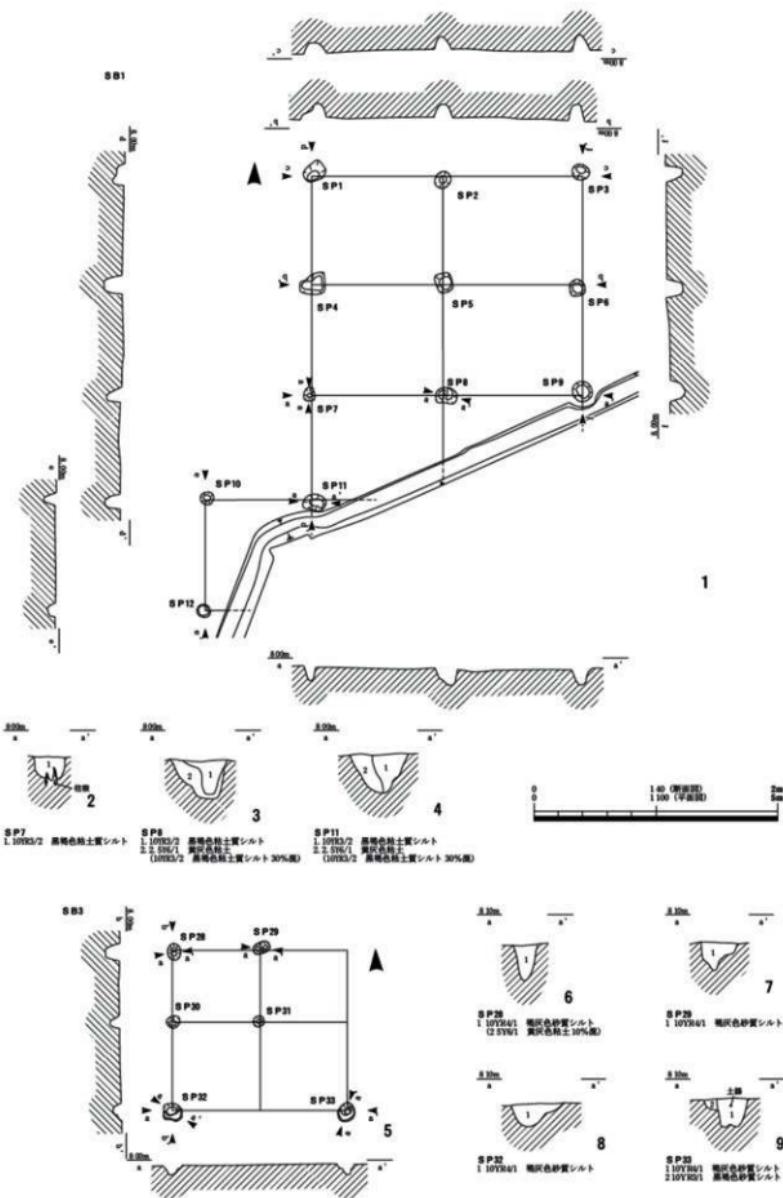
S D67～S D74
 1. 100% / 黒褐色鉄質シート (SD4/1 黒色鉄質シート 20%混)
 2. 100% / 黑褐色鉄質シート (SD5/1 黑色鉄質 30%混)
 3. 100% / 黑褐色鉄質シート (SD6/1 黑色鉄質 30%混)
 4. 100% / 黑褐色鉄質シート (SD7/1 黑色鉄質 30%混)

S D67～S D74
 1. 100% / 黑褐色鉄質シート (SD4/1 黑色鉄質シート 10%混)
 2. 100% / 黑褐色鉄質シート (SD5/1 黑色鉄質 30%混)

S D64～S D93
 1. 2.5% / 黑褐色鉄質シート (7.5% / 黑色鉄質 10%混)
 2. 2.5% / 黑褐色鉄質シート (7.5% / 黑色鉄質 15%混)
 3. 2.5% / 黑褐色鉄質シート (7.5% / 黑色鉄質 15%混)
 4. 2.5% / 黑褐色鉄質シート (7.5% / 黑色鉄質 15%混)
 5. 2.5% / 黑褐色鉄質シート (7.5% / 黑色鉄質 15%混)
 6. 2.5% / 黑褐色鉄質シート (7.5% / 黑色鉄質 20%混)
 7. 2.5% / 黑褐色鉄質シート (7.5% / 黑色鉄質 25%混)
 8. 2.5% / 黑褐色鉄質シート (7.5% / 黑色鉄質 40%混)

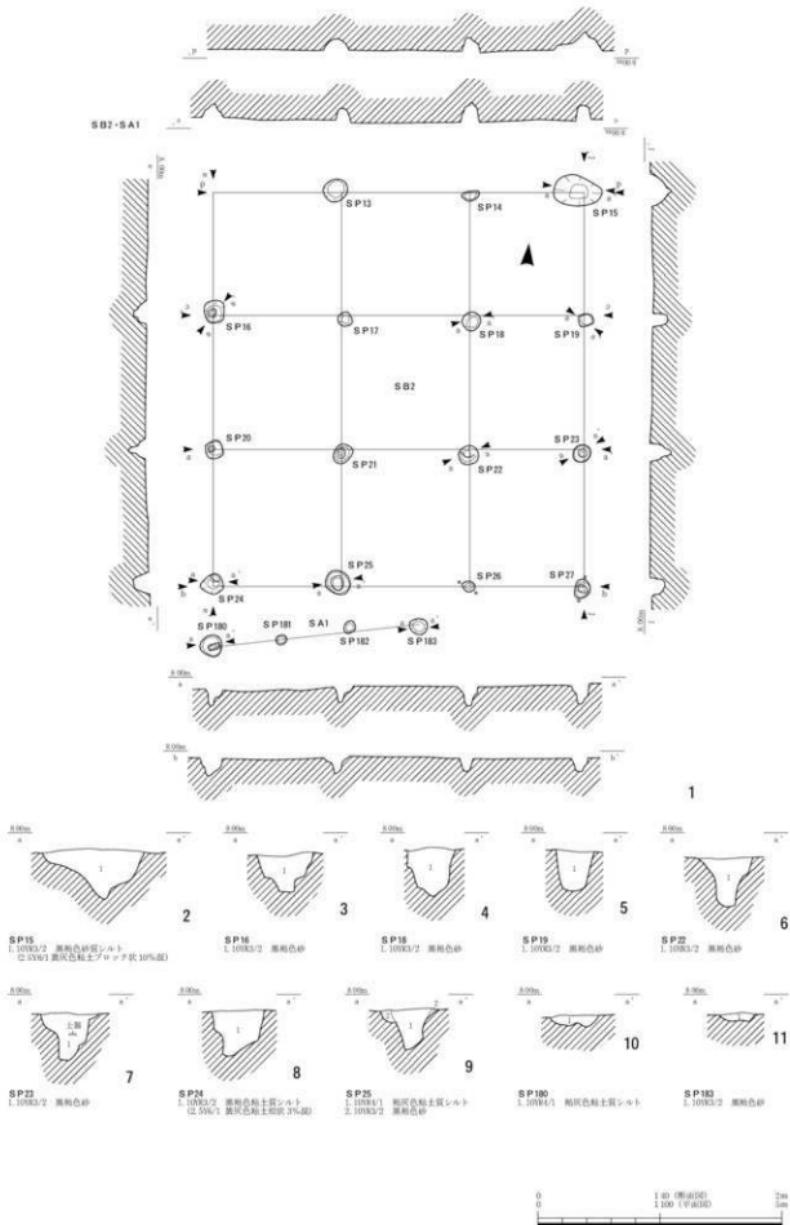
第57図 水槽金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. S D41～S D66 2. S D67～S D98



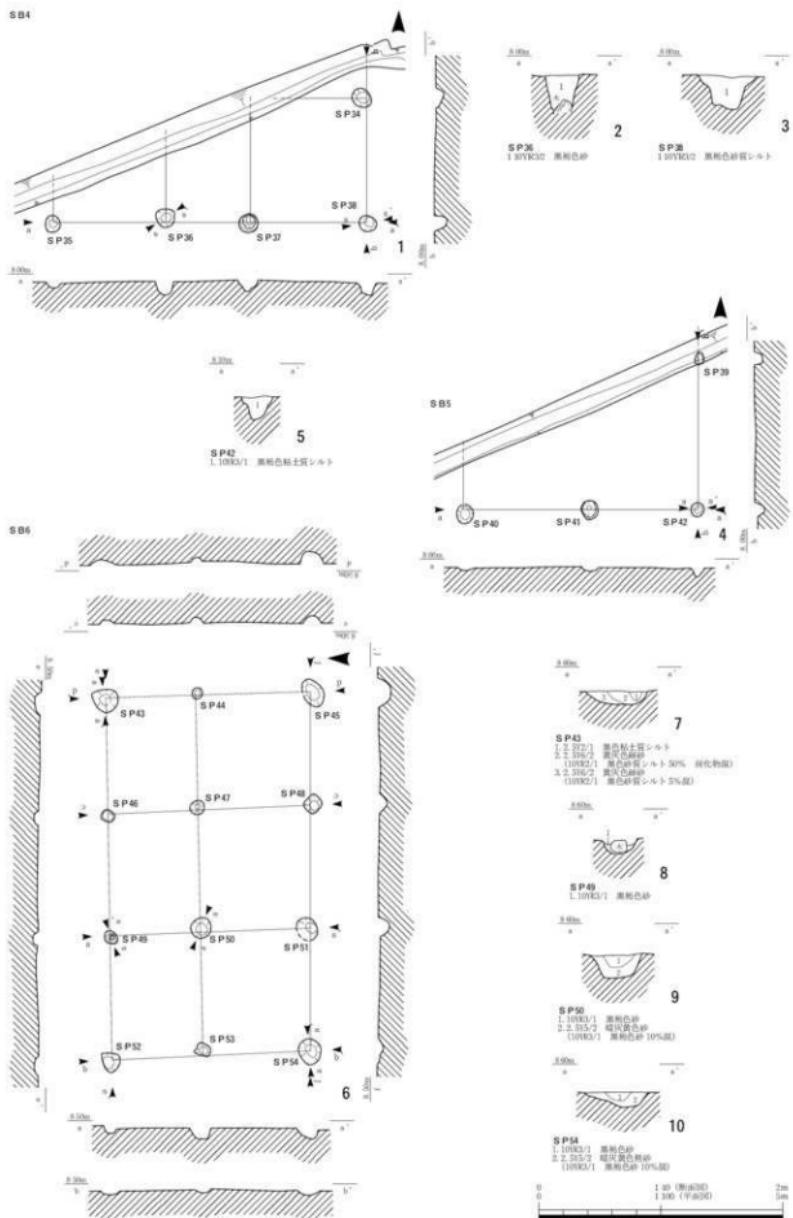
第58図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. SB1 2. SP7 3. SP8 4. SP11 5. SB3 6. SP28 7. SP29 8. SP32 9. SP33



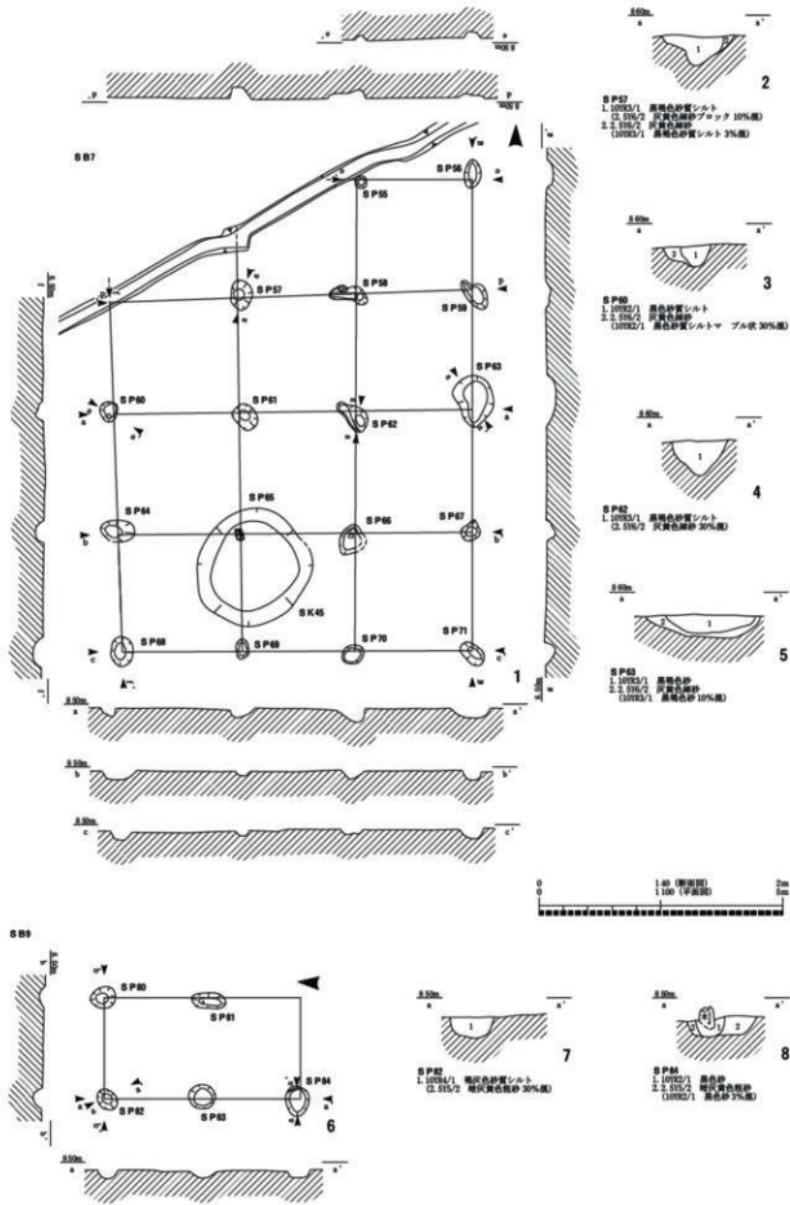
第59図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. S B2 · S A1 2. S P15 3. S P16 4. S P18 5. S P19 6. S P22 7. S P23 8. S P24 9. S P25 10. S P180 11. S P183



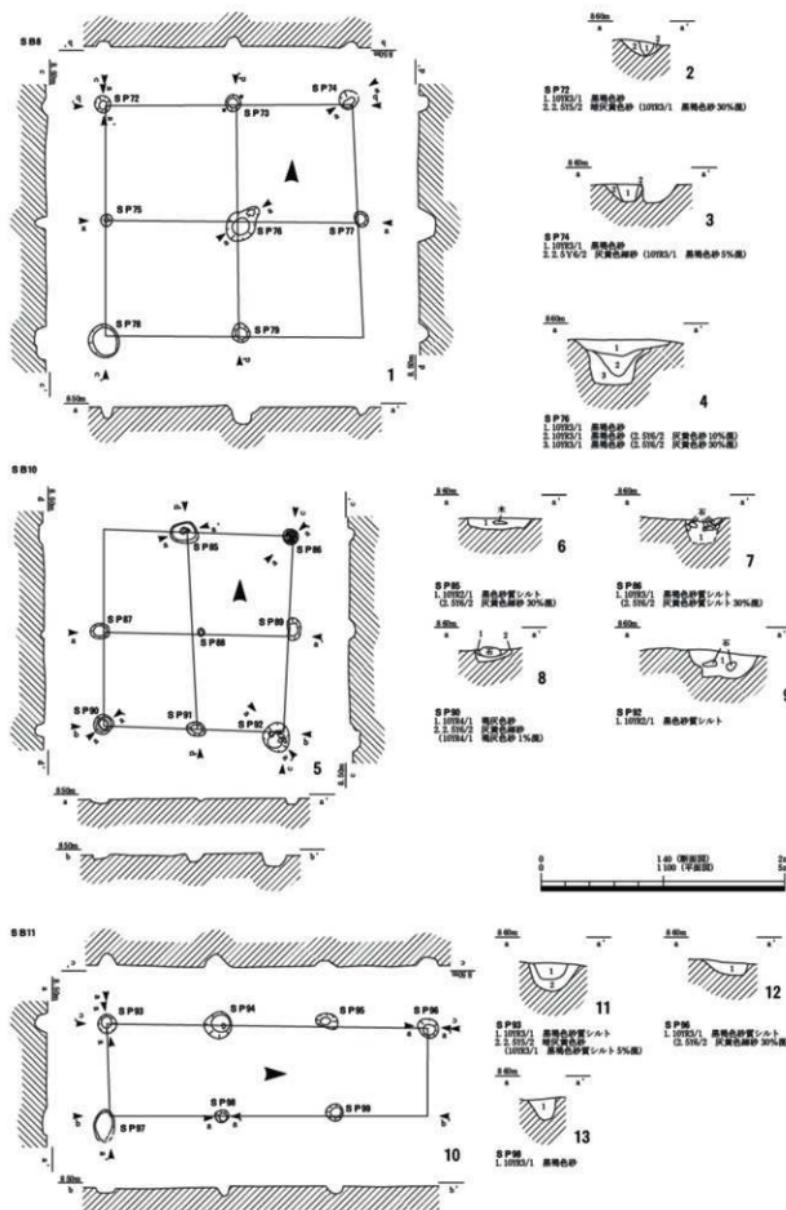
第60図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. S-B4 2. S-P36 3. S-P38 4. S-B5 5. S-P42 6. S-B6 7. S-P43 8. S-P49 9. S-P50 10. S-P54



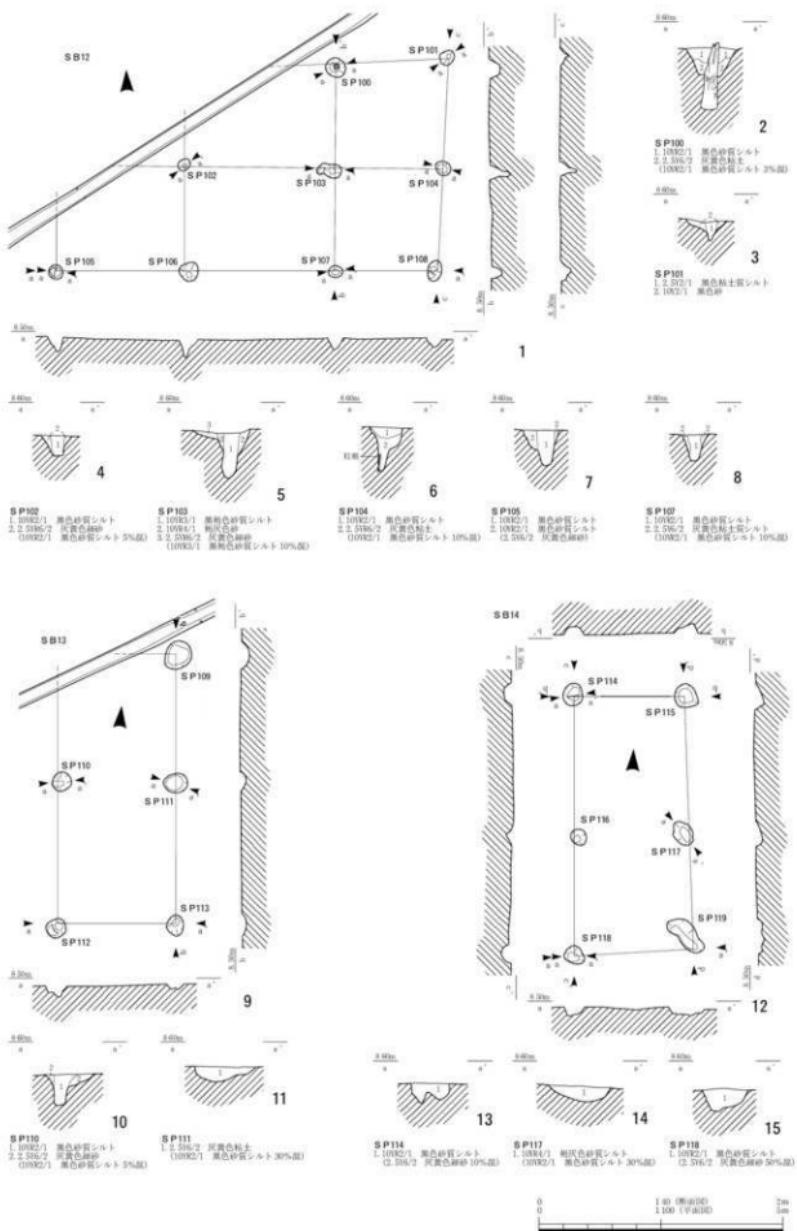
第61図 水槽金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. S.B7 2. S.P57 3. S.P60 4. S.P62 5. S.P63 6. S.B9 7. S.P82 8. S.P84



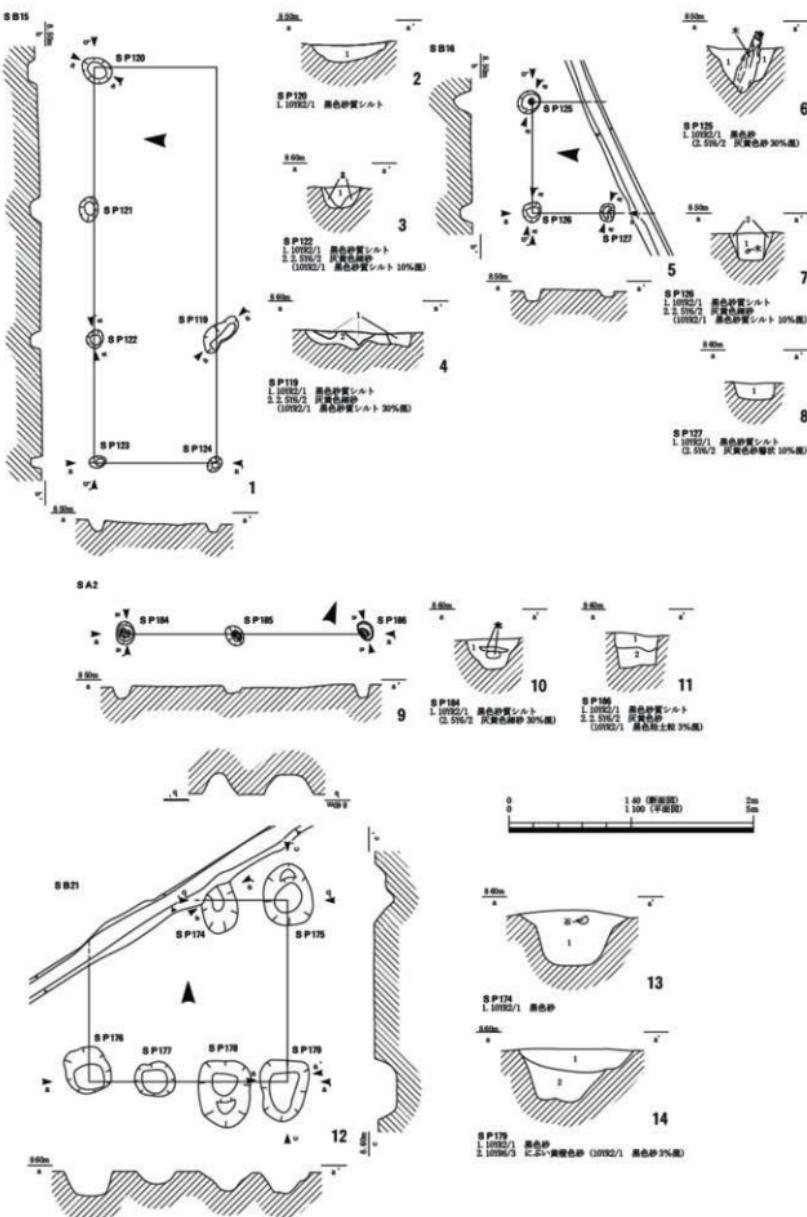
第62図 水橋金広・中馬場遺跡 造構実測図

1. S B8 2. S P72 3. S P74 4. S P76 5. S B10 6. S P85 7. S P86 8. S P90 9. S P92 10. S B11 11. S P93
12. S P96 13. S P98



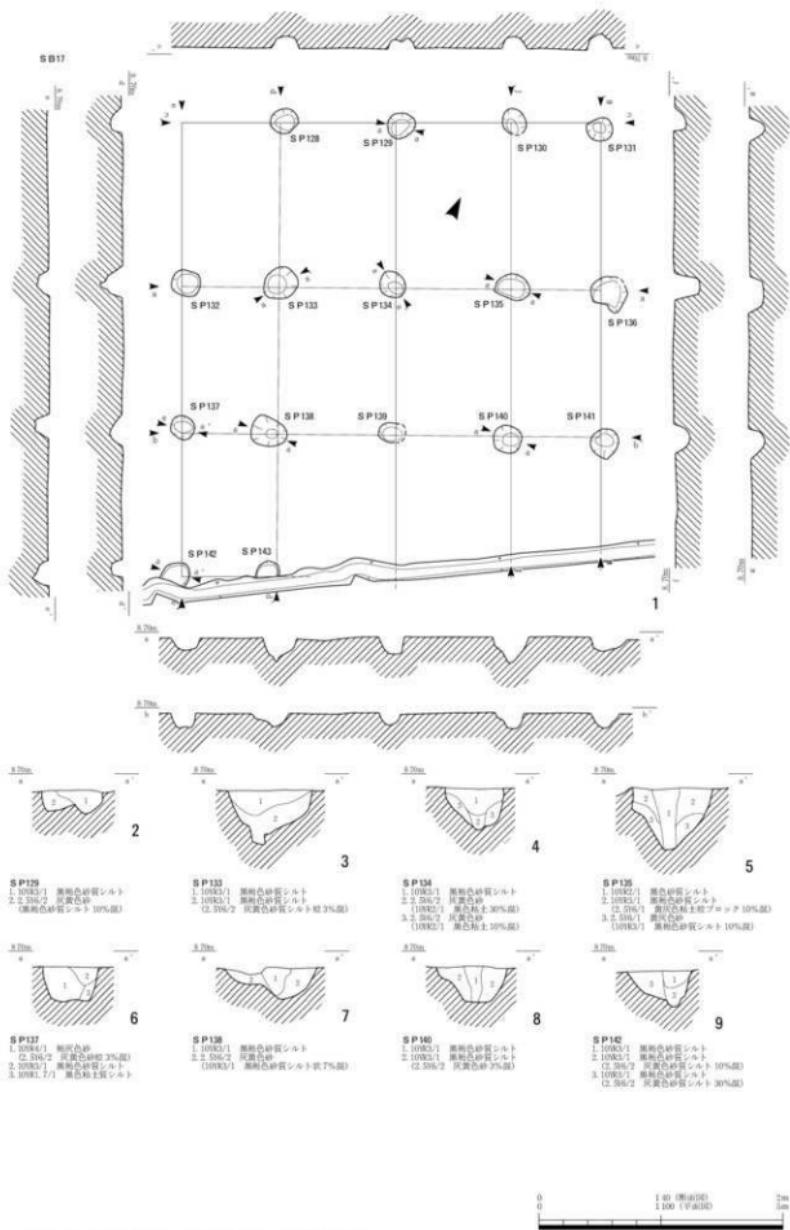
第63図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. S.B12 2. S.P100 3. S.P101 4. S.P102 5. S.P103 6. S.P104 7. S.P105 8. S.P107 9. S.B13 10. S.P110
11. S.P111 12. S.B14 13. S.P114 14. S.P117 15. S.P118



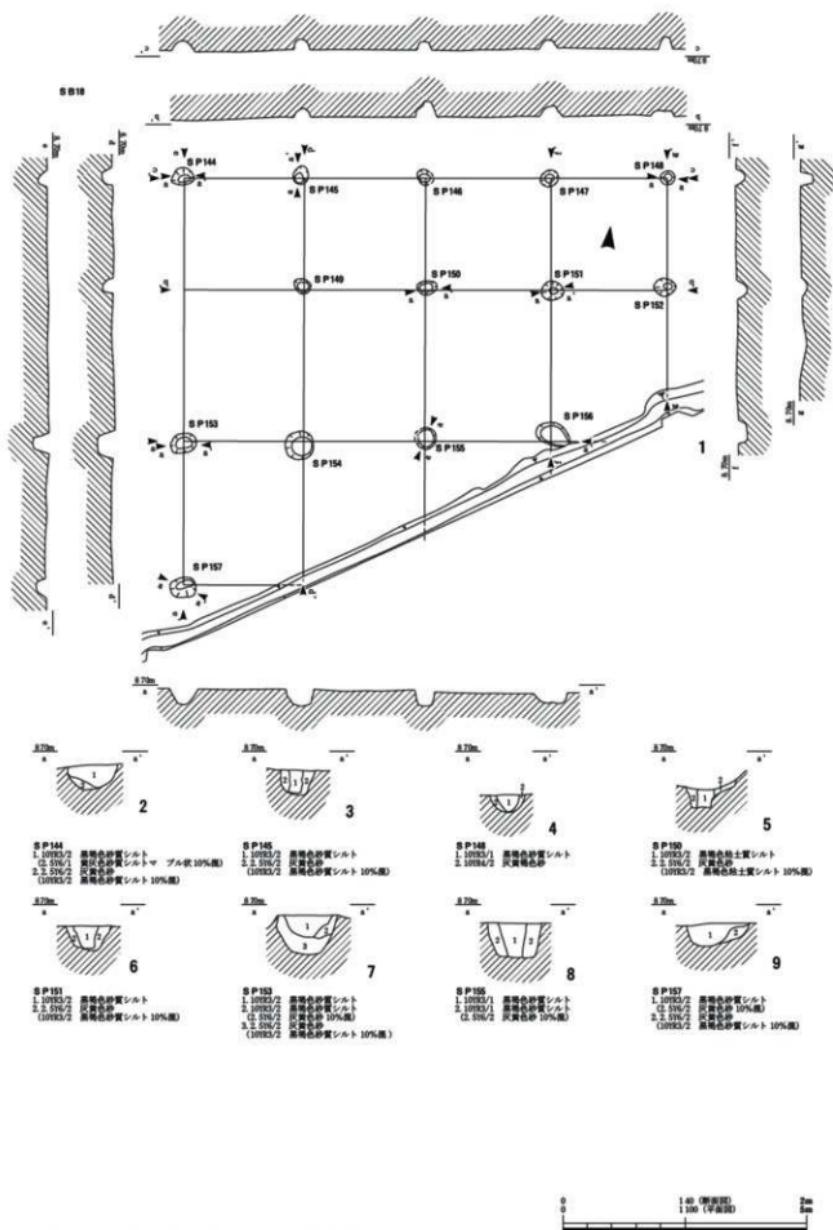
第64図 水橋金広・中馬場遺跡 造構実測図

1. S B15 2. S P120 3. S P122 4. S P119 5. S B16 6. S P125 7. S P126 8. S P127 9. S A2 10. S P184
11. S P186 12. S B21 13. S P174 14. S P179



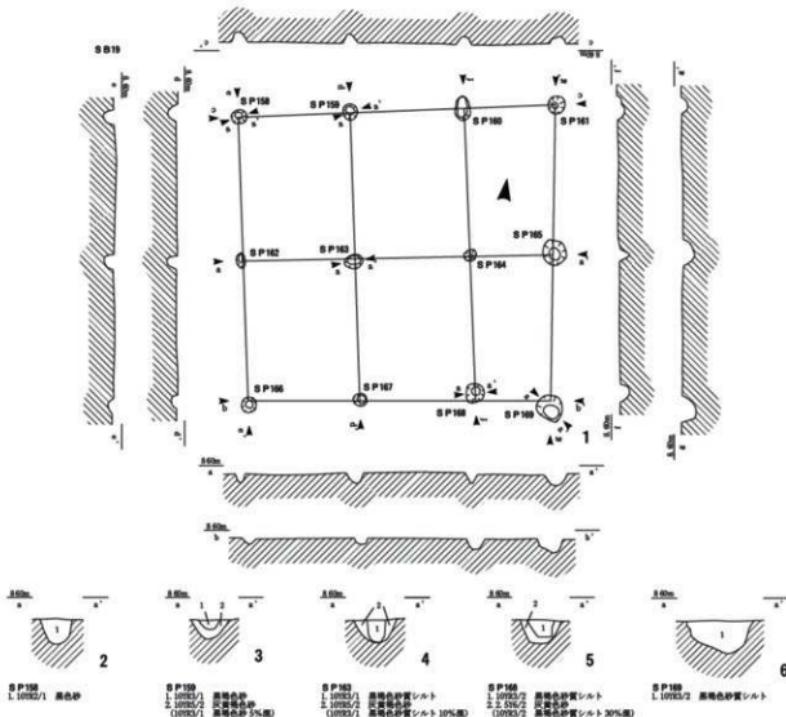
第65図 水橋金庄・中馬場遺跡 遺構実測図

1. S B17 2. S P129 3. S P133 4. S P134 5. S P135 6. S P137 7. S P138 8. S P140 9. S P142



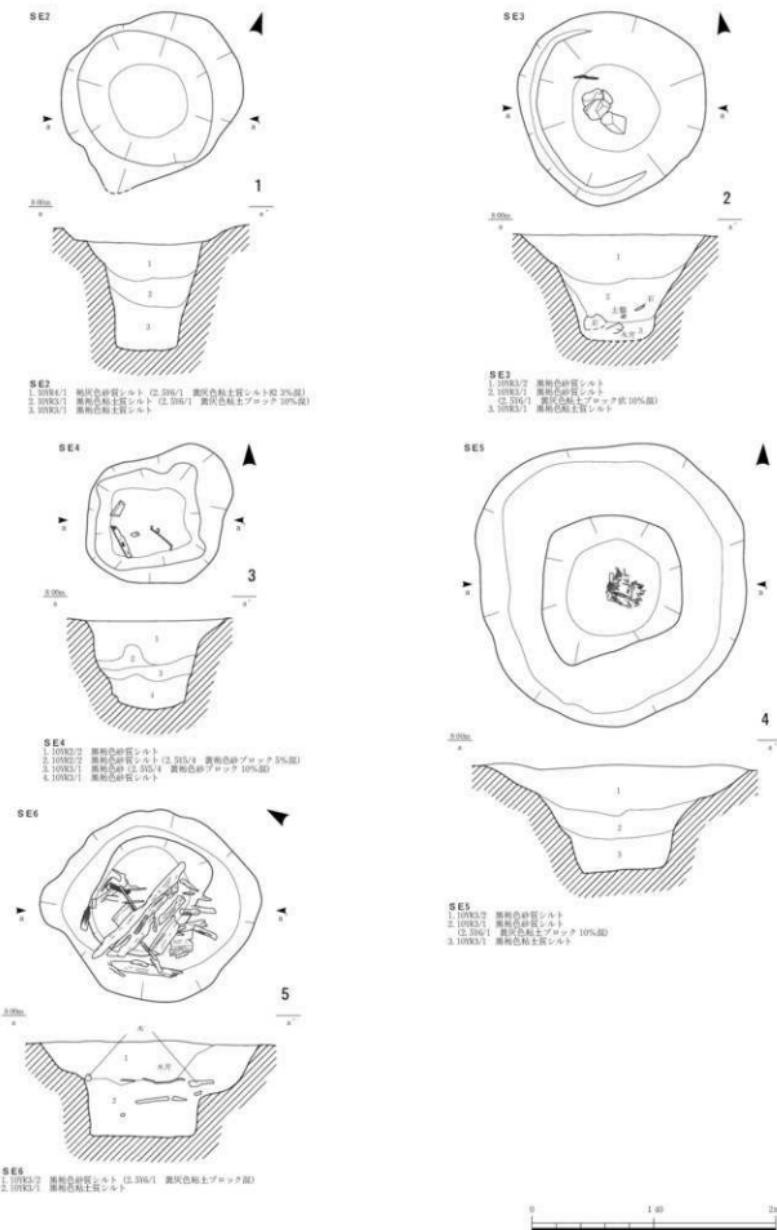
第66図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. S.B18 2. S.P144 3. S.P145 4. S.P148 5. S.P150 6. S.P151 7. S.P153 8. S.P155 9. S.P157



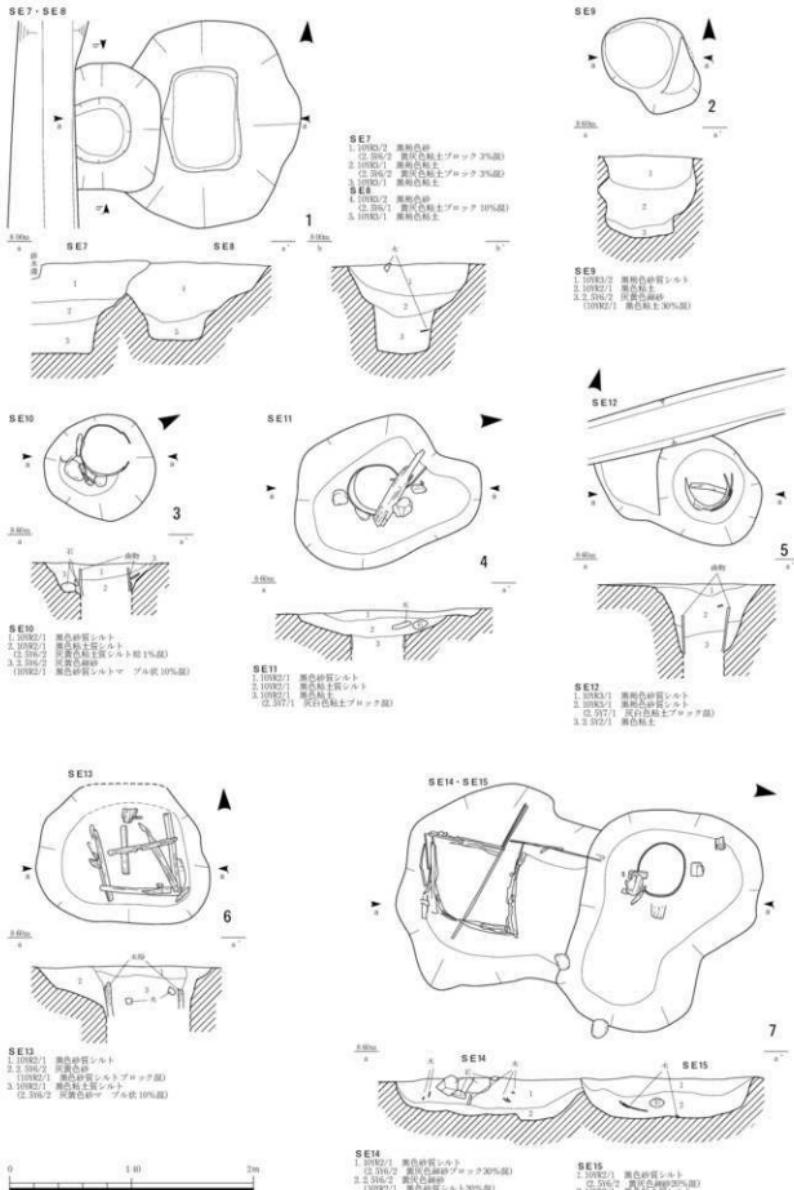
第67図 水槽金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. S B19 2. S P158 3. S P159 4. S P163 5. S P168 6. S P169 7. S B20 8. S P170 9. S P172 10. S P173



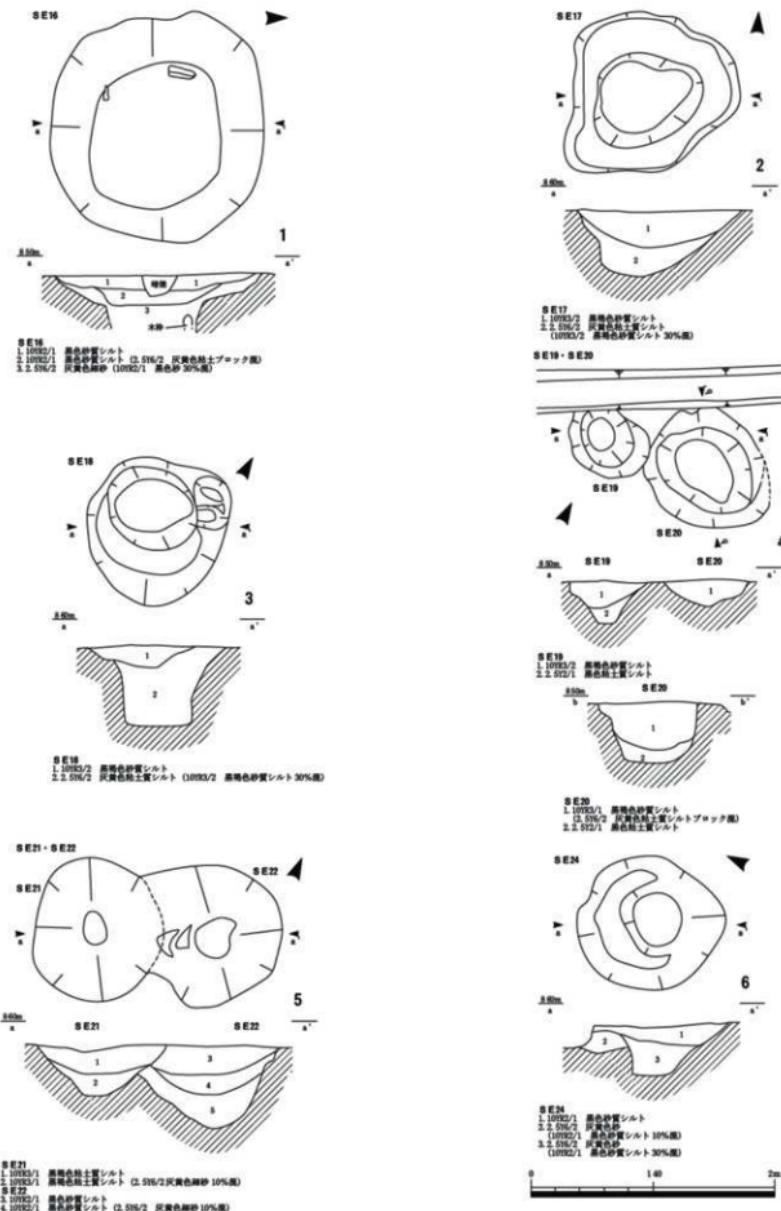
第68図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. SE2 2. SE3 3. SE4 4. SE5 5. SE6



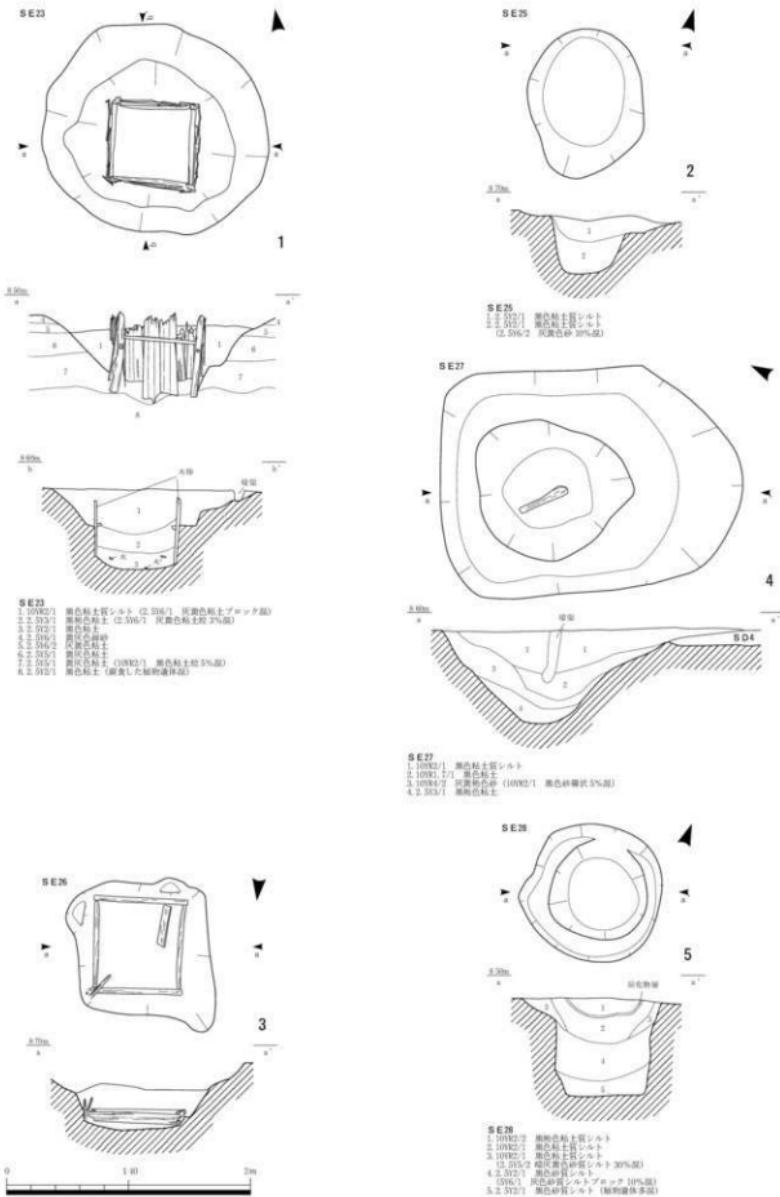
第69図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. SE7 - SE8 2. SE9 3. SE10 4. SE11 5. SE12 6. SE13 7. SE14 - SE15



第70図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

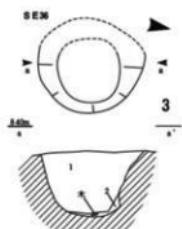
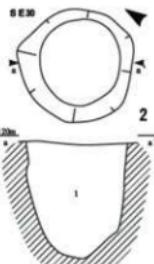
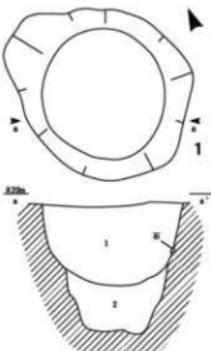
1. SE16 2. SE17 3. SE18 4. SE19・SE20 5. SE21・SE22 6. SE24



第71図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

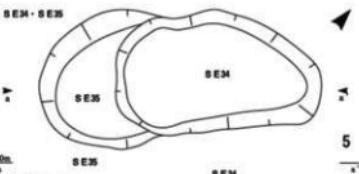
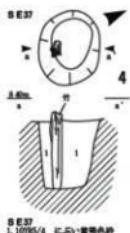
1. SE23 2. SE25 3. SE26 4. SE27 5. SE28

SE29



SE39

L. 10703/1 黄褐色粘土質シルト
(2. 10702/1 明オカリ ブ灰色砂質土ブロック 40%)
(2. 10701/1 黄褐色粘土シルト 10%)
2. 砂利 (粘土風)

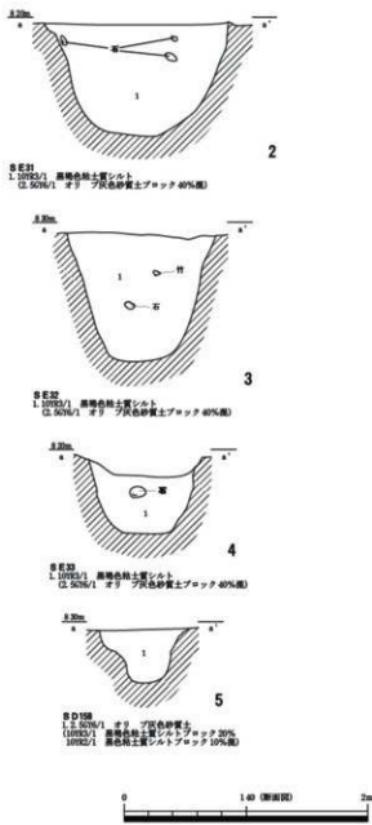
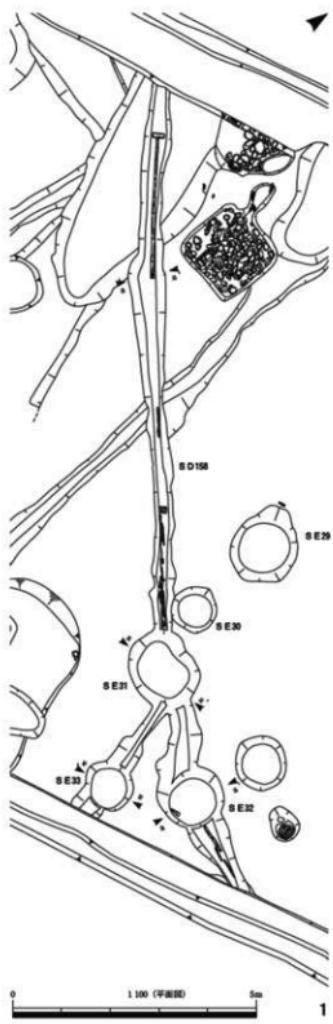


SE34
1. 10703/1 黄褐色砂質シルト
SE35
2. 10702/1 黄褐色粘土質 (2. 9077/1 明オカリ ブ灰色砂質土 40%)



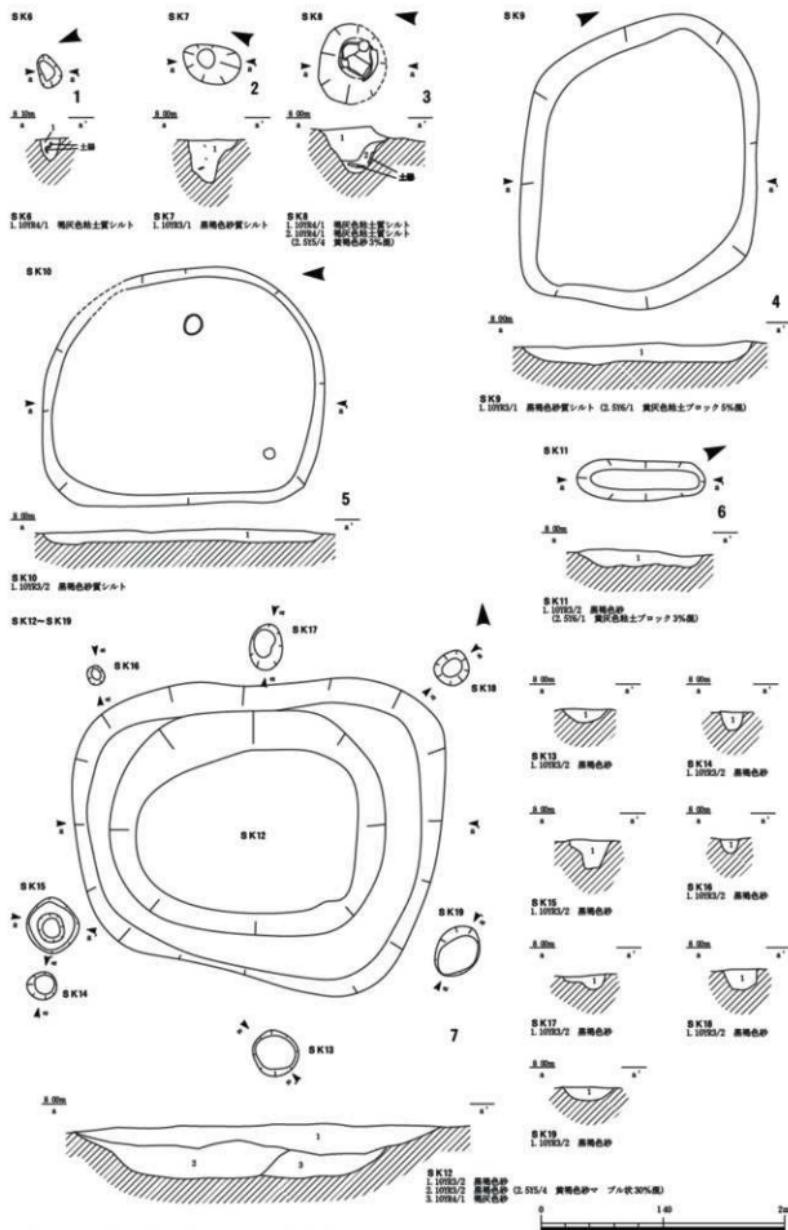
第72図 水橋金広・中馬場遺跡 造構実測図

1. SE29 2. SE30 3. SE36 4. SE37 5. SE34・SE35



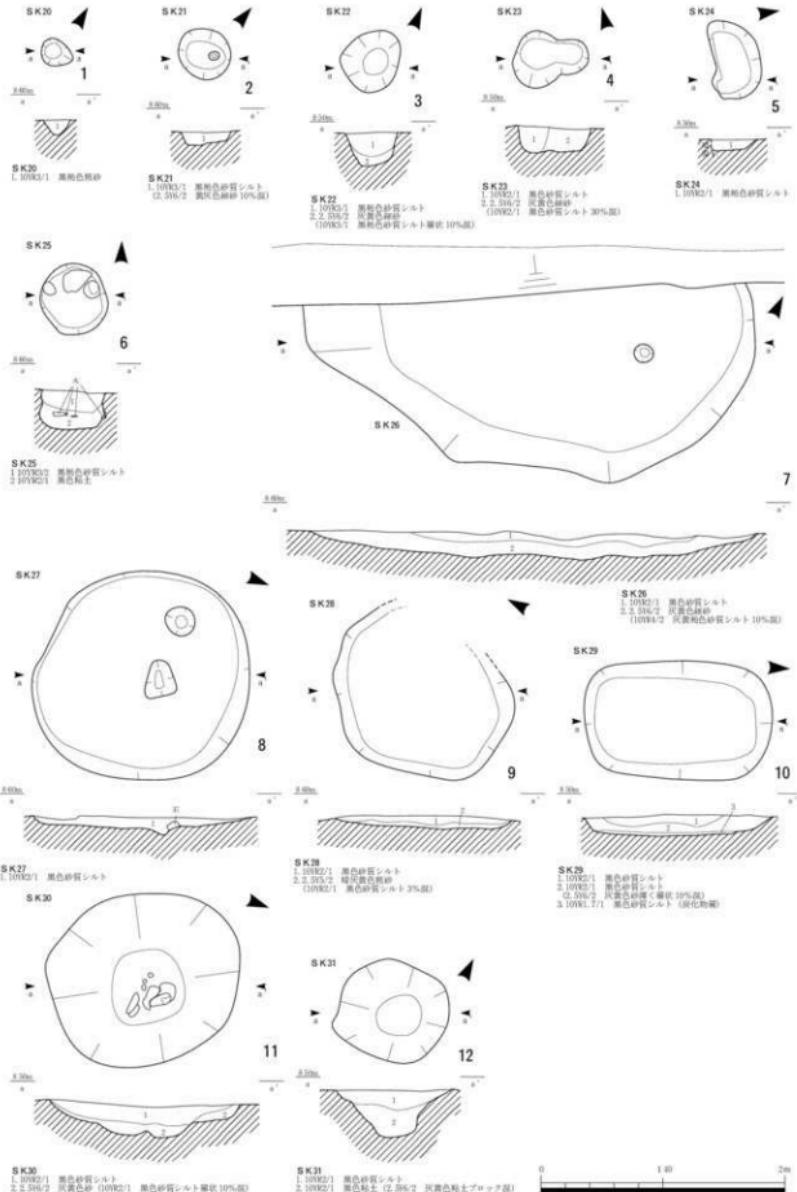
第73図 水横金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. SE29～SE33・SD158 2. SE31 3. SE32 4. SE33 5. SD158



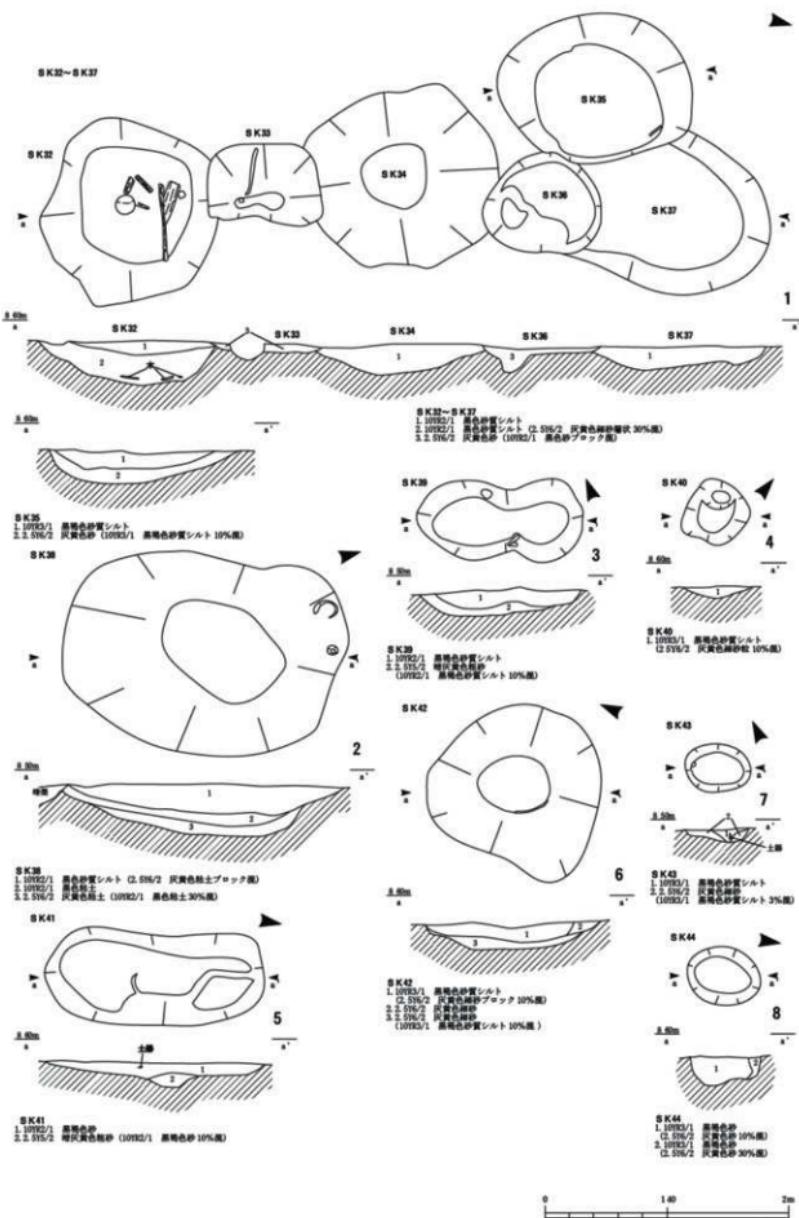
第74図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. SK6 2. SK7 3. SK8 4. SK9 5. SK10 6. SK11 7. SK12~SK19



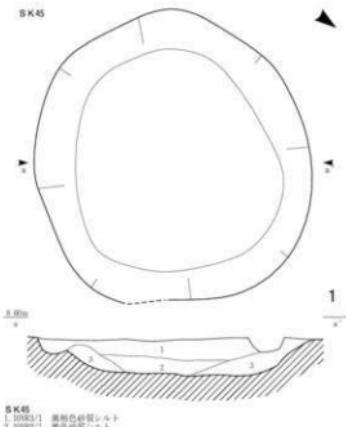
第75図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. SK20 2. SK21 3. SK22 4. SK23 5. SK24 6. SK25 7. SK26 8. SK27 9. SK28 10. SK29 11. SK30
12. SK31

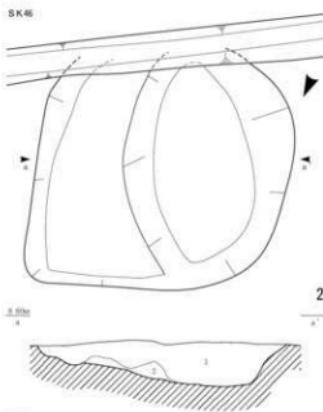


第76図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

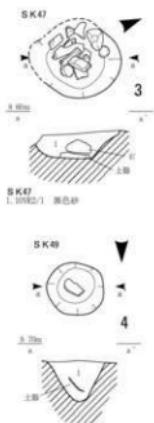
1. SK32~SK37 2. SK38 3. SK39 4. SK40 5. SK41 6. SK42 7. SK43 8. SK44



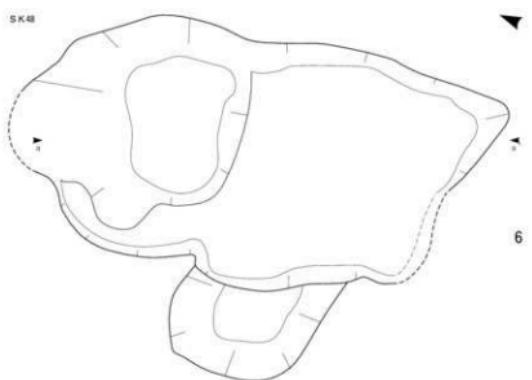
5 K-45
1. 10903/1 黒耐色紗質シルト
2. 10922/1 黒色紗質シルト
3. 2. 516/2 黒耐色紗質シルト (10903/1 黒耐色紗質シルト 10%混)



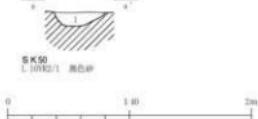
S K46
1. 10%2/1 黒色紗糸シルト
2. 5%2/2 黄褐色紗糸 (10%2/1) 黒色紗糸シルト 10%銀



SK49
L.10013.2 黒褐色砂質シート

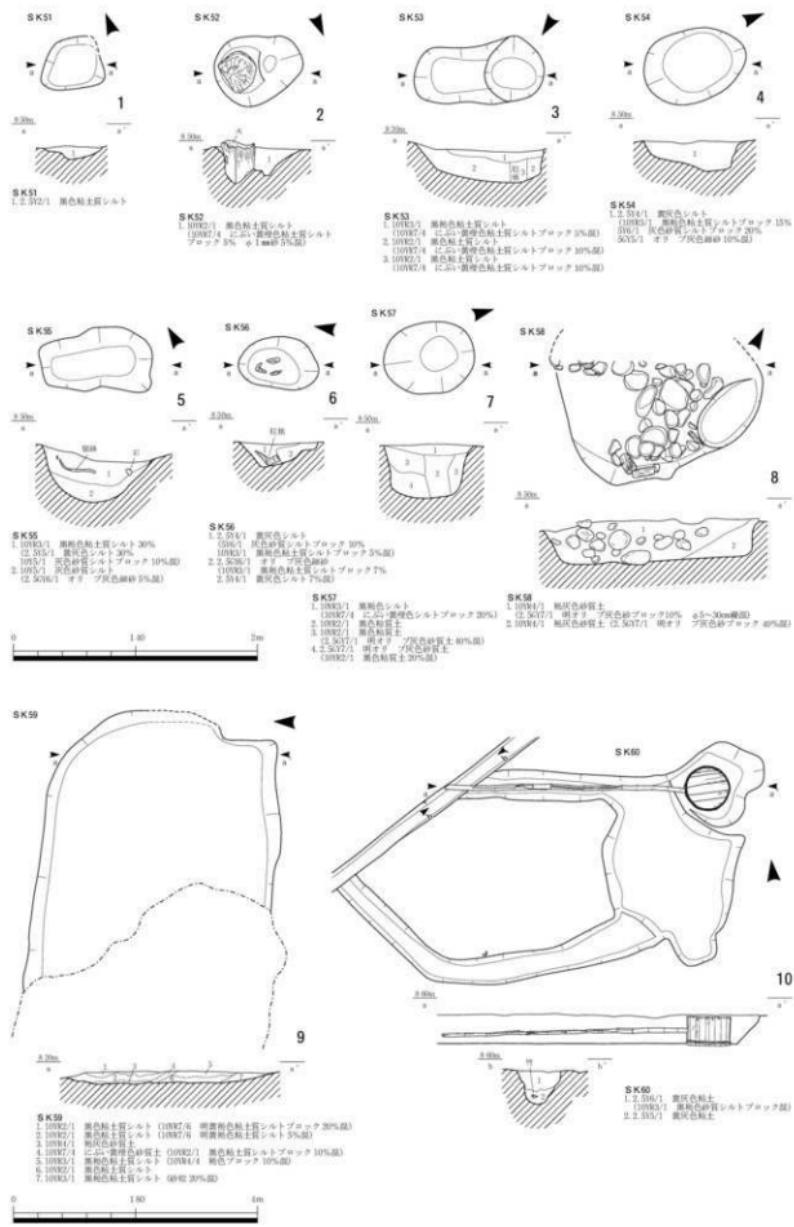


S-K48	黒色砂質シルト (2.3M/S) 黒色砂質レトルト糊
1. 2. 3. 4. 5. 6.	黒色粘土 (2.3M/S) 黒色砂質粘土プロック (10%糊)
1. 2. 3. 4. 5. 6.	黒色粘土 (2.3M/S) 黒色砂質糊 (10%糊) 1. 2. 3. 4. 5. 6.
1. 2. 3. 4. 5. 6.	黒色粘土 (2.3M/S) 黑色粘土 (10%糊)



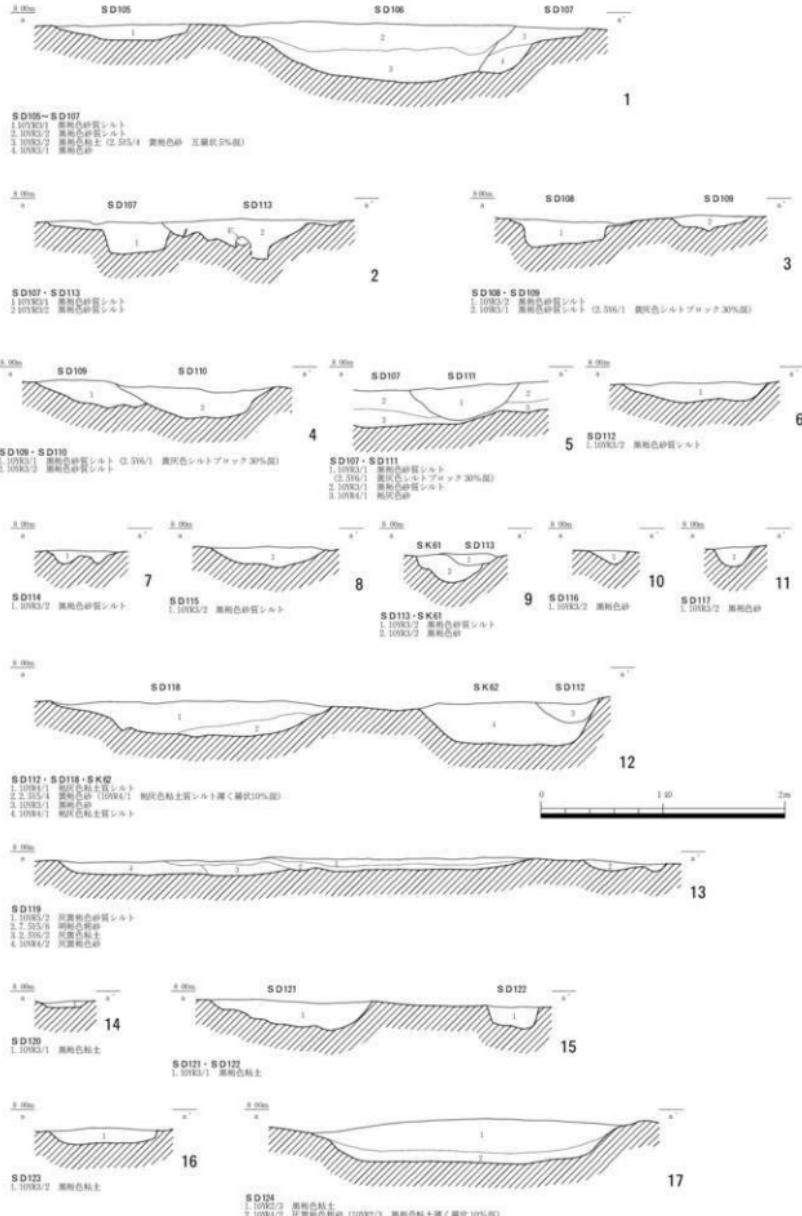
第77図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. SK45 2. SK46 3. SK47 4. SK49 5. SK50 6. SK48



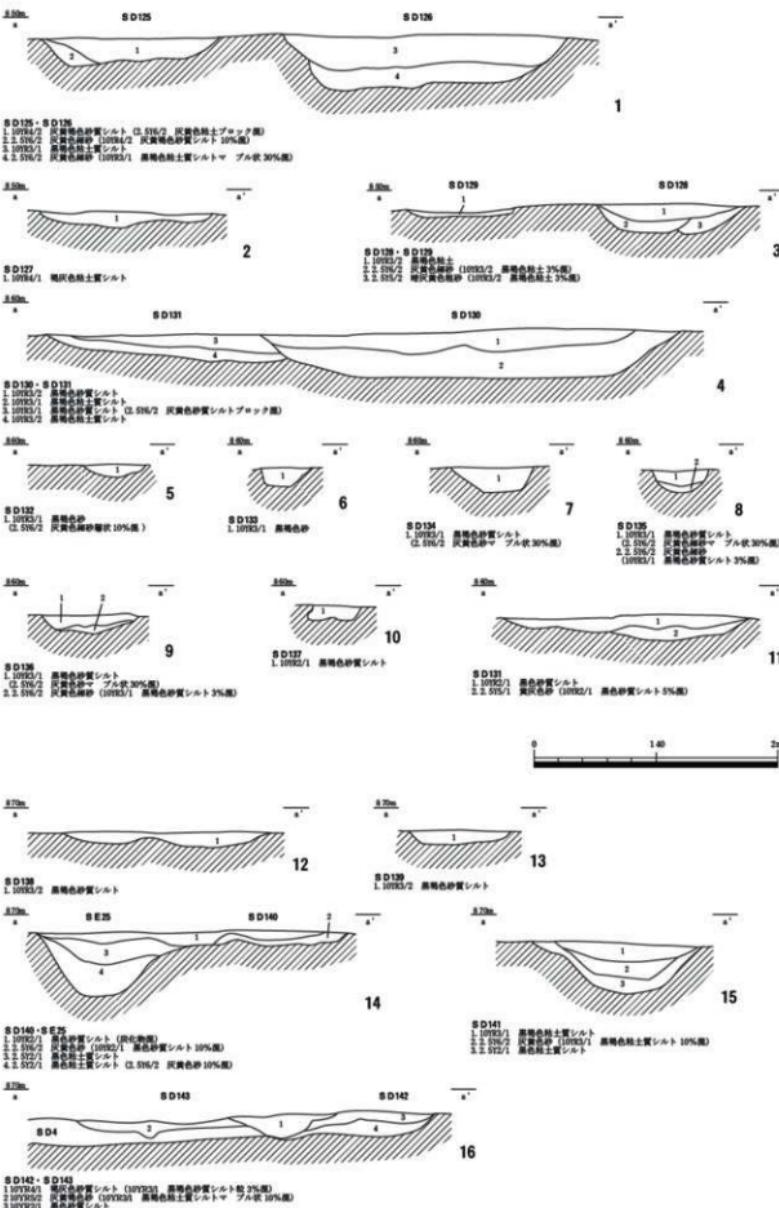
第78図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. S K51 2. S K52 3. S K53 4. S K54 5. S K55 6. S K56 7. S K57 8. S K58 9. S K59 10. S K60



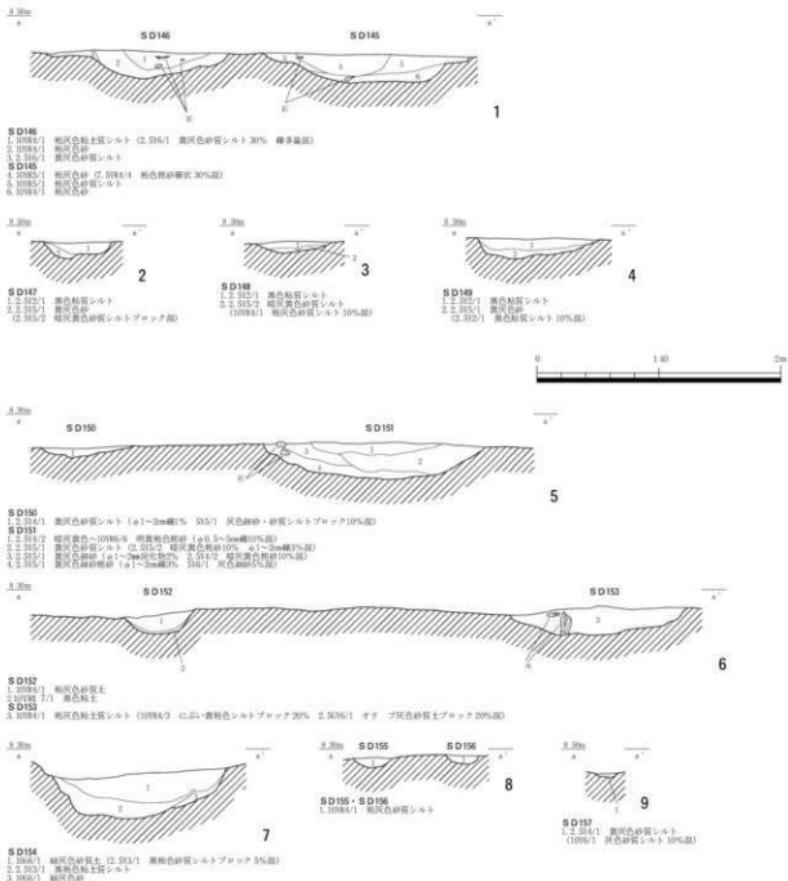
第79図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. SD105～SD107 2. SD107・SD113 3. SD108・SD109 4. SD109・SD110 5. SD107・SD111 6. SD112 7. SD114
8. SD115 9. SD113・SK61 10. SD116 11. SD117 12. SD118・SK62 13. SD119 14. SD120
15. SD121・SD122 16. SD123 17. SD124



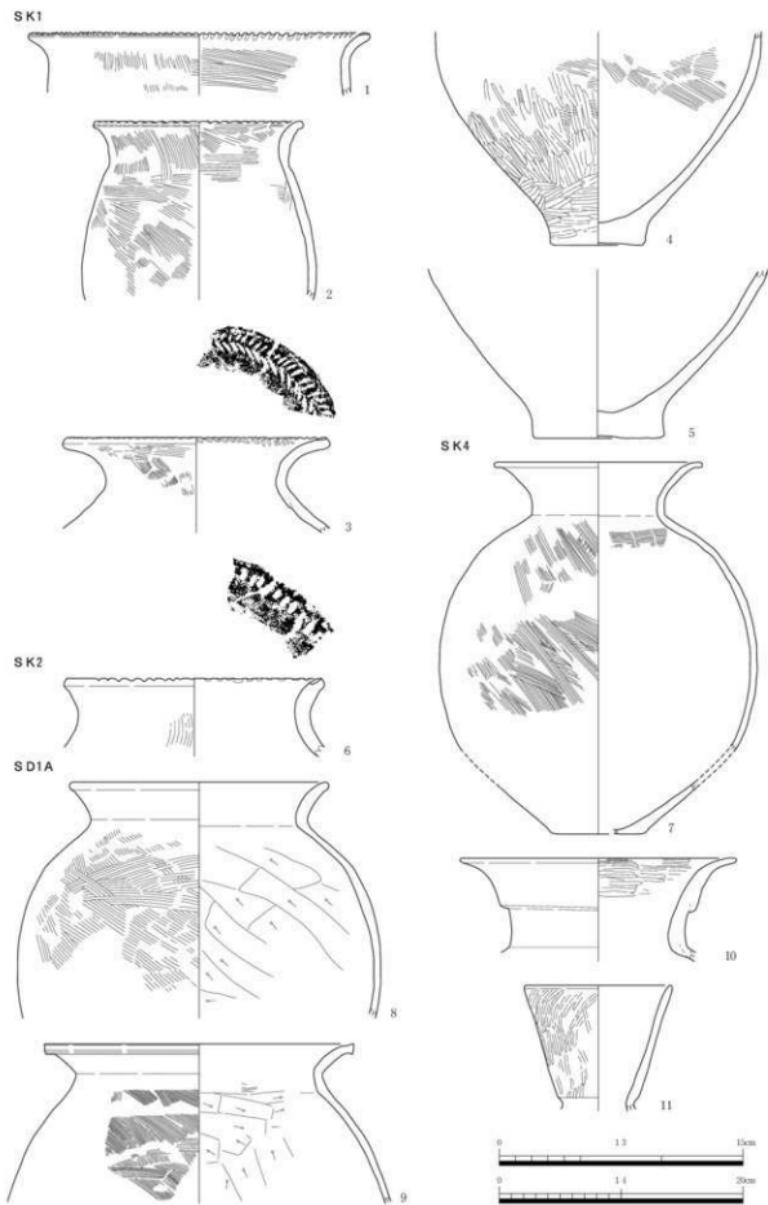
第80図 水橋金広・中馬場遺跡 造構実測図

1. S.D125 - S.D126 2. S.D127 3. S.D128 - S.D129 4. S.D130 - S.D131 5. S.D132 6. S.D133 7. S.D134 8. S.D135
9. S.D136 10. S.D137 11. S.D131 12. S.D138 13. S.D139 14. S.D140 - S.E25 15. S.D141 16. S.D142 - S.D143



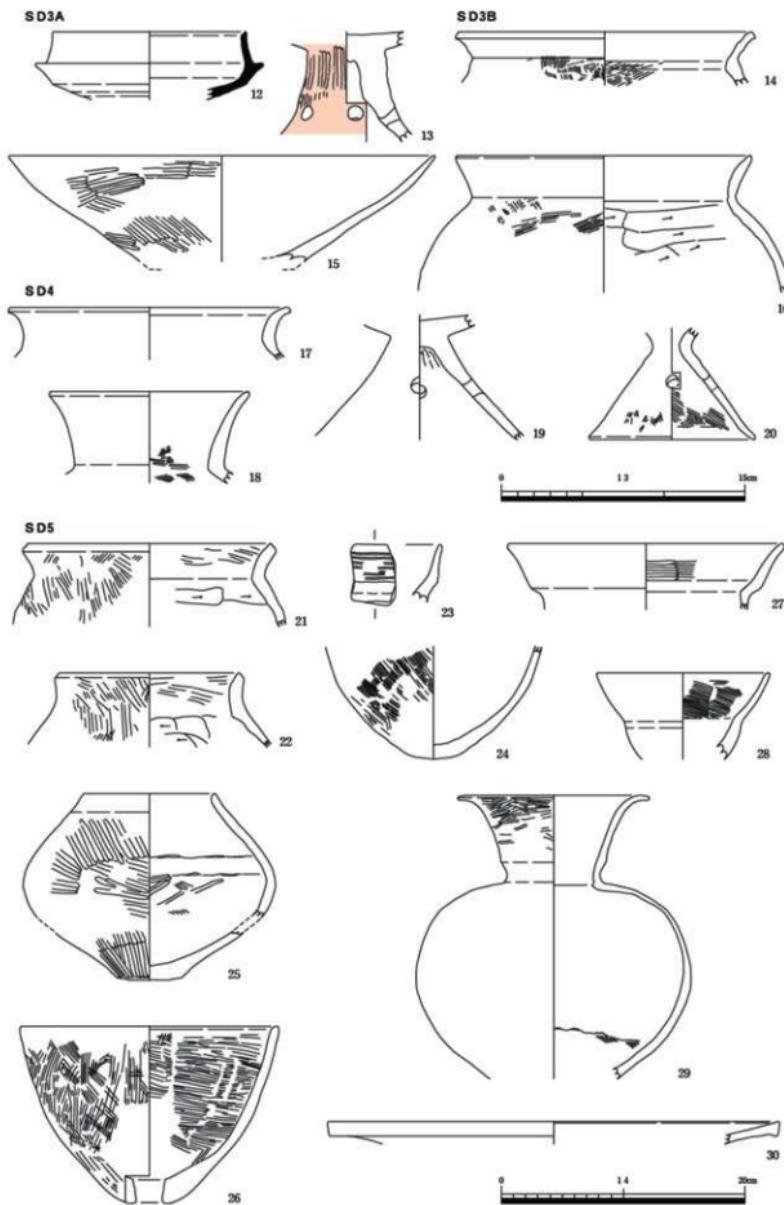
第81図 水橋金広・中馬場遺跡 遺構実測図

1. SD145 · SD146 2. SD147 3. SD148 4. SD149 5. SD150 · SD151 6. SD152 · SD153 7. SD154
8. SD155 · SD156 9. SD157



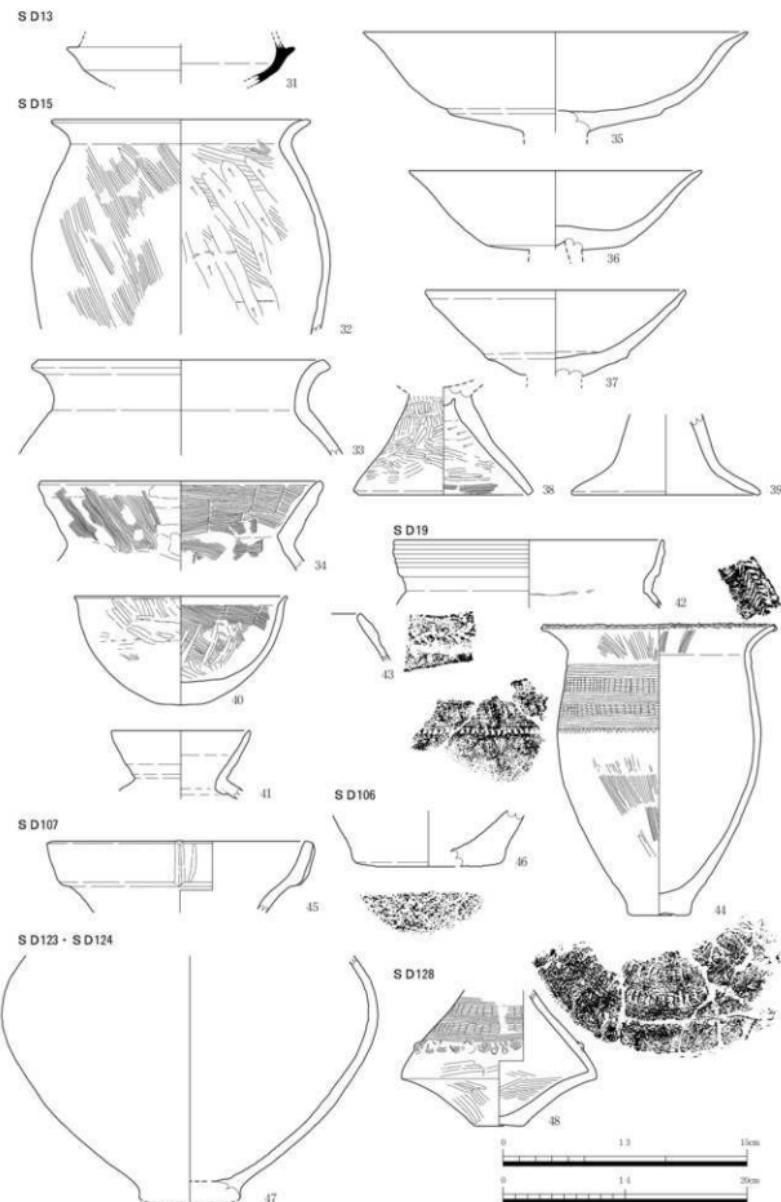
第82図 水橋金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (1~6・10・11 1/3, 7 1/4)

SK1 (1~5) SK2 (6) SK4 (7) SD1A (8~11)

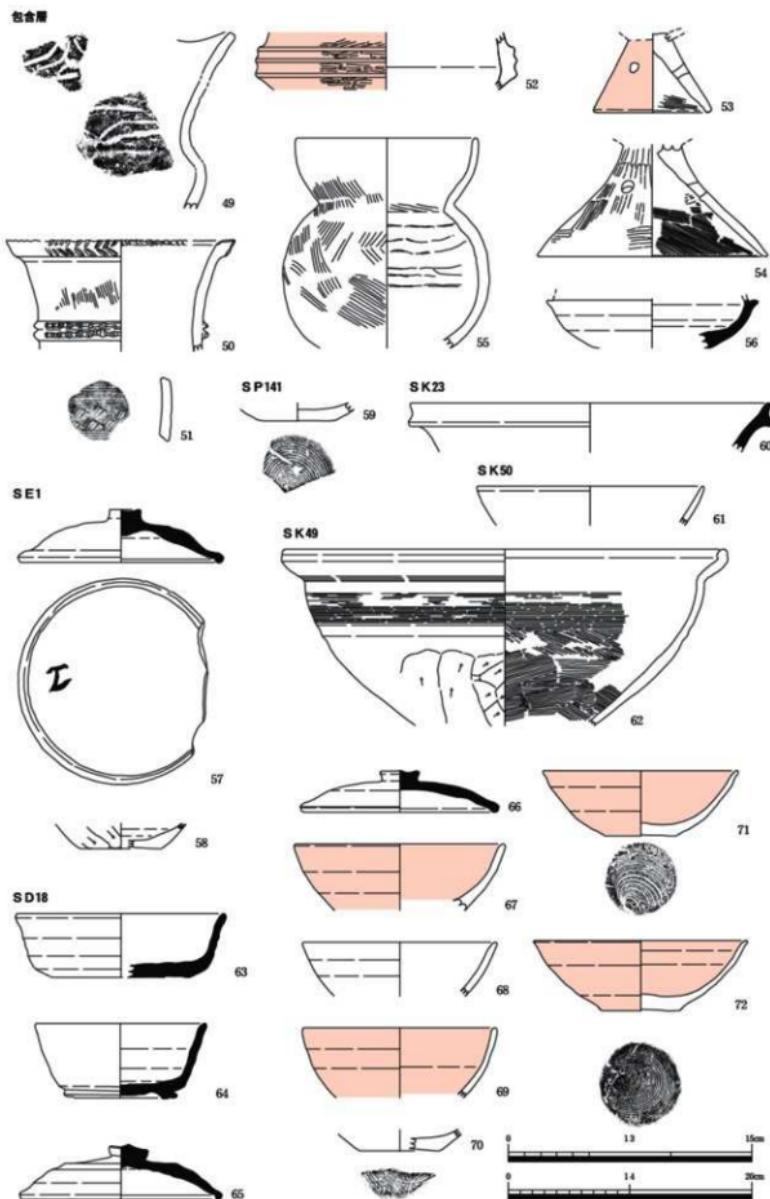


第83図 水横金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (12~28 1/3, 29・30 1/4)

SD3A (12・13) SD3B (14・15) SD4 (16~20) SD5 (21~30)

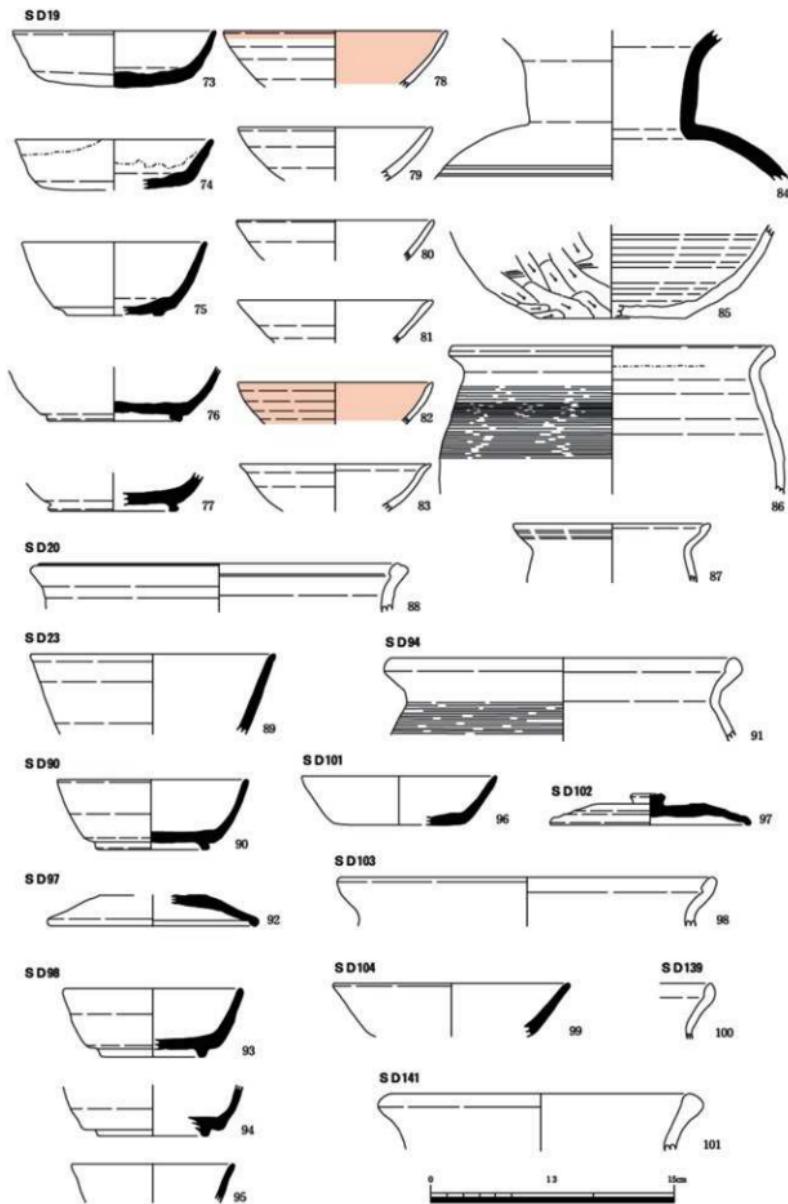


第84図 水橋金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (31・33~43・45・46・48 1/3, 32・44・47 1/4)
S D13 (31) S D15 (32~41) S D19 (42~44) S D106 (46) S D107 (45) S D123・S D124 (47) S D128 (48)



第85図 水横金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (49~61・63~72 1/3, 62 1/4)

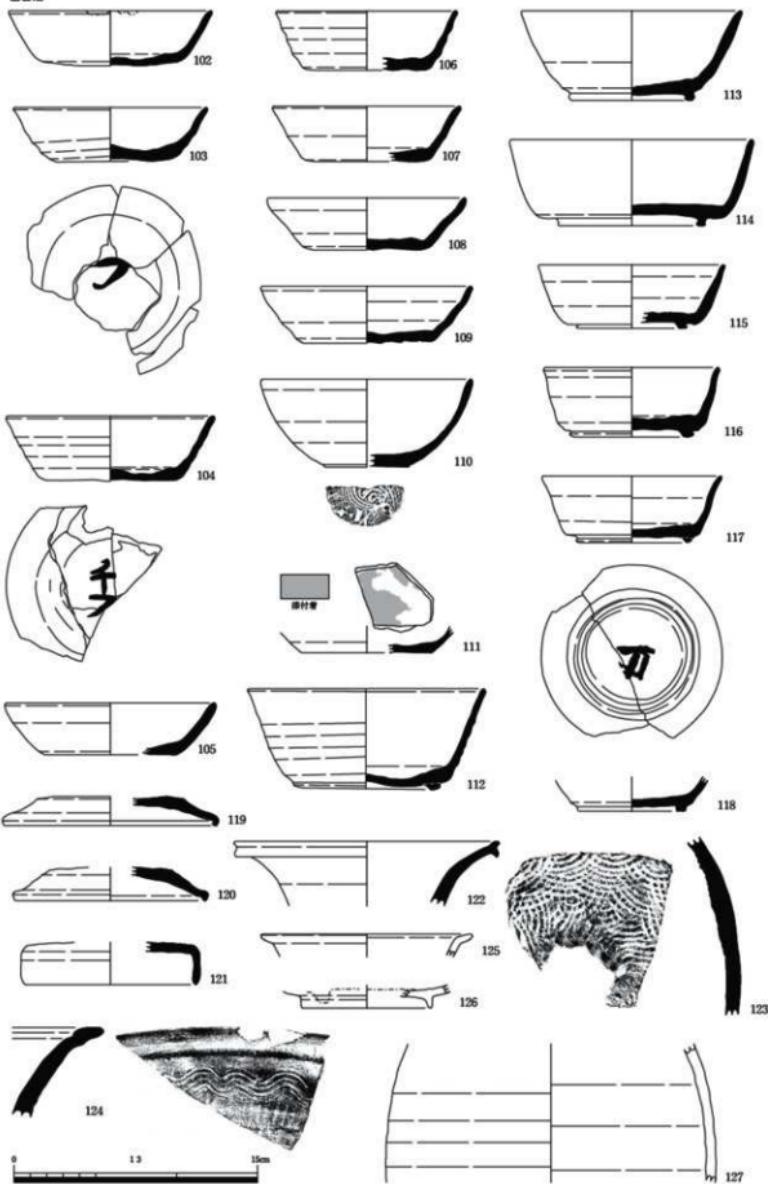
SE1 (57・58) SP141 (59) SK23 (60) SK49 (62) SK50 (61) SD18 (63~72) 包含層 (49~56)



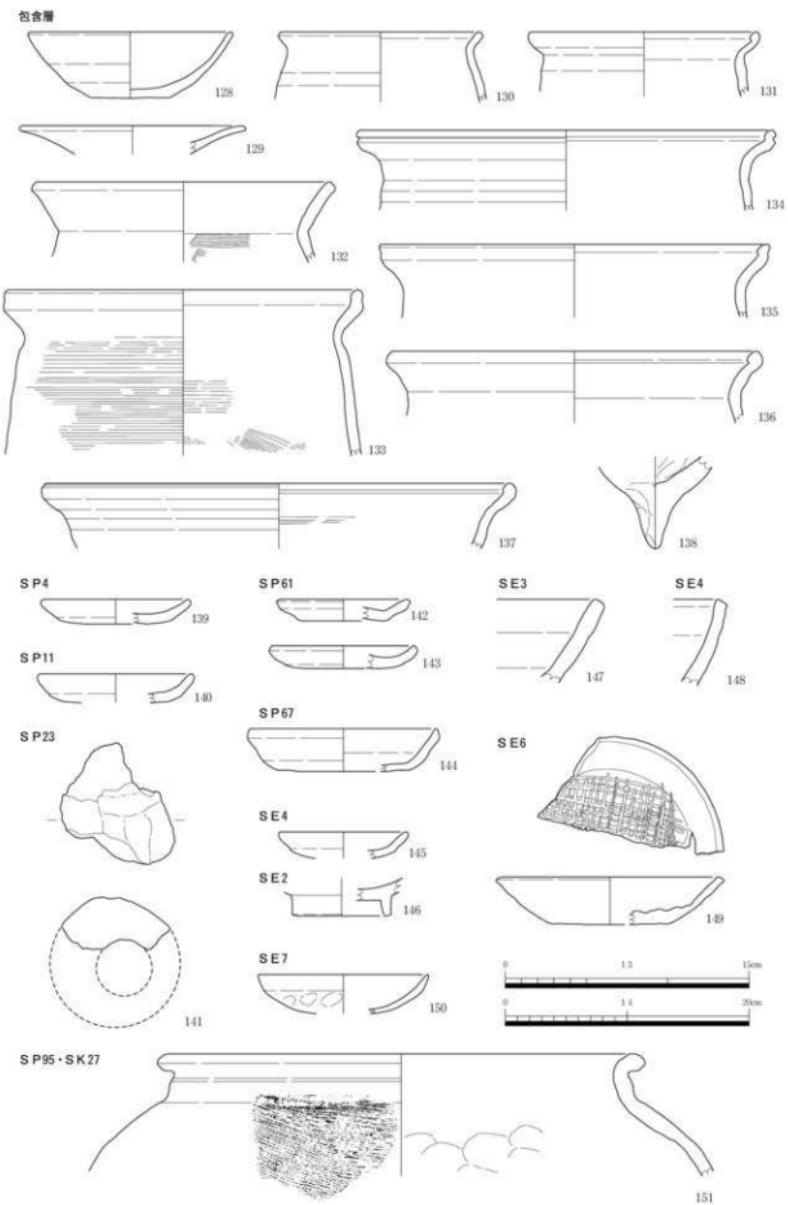
第86図 水橋金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (1/3)

SD19 (73~87) S D20 (88) S D23 (89) S D90 (90) S D94 (91) S D97 (92) S D98 (93~95)
 S D101 (96) S D102 (97) S D103 (98) S D104 (99) S D139 (100) S D141 (101)

包含層

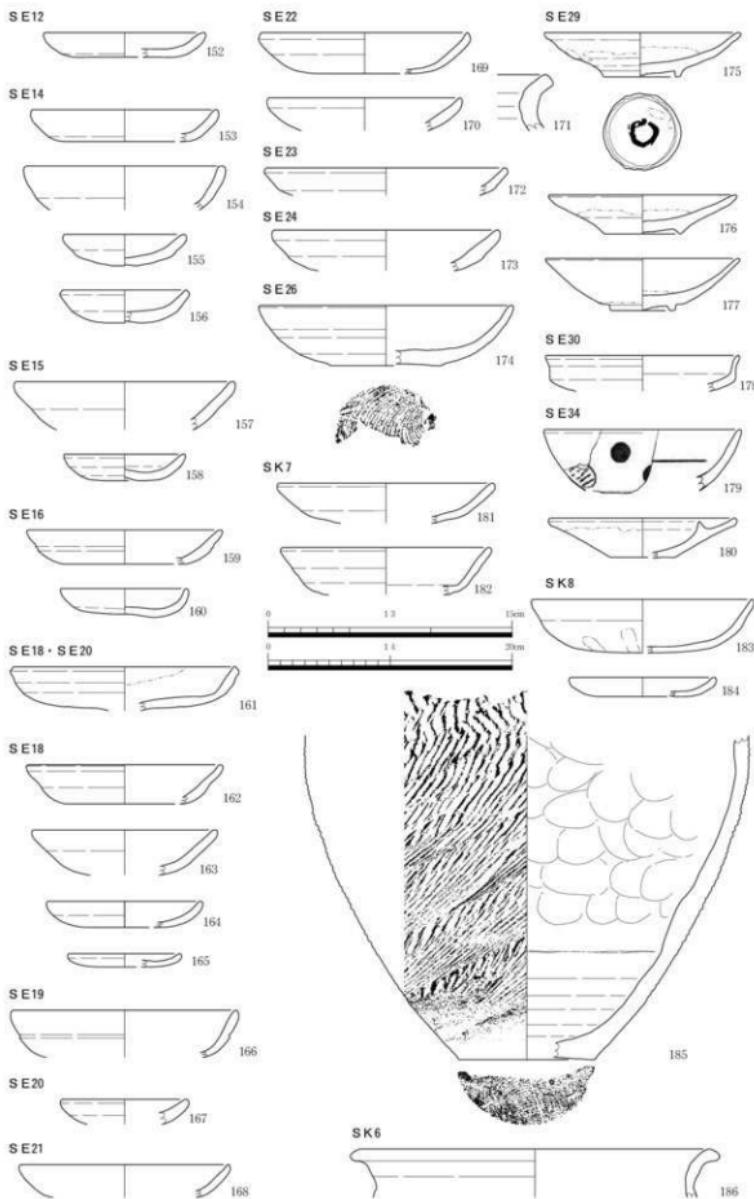


第87図 水横金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (1/3)
包含層



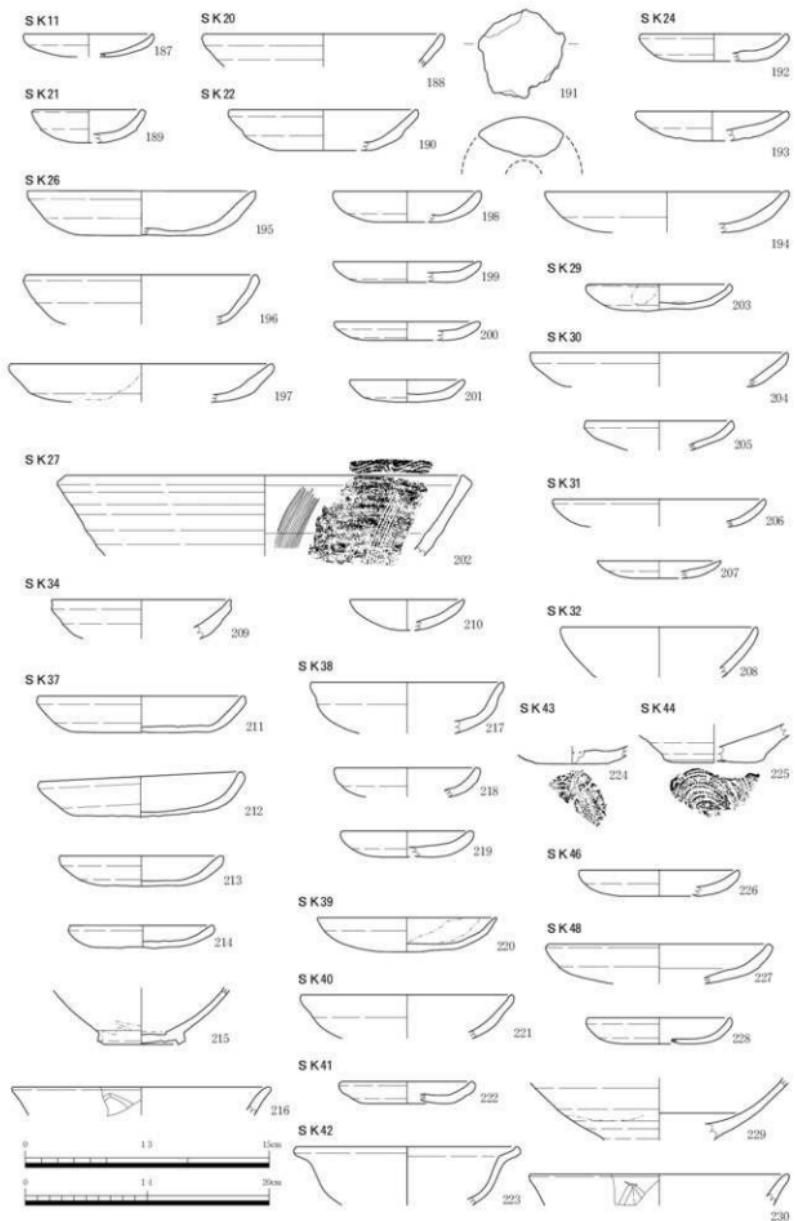
第88図 水橋金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (128~136・138~150 1/3, 137・151 1/4)

S P4 (139) S P11 (140) S P23 (141) S P61 (142・143) S P67 (144) S P95・S K27 (151) S E2 (146)
 S E3 (147) S E4 (145・148) S E6 (149) S E7 (150) 包含層 (128～138)



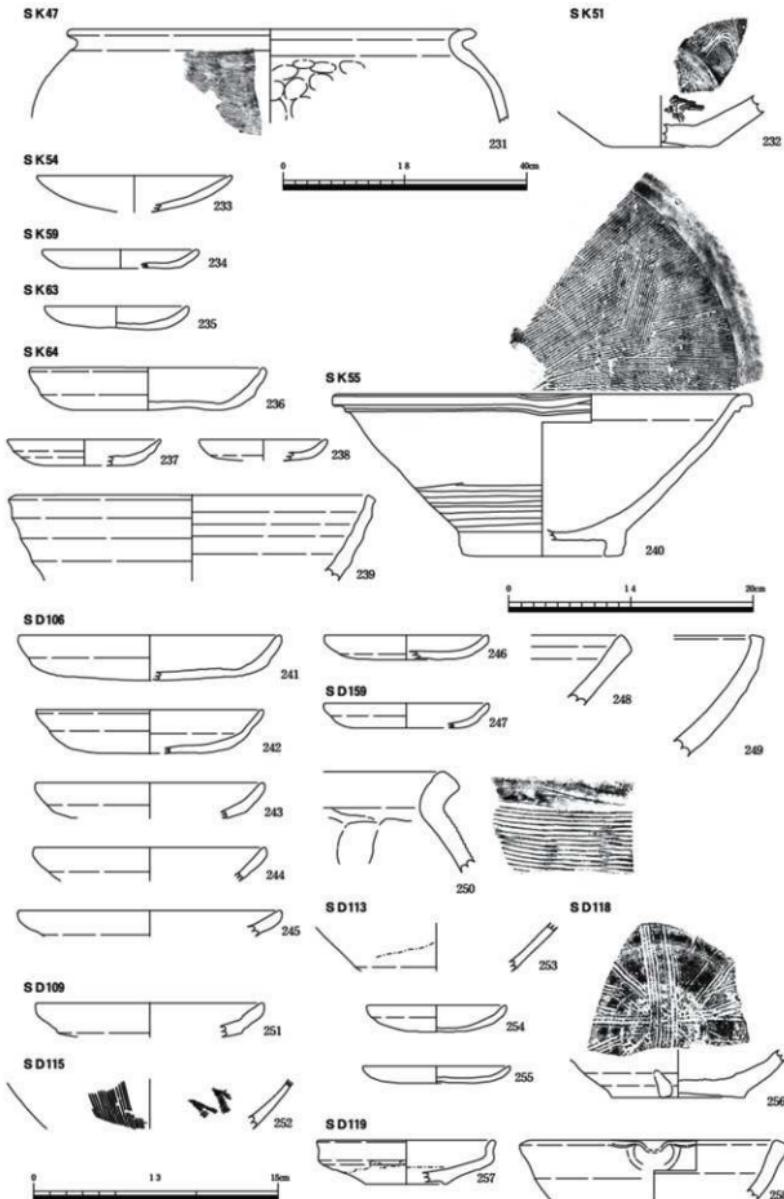
第89図 水橋金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (152~184 1/3, 185・186 1/4)

SE12 (152) SE14 (153~156) SE15 (157~158) SE16 (159~160) SE18・SE20 (161) SE18 (162~165)
 SE19 (166) SE20 (167) SE21 (168) SE22 (169~171) SE23 (172) SE24 (173) SE26 (174)
 SE29 (175~177) SE30 (178) SE34 (179~180) SK7 (181~182) SK8 (183~185) SK6 (186)



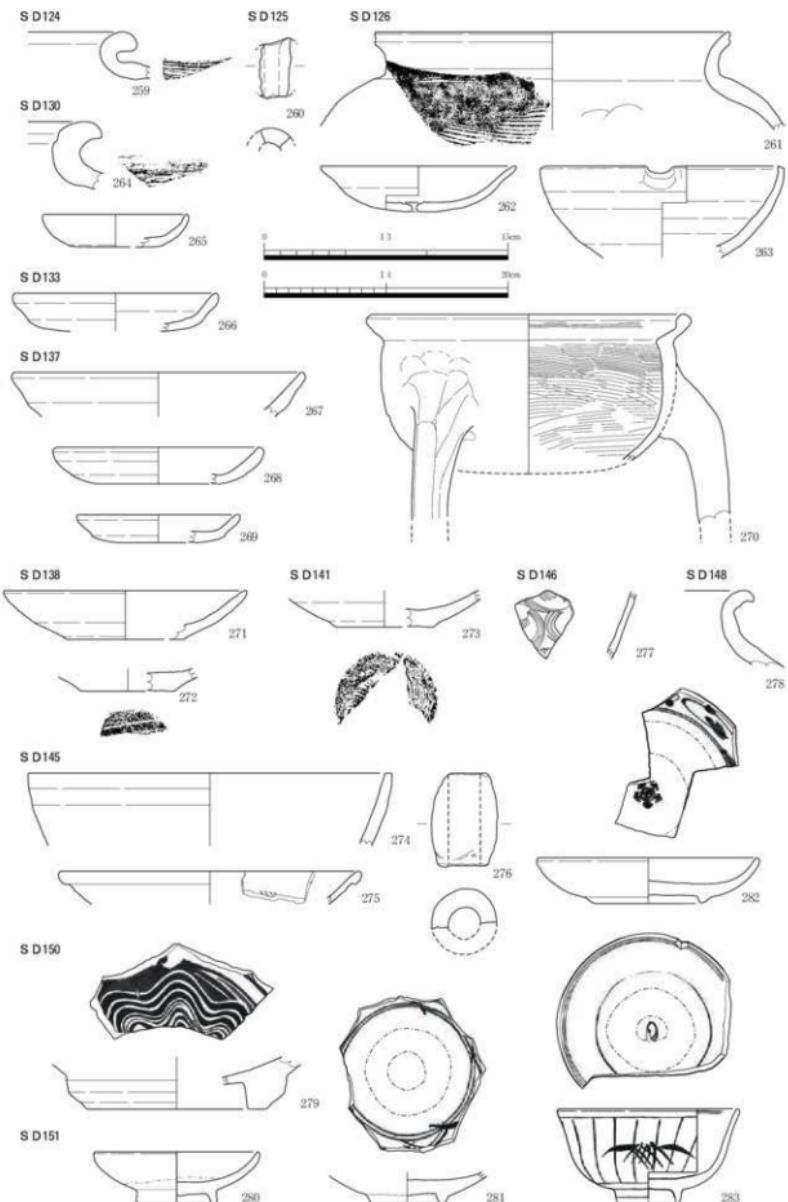
第90図 水橋金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (187~201・203~230 1/3, 202 1/4)

SK11 (187) SK20 (188) SK21 (189) SK22 (190・191) SK24 (192~194) SK26 (195~201) SK27 (202)
 SK29 (203) SK30 (204・205) SK31 (206・207) SK32 (208) SK34 (209・210) SK37 (211~216) SK38 (217~219)
 SK39 (220) SK40 (221) SK41 (222) SK42 (223) SK43 (224) SK44 (225) SK46 (226) SK48 (227~230)



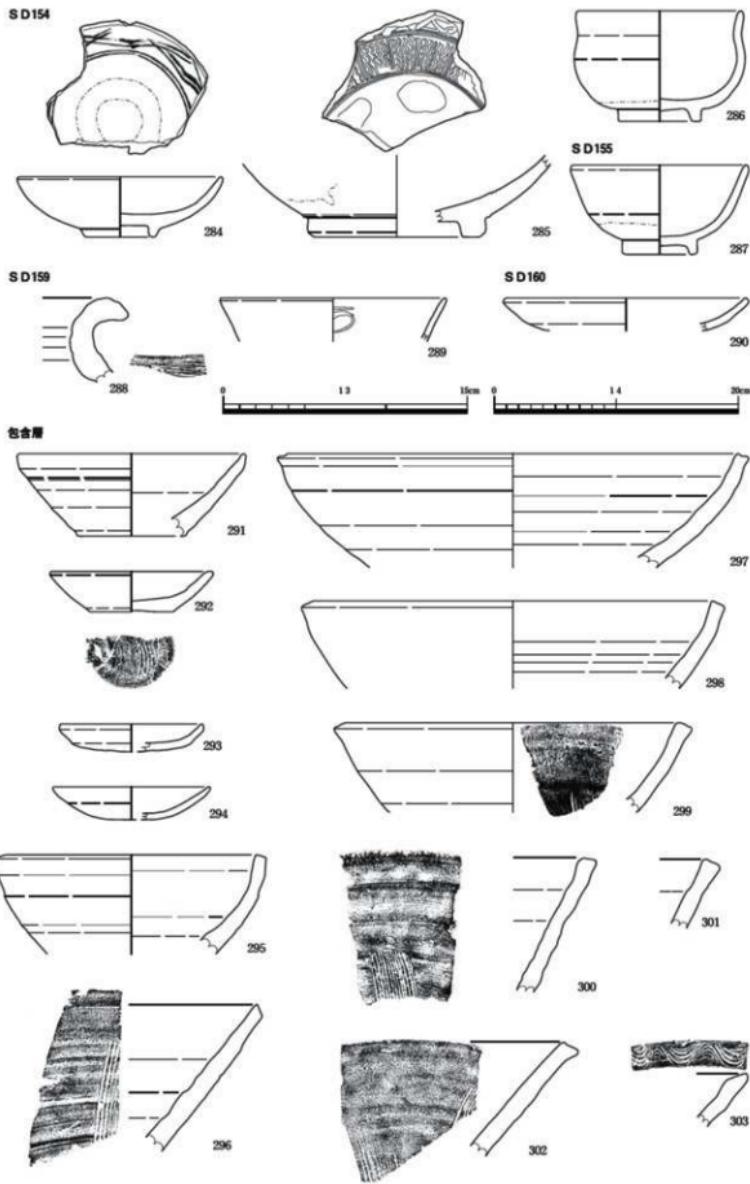
第91図 水橋金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (233~238・241~255・257 1/3, 232・239・240・
256・258 1/4, 231 1/8)

S K47 (231) S K51 (232) S K54 (233) S K55 (240) S K59 (234) S K63 (235) S K64 (236~239)
SD 106 (241~246· 248~250) SD 109 (251) SD 113 (253~255) SD 115 (252) SD 118 (256)
156 SD 119 (257· 258) SD 159 (247)

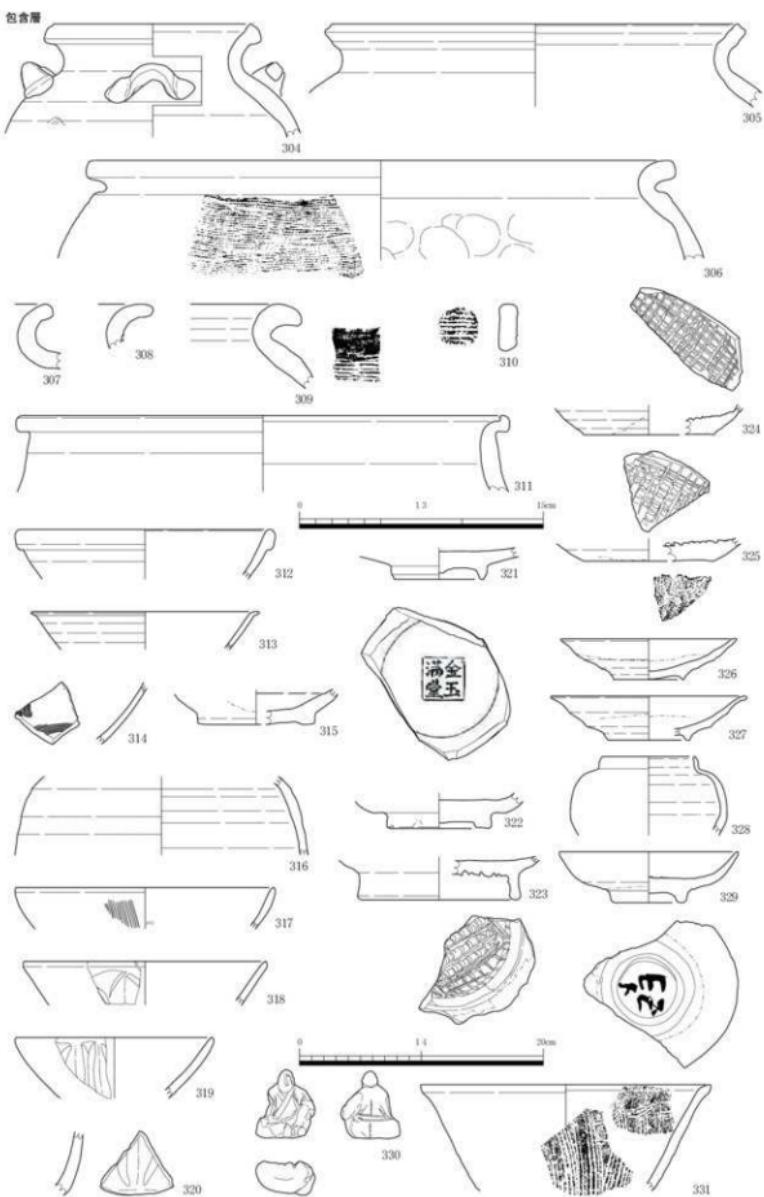


第92図 水橋金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (260・262・265～273・276・277・279～283 1/3, 259・261・263・264・274・275・278 1/4)

S D124 (259) S D125 (260) S D126 (261~263) S D130 (264~265) S D133 (266) S D137 (267~270)
 S D138 (271~272) S D141 (273) S D145 (274~276) S D146 (277) S D148 (278) S D150 (279)
 S D151 (280~283)

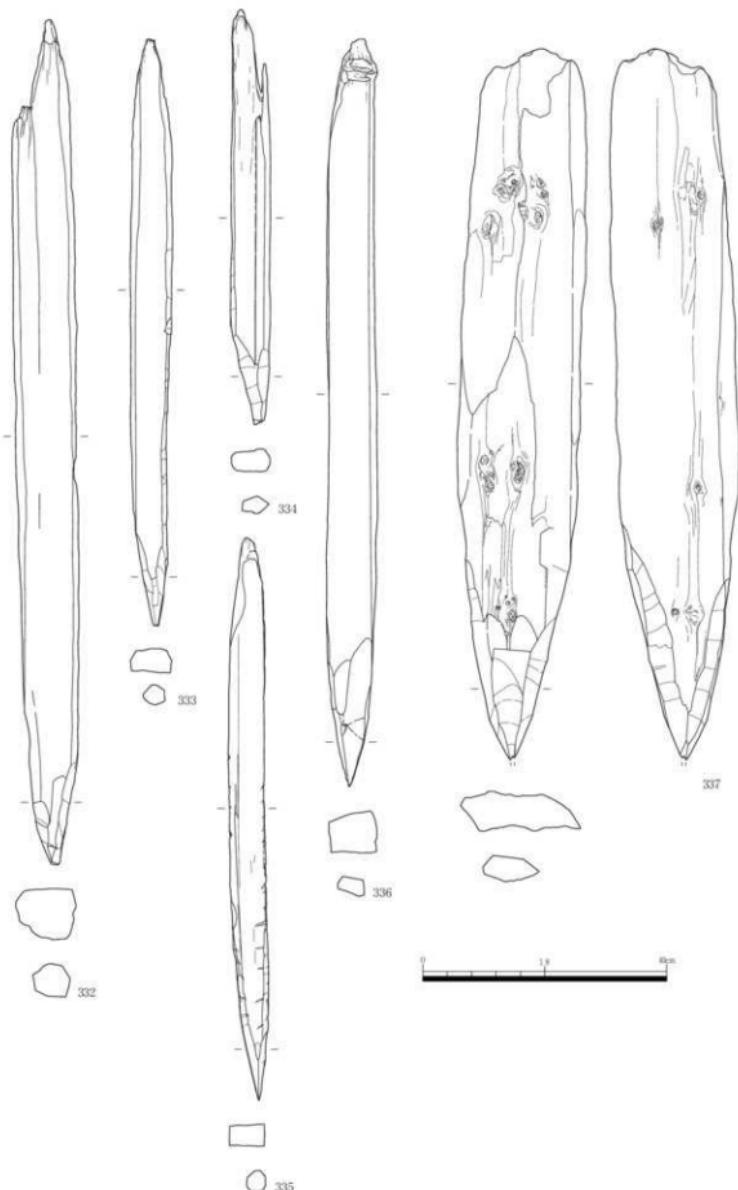


第93図 水横金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (284~287・289~303 1/3, 288 1/4)
SD154 (284~286) SD155 (287) SD159 (288・289) SD160 (290) 包含層 (291~303)

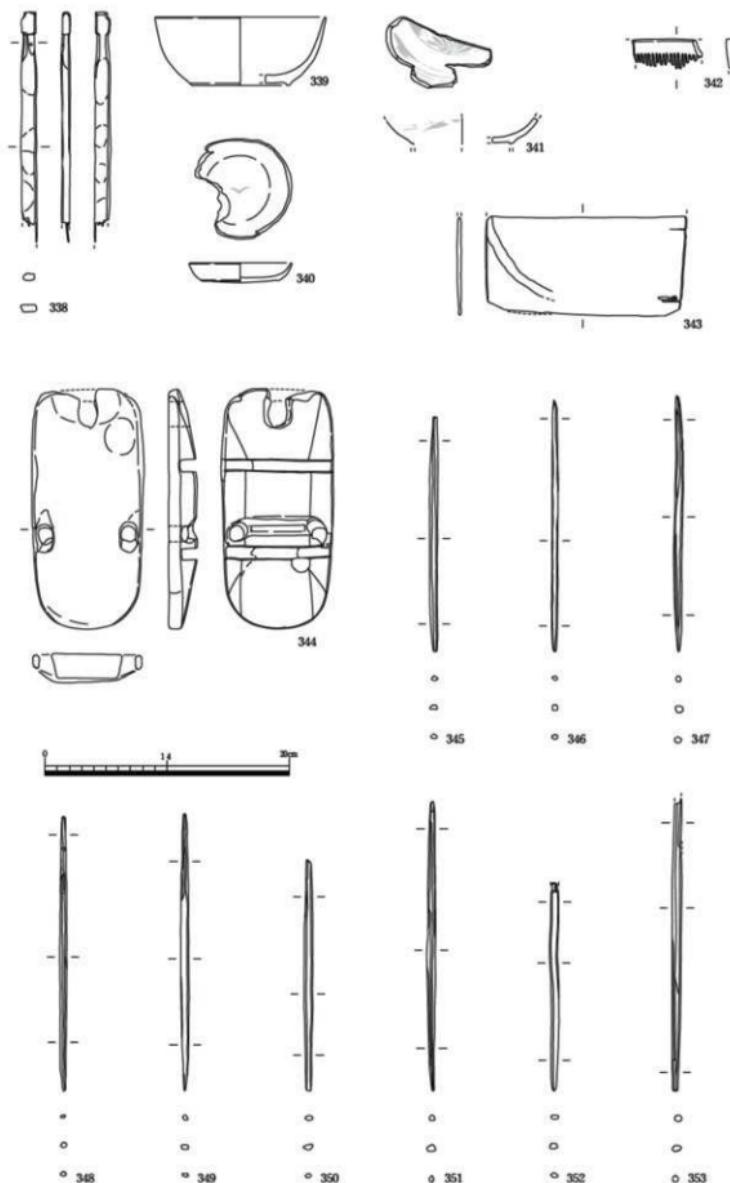


第94図 水橋金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (304・305・310・312~330 1/3, 306~309・311・331 1/4)

包含層

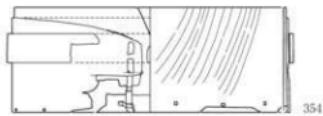


第95図 水橋金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (1/8)
S D5 (332・333) S D13 (334) S D19 (335~337)

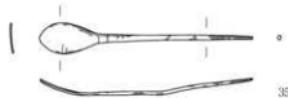


第96図 水橋金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (1/4)

S E4 (348) S E5 (349) S E6 (350) S E11 (352) S E36 (342 - 353) S K32 (351) S K58 (344)
 S D5 (338) S D106 (339 - 340 - 343 - 345 ~ 347) S D126 (341)



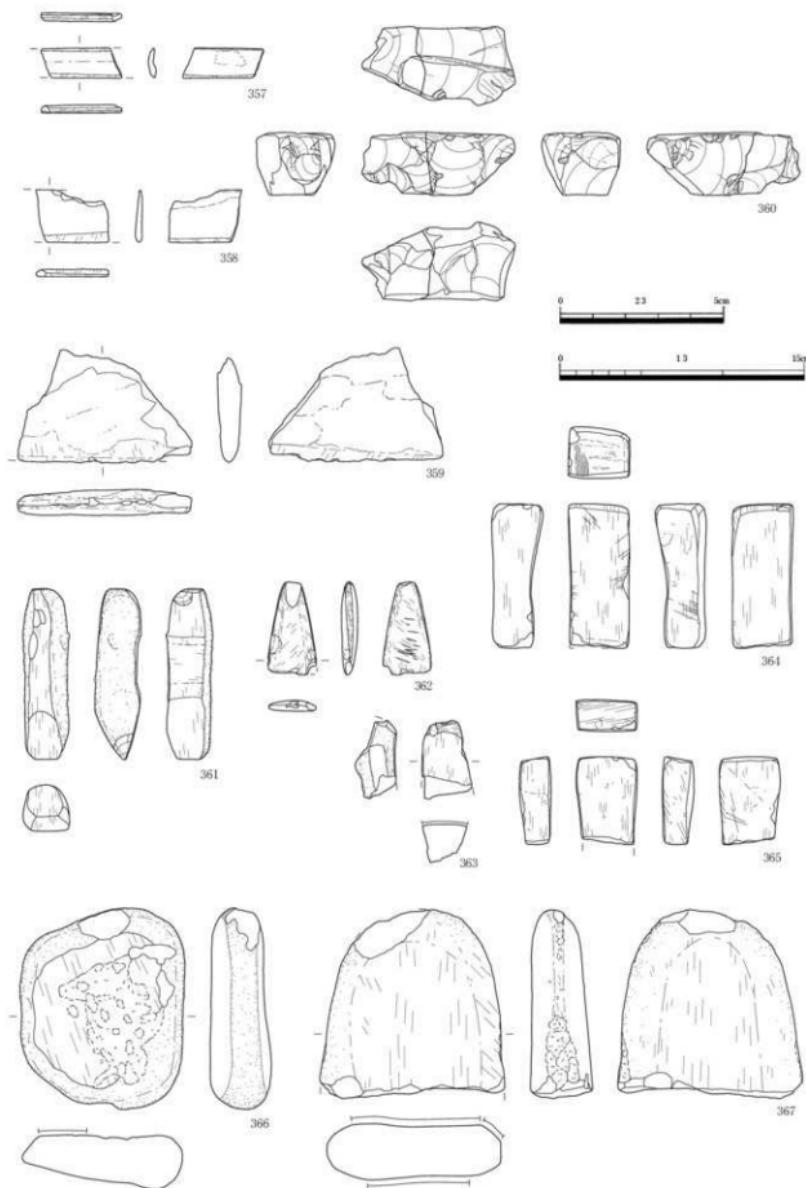
0 1 1.1 1.2 39cm 40cm



炭化範囲

0 1 1.2 10cm

第97図 水橋金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (356 1/2, 355 1/4, 354 1/8)
S E 5 (355) S E 15 (354) S D 157 (356)



第98図 水橋金広・中馬場遺跡 遺物実測図 (357~360 2/3, 361~367 1/3)

SK22 (363) SK27 (367) SD18 (366) SD19 (357) SD145 (362) 包含層 (その他)

5 自然科学分析

(1) 植物珪酸体分析・花粉分析

A はじめに

水橋金広・中馬場遺跡は、富山市水橋金広地内と中馬場地内に所在し、富山平野中央部を北流する常願寺川下流部に形成された扇状地の扇端部に位置し、白岩川の右岸に立地する。

発掘調査では、A 4～9・12 地区において、古代の烟と考えられるさく状遺構が多く検出された。また、杭や板により護岸を施された水路も認められた。そこで、栽培作物の実態を明らかにする目的で、古代さく状遺構の埋土、古代溝の埋土等を対象に植物珪酸体分析と花粉分析を行うことになった。

B 試 料

分析調査対象は A 12 地区である。分析試料は、X 157Y 256 地点の III b 層（古代遺物包含層、西壁③）と III c 層（旧 S D79 埋土、西壁④）で採取された 2 点、X 154Y 257 地点の III a 層（古代以降遺物包含層、南壁②）、III b 層（S D84 埋土、南壁④）、落ち込み状遺構埋土（古代以前の遺構埋土、南壁⑥）、IV 層（地山、南壁⑩）で採取された 4 点、X 155Y 262 地点の III c 層（S D95 埋土、南壁⑨）で採取された 1 点の計 7 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。なお、旧 S D79 と S D95 は古代の烟溝、S D84 は古代の溝である。

C 植物珪酸体分析

a : 方 法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピース法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1 g に対し直徑約 40 μm のガラスピースを約 0.02 g 添加（0.1mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6 時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピース個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁶ g）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山、2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

b : 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 19 表および第 99 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族 A（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亞科〕

チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

その他

c : 考 察

1) 稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。なお、陸稲栽培の場合は、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑期間をおく必要があるため、イネの密度は水田跡と比較してかなり低くなり、1,000～2,000個/g程度である場合が多い（杉山、2000）。

・X157Y256 地点

Ⅲb層（No64）とⅢc層（旧S D79、古代の烟溝、No65）について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。このうち、Ⅲb層（No64）では密度が3,600個/gと比較的高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。Ⅲc層（S D79、古代の烟溝、No65）では密度が2,700個/gと比較的低い値であるが、前述のように陸稲栽培の場合は1,000～2,000個/g程度が判断基準となることから、同遺構で稲作が行われていた可能性が考えられる。

・X154Y257 地点

Ⅲa層（No66）、Ⅲb層（S D84、No67）、落ち込み状遺構埋土（No68）、Ⅳ層（地山、No70）について分析を行った。その結果、Ⅲa層（No66）とⅢb層（S D84、No67）からイネが検出された。密度は前者では2,800個/gと比較的低い値であり、後者では700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

・X155Y262 地点

Ⅲc層（S D95、古代の烟溝、No69）について分析を行った。その結果、イネが検出されたが、密度は2,100個/gと比較的低い値である。なお、前述のように陸稲栽培の場合は1,000～2,000個/g程度が判断基準となることから、同遺構で稲作が行われていた可能性が考えられる。

2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジユズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクヒエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、ほとんどの試料からヨシ属、ウシクサ族A、チマキザサ節型、樹木（その他）が検出されたが、いずれも比較的少量である。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢となっている。

以上の結果から、各遺構の埋土の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはウシクサ族やササ属（チマキザサ節やミヤコザサ節）などが生育していたと推定される。また、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと考えられる。

D 花粉分析

a：方 法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm³を採量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン液を加え 1 分間湯煎）を施す
- 6) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種であることからイネ属型とする。また、この分析処理を施すとクスノキ科の花粉は分解し検出されない。

b：結 果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 18、樹木花粉と草本花粉を含むもの 3、草本花粉 21、シダ植物胞子 2 形態の計 49 である。これらの学名と和名および粒数を第 20 表に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 100 図に示す。なお、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、サワグルミ、ハンノキ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属—ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、イボクサ、タ

デ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アラナ科、ツリフネソウ属、キカシグサ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

单条溝胞子、三条溝胞子

2) 花粉群集の特徴

・X157Y256 地点

下位よりIIIc層（旧S D79埋土）では、イネ属型を含むイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属を中心にアラナ科、チドメグサ亜科、タンボボ亜科、セリ亜科が伴われる。またIIId層では、イネ属型が増加し、ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、ホシクサ属、ソバ属が検出される。樹木花粉では、スギ、コナラ属コナラ亜属が主要で、ハンノキ属、クリなどが低率に検出される。

・X157Y256 地点

下位よりVI層（地山）では、花粉密度がきわめて低くほとんど検出されない。落ち込み状遺構埋土では、草本花粉の占める割合が高く、ヨモギ属、イネ科が優占し、カヤツリグサ科、セリ亜科、タンボボ亜科、キク亜科が伴われる。樹木花粉では、スギ、ブナ属などがやや低率に検出される。IIId層（S D84埋土）では、花粉密度が低くヨモギ属、イネ科、クワ科-イラクサ科などが少量検出される。IIIf層では、草本花粉の占める割合が高く、草本花粉のイネ科、ヨモギ属が優占し、カヤツリグサ科、アラナ科を中心にセリ亜科、タンボボ亜科、キク亜科、イボクサ、ソバ属が伴われる。樹木花粉ではスギとコナラ属コナラ亜属を主に、ブナ属、ハンノキ属などが伴われる。

・X155Y262 地点

IIIc層（S D95埋土）では、花粉密度が低くスギ、コナラ属コナラ亜属などの樹木花粉、ヨモギ属、イネ科などの草本花粉が少量検出される。

c：花粉分析から推定される植生と環境

1) X157Y256 地点

・IIIc層（旧S D79、古代さく状遺構埋土）

周辺にはイネ科が優勢に分布し、カヤツリグサ科が多く、ホシクサ属が生育していた。イネ属型が検出されることから、稲作が営まれていた可能性が推定される。またヨモギ属もやや多く、やや乾燥した環境も分布していた。イネ科には雑穀類が含まれる可能性もある。

・IIId層（古代以降遺物包含層）

イネ科とカヤツリグサ科を主にガマ属-ミクリ属、オモダカ属の水生植物が生育していた。イネ属型が増加すること、オモダカ属は水田雑草の性格をもつことから、水田の分布が示唆される。ソバ属が検出され、ヨモギ属もやや多いことから畠も分布していた。イネ科には雑穀類が含まれる可能性もある。

2) X157Y256 地点

・VI層（地山）

花粉がほとんど検出されない。試料となった堆積物が砂であることから、淘汰・分別作用によって微遺体が堆積しなかったとみなされる。

・落ち込み状遺構埋土（古代以前の遺構埋土）

主にヨモギ属、イネ科の草本が分布し、タンボボ亜科やキク亜科などが伴われることから、やや乾

燥した環境が示唆される。

・Ⅲb層（SD84埋土）

花粉密度が低いことから、当該溝は、花粉などの植物遺体が分解される乾湿を繰り返す堆積環境であったと推定される。したがって、當時水が流れている状態ではなく、季節的あるいは引水などにより断続的に水流のある溝であったと考えられる。なお、周辺には、ヨモギ属、イネ科、クワ科・イラクサ科などが生育していた。

・Ⅲa層（古代以降遺物包含層）

イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科の草本が分布していた。栽培植物のソバ属とイネ属型、さらに栽培植物を含むアブラナ科が検出されることから、畑や水田の分布が示唆される。

3) X155Y262 地点

・Ⅲc層（SD95、古代さく状遺構埋土）

ヨモギ属やイネ科の分布が示唆されるが、花粉密度が低いことから、花粉などの植物遺体が分解される乾湿を繰り返す堆積環境であったと推定される。

4) 森林植生

Ⅲa層、Ⅲb層、Ⅲc層の時期とも、遺跡周辺には樹木は少ない。周辺地域の森林植生としては、スギ林、ナラ（コナラ属コナラ亜属）林、ブナ林の分布が推定される。

E まとめ

水橋金広・中馬場遺跡における古代の農耕の様相について、植物珪酸体分析と花粉分析から検討を行った。当時の栽培植物と周辺植生、および堆積環境について第21表にまとめる。

下位より、Ⅲc層の時期は、イネの植物珪酸体が検出されることから、畑もしくは水田の分布が認められた。落ち込み状遺構の周辺は、ヨモギ属とイネ科が分布し、やや乾燥した環境が示唆された。Ⅲb層とⅢa層からは、栽培植物のソバ属、イネ属型の花粉、さらにイネの植物珪酸体が検出された。また、イネ科の中には雑穀類、アブラナ科の中には栽培種の可能性があり、さらに雑草類の構成も耕作地の可能性を示唆するものであった。こうしたことから、當時、畑や水田が分布していたと推定された。SD84（古代の溝）は、花粉が分解する乾湿を繰り返す堆積環境が示唆され、當時水が流れるのではなく季節的や引水などにより断続的に流れる溝であったと推定された。各遺構の埋土の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿润な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはウシクサ族やササ属（チマキザサ節やミヤコザサ節）などが生育していたと推定される。

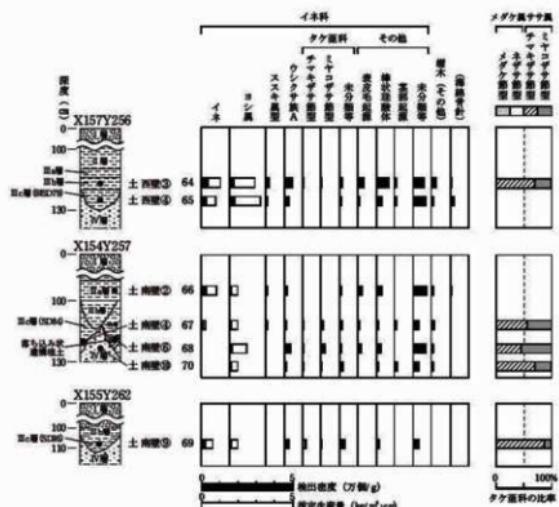
森林植生としては遺跡周辺には樹木は少なく、周辺地域の森林としてはスギ林、ナラ（コナラ属コナラ亜属）林、ブナ林が分布していた。

（株式会社古環境研究所 杉山真二・金原正子・松田隆二）

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケア科植物の同定—古環境推定の基礎資料として一。考古学と自然科学、19, p.69-84.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社, p.189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学、9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査一。考古学と自然科学、17, p.73-85.
- 中村純（1967）花粉分析。古今書院, p.82-102.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, p.60.

- 中村純 (1980) 日本産花粉の懸念。大阪自然史博物館収蔵目録第13集, p.91.
 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として。第四紀研究, 13, p.187-193.
 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉。考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

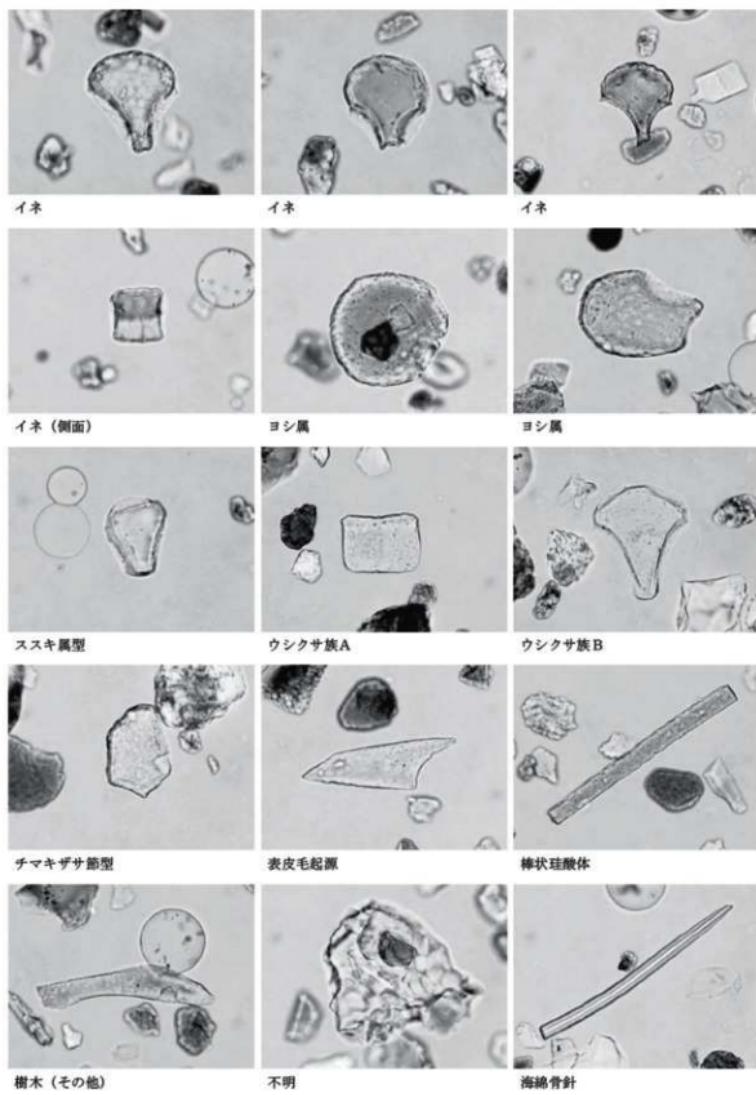


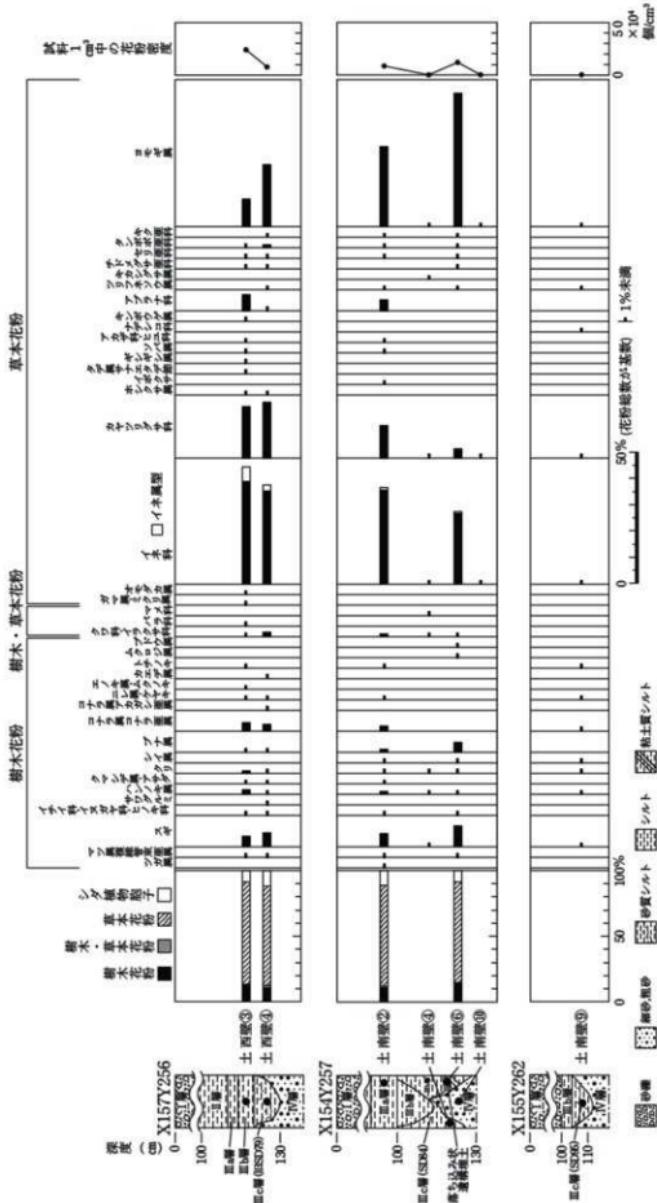
第99図 水橋金広・中馬場遺跡A12地区における植物珪酸体分析結果

第19表 水橋金広・中馬場遺跡A12地区における植物珪酸体分析結果

地点・試料		X157Y256			X154Y257			X155Y262		
分類群	学名	IIIa層 (350-300)	IIIb層 (250-200)	IVa層 (250-200)	IVb層 (250-200)	Ⅴa層 草らしみ灰 腐植堆土	Ⅴb層 (250-200)	Ⅵ層 (草山)	Ⅶ層 (500-600)	
イネ科	<i>Gramineae</i>									
イネ	<i>Oryza sativa</i>	36	27	28	7			21		
ヨシ属	<i>Polygonum</i>	22	27	7	7	15	7	7		
ススキ属型	<i>Akkeneusus</i> type	14	7	7	7					
ウシガサ族A	<i>Andropogon</i> A type	43	20	14	7	30	7	21		
タケ科	<i>Bambusoideae</i>									
マツカサザ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	7			7	7	7	21		
ミヤマザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Cramzoid</i>	7			14	22	7	7	1	
未分類等	Others	14	7	7	14	7	15	28		
その他イネ科	Others									
表皮毛起源	Husk hair origin	29	7	21	7	15				
棒状起源	Rod shaped	65	27	78	7	22	7	14		
茎起源	Stem origin	7	7	7		7		15		
未分類等	Others	58	68	71	26	67	30	28		
裸木起源	Aridoreal									
その他	Others	22	7	7	14	7	7			
(海綿骨粉)	Sponge spherule	7	20	7						
植物珪酸体総数	Total	324	203	241	126	194	105	149		
おもな分類群の指定生産量 (単位: kg/m²·cm) : 試料の板比重を1.0と仮定して算出										
イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.00	0.79	0.83	0.20			0.63		
ヨシ属	<i>Polygonum</i>	1.36	1.70	0.45	0.44	0.94	0.47	0.45		
(ススキ属型)	<i>Akkeneusus</i> type	0.18	0.08	0.09	0.09					
マツカサザ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.05			0.05	0.06	0.06	0.16		
ミヤマザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Cramzoid</i>	0.02			0.04	0.07	0.02	0.02		
タケ科の比率 (%)										
マツカサザ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	71		56	46	71	38			
ミヤマザサ属型	<i>Sasa</i> sect. <i>Cramzoid</i>	29		44	55	29	12			
メダクサ属	Medakas	0		0	0	0	0			

水橋金広・中馬場遺跡の植物硅酸体（プラント・オパール）

— 50 μ m —



第100図 水槽金広・中馬場遺跡A12地区における花粉ダイアグラム

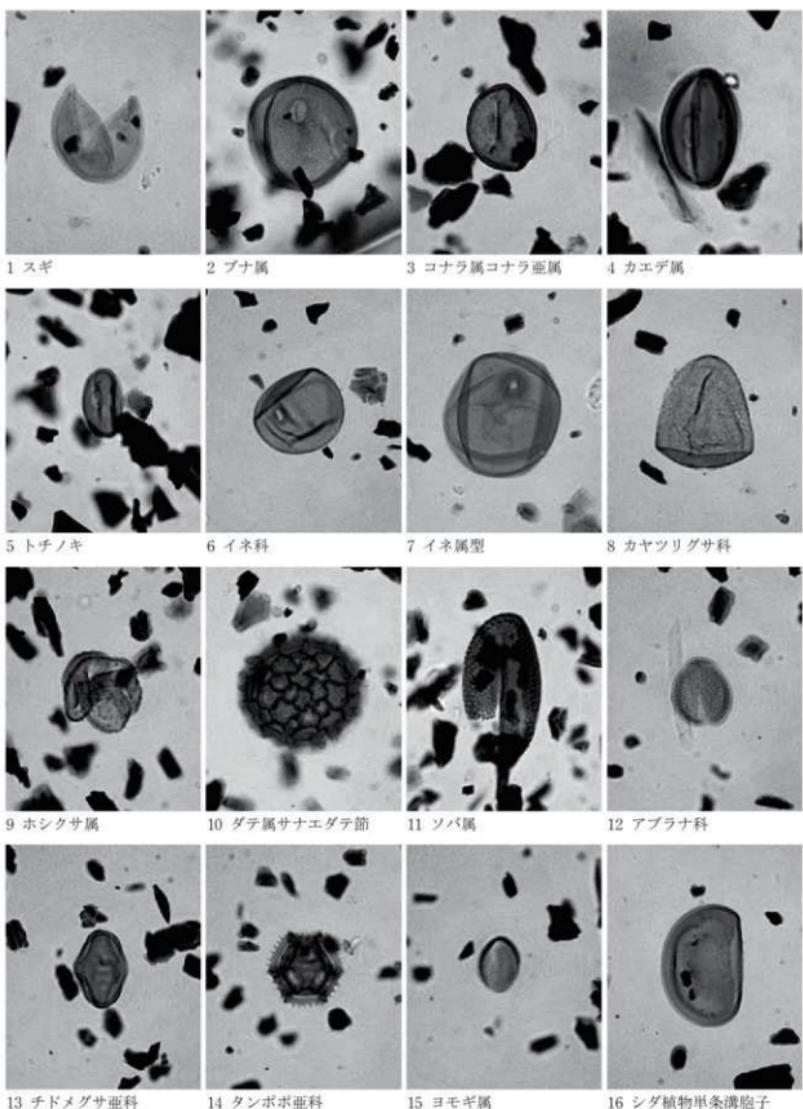
第20表 水橋金広・中馬場遺跡A12地区における花粉分析結果

分類群	種名	X157Y256		X154Y257		X155Y262	
		IIIb層 (SD79)	IIIc層 (SD84)	IIIa層 (SD84)	落ち込み状 造構造土	IV層 (SD10)	IIIc層 (SD95)
Arboreal pollen	樹木花粉						
Trees	ツバキ属			1			
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diplostylis</i>	マツ属地質学上南極属	3	2	2		2	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	22	20	23	1	25	3
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科 イヌガヤ科 ヒノキ科	2	2	3		2	
<i>Paracarya rhoifolia</i>	サワグルミ		1				
<i>Alnus</i>	ハンゴンカツラ属	10	2	5	1	4	1
<i>Carpinus Ostrya japonica</i>	クマシデ属 アザダ	2	1	1			
<i>Castanea crenata</i>	クリ	6	2	2	1	3	1
<i>Castanopsis</i>	シタケ属			1		1	
<i>Fagus</i>	クナラ属	5	3	5		16	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalans</i>	クヌク属コナラ属	19	10	9			3
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalans</i>	クヌク属アカガシ属						
<i>Ulmus</i> <i>Zelkova serrata</i>	レムニ科	1	2	1			2
<i>Celtis Aphanocarpa</i>	エノキ属 ムクノキ						
<i>Acer</i>	カエデ属			1			
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	4		2			1
<i>Sapindus</i>	ムクノジ属				1		
Fern	ブドウ属				2		
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木+草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科 イラクサ科	4	7	5	4	2	
Rosaceae	バラ科	1					
Leguminosae	マメ科			1			
Nonarboreal pollen	日本花粉						
<i>Typha</i> <i>Spartium</i>	ガマ属 ミクニ属	1					
<i>Spartina</i>	セモリカ属	5					
Gramineae	イネ科	236	138	162	4	116	5
Oxalis-type	イネ科型	30	8	4	1	2	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	107	82	96	2	15	1
Eriocaulaceae	ホシクサ属	2	1				
<i>Anemone keiskei</i>	イボウサ			1			
Polygonum sect. <i>Persicaria</i>	タブガサ属 タナエタデ属	3					
Rumex	ギンシシ属	1					
Fagopyrum	ソバ属	1		1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科 ヒヌリ科	5		2			
Caryophyllaceae	ナデシコ科						1
Ranunculus	キシノリク属	2					
Ipomoea	アサガオ属	34	22	19			
Rotala	キクハグサ属	1	1	1		1	
Hydrocotyle/ndiae	シドリグサ科	1	3			2	
Apoideae	セリ科	2	2	1		4	
Lactucaeae	タンポポ科	4	4	4		2	
Asteridae	ヒラギ科	2	2	2	1		
Aristolochia	ヨモギ属	58	91	138	6	218	1
Fern spore	シダ植物孢子						
Monolete type spore	单柔毛孢子	33	35	36	5	19	7
Trilete type spore	三柔毛孢子	20	16	20		22	1
Arboreal pollen	樹木+草本花粉	75	47	55	3	66	
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木+草本花粉	5	7	5	5	2	
Nonarboreal pollen	草本花粉	472	334	391	14	362	7
Total pollen		599	398	506	22	459	7
Pollen frequencies of 1cm ⁻²	試料1cm ⁻² 中の花粉密度	2.1	2.6	2.6	1.6	1.5	2.2
		×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ²	×10 ⁴	×10 ⁴
Unknown pollen	未同定花粉	3	0	2		2	
Fern spore	シダ植物孢子	33	81	56	5	41	1
Helminth eggs	寄生虫卵	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
Stone cell	石细胞	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
Digestion remains	消化不能物	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
Charcoal fragments	燃燒化物	(++)	(++)	(+)	(++)	(+)	(+)

第21表 水橋金広・中馬場遺跡A12地区における栽培植物と環境

	試 料	栽培植物	雜 草	環 境
X157Y256	西壁③: IIIb層 (古代以降遺物包含層)	ゾバ属、アブラナ科 イネ、(雑穀)	カヤツリグサ科、オモダカ属、 ヨモギ属、ホシクサ属など	湿地
	西壁④: IIIc層、旧SD79 (古代さくし状構造土)	イネ、(雑穀)	カヤツリグサ科、ヨモギ属、 ホシクサ属など	湿地～やや乾燥
X154Y257	南壁②: IIIa層 (古代以降遺物包含層)	ゾバ属、アブラナ科 イネ、(雑穀)	カヤツリグサ科、ヨモギ属、 イボクサ、アカザ科ヒユ科など	やや乾燥～湿地
	南壁④: IIIb層、SD84 (古代溝)		(ヨモギ属、クワ科-イラクサ科、 イネ科)	乾湿を繰り返す
X155Y262	西壁⑥落ち込み状構造土 (古代以前の構造土)		ヨモギ属、イネ科	やや乾燥
	西壁⑩: IV層 (地山)		(イネ科)	淘汰・分別作用
X155Y262	南壁⑨: IIIc層、SD95 (古代さくし状構造土)	イネ	(ヨモギ属、イネ科)	乾湿を繰り返す

水橋金広・中馬場遺跡の花粉・胞子



1.2.3.4.5.6.7.8.10.11.12.13.14.15.16は西壁IIIbより検出
9は西壁IIIcより検出

— 10 μm —

(2) 樹種同定

A はじめに

水橋金広・中馬場遺跡（富山市水橋中馬場地内）は、現在の常願寺川の右岸、常願寺川扇状地の扇端付近に位置する。深井（1982）によれば、これらの遺跡の周辺は常願寺川新扇状地と上市川扇状地との間に形成された白岩川流域平野に相当し、水橋金広・中馬場遺跡は白岩川右岸に立地する。本報告では、水橋金広中馬場遺跡の発掘調査で出土した木製品の樹種および木材利用の検討を目的として、樹種同定を実施した。

B 試 料

試料は、中世の木製品を主体として、弥生時代前期とされる自然木、弥生時代後期、古墳時代、古代、近世の各時期の木製品などの、計46点である。試料の詳細は結果とともに第22表に示す。

C 分析方法

試料の木取りを観察した後、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

D 結 果

樹種同定結果を第22表に示す。弥生時代前期とされる自然木、および弥生時代後期～近世の木製品は、針葉樹3分類群（マツ属複維管束亞属、スギ、アスナロ）と、広葉樹5分類群（サワグルミ、クリ、ケヤキ、カツラ、シキミ）、さらにイネ科タケ亜科に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- ・マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は急～やや緩やかで、晚材部の幅は広い。垂直樹脂道は晚材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

- ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晚材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

- ・アスナロ (*Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.) ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やかで、晚材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

- ・サワグルミ (*Pterocarya rhoifolia*) クルミ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性～異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。柔組織は短接線状、周囲状および散在状。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-15細胞高。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帶状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-30細胞高。

・シキミ (*Illicium anisatum* L.) シキミ科シキミ属

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2-4個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列、道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

・イネ科タケ亜科 (*Gramineae subfam. Bambusoideae*)

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の纖維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成するが、纖維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。維管束は柔組織中に散在し、不齊中心柱をなす。

いわゆるタケ・ササ類である。組織構造から種類を細分することは困難であるが、試料の外観や節の形状から、稈鞘が伸長と共に節から脱落するタケ類であり、節が二重になる特徴からマダケ属と考えられる。

E 考 察

弥生時代前期の自然木および弥生時代後期～近世の木製品46点からは、マツ属複維管束亜属、スギ、アスナロなどの針葉樹とサワグルミ、クリ、ケヤキ、カツラ、シキミなどの広葉樹、さらにイネ科(タケ亜科)が確認された。各分類群の木材の材質についてみると、針葉樹のマツ属複維管束亜属は軽軟で加工は容易であるが、強度や保存性が比較的高い。スギ、アスナロは木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。一方広葉樹のサワグルミ、クリ、ケヤキ、シキミは、比較的重硬で強度が高く、特にクリやケヤキは耐朽性も優れる。カツラは、強度は中程度であるが、木理が通直で割裂性があり、均質で加工が容易である。タケ亜科は、強度および韧性に優れるが、加工はやや困難である。

自然木は、放射性炭素年代測定結果から弥生時代前期頃と推定されている。この自然木は、径約1mを測り、表面に炭化の痕跡が認められており、樹種同定によりサワグルミであることが明らかとなった。サワグルミは、川沿いや渓谷沿いなどに生育する落葉高木であり、遺跡の立地や出土状況などを考慮すると、周辺に生育した樹木の可能性が高い。

弥生時代後期の木製品は、杭(2点)と棒状木製品(1点)からなる。杭は、角材状(芯去分割材)および板状(柵目)を呈し、いずれも分割加工品と考えられる。また、棒状木製品も板状(板目)を

呈することから、杭と同様に分割加工品と考えられる。これらの試料は、いずれもスギであったことから、分割加工が容易な木材の利用が推定される。

古墳時代の木製品は、杭（3点）からなり、いずれも板状（板目）を呈する分割材であった。これらの試料は、全てスギであったことから、上述した弥生時代後期の木製品と同様の木材利用が考えられる。

古代の木製品は、杭および板杭からなり、杭が分割材状（芯去分割材）、角材状（芯去分割材）、板状（柾目、板目）を呈し、板杭が板状（板目）を呈しており、すべて分割材から構成される。杭および板杭は、形状（木取り）に関わらずスギが確認されたことから、弥生時代後期および古墳時代と同様の木材利用が考えられる。

中世の木製品は、箸、漆器、敷編物、柱根、礎板、井戸水溜、薄板などがある。漆器は、いずれも横木地柾目取となる木取りであり、ミカン割材などに分割された原木から製作されたと推定される。漆器にはカツラとケヤキの2分類群が認められた。本遺跡におけるこれまでの漆器の分析調査（株式会社吉田生物研究所、2006a, 2006b）によれば、ケヤキの事例が多く、他にブナ属も認められている。カツラの事例については、中名V・VI遺跡（旧婦中町）や五社遺跡（小矢部市）などで確認でき、上記したケヤキとともに漆器の木地として利用されていたことが窺える（元興寺文化財研究所、1998；富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所、2005）。

敷編物は、薄く細い板を縦材・横材共に2本送り、2本潜りで隙間無く編んだ網代編みの資料である。板は板目板状を呈しており、観察した範囲では全て同じ樹種と推定された。分析に供した試料は、針葉樹のアスナロであったことから、割裂性や耐水性の高い木材の利用が考えられる。

柱根は、芯持丸木、分割角材、ミカン割材が各1点確認された。芯持丸木と分割角材の柱根がスギ、ミカン割材がクリであった。スギおよびクリの木材の利用から、加工性や耐朽性の高い木材が選択されたと考えられる。本遺跡で確認されている柱材は、これまでの調査でもスギやクリが多いという傾向が確認されており（沙見・岡田、2001；株式会社中部日本鉱業研究所、2006；株式会社吉田生物研究所、2006a），今回の結果も調和する。

礎板は、板状～角材状を呈し、すべて板目板状であった。井戸水溜は曲物であり、柾目あるいは板目板を呈する。また薄板は、柾目板であった。これらの板状を呈する試料は、すべてスギに同定された。さらに、箸は、すべて削出棒状であり、板状の試料と同様にスギが認められた。これらの木製品は、形状や木取り、樹種などから、割裂性が高く、加工が容易なスギ材が利用されたと考えられる。

近世の木製品は、櫛、下駄、導水管からなる。櫛は、いわゆる横櫛で、背は直線的になり、背が木口、棟が板目となる。櫛にはシキミが認められたことから、堅く緻密な木材の利用が示唆される。下駄は、台と齒が別材で構成される差歎下駄の台であり、板状（柾目）を呈する。当試料は、齒を台に固定するためのホゾが台の表に出ない陰卯下駄である。差歎下駄の台は、落葉広葉樹のクリであったことから、堅く耐朽性の高い木材の利用が考えられる。本遺跡の下駄の事例では、連歎下駄と差歎下駄の齒にスギが確認されており（株式会社吉田生物研究所、2006a），今回の結果からクリの利用も明らかとなった。導水管は、導水管本体と連結部がある。本体は板状を呈し、タケ亜科（マダケ属）が利用される。連結部は、角材状あるいは板状を呈し、マツ属複維管束亞属とスギが認められた。

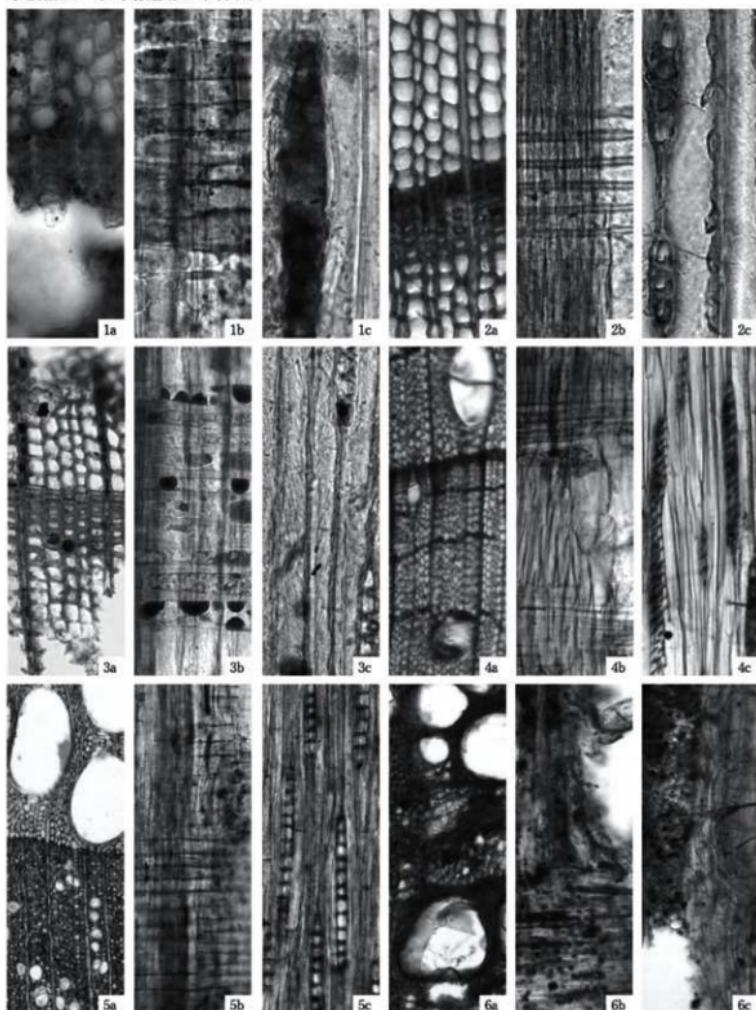
（パリノ・サーヴェイ株式会社 高橋 敏）

第22表 水橋金広・中馬場遺跡の樹種同定結果

第23表 水橋金広・中馬場遺跡の時期別器種別種類構成

時期/部類	初期		後期		古道		晉唐		宋		元		明		清		近世		昭和		平成		令和		現在		合計
	年代	地點	年代	地點	年代	地點	年代	地點	年代	地點	年代	地點	年代	地點	年代	地點	年代	地點	年代	地點	年代	地點	年代	地點	年代	地點	
分類別																											
経営形																											
経営形	自然木	木工品	木工	木製品	木工																						
マツ屋根瓦技術実業	2	1	3	5	3	8										2	5	4	1	1							1
スギ																											1
スギナホ																											1
伝承形																											1
サワダルミ	1																										1
クリ																											1
セヤキ																	2										2
カツラ																	1										1
シロイヌ																											1
その他																											1
イネコケテア植物	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
△	1	2	1	3	6	3	8	3	1	3	5	4	3	1	3	5	4	3	1	1	3	1	3	5	4	3	1

水橋金広・中馬場遺跡の木材(1)



1.マツ属複維管束亜属(M090706)

2.スギ(M070129)

3.アスナロ(M070037)

4.サワグルミ(ABS-SK221;自然木)

5.クリ(M070125)

6.ケヤキ(M070145)

a:木口,b:柾目,c:板目

200 μ m:4-6a

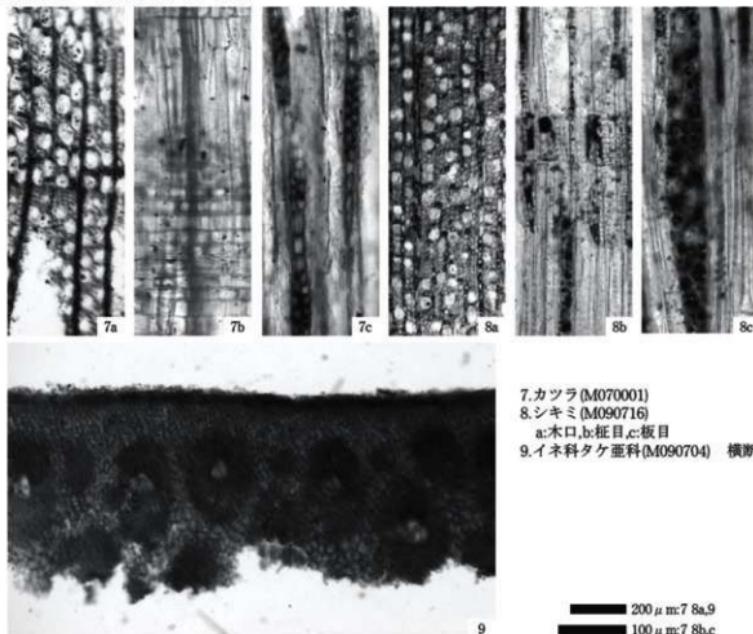
100 μ m:1-3a,4-6b,c

100 μ m:1-3b,c

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, p.81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, p.66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, p.83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, p.30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, p.47-216.
- 株式会社中部日本鉱業研究所, 2006, 水橋金広・中馬場遺跡出土木製品・炭化物の樹種調査結果－平成14年度（その1）調査区の試料から－, 富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書 II, 富山市教育委員会, p.126-134.
- 株式会社吉田生物研究所, 2006a, 水橋金広・中馬場遺跡出土木製品・炭化物の樹種調査結果－平成14～16年度調査区の試料から①－, 富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書 II, 富山市教育委員会, p.151-152.
- 株式会社吉田生物研究所, 2006b, 水橋金広・中馬場遺跡出土の塗膜構造調査－平成14年度（その1）調査区の試料から①－, 富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書 II, 富山市教育委員会, p.141-146.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社, p.70. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*.]
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 国説木材組織, 地球社, p.176.
- 沢見 真・岡田文男, 2001, 富山市水橋金広・中馬場遺跡出土木製品の樹種調査結果, 富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書 一県営農免農道（上条南部地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）, 富山市埋蔵文化財調査報告 113, 富山市教育委員会, p.91-93.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修）, 海青社, p.122. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*.]
- 財団法人元興寺文化財研究所, 1998, 樹種鑑定報告書・五社遺跡発掘調査報告書・能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告 I- (第2分冊), 富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第9集, 富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所, p.39-64.
- 財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所, 2005, 中名V・VI遺跡, 砂子田I遺跡発掘調査報告一公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告IV (第一分冊), 富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第26集, p.294.

水橋金広・中馬場遺跡の木材(2)



(3) 石材鑑定

A はじめに

水橋金広・中馬場遺跡は常願寺川扇状地扇端付近に立地する。本報告では、石材鑑定結果と、前述した各遺跡の地理的位置および地質学的背景を参考として、石材の由来について検討を行った。

B 試 料

鑑定対象とされた石器・石製品は、縄文時代の磨製石斧1点、弥生時代の擦切石器3点、柱状片刃石斧1点および石核1点、古代の砥石1点、中世の砥石2点、中近世の砥石2点の計11点である。各試料の詳細（遺物番号、台帳番号、遺構番号、出土地点等）は、鑑定結果とともに第24表に示した。また、確認された石質（岩種）のうち、代表的なものについては写真撮影を行い、写真に示した。

C 分析方法

鑑定は、野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。

D 結 果

石質の鑑定結果を第24表、種類および時代別に集計した石材組成を第25表に示す。

出土石材は、火山岩類の流紋岩2点および輝石安山岩1点、火山碎屑岩類の流紋岩質溶結凝灰岩1点、堆積岩類の砂岩2点および頁岩1点、変成岩類の緑色片岩1点および粘板岩1点、変質岩類の変質流紋岩（緑色）1点および蛇紋岩1点と鑑定された。

E 考 察

水橋金広・中馬場遺跡は、富山平野東部を流れる白岩川下流の右岸に位置する。白岩川や近隣の大河川となっている常願寺川を経由した礫は在地性の石材とみることができる。常願寺川や白岩川の地質は先述した通りである（第Ⅲ章上梅沢遺跡 5 自然科学分析 （3）石材鑑定を参照）。

火山岩類の輝石安山岩、堆積岩類の砂岩および頁岩は在地性とみなせる石材であるが、その他は非在地性の可能性を有する石材である。中世および中近世の砥石として使用されている流紋岩は、先述したように、神通川、庄川、小矢部川流域に分布する石材である。また、弥生時代の擦切石器として使用されている流紋岩質溶結凝灰岩、石核の変質流紋岩についても、流紋岩と同様な由来を想定することができる。

弥生時代の擦切石器として使用される変成岩類の緑色片岩については、富山県下における分布は知られておらず、県外からの搬入品と推定される。産地の特定は困難であるが、緑色岩を胚胎する地質としては、三波川帯のものが良く知られていることから、これらとの比較が重要と考えられる。同じ擦切石器として使用されている粘板岩も富山県下においてはほとんど採取できないと考えられる石材であり、これも搬入石材と推定される。粘板岩は、ジュラ系の美濃-丹波帯等においてしばしば含まれる石材であるが、その他にも日本各地に産出する石材であるため、産地の特定は難しい。

縄文時代の磨製石斧に認められる蛇紋岩は、一般に超塩基性～塩基性貫入岩がおよそ600°C以下の変質作用を被ることによって形成される岩石である。富山県下においては、蛇紋岩は飛騨外縁帯の超塩基性～塩基性岩類にしばしば伴われることが知られている。飛騨外縁帯における超塩基性岩～塩基性岩類は、青海-蓮華帯が分布する青海-白馬岳地域に多産するため、このような地域より持ち込まれたものと考えられる。

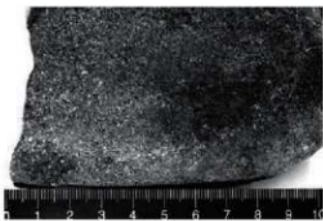
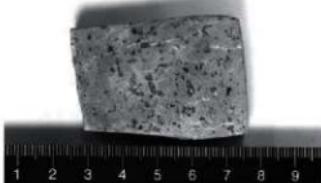
（パリノ・サーヴェイ株式会社 石岡智武）

第24表 水橋金広・中馬場遺跡における石材鑑定結果

台帳番号	遺物番号	地区	遺構番号	出土地点	時期	種類	石質	備考
I070127	363	A 3	S K22		中世	砥石	流紋岩	
I070128	367	A 3	S K27		中世	砥石	砂岩	
I070053	366	A 6	S D18	X168Y281	古代	砥石	砂岩	
I080001	361	A 7		I層 X161Y289	弥生時代	柱状片刃石斧	頁岩	
I080002	357	A 8 N	S D19	X178Y273	弥生時代	擦切石器	綠色片岩	
I080005	360	A 8 N		II層 X176Y278	弥生時代	石核	變質流紋岩(緑色)	
I080013	358	A 8 S		II層 X167Y276	弥生時代	擦切石器	粘板岩	
I080014	359	A 8 S		II層 X170Y270	弥生時代	擦切石器	流紋岩質溶結凝灰岩	
I080018	362	A 10	S D145	下層	縄文時代	磨製石斧	蛇紋岩	
I090371	364	A 11		III層 X74Y130	中近世	砥石	流紋岩	
I090372	365	A 11		III層 X74Y130	中近世	砥石	輝石安山岩	

第25表 水橋金広・中馬場遺跡出土石器・石製品の種類別石材組成

	縄文時代	弥生時代		古代	中世	近世	合計
		磨製石斧	擦切石器	柱状片刃石斧	石核	砥石	
火山岩類							
流紋岩	-	-	-	-	-	1	1
輝石安山岩	-	-	-	-	-	-	1
火山碎屑岩類							
流紋岩質溶結凝灰岩	-	1	-	-	-	-	1
堆積岩類							
砂岩	-	-	-	-	1	1	-
頁岩	-	-	1	-	-	-	1
変成岩類							
綠色片岩	-	1	-	-	-	-	1
粘板岩	-	1	-	-	-	-	1
変質岩類							
變質流紋岩(緑色)	-	-	-	1	-	-	1
蛇紋岩	1	-	-	-	-	-	1
合計	1	3	1	1	1	2	11

01MN 367 I070128
中世 砥石 砂岩01MN 361 I080001
弥生時代 柱状片刃石斧 頁岩01MN 362 I080018
縄文時代 磨製石斧 蛇紋岩01MN 365 I090372
中近世 砥石 輝石安山岩

(4) 漆製品の塗膜分析

A はじめに

水橋金広・中馬場遺跡は、富山市水橋中馬場に位置する。調査では、中世の遺構から漆製品が出土した。ここでは、水橋金広・中馬場遺跡から出土した漆製品について塗膜薄片を作製し、光学顕微鏡観察、赤外分光分析およびX線分析を行い、塗膜構造と材料について検討した。

B 試料と方法

分析試料は、水橋金広・中馬場遺跡の中世の溝から出土した漆器3点である（第26表）。

第26表 水橋金広・中馬場遺跡出土漆器と塗膜分析試料

分析No	遺物番号	台帳番号	時期	地区一遺構	出土地点	種類	塗膜分析		薄片数
							外面 絵付け紋様	黒り	
1	339	M070001	中世	A 1 - S D106	最下層取上 No.1	漆器	黒色	黒色(光沢無)	2枚
2	340	M070002	中世	A 1 - S D106	最下層取上 No.2	漆器	黒色	底部赤色(不明)	2枚
3	341	M070145	中世	A 3 - S D126	X100Y175	漆器	黒色	赤色(刷)	2枚同様

はじめに、採取した塗膜片は、表面の漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。その後、高透明エボキシ樹脂を使用して包埋した後、薄片作製機および精密研磨フィルム (#1000, #2000, #4000) を用いて厚さ約 50 μm 前後に仕上げた。各塗膜薄片は、表面蒸着を施した後、おもに赤色塗膜層を対象としてX線分析を行った。X線分析を行った塗膜薄片は、再度精密研磨フィルム (#1000, #2000, #4000) を用いて厚さ約 10 μm 前後に調整した後、偏光顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

なお、赤外分光分析は、各塗膜の表面部分において手術用メスなどを用いて薄く削り取った後、押しつぶして、厚さ 1 mm 程度に裁断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光㈱製 FT/IR-410, IRT-30-16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

またX線分析では、エネルギー分散型X線分析装置を付属した走査型電子顕微鏡を用いて無機成分を調べた。観察および測定は、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV）による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型X線分析装置（同 JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。

C 結果および考察

以下に、水橋金広・中馬場遺跡から出土した漆製品の塗膜分析結果について述べる。なお、各試料の表面部分の赤外吸収スペクトル図では、縦軸が透過率(%R)，横軸が波数 (Wavenumber (cm⁻¹)；カイザー) を示す。各スペクトル図はノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は生漆の赤外吸収位置を示す（第27表）。各塗膜の特徴は第28表にまとめた。

[分析 No.1 (漆器)]

外面黒色塗り塗膜層は、炭粉からなる下地 b 層、塗膜層 c 1 層および c 2 層で構成されていた（図版 1-1 a, 1 b）。表面塗膜層では、赤外分光分析により生漆の吸収 (No.6 ~ 8) が確認された（図版 2-3）。

内面黒色塗り塗膜層は、木胎 a 層、炭粉からなる下地 b 層、塗膜層 c 1 層で構成されていた（図

第27表 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

版1-2 a, 2 b)。なお、塗膜c 2層は脱落していた。

[分析 No.2 (漆器)]

内面黒色塗り塗膜層は、炭粉からなる下地b層、塗膜層c 1層～c 4層で構成されていた(図版1-3 a, 3 b)。表面塗膜層では、赤外分光分析により生漆の吸収(No.6～8)が確認された(図版2-4)。

内面赤色絵塗膜層は、木胎a層、炭粉からなる下地b層、塗膜層c 1層～c 4層、赤色絵塗膜c 5層で構成されていた(図版1-4 a, 4 b)。赤色絵塗膜c 5層のX線分析では水銀(HgO)が検出され(第29表)、水銀朱による赤色であった。

[分析 No.3 (漆器)]

内面黒色塗り塗膜層は、炭粉からなる下地b層、塗膜層c 1層およびc 2層で構成されていた(図版2-1 a, 1 b)。

内面赤色絵塗膜層は、炭粉からなる下地b層、塗膜層c 1層およびc 2層、赤色絵塗膜c 3層で構成されていた(図版2-2 a, 2 b)。表面塗膜層では、赤外分光分析により生漆の吸収(No.6～8)が確認された(図版2-5)。赤色絵塗膜c 3層のX線分析では水銀(HgO)が検出され(第29表)、水銀朱による赤色であった。

D おわりに

水橋金広・中馬場遺跡から出土した漆製品について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、いずれの漆製品も炭粉下地層および塗膜2層からなり、分析No.2およびNo.3では水銀朱からなる赤色顔料を使用していた。

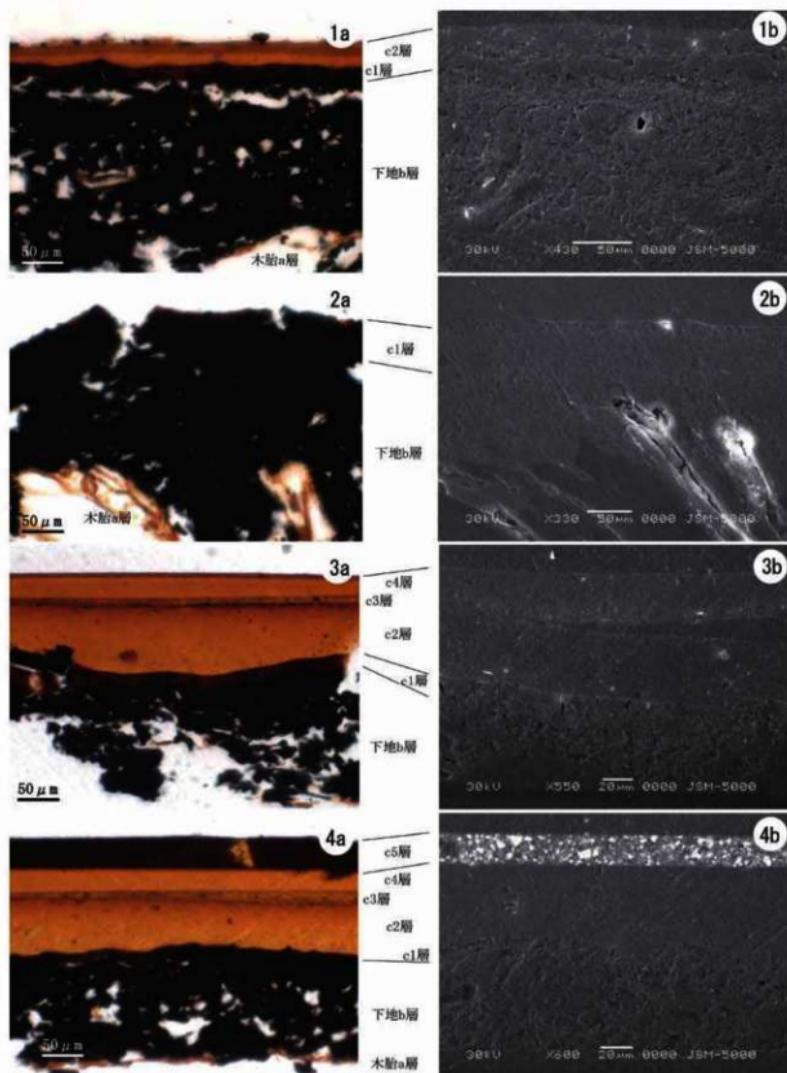
(パレオ・ラボ 藤根 久・米田恭子)

第28表 水橋金広・中馬場遺跡出土漆器類と塗膜分析結果

分析 No	種類	塗膜分析				偏光顕微鏡観察、電子顕微鏡観察およびEDS測定						
		外面		内面		外面			内面			
		胎付け紋様	塗り	胎付け紋様	塗り	胎付け紋様	赤色塗り	黒色塗り	下地	胎付け紋様	赤色塗り	黒色塗り
1	漆器	黒色		黒色(光沢無)				2層	炭粉		(2層)	炭粉
2	漆器	黒色	底部赤色(不明)	黒色					水銀		4層	炭粉
3	漆器	黒色	赤色(弱)	黒色					水銀		2層	炭粉

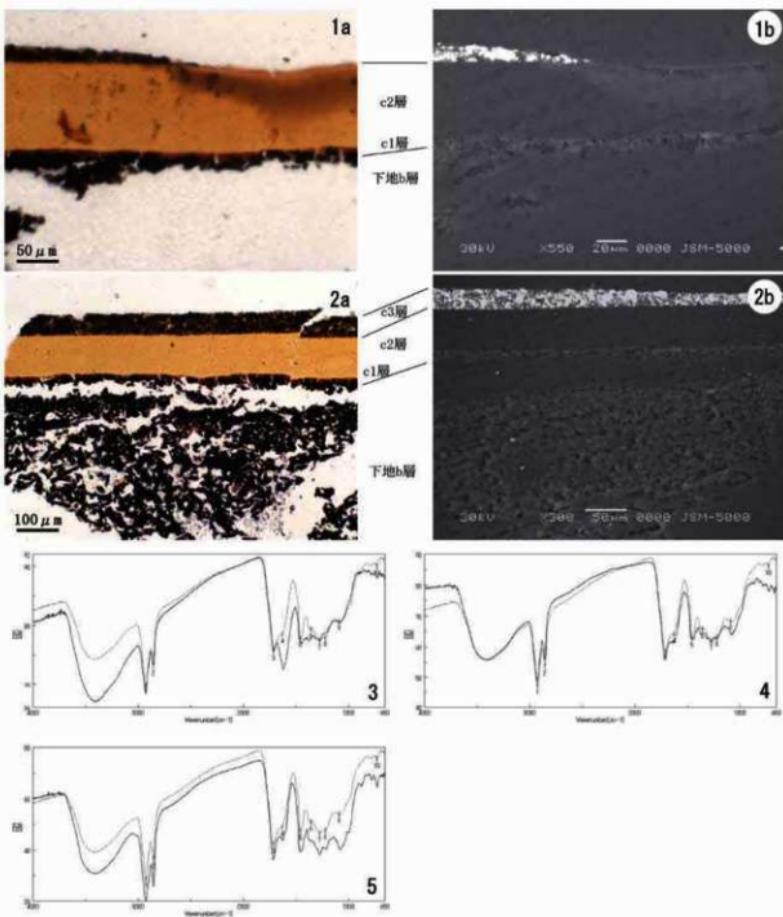
第29表 水橋金広・中馬場遺跡出土漆製品塗膜層のX線分析結果(単位:%)

分析 No	位置	塗膜層	C	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	FeO	HgO	合計
2	内面底部	c5層	76.81	—	—	0.76	1.54	—	0.86	—	0.72	0.35	18.96	100.00
3	内面	c3層	78.85	—	—	1.94	0.24	0.68	0.94	0.78	0.17	2.17	14.22	99.99



図版1 漆製品の塗膜構造(a)と反射電子像(b)

1. 分析No1 の外面黒色塗り塗膜 2. 分析No1 の内面黒色塗り塗膜
3. 分析No2 の内面黒色塗り塗膜 4. 分析No2 の内面赤色絵塗膜



図版2 漆製品の塗膜構造(a)と反射電子像(b)

および赤外分光スペクトル図(縦軸は透過率、横軸は波数を示す)

実線:分析試料、点線:生漆(Naは主な吸収位置)

1. 分析No3 の内面黒色塗り塗膜 2. 分析No3 の内面赤色絵塗膜
3. 分析試料No1 (外面黒色) 4. 分析試料No2 (内面黒色) 5. 分析試料No3 (内面赤色絵)

(5) 放射性炭素年代測定

A はじめに

水橋金広・中馬場遺跡は富山平野東部を流れる白岩川下流の右岸に立地する。

水橋金広・中馬場遺跡の発掘調査により、A 1・A 3 地区では、区画溝に囲まれた屋敷地内から掘立柱建物・井戸が多く検出されている。それらの遺構の多くは出土遺物による時期の判定が難しい状況にあるが、主要な遺構である建物・井戸から出土した井戸枠部材、柱根・礎板について加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行い、遺構の時期を確定する。

また、遺跡の東側、A 7・A 8 N 地区では弥生時代・古墳時代・古代の各流路がみつかっている。出土遺物はあるものの、混入の可能性も否定できないため、遺構の年代を確定するために、護岸に用いられていた杭材の放射性炭素年代測定を行う。

A 8 S 地区の古代の木組み井戸は、出土土器が少ないため、年代を推定するための手がかりとして、放射性炭素年代測定を行う。

古代の道路側溝に切られる土坑内から自然木が出土している。道路の構築時に伐採した可能性があり、道路の成立年代を推測する手がかりとして放射性炭素年代測定を行う。

B 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第 30 表のとおりである。

試料の採取にあたっては、最外年輪が確認できた場合は最外年輪を、最外年輪が確認できない場合は辺材を、辺材も確認できない場合には残っている中でできるだけ外側の部位を選んだ。

A 1 地区の井戸 S E 6 の試料は井戸枠部材で、最外年輪以外で部位不明の 3 年輪である（PLD-18579）。A 3 地区の井戸 S E 23 の試料は井戸枠縦板で、最外年輪以外で部位不明の数年輪である（PLD-18580）。同地区の井戸 S E 14 の試料は井戸枠で、最外年輪以外で部位不明の 1 年輪である（PLD-18581）。

柱穴 S P 100 の試料は柱根で、辺材 5 年輪である（PLD-18582）。柱穴 S P 84 の試料も柱根で、最外年輪以外で部位不明の 1 年輪である（PLD-18583）。柱穴旧 S P 36 の試料は礎板で、最外年輪以外で部位不明の 1 年輪である（PLD-18584）。

A 7 地区の流路 S D 18 の試料は杭で、最外年輪である（PLD-18585）。A 8 N 地区の流路 S D 19 の試料は板杭で、辺材 1 年輪である（PLD-18586）。同地区的流路 S D 15 の試料は杭で、最外年輪以外で部位不明の 1 年輪である（PLD-18587）。同地区的流路 S D 5 の試料は杭で、おそらく最外年輪 2 年輪である（PLD-18588）。

A 8 S 地区の井戸 S E 1 の試料は井戸縦板で、最外年輪以外で部位不明の 2 年輪である（PLD-18589）。

A 8 S 地区の土坑 S K 3 の試料は自然木で、最外年輪数年輪である（PLD-18590）。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5S DH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

C 結 果

第 31 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行つて暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従つて年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第 101・102 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1

桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C 年代 (yrBP) の算出には、¹⁴C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ¹⁴C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ¹⁴C 年代がその ¹⁴C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ¹⁴C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ : IntCal09) を使用した。なお、 1σ 暦年年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ¹⁴C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年年代範囲であり、同様に 2σ 暦年年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ¹⁴C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

D 考 察

以下、 2σ 暦年年代範囲（確率 95.4%）に着目して、結果を整理する。

・屋敷地内の井戸と掘立柱建物

A 1 地区の井戸 S E 6 から出土した井戸枠部材 (PLD-18579) は 1036-1167 cal AD (95.4%) で、11 世紀前半～12 世紀後半の範囲を示した。この範囲は平安時代に相当する。ただし木材の場合、最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。井戸枠部材は最外年輪を欠く部位不明の材であり、年代測定の結果が古木効果の影響を受けている可能性、すなわち木材が実際に枯死・伐採された年代よりも古い年代を示している可能性を考慮する必要がある。したがって、S E 6 の構築時期は 11 世紀前半～12 世紀後半（平安時代）あるいはそれより幾分新しい時期と考えられる。

A 3 地区の井戸 S E 23 から出土した井戸枠縦板 (PLD-19580) は 1027-1155 cal AD (95.4%) で、11 世紀前半～12 世紀中頃の範囲を示した。この範囲は平安時代に相当する。ただし、井戸枠縦板は最外年輪を欠く部位不明の材であり、古木効果の影響を考慮する必要がある。したがって、S E 23 の構築時期は 11 世紀前半～12 世紀中頃（平安時代）あるいはそれより幾分新しい時期と考えられる。

A 3 地区の井戸 S E 14 から出土した井戸枠 (PLD-19581) は 1022-1058 cal AD (30.5%) および 1076-1155 cal AD (64.9%) で、11 世紀前半～12 世紀中頃の範囲を示した。この範囲は平安時代に相当する。ただし、井戸枠は最外年輪を欠く部位不明の材であり、古木効果の影響を考慮する必要がある。したがって、S E 14 の構築時期は 11 世紀前半～12 世紀中頃（平安時代）あるいはそれより幾分新しい時期と考えられる。

A 3 地区の柱穴 S P 100 から出土した柱根 (PLD-18582) は 1220-1272 cal AD (95.4%) で、13 世紀の範囲を示した。この範囲は鎌倉時代に相当する。柱根は辺材が残っており、古木効果の影響は小さいと考えられる。したがって、S P 100 が帰属する建物の時期は 13 世紀（鎌倉時代）である可能性が高い。

A 3 地区の柱穴 S P 84 から出土した柱根 (PLD-18583) は 1216-1268 cal AD (95.4%) で、13 世紀

代の範囲を示した。この範囲は鎌倉時代に相当する。ただし、柱根は最外年輪を欠く部位不明の材であり、古木効果の影響を考慮する必要がある。したがって、S P 84 が帰属する建物の時期は 13 世紀（鎌倉時代）あるいはそれより幾分新しい時期と考えられる。

A 3 地区の柱穴旧 S P 36 から出土した礎板（PLD-18584）は 778-794 cal AD (6.7%), 801-900 cal AD (69.3%) および 918-962 cal AD (19.4%) で、8 世紀後半～10 世紀後半の範囲を示した。この範囲は奈良～平安時代に相当する。ただし、礎板は最外年輪を欠く部位不明の材であり、古木効果の影響を考慮する必要がある。したがって、旧 S P 36 が帰属する建物の時期は 8 世紀後半～10 世紀後半（奈良～平安時代）あるいはそれより幾分新しい時期と考えられる。

・流路

A 7 地区の流路 S D 18 から出土した杭（PLD-18585）は 570-645 cal AD (95.4%) で、6 世紀後半～7 世紀中頃の範囲を示した。この範囲は古墳時代後期～飛鳥時代に相当する。杭は最外年輪が残っており、古木効果の影響はない。したがって、S D 8 の護岸が行われた時期は 6 世紀後半～7 世紀中頃（古墳時代後期～飛鳥時代）と考えられる。

A 8 N 地区の流路 S D 19 から出土した板杭（PLD-18586）は 607-657 cal AD (95.4%) で、7 世紀初頭～中頃の範囲を示した。この範囲は飛鳥時代に相当する。板杭は辺材が残っており、古木効果の影響は小さいと考えられる。したがって、S D 19 の護岸が行われた時期は 7 世紀初頭～中頃（飛鳥時代）の可能性が高い。

A 8 N 地区の流路 S D 15 から出土した杭（PLD-18587）は 256-303 cal AD (31.5%) および 315-396 cal AD (63.9%) で、3 世紀中頃～4 世紀末の範囲を示した。この範囲は古墳時代前期に相当する。ただし、杭は最外年輪を欠く部位不明の材であり、古木効果の影響を考慮する必要がある。したがって、S D 15 の護岸が行われた時期は 3 世紀中頃～4 世紀末（古墳時代前期）あるいはそれより幾分新しい時期と考えられる。

A 8 N 地区の流路 S D 5 から出土した杭（PLD-18588）は 90-101 cal AD (2.8%) および 124-234 cal AD (92.6%) で、1 世紀末～3 世紀前半の範囲を示した。この範囲は、藤尾（2009）、小林（2009）、山本（2007）を参照すると、弥生時代後期に相当する。杭はおそらく最外年輪と見られる部位が残っており、古木効果の影響は小さいと考えられる。また、1 世紀から 3 世紀は日本産樹木が數 10～100 ¹⁴C yr、系統的に古い炭素年代を示すことが知られている（Sakamoto, 2003; 尾崎, 2009）。今回、IntCal で較正した曆年代範囲は、見かけ上実際の年代より数 10～100 年程度古い可能性が考えられる。したがって、S D 5 の護岸が行われた時期は、おおむね弥生時代後期と考えられるが、日本産樹木から作成されたデータセットで較正し直した場合には 1 世紀末～3 世紀前半よりも新しい方に範囲がシフトする可能性がある。

・古代の木組み井戸

A 8 S 地区の井戸 S E 1 から出土した井戸縦板（PLD-18589）は 678-774 cal AD (95.4%) で、7 世紀後半～8 世紀後半の範囲を示した。この範囲は飛鳥～奈良時代に相当する。ただし、井戸縦板は最外年輪を欠く部位不明の材であり、古木効果の影響を考慮する必要がある。したがって、井戸 S E 1 の構築時期は 7 世紀後半～8 世紀後半（飛鳥～奈良時代）あるいはそれより幾分新しい時期と考えられる。

・道路構築時の可能性のある自然木

A 8 S 地区の土坑 S K 3 から出土した自然木（PLD-18590）は 378-346 cal BC (17.0%) および

第30表 水橋金広・中馬場遺跡の測定試料および処理

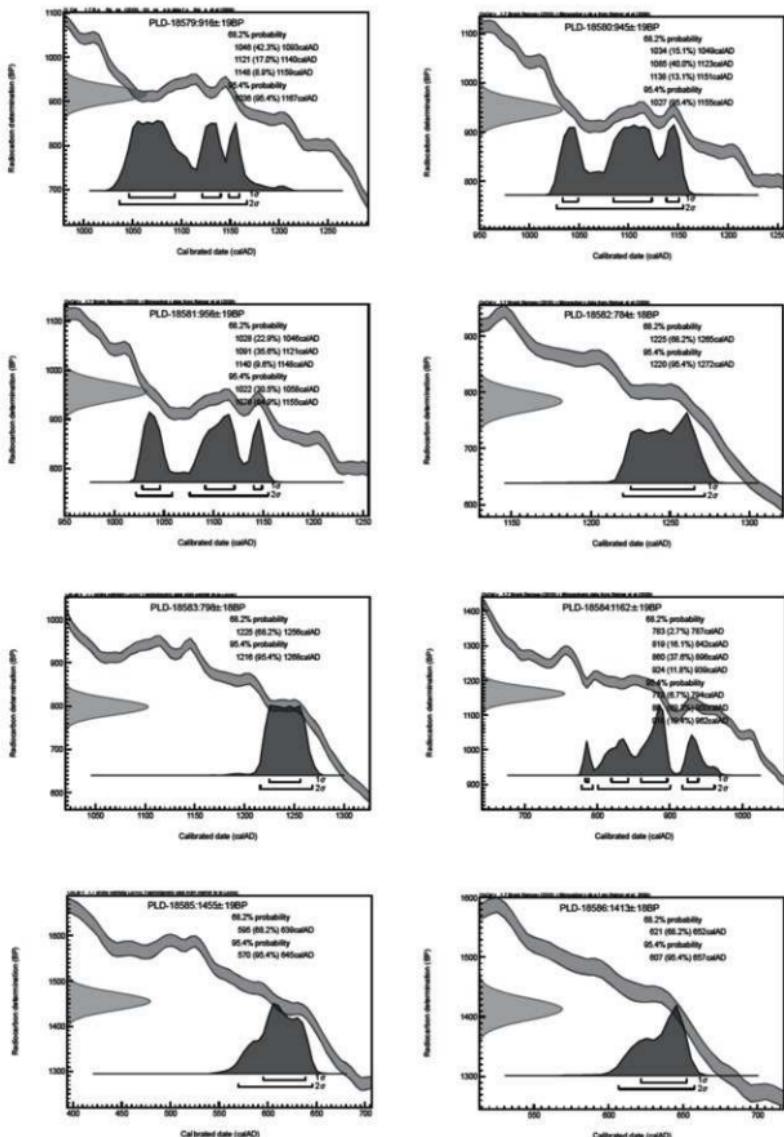
測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-18579	試料 No.3 台帳番号: M070025 遺跡名: 水橋金広・中馬場遺跡 遺構コード: A1-SE6 出土地点: 取上 No.1 種類: 井戸枠部材	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪以外で部位不明(3年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-18580	試料 No.4 台帳番号: M070055 遺跡名: 水橋金広・中馬場遺跡 遺構コード: A3-SE23 出土地点: No.5 種類: 井戸枠練板	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪以外で部位不明(数年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-18581	試料 No.5 台帳番号: M070117 遺跡名: 水橋金広・中馬場遺跡 遺構コード: A3-SE14 出土地点: No.4 種類: 井戸枠	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪以外で部位不明(1年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-18582	試料 No.6 台帳番号: M070125 遺跡名: 水橋金広・中馬場遺跡 遺構コード: A3-SP100 出土地点: — 種類: 柱根	試料の種類: 生材 試料の性状: 辺材(5年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-18583	試料 No.7 台帳番号: M070130 遺跡名: 水橋金広・中馬場遺跡 遺構コード: A3-SP84 出土地点: — 種類: 柱根	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪以外で部位不明(1年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-18584	試料 No.8 台帳番号: M070151 遺跡名: 水橋金広・中馬場遺跡 遺構コード: A3-IM SP36 出土地点: — 種類: 砧板	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪以外で部位不明(1年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-18585	試料 No.9 台帳番号: M080041 遺跡名: 水橋金広・中馬場遺跡 遺構コード: A7-SD18 出土地点: — 種類: 板杭 (336)	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪(1年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-18586	試料 No.10 台帳番号: M080073 遺跡名: 水橋金広・中馬場遺跡 遺構コード: A8N-SD19 出土地点: — 種類: 板杭	試料の種類: 生材 試料の性状: 辺材(1年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-18587	試料 No.11 台帳番号: M080081 遺跡名: 水橋金広・中馬場遺跡 遺構コード: A8N-SD15 出土地点: — 種類: 板杭	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪以外で部位不明(1年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-18588	試料 No.12 台帳番号: M080088 遺跡名: 水橋金広・中馬場遺跡 遺構コード: A8N-SD5 出土地点: — 種類: 板杭 (332)	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪(2年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-18589	試料 No.13 台帳番号: M080004 遺跡名: 水橋金広・中馬場遺跡 遺構コード: ABS-SE1 出土地点: No.6 種類: 井戸練板	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪以外で部位不明(2年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-18590	試料 No.14 台帳番号: — 遺跡名: 水橋金広・中馬場遺跡 遺構コード: A8S-SK3 出土地点: — 種類: 自然木	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪(数年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)

322-206 cal BC (78.4%)で、紀元前4世紀前半～前3世紀末の範囲を示した。この範囲は、藤尾(2009)、小林(2009)、山本(2007)を参照すると、弥生時代中期に相当する。自然木は最外年輪が残っており、古木効果の影響はない。したがって、SK3出土自然木の伐採時期は紀元前4世紀前半～前3世紀末(弥生時代中期)と考えられる。SK3は古代の道路側溝に切られ、出土自然木は道路構築時に伐採された可能性が考えられていたが、年代測定結果から見ると、SK3と古代の道路は無関係と考えられる。

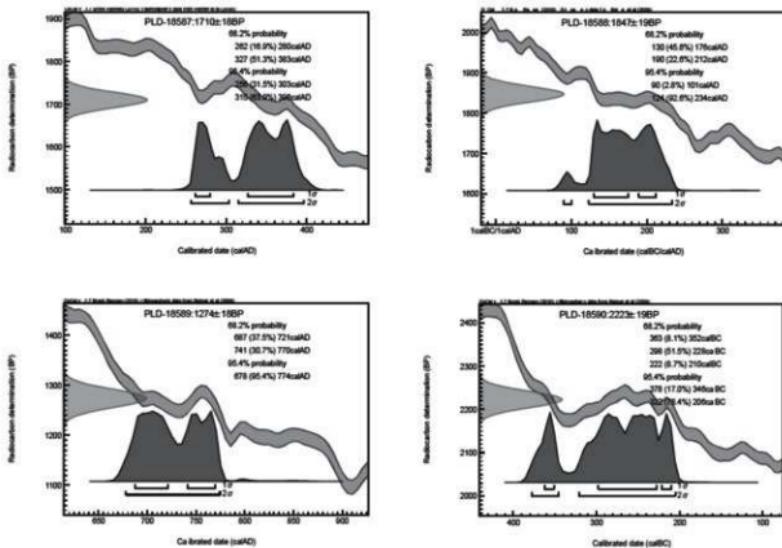
(パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ 伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎)

第31表 水橋金広・中馬場遺跡の放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
PLD-18579	-23.47 \pm 0.13	916 \pm 19	915 \pm 20	1046AD(42.3%)1093AD 1121AD(17.0%)1140AD 1148AD(8.9%)1159AD	1036AD(95.4%)1167AD
PLD-18580	-23.95 \pm 0.12	945 \pm 19	945 \pm 20	1034AD(15.1%)1049AD 1085AD(40.0%)1123AD 1138AD(13.1%)1151AD	1027AD(95.4%)1155AD
PLD-18581	-22.30 \pm 0.10	956 \pm 19	955 \pm 20	1028AD(22.9%)1046AD 1091AD(35.6%)1121AD 1140AD(9.6%)1148AD	1022AD(30.5%)1058AD 1076AD(64.9%)1155AD
PLD-18582	-27.51 \pm 0.11	784 \pm 18	785 \pm 20	1225AD(68.2%)1265AD	1220AD(95.4%)1272AD
PLD-18583	-24.80 \pm 0.10	798 \pm 18	800 \pm 20	1225AD(68.2%)1256AD	1216AD(95.4%)1268AD
PLD-18584	-26.83 \pm 0.15	1162 \pm 19	1160 \pm 20	783AD(2.7%)787AD 819AD(16.1%)842AD 860AD(37.6%)896AD 924AD(11.8%)939AD	778AD(6.7%)794AD 801AD(69.3%)900AD 918AD(19.4%)962AD
PLD-18585	-25.05 \pm 0.12	1455 \pm 19	1455 \pm 20	595AD(68.2%)639AD	570AD(95.4%)645AD
PLD-18586	-23.29 \pm 0.13	1413 \pm 18	1415 \pm 20	621AD(68.2%)652AD	607AD(95.4%)657AD
PLD-18587	-25.70 \pm 0.13	1710 \pm 18	1710 \pm 20	262AD(16.9%)280AD 327AD(51.3%)383AD	256AD(31.5%)303AD 315AD(63.9%)396AD
PLD-18588	-24.65 \pm 0.11	1847 \pm 19	1845 \pm 20	130AD(45.6%)176AD 190AD(22.6%)212AD	90AD(2.8%)101AD 124AD(92.6%)234AD
PLD-18589	-23.72 \pm 0.12	1274 \pm 18	1275 \pm 20	687AD(37.5%)721AD 741AD(30.7%)770AD	678AD(95.4%)774AD
PLD-18590	-29.20 \pm 0.11	2223 \pm 19	2225 \pm 20	363BC(8.1%)352BC 298BC(51.5%)228BC 222BC(8.7%)210BC	378BC(17.0%)346BC 322BC(78.4%)206BC



第101図 水橋金広・中馬場遺跡における暦年校正結果（1）



第102図 水橋金広・中馬場遺跡における暦年較正結果（2）

参考文献

- Bronk Ram S E, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), p.337-360.
 鹿尾慎一郎 (2009) 弥生時代の実年代. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: p.9-54, 雄山閣.
 小林謙一 (2009) 近畿地方以東の地域への扩散. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: p.55-82, 雄山閣.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C 年代幅集委員会編「日本先史時代の¹⁴C 年代」: p.3-20, 日本第四紀学会.
 尾崎大輔 (2009) 日本版較正曲線の作成と新たなる課題. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: p.4-8, 雄山閣.
 Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ram S E, C., Buck, C.E., Burr, G., S. Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootenhuis, P.M., Gulkerson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kai S E, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richard S D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, p.1111-1150.
 Sakamoto, M., Inamura, M., van der Plicht, J., Mitsutani, T. and Sahara, M. (2003) Radiocarbon Calibration for Japane S E Wood Samples. *Radiocarbon*, 45, p.81-89.
 山本直人 (2007) 東海・北陸における弥生時代の開始年代. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第2巻 縄文時代から弥生時代へ」: p.35-44, 雄山閣.

6 総括

(1) 遺構変遷

水橋金広・中馬場遺跡では、古くは縄文時代後期終末～晩期前葉の土器が出土し、弥生時代中期以降、近世までの遺構・遺物が確認されたが、調査区により主体となる遺構・遺物の時期は異なる。そうした時期毎の遺構変遷を、各時期の主要な出土遺物と併せて、以下に示す（第103～106図）。なお、先述したように縄文時代では土器の出土のみであり、遺構の変遷からは除外しておく。

1期：弥生時代中期

S K 1～3がある。S K 1の出土土器は、八日市地方遺跡における編年（福海2003）を参考にすると、外面は無文化した段階であり、八日市地方9期に相当する。古代のS D 19に混入した壺（44）は胴部上半の施文や器形から、八日市地方8期に比定する。S D 128の壺（48）は器形から、東海地域に分布する貝田町式の影響と考えられる。貝田町式は中期中葉から後葉とされ、八日市地方6～8期に対応する。他に抉入柱状片刃石斧（361）・擦切石器（357～359）・石核（360）が当期の所産で、各種の生産活動を示す。なお、S K 3はサワグルミの倒木根で、放射性炭素年代測定（以下、年代測定）から、紀元前4世紀後半～前3世紀末の結果となった。この年代は八日市地方4～8期におむね相当する（小林2009）。出土土器と同時期、もしくは古い段階のものとなる。想像をたくましくすれば、直径1mに及ぶサワグルミの木陰で人々が様々な活動を営んでいた景観が考えられる。当該期の周辺遺跡として清水堂A遺跡（富山市教育委員会1996）や放土ヶ瀬北遺跡（上市町教育委員会1999）があり、当遺跡も白岩川流域の開発の進めていった遺跡群の一つであったと言えよう。

2期：弥生時代終末期～古墳時代初頭

S D 5～8がある。S D 5出土土器は月影式期を中心とするが、無頸壺（25）や外反器台（30）は法仏式期、口縁部外反する有段口縁の壺（29）は古府クルビ式期までの時期を考える。前後に時期幅があり、3期まで存続していた可能性もある。S D 5打設の杭は、年代測定で1世紀末～3世紀前半が示される。概ね土器の様相と一致し、いずれかの時期に水路として整備されたと考えられる。建物や他の遺構は確認されず、生産域としての土地利用が主であったと考えられる。

3期：古墳時代前期

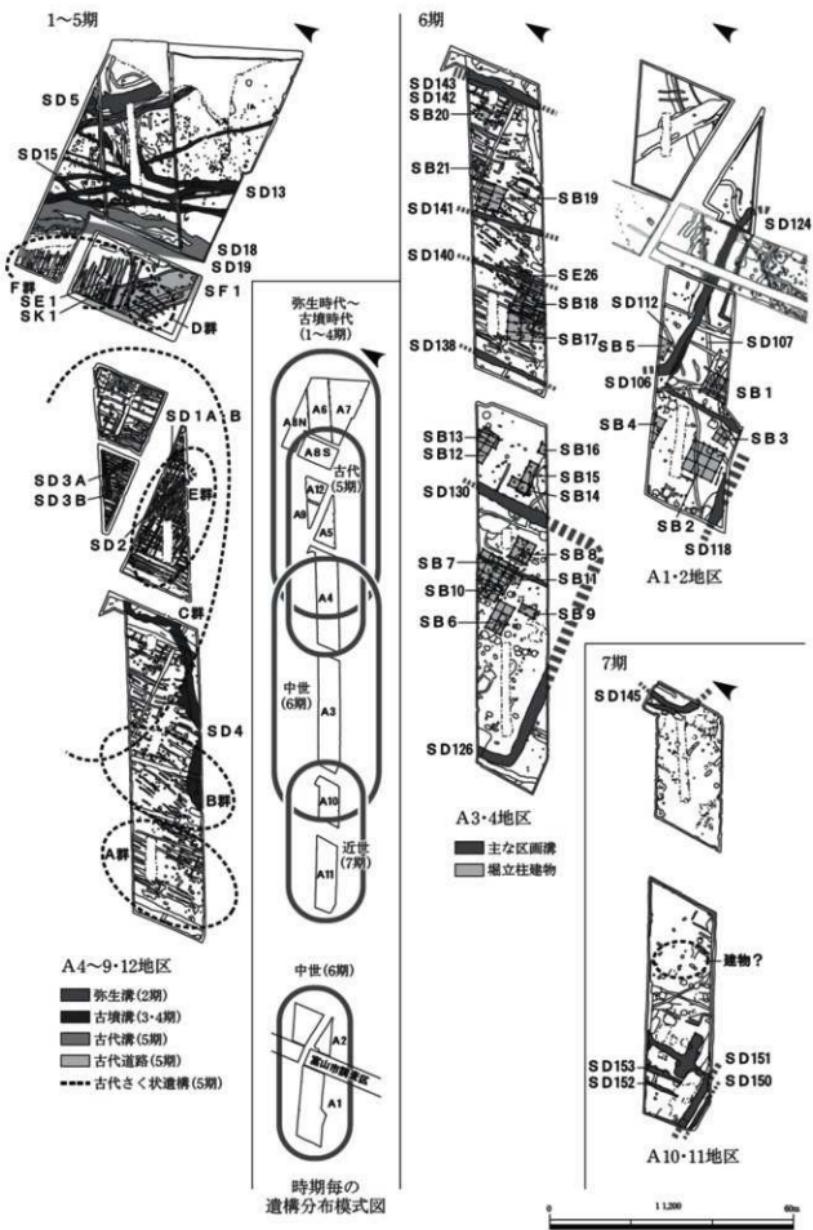
S D 1 A・2・3 B・4が該当する。高杯（15）や小型器台（20・21）から漆町編年7群に相当し、古府クルビ式期の段階となる。2期と同様に、生産域として利用されていたと考えられる。

4期：古墳時代中期末～後期

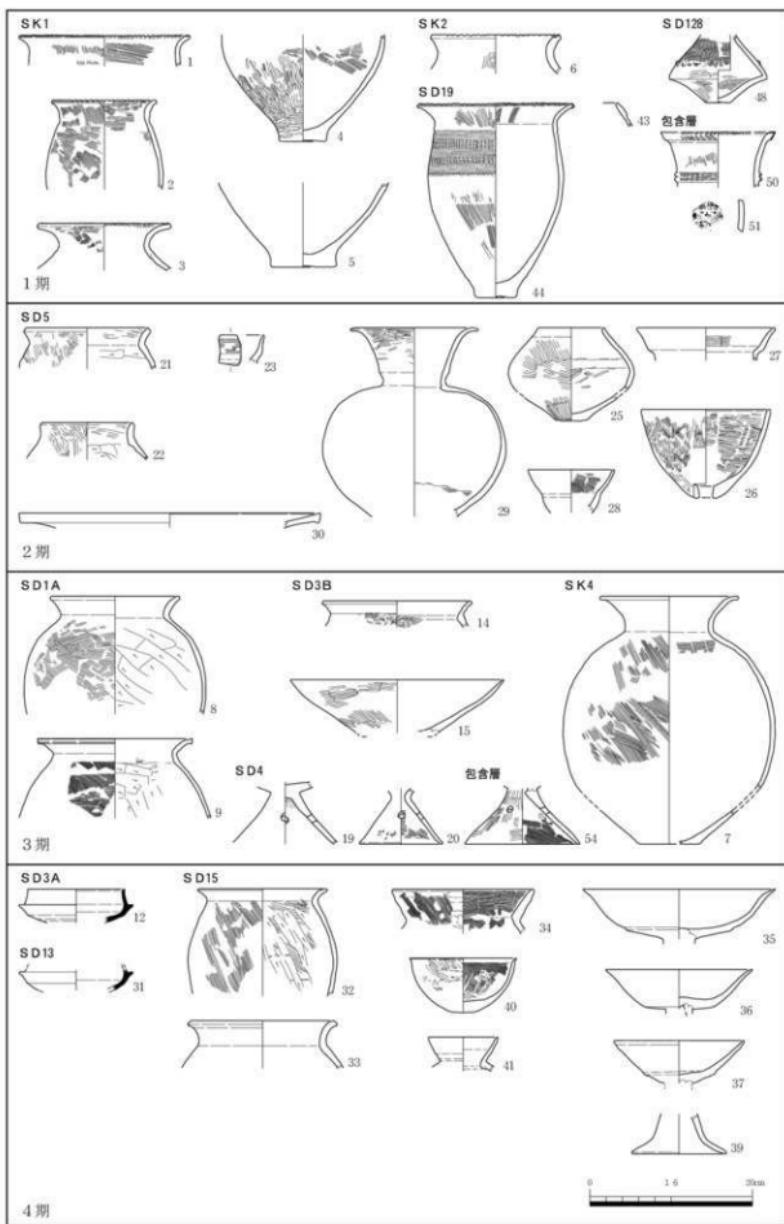
S D 3 A・13～17が該当する。S D 3 Aの須恵器杯身（12）はTK47型式、S D 13の須恵器杯身（31）はTK47型式以前と思われる。S D 15からは土師器が出土する。県内における古墳時代土師器の様相（池野2012）を参考にすると、32の壺は長胴化傾向にあり、6期以降に相当する。6期は漆町編年13群に併行し、TK47型式よりやや古い段階となる。以上のことから、これらの溝は5世紀末～6世紀初めを中心に形成されたと考えられる。一方、S D 15に打設されていた杭の年代測定では3世紀中頃～4世紀末の結果が示された。ただし、古木効果の影響によりそれよりも新しい時期も範疇に入る。いずれにしても、出土土器の年代観よりも古くなる傾向にあり、杭の打設から埋没するまでに、時期幅があったと考える必要があろう。

5期：古代

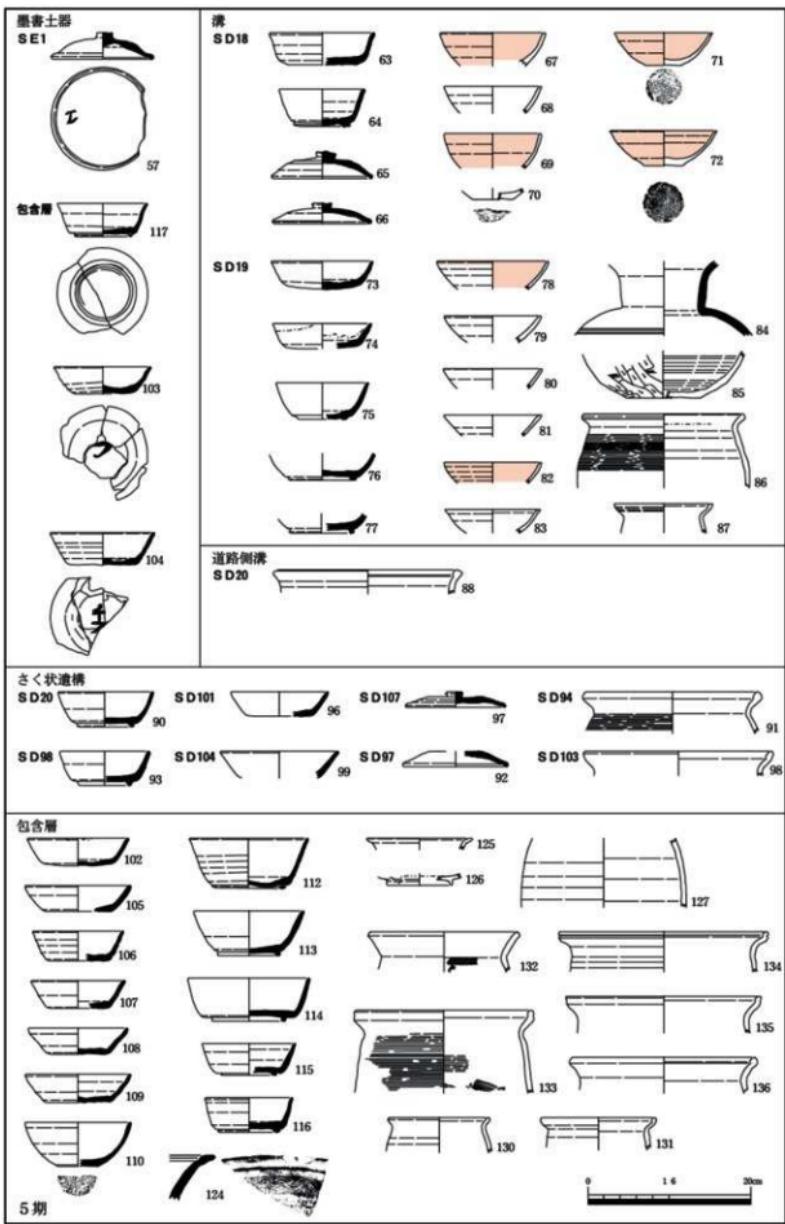
古代の出土遺物は、須恵器では杯Aが口径13cm未満になり、底部回転糸切りの椀A（110）がある



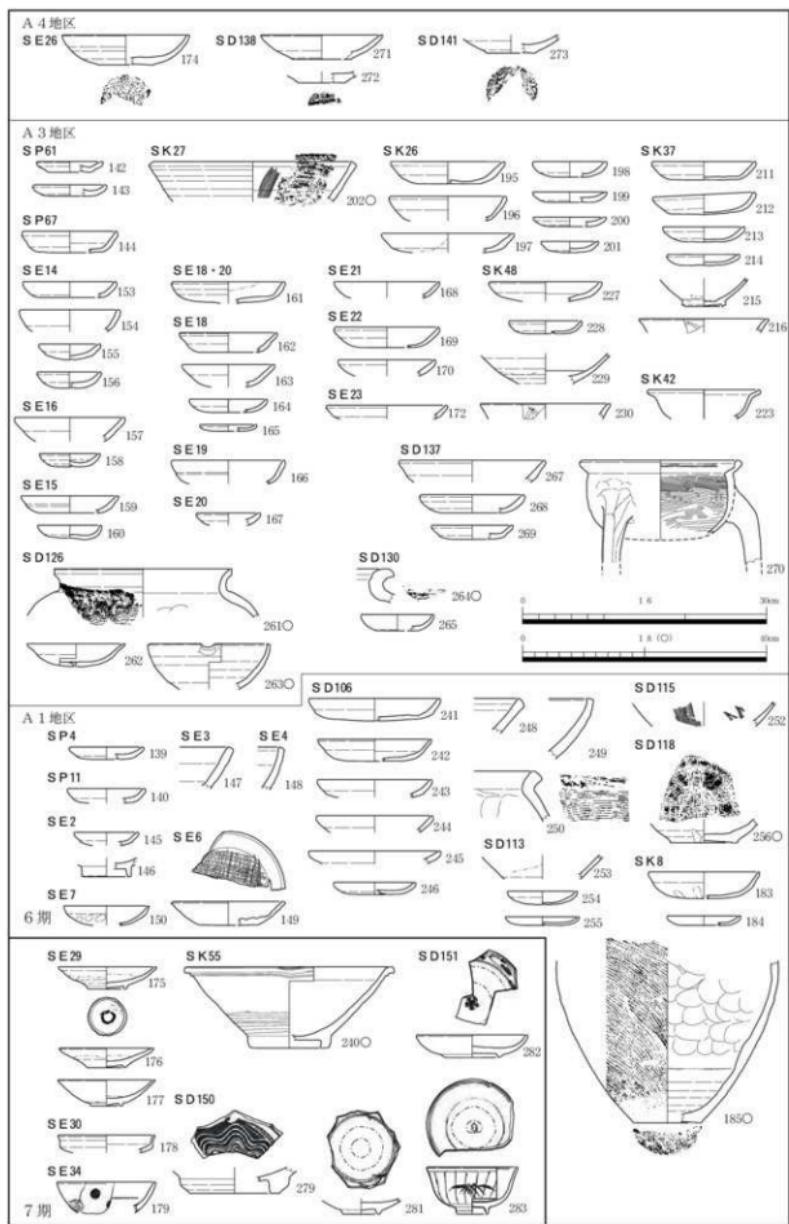
第103図 水橋金広・中馬場遺跡の遺構変遷図



第104図 水橋金広・中馬場遺跡 1～4期の土器



第105図 水橋金広・中馬場遺跡 5期の土器



第106図 水橋金広・中馬場遺跡 6・7期の土器・陶磁器

ことから、8世紀第3四半期～10世紀第1四半期の時期幅がある。また、土師器では楕Aは底部回転糸切りで、体部外面にはケズリを施さないことから9世紀後半となる。その他の器種も含めた全体的な土器の様相から、8世紀第3四半期～9世紀代までが中心と考えられる。

S D18・19は杭・板材により護岸され、水路として利用されていた。出土遺物には8世紀第3四半期～9世紀代までの時期幅がある。一方、S D19打設の杭は年代測定で6世紀後半～7世紀中頃の結果となった。S E 1は須恵器の蓋(57)があり、口縁端部が巻き込む形態から、9世紀後半とを考える。それに対し、井戸側板の年代測定は、7世紀後半～8世紀後半もしくは、それよりやや新しい時期が示されている。このようにS D19・S E 1では、木材の年代測定結果が土器の年代観より古く、整合しない。古材の転用や、遺構の長期間に渡る利用を考える必要がある。S F 1の道路側溝S D20出土の土師器の甕(88)は口縁形態から9世紀後半と考えられるが、S F 1からの出土遺物はわずかで、少なくとも埋没年代を示すものとなる。さく状遺構はA 4・5・9・12・8 S・8 N地区で形成され、方位によりA～F群に分かれ。南北方向はA～D群だが、A・D群はほぼ同一方位であるため、方向は3つに分かれ。東西方向はE・F群で、E群はC群より後出、F群はD群より先行する。同一方位を同時期とすれば、南北方向では3時期を想定できる。東西方向は南北方向に前後する群があるので、全体で5時期程度に変遷する可能性がある。

以上から、まずS D19が8世紀第3四半期には整備される。その西側では、さく状遺構F群→道路S F 1→さく状遺構D群の順で推移し、S F 1(古)は9世紀後半までに埋没する。広範囲に展開するさく状遺構A～E群の開始時期は不明だが、10世紀前半まで順次、形成されたと考えられる。S F 1(新)は、さく状遺構D群に切られるため、10世紀前半までには廃絶される。

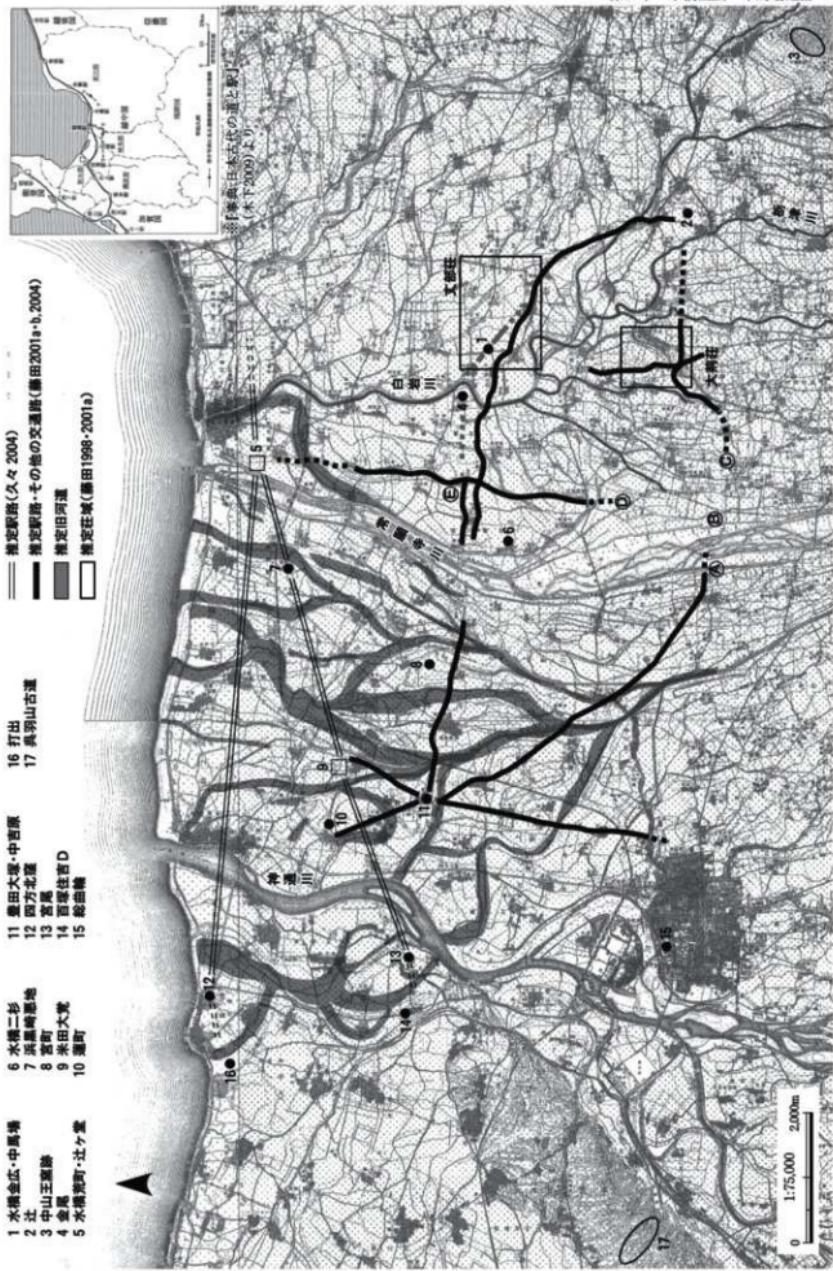
6期：中世

A 1・2地区とA 3・4地区が掘立柱建物・井戸・区画溝による居住域となる。柱穴出土遺物は少なく、井戸・区画溝なども含めた出土遺物の様相から時期を探る必要がある。中世土師器はN B I・II類を含み、珠洲はI～III期が中心となることから、12世紀後半～13世紀代が中心となる。それより先行する時期として、A 4地区でロクロ成形の中世土師器R B類があり、12世紀中頃を上限とする。後出するものには、珠洲V期や中世土師器N J類などがあり、15世紀代に至る。

地区毎の出土土器の様相を踏まえると、集落形成はA 4地区の建物群を中心に、12世紀中頃～後半の開始と考えられる。その後、A 1・3地区へ居住域を移す。A 3地区では、珠洲IV期の擂鉢が出土するSK27をS B 8が切っており、14世紀代が建物群の下限になる。A 3地区的S B 9・12では柱根を年代測定し、13世紀の結果となった。一方、S E14・23では井戸側材の年代測定により、11世紀～12世紀中頃までの結果となった。A 1地区では、11世紀後半～12世紀後半の白磁が出土し、S E 6の井戸枠部材の年代測定は11世紀前半～12世紀後半を示している。この様に、A 1・3地区では、一部の遺構はA 4地区と同様な時期となるが、出土遺物の様相からは、主に13～14世紀代に集落が展開していたと思われる。これ以降の15世紀代の遺物がA 1地区S D106やA 3地区S D126の大規模な区画溝から出土している。これらの区画溝は後出、あるいは存続期間が長かった可能性がある。これ以降は、近世まで遺物は少なく、調査区内の土地利用は低調であったと考えられる。

7期：近世

A 11地区で柱穴が検出されるが、建物は確認できない。周辺には導水施設・区画溝・道路側溝があり、居住域の可能性が高い。出土遺物は越中瀬戸・伊万里・唐津で、18世紀代を中心とする。近世の遺構は、現在の宅地周辺にあり、近代～現代の集落景観に近づいていったことを示している。



第107図 水橋金広・中馬場遺跡 古代道路と周辺図

※明治43年大日本帝国陸地測量部測図を基に作製
※旧河道は「四方北竈遺跡」(富山市教育委員会1999)・

「富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡」(富山市教育委員会2002)・
国土地理院作製「治水地形分類図」を参考とした

(2) 古代の道路と周辺遺跡

A 8 S 地区の道路 S F 1 は新・古の 2 段階があり、S F 1 (古) では側溝中心間（以下、幅と表記）で 8.2~9.0m、S F 1 (新) では幅 5.2~6.2m へと縮小する。遺構変遷で示した様に、S F 1 (古) の埋没は 9 世紀後半、S F 1 (新) は 10 世紀前半までには放棄されたと思われる。S F 1 (古) の成立は出土遺物から判断し難いが、周辺の出土遺物も踏まると、8 世紀後半以降と考えられる。

県内の古代道路は、幅 1 m・2 m・4 m 前後の 3 つに分類され、幅 4 m 前後の規模は古代北陸道に推定される場合が多いことが指摘されている（久々 2004）。このように、規模の点からは S F 1 (古・新) は官道クラスに該当すると見える。

古代北陸道と推定される道路跡は、俱利伽羅峠の古道（西井 1997）、桜町遺跡（小矢部市教育委員会 1994）、麻生谷新生園遺跡（高岡市教育委員会 1998）、水橋荒町・辻ヶ堂遺跡（富山市教育委員会 1998・1999）、赤井南遺跡（富山県文化振興財団 2012）にある。『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条の記載によれば、県内には「坂本・川人・日理・白城・磐瀬・水橋・布施・佐味駅」の各駅があり、駅路で結ばれていた。第三駅以東では沿岸部を通る想定されているが、『延喜式』以前には内陸部を通る駅路があった可能性も指摘されてきた（木下 2009）。この指摘に関連するものとして、赤井南遺跡で検出された奈良時代の古代北陸道と推定される道路跡（越前 2012）が挙げられる。

この様に、古代北陸道は駅路の路程など、未だに不明確な点もあるが、これらの事例と比べても、S F 1 は新・古段階とも規模においては、それに匹敵するものであり、古代北陸道との関連も考慮する必要があろう。そこで遺跡周辺において、古代北陸道駅路を含めた交通路がどの様に推測されているか確認しておきたい。ここでは、久々忠義氏（久々 2004）と藤田富士夫氏（藤田 1998、2001a・b、2004）の成果を参考にしていく（第 107 図）。

久々氏は従来の研究同様に、岩瀬地区に「磐瀬駅」を想定し、「水橋駅」に比定される水橋荒町・辻ヶ堂遺跡（5）へ至る、12→5 の路程を示している。同時に、やや内陸を通る 13→9→7→5 も示し、米田大覚遺跡（9）を「磐瀬駅」に比定した。13 の周辺では 14 の百塚住吉 D 遺跡があり、近年の調査で馬小屋の可能性がある大型土坑が検出され、婦負郡「寒江郷」に関係する集落とされる（富山市教育委員会 2012）。

藤田氏は駅路の他、郷を結ぶ交通路や東大寺領莊園「丈部荘」・「大荘荘」比定地も含めた検討をしている。駅路は、10 の蓮町遺跡付近を「磐瀬駅」に比定し、11 の豊田大塚・中吉原遺跡を経由し常願寺川を A 地点から B 地点へ渡河後に北へ曲がり、D・E 地点を経て 5 へ達する路程を推定している。また、その他の交通路の指摘もある。11 からは 8 付近を通り、常願寺川を渡河し、水橋金広・中馬場遺跡周辺を比定地とする「丈部荘」開田団の「尾前道」へ通じる。この道はさらに南東へ進み、2 の「里正」木簡出土の辻遺跡付近へ続く。2 の周辺は「川枯郷」に比定している。これにより、「尾前道」は「川枯郷」と「丈部郷」を結ぶ郷道とされる。C 地点からは立山町浦田付近を比定地とする「大荘荘」開田団の道を通り、2 付近へ続くとする。他に 11 からは、北進すると新川郡衙に推定している 9 の米田大覚遺跡、南進すると「宅持」の墨書き土器の出土から官衙関連施設の存在が推測される 15 の絶曲輪遺跡（富山市教育委員会 2011）方面への道路が想定されている。また、米田大覚遺跡へは打出遺跡（16）で確認された道路が接続していたとの指摘（安達 2006）もある。

これらの考察を参考にすると、水橋金広・中馬場遺跡の S F 1 は、「丈部荘」内の「尾前道」に接するが、S F 1 の位置はやや北側に位置している。また、「尾前道」が郷道クラスとされているのに対し、S F 1 は規模が大きく、性格の異なるものである可能性が高い。同時に、駅路と推定される

路程からも離れた位置にある。このように、従来の成果には、水橋金広・中馬場遺跡のS F 1は当てはめ難い点がある。では、S F 1がいかなる場所同士を繋ぐ為の道路であったかを考えるために、直進した先の様子を確認しておきたい。

北西に直進すると白岩川に達する。白岩川は近世まで水運が活発で（水橋町 1966），陸路と水路の結節点にもなり得る。その白岩川左岸側には、「道」の墨書き土器が出土した金尾遺跡（4）がある。ここから西へは藤田氏の指摘するEから11への東西に直線的な路程に続く可能性もある。11に到達すれば、「新川郡衙」や「磐瀬駅」に比定される米田大覚遺跡へも接続することになろう。また、推定「水橋駅」の5へは、Eを経由した陸路、あるいは4付近からの水路による到達も可能である。さらにEの付近に位置する水橋二杉遺跡（6）からは、則天文字の墨書き土器が出土しており、官衙的性格を持つとされる（安達 2003）。

南東に進むと藤田氏の指摘する「尾前道」と同様に辻遺跡（2）へと達する。辻遺跡周辺は先に見たように、「川枯郷」に関連する可能性もある。いずれにしても「里正」木簡の出土から行政機構の存在が推測される。また、2の周辺には「新川郡衙」の指摘（石原 1977）がある「正印」の地名もある。2のさらに南東側には丘陵地が広がり、中山王窟跡（3）が位置する。さらに奥には平安時代初期とされる磨崖仏がある大岩山日石寺もある。この様に、南東方向には行政・生産・宗教的な中核地が想定される。

こうした周辺遺跡の様相からは、水橋金広・中馬場遺跡のS F 1が郷衙や郡衙に関連する公的な施設や機関と、郡衙や駅家などの官衙を結び、さらに白岩川の水運との結節点も有する基幹道路であったと考えることができる。しかし、こうした性格の道路としては、S F 1（古）の規模は大きく、十分な解釈とは言い難い。先述した赤井南遺跡の事例や、吳羽山古道（17・西井他 2005）の様に、内陸部を通る道路による交通網の広がりも視野に入れつつ、今後の調査・研究が進展する中で、その位置付けを再度検討していく必要があろう。

（青山 晃）

参考文献

- 安達志津 2003 「1 水橋二杉遺跡」『富山市内遺跡発掘調査報告V』富山市教育委員会
 安達志津 2006 「V 考察（1）富山市打出遺跡の道路跡」『富山市打出遺跡発掘調査報告』富山市教育委員会
 池野正男 2012 「越中の古墳時代土器堆积」『大境』第31号 富山考古学会
 石原与作 1977 「大部庄の所在地と、新川郡衙の移動について」『富山史壇』第66号 富山史壇会
 越前慎子 2012 「第14章赤井南遺跡」『水上遺跡 赤井南遺跡 安吉遺跡 櫛田遺跡 本江大坪I 遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財團
 小矢部市教育委員会 1994 「平成5年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報」
 小矢部市教育委員会 2003 「富山市小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書」弥生・古墳・古代・中世編 I』
 上市町教育委員会 1998 「古代の市と駅」吉川弘文館
 久々忠義 2004 「富山県内の古代道路遺構について」『フォーラム奈良時代の富山を探る』富山市教育委員会
 小林謙一 2009 「近畿地方以東の地域への拡散」『奈良時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代』西本豈弘編 雄山閣
 高岡市教育委員会 1998 「1. 麻生谷新生園遺跡、村田地区」『市内遺跡調査概報Ⅳ』
 富山県文化振興財團 2012 「水上遺跡 放土ヶ原遺跡 安吉遺跡 櫛田遺跡 本江大坪I 遺跡発掘調査報告」
 富山市教育委員会 1996 「富山市清水堂A遺跡 清水堂A遺跡 清水堂B遺跡 清水堂D遺跡 清水堂小深田遺跡 清水堂宗平邸遺跡」
 富山市教育委員会 1998 「富山市水橋荒町I 遺跡発掘調査概要」
 富山市教育委員会 1999 「富山市水橋荒町II 遺跡発掘調査概要II」
 富山市教育委員会 1999 「富山市内遺跡発掘調査概要III 四方北岸遺跡」
 富山市教育委員会 2002 「富山市水橋荒町・辻ノ堂遺跡発掘調査報告書」
 富山市教育委員会 2011 「絶曲輪遺跡（富山城西ノ丸跡）から出土した墨書き土器について」富山市埋蔵文化財センターHP
<http://homepage2.nifty.com/kitada/gensetsu/sougawa2011.pdf>
 富山市教育委員会 2012 「富山市水塙古町II 遺跡発掘調査報告書II」
 西井龍儀 1997 「創利御殿跡の古道」『古代交通研究』第7号 古代交通研究会
 西井龍儀・小林高範 2005 「吳羽山古道の調査」『大境』第25号 富山考古学会
 福海貴子 2003 「第VI章 考古学的分析 第1節 八日市地方遺跡出土土器の検討」『八日市地方遺跡I』小松市教育委員会
 藤田富士夫 1998 「東大寺領大坂の現地比定と遺跡」『森浩一70の誕辰 古代探求』中央公論社
 藤田富士夫 2001a 「東大寺領越中國園「太部莊」の現地比定と若干の考察」『富山史壇』第135・136号 富山史壇会
 藤田富士夫 2001b 「附録・1古代の表象としての若王子塚古墳」『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
 藤田富士夫 2004 「古代越中國新川郡の「道」と「郷」に関する若干の考察」『人文社会学研究所年報』No2 敬和学園大学
 水橋町 1966 「水橋郷史」第二卷

第32表 水橋金広・中馬場遺跡 堀立柱建物一覧

建物番号	地区	旧建物番号	柱間	梁間	断面長(m)		梁間長(m)		面積(m ²)	方位	備考	補圖番号	写真図版	
					柱間	梁間	柱間距離(m)	梁間柱間距離(m)						
SB1	A1	SB1	4	2	(0.95)		5.5		(49.23)	N 0°	1×1間(2.3×2.2m)の張り出し部有り >SD107+113	58	44	
SB2	A1	SB2	3	3	2.25	2.25	2.15	2.76	2.74				59	43+44
SB3	A1	SB3	2	2	8.00		7.54		60.32	N 4° W			58	43
SB4	A1	SB4	3	2~	2.55	2.75	2.70	2.54	2.65	2.35	12.07	N 90° E		
SB5	A1	SB5	2	1~	1.80	1.75	1.90	1.50	1.90		(20.54)	N 89° E		
SB6	A3	SB1	3	2	2.30	1.72	2.40	2.54		(3.20)			60	43
SB7	A3	SB2	4	3	2.54	2.48	2.40	1.90	2.20		30.42	N 90° E		
SB8	A3	SB3	2	2	2.25	2.50	2.50	2.45	2.46	2.32	69.84	N 0°		
SB9	A3	SB4	2	1	2.76	2.35	2.35	2.40	2.35		23.99	N 88° E		
SB10	A3	SB5	2	2	2.00	2.00	2.00	2.60			10.40	N 2° W		
SB11	A3	SB11	3	1	2.60	2.03	2.03	1.90	1.80		14.99	N 2° E		
SB12	A3	SB6	3	2	2.30	2.25	2.05	1.90			12.54	N 3° E		
SB13	A3	SB7	2	1	2.60	2.08	2.08	2.40	2.35		33.15	N 90° E		
SB14	A3	SB8	2	1	2.60	2.40	2.40	2.30			13.20	N 4° W		
SB15	A3	SB9	3	1	2.90	2.65	2.55	2.50			12.19	N 3° W		
SB16	A3	SB10	1~	1	2.60	2.60	2.60	2.40	2.30		4.66	N 4° W		
SB17	A4	SB1	4	3	3.35	3.00	2.90	1.98	2.37	2.37	79.55	N 25° W		
SB18	A4	SB2	4	3	2.45	2.50	2.60	2.40	2.30	3.10	83.08	N 82° E		
SB19	A4	SB3	3	2	2.30	2.35	1.88	2.94	2.86		38.74	N 7° W		
SB20	A4	SB4	1	1	1.35	1.45	1.30	3.75			15.38	N 90° E		
SB21	A4	SB5	4	1	2.90			2.45			7.11	N 3° W		
					2.90		2.45					64	45	

第33表 水橋金広・中馬場遺跡 棚列一覧

棚構番号	地区	旧棚構番号	柱間	梁長(m)	柱間距離(m)	方位	補圖番号	写真図版
SA1	A1	SA1	3	4.20	1.40	N 85° E	59	
SA2	A3	SA1	2	4.90	2.20	N 72° E	64	

第34表 水橋金広・中馬場遺跡 堀立柱建物・棚列柱穴一覧(1)

建物番号	柱穴番号	地区	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	備考	補圖番号	写真図版
					長さ	幅	深さ				
SB1	SP1	A1	SP50	不整形	0.45	0.34	0.25	中世土師器	>SD113		
	SP2	A1	SP110	円	0.36	0.30	0.30		>SD113		
	SP3	A1	SP111	円	0.36	0.33	0.37		>SD113		
	SP4	A1	SP44	不整形	0.50	0.40	0.35	中世土師器			
	SP5	A1	SP42	方	0.40	0.31	0.27	中世土師器	>SD107		
	SP6	A1	SP41	円	0.35	0.30	0.34	中世土師器	>SD159		
	SP7	A1	SP107	梢円	0.30	0.22	0.31				
	SP8	A1	SP19	不整形	0.43	0.32	0.34	中世土師器			
	SP9	A1	SP18	円	0.40	0.39	0.30	中世土師器・珠洲・加工木			
	SP10	A1	SP40	円	0.27	0.26	0.28		>SD107		
	SP11	A1	SP21	不整形	0.50	0.31	0.30	中世土師器			
	SP12	A1	SP24	円	0.29	0.27	0.18				
										58	

第34表 水橋金広・中馬場遺跡 挖立柱建物・柵列柱穴一覧(2)

建物番号	柱穴番号	地区	旧遺構番号	規模(m)			出土遺物	備考	挿図番号	写真図版
				平面形	長さ	幅				
SB2	SP13	A1	SP130	円	0.50	0.49	0.25			
	SP14	A1	SP123	不整形	0.38	0.21	0.30			
	SP15	A1	SP131	不整形	1.00	0.65	0.40			
	SP16	A1	SP129	方	0.49	0.40	0.29			
	SP17	A1	SP120	方	0.29	0.29	0.30			
	SP18	A1	SP62	円	0.39	0.37	0.40			
	SP19	A1	SP63	方	0.30	0.26	0.30			
	SP20	A1	SP118	方	0.37	0.34	0.33			
	SP21	A1	SP117	方	0.40	0.34	0.34			
	SP22	A1	SP69	円	0.40	0.38	0.40	土師器		
	SP23	A1	SP114	円	0.40	0.36	0.44	羽口		
	SP24	A1	SP77	不整形	0.48	0.43	0.37			
	SP25	A1	SP73	円	0.50	0.50	0.36			
	SP26	A1	SP68	椭円	0.27	0.24	0.28			
	SP27	A1	SP67	椭円	0.43	0.31	0.29			
	SP28	A1	SP33	椭円	0.35	0.29	0.29			
	SP29	A1	SP34	椭円	0.37	0.24	0.24			
SB3	SP30	A1	SP29	円	0.27	0.25	0.20			
	SP31	A1	SP32	円	0.24	0.22	0.23			
	SP32	A1	SP28	方	0.37	0.33	0.20			
	SP33	A1	SP36	椭円	0.40	0.34	0.25	>SD107		
SB4	SP34	A1	SP54	椭円	0.42	0.37	0.16			
	SP35	A1	SP95	円	0.36	0.31	0.10			
	SP36	A1	SP96	不整形	0.40	0.38	0.29			
	SP37	A1	SP100	円	0.40	0.40	0.25			
SB5	SP38	A1	SP99	円	0.36	0.33	0.28			
	SP39	A1	SP125	椭円	0.27	0.20	0.17			
	SP40	A1	SP15	(椭円)	(0.36)	0.32	0.08			
	SP41	A1	SP11	円	0.40	0.35	0.10			
	SP42	A1	SP124	円	0.30	0.27	0.18	>SD112		
SB6	SP43	A3	SP58	不整形	0.53	0.47	0.13			
	SP44	A3	SP232	円	0.26	0.23	0.10			
	SP45	A3	SP31	(椭円)	0.62	0.41	0.27			
	SP46	A3	SP230	方	0.28	0.23	0.08			
	SP47	A3	SP231	円	0.30	0.30	0.16			
	SP48	A3	SP28	方	0.37	0.32	0.16			
	SP49	A3	SP67	円	0.32	0.27	0.11	礎板		
	SP50	A3	SP34	円	0.45	0.41	0.24			
	SP51	A3	SP237	(椭円)	0.49	(0.30)	0.22			
	SP52	A3	SP23	不整形	0.42	0.37	0.08			
	SP53	A3	SP25	不整形	0.35	0.26	0.08			
	SP54	A3	SP37	円	0.55	0.47	0.11			
SB7	SP55	A3	SP239	円	0.25	0.23	0.12			
	SP56	A3	SK52	椭円	0.60	0.34	0.14			
	SP57	A3	SK47	椭円	0.61	0.45	0.24	弥生土器・中世土師器・珠網		
	SP58	A3	SK48	不整形	0.77	0.28	0.18			
	SP59	A3	SP124	不整形	0.71	0.42	0.15			
	SP60	A3	SP98	不整形	0.42	0.37	0.18			
	SP61	A3	SP107	不整形	0.54	0.42	0.19	中世土師器		
	SP62	A3	SP114	不整形	0.68	0.40	0.28	中世土師器		
	SP63	A3	SK54	不整形	1.07	0.73	0.20	中世土師器		
	SP64	A3	SK51	(椭円)	0.70	0.46	0.19			
	SP65	A3	SP234	(円)	(0.50)	(0.48)	(0.10)	礎板	>SK45	
	SP66	A3	SP72	(不整形)	0.68	(0.37)	0.20	中世土師器		
SB8	SP67	A3	SP129	不整形	0.39	0.33	0.20	中世土師器		
	SP68	A3	SP236	椭円	0.62	0.45	0.21			
	SP69	A3	SP86	不整形	0.42	0.26	0.11			
	SP70	A3	SP79	椭円	0.50	0.40	0.11			
	SP71	A3	SP135	椭円	0.57	0.35	0.24	中世土師器		
	SP72	A3	SP136	椭円	0.57	0.35	0.24	中世土師器		

第34表 水橋金広・中馬場遺跡 掘立柱建物・櫛列柱穴一覧(3)

建物番号	柱穴番号	地区	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	備考	挿図番号	写真図版
					長さ	幅	深さ				
SB8	SP72	A3	SP139	円	0.35	0.32	0.15			62	
	SP73	A3	SP141	円	0.35	0.33	0.20				
	SP74	A3	SP146	(円)	(0.38)	0.38	0.15				
	SP75	A3	SP245	円	0.26	0.22	0.24		>SK27		
	SP76	A3	SK60	不整形	0.87	0.58	0.37	中世土師器・珠圓			
	SP77	A3	SP167	円	0.34	0.29	0.18				
	SP78	A3	SK56	円	0.70	0.62	0.25				
	SP79	A3	SP152	円	0.40	0.39	0.20				
SB9	SP80	A3	SP50	椭円	0.52	0.44	0.21			61	
	SP81	A3	SK33	不整形	0.72	0.32	0.17				
	SP82	A3	SP32	椭円	0.49	0.37	0.20				
	SP83	A3	SP39	円	0.52	0.50	0.14				
	SP84	A3	SP41	椭円	0.62	0.49	0.27	柱根			
SB10	SP85	A3	SP97	不整形	0.54	0.43	0.10	礎板		45	
	SP86	A3	SP102	円	0.33	0.30	(0.18)		底面に縦(根固め石?)		
	SP87	A3	SP123	不整形	0.38	0.31	0.08	珠洲			
	SP88	A3	SP246	円	0.18	0.14	0.06				
	SP89	A3	SP117	不整形	0.50	0.24	0.13		底面に縦(根固め石?)		
	SP90	A3	SP57	円	0.40	0.38	0.10	礎石			
	SP91	A3	SP67	椭円	0.41	0.28	0.17				
SB11	SP92	A3	SK43	不整形	0.57	0.54	0.23		底面に縦(根固め石?)	62	
	SP93	A3	SP241	円	0.40	0.40	0.23				
	SP94	A3	SP76	円	0.59	0.55	0.28	中世土師器			
	SP95	A3	SP69	不整形	0.49	0.30	0.12	珠洲			
	SP96	A3	SP115	円	0.45	0.40	0.18				
	SP97	A3	SP247	(椭円)	(0.55)	0.42	0.10				
	SP98	A3	SP86	円	0.28	0.26	0.19				
	SP99	A3	SP168	円	0.38	0.37	0.16		>SD132		
SB12	SP100	A3	SP207	円	0.44	0.40	0.23	柱根	柱痕底面は深さ0.54m	45	
	SP101	A3	SP220	円	0.35	0.28	0.16				
	SP102	A3	SP203	円	0.28	0.21	0.17				
	SP103	A3	SP205	不整形	0.50	0.30	0.38				
	SP104	A3	SP209	円	0.32	0.30	0.36				
	SP105	A3	SP174	円	0.30	0.30	0.30	土師器・須恵器			
	SP106	A3	SP229	不整形	0.40	0.38	0.37				
SB13	SP107	A3	SP211	円	0.30	0.26	0.22	中世土師器		63	
	SP108	A3	SP222	椭円	0.44	0.29	0.22				
	SP109	A3	SK74	円	0.62	0.51	0.16				
	SP110	A3	SP204	円	0.40	0.39	0.25	土師器			
	SP111	A3	SP208	椭円	0.50	0.40	0.12				
SB14	SP112	A3	SP228	不整形	0.41	0.37	0.24			63-64	
	SP113	A3	SP212	円	0.43	0.35	0.14				
	SP114	A3	SP180	円	0.48	0.41	0.18				
	SP115	A3	SP181	円	0.54	0.50	0.20				
	SP116	A3	SP186	円	0.36	0.32	0.14				
SB15	SP117	A3	SP227	不整形	0.54	0.38	0.14			64	
	SP118	A3	SP193	不整形	0.44	0.37	0.19				
	SP119	A3	SK71	不整形	0.90	0.40	0.17				
	SP120	A3	SK76	椭円	0.65	0.50	0.18				
	SP121	A3	SP198	椭円	0.51	0.39	0.23				
SB16	SP122	A3	SP189	円	0.40	0.35	0.18			45	
	SP123	A3	SP185	椭円	0.35	0.22	0.25				
	SP124	A3	SP191	椭円	0.36	0.27	0.16				
	SP125	A3	SP217	円	0.50	0.42	0.36	柱根			
	SP126	A3	SP215	円	0.41	0.40	0.23				
SB17	SP127	A3	SP224	方	0.38	0.30	0.15				

第34表 水橋金広・中馬場遺跡 挖立柱建物・柵列柱穴一覧(4)

建物番号	柱穴番号	地区	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	備考	撮影番号	写真図版
					長さ	幅	深さ				
SB17	SP128	A4	SK14	円	0.57	0.50	0.25	土師器			
	SP129	A4	SK22	不整形	0.57	0.52	0.18				
	SP130	A4	SK34	(椭円)	0.49	(0.45)	0.27				
	SP131	A4	SK28	円	0.55	0.51	0.30				
	SP132	A4	SK8	円	0.59	0.53	0.26				
	SP133	A4	SK10	円	0.73	0.64	0.44				
	SP134	A4	SK19	円	0.66	0.50	0.34				
	SP135	A4	SP48	椭円	0.73	0.52	0.50	土師器			45
	SP136	A4	SK26	(不整形)	0.74	(0.60)	0.31				
	SP137	A4	SK7	円	0.50	0.47	0.28				
	SP138	A4	SK11	不整形	0.75	0.60	0.25				
	SP139	A4	SP22	(椭円)	(0.40)	0.40	0.26				
	SP140	A4	SP47	円	0.57	0.57	0.30		>SD103		
	SP141	A4	SK31	円	0.63	0.59	0.34	土師器	>SD104		
SB18	SP142	A4	SP16	(不明)	(0.55)	(0.49)	0.30				
	SP143	A4	SP17	(不明)	0.47	(0.40)	0.27				
	SP144	A4	SP27	椭円	0.49	0.35	0.20				
	SP145	A4	SP32	円	0.40	0.32	0.20				
	SP146	A4	SP39	(円?)	(0.31)	0.30	0.17	中世土師器			
	SP147	A4	SP185	円	0.39	0.33	0.20				
	SP148	A4	SP186	円	0.30	0.27	0.25		<SD140		
	SP149	A4	SP11	円	0.35	0.28	0.20		>SP136(SB17)		
	SP150	A4	SP50	椭円	0.40	0.30	0.22				
	SP151	A4	SP43	円	0.47	0.40	0.20				
	SP152	A4	SP54	椭円	0.47	0.39	0.10				
	SP153	A4	SP29	椭円	0.59	0.40	0.32				
	SP154	A4	SK26	円	0.59	0.57	0.35				
	SP155	A4	SP34	(円)	0.45	(0.36)	0.29				
SB19	SP156	A4	SK33	不整形	(0.68)	0.47	0.20				
	SP157	A4	SP30	椭円	0.51	0.42	0.19				
	SP158	A4	SP130	円	0.32	0.30	0.22				
	SP159	A4	SP40	円	0.34	0.30	0.16				
	SP160	A4	SP110	椭円	0.50	0.30	0.19				
	SP161	A4	SP111	円	0.37	0.35	0.14				
	SP162	A4	SP133	椭円	0.30	0.18	0.21				
	SP163	A4	SP106	(椭円)	0.39	0.30	0.20				
	SP164	A4	SP109	円	0.28	0.24	0.20				
	SP165	A4	SP112	円	0.50	0.48	0.21				
	SP166	A4	SP100	円	0.30	0.30	0.15	土師器			
	SP167	A4	SP74	円	0.29	0.27	0.13				
	SP168	A4	SP116	不整形	0.42	0.35	0.20				
	SP169	A4	SP118	不整形	0.60	0.49	0.27				
SB20	SP170	A4	SP150	円	0.50	0.40	0.29				
	SP171	A4	SP166	椭円	0.40	0.30	0.13		>SD64		
	SP172	A4	SP161	円	0.51	0.40	0.20				
	SP173	A4	SP162	椭円	0.68	0.50	0.20				
SB21	SP174	A4	SK51	不整形	(1.00)	0.73	0.46		>SD55		
	SP175	A4	SK52	不整形	1.28	0.99	0.40	弥生土器・土師器	>SD57		
	SP176	A4	SK60	不整形	0.97	0.94	0.50		<SD144		
	SP177	A4	SK43	不整形	0.81	0.70	0.27		<SD144		
	SP178	A4	SK45	不整形	1.38	1.05	0.38		<SD144		
	SP179	A4	SK46	不整形	1.25	0.92	0.45		<SD144		
	SP180	A1	SP76	円	0.48	0.46	0.10				
SA1	SP181	A1	SP74	円	0.23	0.20	0.07				
	SP182	A1	SP72	円	0.24	0.24	0.14				
	SP183	A1	SP70	円	0.36	0.33	0.07				
SA2	SP184	A3	SP192	円	0.48	0.38	0.25	礎板			
	SP185	A3	SP197	椭円	0.45	0.33	0.23	礎板			
	SP186	A3	SP199	椭円	0.42	0.30	0.30	礎板			

第35表 水橋金広・中馬場遺跡 井戸一覧

遺構	地区	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期	種類	備考	補圖番号	写真図版
				長さ	幅	深さ						
SE1	A8S	SE235	円	1.93	1.80	0.46	土師器・須恵器・綠色凝灰岩	古代	木組		55	40-42
SE2	A1	SE1	梢円	1.42	1.35	0.98	珠洲・白磁・箸	中世	素掘り			
SE3	A1	SE2	円	1.57	1.54	(0.85)	土師器・須恵器・中世土師器・器・珠洲	中世	素掘り		47	
SE4	A1	SE3	不整形	1.11	1.08	0.72	土師器・中世土師器・珠洲・箸・薄板・板材	中世	木組	隅柱抜き取り痕	68	
SE5	A1	SE4	円	2.30	2.18	0.88	中世土師器・箸・曲物側板・編物製品	中世	木組?		47	
SE6	A1	SE5	不整形	1.80	1.55	0.77	土師器・瀬戸美濃・箸・井戸幹部材	中世	木組?	井戸幹部材施廻		
SE7	A1	SE6	(円?)	1.04	(0.72)	0.74	中世土師器	中世	素掘り	>SE8		
SE8	A1	SE7	梢円	1.70	(1.15)	0.65	中世土師器	中世	木組?	<SE7		
SE9	A3	SE1	不整形	0.90	0.65	0.68	土師器	中世	素掘り	>SD129		
SE10	A3	SE2	円	0.90	0.87	(0.28)	中世土師器・曲物	中世	素掘り			
SE11	A3	SE3	不整形	1.51	1.20	(0.34)	中世土師器・曲物・箸	中世	素掘り			
SE12	A3	SE4	(不整形)	(1.40)	0.85	(0.60)	土師器・中世土師器・珠洲・越前・曲物	中世	素掘り		69	
SE13	A3	SE5	梢円	1.42	(1.14)	(0.35)	土師器・中世土師器・井戸幹部材・薄板	中世	木組		47	
SE14	A3	SE6	(不整形)	(1.62)	(1.50)	0.34	土師器・中世土師器・珠洲・漆器・曲物・板材・円形板	中世	木組?	水溜?	<SE15	
SE15	A3	SE12	不整形	1.90	1.46	0.35	土師器・中世土師器・珠洲・漆器・曲物・板材・円形板	中世	素掘り	>SE14		
SE16	A3	SE7	円	1.82	1.73	(0.37)	土師器・中世土師器・珠洲・井戸幹部材	中世	木組			
SE17	A3	SE8	不整形	1.38	1.30	0.68	中世土師器	中世	素掘り			
SE18	A3	SE9	円	1.22	1.14	0.65	中世土師器	中世	素掘り			
SE19	A3	SE10	梢円	0.70	0.53	0.36	中世土師器	中世	素掘り	>SE20	70	
SE20	A3	SE11	梢円	(1.00)	(0.90)	0.23	中世土師器	中世	素掘り	<SE19		
SE21	A3	SE13	円	1.18	(1.05)	0.42	須恵器・中世土師器	中世	素掘り	>SE22		
SE22	A3	SE14	円	1.17	(0.98)	0.68	土師器・須恵器・中世土師器・器・珠洲	中世	木組	<SE21 隅柱抜き取り痕	45	
SE23	A3	SE15	円	1.86	1.70	0.75	中世土師器・珠洲・井戸幹部材	中世	木組		71	
SE24	A3	SE16	円	1.23	1.10	0.42	中世土師器・珠洲	中世	素掘り		70	
SE25	A4	SE1	梢円	1.23	1.00	0.52	土師器	中世	素掘り	<SD140		47
SE26	A4	SE3	不整形	1.10	1.07	0.53	中世土師器・杭状木製品・板状木器製品・棒状木製品	中世	木組	>SD140	71	
SE27	A4	SE2	不整形	(2.50)	1.84	0.76	土師器・板材	中世	不明	<SD140		
SE28	A10	SE34	円	1.17	1.14	0.81	中世土師器	中世	素掘り		47	
SE29	A11	SE27	不整形	1.63	1.33	1.09	土師器・珠洲・越中瀬戸・唐津	近世	素掘り		72+73	
SE30	A11	SE28	円	0.94	0.92	0.93	中世土師器・珠洲・越中瀬戸	近世	素掘り			
SE31	A11	SE29	(不整形)	1.60	1.30	0.90	須恵器・珠洲・越中瀬戸・伊万里	近世	素掘り			
SE32	A11	SE32	(円)	1.27	1.18	1.06	中世土師器・越中瀬戸・伊万里	近世	素掘り		73	
SE33	A11	SE35	(円)	1.02	1.00	0.60	越中瀬戸	近世	素掘り			
SE34	A11	SE70	不整形	1.68	1.00	0.62	越前・越中瀬戸・伊万里・近代陶器	近代	素掘り	>SE35		
SE35	A11	SE31	(梢円)	1.12	(0.64)	0.49	越中瀬戸	近世	素掘り	<SE34	72	
SE36	A11	SE85	(円)	0.87	0.79	0.54	伊万里・近代陶器・箸・櫛	近代	素掘り	<SD153		
SE37	A11	SK11	円	0.60	0.50	0.56		近世	素掘り			

第36表 水橋金広・中馬場遺跡 土坑一覧(1)

遺構	地区	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期	備考	挿図番号	写真図版
				長さ	幅	深さ					
SK1	A8S	SK263	梢円	1.40	1.05	0.25	弥生土器・石英	弥生			39
SK2	A8S	SK279	梢円	0.39	0.28	0.07	弥生土器	弥生			47
SK3	A8S	SK221	不整形	2.52	2.40	0.77	弥生土器	弥生	<SD20・38 倒木痕		39
SK4	A5	SK23	円	0.44	(0.44)	0.17	土師器	古墳時代			49
SK5	A8S	SK226	梢円	0.70	0.42	0.19	土師器	古代	<SD34	54・55	
SK6	A1	SP23	梢円	0.29	0.17	0.18	珠洲	中世			
SK7	A1	SP60	梢円	0.49	0.22	0.35	中世土師器	中世			48
SK8	A1	SK6	梢円	0.38	0.30	0.06	中世土師器・珠洲	中世	<SD105		
SK9	A1	SK11	不整形	2.37	1.93	0.23	中世土師器・越中瀬戸・鉄津	中世	>SD115・160		
SK10	A1	SK12	卵丸	2.30	1.94	0.11	土師器・中世土師器・珠洲	中世			
SK11	A1	SK30	梢円	1.05	0.33	0.15	土師器・中世土師器	中世			
SK12	A1	SK27	不整形	3.02	2.41	0.45	鉄津	中世			48
SK13	A1	SP84	円	0.37	0.36	0.12		中世			74
SK14	A1	SP85	円	0.24	0.24	0.15		中世			
SK15	A1	SP86	円	0.46	0.43	0.24		中世			
SK16	A1	SP105	円	0.16	0.14	0.12		中世			
SK17	A1	SP106	梢円	0.37	0.27	0.13		中世			
SK18	A1	SP91	円	0.28	0.26	0.18		中世			
SK19	A1	SP90	梢円	0.45	0.35	0.12		中世			
SK20	A3	SP63	不整形	0.24	0.24	0.13	中世土師器	中世			
SK21	A3	SP112	円	0.43	0.42	0.11	中世土師器	中世			
SK22	A3	SP122	不整形	0.49	0.46	0.28	中世土師器・羽口・砥石	中世			
SK23	A3	SP178	不整形	0.63	0.47	0.22	須恵器	中世			
SK24	A3	SK7	不整形	0.66	0.40	0.09	中世土師器・珠洲	中世			
SK25	A3	SK8	円	0.59	0.55	0.33	板材・円形板	中世			75
SK26	A3	SK10	(不明)	3.69	(1.45)	0.25	中世土師器・珠洲	中世			
SK27	A3	SK11	円	1.78	1.72	0.14	中世土師器・砥石	中世	>SD133・SK47・SP75		
SK28	A3	SK12	(梢円)	1.56	(1.15)	0.12		中世	<SD133		
SK29	A3	SK13	卵丸	1.53	0.97	0.28	中世土師器	中世			
SK30	A3	SK23	梢円	1.54	1.42	0.28	土師器・中世土師器	中世			
SK31	A3	SK29	円	0.94	0.84	0.39	中世土師器	中世			
SK32	A3	SK14	(円)	1.52	(1.42)	0.38	中世土師器・漆器・箸・棒状木製品・板材・円形板	中世			48
SK33	A3	SK19	不整形	0.90	0.67	0.08		中世	>SK32・34		
SK34	A3	SK20	(円)	(1.48)	1.48	0.27	土師器・中世土師器・珠洲	中世	<SK33・36		
SK35	A3	SK15	梢円	1.57	1.23	0.27	中世土師器	中世	>SK37		
SK36	A3	SK31	(不整形)	0.94	(0.85)	(0.20)	中世土師器	中世	>SK34・37		
SK37	A3	SK21	(梢円?)	(1.45)	1.32	0.20	中世土師器・白磁・青磁	中世	<SK35・36		76
SK38	A3	SK30	不整形	2.45	1.65	0.43	中世土師器	中世			
SK39	A3	SK32	不整形	1.35	0.65	0.23	中世土師器	中世			
SK40	A3	SK46	不整形	0.55	0.53	0.10	中世土師器	中世			
SK41	A3	SK58	不整形	1.80	0.74	0.19	須恵器・中世土師器	中世			
SK42	A3	SK37	円	1.42	1.35	0.23	土師器・中世土師器・珠洲・青磁	中世			
SK43	A3	SK52	梢円	0.54	0.40	0.11	中世土師器	中世			
SK44	A3	SK63	梢円	0.60	0.49	0.24	中世土師器	中世			
SK45	A3	SK38	円	2.37	2.26	0.32	須恵器・中世土師器・珠洲	中世	>SP65・95		
SK46	A3	SK79	(不整形)	2.10	(1.80)	0.37	土師器・中世土師器	中世	>SD134		
SK47	A3	SK61	(円)	(0.64)	(0.64)	0.25	珠洲・砥石	中世	<SK27		48
SK48	A3	SN2	(不整形)	(3.81)	2.82	0.39	須恵器・中世土師器・珠洲・白磁・青磁・円形板	中世	>SD133・134		77
SK49	A4	SP18	円	0.47	0.43	0.34	土師器	中世			
SK50	A4	SP149	円	0.46	0.42	0.12	土師器	中世			
SK51	A10	SK45	(不整形)	0.47	0.43	0.11	中世土師器・珠洲	中世			
SK52	A11	SK34	(梢円)	0.73	0.58	0.32	中世土師器	近世			48
SK53	A11	SK38	不整形	1.06	0.48	0.26		近世			78
SK54	A11	SK41	梢円	0.86	0.60	0.25	中世土師器	近世			48
SK55	A11	SK74	不整形	0.91	0.50	0.47	越中瀬戸・唐津	近世			48

第36表 水橋金広・中馬場遺跡 土坑一覧 (2)

遺構	地区	旧遺構番号	規模(m)			出土遺物	時期	備考	拂団番号	写真図版
			長さ	幅	深さ					
SK56	A11	SK76	椭円	0.67	0.43	0.20		近世		
SK57	A11	SK84	椭円	0.75	0.58	0.45		近世		
SK58	A11	SK65	(不整形)	1.70	(1.02)	0.40	越中瓢戸・下駄	近世		
SK59	A11	SK52	(不整形)	(3.76)	3.90	0.20	中世土師器・珠紋・越中瓢戸	近世	>SD153, <SD154	
SK60	A3	SX1	不整形	(5.00)	3.30	0.56	桶・竹管	近世	導水施設	48
SK61	A1	SP53	椭円	0.60	0.32	0.27		中世	<SD113	
SK62	A1	SX2	(不明)	(3.45)	1.75	0.35	弥生土器	中世	<SD112	36・79
SK63	A1	SX1	円	0.75	0.75	0.31	中世土師器	中世	>SD109・110	37
SK64	A10	SX53	不整形	(8.50)	(2.70)	0.30	中世土師器・珠紋	中世		41

第37表 水橋金広・中馬場遺跡 清一覧 (1)

遺構	地区	旧遺構番号	規模(m)			出土遺物	時期	備考	拂団番号	写真図版
			幅	深さ						
SD1A	A5	SD13B	(1.15)	0.24		弥生土器・土師器・須恵器	古墳時代	<SD1B		
SD1B	A5	SD13A	1.68	0.20		土師器・須恵器	古代	>SD1A		39
SD2	A5	SD10	1.50	0.23		土師器	古墳時代			
SD3A	A9	SD6	1.61	0.30		土師器・須恵器	古墳時代	>SD3B		49・50
SD3B	A9	SD10	0.90	0.25		土師器	古墳時代	<SD3A		
SD4	A4	SD100-121,SX1	3.50	0.45		弥生土器・土師器・須恵器	古代?	自然流路		
SD5	A6・7・8N	SD13	4.80	0.61		弥生土器・板材	弥生	杭・板材により護岸		39
SD6	A8N	SD78	0.43	0.12			弥生	<SD7		
SD7	A6・7・8N	SD25	0.70	0.21		弥生土器	弥生	SD5に並行。>SD6・8		
SD8	A6・7・8N	SD26	0.89	0.32		弥生土器	弥生	SD5に並行。<SD7		51・52
SD9	A6・8N	SD20	0.67	0.22			古墳時代?	SD12に続く?, <SD10・11		
SD10	A6	SD18	0.73	0.14			古墳時代?	>SD9		
SD11	A6	SD21	1.24	0.30			古墳時代?	>SD9		
SD12	A6・7	SD12	1.40	0.23		土師器	古墳時代	SD9に続く?, <SD13	51	
SD13	A6・7	SD7	2.36	0.35		弥生土器・土師器・須恵器	古墳時代	杭列打設。>SD12・14	51・53	39
SD14	A6・7・8N	SD6	3.50	0.24		縄文土器・土師器・砥石	古墳時代	>SD15, <SD13		
SD15	A6・7・8N	SD4	1.70	0.37		縄文土器・弥生土器・土師器	古墳時代	<SD14, >SD16		
SD16	A6・7	SD3	2.00	0.30		縄文土器・弥生土器・土師器	古墳時代	<SD15, >SD17	51	
SD17	A6・7	SD5	(1.30)	0.24		土師器	古墳時代	<SD16・19		
SD18	A6・7・8N	SD2	(3.50)	0.32		縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・砥石・緑色凝灰岩	古代	>SD19		41・42
SD19	A6・7・8N	SD1	4.10	0.57		弥生土器・土師器・須恵器・土製品・擦切石器・緑色凝灰岩	古代	杭・板材により護岸。<SD18		41
SD20	A8S	SD201	0.82	0.18		弥生土器・土師器	古代	道路側溝。<SD37~40・100		
SD21	A8S	SD202	0.46	0.18		弥生土器	古代	道路側溝。<SD99, >SD31~36		
SD22	A8S	SD203	0.64	0.15		弥生土器・土師器	古代	道路側溝。<SD37~40・99, >SK3		
SD23	A8S	SD220	0.95	0.09		弥生土器・土師器・須恵器	古代	>SD99		
SD24	ARN	SD97	0.54	0.10		弥生土器・土師器	古代	>SD29		
SD25	A8N	SD98	0.46	0.10		土師器	古代	>SD29		
SD26	A8N	SD99	0.37	0.10			古代	>SD29		
SD27	A8N	SD100	0.37	0.12		土師器	古代	>SD29		
SD28	A8N	SD102	0.74	0.10		土師器	古代	>SD29		
SD29	A8N	SD101	0.76	0.15		土師器	古代	<SD23~28		
SD30	A8S	SD242	0.30	0.15			古代			
SD31	A8S	SD241	0.25	0.12			古代	<SD21		
SD32	A8S	SD240	0.34	0.16		弥生土器	古代	<SD21		
SD33	A8S	SD239	0.50	0.06		弥生土器	古代	<SD21		
SD34	A8S	SD238	0.30	0.08		弥生土器	古代	<SD21		
SD35	A8S	SD237	0.27	0.06			古代	<SD21		
SD36	A8S	SD236	0.36	0.07		弥生土器	古代	<SD21		
SD37	A8S	SD206	0.37	0.17		弥生土器	古代	>SD20・22・100		
SD38	A8S	SD207	0.28	0.13		弥生土器	古代	>SD20・22・100・SK3		
SD39	A8S	SD208	0.37	0.11		弥生土器・土師器	古代	>SD20・22・100		
SD40	A8S	SD209	0.34	0.09		弥生土器	古代	>SD20・22・100		
SD41	A4	SD57	0.23	0.10			古代			
SD42	A4	SD60	0.29	0.07			古代			57
SD43	A4	SD61	0.30	0.13			古代			

第37表 水橋金広・中馬場遺跡 清一覧(2)

遺構	地区	HII遺構番号	規模(m)		出土遺物	時期	備考	捲回番号	写真図版
			幅	深さ					
SD44 A4		SD62	0.20	0.05		古代			
SD45 A4		SD63	0.53	0.13	土師器	古代			
SD46 A4		SD66	0.33	0.10		古代			
SD47 A4		SD73	0.26	0.07		古代	<SD141		
SD48 A4		SD74	0.25	0.15	土師器	古代	>SD4		
SD49 A4		SD75	0.67	0.12	土師器	古代			
SD50 A4		SD82	0.64	0.11	土師器	古代	>SD4		
SD51 A4		SD84	0.28	0.07	土師器	古代	>SD4		
SD52 A4		SD85	0.30	0.06		古代			
SD53 A4		SD76	0.23	0.10		古代	<SD144		
SD54 A4		SD77	0.57	0.18		古代	<SD144+SP176		
SD55 A4		SD78	0.40	0.13		古代	<SD144+SP177		
SD56 A4		SD79	0.25	0.07		古代	<SD144		
SD57 A4		SD80	0.30	0.08		古代	<SD144+SP175		
SD58 A4		SD88	0.40	0.14		古代	<SD144		
SD59 A4		SD102	0.72	0.14		古代	<SD144		
SD60 A4		SD97	0.26	0.05	土師器	古代	<SD144		
SD61 A4		SD107	0.40	0.13		古代			
SD62 A4		SD109	0.37	0.11		古代	<SD62		
SD63 A4		SD110	0.36	0.12		古代	<SD144		
SD64 A4		SD115	0.45	0.14		古代	<SP171		
SD65 A4		SD114	0.27	0.07	土師器・中世土師器	古代	<SD144		
SD66 A4		SD113	0.43	0.09		古代	<SD144		
SD67 A5		SD161	0.33	0.08	土師器	古代			
SD68 A5		SD101	0.28	0.05	土師器	古代			
SD69 A5		SD100	0.40	0.08	土師器	古代			
SD70 A5		SD127	0.29	0.05		古代	<SD69		
SD71 A5		SD99	0.49	0.10		古代			
SD72 A5		SD98	0.42	0.12	土師器	古代			
SD73 A5		SD95	0.38	0.08	土師器	古代	<SD102		
SD74 A5		SD142	0.35	0.09	土師器	古代			
SD75 A9		SD16	0.26	0.05	土師器・須恵器	古代			
SD76 A9		SD15	0.40	0.13	土師器・須恵器	古代	>SD3A+B		
SD77 A9		SD14	0.45	0.14	土師器	古代	>SD3A		
SD78 A9		SD13	0.50	0.15	土師器	古代	>SD3A		
SD79 A9		SD5	0.38	0.10	土師器	古代	>SD3A+B		
SD80 A9		SD4	0.22	0.07	土師器	古代	>SD3A		
SD81 A9		SD3	0.39	0.12	土師器	古代	>SD3A		
SD82 A9		SD2	0.40	0.12	土師器	古代	>SD3A		
SD83 A9		SD1	0.34	0.15	土師器・須恵器	古代	>SD3A+B		
SD84 A12		SD15	0.40	0.15		古代			
SD85 A12		SD14	0.42	0.12		古代	<SD87		
SD86 A12		SD13	0.35	0.05		古代	<SD87		
SD87 A12		SD11	0.39	0.10		古代	>SD85+86+88		
SD88 A12		SD10	0.35	0.11		古代	<SD87		
SD89 A12		SD9	0.50	0.25		古代	<SD90		
SD90 A12		SD8	0.78	0.11		古代	>SD89		
SD91 A12		SD7	0.42	0.08		古代			
SD92 A12		SD25	0.54	0.09		古代			
SD93 A12		SD6	0.27	0.11		古代			
SD94 A12		SD5	0.28	0.04		古代			
SD95 A12		SD4	0.47	0.14		古代	>SD101		
SD96 A12		SD3	0.43	0.12		古代	>SD101		
SD97 A12		SD2	0.41	0.12		古代	>SD101		
SD98 A12		SD1	0.48	0.18		古代	>SD101		
SD99 A8S		SD22	0.53	0.10	弥生土器・土師器	古代	>SD21+22, <SD23	46・47	
SD100 A8S		SD20	0.42	0.09	弥生土器	古代	>SD20, <SD37~40	54・55	
SD101 A12		SD20	0.63	0.09		古代	<SD94~98	46	
SD102 A5		SD42	0.36	0.17	土師器・須恵器	古代	>SD73+74	45	
SD103 A4		SD16	0.77	0.23	土師器・須恵器	古代	<SP140	43	
SD104 A4		SD21	0.75	0.14	土師器	古代	<SP141		
SD105 A1		SD1	1.13	0.14		中世	<SD109, >SK8		
SD106 A1		SD2	2.42	0.48	土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・不明陶器・木製品	中世	>SD107+109~112		
SD107 A1		SD3	0.80	0.37	土師器・中世土師器・珠洲	中世	<SD106+110~111+113+115+159+160+SP5+10+33		
SD108 A1		SD4	0.77	0.26	土師器	中世			

第37表 水橋金広・中馬場遺跡 清一覧 (3)

遺構	地区	旧遭構番号	規模(m)		出土遺物	時期	備考	拂回番号	写真図版
			幅	深さ					
SD109	A1	SD5	0.75	0.20	須恵器・中世土師器・珠洲	中世	>SD105・107, <SD106・110		
SD110	A1	SD6	1.14	0.31	中世土師器	中世	>SD107・109, <SD106		
SD111	A1	SD7	0.76	0.27	中世土師器	中世	>SD107, <SD106・113		
SD112	A1	SD8・15	0.80	0.25		中世	<SD106・SP17・42		
SD113	A1	SD9・14	1.15	0.22	土師器・中世土師器・珠洲・白磁	中世	>SD107・111・112・160, <SP1~3		
SD114	A1	SD10	0.59	0.14		中世			
SD115	A1	SD11	1.05	0.17	白磁	中世	>SD107・112, <SK9・SD113	79	
SD116	A1	SD16	0.30	0.14		中世			
SD117	A1	SD18	0.32	0.14		中世	<SD112		
SD118	A1	SD17	2.30	0.29	土師器・須恵器・珠洲	中世			
SD119	A2	SD1	6.40	0.20	土師器・須恵器・珠洲・越中瀬戸	近世	>SD120~122		
SD120	A2	SD2	0.30	0.08		中世	<SD119		
SD121	A2	SD4	3.80	0.24		中世	<SD119		
SD122	A2	SD3	0.40	0.18	土師器	中世	<SD119		
SD123	A2	SD7	1.00	0.32		中世	<SD124		
SD124	A2	SD9	1.55	0.37	土師器・珠洲	中世	>SD123		
SD125	A3	SD1	1.50	0.22	須恵器・珠洲・越中瀬戸・近世陶器	近現代	近現代の水路か? > SD126・127		
SD126	A3	SD2	2.35	0.46	須恵器・中世土師器・珠洲・漆器	中世	>SD128・129		
SD127	A3	SD3	1.42	0.19		中世	<SD125		
SD128	A3	SD4	1.28	0.24	弥生土器	中世	<SD126		
SD129	A3	SD5	0.90	0.08		中世	<SE9・SK25・SD126		
SD130	A3	SD6	3.65	0.42	土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・越前・薄板・邵材	中世	>SD131・135~137		
SD131	A3	SD14	1.07	0.22		中世	<SD130・135		
SD132	A3	SD8	0.38	0.13		中世	<SP99		
SD133	A3	SD9	0.40	0.15	器	中世	<SK27・48, >SK28	80	
SD134	A3	SD10	0.77	0.22	土師器	中世	<SK27・46		
SD135	A3	SD11	0.50	0.20		中世	>SD131		
SD136	A3	SD12	0.84	0.15		中世	<SD130		
SD137	A3	SD13	0.47	0.13	中世土師器・瓦質	中世	<SD130		
SD138	A4	SD1	1.75	0.15	土師器・須恵器・中世土師器・珠洲	中世	>SD139		
SD139	A4	SD2	0.87	0.12	土師器・須恵器	中世	<SD138		
SD140	A4	SD47	0.93	0.14	土師器	中世	>SD138・SP148		
SD141	A4	SD71	1.70	0.42	土師器・須恵器・中世土師器	中世			
SD142	A4	SD123	(1.15)	0.22	土師器	中世	>SD4, <SD143・144		
SD143	A4	SD122	1.91	0.16	弥生土器・中世土師器	中世	>SD4・142, <SD144		
SD144	A4	SD111	0.78	0.09	土師器	近世	近現代の水路? > SD53~60・SP176~179	44	
SD145	A10	SD41	1.40	0.25	須恵器・珠洲・越中瀬戸・唐津・伊万里・不明陶磁器・陶鍊・磨製石斧	近世	>SD146		
SD146	A10	SD40	1.60	0.23		近世	<SD145		
SD147	A10	SD51	0.59	0.13		中世			
SD148	A10	SD33	0.70	0.10	珠洲	中世			
SD149	A10	SD52	0.93	0.18		中世			
SD150	A11	SD2	0.79	0.07	越中瀬戸・唐津・伊万里	近世	道路側溝	81	
SD151	A11	SD1	1.85	0.31	越中瀬戸・唐津・伊万里・近代陶磁器	近世~近代	道路側溝		
SD152	A11	SD12	0.63	0.17		近世	道路側溝		
SD153	A11	SD13	1.55	0.23		近世	道路側溝 >SE36, <SK59		
SD154	A11	SD15	1.67	0.36	越中瀬戸・唐津・伊万里	近世	>SK59		
SD155	A11	SD18	0.39	0.08	唐津・伊万里	近世	<SD156		
SD156	A11	SD19	0.38	0.07		近世			
SD157	A11	SD61	0.38	0.09	金属製品	近世			
SD158	A11	SD25	0.76	0.62	越中瀬戸・伊万里・金属製品	近世	SE31・32連続, 竹管理設	73	
SD159	A1	SD12	0.57	0.21	土師器・中世土師器・珠洲・青磁	中世	<SP6	36	
SD160	A1	SD13	0.63	0.18	中世土師器・珠洲	中世	<SD113・SK9, >SD107		

第38表 水槽金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器・土製品一覽 (1)

第38表 水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(2)

第38表 水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(3)

第38表 水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(4)

第38表 水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧 (5)

第38表 水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧（6）

第38表 水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧 (7)

第38表 水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧 (8)

第38表 水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器・土製品一覽 (9)

第39表 水橋金広・中馬場遺跡 木製品一覧

擇図番号	遺物番号	写真 図版	地区	遺構	出土地点	種類	法量(cm)			備考	樹種
							長さ	幅	厚さ		
95	332	58	A8N	SD5		杭	138.5	10.8	8.3		スギ
	333		A8N	SD5		杭	96.2	7.0	4.0		スギ
	334		A7	SD13		杭	68.0	6.6	3.7		スギ
	335		A8N	SD19		杭	93.1	6.6	3.6		スギ
	336		A7	SD18		杭	122.5	8.2	6.9		スギ
	337		A7	SD18		杭	116.5	21.3	6.5		スギ
	338	59	A8N	SD5	下層	棒材	(18.85)	1.3	0.6	抉状の加工有り	スギ
	339		A1	SD106	最下層	漆器	口径13.8	底径8.0	器高5.6	内外面黒漆	カツラ
	340		A1	SD106	最下層	漆器	口径8.4	底径6.1	器高1.65	内外面黒漆 内面に赤漆の色繪	ケヤキ
96	341	60	A3	SD126	X100Y175	漆器				器高(2.1)	ケヤキ
	342		A11	SE36		漆	(2.4)	(5.7)	0.8	両端欠損	シキミ
	343		A1	SD106	最下層	折敷底板?	(8.2)	16.5	3.5		スギ
	344		A11	SK58		差し盾下駄	19.65	9.2	2.0	菌部欠損	クリ
	345		A1	SD106	X26Y26	最下層 著	19.3	0.6	0.4		スギ
	346		A1	SD106	X26Y31	最下層 著	20.65	0.55	0.45		スギ
	347		A1	SD106	X26Y21	下層 著	20.9	0.75	0.5		スギ
97	348	60	A1	SE4	下層	著	22.5	0.6	0.4		スギ
	349		A1	SE5		著	22.7	0.7	0.4		スギ
	350		A1	SE6		著	18.9	0.7	0.45	断面楕円形	スギ
	351		A3	SK32		著	23.7	0.8	0.55		スギ
	352		A3	SE11		著	(17.05)	0.85	0.45		スギ
	353		A11	SE36		著	(23.95)	0.8	0.5	一端欠損	スギ
	354	59	A3	SE15		曲物	口径42.6	底径45.4	高さ17.2	井戸水溜	スギ
	355		A1	SE5		鋤物製品	(30.9)	(37.8)		井戸水溜底より出土	アヌラロ

第40表 水橋金広・中馬場遺跡 金属製品一覧

擇図番号	遺物番号	写真 図版	地区	遺構	出土地点	種類	法量(cm・g)				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
97	356	60	A11	SD157		匙	8.7	1.25	0.15	2.5	金銅製 仏具?

第41表 水橋金広・中馬場遺跡 石製品一覧

擇図番号	遺物番号	写真 図版	地区	遺構	出土地点	種類	法量(cm・g)				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
98	357	61	A8N	SD19	X178Y273	擦切石器	0.94	2.47	0.27	0.8	緑色片岩
	358		A8S	II層	X167Y276	擦切石器	1.62	2.24	0.25	1.13	粘板岩
	359		A8S		X170Y270	擦切石器	3.49	5.33	0.79	14.69	波紋岩質溶結凝灰岩
	360		A8N	II層	X176Y278	石材	1.94	4.71	2.43	22.0	擦り切り痕あり 荒削品 変質流紋岩
	361		A7		I層 X161Y289	抉入柱状片刃 石斧	10.33	2.83	2.81	131.1	頁岩
	362		A10	SD145	下層	定角式磨製石斧	5.62	2.94	0.98	22.26	蛇紋岩
	363		A3	SK22		砥石	4.75	3.03	2.5	34.6	流紋岩
	364		A11	III層	X74Y130	砥石	8.74	3.73	3.12	168.8	4砥面 一端欠損 流紋岩
	365		A11		X74Y130	砥石	5.32	3.69	1.92	63.4	5砥面 一端欠損 輝石安山岩
	366		A6	SD18	X168Y281	砥石	12.16	9.99	3.71	552.8	砂岩
	367		A3	SK27		砥石	11.41	11.16	3.78	640.0	砂岩

第V章 新堀西遺跡

1 概要

新堀西遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺構・遺物が確認された。検出された遺構は、建物14棟・土坑295基・溝29条・不明遺構1基である。建物は竪穴建物9棟、削平により竪穴か平地式か判別できない建物3棟、平地式建物1棟、布掘建物1棟からなる。

弥生時代後期には2重の環濠状となる溝が確認される。溝と同時期の建物は検出されず、土坑が散見される。溝は調査区外へ続くため、調査区外に環濠の周縁対象となる集落が存在する可能性もある。

弥生時代終末期～古墳時代前期にかけて平地式建物1棟・布掘建物1棟・竪穴建物9棟による集落が形成される。平地式建物に伴う周溝からは多くの土器が出土した。布掘建物は出土土器の様相から、平地式建物より先行する。竪穴建物9棟は、重複や配置関係から2～3段階の遺構変遷が考えられる。削平により建物形式が不明確な3棟は出土遺物からは時期が判然としない。弥生時代後期の溝が埋没した後に構築されており、それ以降のいずれかの時期に該当する。

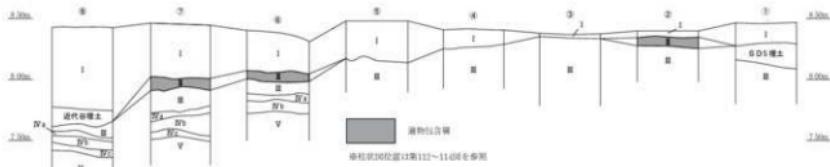
こうした各時期を通じて土坑が検出されている。集中的な土器の廃棄や、意図的な土器の埋設を行ったと思われる土坑も確認される。また、A地区の東端に位置する自然流路においても各時期の遺物が出土し、長期に渡る存続を示す。流路内に設けた集水施設と考えられる不明遺構の板材は放射性炭素年代測定により5世紀後半～7世紀初頭の結果が出ており、最終的な埋没時期を示している。

このように、弥生時代後期以降、古墳時代前期まで長期にわたって集落域として利用されていた。その後、自然流路は古墳時代中期頃にも利用される。それ以降では中世の遺物が散見される。ただし、古墳時代中期・中世では遺構や遺物は少なく、活発な活動はなされなかった。

2 層序

調査区はA・B地区に分かれているが、ほぼ同一の層序となる。I層：表土（現耕作土）、II層：遺物包含層、III～V層：地山となる（第108図）。I層は黄褐色～灰黃褐色の砂質シルトで、A地区よりもB地区で厚く堆積する。II層は黒褐色砂質シルトで、A・B地区共に部分的に確認されるのみで、層厚も最大で0.1m程度となる。III層は灰オリーブ色～灰黄色の粘土で、その上面で遺構を検出した。IV・V層は地山以下の基本層となる。IV層は黒褐色（IVa）、暗灰黄色（IVb）、黒褐色（IVc）の粘土質シルトが層状に堆積し、その下にV層の灰色細砂を確認した。

遺構検出面のIII層は調査区域の中央部となるA地区中央～西側およびB地区の東側で標高8.2～8.3mを測り、そこから東と西へ向かって緩やかに低く傾斜していく。



第108図 新堀西遺跡 基本層序

3 遺構

(1) 窪穴建物・平地式建物

1号建物 (S I 1, 第122図, 図版67)

A地区西部に位置する。北西隅が調査区外となるが、ほぼ円形に巡るSD6が検出された。SD6により囲繞された内側にP1~4が確認され、方形プランを呈する配置であることから、上部構造を形成する柱穴の可能性が考えられる。平地式建物あるいは、削平された窪穴建物と考えられる。周溝となるSD6はSD1を切って構築されている。

2号建物 (S I 2, 第122図, 図版67)

A地区西部に位置し、SI1の東側に隣接する。北西隅が調査区外となるが、環状にSD7周溝が巡ると考えられ、それに囲繞された内側にはP1~5が確認された。P2・4が中軸線上にあり、P1・3が西側に偏った位置にある。P1~4は台形状のプランを呈する位置関係があり、柱穴の可能性もある。SI1と同様に、平地式建物あるいは、窪穴建物と考えられる。P5は埋土が異なっており、関連の無い遺構かもしれない。SD7はSD2を切って構築されている。

3号建物 (S I 3, 第115図, 図版67・68)

A地区中央部の南東寄りに位置する窪穴建物である。4.82×3.94mの長方形を呈し、床面までの深さは0.2mを測る。床面上でP1~13、壁周溝が検出された。P1~4が主柱穴と思われるが、深さは0.1m程と浅い。窪穴西壁際から窪穴中央にかけて炭化物が広がる。窪穴北壁にP5、東壁際にはP6の比較的大型な屋内土坑がある。P6は深さ0.30mと掘り込みは明瞭で、貯藏穴の可能性もある。床面は貼床がなされ、窪穴の掘方では、深さ0.35mで全体的に掘削がなされている。

4号建物 (S I 4, 第115図, 図版67・68)

A地区中央部の南西寄りに位置する窪穴建物である。南側は調査区外、西側は後世の削平を受けていたため全形は明らかでない。窪穴東壁際の床面上でP1・2を検出したが、位置からみて柱穴とはならないであろう。P1とP2の間には炭化物が床面上に広がる。

5号建物 (S I 5, 第115図, 図版67・68)

A地区中央部に位置する窪穴建物である。4.40×4.20mの長方形を呈し、床面までの深さは0.24mを測る。床面上でP1~6が検出された。それらの配置は不規則で、主柱穴は明らかでない。P2・5が窪穴中軸線上に近く、2本柱であった可能性もある。P6は他に比べ規模も大きく、深さも0.23mあり、貯藏穴と思われる。また、P1とP5の間には炭化物が床面上に広がる。床面は貼床がなされ、窪穴の掘方としては、深さ0.40mまでの掘削が全体的になされている。

6号建物 (S I 6, 第116図, 図版67・68)

A地区中央部の北東寄りに位置する窪穴建物である。北西隅が調査区外となるが、ほぼ全形が分かる。5.94×5.92mの方形を呈し、床面までの深さは0.3mを測る。床面上ではP1~6・K1・壁周溝が検出された。P1~4が主柱穴と思われるが、P2のみ掘り込みが浅く、貼床除去後に確認されたP7が柱穴であった可能性もある。また、P3には土層断面に黒褐色粘土質シルトの柱根が認められた。床面中央のK1は地床炉で、埋土上面が焼土化している。その東に隣接するP6でも埋土に炭化物の混入があり、地床炉、あるいはそれに関連していた可能性がある。壁周溝は北西側の壁際を除いた範囲で確認された。床面は貼床がなされ、窪穴の掘方としては、深さ0.4mまで掘削される。掘方底面には窪穴北西を除き、幅0.5m、深さ0.16mの溝が掘り込まれている。溝は北東から南東にかけ

ては壁際、南西側は壁より0.9m内側に位置している。その他に、掘方底面には径0.3m、深さ0.2m程度の円形の掘り込みが複数削かれている。

7号建物（S I 7、第117図、図版67・68）

A地区中央部の北東寄りに位置する竪穴建物である。西側はS I 6に切られているが、ほぼ全形が分かれる。6.46×5.30m以上の規模で、方形を呈していたと思われる。床面までの深さは0.3mを測る。床面上ではP 1～5・K 1・壁周溝が検出された。P 1～4が主柱穴と思われる。K 1は地床炉で、床面中央に位置する。壁周溝は竪穴北東壁から南隅付近に認められる。床面は貼床がなされ、竪穴の掘方としては、深さ0.43mまで掘削がなされている。掘方底面には東側にコの字状の溝がある他、北隅にP 6、南東壁中央付近にP 7が確認された。

8号建物（S I 8、第118図、図版67・69）

A地区中央部の北西寄りに位置する竪穴建物である。北西側は調査区外となり、全形は不明である。5.84×4.46m以上の規模で、方形を呈していたと思われる。床面までの深さは0.05mと浅く、削平を受けたものと考えられる。床面上ではP 1～6・壁周溝が検出された。P 1・4・5は掘り込みが深く、柱穴にもなり得るが、配置は不規則で主柱穴は判然としない。貼床除去後に確認されたP 7が、床面上で確認し得なかつた柱穴とすれば、P 4と調査区外の柱穴とともに主柱穴となるかもしれない。壁周溝は竪穴東壁際に認められる。床面は貼床がなされ、竪穴の掘方としては、深さ0.3mまでの掘削がなされている。掘方底面には直径0.2～0.3mで円形のP 7～11、楕円形のP 12・13、大型のP 14が確認された。P 14はS I 8よりも古い別遺構の可能性もある。

9号建物（S I 9、第119図、図版67・69）

A地区中央部の北西寄りに位置する竪穴建物である。北側は調査区外、南西隅は攪乱に壊されており、全形は不明である。床面までの深さは0.12mと浅く、削平を受けたものと考えられる。床面上ではP 1～13・壁周溝が検出された。P 1～3は比較的の掘り込みが深く、いずれかは主柱穴であったと思われる。壁周溝は南壁際から南東隅にかけて認められる。南壁際では2重になっており、建物の拡張をした可能性もある。床面は貼床がなされ、竪穴の掘方としては、深さ0.30mまでの掘削がなされている。

10号建物（S I 10、第122図）

A地区西部に位置し、S I 1の南側に隣接する。SD 1と重複しており、検出段階では確認できなかった。SD 1を掘削中、土層断面にてSD 1埋土とは異なる黒褐色粘土が認められ、隣接するS I 1・2の状況も踏まえ、それらと同様な遺構と考えた。こうした確認状況であったため、平面形や断面は明らかではない。規模は4.60×4.22m程で、不整な円形を呈していたと思われる。

11号建物（S I 11、第119図、図版69）

A地区東部の北側に位置する竪穴建物である。北隅が調査区外となるが、ほぼ全形が分かれる。4.74×3.72mの長方形を呈し、床面までは0.22mを測る。床面上でP 1～7が検出された。P 1・2・4・5が主柱穴と思われるが、竪穴の南西側に偏る。床面は貼床がなされ、竪穴の掘方としては、深さ0.40mまで掘削がされる。掘方底面には壁周溝状の溝が認められる。溝は幅0.2m、深さ0.16mほどで、壁から0.2m内側に位置している。

12号建物（S I 12、第119図、図版69）

A地区東部の北側に位置する竪穴建物である。北側が調査区外となり、全形は不明である。3.40×2.75m以上となり、S I 3・11と同等の規模になると思われる。床面までの深さは0.10mと浅く、削

平を受けたものと考えられる。床面上でP 1～3を検出するが、柱穴となるかは不明である。床面は貼床がなされ、竪穴の掘方としては、深さ0.15mまで掘削される。掘方底面はほぼ平坦であるが、南西隅に深さ0.22mの掘り込みが認められる。

13号建物（S I 13、第120・121図、図版67・69）

A地区中央部の南側に位置する平地式建物である。柱穴はP 1～5・7・8があり、その配置から八角形に配置された8本柱と考えられる。柱穴により区画される範囲は6.30×5.80mを測る。その他に、P 6・9～14などが確認される。この中には柱穴状の断面を呈するものもあり、別の建物を構成していた可能性もある。柱穴の西から北側には周溝となるSD 10が掘削される。その北側は2重になっているが、土層からは前後関係は把握できず、併存していた可能性が高い。また、西端付近の内側にはSD 11が位置しており、北側と同様に2重の溝を配置していた可能性もある。SD 10の全形は不明であるが、南～南東側は開口していたとみられる。溝が周囲を巡っていた場合、10.90×8.00m程の範囲を囲繞する。今回、S I 13の柱穴は、位置関係で間隔が一定となる配置を重視したため、深さは一様ではない。そのため、一部には柱穴としてはやや浅いものもあり、再考の余地があるものの、周溝により画された内側に柱穴状の土坑が集中しているため、建物跡と考えた。一見、「周溝を持つ建物」であるが、従来の研究（岡本2003）による柱穴周溝比を参考とすれば、SD 13は壁周溝となり、平地式建物に該当することとなる。

（2）布掘建物

1号布掘建物（S B 1、第123図、図版68）

A地区中央部の南側に位置する布掘建物である。SD 8・9が約4mの間隔で平行し、それぞれの両端にP 1～4の柱穴が位置する。SD 8は長さ5.20m、幅0.42mを測る。西端にP 1、東端にP 3が位置する。底面は西側のP 1近い部分では浅く、それより東側は緩やかにP 3の方向へ傾斜している。SD 9は長さ4.82m、幅0.34mを測る。西端にP 2、東端にP 4が位置する。底面は平坦でなく、特に西側に凹凸がある。

（3）土坑

1号土坑（SK 1、第124図）

A地区中央部の南側に位置し、SD 8・10を切る。高杯（162）を含む土器の廃棄がある。

2号土坑（SK 2、第124図、図版72）

A地区中央部に位置し、S I 4の北側に隣接する。埋土の上下層境界付近から土器が出土した。高杯（170～172）・器台（173）・甕（174～176）・壺（177）等があるが、いずれも遺存度は低い。

3号土坑（SK 3、第124図、図版72）

A地区中央部に位置し、S I 8の南側に隣接する。埋土の上層から甕（179）が出土した。

4・5号土坑（SK 4・5、第124図）

A地区中央部に位置する。SK 4はSK 5に切られる。また、両者とも布掘建物SB 1のSD 9を切る。SK 4からは高杯（163）、SK 5からは小型器台（164）の出土がある。

6・7号土坑（SK 6・7、第124図、図版72）

A地区中央部に位置する。SK 6の埋土下層に炭化物や土器の混入が多く、甕（180・181）・壺（182）・鉢（183）がある。181はSK 7と接合関係があるが、破片は主にSK 6の出土である。

8号土坑（SK 8、第124図）

A地区中央部に位置する楕円形の土坑である。SD 10を切る。

9号土坑（SK9、第124図）

A地区東部に位置し、SD5の西肩部に隣接する。甕（165・166）・器台（167）が出土する。

10・11号土坑（SK10・11、第124図）

A地区東部に位置し、SD5の西肩部に隣接する。SK10がSK11を切る。共にSD5の埋土上層を除去した段階で検出される。

12号土坑（SK12、第125図）

A地区中央部に位置し、SI9の南側に隣接する。甕（184）が出土する。

13号土坑（SK13、第125図）

A地区中央部に位置し、SI6の南側に隣接する。甕（185）が出土する。

14号土坑（SK14、第125図）

A地区中央部に位置し、SI6の南西側に隣接する。甕（186）が出土する。

15号土坑（SK15、第125図、図版72）

A地区中央部に位置し、SI6の西側に隣接する。埋土下層から土器が集中して出土し、甕（187）・壺（188・189）・高杯（190・191）がある。

16号土坑（SK16、第125図）

A地区中央部に位置する。SI5の南西側に重複し、これを切る。埋土の上層から口縁部を欠いた壺（192）が出土する。

17号土坑（SK17、第125図、図版72）

A地区中央部に位置し、SI8の東側に隣接する。全形は不明であるが、不整形で比較的大型の土坑となる。埋土下層から土器が集中して出土し、甕（193・194）・壺（195）・鉢（196）がある。

18号土坑（SK18、第125図）

A地区東部に位置し、SI7の東側に隣接する。甕（197～199）・小型甕（200）が出土する。

19号土坑（SK19、第125図）

A地区西部に位置し、近世以降の攪乱に上部を壊されているが、埋土中からの遺物の出土が多い。甕（201～203）・壺（204・205）・高杯（206）の出土がある。

20号土坑（SK20、第125図）

A地区東部に位置する。SI12の南東側に重複し、これを切る。鉢（207）が出土する。

21号土坑（SK21、第126図）

A地区中央部の北側に位置する。SI9の北東側に重複し、これを切る。全形は不明であるが、楕円形基調の比較的大型の土坑となる。埋土中層に土器片の混入が多く、甕（208）の出土がある。

22号土坑（SK22、第126図）

A地区中央部に位置し、SI7の南側に隣接する。天王山系の甕（209）の出土がある。

23号土坑（SK23、第126図）

A地区東部に位置し、SI7・11と重複する。SI11を切り、SI7に切られることから、SI11→SK23→SI7の順で構築されたことが分かる。高杯と思われる脚部（210）が出土する。

24・25号土坑（SK24・25、第126図、図版72）

A地区中央部に位置し、SK24がSK25を切る。それぞれ、埋土中に土器片が多く含まれる。SK24からは甕（211～213）・高杯（214・215）・蓋（216）・器台（217）が出土する。SK25には甕（218～220）・壺（221）・ミニチュア（222・223）がある。

26号土坑（SK26、第127図）

A地区南東端に位置する。調査区外へ続くため全形は不明であるが、不整形を呈すると思われる。

27号土坑（SK27、第127図）

A地区南東端に位置し、SK26の西側に隣接する。全形は不明であるが、不整形を呈すると思われる。器台（224）が出土する。

28号土坑（SK28、第127図）

A地区東端に位置し、不整形で比較的大型の土坑と思われる。中世土師器（477）が出土する。

29号土坑（SK29、第127図）

B地区西部に位置する。埋土中に弥生土器の破片が含まれる。

30号土坑（SK30、第127図）

B地区西部に位置する。埋土中から高杯（226）が出土する。

31号土坑（SK31、第127図）

B地区中央部に位置する。埋土中に弥生土器の破片が含まれる。

32号土坑（SK32、第127図、図版72）

B地区東部に位置する。埋土上部から甕（225）が出土した。225は下半を欠くが、上半の遺存度は高く、意図的な埋設と考えられる。

（4）溝

1号溝（SD1、第128図）

A地区西部に位置する。調査区の南西隅から北西方向へ蛇行しつつ調査区を抜けていく自然流路である。深さは0.14mと浅いが、削平を受けており本来の深さは不明である。甕（227～229）・高杯（230）の他、天王山系土器（231・232）の出土がある。

2・3号溝（SD2・3、第128図、図版70・71）

A地区西部に位置する。調査区を南東から北西へ貫く。SD2の東側には4.0～4.5mの間隔を開けてSD3が並行する。共に溝の最下層に褐色粘土が堆積した後に、炭化物や植物遺体を含む黒色粘土の堆積があり、埋没過程も同様となる。この黒色粘土層に遺物の出土も集中する。SD2からは甕（236）・器台（237～239）・高杯（240～242）・有孔鉢（243）の他、天王山系土器の破片（244）が出土する。SD3では溝の北側に遺物の出土が集中する。甕（245～255）・小型甕（256）・台付甕（257）・壺（258～265・267）・小型壺（266）・台付壺（268・269）・器台（270～273）・高杯（275）・蓋（278・279）などの他、天王山系土器（281～283）の出土がある。SD2・3は配置関係や埋土形成過程の共通性から同時併存していたと考えられる。

4号溝（SD4、第128図）

A地区西部に位置する。SD3の東肩付近に重複し、これを切る。

5号溝（SD5、第130図、図版70・71）

A地区東部に位置し、調査区を南西から北東へ貫く自然流路である。幅は4.5～9.4m、深さは1.60mを測る。埋土は黒褐色や黒色の粘土・粘質土でほとんどが埋没するが、最下層は黄灰色の砂質シルト・細砂が堆積し、土器の出土が集中する。出土土器（286～398）は多く、器種も多岐にわたるが、ほとんどは破損した低い遺存度の出土で、一括廃棄のような土器集中は認められなかった。SD5の東肩には幅2m程の深い溝が並行する。遺物の出土は皆無だが、埋土に大差はないことから、同時併存し、SD5に沿って設けた人為的な溝と考えられる。また、南側の底面ではSX1が確認された。

6号溝（S D 6, 第122図）

A地区西部のS I 1周溝となる環状の溝である。弥生土器の小片のみが出土する。

7号溝（S D 7, 第122図）

A地区西部のS I 2周溝となる環状の溝である。弥生土器の小片のみが出土する。

8・9号溝（S D 8・9, 第123図）

A地区中央部に位置するS B 1の布掘溝である。甕（157～160）・蓋（161）が出土する。

10号溝（S D 10, 第120・121図, 図版69）

A地区中央部の南側に位置し、するS I 13に伴う溝である。全形は不明だが、少なくともS I 13の北側から南西側に沿って掘削される。北側は部分的に2重となるが、土層や遺物の出土状況から併存していた可能性が高い。遺物の出土は北側に集中し、埋土の中へ上位に分布する。出土土器には甕（399～409）・小型甕（410）・蓋（411～424）・台付壺（425～427）・器台（428～435）・高杯（436～440）・鉢（442）・有孔鉢（443）・蓋（444）の他、線刻のある土器片（445）などがある。

11号溝（S D 11, 第120図）

A地区中央部の南側に位置し、S D 10南西隅の内側に隣接する溝である。SK 4と重複するが前後関係は不明である。位置的にS D 10とともにS I 13に関連する可能性もある。

12号溝（S D 12, 第112図）

A地区東部に位置する溝で、S I 11を切り、S I 12に切られる。S D 12の存在によりS I 11→S D 12→S I 12の構築順が分かる。甕（446～448）・器台（449・450）が出土する。

13号溝（S D 13, 第129図）

A地区東部に位置し、S D 5の西肩に隣接する。東側が開口する弧状の形態を呈する二重の溝があり、開口部を塞ぐように短い溝が東側に位置する。甕（451～455）・小型器台（456）が出土する。

14号溝（S D 14, 第120図）

A地区中央部にあり、S I 13の範囲内に位置する溝である。SK 5・6に切られる。

15号溝（S D 15, 第131図）

B地区中央部に位置する自然流路で、調査区を南北に貫く。幅は最大で22m、深さは1.2mを測る。縄文土器・弥生土器・土師器片がわずかに出土し、高杯（457）や天王山系土器（458）がある。

16号溝（S D 16, 第131図, 図版71）

B地区西部に位置する溝で、調査区を南北に貫く。弥生土器・土師器の出土がわずかにある。S D 16の西側は、調査区の北側を流れる新堀川の旧流路が埋め立てられている。S D 16以西は近代以前まで流路であり、周辺の地形も西側へ低くなることから、土地利用の範囲外であったと考えられる。

17号溝（S D 17, 第131図, 図版71）

B地区西部に位置する溝である。南東側が開口した環状を呈し、北西側から2条の溝が分岐する。S I 1・2と同様な建物の周溝である可能性もある。甕（459・460）・高杯（461）・台付壺（463）・天王山系土器（464）の出土がある。

18号溝（S D 18, 第131図）

B地区西部に位置する溝で、甕（465）が出土する。

(5) 不明遺構

1号不明遺構（S X 1, 第130図, 図版71）

A地区東部のS D 5底面で確認された。流路に対して直行方向に杭が0.2～0.5mの間隔で打設され、

その杭列南側で板材が方形の枠状を呈する。明確な構造は不明であるが、S D 5 西側からの利用を目的とした施設で、流路内に設置された枠状の構造物だとすれば、水溜のような集水施設であった可能性がある。板材付近から甕（466・467）・小型器台（468）・高杯（469）が出土する。

4 遺 物

（1）縄文土器（第 132 図）

縄文土器は土坑・溝・包含層から出土するが、遺構出土では後世の遺物を伴うため、混入したものと判断した。遺構は無いが、一定量の土器が出土することから、周辺での活動を示している。

1～3・12は深鉢である。1・3は波状口縁を呈し、2・12も同様な器形の破片と考えられる。口縁部や胴部の屈曲部に横位の沈線文が巡り、これを区切る縱短線文・X字文が認められる。4は鉢と思われ、口縁部に横位の沈線文を施す。5・6は胴部から口縁部にかけて内傾して立ち上がる深鉢である。口縁部は5では外面、6では内外面に弱く肥厚し、無文の口縁帯が巡る。7は浅鉢であるが、器面の摩滅が顕著で、文様構成は不明である。8は波状口縁を呈し、内面には2状の沈線、外面には縄文が施され、頂部内外面に刺突が入る。9・10・15は深鉢底部で、網代圧痕が認められる。11は鉢と思われ、口縁部は弱い波状を呈する。口縁部は外面へやや肥厚し、口縁帯が巡る。口縁帯と胴部下半には縄文を施す。113は浅鉢で、外面に横位の沈線文と稍円区画文を施す。14は浅鉢と思われ、有段状となる口縁部の下端には横位の沈線文、口縁部には格子状の文様を施す。16は粗製の深鉢で、外面は斜位の縄文が施されるが、器面の摩滅により不明瞭。8は境A遺跡（富山県教育委員会 1991）や本江遺跡（小島 1979）において、加曾利B式期併行となる後期中葉の土器群に類例がある。1～3・12は後期終末の八日市新保式に比定され、これらはA地区東部に位置するSK26・27やSD5に偏在して混入しており、同遺構出土の4～6・11・14も同様な時期を考えておく。7・13は晩期に下ると思われるが、小片であることや、摩滅により文様構成が不明瞭であり、判然としない。以上の様に、概ね後期終末を中心とし、一部に後期中葉・晩期の土器が認められる。

（2）弥生時代後期～古墳時代前期の土器

A 器種分類（第 109～111 図）

弥生時代後期～古墳時代前期の土器については、以下の様に器種を分類し、記述する。器種分類は基本的に下老子笠川遺跡での分類（岡本 2006）に従っている。土器の部分名称・部分形態等についても同様としており、詳しくはそちらを参照されたい。ただし、甕の胴部文様や器台・高杯の脚部による細分は、不明である個体も多くここでは省略した。以下、各器種と新たに設定した器種について示しておく。

甕は擬四線甕・有段甕・ハケメ有段甕・受口甕・刺突受口甕・平縁甕・丸縁甕・付加状甕・有稜甕・布留系甕・台付甕がある。この内、有稜甕は有段口縁の下端に稜を有し、山陰系の影響を受けたと思われる甕である。また、布留系甕は口縁部が内湾して立ち上がり、口縁端部に肥厚するなど、畿内の布留式土器の影響を受けたと思われる甕である。台付甕は全形が不明であるが、台付甕の脚台部と思われ、被熱痕があることを目安とした。

小型甕は器高が 14cm 未満の甕で、口縁の特徴により擬四線・有段・ハケメ有段・平縁がある。

壺は長頸壺・有段長頸壺・擬四線壺・短頸壺・細頸壺・有段短頸壺・無頸壺・有段壺・広口壺・外反壺・付加状壺・裝飾壺・小型丸底壺がある。この内、小型丸底壺は頸部で括れ、大きく開く口縁部

を有する小型の壺である。

台付壺：脚台の付く壺で、口縁形態により有段台付壺・無頸台付壺がある。

器台は有段器台・擬回線器台・外反器台・装飾器台がある。装飾器台は身部に涙滴形透孔を有する器台で、各部名称は楠正勝氏によるもの（楠 2003）に従う。この省略形との指摘（田嶋 1986）がある受部に円形透孔が施される器台も、装飾器台に含めておく。

高杯は有段高杯・有段鉢形高杯・鉢形高杯・杯形高杯・開脚高杯がある。有段高杯には口縁端部が外側へ伸びるものがあり、拡張有段高杯とする。鉢形高杯には杯部の底部と口縁部との境で屈曲し稜をなすものと、丸みを帯びて内湾しつつ立ち上がるものがある。杯形高杯は杯部が浅い杯状を呈する。

鉢は有段鉢・付加状鉢・無頸鉢・小型鉢・大型鉢・有孔鉢がある。有段鉢には有段口縁に外反・内傾が認められる。小型鉢は浅い杯状を呈する。大型鉢は口径 25cm 以上とし、把手の付くものもある。

蓋は有紐蓋で、内面に返しのあるものは、返し付蓋とする。

ミニチュアは手捏ね成形によるが、丁寧な調整を施したものもある。甕・壺・鉢などを模したと考えられる。

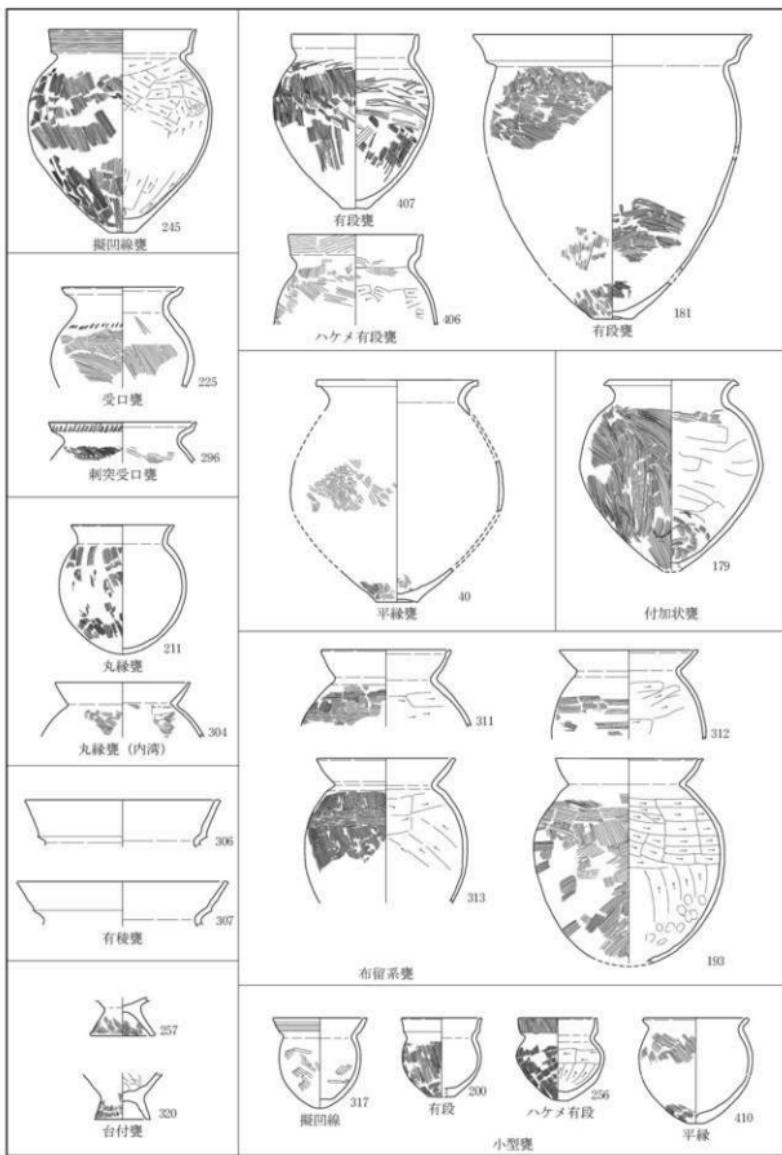
B 積穴建物・布掘建物（第 133～136 図）

S I 3 からは 17～33 の出土がある。17～23 は甕である。17 は擬回線甕で端部は尖り気味となる。18 は有段甕、19～22 は平縁甕であるが形態がそれぞれ異なる。19 は外反し口縁端部を上方へ摘み上げる。20 はくの字に外傾し、端部が面をなす。21 は口縁端部が強く外屈し、端部は面をなす。22 は口縁端部が内傾するように面取りがなされ、尖頭状の形態を呈する。23 は丸縁甕で、くの字状に屈曲する。24 は細頸甕もしくは台付壺の口縁部と思われる。25 は有段壺で、口縁部に \cap 形の線刻が少なくとも 2箇所に施される。26 は台付壺の胴部で、突帶が巡る。27 は器台もしくは壺の口縁部と思われ、竹管による円形刺突文の後、円形浮文を貼り付ける。28・29 は器台、30・31 は高杯の脚部で、28・30 には円形の透孔がある。32 は鉢、33 は蓋である。

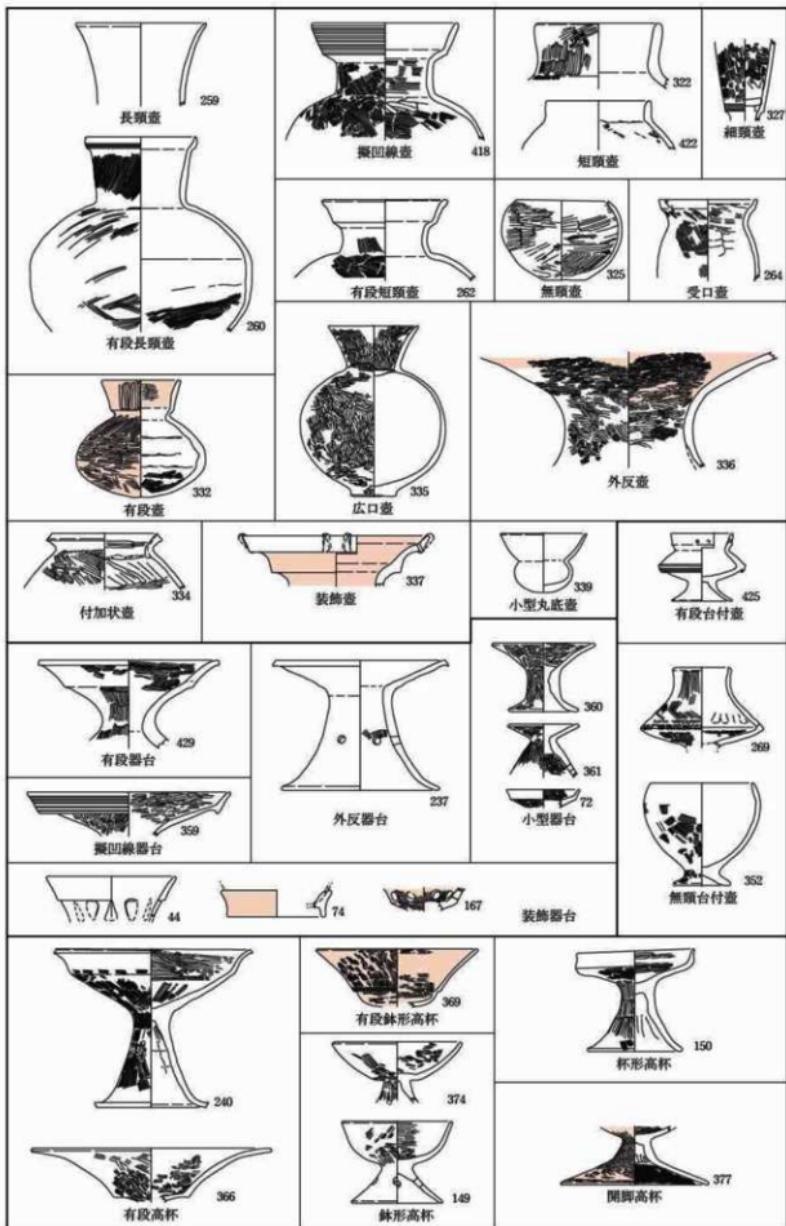
S I 4 からは 34 の台付壺、35 の脚部が出土する。34 は胴部の突帶に擬回線が巡る。35 は台付鉢の脚部と思われる。

S I 5 からは 36～49 の出土がある。36～41 は甕である。36～38 は擬回線甕で、端部は丸みを持つ。39・40 は平縁甕である。39 は短く外反し、40 は口縁端部を上下から摘むようにしてナデを施すことにより端面がやや拡張気味に仕上がる。41 は天王山系の甕で、外面に網文と横位の沈線文を施す。42 は有段壺である。43 は外反器台である。44 は装飾器台で、涙滴形の透孔が上下を交互にしながら配置される。45 は器台の有段脚。46 は高杯で盤状の形態になると思われる。47 は高杯の外反脚で、2 孔 1 組の穿孔が 2 箇所穿たれる。48 は有段鉢、49 は蓋である。

S I 6 からは 50～82 の出土がある。50～59 は甕である。50～52 は擬回線甕である。50・52 は端部に丸みを帯び、50 の内面はミガキが施される。51 は口縁部に厚みがあるが、端部は尖る。53・54 は有段甕で、53 には内外面にハケメの痕跡が目立つ。55 は刺突受口甕、56 は受口甕である。57 は平縁甕で、短い口縁部がわずかに外傾する。58 は付加状甕で、口縁端部は外方へ拡張気味となる。59 は布留系甕で口縁部の端面は内傾する。60 は有段小型甕である。61・62 は壺で、61 は有段壺、62 は口縁部破片であるが山形もしくは波状の線刻が認められる。63～68 は台付壺胴部と思われる。63～66 では擬回線、68 では刻目が胴部の突帶に施される。69・70 は外反器台と思われる。71～73 は小型器台で、72 は口縁端部が屈曲し短く立ち上がる。74 は装飾器台と思われる。75・76 は有段高杯の杯部である。77・78 は高杯の脚部で、77 はハの字状に開く。78 は杯部下半の形状から有段鉢形高杯の



第109図 新堀西遺跡 壺の分類図 (1/6)



第110図 新堀西遺跡 壺・台付壺・器台・高杯の分類図 (1/6)

可能性がある。79・80は鉢形高杯の杯部と思われる。81は有段鉢、82は返し付蓋である。

S I 7からは83~112の出土がある。83~92は甕である。83~87是有段甕で、87は口縁の有段部がわずかに内湾する。88~90は平縁甕で、88・89は端面が拡張気味となる。91・92は丸縁甕で、91は外反、92は外傾して口縁部が立ち上がる。93~96は甕である。93は有段甕で、有段部の外面に横位の櫛描直線文と2条の沈線を施す。94は短頸甕である。95は台付甕の可能性もある。96は刺突受口甕である。97は台付甕で胴部に突帯が巡る。98は擬回線器台、99は装飾器台である。99の透孔は同一方向となる涙滴形の透孔、あるいは円孔の可能性がある。100は小型の鉢形高杯、もしくは小型器台と思われる。101・102は高杯の杯部、103・104は脚部であるが器形は明確でない。105~110は鉢で109が無頭鉢、他は有段鉢となる。110の有段は短く、直立する。111・112は蓋である。

S I 8からは113~120が出土する。113~115は甕である。113は布留系甕で、口縁端部内面の肥厚は弱く、端面はやや内傾気味となる。114は平縁甕、115は付加状甕となる。116・117是有段甕である。116の外面には平行する2本の線刻を施す。118是有段器台と思われる。119は蓋で、口縁端部に刻目を巡らせる。120は天王山系土器の胴部破片で、縄文を施文後に沈線文を施す。

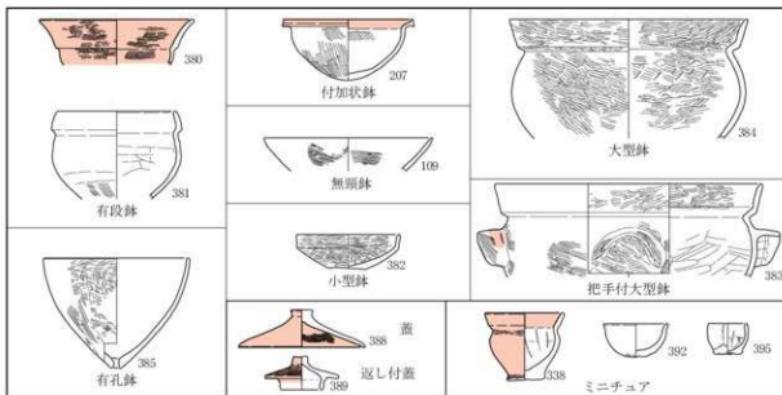
S I 9からは121~131が出土した。121・122是有段甕で、122是有段部が内湾して立ち上がる。123は刺突受口甕、124は平縁甕である。125~128は甕である。125・127は長頸甕かと思われる。126是有段甕、128は広口甕である。128はくの字状口縁となる甕のような器形だが、頸部の括れやミガキから甕と判断した。129は小型の高杯か。130は外反器台、131は蓋となる。

S I 10からは132の台付甕が出土した。132の胴部突帯には擬回線が施される。

S I 11からは133~141が出土する。133~136は甕で、133是有段甕、134・135は刺突受口甕となり、136の付加状甕には端面に刻目が施される。137是有段甕、138是有段短頸甕である。139・140は有段器台、141是有段高杯で口縁部が長く伸びる。

S I 12からは142~155が出土する。142~145は甕で、142・143は平縁甕、144は丸縁甕、145は受口甕となる。146は台付甕の脚部と思われる。147は短頸甕である。148は台付甕の可能性がある。149は鉢形高杯、150は杯形高杯である。151・152はミニチュアで、鉢を模したものか。153~155は蓋で、154は返し付、155はつまみに刻目を施す。

S I 13のP 14からは刺突受口甕の156が出土する。



第111図 新堀西遺跡 鉢・蓋・ミニチュアの分類図 (1/6)

S B 1 の布掘り溝となる S D 8 からは 157~160, S D 9 からは 161 が出土する。157 は擬凹線甕, 158~160 は有段甕で, 160 は有段部が内傾して立ち上がる。161 は蓋である。

C 土 坑 (第 136~139 図)

S K 1 からは 162 の有段高杯が出土する。口縁端部を欠くが、口縁部は長く伸びる。

S K 2 からは 170~178 が出土する。170~172 は有段高杯で, 171 では口縁端部が強く外屈し拡張気味になる。173 は外反器台で、口縁端面には連続刺突が施される。174 は付加状甕で、肩部に連続刺突が巡る。175・176 は刺突口甕であるが、175 の口縁部は立ち上がりが長く、有段口縁状になる。177 は短頸甕と思われる。178 は焼成を受けた粘土塊である。

S K 3 からは 179 の付加状甕が出土する。

S K 4 からは 163 の有段高杯が出土する。外反する口縁部が伸長する。

S K 5 からは 164 が出土する。鉢状を呈するが、底部付近の屈曲具合から脚部がつく可能性がある。

S K 6 からは 180~183 が出土する。180・181 は大型の甕で, 180 はハケメ有段甕, 181 は有段甕となる。180 はおそらく胴部に最大径がある。181 は口径が胴部最大径を上回る。182 は有段壺, 183 は小型の無頸鉢である。なお、181 は S K 7 との接合関係を持つが、ほとんどが S K 6 の出土である。

S K 9 からは 165~167 が出土する。165 は有稜甕である。166 は小型甕と思われるが、胴部に膨らみではなく鉢状の器形を呈する可能性もある。167 は装飾器台で円形透孔を施す。

S K 10 からは 168・169 が出土する。168 は有稜甕で、口縁端面は水平で内側に短く摘み出される。169 の小型器台は、口縁端部が上方へ屈曲し短く立ち上がる。

S K 12 からは 184 の有段甕が出土する。有段部は短く、受口状に近い器形となる。

S K 13 からは 185 の平縁甕が出土する。外反する口縁部には厚みがある。

S K 14 からは 186 の刺突口甕が出土する。肩部外面にも連続刺突を施す。

S K 15 からは 187~191 が出土する。187 は平縁甕である。188 は刺突口壺で、肩部には横位の直線文があり、その下に連続刺突が巡る。189 は細頸甕と思われる。190・191 は有段高杯である。

S K 16 からは 192 の壺が出土する。口縁部を欠くが、胴部はほぼ遺存する。

S K 17 からは 193~196 が出土する。193・194 は布留系甕であるが、口縁端部内面の肥厚は弱く、端部は外方へ引き出される。195 は線刻のある壺である。頸部に縦位の線刻が 6 本なされるが、不規則な配置である。196 は鉢の底部外面に X 状の線刻が施される。

S K 18 からは 197~200 が出土する。197 は擬凹線甕で、口縁部内面に指オサエの痕が残る。198・199 は有段甕、200 は有段小型甕である。

S K 19 からは 201~206 が出土する。201 は有段甕で、比較的大型の個体となる。202 は平縁甕、203 は丸縁甕である。204 は壺で、有段の口縁部下端には刻目、頸部には円孔を穿つが数は不明である。205 は有段壺、206 は鉢形高杯である。

S K 20 からは 207 の付加状鉢が出土する。口縁端部は上下に拡張し、口縁部内外に赤彩を施す。

S K 21 からは 208 の平縁甕が出土する。

S K 22 からは 209 の天王山系の甕が出土する。口縁端部に小突起、口縁部外面に縄文を施す。

S K 23 からは 210 の高杯が出土する。外反脚で、円孔が 5 箇所穿孔される。

S K 24 からは 211~217 が出土する。211 は丸縁甕、212 は受口甕、213 は布留系甕である。214 は高杯と思われ、口縁部は伸長する。215 は小型器台の受部底面未穿孔とも考えられる。216 は蓋。

S K 25 からは 218~223 が出土する。218・219 は布留系甕で口縁部は内溝して立ち上がり、口縁端

部は218では外方へ引き出され、219では内側に肥厚する。220は有段壺である。221は壺の口縁部で、細頸壺もしくは台付壺と思われる。222は鉢、223は壺を模したと思われるミニチュアである。

S K27からは224の器台脚部、S K30からは226の有段高杯、S K32から225の胴部に連続刺突を施す受口壺が出土する。

D 溝 (第139~149図)

S D 1からは227~232が出土する。227は付加状壺、228は平縁壺、229は丸縁壺である。230は有段高杯である。231・232は天王山系の土器で、231は壺の口縁部と思われる。232は胴部破片で沈線文が施されるが、不明瞭である。

S D 2からは233~244が出土する。233は有段壺、234は付加状壺、235・236は平縁壺である。237は外反器台で、口縁端部は斜め下方に短く屈曲する。238・239は擬回線器台、240~242は有段高杯である。243は有孔鉢である。244は天王山系の土器で、縄文施文後に弧文・重菱形文を施す。

S D 3からは245~284が出土する。245~247は擬回線壺である。246は口縁部内面に指オサエ痕が残る。247は口縁部がやや内傾する。248~250は有段壺、251は付加状壺、252~254は受口壺、255は刺突受口壺である。254には口縁部下端に2箇所刻目があるが、破片であるため全体に施されていたかは不明である。255は肩部の連続刺突に沿って横位のハケメを施す。256はハケメ有段小型壺で、口縁部外面に縦位のハケメを施す。257は台付壺の脚部である。258・259・263は長頸壺、260・261は有段長頸壺、262は有段短頸壺、264は受口壺、265は短頸壺である。260は口縁部下端に2状の沈線が巡る。265は頸部に円孔があるが、箇所数は不明である。266は有段小型壺である。267は長頸壺と思われる壺の頸部に線刻を施す。V字状にも見えるが、その左下方にも横へ伸びる線刻があり、全体の構成は判然としない。268・269は無頸台付壺で、胴部下半の屈曲部に連続刺突を施し、269はその上に沿って波状文が巡る。270~273は器台である。270は口縁部で屈曲し、明瞭な段とはならないが有段器台としておく。271は外反器台の口縁部に棒状浮文を貼り付ける。274・277は高杯もしくは器台となる。275は有段高杯である。276は棒状脚から屈曲して開く形態の高杯脚部である。278・279は蓋である。280は壺の底部と思われ、底部に葉脈痕が残る。281~283は天王山系の土器である。281は壺の口縁部と思われ、指頭圧痕を連続させる。282・283は不明器種の口縁部に縄文・沈線文を施し、283では口縁部下端に交互刺突文が認められる。284は球形の土錐である。

S D 4からは鉢と思われる285が出土する。

S D 5からは286~398が出土する。286~289は擬回線壺である。286・287・289には口縁内面に指頭圧痕が残る。286は大型で、口縁部と頸部の内面にミガキが施される。290~294は有段壺である。292には口縁部内面に指頭圧痕が残る。293は頸部内面に横位のハケメを施した後、指頭によるナデで調整をした痕が残る。295~297は刺突受口壺で、肩部にも連続刺突が巡る。298~300・302・303・305は平縁壺である。305は口縁端部が拡張気味で、肩部に横位の沈線とその下に沿って連続刺突が施される。301・304は丸縁壺である。301の口縁端部に切り込みが認められる。304の口縁部は内湾気味に立ち上がる。306~308は有稜壺である。306・307は口縁端部が水平で、307は端部を内側に摘み出す。308は外傾が強く、端部に丸みを帯びる。309~316は布留系壺である。309~314は口縁端部が肥厚し、端面が水平となる310・312、端面が内傾する309・311・314、肥厚が弱く端面が外傾する313に分かれる。315・316は内湾して口縁部が立ち上がり、端部を外側へ摘み出す。317~319は小型壺で、317は擬回線、318は有段、319はハケメ有段の口縁部を呈する。320は台付壺の脚部である。321は有段短頸壺で、胴部内面にもミガキが施される。322・323は短頸壺で、厚みのある口縁

部が垂直に立ち上がる。324も短頸壺と思われ、322・323と同様に器面が厚い。325・326は無頸壺で、326は台付きとなる可能性もある。327は細頸壺で、口縁部は長く、その下端に沈線が巡る。328～332は有段壺である。331の内面には穿孔途中の孔が認められる。333は大型の有段短頸壺と思われ、頭部に刻目を施した突帯が巡る。334は付加状壺、335は広口壺である。336は大型の外反壺と思われる。内外面ともミガキを施し、口縁部側には赤彩が認められる。337は装飾壺で、口縁部に棒状浮文を貼り付け、その付近に円孔を穿つ。破片であるため、棒状浮文・穿孔の数は明かでない。338はミニチュアで、赤彩を施した丁寧な作りである。339は小型丸底壺で、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。340～351には線刻や文様が認められた。340は小型の壺で、頭部には横位の沈線が巡り、外面を斜格子状の線刻で充填する。341は有段短頸壺の口縁部に山形の線刻が連続する。342は壺の肩部に刺突文が施され、下段は綾杉状を呈する。343・344は壺の頭部に平行する直線文を施すが、本数は不明である。345は壺の胴部に弧状の線刻が施されるが、不明瞭である。346は壺の頭部に線刻が認められる。湾曲したT字状に配置される線刻は「鹿」(森2008)や「弧帶文」の影響(丸川他2011)の指摘がある。その他にもT字状文様の左には2本の平行する弧線、右下には円形の刺突を巻き込むような渦文、さらに右にはT字状と同様な文様の一部と思われるような曲線が認められる。この様に、曲線を多用し頭部全体に巡らせていた文様帶であった可能性もある。347～351は壺の底部と思われ、主に十字状の線刻がなされる。特に349は線刻の切り込みが深い。352～356は台付壺である。352は低脚の無頸台付壺で、356は長脚の無頸台付壺の可能性がある。353～355には胴部に突帯が巡り、353・354は擬凹線を施す。357・358は有段器台、359は擬凹線器台である。360～364は小型器台で、360は口径が大きく開く。361・362は小さい受部となり、363・364も同様の器形と思われる。365～368は有段高杯で、365～367は口縁部が伸長する。369～372は有段鉢形高杯で、369には口縁部下端に沈線が巡る。373～375は鉢形高杯で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。377は開脚高杯で、376も同様の脚部になると思われる。378は高杯の有段脚で、裾部上端に沈線が巡る。379は外反する口縁部の先端が有段状に屈曲し、器台もしくは高杯と思われる。380・381は有段鉢で、381は胴部から口縁部にかけて内湾する。382は小型鉢で器高は低く、杯状の器形を呈する。383・384は大型鉢である。383は把手付きで、把手付近のみ赤彩を施す。385～387は有孔鉢である。388は蓋、389～391は返し付蓋である。392～395はミニチュアで鉢状を呈する。396・397は天王山系の土器で、397は口縁部の下端に刺突文が施される。398は円盤状の土製品で、器面は平滑に仕上げられている。

S D10 からは399～445が出土した。399～403は擬凹線壺で、399～401には口縁部内面に指頭圧痕が残り、403には肩部に連続刺突が巡る。404・405・407是有段壺、406はハケメ有段壺である。408・409は丸縁甕で、口縁部内面にハケメが残る。410は平縁小型甕である。411～424は壺で、411～413が有段長頸壺、418が擬凹線壺、422・423が短頸壺となる他は有段壺となる。425～427は台付壺である。425は有段口縁の下端に2孔1組の穿孔が施され、山陰地方の台付装飾壺の影響を受けたものと考えられる。426は胴部の突帯に棒状浮文を貼り付ける。428は擬凹線器台、429～432是有段器台、433は外反器台、434・435は器台の脚部となる。436～438是有段高杯で、口縁部は伸長し、436は口縁端部が水平面を持ち拡張気味に仕上げられる。439・440是有段鉢形高杯で、439の口縁部は伸長する。441は高杯もしくは器台の脚部で、裾部は有段となり擬凹線が巡る。442は無頸鉢、443は有孔鉢、444は蓋である。445は線刻のある土器片で、長頸壺の頭部と思われる。線刻は「臼」との指摘もある(森2008)。

S D12 からは 446~450 が出土した。446 はハケメ有段甕、447 は有段甕、448 は受口甕である。449・450 は有段器台と思われる。

S D13 からは 451~456 が出土した。451 は丸縁甕、452 は付加状甕、453・454 は受口甕、455 は刺突受口甕である。456 は小型器台で、口縁部は有段状を呈する。

S D15 からは 457 の高杯、458 の天王山系土器が出土した。458 は壺と思われ、縄文を施文後、弧状の沈線文を連続して施す。

S D17 からは 459~464 が出土した。459 は付加状甕、460 は小型甕である。460 は口縁部が内湾気味に立ち、端面は内傾する。461 は有段高杯、462 は高杯もしくは器台の脚部である。463 は有段壺である。464 は天王山系土器の甕と思われ、口縁端部に小突起が付く。

S D18 からは 465 も刺突受口甕が出土した。465 は肩部にも連続刺突が巡る。

E 不明遺構・包含層（第 149 図）

S X1 からは 466 の平縁甕、467 の布留系甕、468 の小型器台、469 の有段高杯が出土した。

包含層出土には 470~476 がある。470・472 は有段壺で、470 は口縁部に線刻が認められ、472 は口縁部が垂下し内面の段も明瞭となる。471 は受口甕で、口縁部に竹管による刺突文が施される。473 は蓋、474~476 は天王山系土器である。

(3) 中世の土器（第 149 図）

S K28 からは 477 の中世土師器、包含層から 478 の中世土師器と 479 の珠洲擂鉢が出土した。

(4) 木製品（第 150 図）

出土した木製品は S D5 と S X1 から出土した杭・板材に限られ、容器や農耕具など他の種類は確認されなかった。S D5 には 482・483 の板材があり、端部に円孔が穿たれる。S X1 には 480・481 はある。480 は先端部を尖らせた杭で、反対側は炭化している。481 は板材で側縁の一部に縄が巻き付いたような擦痕が認められる。これらを含め、S D5 と S X1 出土の材の内 8 点を樹種同定した結果、すべてスギを用いていた。

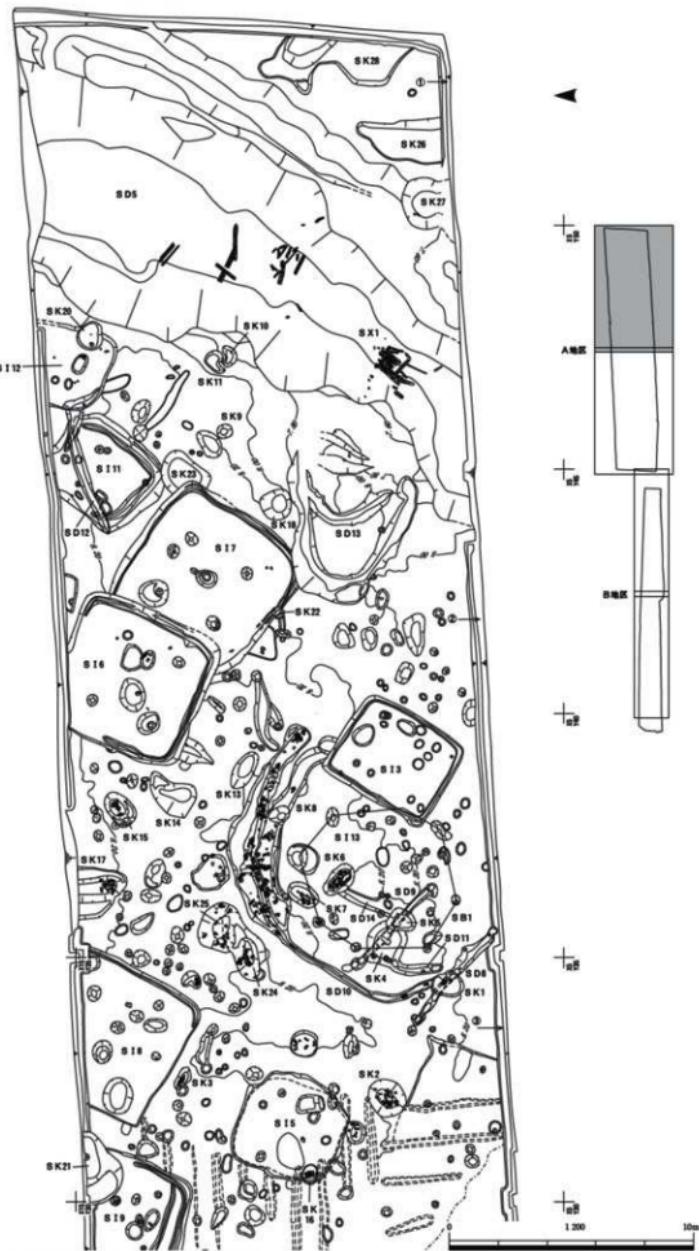
(5) 石製品（第 151 図）

砥石には 484~488 がある。487 は流紋岩製で常願寺川流域の石材ではないが、他は在地の石材を用いていることが石材鑑定から判明した。489 は両端を欠いているが、形態から磨製石剣の破片を考えられる。490 は側縁を除く平坦な面に弱い擦痕が認められる磨石である。491 は楕円礫の端部に敲打痕が認められる敲石である。492 は短冊形の打製石斧である。493 は環状石斧の破片と思われる。

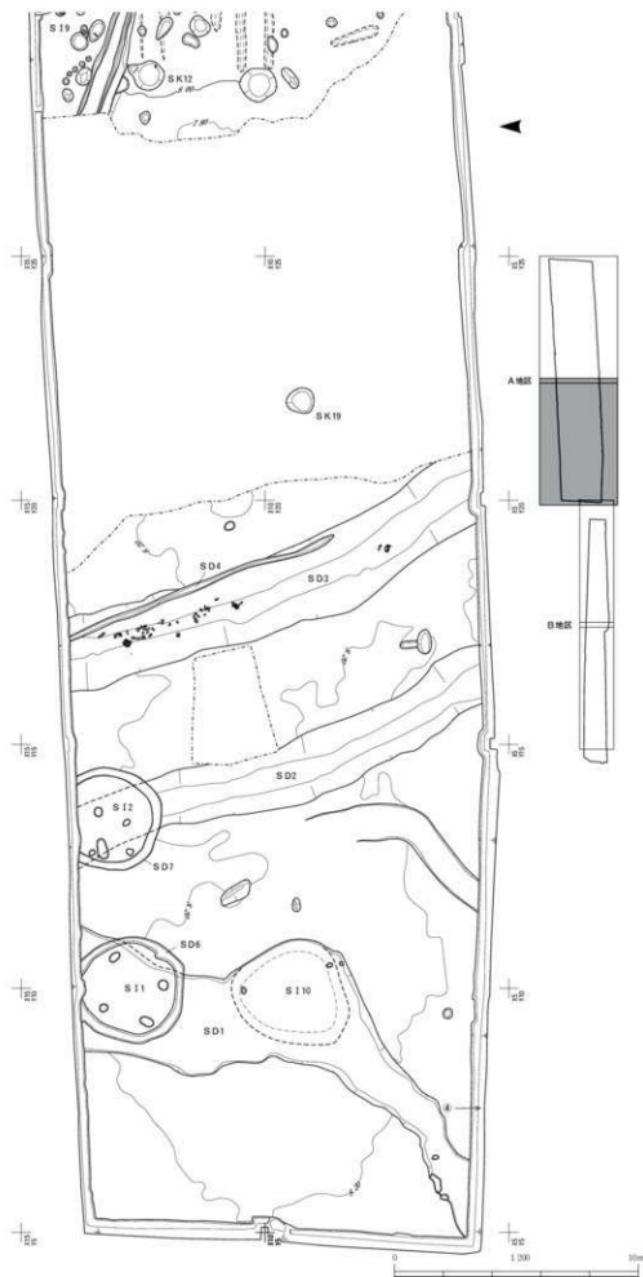
（青山 覧）

参考文献

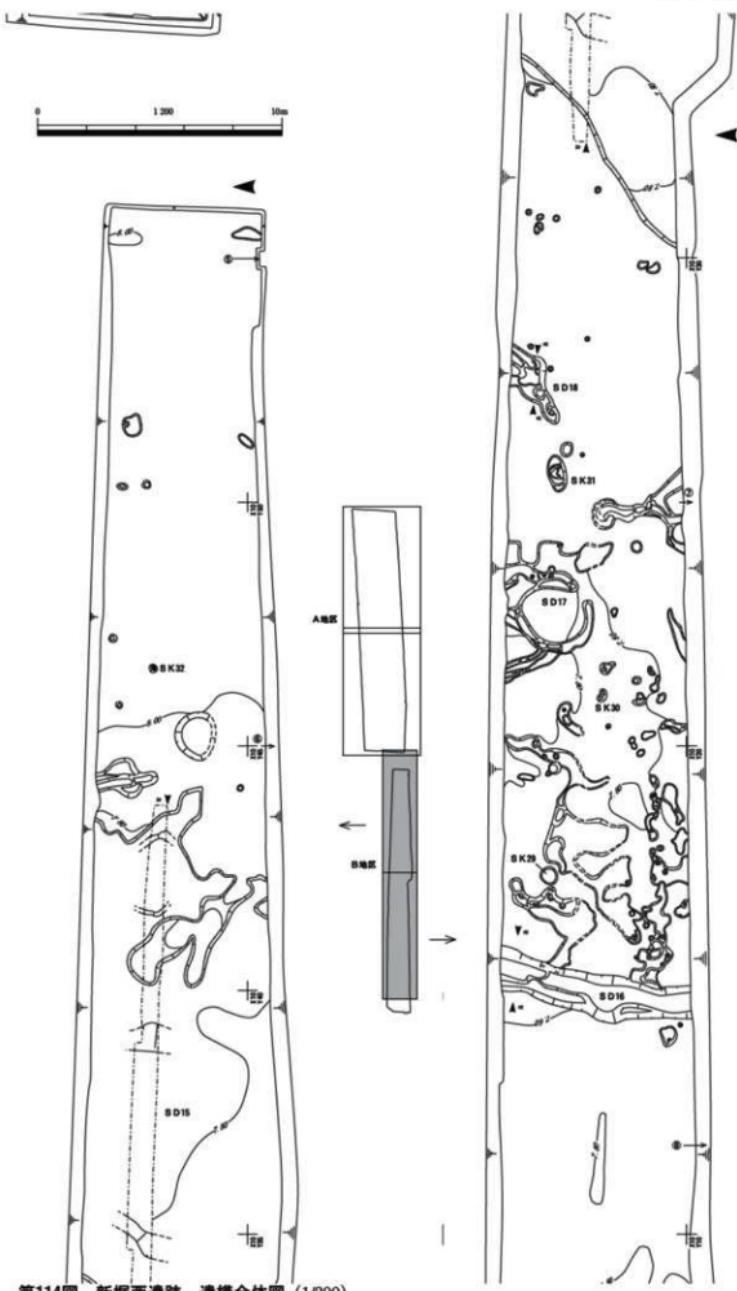
- 岡本淳一郎 2003 「「周溝をもつ建物」の基礎的研究」『富山大学考古学研究室論集 豊景樓』六一書房
- 岡本淳一郎 2006 「第 X 章考察 4 研波平野部の古墳出現期土器」『下老子篠川遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団
- 横 正勝 2003 「装飾器台の成立と展開」『庄内式土器研究 XX VI』庄内式土器研究会
- 小島俊彰 1979 「第 3 章 遺構・遺物解説 本江遺跡」『滑川市史 考古資料編』滑川市史編さん委員会
- 田嶋明人 1986 「IV 考察 漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡 I』石川県立埋蔵文化財センター
- 富山県教育委員会 1991 「北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編 6 城 A 遺跡土器編—」
- 丸川義広・青山裕子 2011 「愛宕遺跡出土の縄刻文様をもつ土器」『富山考古学研究』第 14 号 富山県文化振興財団
- 森 隆 2008 「新堀西遺跡」『平成 19 年度埋蔵文化財年報』富山県文化振興財団



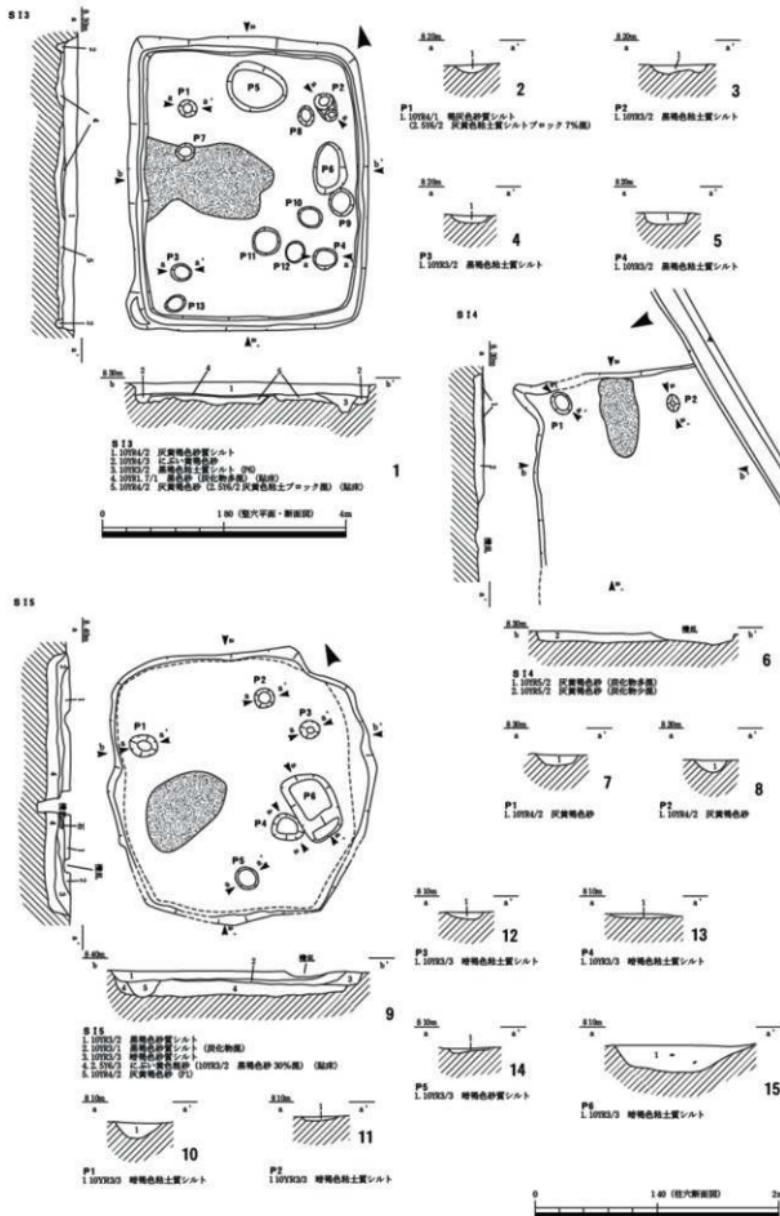
第112図 新堀西遺跡 遺構全体図 (1/200)



第113図 新堀西遺跡 遺構全体図 (1/200)

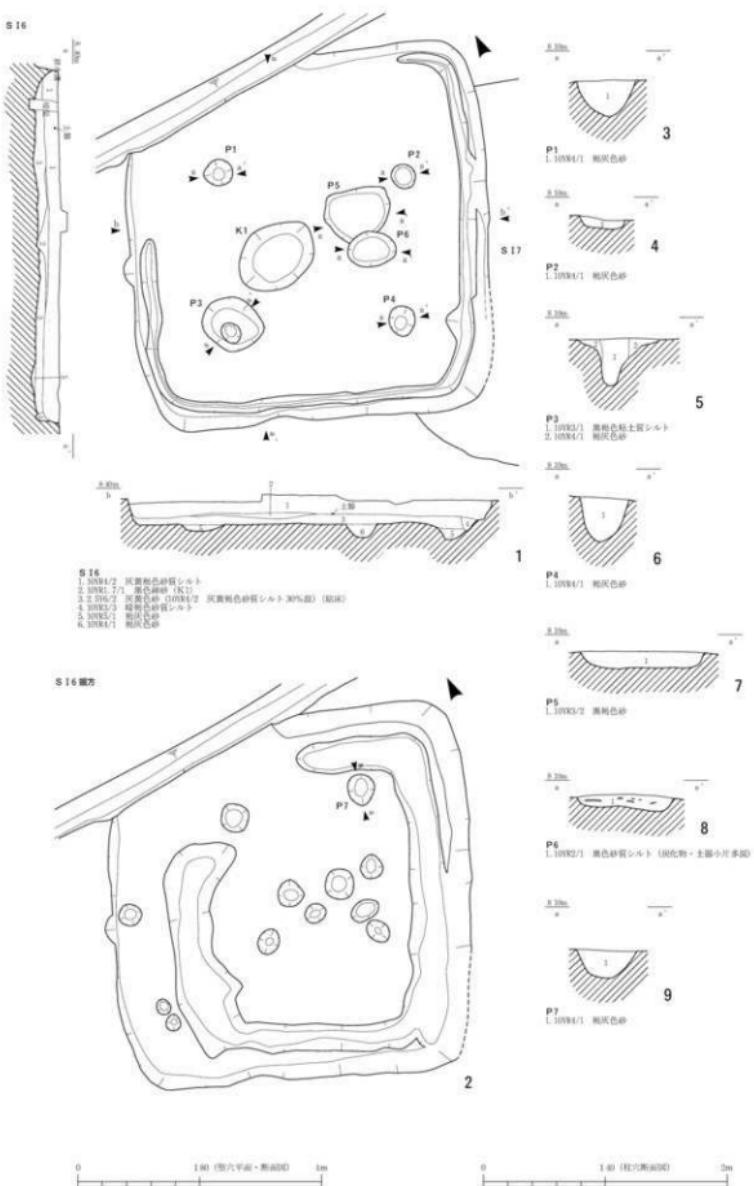


第114図 新堀西遺跡 遺構全体図 (1/200)



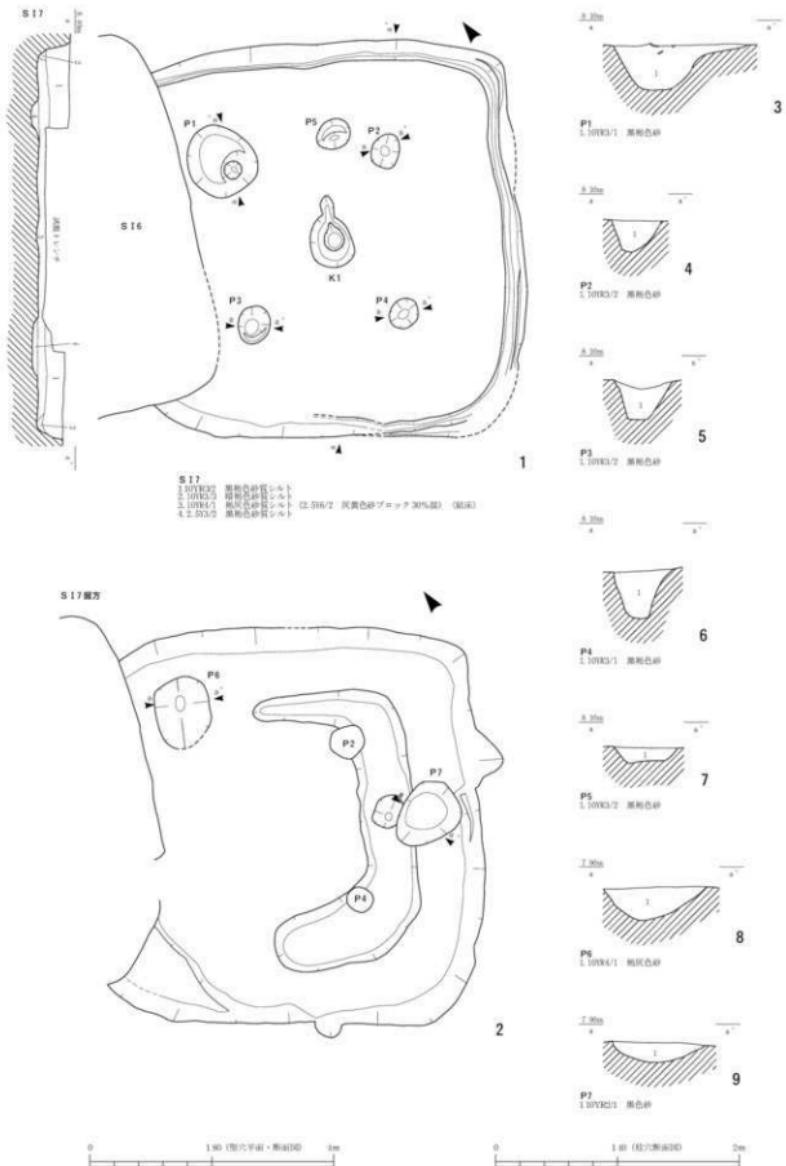
第115図 新堀西遺跡 遺構実測図

1. S I3 2. S I3 P1 3. S I3 P2 4. S I3 P3 5. S I3 P4 6. S I4 7. S I4 P1 8. S I4 P2
 9. S I5 10. S I5 P1 11. S I5 P2 12. S I5 P3 13. S I5 P4 14. S I5 P5 15. S I5 P6



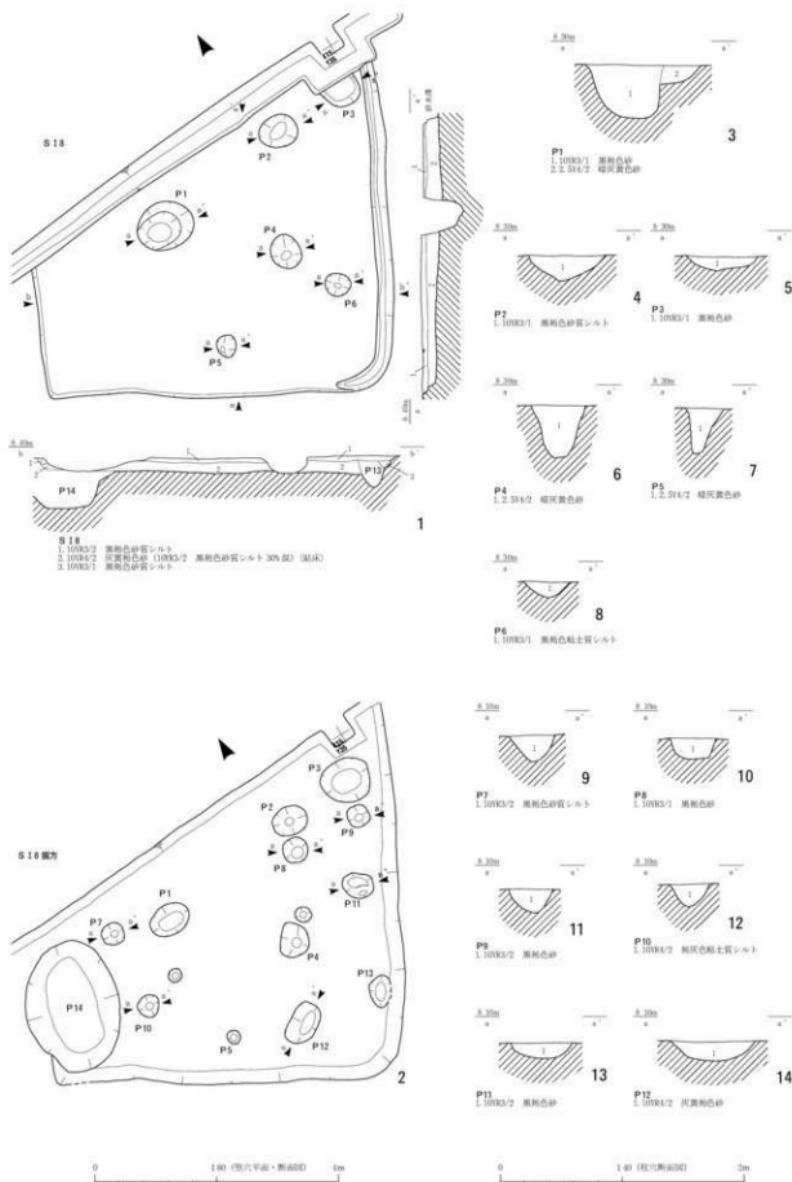
第116圖 新掘西遺跡 遺構審查圖

1 S 16 2 S 16 括方 3 S 16 P1 4 S 16 P2 5 S 16 P3 6 S 16 P4 7 S 16 P5 8 S 16 P6 9 S 16 P7



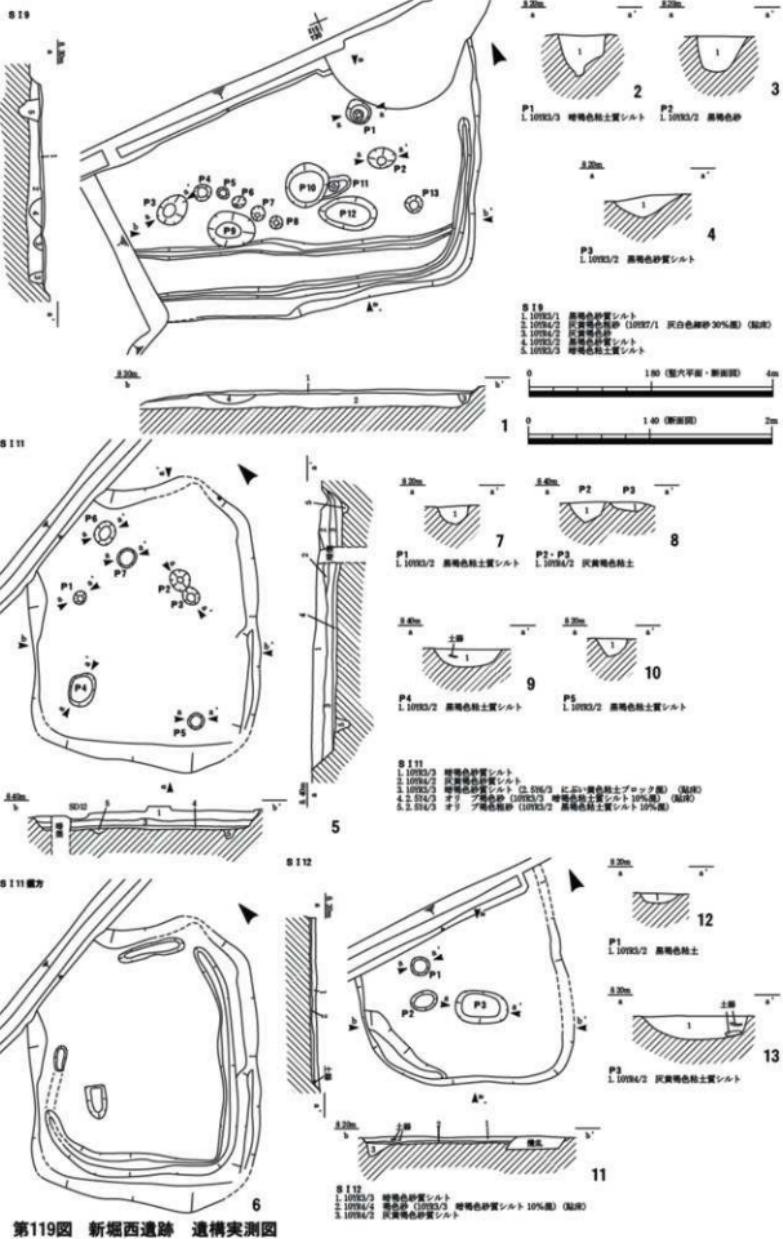
第117図 新堺西遺跡 遺構実測図

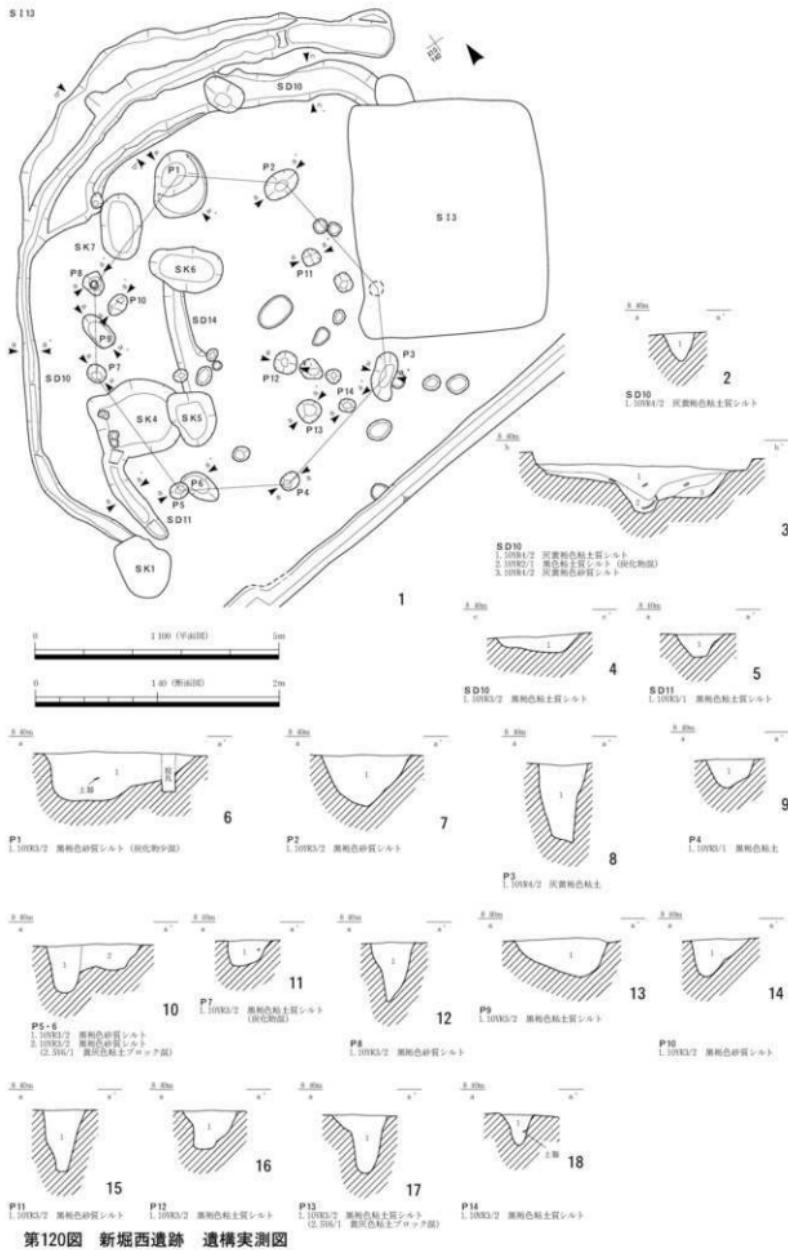
1. S17 2. S17 振方 3. S17 P1 4. S17 P2 5. S17 P3 6. S17 P4 7. S17 P5 8. S17 P6 9. S17 P7



第118図 新堀西遺跡 遺構実測図

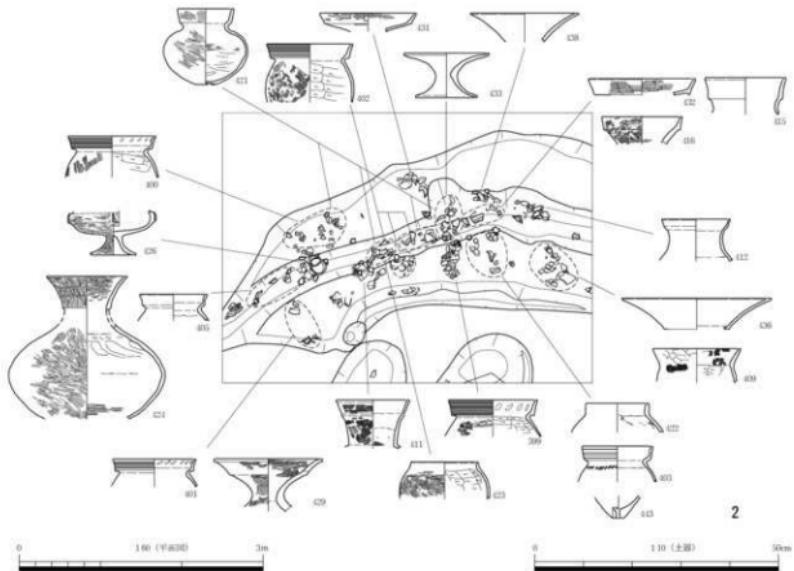
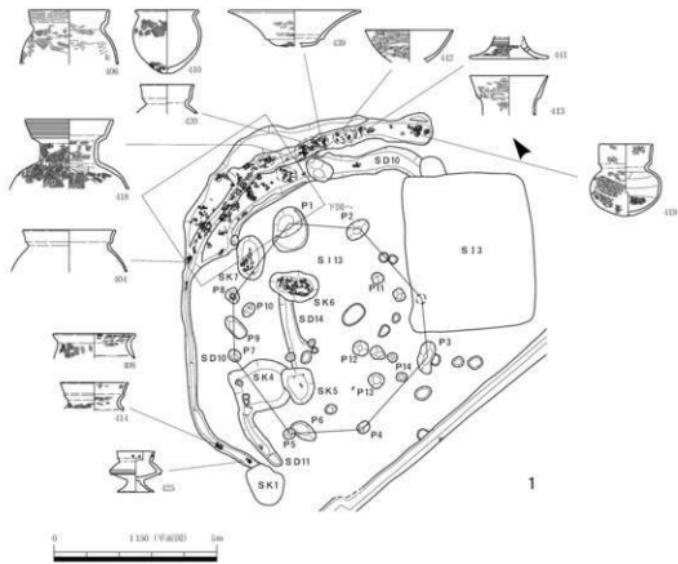
1. S18 2. S18掘方 3. S18 P1 4. S18 P2 5. S18 P3 6. S18 P4 7. S18 P5 8. S18 P6
9. S18 P7 10. S18 P8 11. S18 P9 12. S18 P10 13. S18 P11 14. S18 P12





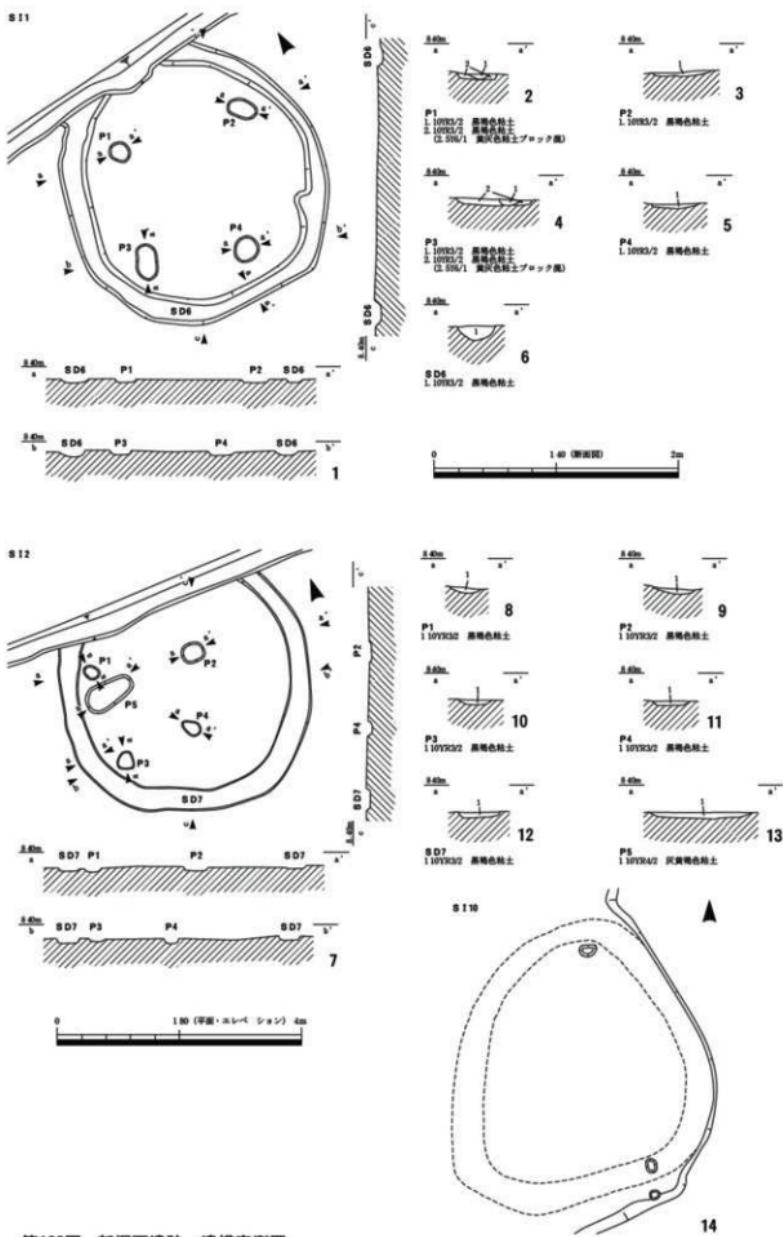
第120図 新堀西遺跡 遺構実測図

1. S I 13 2~4. SD10 5. SD11 6. S I 13 7. S I 13 8. S I 13 9. S I 13 10. S I 13 11. S I 13 12. S I 13 13. P8 14. S I 13 15. S I 13 16. S I 13 17. S I 13 18. S I 13 19. P14



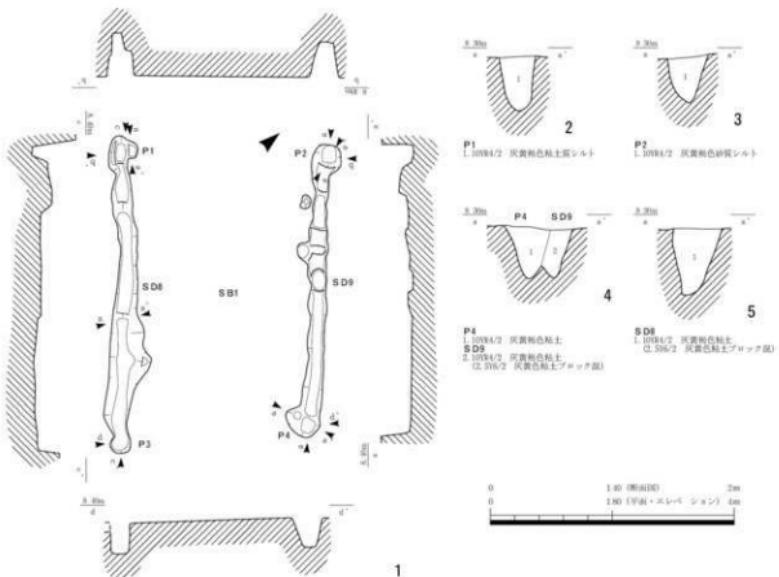
第121図 新堀西遺跡 遺構実測図

1·2. S I 13 周溝 (S D10) 遺物出土狀況圖



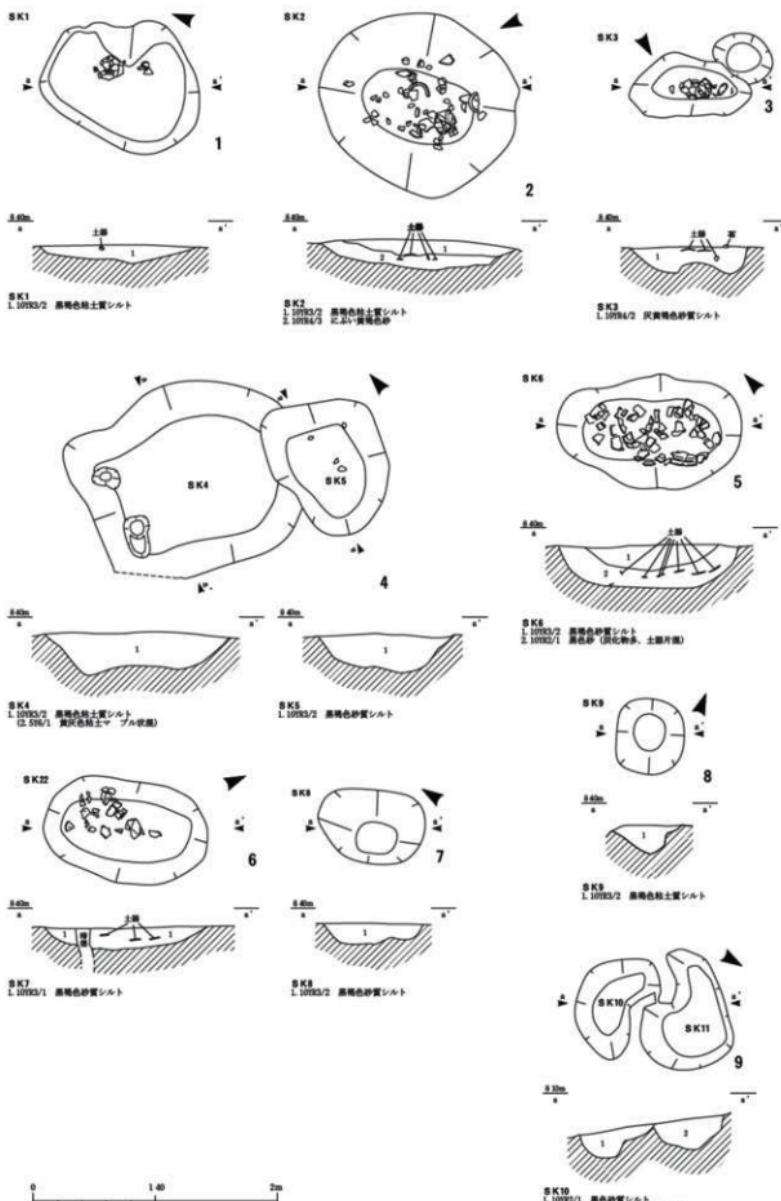
第122図 新堀西遺跡 遺構実測図

1.S I1 2.S I1 P1 3.S I1 P2 4.S I1 P3 5.S I1 P4 6.S D6 7.S I2 8.S I2 P1 9.S I2 P2
10.S I2 P3 11.S I2 P4 12.S D7 13.S I2 P5 14.S I10



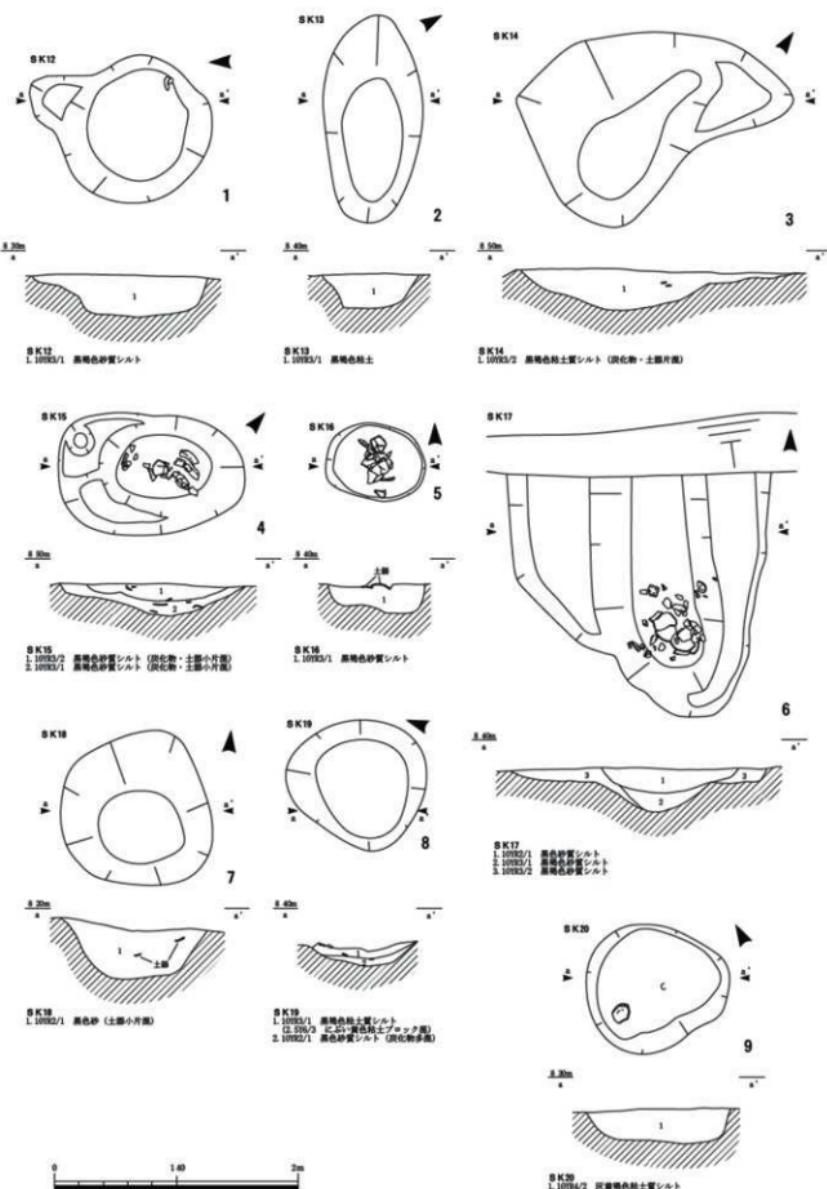
第123図 新堤西遺跡 遺構実測図

1. SB1 2. S B1 P1 3. S B1 P2 4. S B1 P4・SD9 5. S D8



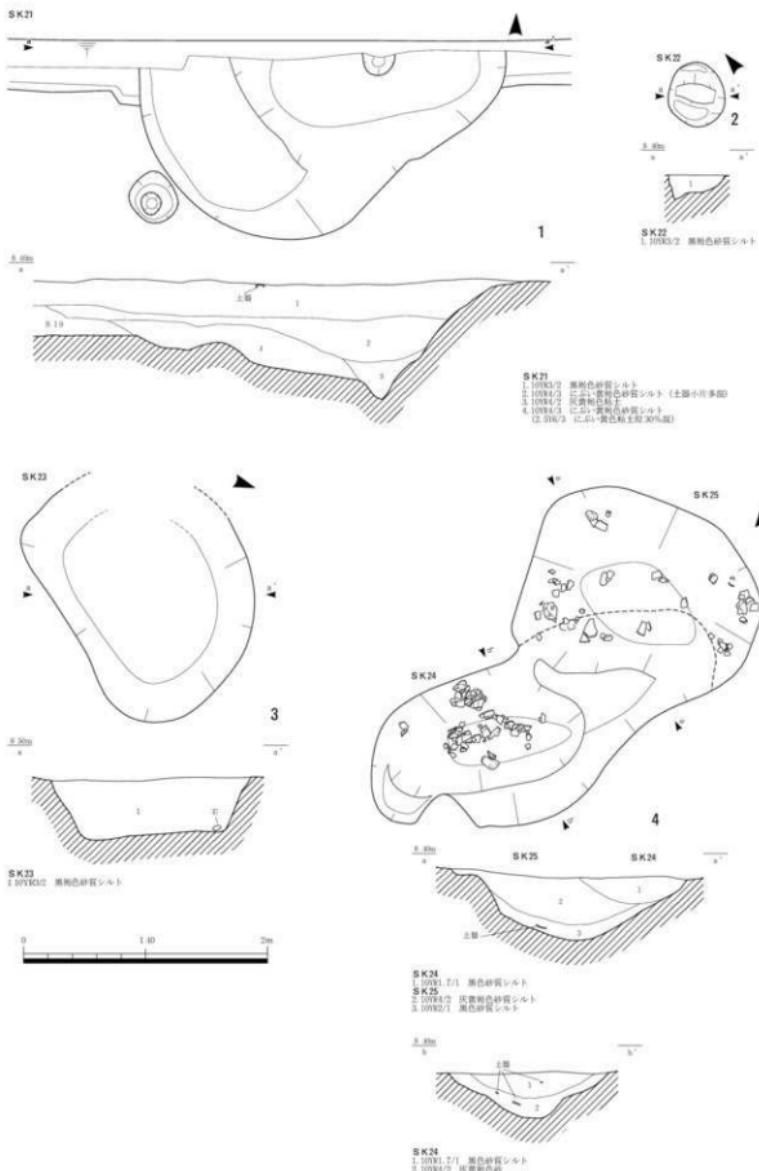
第124図 新堀西遺跡 遺構実測図

1. SK1 2. SK2 3. SK3 4. SK4・SK5 5. SK6 6. SK7 7. SK8 8. SK9 9. SK10・SK11



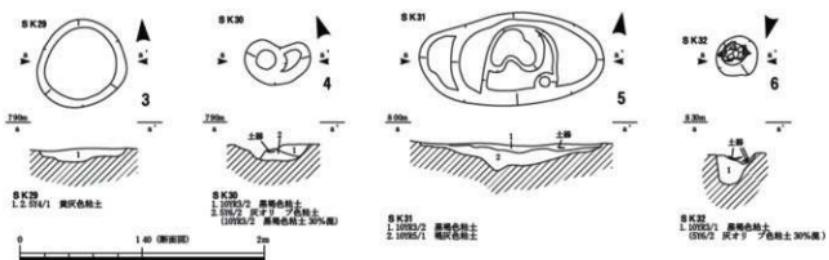
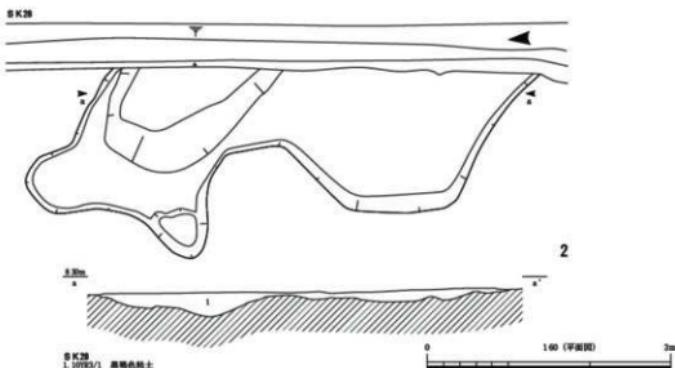
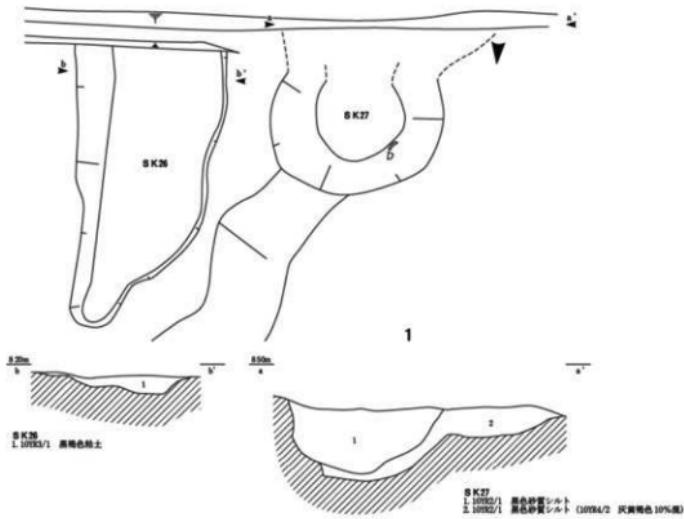
第125図 新堀西遺跡 遺構実測図

1. SK12 2. SK13 3. SK14 4. SK15 5. SK16 6. SK17 7. SK18 8. SK19 9. SK20



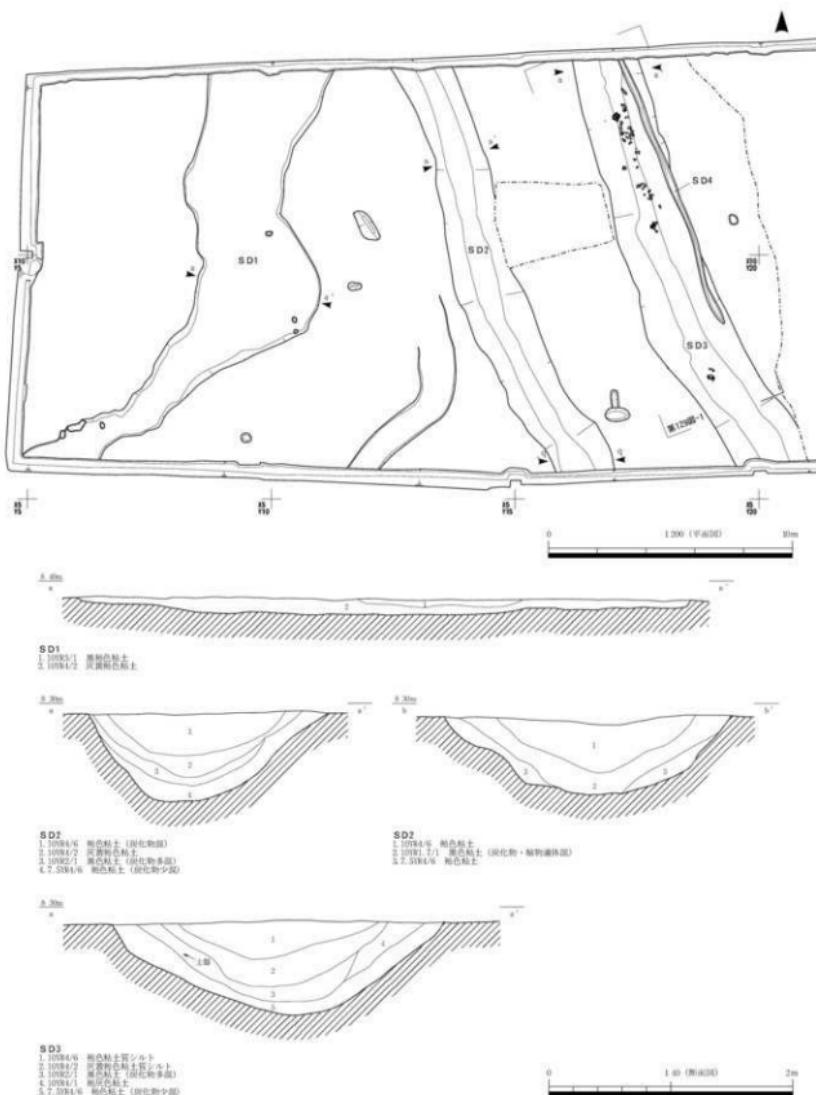
第126図 新堀西遺跡 遺構実測図

1. SK21 2. SK22 3. SK23 4. SK24・SK25



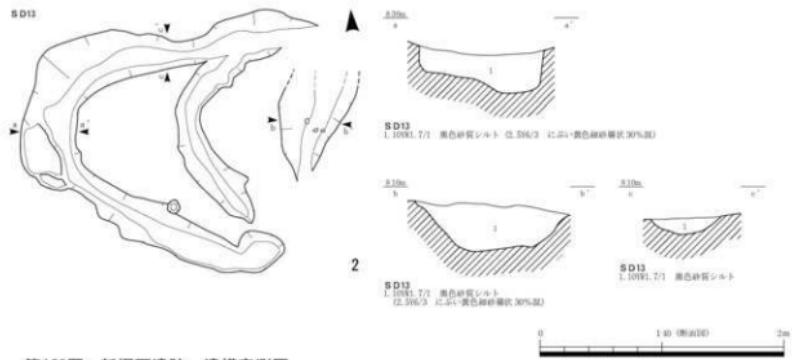
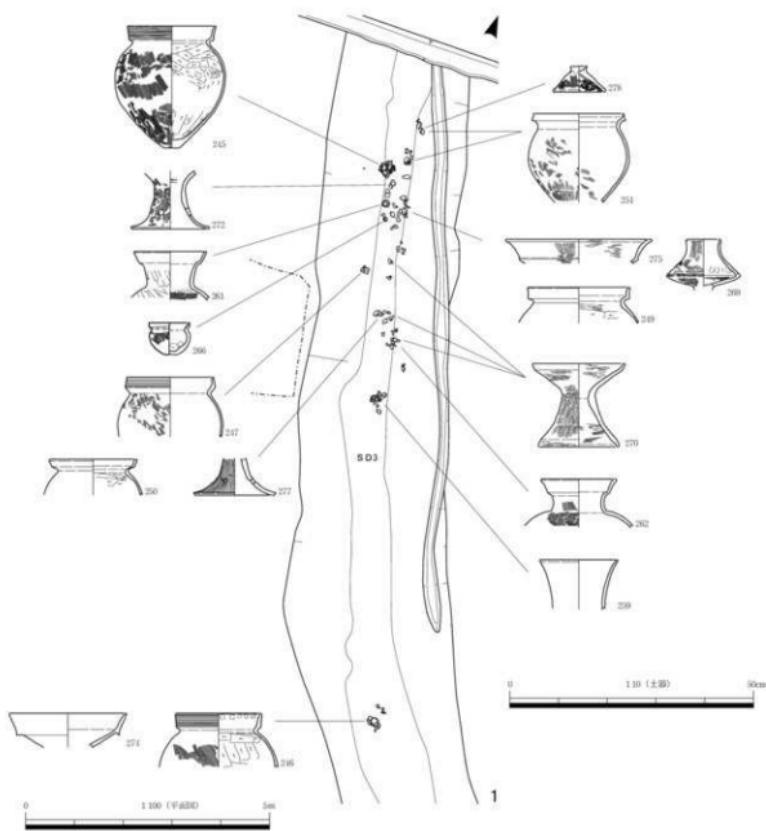
第127図 新堀西遺跡 遺構実測図

1. SK26・SK27 2. SK28 3. SK29 4. SK30 5. SK31 6. SK32



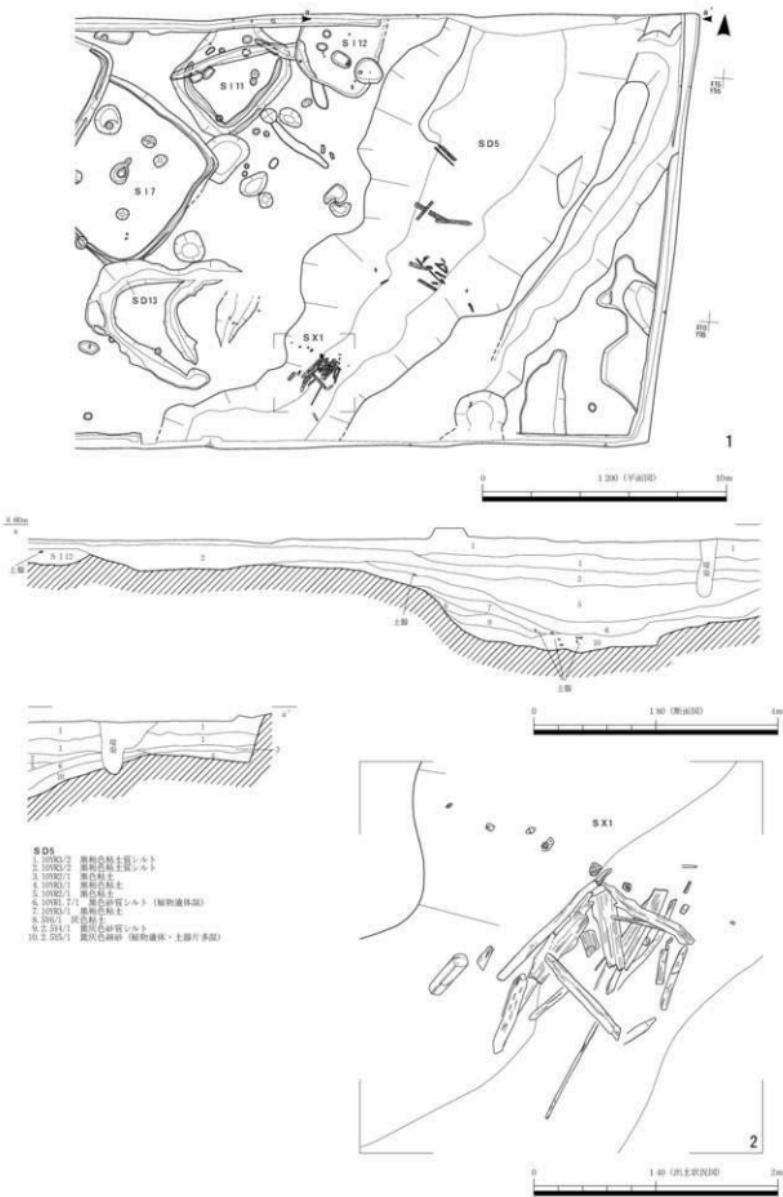
第128図 新堀西遺跡 遺構実測図

SD1 ~ SD4



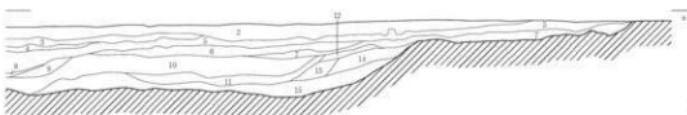
第129図 新堺西遺跡 遺構実測図

1. SD3 出土状況図 2. SD13

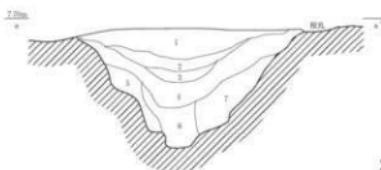


第130図 新堀西遺跡 遺構実測図

1. SD5 2. SX1

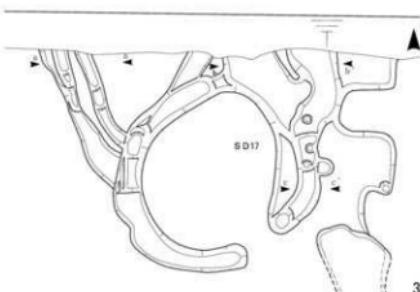


品目	規格	単位	数量	備考
1.0100-5	黒色樹脂土 - (N)W6 / 2 水モック ブラジルシロップ	袋	11.3	10kg
1.0100-5	黒色樹脂土 - (N)W6 / 2 水モック ブラジルシロップ	袋	12.10kg	10kg
1.0100-5	黒色樹脂土 - (N)W6 / 2 水モック ブラジルシロップ	袋	13.10kg	10kg
1.0100-5	黒色樹脂土 - (N)W6 / 2 水モック ブラジルシロップ	袋	14.10kg	10kg
1.0100-5	黒色樹脂土 - (N)W6 / 2 水モック ブラジルシロップ	袋	15.10kg	10kg
1.0100-5	黒色樹脂土 - (N)W6 / 2 水モック ブラジルシロップ	袋	16.10kg	10kg
1.0100-5	黒色樹脂土 - (N)W6 / 2 水モック ブラジルシロップ	袋	17.10kg	10kg
1.0100-5	黒色樹脂土 - (N)W6 / 2 水モック ブラジルシロップ	袋	18.10kg	10kg
1.0100-5	黒色樹脂土 - (N)W6 / 2 水モック ブラジルシロップ	袋	19.10kg	10kg

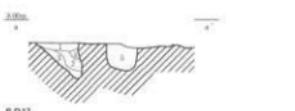


S316

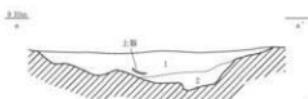
1. 10922/1 黒色粘土
2. 10932/1 黄褐色粘土
3. 10922/2 黑色粘土 (10914/1 暗灰色粘土マッシュ法 10%混)
4. 10932/2 黑色粘土 (2.58/2) 黄褐色粘土 3%混
5. 10941/1 黑色粘土 (2.58/3) 黄褐色粘土レンタルブロック 10%
6. 2.58/4 黄褐色シルトブロック 50%混
7. 10934/1 黑色粘土
8. 10934/2 黑色粘土 (2.58/3) 黄褐色粘土レンタルブロック 20%
9. 2.58/6 黄褐色シルトブロック 30%混



3

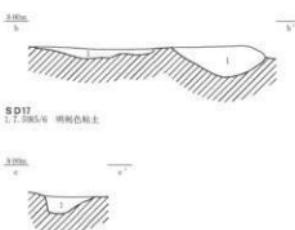


S017
1. 08月1日 淡褐色粘土 (30WES/1) 淡褐色粘土マーブル状 3%風化
2. 09月1日 暗オクシグリーン粘土 (30WES/1) 淡褐色粘土 10%風化
3. 10月1日 淡褐色粘土 (30WES/1) 淡褐色粘土 5%風化
4. 11月1日 淡褐色粘土
5. 7.5.8月5日 淡褐色粘土

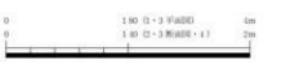


4

SD18
1. 10983/2 黄褐色粘土
2. 506/2 底色 ブラック (10983/2 加褐色粘土 30%混)



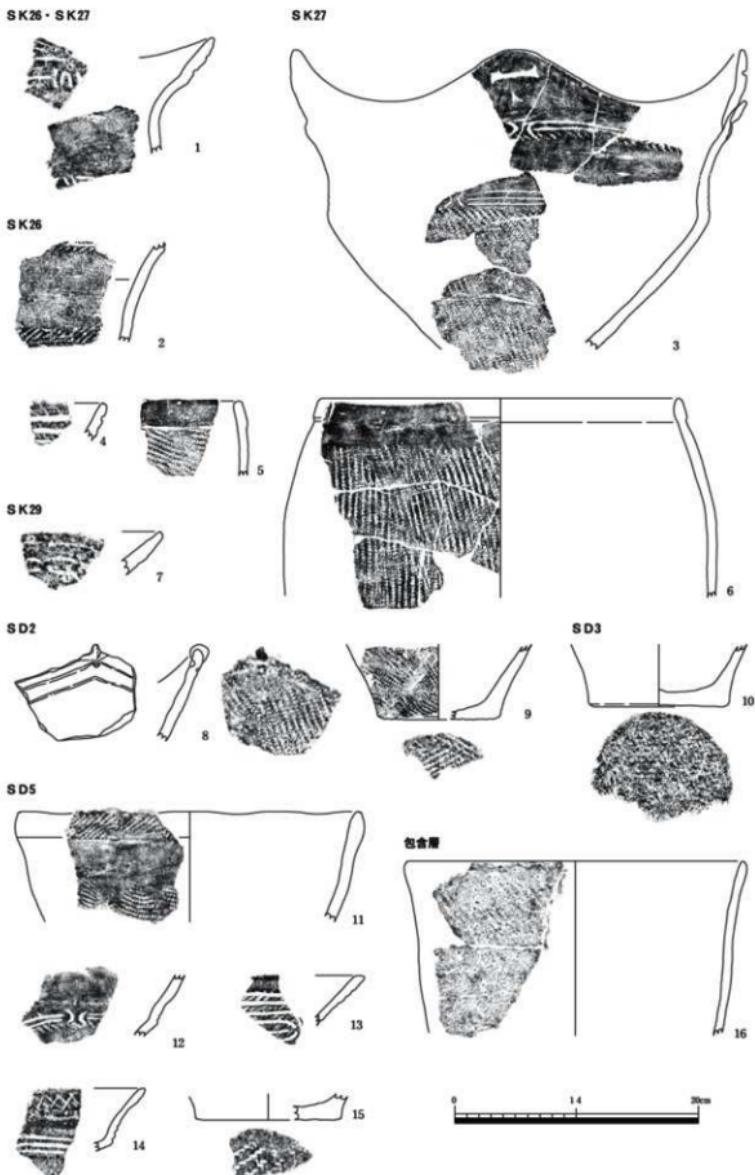
SD17



501
1.7.5085/6 明制色紙上

第131図 新堀西遺跡 遺構実測図

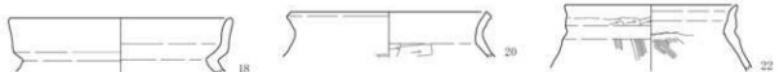
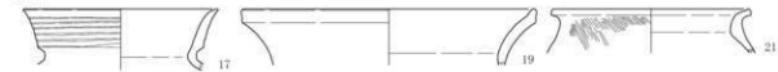
1, SD15 2, SD16 3, SD17 4, SD18



第132図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

SK26・SK27 (1) SK26 (2) SK27 (3~6) SK29 (7) SD2 (8~9) SD3 (10) SD5 (11~15) 包含層 (16)

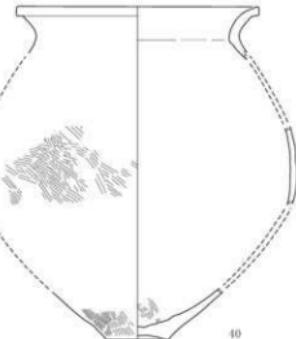
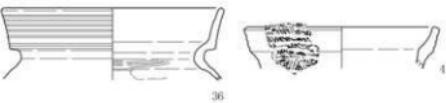
S I 3



S I 4



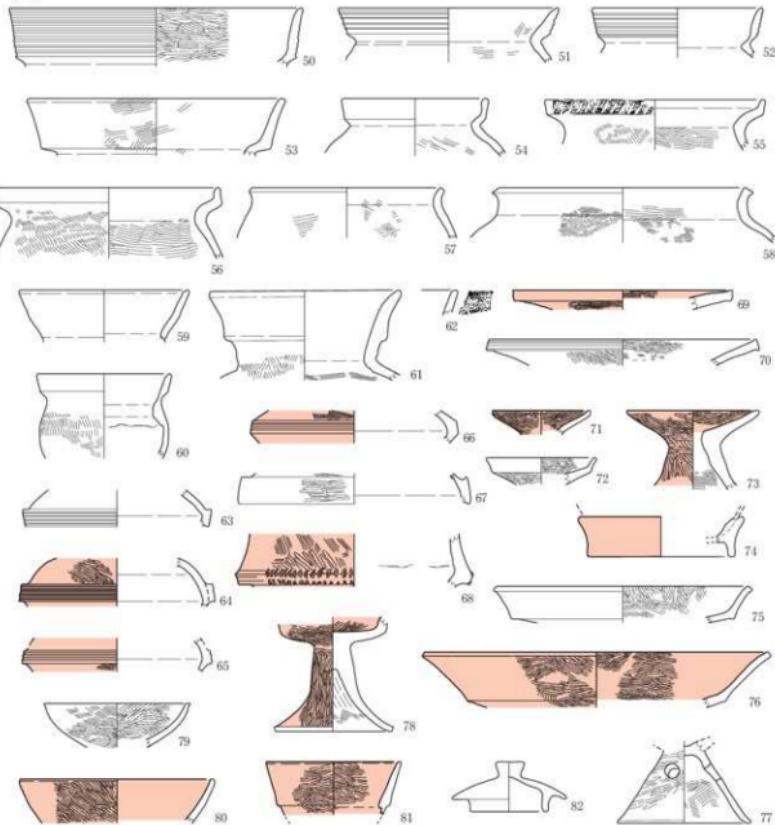
S I 5



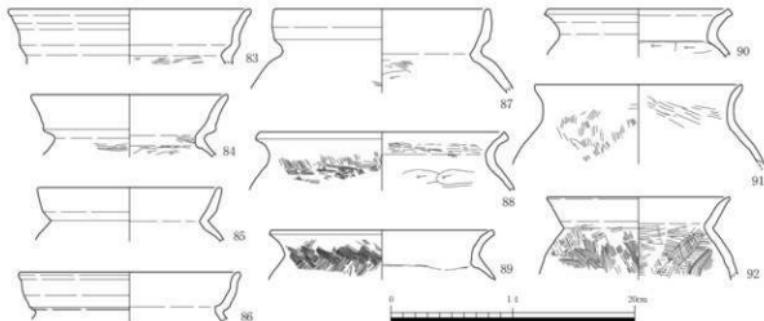
第133図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

S I 3 (17~33) S I 4 (34・35) S I 5 (36~49)

S 16



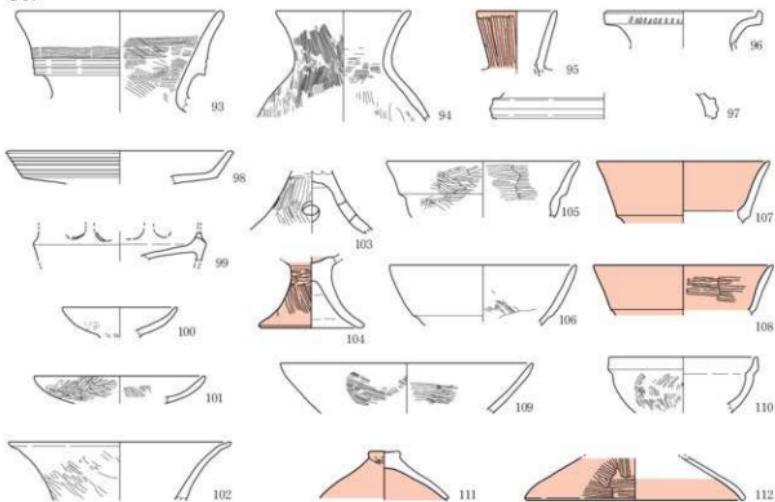
S 17



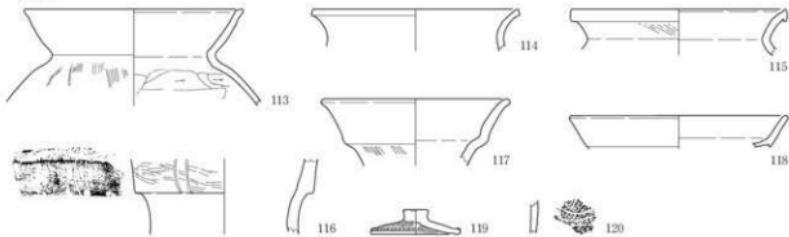
第134図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

S 16 (50~82) S 17 (83~92)

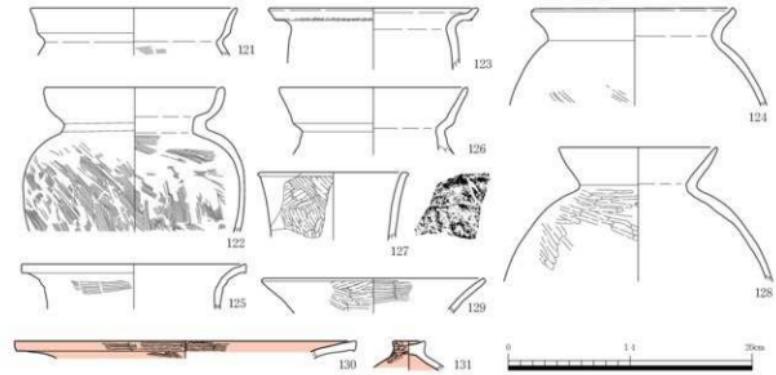
S 17



S 18

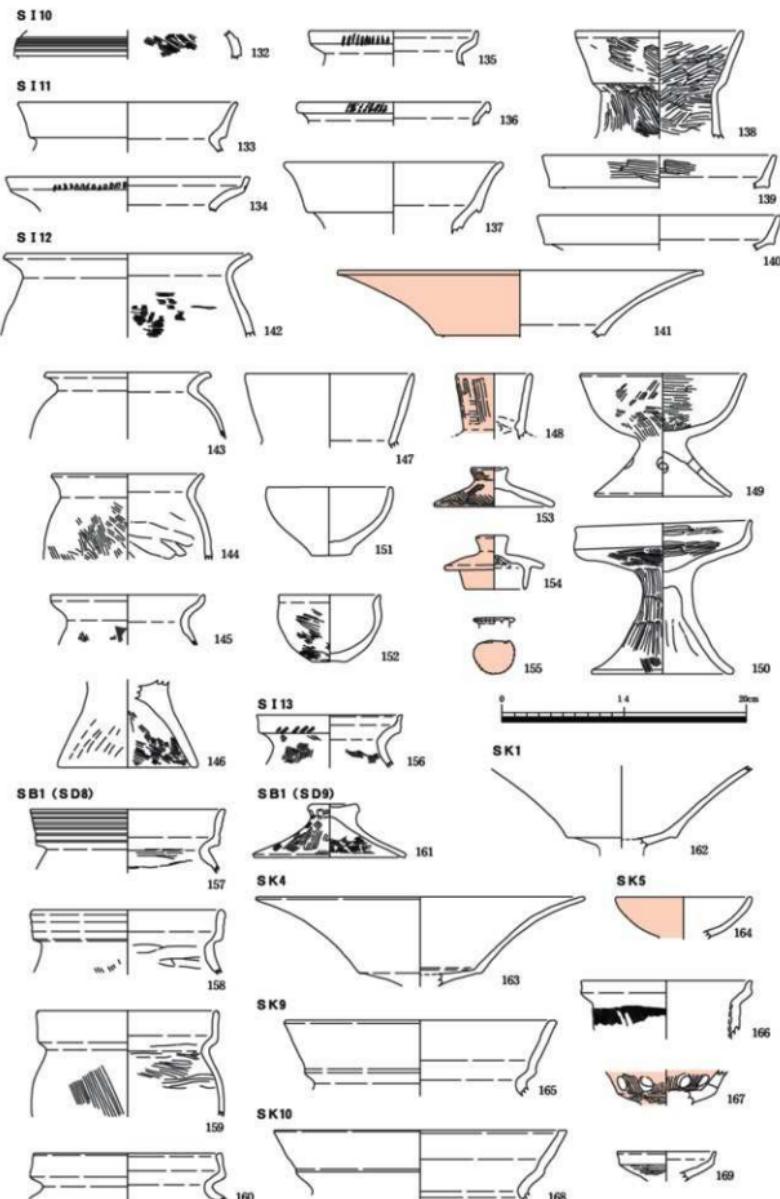


S 19



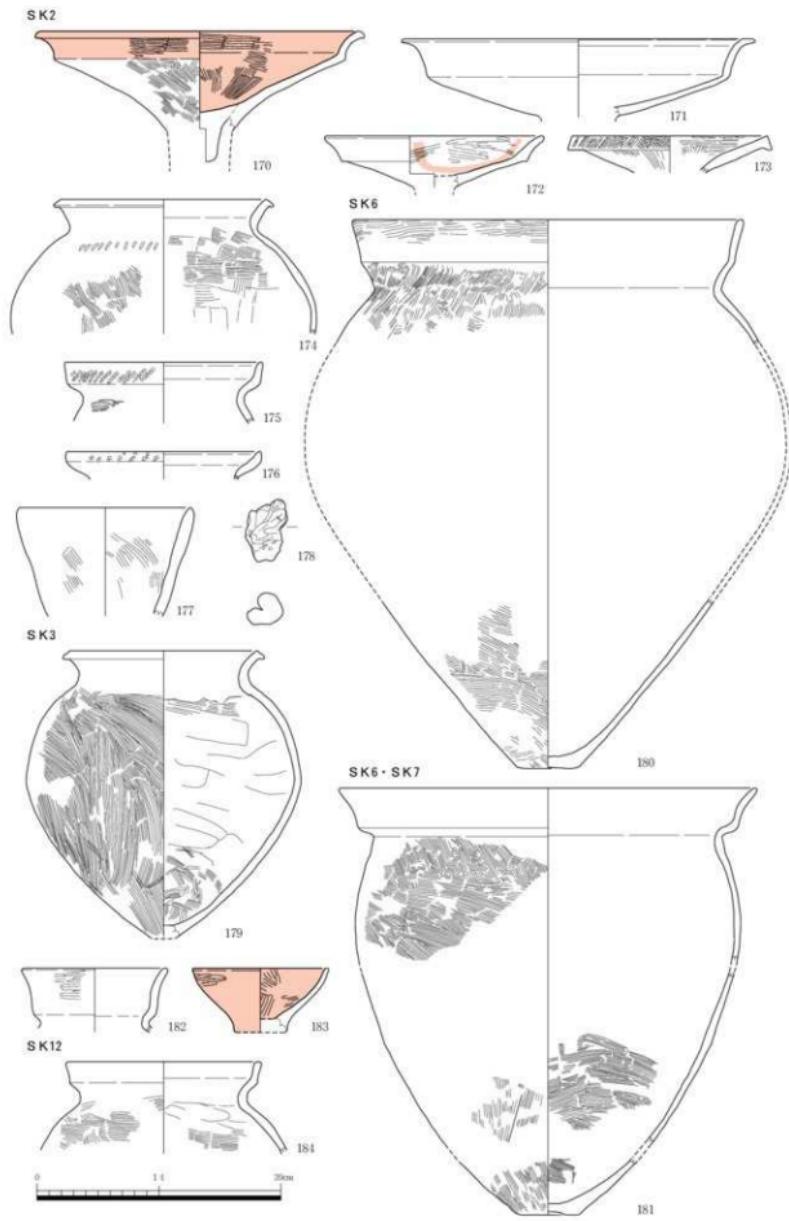
第135図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

S 17 (93~112) S 18 (113~120) S 19 (121~131)



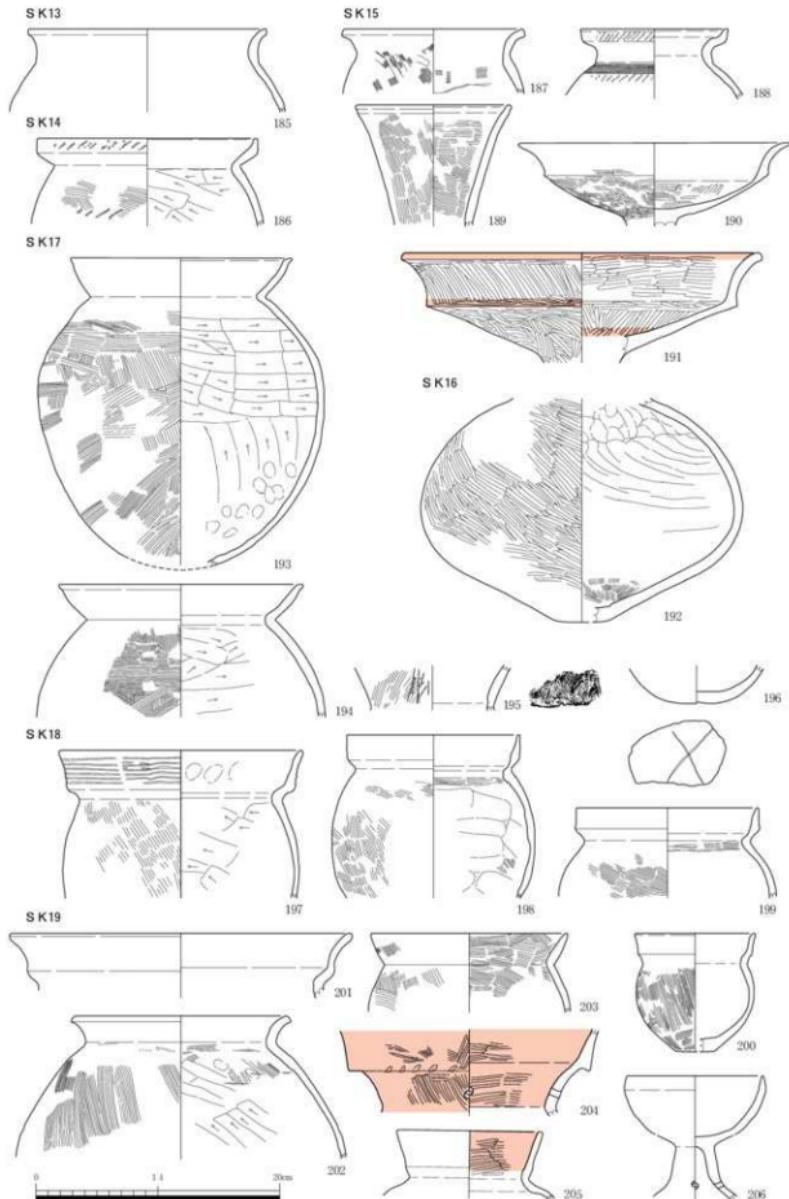
第136図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

S I 10 (132) S I 11 (133~141) S I 12 (142~155) S I 13 (156) SB1 (157~161) SK1 (162) SK4 (163)
 SK5 (164) SK9 (165~167) SK10 (168~169)



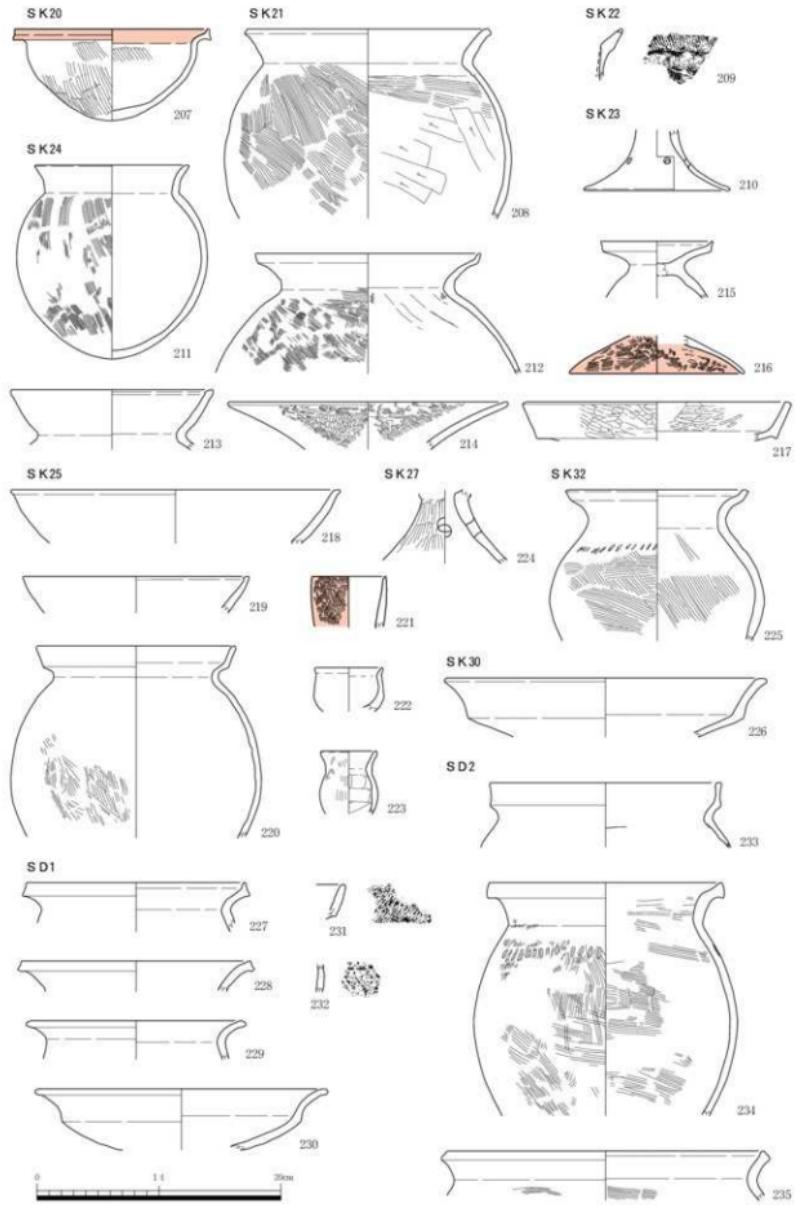
第137図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

SK2 (170~178) SK3 (179) SK6 (180・182・183) SK6・SK7 (181) SK12 (184)



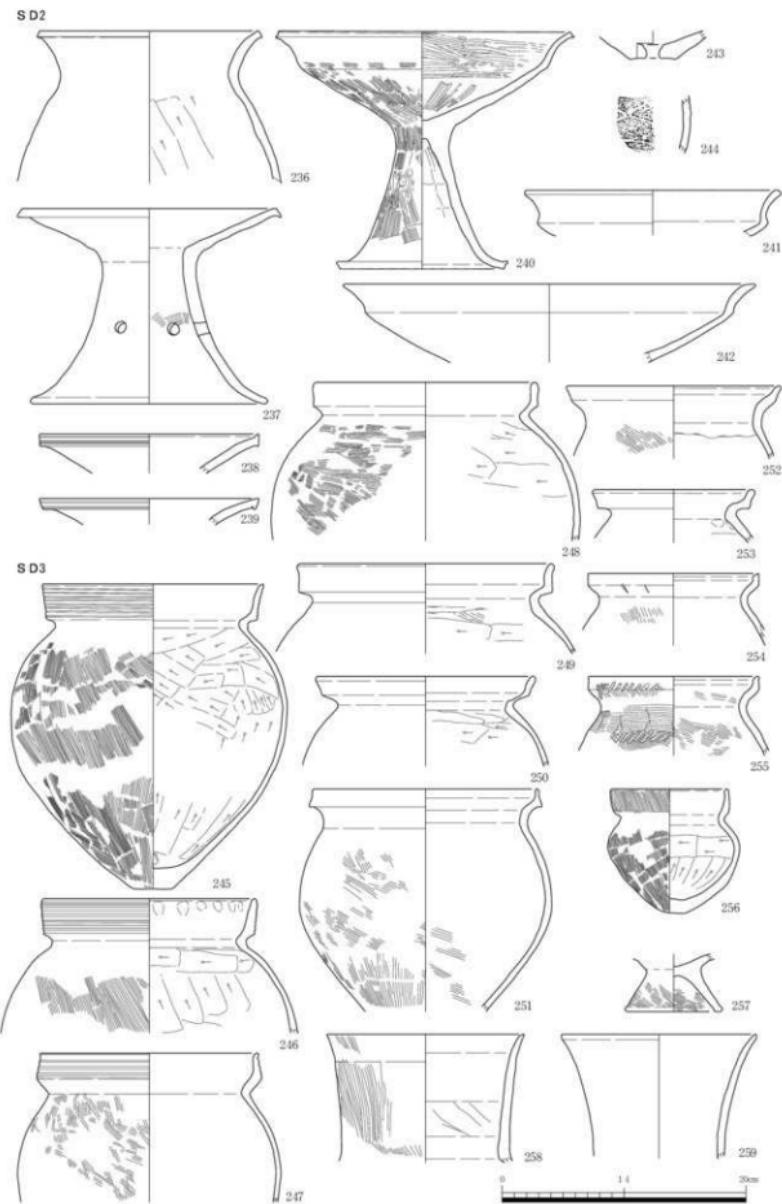
第138図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

SK13 (185) SK14 (186) SK15 (187~191) SK16 (192) SK17 (193~196) SK18 (197~200) SK19 (201~206)



第139図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

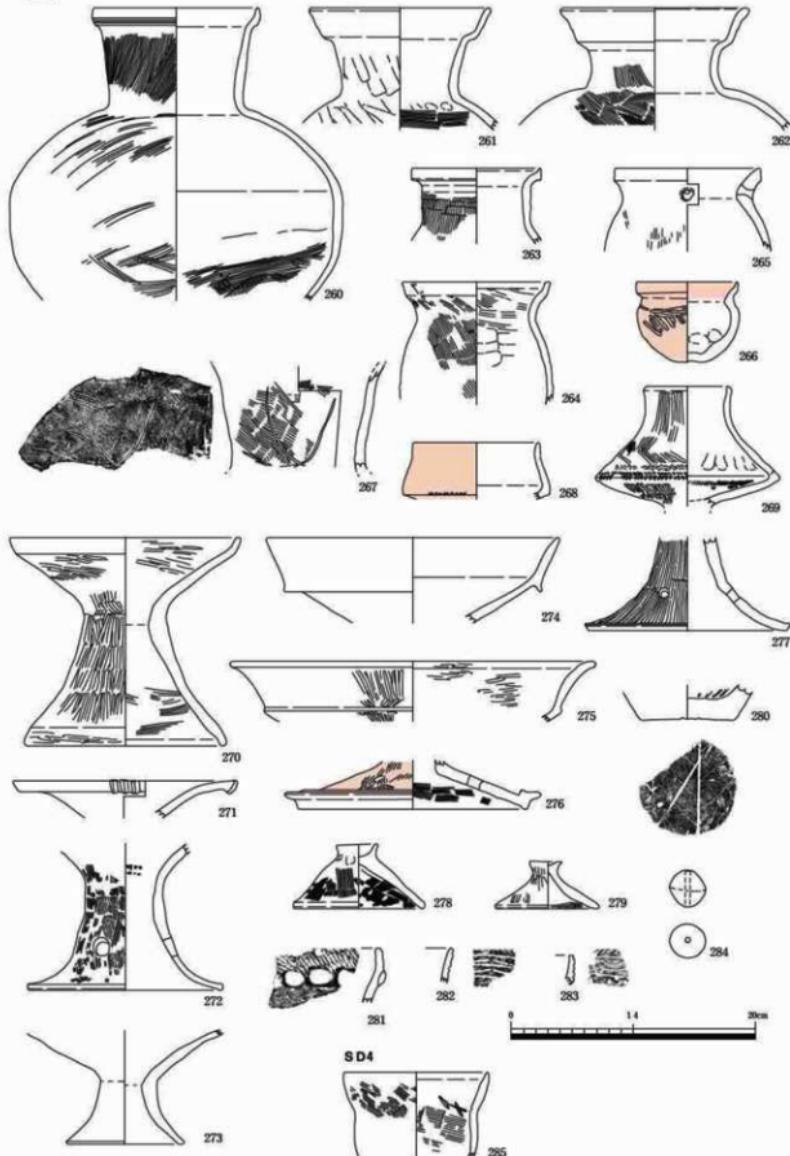
SK20 (207) SK21 (208) SK22 (209) SK23 (210) SK24 (211~217) SK25 (218~223) SK27 (224)
SK30 (226) SK32 (225) SD1 (227~232) SD2 (233~235)



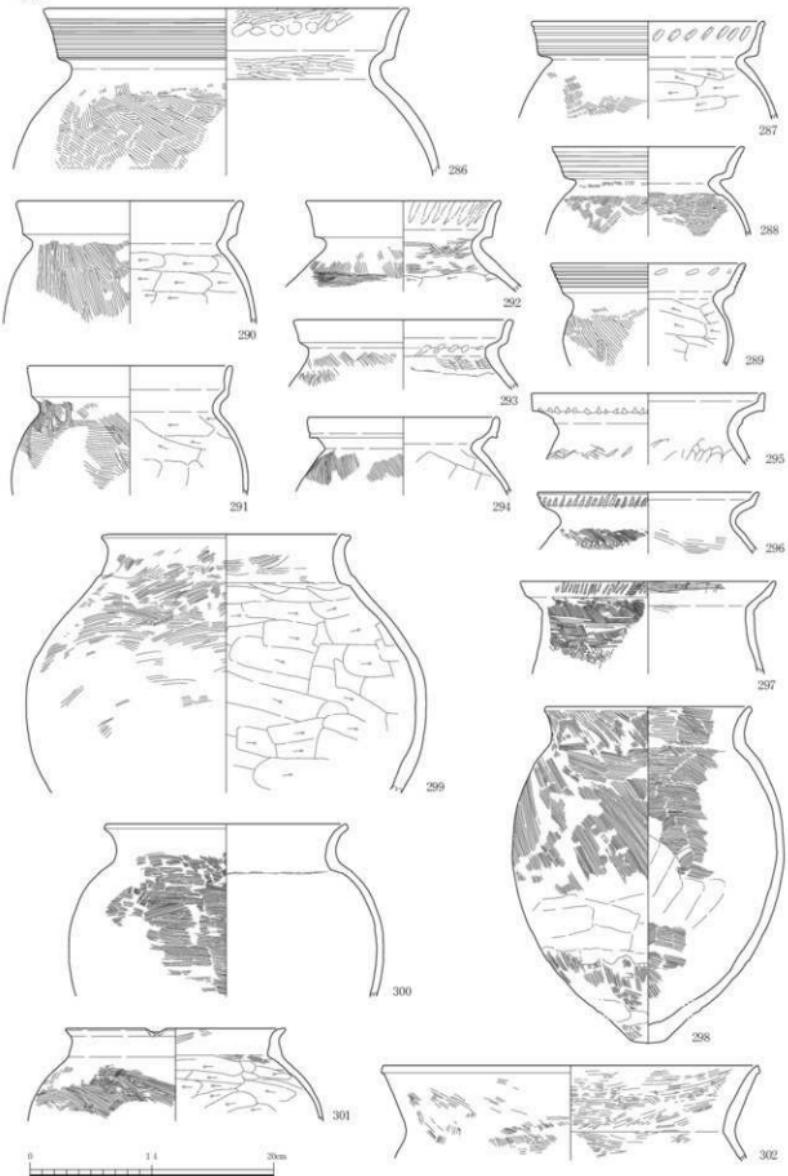
第140図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

SD2 (236~244) SD3 (245~259)

SD3



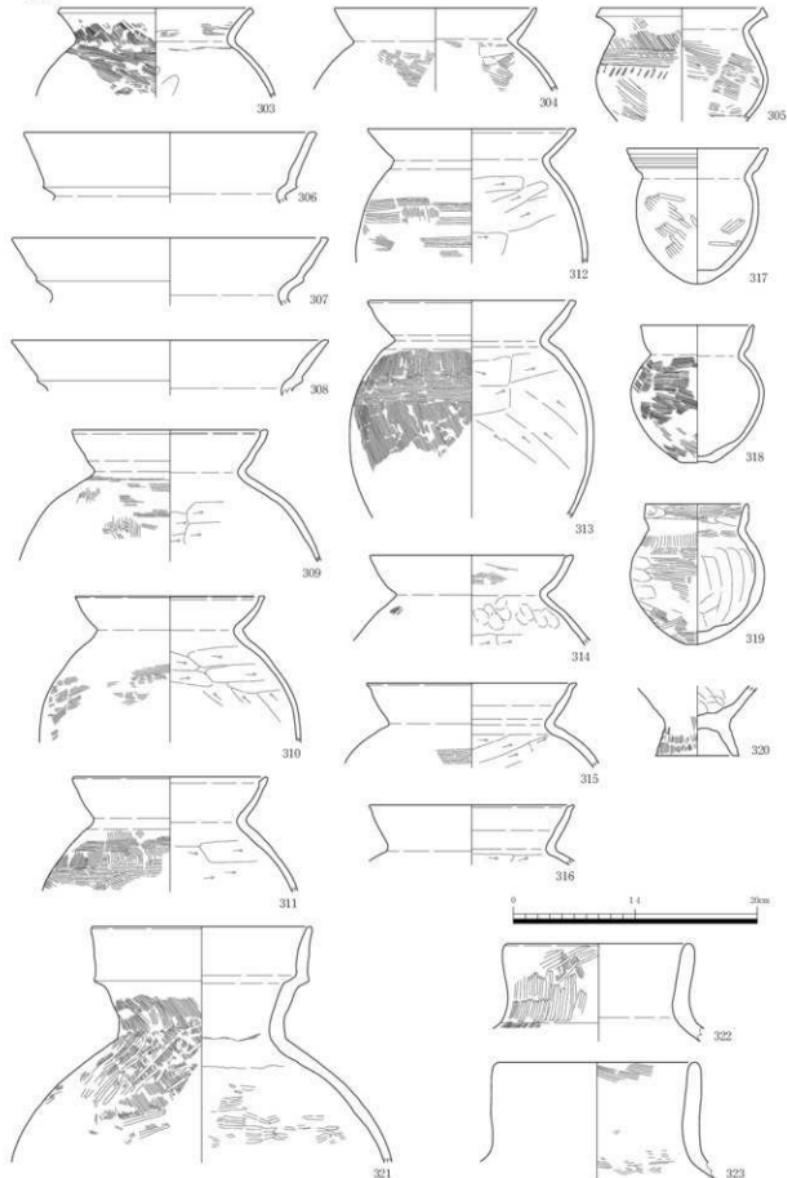
SD5



第142図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

SD5

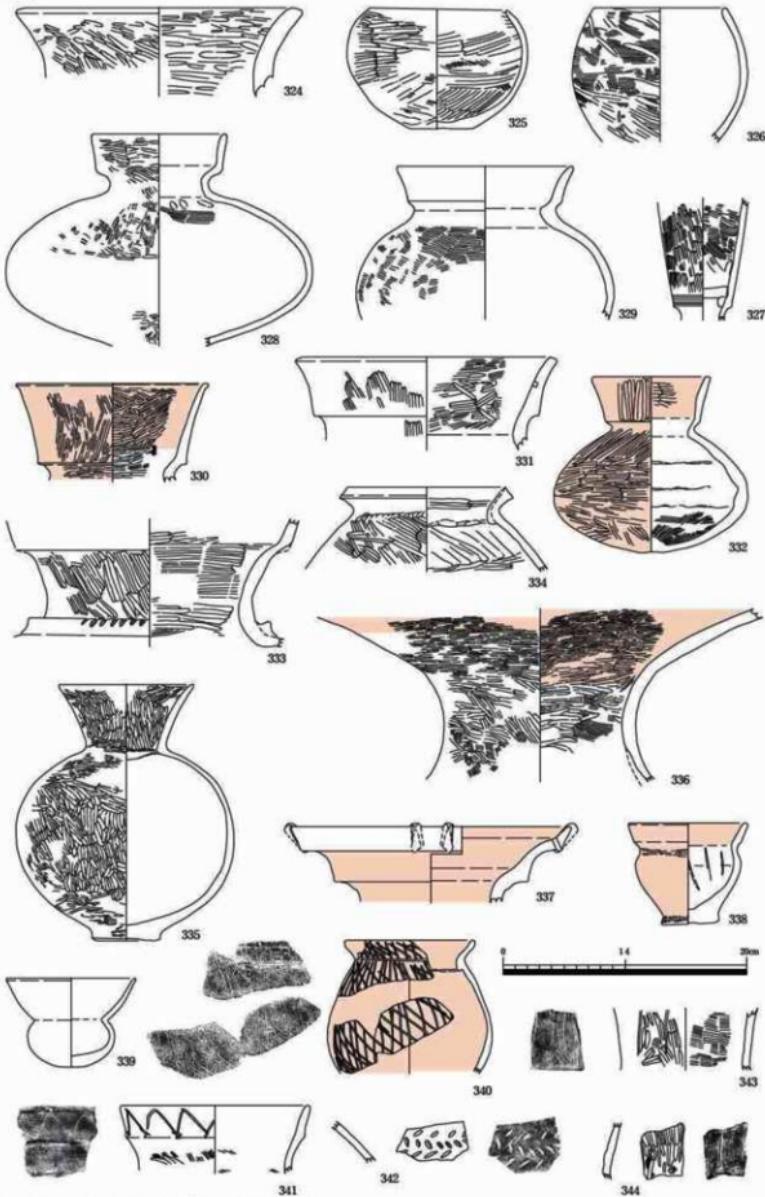
SD5



第143図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

SD5

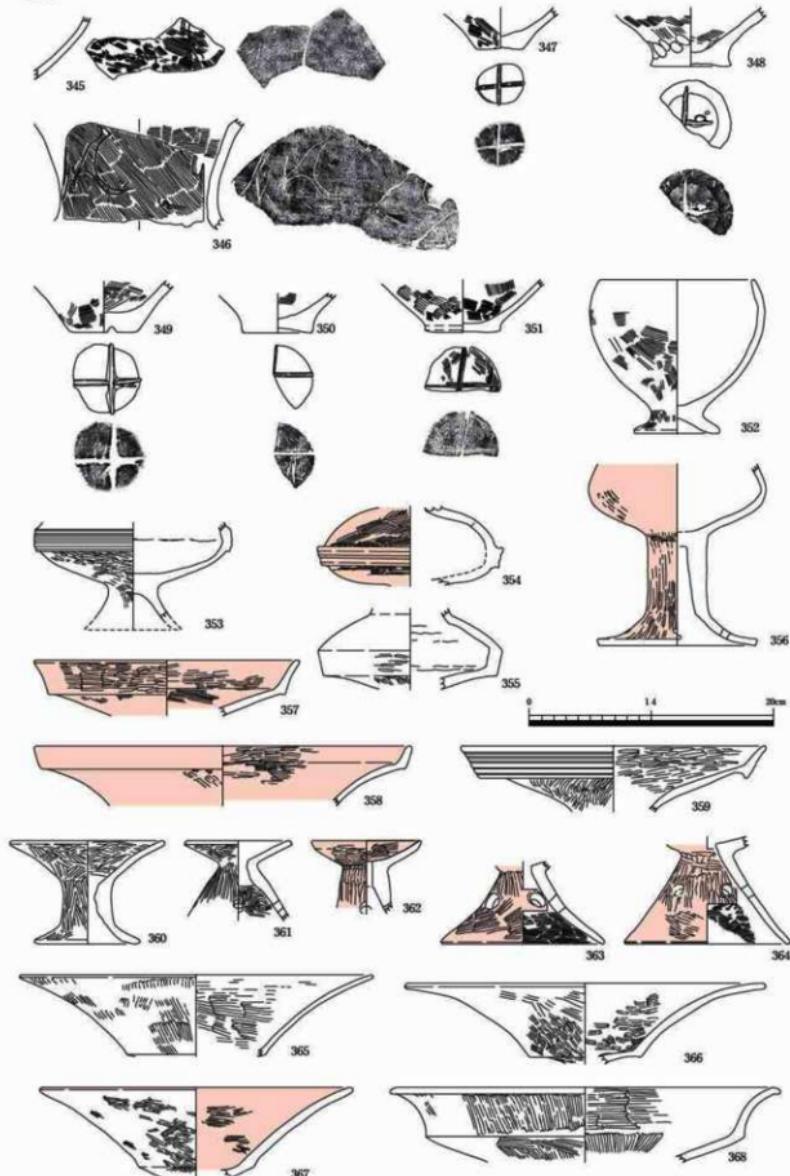
SD5



第144図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

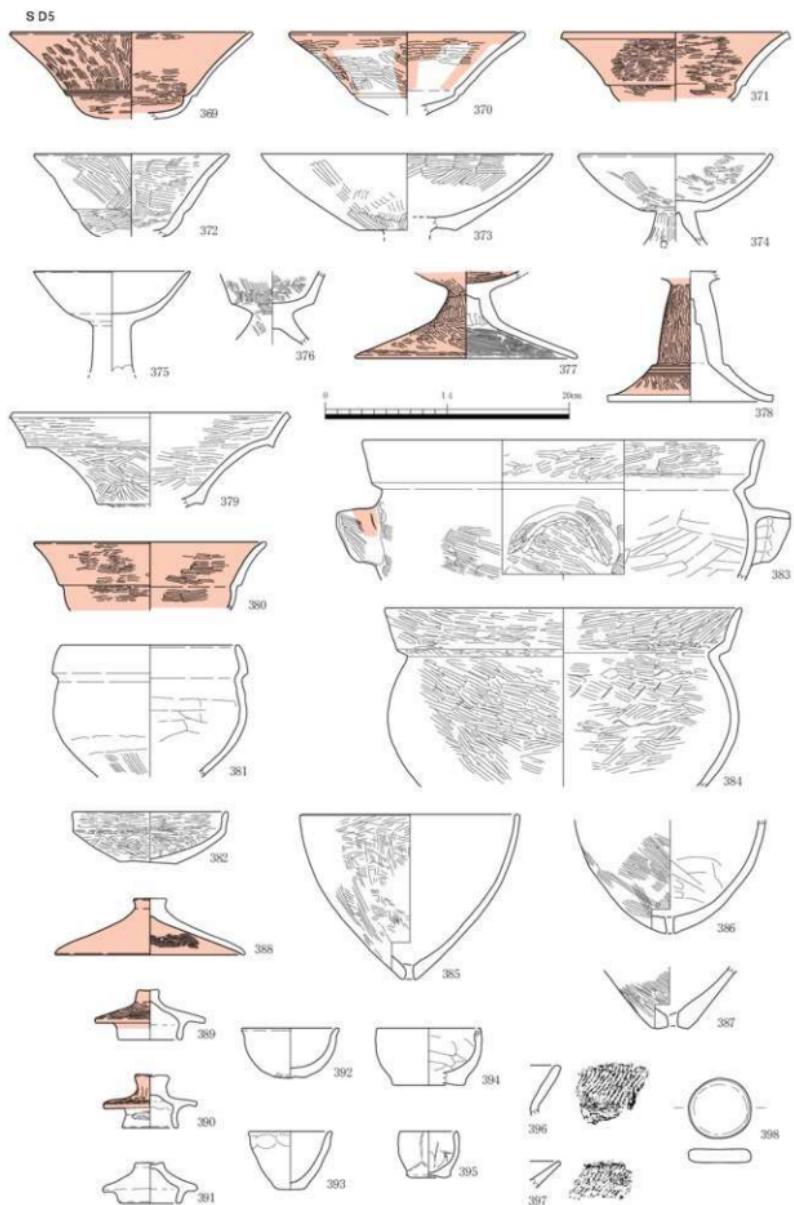
SD5

SD5



第145図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

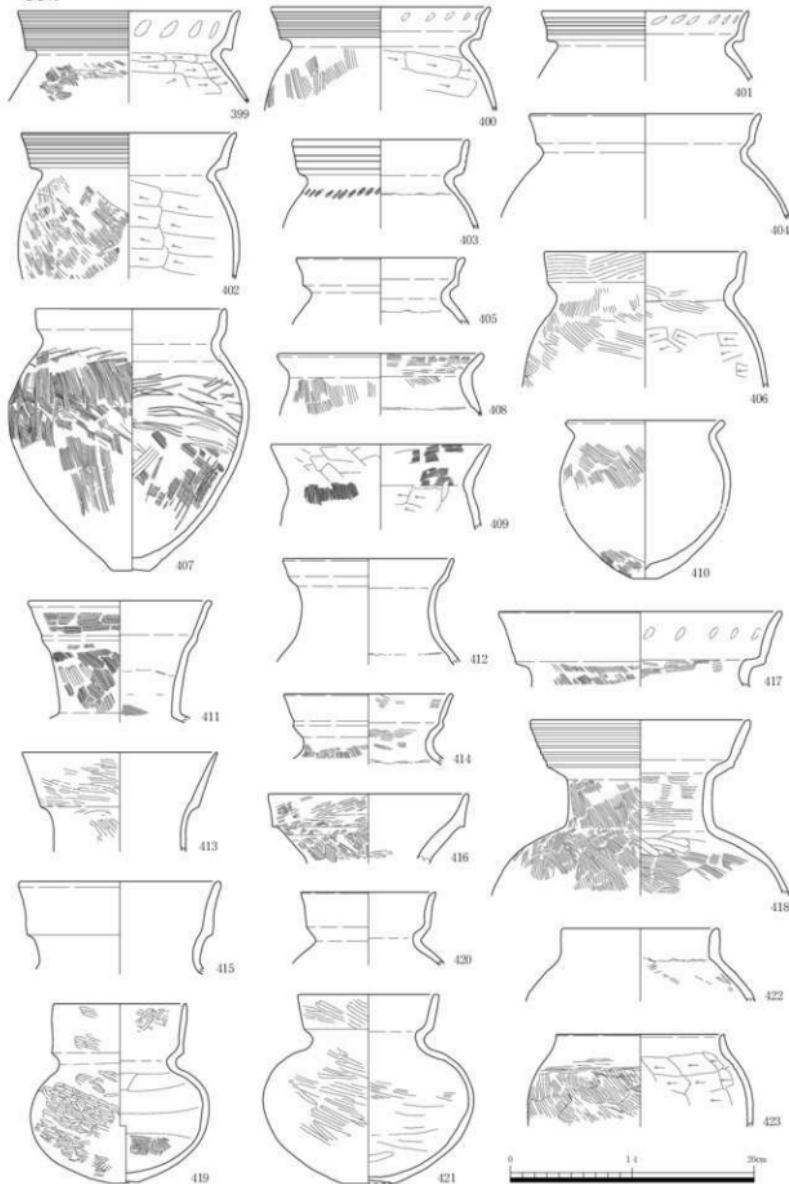
SD5



第146図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

S D5

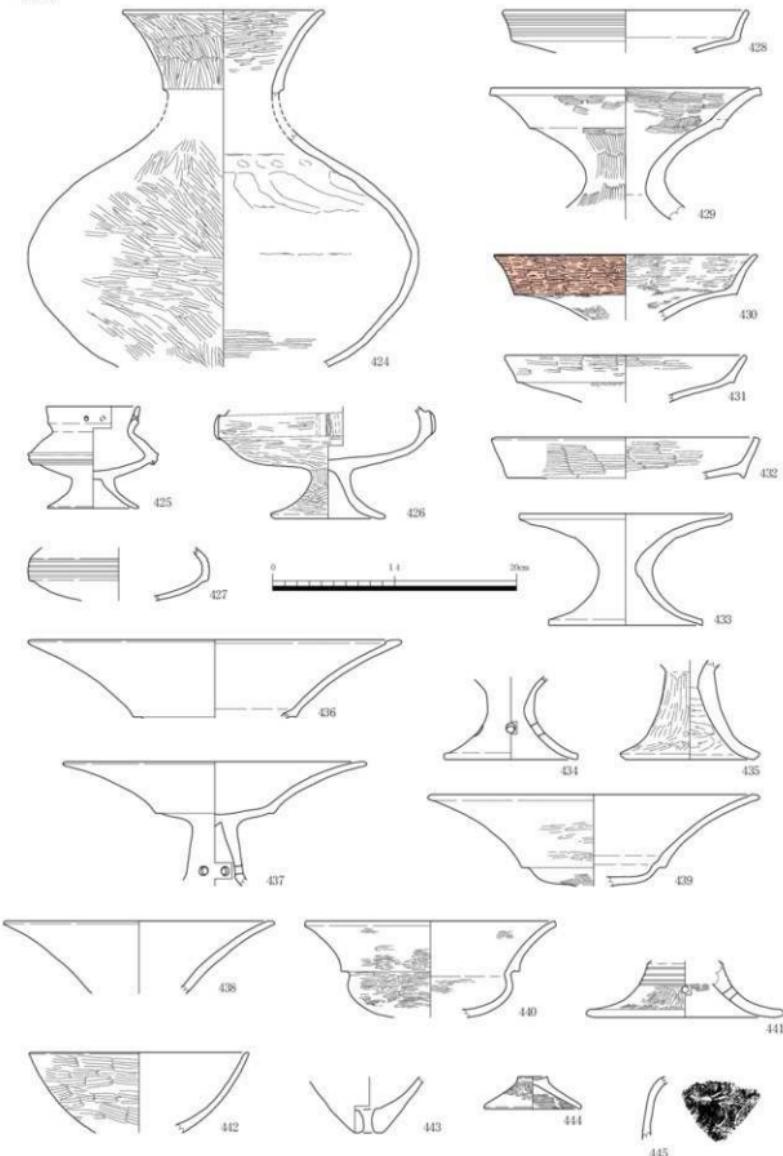
S D10



第147図 新堺西遺跡 遺物実測図 (1/4)

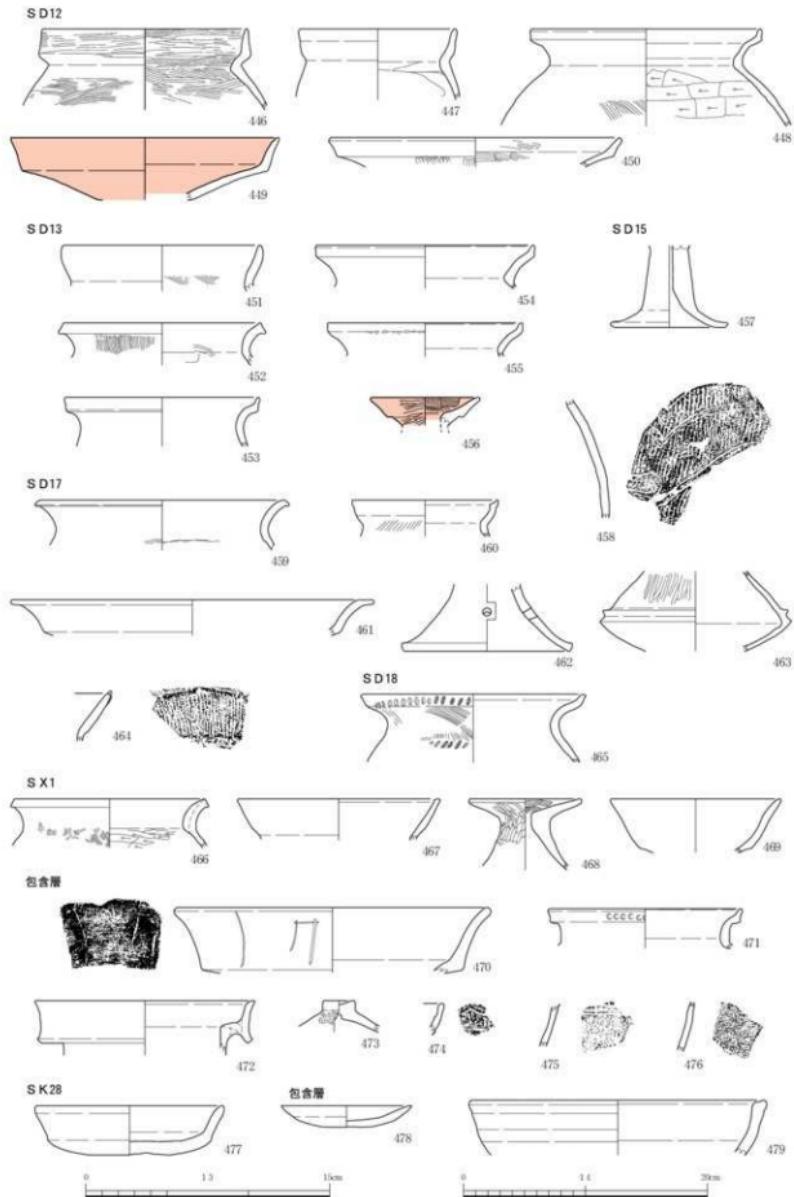
S D10

SD10



第148図 新堀西遺跡 遺物実測図 (1/4)

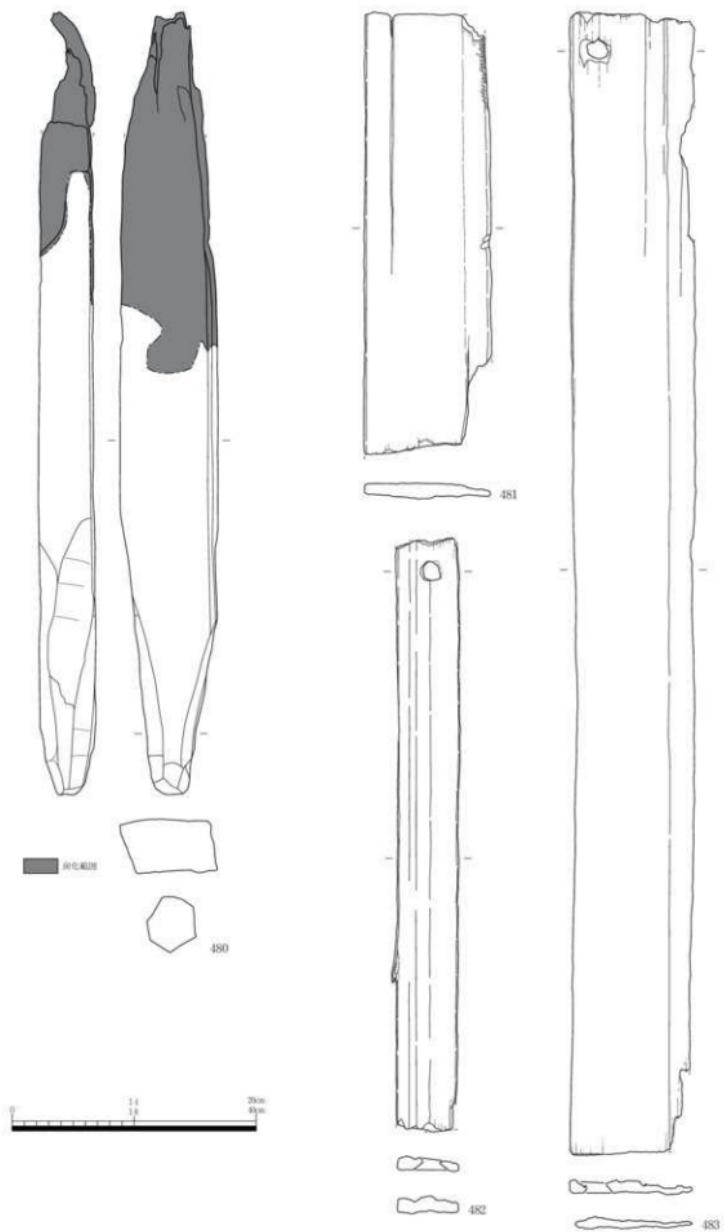
SD10



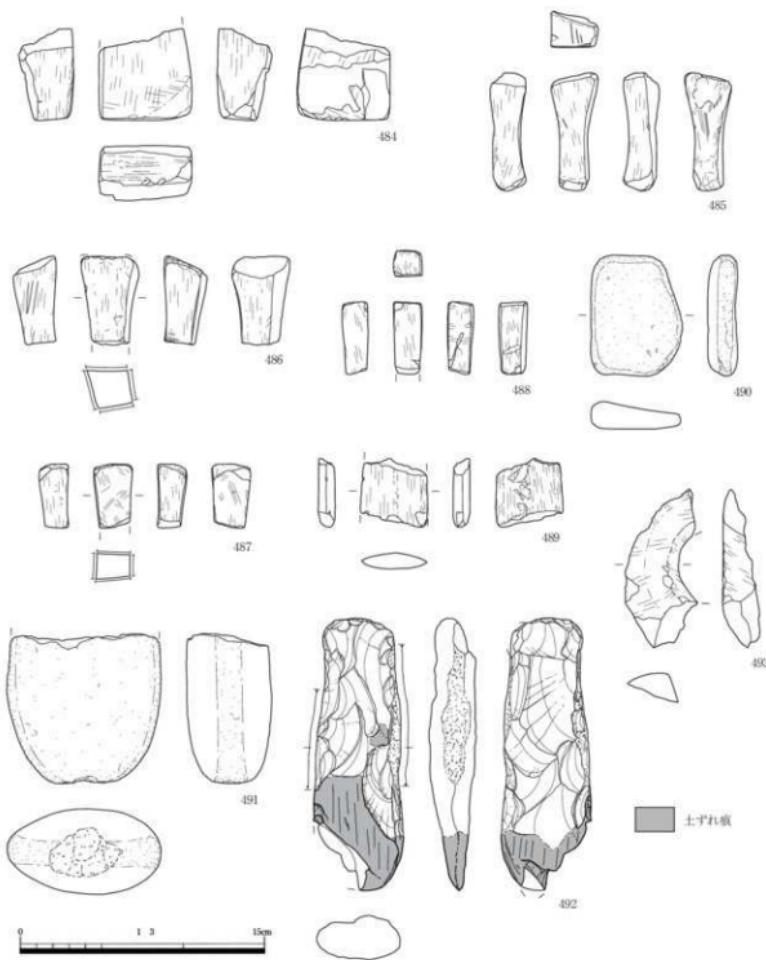
第149図 新堺西遺跡 遺物実測図 (477・478 1/3, 446~476・479 1/4)

S D12 (446~450) S D13 (451~456) S D15 (457~458) S D17 (459~464) S D18 (465) S X1 (466~469)

S K28 (477) 包含層 (470~476, 478~479)



第150図 新堀西遺跡 遺物実測図 (480 1/4, 481~483 1/8)
S D5 (482・483) S X1 (480, 481)



第151図 新堺西遺跡 遺物実測図 (1/3)

S I 7 (484) S I 8 (485) SK17 (491) SD5 (486~490・492) 包含層 (493)

5 自然科学分析

(1) 樹種同定

A はじめに

新堀西遺跡（富山市水橋新堀地内）は、現在の常願寺川の右岸、常願寺川扇状地の扇端付近に位置する。深井（1982）によれば、これらの遺跡の周辺は常願寺川新扇状地と上市川扇状地との間に形成された白岩川流域平野に相当し、新堀西遺跡は白岩川左岸に立地する。本報告では、新堀西遺跡の発掘調査で出土した木製品の樹種および木材利用の検討を目的として、樹種同定を実施した。

B 試料

試料は、放射性炭素年代測定結果から弥生時代後期～古墳時代とされる旧河道（S D 5）から出土した木製品、および旧河道内より検出された集水施設（S X 1）を構成する部材などの計8点である。試料の詳細は結果とともに第42表に示す。

C 分析方法

試料の木取りを観察した後、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Richter他（2006）を参考にする。

D 結果

樹種同定結果を第42表に示す。分析に供された試料は全て針葉樹のスギに同定された。以下に解剖学的特徴等を記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晚材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

E 考察

今回の分析に供された試料は、板材、部材（板状、杭状）、杭から構成される。これらの試料の樹種同定の結果、いずれも針葉樹のスギに同定された。スギの木材は、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易である。木製品は、板状あるいは角棒状を呈することから、分割加工が容易なスギが選択、利用されたと考えられる。

（パリノ・サーヴェイ株式会社 高橋 敦）

引用文献

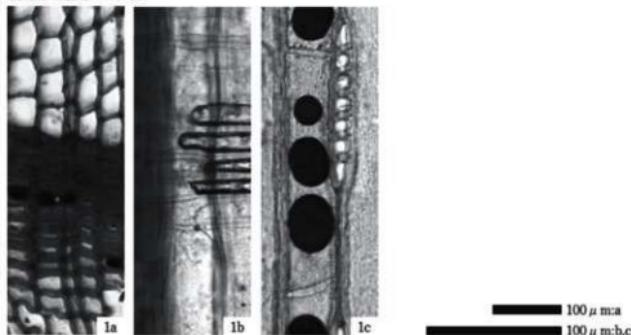
Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修). 海青社. p.70. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社. p.176.

第42表 新堀西遺跡の樹種同定結果

台帳番号	遺物番号	地区	遺構番号	出土地点	種類	形状	木取り	時期	樹種	備考
M070185		A	S D 5	最下層	板材	板状	板目	弥生時代後期～古墳時代	スギ	
M070207		A	S X 1		部材(杭状)	角棒状	分割材	弥生時代後期～古墳時代	スギ	
M070215	480	A	S X 1		部材(板状)	角棒状	分割材	弥生時代後期～古墳時代	スギ	先端杭状
M070218	481	A	S X 1		部材(板状)	板状	板目	弥生時代後期～古墳時代	スギ	
M070220	483	A	S D 5	最下層	板材	板状	板目	弥生時代後期～古墳時代	スギ	端部に孔あり
M070222	482	A	S D 5	最下層	板材	板状	板目	弥生時代後期～古墳時代	スギ	孔あり
M070224		A	S D 5	下層	杭	角棒状	分割材	弥生時代後期～古墳時代	スギ	
M070234		A	S D 5	最下層	板材	板状	板目	弥生時代後期～古墳時代	スギ	

新堀西遺跡の木材

1.スギ(M070215)
a:木口,b:径目,c:板目

(2) 石材鑑定

A はじめに

新堀西遺跡は常願寺川扇状地扇端付近に立地する。本報告では、石材鑑定結果と、各遺跡の地理的位置および地質学的背景を参考として、石材の由来について検討を行った。

B 試料

鑑定対象とされた石器・石製品は、弥生時代後期～古墳時代初頭の打製石斧1点、磨石1点、敲石1点、磨製石剣1点、砥石5点および不明1点の計10点である。各試料の詳細（遺物番号、台帳番号、遺構番号、出土地点等）は、鑑定結果とともに第43表に示した。また、確認された石質（岩種）のうち、代表的なものについては写真撮影を行い、写真図版に示した。

C 分析方法

鑑定は、野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。

D 結果

石質の鑑定結果を第43表、種類別に集計した石材組成を第44表に示す。

出土石材は、半深成岩類のドレライト1点、火山岩類の流紋岩1点、輝石安山岩（新第三紀）1点および輝石安山岩（第四紀）2点、堆積岩類の頁岩3点および砂質頁岩2点と鑑定された。なお、輝石安山岩については、変質鉱物の有無等から新第三紀の地質に由来すると判断されるものには「新第三紀」、未変質で火山ガラスが残存する火山岩については「第四紀」と付記した。

第43表 新堀西遺跡における石材鑑定結果

台帳番号	遺物番号	地区	遺構	出土地点	時期	種類	石質	備考
I070072	488	A	S D 5	X10Y47 最下層	弥生後～古墳初	砾石	頁岩	
I070073	486	A	S D 5	X13Y48 最下層	弥生後～古墳初	砾石	砂質頁岩	
I070075	487	A	S D 5		弥生後～古墳初	砾石	流紋岩	
I070077	489	A	S D 5	X10Y47 最下層	弥生後～古墳初	磨製石劍	頁岩	
I070080	490	A	S D 5	X12Y47 下層	弥生後～古墳初	磨石	輝石安山岩(第四紀)	
I070089	492	A	S D 5	X10Y47 最下層	弥生後～古墳初	打製石斧	ドレライト	
I070102	493	A	II層	X12Y37 周縁層 a付	弥生後～古墳初	不明	輝石安山岩(新第三紀)	
I070104	485	A	S I 8		弥生後～古墳初	砾石	頁岩	
I070122	491	A	S K17		弥生後～古墳初	砾石	輝石安山岩(第四紀)	
I070130	494	A	S I 7		弥生後～古墳初	砾石	砂質頁岩	

E 考 察

新堀西遺跡は常願寺川下流域の右岸側に位置する。遺跡周辺は扇状地の扇端部にあたり、東には白岩川が北流している。常願寺川および白岩川の河床や扇状地堆積物中の礫は、容易に入手できる在地性の石材とみることができる。常願寺川は立山連峰を源流とする河川であり、流域の地質については、山田ほか(1989)の20万分の1地質図「高山」に概略が示されている。常願寺川流域における古い地質として、先新第三紀基盤岩類の飛騨帶が中～上流域に分布している。飛騨帶は飛騨变成岩類とジュラ紀前期の船津花崗岩類からなり、ジュラ紀中期-白亜紀前期の堆積岩類を主体とする手取層群がこれらを覆っている。中流域では、岩稲層や八尾層といった中新世中期-後期の地層が厚く累重しており、安山岩溶岩・火碎岩、泥岩、砂岩、礫岩等の岩石から構成されている。白岩川は、これら中新統から構成される山地が源流となっている。第四紀火山噴出物としては、立山火山噴出物およびスゴ乗越安山岩が上流域に分布している。立山火山噴出物は、かんらん石や角閃石を含む輝石安山岩-デイサイトの溶岩・火碎岩等から構成されている。

以上の地質背景を踏まえると、新堀西遺跡より出土した石材はほとんどが在地性とみなせる石材から構成されている。半深成岩類のドレライト、火山岩類の輝石安山岩(新第三紀)は、中新統の岩稲層に由来する石材と推定される。輝石安山岩(第四紀)は、常願寺川上流に分布する立山火山噴出物に由来する可能性がある。堆積岩類の頁岩および砂質頁岩は、中新統の八尾層または古期堆積岩類を主とする手取層群に由来が求められる。いずれも希少石材ではないため、常願寺川河床礫や扇状地堆積物中の礫から容易に入手できたと考えられる。一方、砥石に認められた流紋岩については、常願寺川流域においてはほとんど採取できない石材であるため、移入された石材と考えられる。流紋岩類の分布は、小矢部川、庄川、神通川等に知られており、流域には中新統の医王山層や、白亜紀後期～古第三紀初期の濃飛流紋岩類、太美山層群等が広く分布している。また、上市町を流れる上市川流域にも太美山層群の小規模な分布が知られていることから、周辺地域より持ち込まれた準在地性の石材とみることができる。

第44表 新堀西遺跡出土石器・石製品の種類別石材組成

	弥生時代後期～古墳時代初頭						合計
	打製石斧	磨石	蔽石	磨製石斧	砥石	不明	
半深成岩類							
ドレライト	1	-	-	-	-	-	1
火山岩類							
流紋岩	-	-	-	-	1	-	1
輝石安山岩(新第三紀)	-	-	-	-	-	1	1
輝石安山岩(第四紀)	-	1	1	-	-	-	2
堆積岩類							
頁岩	-	-	-	1	2	-	3
砂質頁岩	-	-	-	-	2	-	2
合計	1	1	1	1	5	1	10

(パリノ・サーヴェイ株式会社 石岡智武)

引用文献

山田直利・野沢 保・原山 智・滝沢文教・加藤慎一・廣島俊男・駒沢正夫, 1989, 20万分の1地質図「高山」, 地質調査所,



(3) 放射性炭素年代測定

Aはじめに

新堀西遺跡は富山県富山市水橋新堀に所在する。弥生時代後期以降の集落に隣接する自然流路からは土器が多く出土しており、当該期の土器編年を検討する資料として重要である。自然流路から出土した土器に実年代を与えるために、同じく自然流路から出土した木材を試料として、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

B 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第45表のとおりである。

試料とした木材2点には、いずれも最外年輪はなかった。試料採取にあたっては、残存している中でできるだけ外側の1年輪分を選んだ。自然流路SD5の試料は板材である（PLD-18577）。SD5内の集水施設であるSX1の試料は杭状の部材である（PLD-18578）。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

C 結果

第46表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第152図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定

の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、 1σ 暦年年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年年代範囲であり、同様に 2σ 暦年年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

D 考 察

以下、 2σ 暦年年代範囲（確率 95.4%）に着目して、結果を整理する。

S D 5 の板材 (PLD-18577) は、574-647 cal AD (95.4%) で、6 世紀後半～7 世紀中頃の範囲を示した。この範囲は古墳時代後期に相当する。

S X 1 の杭状部材 (PLD-18578) は、436-489 cal AD (18.6%) および 530-601 cal AD (76.8%) で、5 世紀前半～7 世紀初頭の範囲を示した。この範囲は古墳時代中期～後期に相当する。

木材 2 点の暦年年代範囲は重複しており、ほぼ同時期の木材と考えて良いであろう。なお、発掘調査所見では、弥生時代後期～古墳時代初頭の時期と推定されたが、木材は 2 点とも推定された時期より新しい暦年年代範囲を示した。弥生時代後期～古墳時代初頭とされた土器と年代測定を行った木材が同時期に堆積したか検討する必要がある。

(バレオ・ラボ AMS 年代測定グループ 伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一 Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎)

参考文献

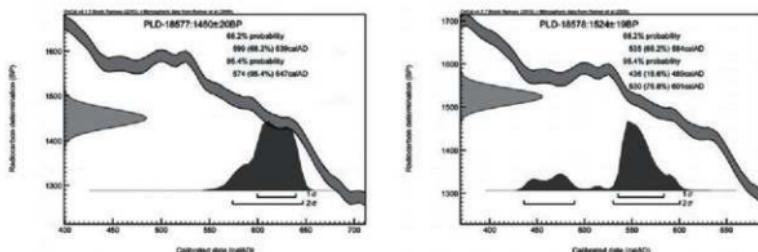
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, p.51(1), p.337-360.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: p.3-20.
 日本国第四紀学会.
 Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, p.51, p.1111-1150.

第45表 新堀西遺跡の測定試料および処理

測定番号	通跡データ	試料データ	前処理
PLD-18577	試料 No.1 台帳番号: M070185 遺跡名: 新堀西遺跡 遺構コード: A-SD5 出土地点: 最下層, 取上 No.2 種類: 板材	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪以外で部位不明(1 年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N)
PLD-18578	試料 No.2 台帳番号: M070207 遺跡名: 新堀西遺跡 遺構コード: A-SX1 出土地点: 取上 No.22 種類: 部材(杭状) その他: SD5 内塗水施設	試料の種類: 生材 試料の性状: 最外年輪以外で部位不明(1 年輪) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:12N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:12N)

第46表 新堀西遺跡の放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年で較正した年代範囲	
				1σ 曆年年代範囲	2σ 曆年年代範囲
PLD-18577	-25.53 \pm 0.12	1450 \pm 20	1450 \pm 20	599AD(68.2%)639AD	574AD(95.4%)647AD
PLD-18578	-24.45 \pm 0.14	1524 \pm 19	1525 \pm 20	535AD(68.2%)584AD	436AD(18.6%)489AD 530AD(76.8%)601AD



第152図 新堀西遺跡における曆年較正結果

6 総 括

(1) 遺構変遷

新堀西遺跡では縄文時代後期終末とその前後の土器が出土するが、明確な遺構は無く、その具体的な土地利用の内容は明らかでない。当該期の遺跡は、周辺では新堀遺跡・竹内東芦原遺跡（舟橋村教育委員会 2002）・利田横枕遺跡（立山町教育委員会 2001）などが分布しており、こうした遺跡群の動態と関連しつつ、新堀西遺跡においても人々の活動が及んできたと考えられる。

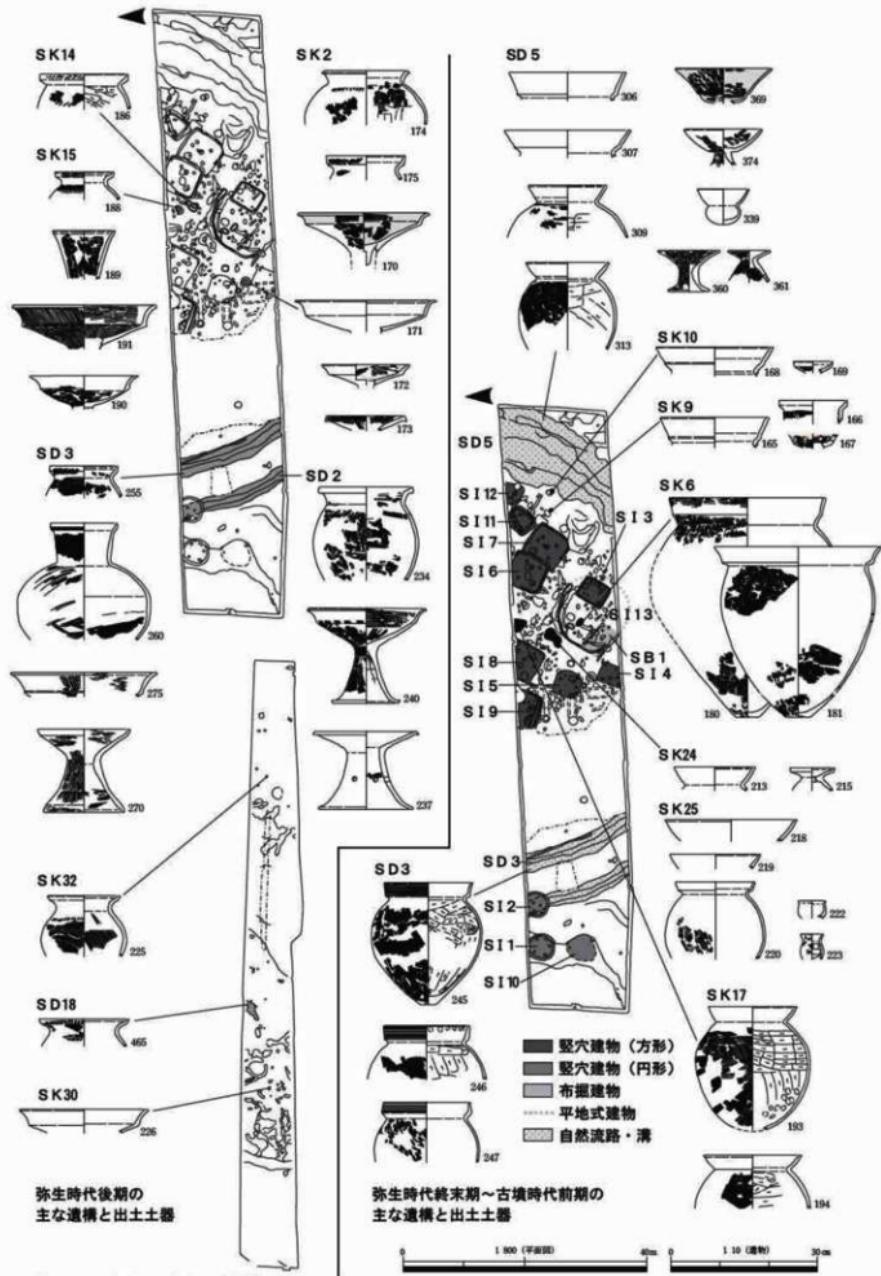
その後、弥生時代後期から遺構・遺物が確認され、弥生時代終末期～古墳時代前期には建物群が形成される。遺構・遺物の量とともに後者が中心で、当遺跡の主体的な時期と言える。自然流路内から出土した木材は放射性炭素年代測定の結果、古墳時代中期～後期となった。出土土器よりも後出する時期となり、調査区外に同時期の遺構が展開していた可能性がある。

これ以降は、中近世の土器がわずかに出土するのみで、土地利用は低調となった。

以下、主要な時期となる弥生時代後期～古墳時代前期の遺構変遷について示していく（第153図）。

A 弥生時代後期

弥生時代後期の土器は各種の遺構から出土するが、後出する時期の遺構への混入が多く、当期に存在していたと考えられるのは土坑・溝に限られる。A地区では中央付近に分布するSK2・14・15があり、西側にはSD2・3がある。B地区ではSK30・32、SD18がある。この様に、当期の遺構は散在して分布しており、建物も確認されない。SD2・3は平行する溝で、SK2・14・15などが分布する範囲を囲繞するような2重の環濠であった可能性がある。ただし、先述したように、その範囲には同時期の遺構分布は少なく、建物も確認されないため、環濠集落となり得たかは不明である。また、SD3からは後述するように弥生時代終末期の土器も出土しており、最終的な埋没の時期は下る。



第153図 新堀西遺跡 遺構変遷図

出土遺物の時期は漆町編年2群（田嶋1986）に相当する。甕は刺突受口甕や、くの字口縁の甕を中心とし、肩部に刺突が巡るものが目立つ。該当する遺構から出土する有段口縁甕で口縁部の立ち上がりが短い個体である248・249などは同時期と考えられる。壺は長頸壺・有段長頸壺を主とし、高杯は有段高杯で口縁部は外反するが長く伸びない。器台は外反器台の他、有段気味となる279がある。周辺遺跡では江上A遺跡における後II期（久々1984）とされる土器群と同様の時期と考えられる。

以上の様に、弥生時代後期の主要な遺構は、後期後半の法仏式期⁽¹⁾が中心と考えられる。

この他に、遺跡からは後期前半の天王山式土器と関連する土器も破片資料であるが出土している。いずれも小破片で散漫な分布をしており、遺跡内でどのような活動がなされていたかは明かでない。周辺の遺跡では佐伯遺跡（富山県教育委員会1979）、飯坂遺跡（上市町教育委員会他1981）、上梅沢遺跡（本書：第三章）でも出土事例があり、当該期には東北地方との交流がなされ、その一端が新堀西遺跡にも及んでいたことを示している。

B 弥生時代終末期～古墳時代前期

弥生時代終末期以降では主にA地区で建物群を中心として遺構が形成される。B地区でも当該期の遺物が出土するが、遺構は土坑や溝が散在するのみで、その形状も不整形で性格不明なものとなる。時期は不詳であるが、B地区西端のSD16は人為的に掘削された溝であり、この範囲まで集落の縁辺として利用されていた可能性を示している。ここでは主要な遺構を検出したA地区での変遷を示しておきたい。

①建物群

堅穴建物にはSI3～9・11・12がある。出土遺物は埋土中からの出土であり、最終的な埋没以前の土器も含まれている。そのため、出土土器（第154・155図）の中で最も新しい段階のものを堅穴埋没の時期として捉え、さらに重複関係も含めて変遷を考えていく。

SI3は高杯（30・31）・器台（28・29）の脚部が低脚化し、口縁端部が先鋭化した擬凹線甕（17）も含まれており、漆町5群段階とする。SI4は出土遺物が少なく判然としないが、擬凹線を施した台付壺（34）があることから漆町4・5群とする。SI5では、擬凹線甕は口縁端部（36～38）が丸みを帯びており、漆町3群段階とするが、装飾器台（44）の出土もあり漆町4～6群の埋没と考えておく。SI6は小型器台（71～73）・擬凹線甕（50～52）・台付壺（63～68）が一定量あることから漆5群段階が中心となるが、布留系甕（59）の出土から埋没は漆町8群段階以降となる。SI7はやや小型化した高杯（102）から漆町4群段階とする。SI8は口縁部が内湾気味立ち上がる布留系甕（113）が漆町編年における布留系甕の甕I類の第3類に比定される。この甕I類の第3類は漆町8群段階が中心とされているが、擬凹線甕や有段口縁の甕を伴わない点からは漆町9群までを考えることができる。ただし、堅穴埋土に含まれる破片資料であるため、土器の組成は不確実であり、漆町8群としておきたい⁽²⁾。SI9は口縁端部の先鋭化した有段甕（121）や、やや小型化した高杯（129）から漆町4群段階とする。SI11は有段甕（133）から漆町4群段階とする。SI12は小型の椀形高杯（149）から漆町5群段階とするが、甕に擬凹線・有段甕が含まれないこと踏まえると時期が下る可能性もある。

以上の点から、堅穴建物は4群段階にSI7・9・11、5群段階にSI3・12、4・5群段階にSI4、4～6群段階にSI5、8群段階にSI6・8が該当する。重複関係からはSI7→SI6、SI11→SI12が確認されており、出土土器の様相からの前後関係とも整合する。

平地式建物SI13では、その周溝となるSD10から多くの土器が出土する（第147・148図）。SD

10の出土土器では、甕は擬回線甕（399～403）と有段甕（404～407）を中心とし、擬回線甕の口縁端部は尖鋭化する。壺には中型の有段壺（419～421）が加わる。高杯は口縁部の伸長する有段高杯（436）・有段鉢形高杯（439）があり、後者には小型化した440も出土する。高杯や器台は縮小化が進んでいないものが中心で漆町3群段階、擬回線甕の口縁形態や小型化した有段鉢形高杯からは漆町4群段階が考えられ、時期幅を有する。出土状況でも両者が混在した状態で出土していることから、最終的な埋没は漆町4群段階と考えておく。この他に、有段台付壺の435が出土する。口縁部下端に穿孔がある点から、山陰地域の装飾台付壺の影響を受けたと考えられるが、胴部突堤に擬回線を加飾するのみである。翠尾I遺跡における同時期の出土例（八尾町教育委員会1997）では、直線文や綾杉文による加飾がなされており、435では簡素化が進んだ段階といえる。

布掘建物SB1の布掘り溝となるSD8の出土土器は少ないものの、擬回線甕（157）では口縁端部は丸みを帯び、外反も弱い点から漆町3群に収まると考えられる。SB1は、位置的にはSI13の周溝SD10と重複しているが、その部分はSK1に両者が切られているため前後関係は不明である。出土土器の点から、SB1→SI13の構築順を想定しておきたい。なお、布掘建物は倉と考えられ、北陸地域では弥生時代後期後半以降、古墳時代初頭まで存続しており、分布は加賀地域から越前地城北・中部に偏在することが指摘されている（田嶋1991）。

堅穴建物の可能性があるSI1・2・10は円形を呈し、A地区の西部に位置する。出土遺物はSI10を想定する範囲内から台付壺（132）が出土するのみである。132からは漆町4・5群が考えられる。SI1・10はSD2の埋没以降に構築されている。SD2は弥生時代後期の土器が出土するのみだが、平行するSD3からは終末期までの土器が出土する。SD2・3の埋土堆積状況は類似しており、最終的な埋没も同様であった可能性が高い。そのため、SD2の埋没も終末期であるとすれば、SI1・10はそれ以後の時期と考えることができ、SI2も同様としておきたい。

②土坑

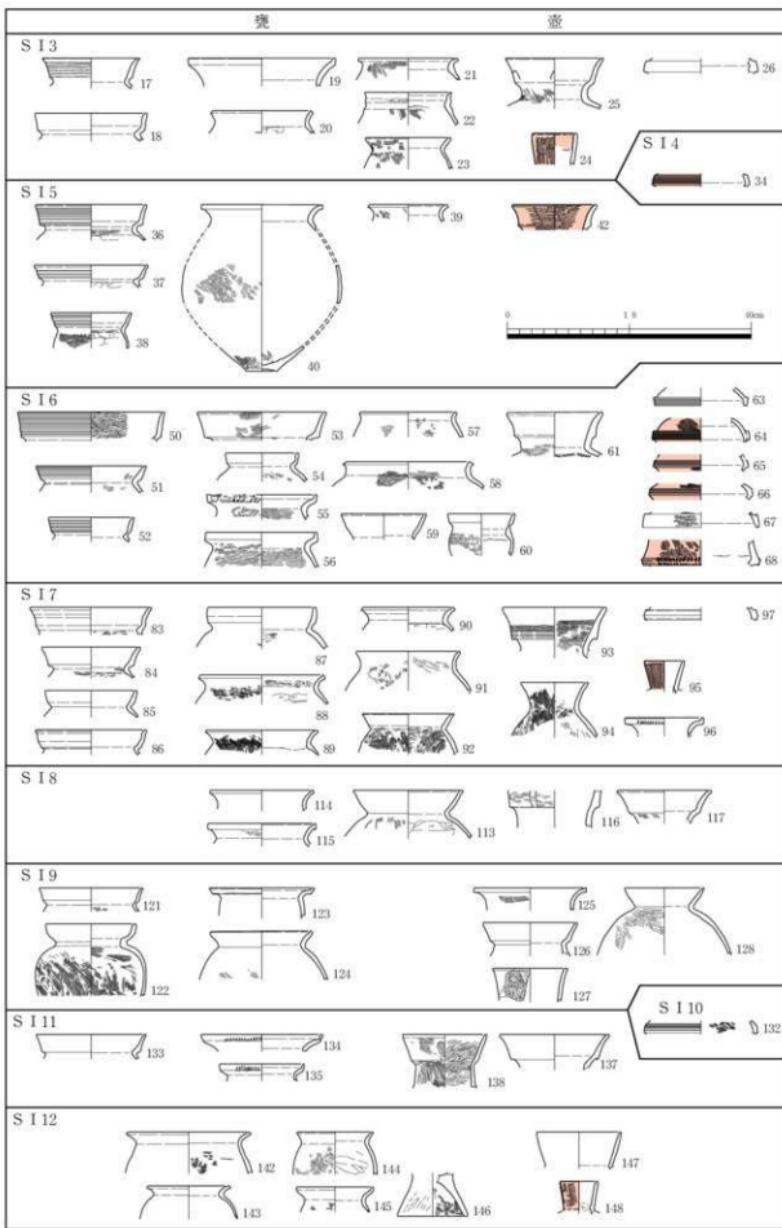
土坑については、出土土器から当期と考えられるものを示しておく。

SK6は大型の有段口縁甕（180・181）がある。口縁部は伸長するが、底部は径の大きい平底を呈しているため、漆町4群でも古相と考えられる。SK9からは有稜甕（168）・小型器台（169）、SK10からは有稜甕（165）・装飾器台（167）の出土がある。167は受部に穿孔がなされるが、漆町3～6群までの装飾器台とは異なり、その退化形態（田嶋1986）とも指摘されるものであり、漆町7・8群を中心とする。SK17・24・25からは布留系甕（193・194・213・218・219）の出土がある。口縁部形態から漆町第8群に比定する。各土坑は、付近の同時期の建物に関連していた可能性がある。SK6はSI13やSB1、SK17・24・25はSI8に隣接している。SK9・10は後述するSD5の埋没時期に近い。

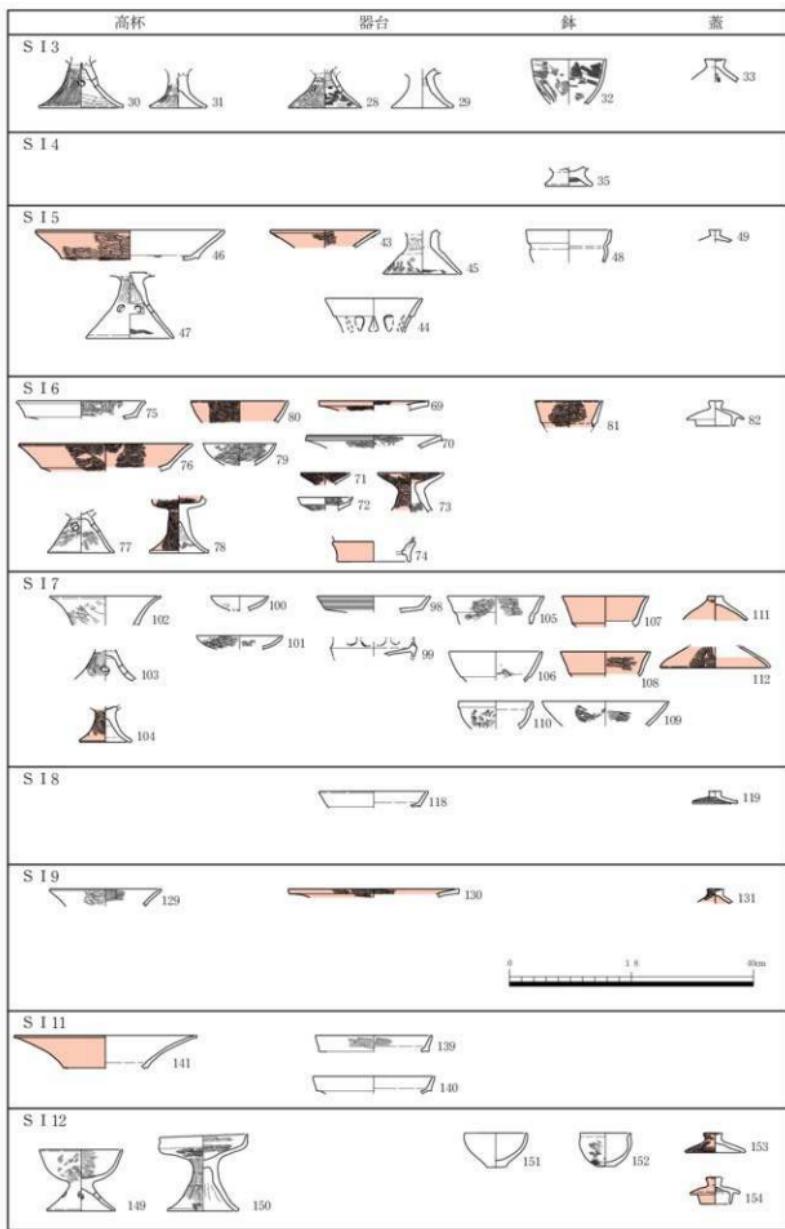
③溝・自然流路

溝はSD3があり、先述したように漆町2群の土器も出土しているが、擬回線甕（245～247）のように漆町4群の一群もある。最終的な埋没は漆町4群の段階と考えられ、一部の建物とは併存していた可能性がある。SD2は埋土の堆積状況がSD3と類似しており、同様に考えておきたい。

自然流路のSD5はその性格上、出土土器が複数の時期に渡る。埋土の最下層である黄灰色の砂質シルト・細砂から、各時期が混在して土器が出土している。古くは刺突受口甕（295～297）や有段高杯（368）が示すように漆町2群の段階がある。最終的な埋没は、布留系甕（309・313）・有稜甕（306・307）・小型丸底壺（339）・小型器台（361）などから漆町8・9群の段階と考えられる。



第154図 新堀西遺跡 堪穴建物出土土器組成図(1)



第155図 新堀西遺跡 竪穴建物出土土器組成図（2）

こうした主要な遺構の時期をまとめると、以下の様な変遷となる。

漆町3群段階：布堀建物S B 1、SD 3も併存していたと考えられる。

漆町4群段階：平地式建物S I 13、竪穴建物S I 7・9・11がある。S I 7・11は近接しているため、同時併存とはならず、2期に分かれると思われる。また、S I 13に前後してSK 6があり、SD 3は埋没を迎える。

漆町5群段階：竪穴建物S I 3・6・12があり、SD 3埋没後に形成されたS I 1・2・10は当段階以降の構築となる。また、漆町4あるいは5群段階にはS I 4、漆町4～6群段階にはS I 5が属していたと考えられる。

漆町6・7群段階：明確な遺構は無いが、SK 9など土坑の一部も該当していた可能性がある。

漆町8群段階：S I 6・8があり、SD 5下層は埋没する。SD 5の出土遺物は一部が漆町9群まで下る可能性があり、下層の最終的埋没時期を示す。

これ以降として、SD 5内に構築されたSX 1は、使用した木材の放射性炭素年代測定の結果からは古墳時代中期まで時期が下るが、当該期の土器は出土していない。

この様に、弥生時代終末期～古墳時代前期、つまり月影式期～古府クルビ式期を中心として建物群が変遷しつつ、集落が形成されていた。

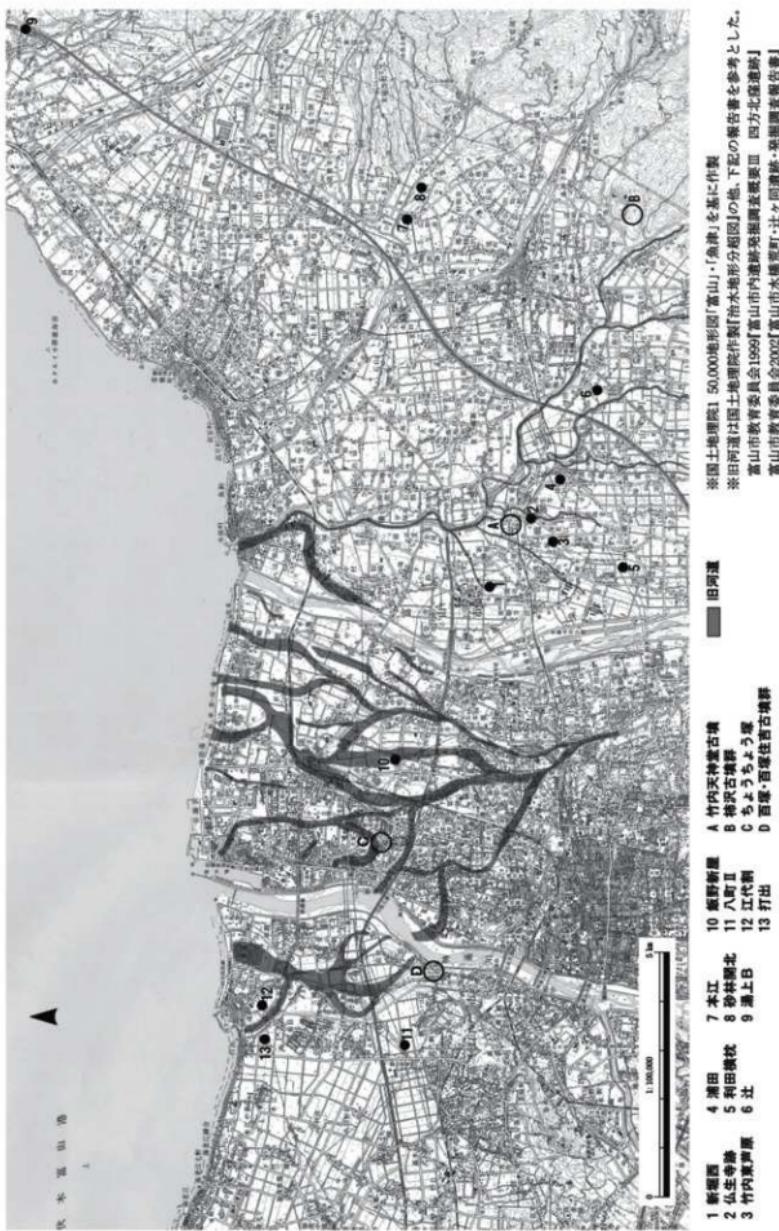
月影式期ではSD 2・3が法仏式期から存続し、その後埋没する。SD 5も当該期の土器が出土していることから、自然流路と2重の溝によって区画された範囲に集落が形成されていたと思われる。この区画が集落を囲繞する環濠集落と即断するのは、調査区外での様相が明らかでないため、ためらわれる。ただし、富山県内における防衛的機能を有した集落が県中央部～東部に偏在し、そうした防衛的集落は月影式期には解体していく過程が指摘（高橋1995）される点を念頭に置けば、環濠集落として機能した可能性もあり、月影式期には環濠が放棄され埋没していく様相も一致すると言える。

一方、防衛的集落の解体後は、それまでの集落が消滅し新たな場所で集落の造営がなされたとされる（高橋1995）。これに対して、新堀西遺跡では月影式以降も、白江式期、古府クルビ式期の建物群が確認されており、古墳出現期の地域的な社会再編の中においても継続していった集落と言えよう。

（2）周辺遺跡の様相と新堀西遺跡の成立要因

遺構変遷において見たように、新堀西遺跡の集落は月影式期～古府クルビ式期を中心として、継続的に営まれた。先述したように、月影式期で断絶し、新たな集落へと再編されていくとされる県内の様相とは異なる点が注目される。ここでは、周辺における同様な時期の集落の分布やその様相を確認し、その動態の中での新堀西遺跡の位置付けを考えていく。

新堀西遺跡の位置する白岩川流域では仏生寺跡（2：第156図中の番号、以下同様）、竹内東芦原遺跡（3）、浦田遺跡（4）、利田横枕遺跡（5）、辻遺跡（6）がある。仏生寺跡（舟橋村教育委員会2001）では白江式期の竪穴建物2棟が検出されている。竹内東芦原遺跡（舟橋村教育委員会2002）では月影式期と白江式期の竪穴建物が各1棟ある。また、後世の畠遺構への混入であるが布留系甕の破片が出土しており、古府クルビ式以降の活動も想定できる。浦田遺跡（舟橋村教育委員会2000）では古府クルビ式期の建物が3棟確認されている。いずれも周溝が巡る平地式建物と考えられる。利田横枕遺跡（立山町教育委員会2001）では古府クルビ式期の竪穴建物5棟、高畠式期の竪穴建物1棟がある。古府クルビ式期から布留系甕があるが、主体的になるのは高畠式期となる。辻遺跡（立山町教育委員会1987）では土器ダマリから1～3群に分類された土器群の出土がある。1群は法仏式期、2群は古府クルビ式期、3群は高畠式期以降の古墳時代中期前半頃とされる。また、白岩川流域には古墳時代



第156図 新堀西遺跡 周辺遺跡の様相

前期において、竹内天神古墳（A）、柿沢古墳群（B）が存在する。竹内天神堂古墳（鹿島1999）は前方後方墳で、時期は明確ではないが古府クルビ式期と高畠式期との間頃とされている。柿沢古墳群（上市町教育委員会他1993）は1～7号墳が確認されおり、この内の5・6号墳が前方後方墳で古府クルビ式期、7号墳が前方後円墳で高畠式期となる。

上市川流域には本江遺跡（7）、砂林開北遺跡（8）がある。本江遺跡（小島1979）では堅穴建物3棟が確認される。1棟は出土遺物が少なく判然としないが、他の2棟は古府クルビ式期とされる。砂林開北遺跡（上市町教育委員会1998）では堅穴建物7棟があり、月影式期～白江式期に相当する。

早月川流域には湯上B遺跡（9）がある。湯上B遺跡（富山県教育委員会1982）では、堅穴建物4棟が確認されており、3棟は月影式期、1棟は古府クルビ～高畠式期となる。

神通川と常願寺川との間には飯野新屋遺跡（10）がある。飯野新屋遺跡（富山市教育委員会1984・1995）は井戸・溝などが確認されており、月影式期・古府クルビ式期の集落とされる。周辺には弥生時代後期以降に遺跡が増加し、ちょうちよう塚（C）との関わりが指摘されている。ちょうちよう塚（藤田他1981・古川1999）は方墳で、古府クルビ式期となる。

神通川左岸には八町II遺跡（11）、江代割遺跡（12）、打出遺跡（13）がある。八町II遺跡（富山市教育委員会2008）は高畠式期を中心とした集落で、掘立柱建物や井戸の他、円形周溝状の造構も検出されている。甕類では布留系甕の比率が約3割と高いことが示されている。江代割遺跡（富山市教育委員会1988）では古府クルビ式期の堅穴建物3棟が確認され、布留系甕の出土もある。布留系甕は口縁端部内面が肥厚しない形態のものである。打出遺跡（富山市教育委員会2004・2006）では法仏式期～高畠式期にかけての各時期の堅穴建物が確認されている。これらの遺跡が分布する平野を望む呉羽山丘陵北端に位置するのが百塚・百塚住吉遺跡（D）である。百塚・百塚住吉遺跡（富山市教育委員会2009・2012）では弥生時代後期には方形周溝墓の造営が開始され、白江式期には前方後方型墳丘1基、古府クルビ式期には前方後方墳2基・前方後円墳2基・方墳2基・円墳1基が造営される。

以上が、新堀西遺跡周辺における同時期の主要な遺跡の様相である。

集落は単時期あるいは、前後する2時期となる場合がほとんどを占める。その中にあって、打出遺跡は法仏式期～高畠式期まで継続的に営まれており注目される。打出遺跡やその周辺遺跡は、百塚・百塚住吉古墳群とともに呉羽山丘陵北部の遺跡群を形成し、「畿内の影響を浸透させるための足がかりとなった地城」（鹿島2008）とされる。また、打出遺跡は鉄器の保有状況から神通川・常願寺川河口における拠点的な集落と位置付けられている（小黒2006）。前期古墳の出現に際して、その前段階から続くような長期継続型の拠点的な集落が存在していたことを示している。

新堀西遺跡においても、法仏式期の活動も認められ、一部は高畠式に下る可能性も指摘しているよう、打出遺跡と同様に長期継続型の集落である可能性が高い。周辺には古府クルビ式期～高畠式期に竹内天神堂古墳が造営され、月影式期以降の短期的な集落も点在する。こうした短期的な集落の中核となり、古墳造営を支えた拠点的な役割を新堀西遺跡が果たした可能性がある。ただし、竹内天神堂古墳は前方後方墳であり、前方後円墳の出現は高畠式期の柿沢古墳群7号墓を待たねばならない。新堀西遺跡では高畠式期には集落は収束に向かっており、前方後円墳の出現に呼応して集落は新たに整理されていったのかもしれない。

さて、こうした長期継続型集落が成立するには、なんらかの要因があったと思われる。その1つとしては、打出遺跡のように交流拠点としての役割がある。交流拠点となることにより、新たな人・モノ

ノの流入や技術などの獲得が集落を長期的に継続することを可能にしたと考えられる。打出遺跡は河口付近に位置し、交流拠点として成立する地理的な要因がある。一方、新堀西遺跡は河口に面していないが、白岩川を用いた水運は近世まで活発であったとされ、白岩川の支流である新堀川が遺跡付近まで流れていることを踏まえると、当該期に水運の利用も可能だった可能性がある。装飾器台⁽³⁾や布掘建物、あるいは布留系甕といった非在地的な要素が認められることも、対外的な交流が活発であったことを物語っている。こうして、新堀西遺跡は新川地域において、前方後円墳出現前夜まで長期継続された拠点的な集落となり得たと考えられる。

(青山 晃)

註

(1) 器型式名とそれに対応する土器の様相については諸説あるが、漆町編年(田嶋 1986)に際して示されたものに従う。この型式名については、近年の再検討(田嶋 2006・2007)があるが、ここでは旧来のものに従う。漆町2群：法式、漆町3・4群：月影式、漆町5・6群：白江式、漆町7・8群：古府クルビ式、漆町9群：高晶式としておく。

(2) 富山県内における古墳時代の土器様相については、池野正男氏により検討がなされている(池野 2012)。それによれば、口縁端部内面の肥厚する布留系甕は3期(漆町9群併行、高晶式)とされる。それに先行する2期(漆町7・8群併行、古府クルビ式)では、口縁端部内面の肥厚が無い「布留傾向甕」が主流であるとしている。新堀西遺跡における布留系甕では、口縁端部内面が明瞭に肥厚する個体はSD5を中心に出土するが、少ない。このように一部が漆町9群段階に下るものの中、中心は漆町8群段階とした方が妥当と考えられる。

(3) 装飾器台は北加賀地域を中心に、北陸南西部での分布を主とする。富山県内における装飾器台の出土は新堀西遺跡を含めて14遺跡のみで確認される。特に出土量の多い高岡市藏野町東遺跡では、首長層クラスが介在した交流が指摘されている(青山 2013)。新堀西遺跡周辺では富山市旧岩瀬町(富山県埋蔵文化財センター 2007)や野田・平櫻遺跡(富山市教育委員会 1996)で出土例があり、これらの遺跡に影響を及ぼすような附屬の存在や対外交流があったことが想定できよう。

参考文献

- 青山 晃 2013 「第VI章 藏野町東遺跡 5 縦括」『下黒田遺跡 下佐野遺跡 諏訪遺跡 藏野町東遺跡 藏野町遺跡 駒ヶ根遺跡発掘調査報告書』富山県文化振興財団
- 池野正男 2012 「越中の古墳時代土器様相」『大境』第31号 富山考古学会
- 小黒智久 2006 「VI 縦括」『富山市打出遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
- 鹿島昌也 1999 「白岩川流域古墳群」『富山平野の出現期古墳』富山考古学会
- 鹿島昌也 2008 「V 縦括 1. 古墳時代の土器の様相と集落の位置付け』『富山市八日町II 遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
- 上市町教育委員会 1983 「北陸自動車道打出発掘調査報告一上市町土器・石器編-」
- 上市町教育委員会 1984 「北陸自動車道打出発掘調査報告一上市町土器・石器編-」
- 上市町教育委員会 1993 「富山市上町松崎古墳群」
- 久々忠義 1984 「I 縦括 B 朝鮮時代の時期区分」『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町木製品・縦括編-』上市町教育委員会
- 小島俊彰 1979 「第3章 遺構・遺物解説 本江遺跡」『滑川市史 考古資料編』滑川市史編さん委員会
- 高橋浩二 1993 「越中に於ける古墳出現期の様相」『大境』第17号 富山考古学会
- 田嶋明人 1986 「IV 考察 漆町標出土土器の編成的考察」『漆町遺跡I』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1991 「北陸の掘立柱建物」「弥生時代の掘立柱建物」埋蔵文化財研究会
- 田嶋明人 2006 「白江式再考」『吉岡康勝先生古希記念論集 陶磁器の社会史』桂書房
- 田嶋明人 2007 「法式と月影式」『石川県埋蔵文化財情報』第18号 石川県埋蔵文化財センター
- 立山町教育委員会 1987 「遺跡・漆田遺跡・漆田遺跡発掘調査概要」
- 立山町教育委員会 2001 「利根横枕跡」
- 富山県教育委員会 1979 「富山県東岸津市佐伯遺跡発掘調査概要」
- 富山県教育委員会 1982 「北陸自動車道跡発掘調査報告-魚津市編-」
- 富山県埋蔵文化財センター 2007 「早川往作観音品目録」
- 富山市教育委員会 1984 「飯野新屋遺跡発掘調査概要」
- 富山市教育委員会 1994 「富山市飯野新屋跡発掘調査概要」
- 富山市教育委員会 1994 「野田・平櫻遺跡、野中長崎遺跡 宮条南遺跡 高島島浦遺跡」
- 富山市教育委員会 1988 「B 江代遺跡」『昭和62年度 富山市埋蔵文化財発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 2004 「富山市打出遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2006 「富山市打出遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2008 「富山市八日町II 遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2009 「富山市百塚遺跡 百塚住吉B 百塚遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2012 「富山市百塚遺跡発掘調査報告書」
- 藤田富士夫・駒見和夫 1981 「ちょうちょう塚の概要と若干の考察」『大境』第7号 富山考古学会
- 舟橋村教育委員会 2000 「富山県舟橋村 淀田遺跡発掘調査報告(3)」
- 舟橋村教育委員会 2001 「富山県舟橋村 仏寺跡発掘調査報告」
- 舟橋村教育委員会 2002 「富山県舟橋村 竹内東芦原遺跡発掘調査報告」
- 古川知明 1999 「ちょうちょう塚古墳」『富山平野の出現期古墳』富山考古学会

第47表 新堀西遺跡 建物一覧

建物	地区	規模(m)			面積 (m ²)	方位	種類	平面形	出土遺物	備考	博団番号	写真図版
		長さ	幅	深さ								
SH1	A	4.63	4.49		16.31		壁穴?	円		SH1 P1~4・SD6により構成される >SD1	122	67
SH2	A	4.10	(3.52)				壁穴?	円		SH2 P1~4・SD7により構成される >SD2		
SH3	A	4.82	3.94	0.35	18.99	N 31° E	壁穴	方	弥生土器・石製品	>SD10	115	67・68
SH4	A	(3.65)	(2.15)	0.16		N 20° E	壁穴	方	弥生土器			
SH5	A	4.40	4.20	0.40	18.48	N 20° E	壁穴	方	弥生土器・弥生土器・石 製品	<SK16		
SH6	A	5.94	5.92	0.40		N 27° E	壁穴	方	弥生土器・石製品	>SD7		
SH7	A	6.46	(5.30)	0.43		N 34° E	壁穴	方	弥生土器・石製品	>SK23, <SH6・SK22・SD13	117	
SH8	A	5.84	(4.46)	0.30		N 30° E	壁穴	方	弥生土器・土師器・石製 品		118	67・69
SH9	A	(3.75)	(3.60)	0.30		N 18° E	壁穴	方	弥生土器・石製品		119	
SH10	A	(4.60)	(4.22)				壁穴?	円		>SD1	122	
SH11	A	4.74	3.72	0.40	17.63	N 46° E	壁穴	方	弥生土器	<SD12・SK23	119	69
SH12	A	3.49	(2.75)	0.15		N 18° E	壁穴	方	弥生土器・土師器	<SK20, >SD12		
SH13	A	10.00	(8.00)			N 35° E	平地式	多角		SD10が同様となる	120	67・69
SH14	A	4.80	3.30		8.10	N 48° W	布張	方		SB1 P1~4・SD8・9が異なる	123	68

第48表 新堀西遺跡 建物柱穴・地床炉一覧(1)

建物 番号	遺構	旧遺構 番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考	博団番号	写真図版
			長さ	幅	深さ					
S11	S11 P1	SP1	0.37	0.35	0.05	円				
	S11 P2	SP2	0.49	0.33	0.05	椭円				
	S11 P3	SP3	0.60	0.35	0.08	椭円				
	S11 P4	SP4	0.46	0.40	0.06	円				
S12	S12 P1	SP5	0.26	0.21	0.05	円				
	S12 P2	SP6	0.40	0.34	0.04	椭円				
	S12 P3	SP7	0.30	0.28	0.04	不要形				
	S12 P4	SP8	0.33	0.25	0.03	不規則				
S13	S12 P5	SK1	0.86	0.42	0.06	椭円		>SD2		
	S13 P1	SP9	0.30	0.28	0.07	円	弥生土器			
	S13 P2	SP98	0.48	0.32	0.08	不要形				
	S13 P3	SP95	0.34	0.29	0.11	椭円				
S14	S13 P4	SP93	0.40	0.35	0.10	椭円	弥生土器			
	S13 P5	SP37	1.00	0.80	0.13	椭円				
	S13 P6	SP36	0.88	0.56	0.30	椭円	約縫穴?			
	S13 P7	SP96	0.30	0.30	0.12	円	弥生土器			
S15	S13 P8	SP97	0.34	0.26	0.14	椭円	弥生土器			
	S13 P9	SP99	0.46	0.42	0.11	円				
	S13 P10	SP90	0.40	0.34	0.12	椭円	弥生土器			
	S13 P11	SP91	0.47	0.47	0.12	円				
S16	S13 P12	SP92	0.36	0.32	0.10	椭円				
	S13 P13	SP94	0.36	0.27	0.13	椭円				
	S14 P1	SP97	0.40	0.31	0.07	椭円	弥生土器			
	S14 P2	SP96	0.30	0.28	0.09	椭円				
S17	S15 P1	SP167	0.45	0.35	0.15	椭円	弥生土器			
	S15 P2	SP166	0.36	0.21	0.05	円				
	S15 P3	SP165	0.32	0.30	0.10	円	弥生土器			
	S15 P4	SP168	0.51	0.47	0.05	不要形	弥生土器	<SD15 P6		
S18	S15 P5	SP169	0.40	0.35	0.05	円	弥生土器			
	S15 P6	SP73	1.15	0.73	0.23	不要形	弥生土器	>SD15 P4		
	S16 P1	SP196	1.40	1.03	0.17	椭円		地火炉?		
	S16 P2	SP181	0.49	0.44	0.30	円	弥生土器			
S19	S16 P3	SP230	0.95	0.84	0.30	不要形	弥生土器			
	S16 P4	SP190	0.40	0.40	0.10	円	弥生土器			

第48表 新堀西遺跡 建物柱穴・地床炉一覧 (2)

建物番号	遺構番号	柱遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考	測定番号	写真図版
			長さ	幅	深さ					
S16	S16_P4	SP182	0.50	0.41	0.36	楕円	弥生土器		116	
	S16_P5	SK83	1.00	0.72	0.14	不規則	弥生土器	< S16_P6		
	S16_P6	SK82	0.80	0.59	0.14	楕円	弥生土器	> S16_P5		
	S16_P7	SP208	0.52	0.43	0.23	楕円	弥生土器			
S17	S17_K1	SK97	1.17	0.66	0.30	不規則		地床炉	117	
	S17_P1	SP231	1.20	1.08	0.38	円	弥生土器			
	S17_P2	SP185	0.55	0.46	0.26	楕円	弥生土器			
	S17_P3	SP186	0.63	0.52	0.40	楕円	弥生土器			
	S17_P4	SP183	0.50	0.48	0.33	円	弥生土器			
	S17_P5	SP184	0.54	0.48	0.13	楕円	弥生土器			
	S17_P6	SK93	0.95	0.89	0.17	楕円		隣床下で検出		
S18	S18_P7	SK94	1.17	0.68	0.26	楕円	弥生土器	隣床下で検出	118	
	S18_P1	SK75	0.95	0.80	0.44	楕円	弥生土器			
	S18_P2	SK76	0.66	0.54	0.20	円	弥生土器			
	S18_P3	SK77	0.81	0.73	0.12	不明	弥生土器			
	S18_P4	SP173	0.59	0.48	0.43	楕円	弥生土器			
	S18_P5	SP170	0.36	0.30	0.38	円	弥生土器			
	S18_P6	SP171	0.42	0.37	0.13	円	弥生土器			
	S18_P7	SP222	0.37	0.35	0.22	円				
	S18_P8	SP225	0.42	0.40	0.18	円	弥生土器			
	S18_P9	SP219	0.37	0.37	0.20	楕丸	弥生土器			
S19	S19_P10	SP223	0.40	0.37	0.19	円	弥生土器		119	
	S19_P11	SP220	0.50	0.49	0.13	不規則	弥生土器			
	S19_P12	SK91	0.70	0.45	0.16	不規則	弥生土器	隣床下で検出		
	S19_P13	SP221	0.54	0.36	0.44	楕円				
	S19_P14	SK92	2.16	1.56	0.37	楕円	弥生土器			
	S19_P15	SP174	0.42	0.49	0.34	円	弥生土器			
	S19_P2	SP175	0.47	0.34	0.30	楕円	弥生土器			
	S19_P3	SP164	0.57	0.45	0.19	楕円	弥生土器			
	S19_P4	SP188	0.30	0.26	0.12	円	弥生土器			
	S19_P5	SP189	0.21	0.18	0.14	円				
S20	S19_P6	SP190	0.20	0.20	0.09	楕円			120	
	S19_P7	SP191	0.25	0.23	0.11	円				
	S19_P8	SP192	0.23	0.22	0.07	円				
	S19_P9	SK71	0.77	0.58	0.12	楕円	弥生土器			
	S19_P10	SK78	0.76	0.68	0.20	円	弥生土器	> S19_P11		
	S19_P11	SP177	0.40	0.32	0.22	不規則	弥生土器	< S19_P10		
	S19_P12	SK79	0.97	0.54	0.13	楕円				
	S19_P13	SP176	0.30	0.28	0.14	円	弥生土器			
	S21_P1	SP157	0.23	0.19	0.15	円	弥生土器			
	S21_P2	SP100	0.36	0.32	0.15	円	弥生土器	> S21_P3		
S21	S21_P3	SP199	0.30	0.25	0.06	(楕円)		< S21_P2	121	
	S21_P4	SP101	0.60	(0.44)	0.14	(不規則)	弥生土器	< SD12		
	S21_P5	SP161	0.30	0.27	0.15	円	弥生土器			
	S21_P6	SP158	0.38	0.32	0.11	楕円				
S22	S21_P7	SP159	(0.33)	(0.32)	0.14	(円)	弥生土器	< SD12	122	
	S21_P8	SP178	0.30	0.30	0.08	円				
	S21_P9	SK88	0.45	0.32	0.10	楕円	弥生土器			
	S21_P10	SK89	0.86	0.64	0.20	楕円	弥生土器			
	S21_P11	SK21	1.36	1.08	0.40	不規則	弥生土器			
	S21_P12	SK23	0.80	0.51	0.43	楕円	弥生土器			
	S21_P13	SK67	1.00	0.43	0.67	不規則	弥生土器			
	S21_P14	SP193	0.41	0.34	0.24	楕円				
	S21_P15	SP25	0.40	0.31	0.37	円				
	S21_P16	SK33	0.83	0.50	0.22	楕円	弥生土器	< S21_P5		
S23	S21_P17	SP54	0.42	0.37	0.20	楕円	弥生土器		123	
	S21_P18	SP44	0.49	0.42	0.50	不規則	弥生土器			
	S21_P19	SK18	0.82	0.43	0.32	楕円	弥生土器			
	S21_P20	SP45	0.50	0.31	0.31	楕円				
	S21_P21	SP55	0.36	0.34	0.52	不規則				
	S21_P22	SP46	0.47	0.47	0.32	不規則	弥生土器			
	S21_P23	SP49	0.48	0.47	0.49	円	弥生土器			
	S21_P24	SP50	0.30	0.30	0.25	不規則	弥生土器			
	S21_P25	SP20	0.48	0.45	0.70	不規則				
	S21_P26	SP56	(0.50)	0.47	0.60	不規則	弥生土器			

第49表 新堀西遺跡 土坑一覧

遺構	地区	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	備考	挿図番号	写真図版
				長さ	幅	深さ				
SK1	A	SK4	不整形	1.50	1.05	0.15	弥生土器	>SD8・10		
SK2	A	SK6	楕円	1.65	1.50	0.24	縄文土器・弥生土器・石器			72
SK3	A	SK16	不整形	1.00	0.53	0.24	弥生土器			
SK4	A	SK17	不整形	1.16	0.91	0.30	弥生土器	>SD9・14, <SK5		
SK5	A	SK19	楕円	1.50	0.93	0.37	弥生土器	>SD9・14・SK4		
SK6	A	SK20	楕円	1.36	0.82	0.19	弥生土器	>SD10	124	72
SK7	A	SK22	楕円	0.85	0.61	0.18	弥生土器			
SK8	A	SK26	楕円	(1.54)	1.54	0.35	弥生土器	>SD10		
SK9	A	SK42	楕円	0.63	0.56	0.23	弥生土器			
SK10	A	SK43	不整形	0.83	0.50	0.23	弥生土器	>SK11, <SD5		
SK11	A	SK44	不整形	0.98	0.70	0.26	弥生土器	<SK10・SD5		
SK12	A	SK50	不整形	1.45	1.22	0.34	弥生土器			
SK13	A	SK54	楕円	1.71	0.82	0.30	弥生土器			
SK14	A	SK55	不整形	2.28	1.55	0.34	弥生土器			
SK15	A	SK59	楕円	1.53	1.00	0.27	弥生土器		125	72
SK16	A	SK60	楕円	0.83	0.65	0.25	弥生土器	>SI5		
SK17	A	SK68	不整形	1.27	1.24	0.50	弥生土器	<SD5		72
SK18	A	SK72	不整形	2.10	(1.97)	0.36	縄文土器・弥生土器・石製品			
SK19	A	SK84	不整形	1.17	1.06	0.18	弥生土器			
SK20	A	SK90	不整形	1.15	1.06	0.28	弥生土器			
SK21	A	SK85	楕円	3.00	(1.46)	0.65	弥生土器	>SI9		
SK22	A	SP140	楕円	0.54	0.47	0.20	弥生土器	>SI7		
SK23	A	SN1	(不整形)	1.70	(1.40)	0.50	弥生土器	>SI11, <SI7	126	
SK24	A	SN2	不整形	(3.10)	1.34	0.38	縄文土器・弥生土器・土師器・石製品	>SK25		72
SK25	A	SN3	不整形	2.00	(1.00)	0.52	弥生土器・石製品	<SK24		
SK26	A	SN5	不整形	2.15	(1.94)	0.80	縄文土器・土師器			
SK27	A	SN6	(不整形)	(3.46)	1.86	0.24	縄文土器・弥生土器			
SK28	A	SN7	(不整形)	5.23	(2.37)	0.30	縄文土器・弥生土器・中世土師器			
SK29	B	SK3	円	0.71	0.71	0.13	弥生土器		127	
SK30	B	SK9	不整形	0.54	0.32	0.14	弥生土器			
SK31	B	SK12	楕円	1.52	0.76	0.22	弥生土器			
SK32	B	SK62	円	0.34	0.32	0.25	弥生土器			72

第50表 新堀西遺跡 清一覧

遺構	地区	旧遺構番号	規模(m)			出土遺物	備考	挿図番号	写真図版
			長さ	幅	深さ				
SD1	A	SD1A		4.10	0.14	縄文土器・弥生土器	<SI1・10	128	
SD2	A	SD2		2.35	0.65	縄文土器・弥生土器	<SI2		70・71
SD3	A	SD3		2.73	0.80	縄文土器・弥生土器		128・129	
SD4	A	SD4				弥生土器	>SD3	128	
SD5	A	SD5		9.50	1.60	弥生土器・土師器・杭板材	>SK9・11・18・SD13	130	70・71
SD6	A	SD6		0.40	0.12	弥生土器	SI1周溝, >SD1	122	
SD7	A	SD7		0.38	0.06	弥生土器	SI2周溝, >SD2		
SD8	A	SD8	5.20	0.42	0.68	弥生土器	SB1布掘, <SK1	123	
SD9	A	SD9	4.82	0.34	0.50	弥生土器	SB1布掘, <SK4・5		
SD10	A	SD10・18		0.30~0.68	0.15~0.24	弥生土器	<SI3・SK1・8	120・121	69
SD11	A	SD11		0.40	0.20	弥生土器		120	
SD12	A	SD12		0.65	0.10	弥生土器	<SI12, >SI11	112	
SD13	A	SD16		1.26	0.41	弥生土器	<SD5	129	
SD14	A	SD19		0.42	0.14	弥生土器	<SK5・6	121	
SD15	B	SD1		1.90	1.20	縄文土器・弥生土器・土師器			
SD16	B	SD2		1.87	0.98	弥生土器・土師器			
SD17	B	SD10・11		0.54	0.15~0.30	弥生土器		131	71
SD18	B	SN15		1.50	0.35				

第51表 新堀西遺跡 不明遺構一覧

遺構	地区	旧遺構番号	規模(m)			出土遺物	備考	挿図番号	写真図版
			長さ	幅	深さ				
SX1	A	SX4	2.30	2.10		弥生土器・土師器・杭板材	SD5内で検出 集水遺構?	130	71

第52表 新堀西遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(1)

第52表 新堀西遺跡 土器・陶磁器・土製品一覽 (2)

第52表 新堀西遺跡 土器・陶磁器・土製品一覽 (3)

第52表 新編西漢諸 土器・陶磁器・土製品一覽(4)

編號	器物名	形狀	尺寸	新羅		高句麗		百濟		扶桑		備註
				新羅	高句麗	新羅	高句麗	百濟	扶桑	新羅	高句麗	
120	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0cm	新羅	3.5cm	新羅	16.8	13	10.9cm	新羅山產
131	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.6	14	10.9cm	新羅
132	71-S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	13.2	14	10.9cm	新羅
123	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
133	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
134	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
135	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
136	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
137	70-S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
138	70-S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
129	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
139	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
140	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
131	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
132	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
133	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
134	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
135	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
136	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
137	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
138	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
139	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
140	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
141	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
142	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
143	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
144	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
145	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
146	70-S10-2620	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
147	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
148	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
149	70-S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
150	70-S10-272	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
151	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
152	70-S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
153	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
154	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
155	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
156	70-S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
157	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅
158	S10	盤	直徑13.0cm	新羅	6.0	新羅	3.5	新羅	14.3	10	10.9cm	新羅

第52表 新堀西遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧 (5)

第52表 新羅西遺跡 土器・陶磁器・土製品一覽 (6)

第52表 新堀西遺跡 土器・陶磁器・土製品一覽(7)

第52表 新羅西遺跡 土器・陶磁器・土製品一覽 (8)

第52表 新堀西遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧 (9)

新堀西遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧 (10)

第52表 新堀西遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧 (11)

新堀西遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧 (12)

新堀西遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧 (13)

第53表 新堀西遺跡 木製品一覧

撮図番号	遺物番号	写真 図版	地区	遺構	出土地点	種類	法量(cm)			備考	樹種
							長さ	幅	厚さ		
150	480	85	A	SX1		杭	(64.1)	8.0	4.5		スギ
	481		A	SX1		板材	72.5	20.8	2.6		スギ
	482		A	SD5	最下層	板材	(97.4)	10.65?	2.8	円孔あり	スギ
	483		A	SD5	最下層	板材	187.4	20.8	2.0	円孔あり	スギ

第54表 新堀西遺跡 石製品一覧

撮図番号	遺物番号	写真 図版	地区	遺構	出土地点	種類	法量(cm・g)				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
151	484	83	A	SI7		砥石	5.55	5.63	3.32	142.0	砂質頁岩
	485		A	SI8	周壁溝	砥石	7.14	2.86	2.18	35.2	頁岩
	486		A	SD5	X13Y48 最下層	砥石	5.36	3.49	2.61	48.6	砂質頁岩
	487		A	SD5		砥石	3.89	2.34	1.79	24.8	流紋岩
	488		A	SD5	X10Y47 最下層	砥石	4.39	1.76	1.59	18.4	頁岩
	489		A	SD5	X10Y47 最下層	石劍	4.17	4.09	1.04	21.5	頁岩
	490		A	SD5	X12Y47 下層	磨石	7.31	5.54	1.83	106.5	輝石安山岩(第四紀)
	491		A	SK17		敲石	9.06	9.30?	5.17	585.0	右鍊? 輝石安山岩(第四紀)
	492		A	SD5	X10Y47 最下層	打製石斧	16.42	5.44	2.86	307.5	コレット
	493		A		II層 X12Y37	不明	9.56	4.38	2.26	62.5	環状石斧? 輝石安山岩(新第三紀)

写 真 図 版



上：上梅沢遺跡 B地区全景（北東から）
下：上梅沢遺跡 B地区竪穴建物出土土器

図版2



上：水橋金広・中馬場遺跡 A3・4 地区全景（西から）
下：水橋金広・中馬場遺跡 中世土器・陶磁器



上：水橋金広・中馬場遺跡 A3地区全景（東から）

下：水橋金広・中馬場遺跡 A8S地区古代道路跡（東から）



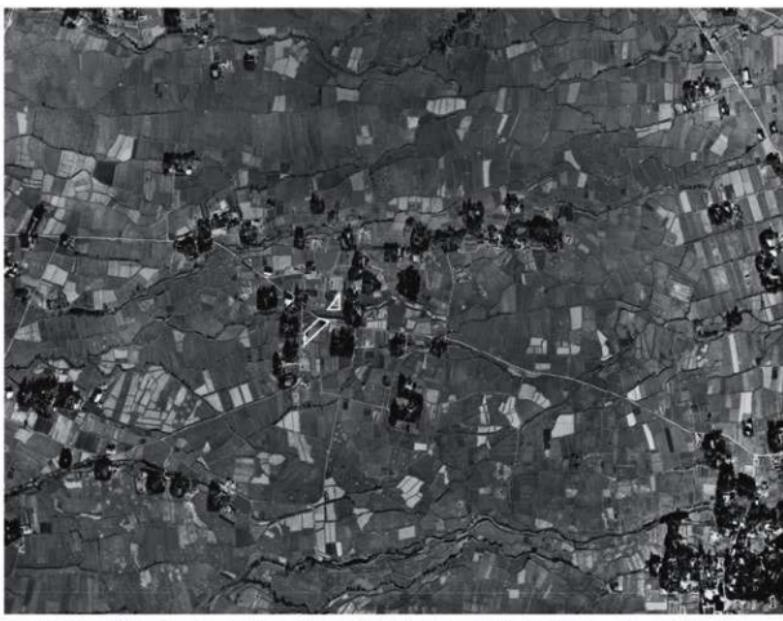
上：新堀西遺跡 遠景（北西から）
下：新堀西遺跡 全景（東から）



上：新堀西遺跡 全景（西から）
下：新堀西遺跡 建物群（南から）



上：新堀西遺跡 SD 2·3出土土器群
下：新堀西遺跡 SD 5出土土器群



航空写真

1. 上海沢遺跡（1952年） 2. 上海沢遺跡（2007年）

図版8



1



2

上梅沢遺跡

1. A地区全景（北西から） 2. A地区全景（西から）



上梅沢遺跡

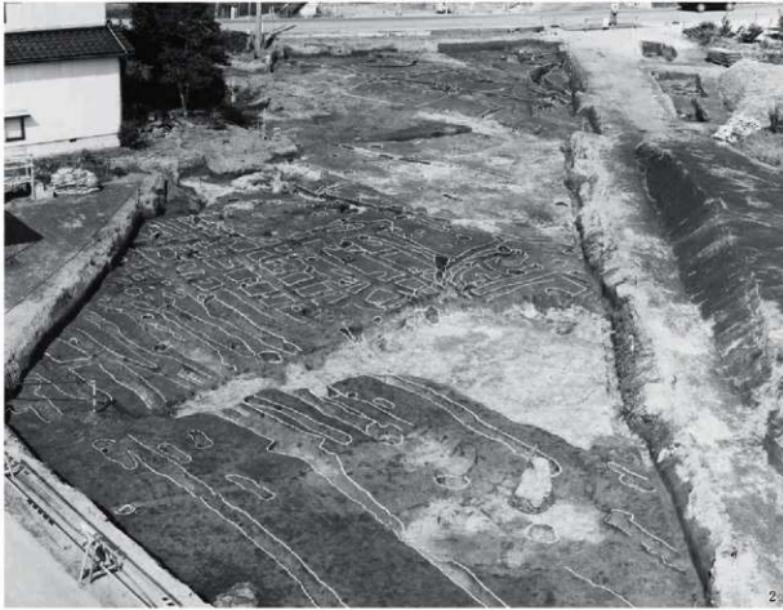
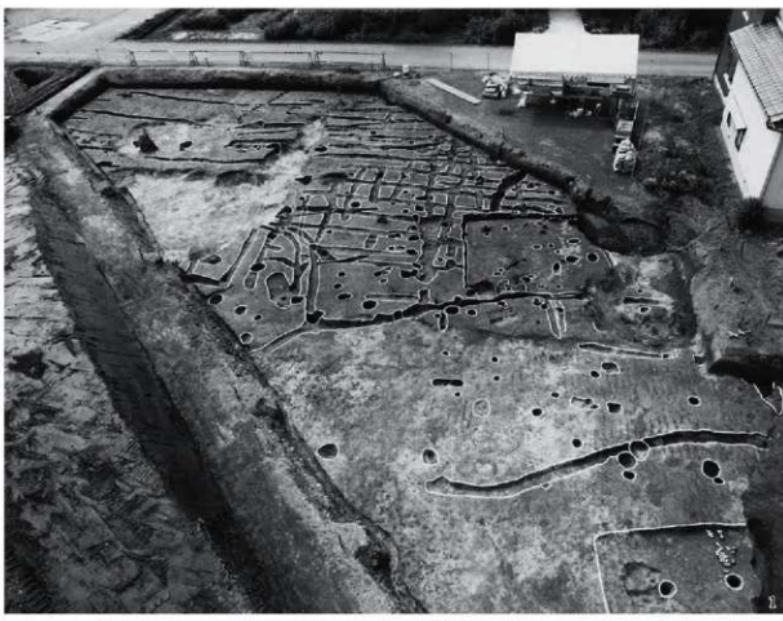
1. B地区全景（南東から） 2. B地区全景（南西から）

図版10



上梅沢遺跡

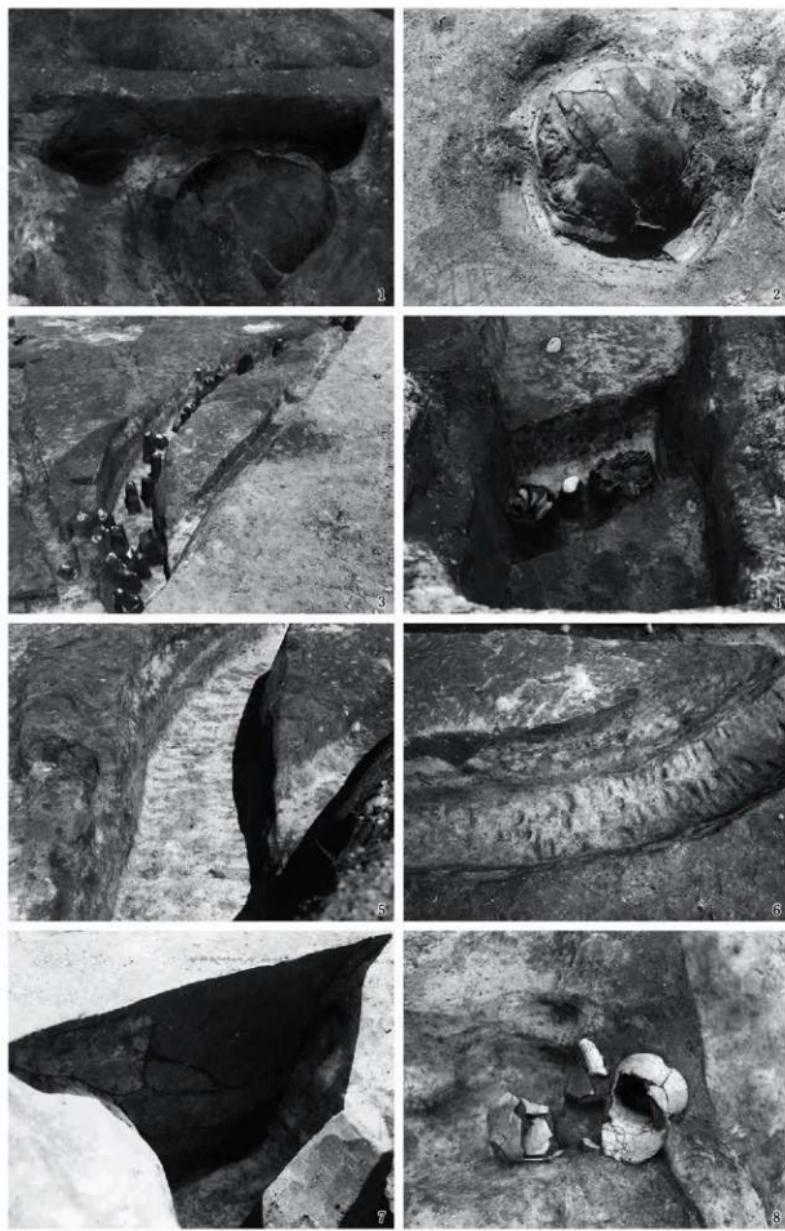
1. B地区全景（北から） 2. B地区全景（北東から）



上梅沢遺跡

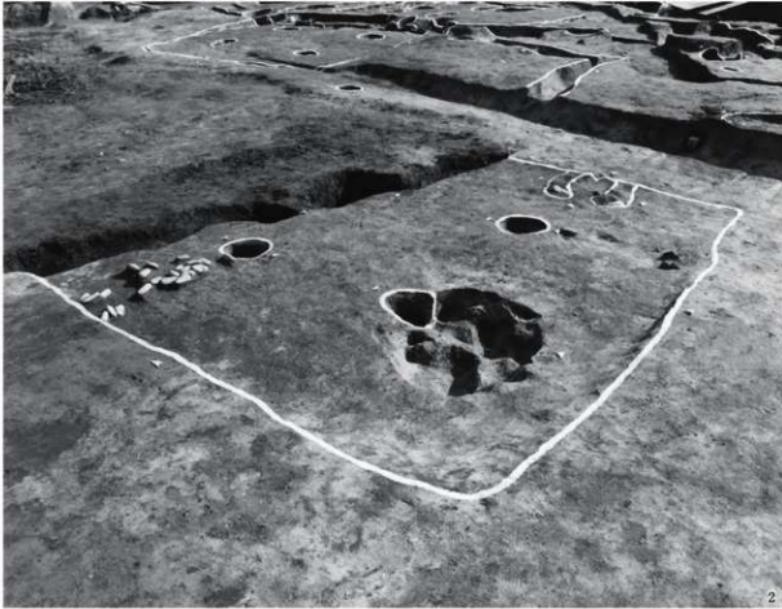
1. B地区中央（北東から） 2. B地区西側（南西から）

図版12



上梅沢遺跡

1. SX1193 (南西から) 2. SX1193遺物出土状況 (北から) 3. SZ 1 遺物出土状況 (南から) 4. SZ 1 遺物出土状況 (北西から)
5. SZ 1 工具痕検出状況 (南から) 6. SZ 1 工具痕完掘 (北西から) 7. SZ 1 (北東から) 8. SD1105 遺物出土状況 (南から)



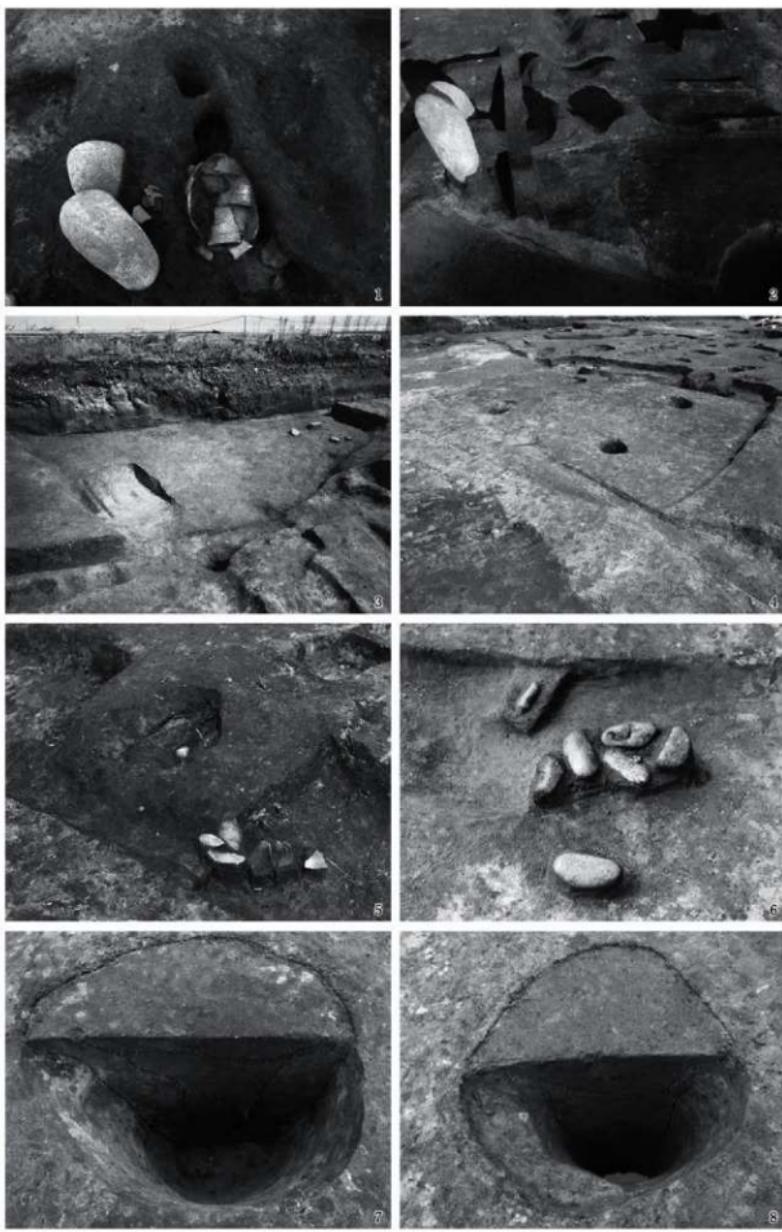
上梅沢遺跡

1. S I 1 (東から) 2. S I 4 (南西から)



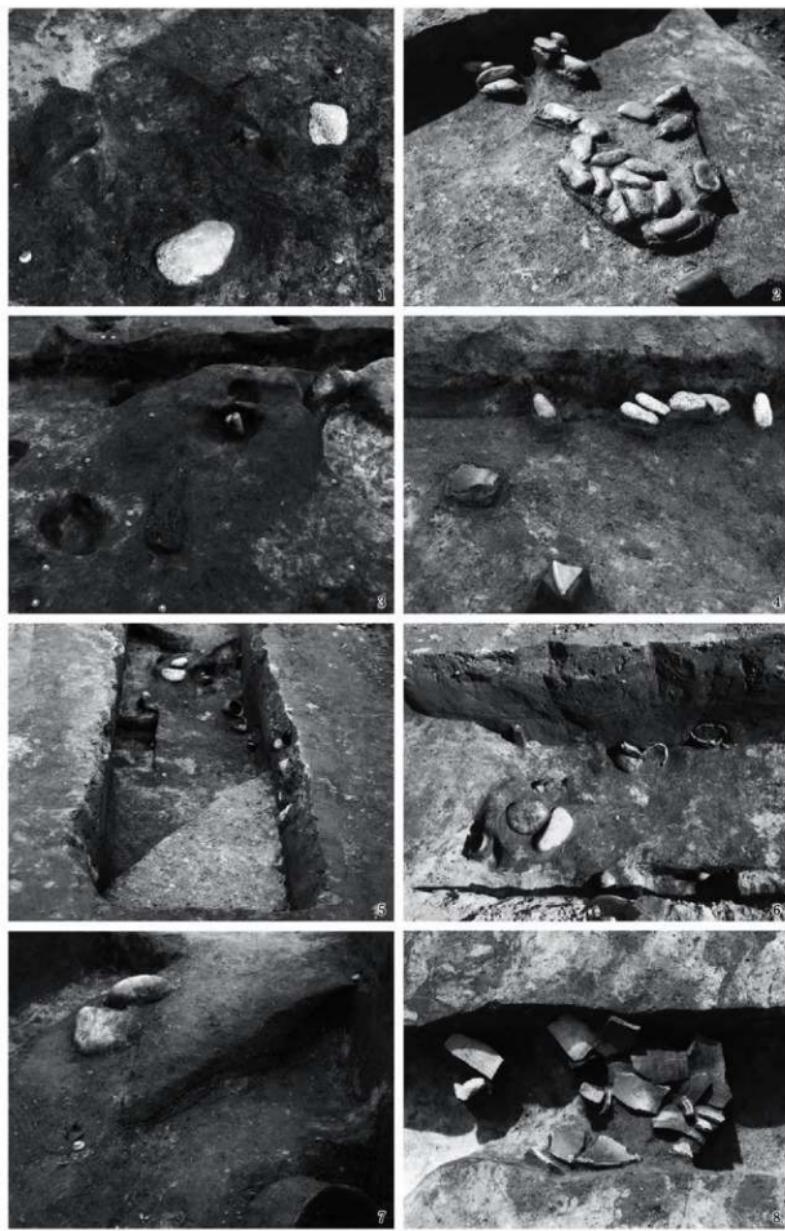
上梅沢遺跡

1. S I 5 (南西から) 2. S F 1 (南から)



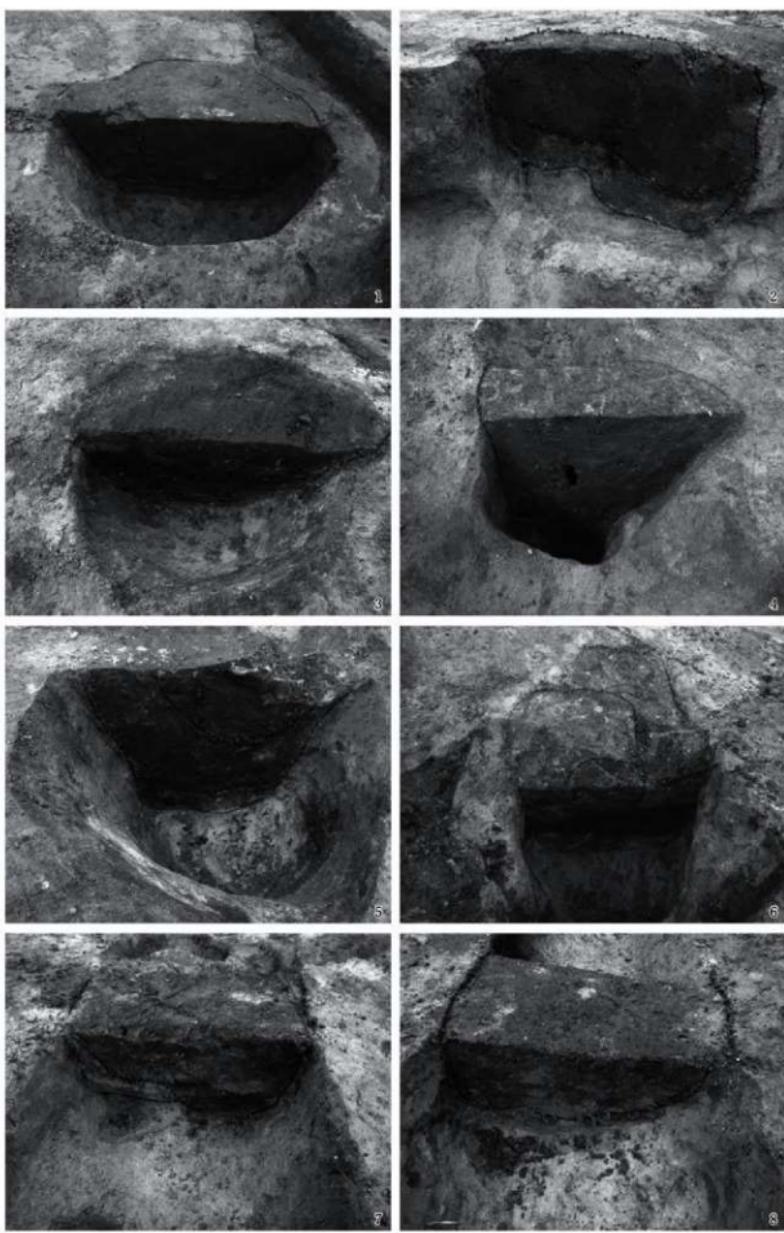
上梅沢遺跡

1. S I 1 カマド（西から） 2. S I 1 カマド掘方（西から） 3. S I 2（南西から） 4. S I 3（南西から）
 5. S I 3 カマド（西から） 6. S I 3 遺物出土状況（東から） 7. S I 3-P 2（北西から） 8. S I 4-P 1（東から）



上梅沢遺跡

1. S I 4 カマド（北西から） 2. S I 4 遺物出土状況（南東から） 3. S I 5 カマド（西から） 4. S I 5 遺物出土状況（東から）
5. S I 6（南西から） 6. S I 6（北西から） 7. S I 6 カマド（南西から） 8. SD1060 遺物出土状況（東から）



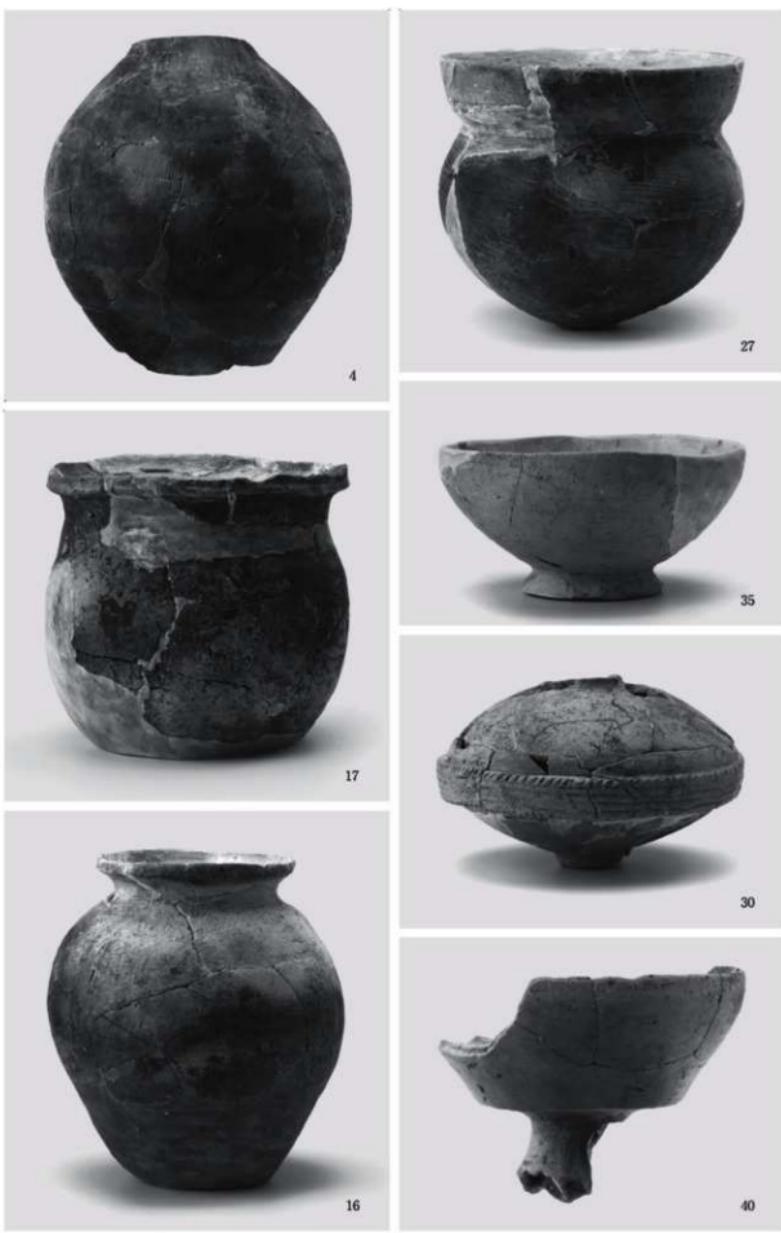
上梅沢遺跡

1. SP1057 (北から) 2. SP1084 (北西から) 3. SP1089 (西から) 4. SP1179 (東から)
5. SP1139・SD1040 (南から) 6. SP1143 (北から) 7. SD1125 (南から) 8. SD1128 (南から)



上梅沢遺跡

1. A地区全景（北から） 2. A地区中央（東から） 3. SK41（北から） 4. SD23遺物出土状況（西から）
5. SD34遺物出土状況（西から）



上梅沢遺跡 土器

S Z 1 SX1193



41



55



44



56



45



46



60



上梅沢遺跡 土器
S I 1 S I 3 S I 5



80



81



83



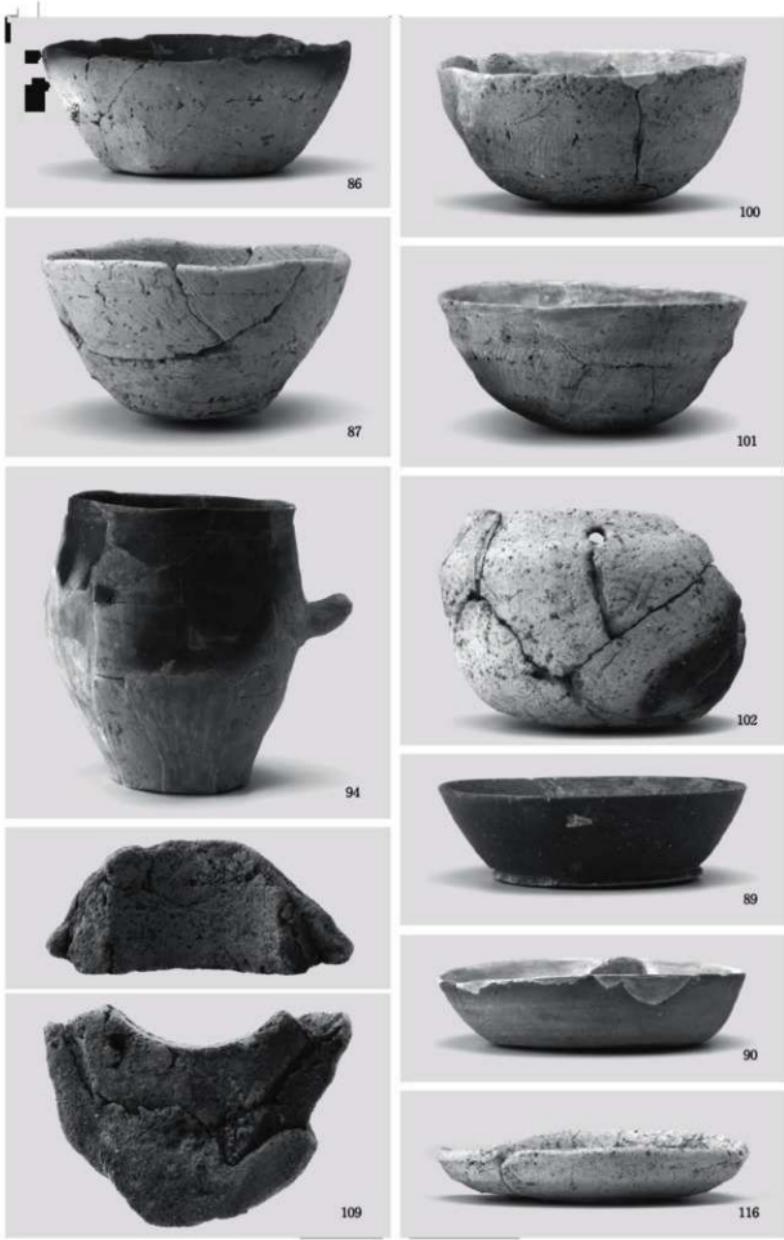
84



82

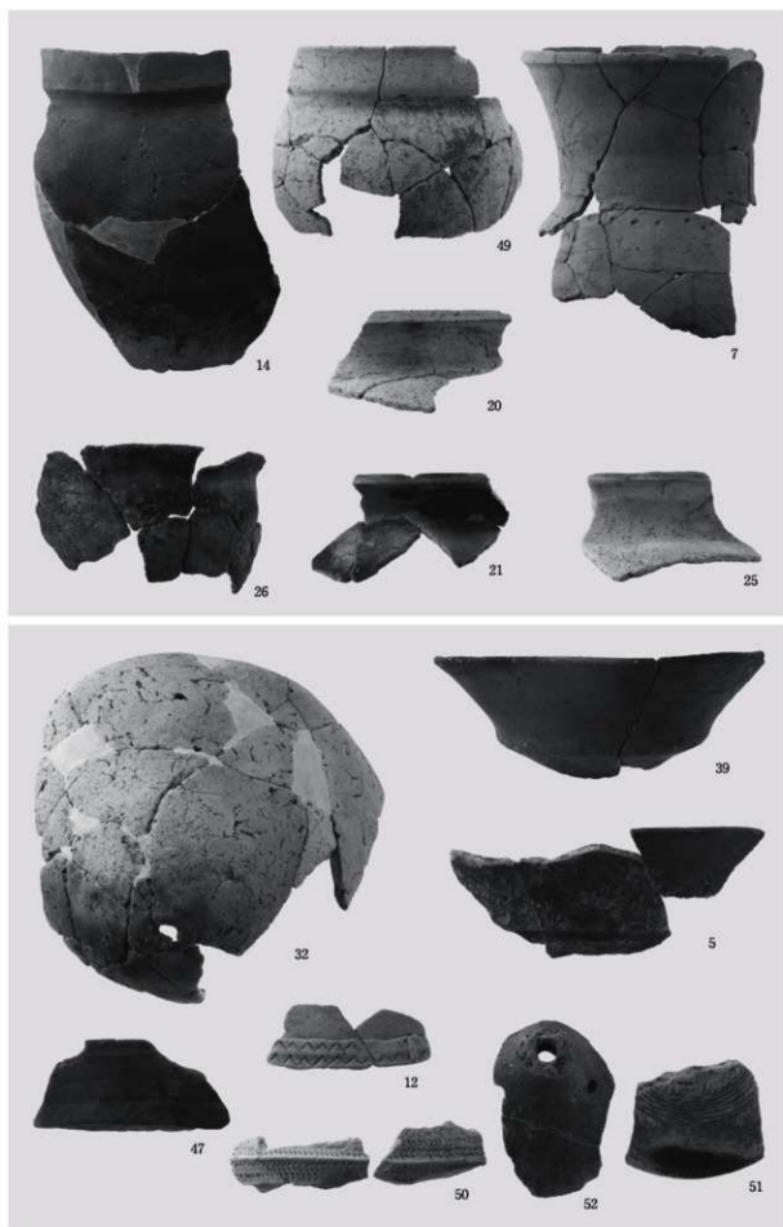


85



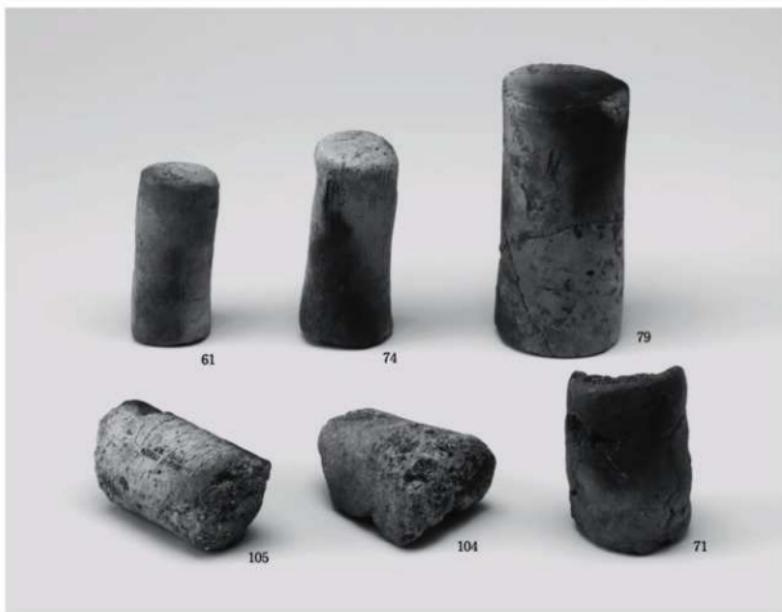
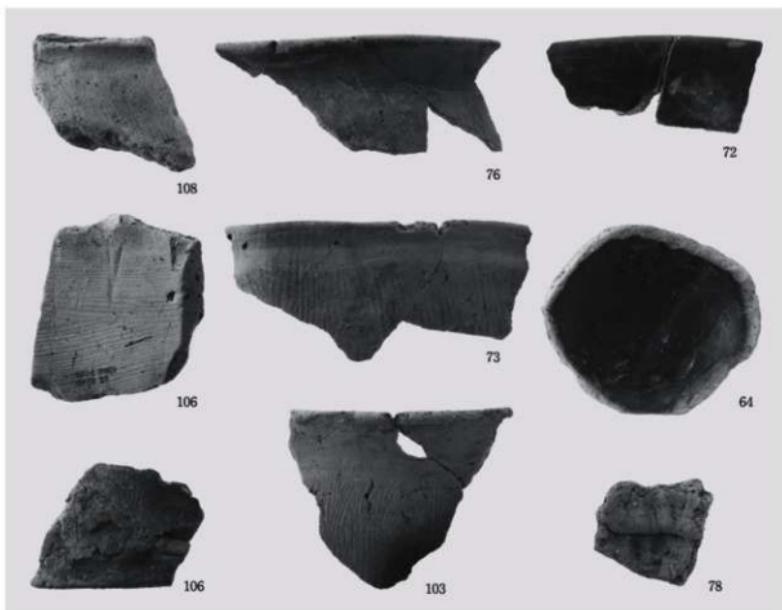
上梅沢遺跡 土器

S I 6 SD1008 SD1019 SD1060 包含層



上梅沢遺跡 土器

S Z 1 S I 2 SD1008 SD1115 包含層

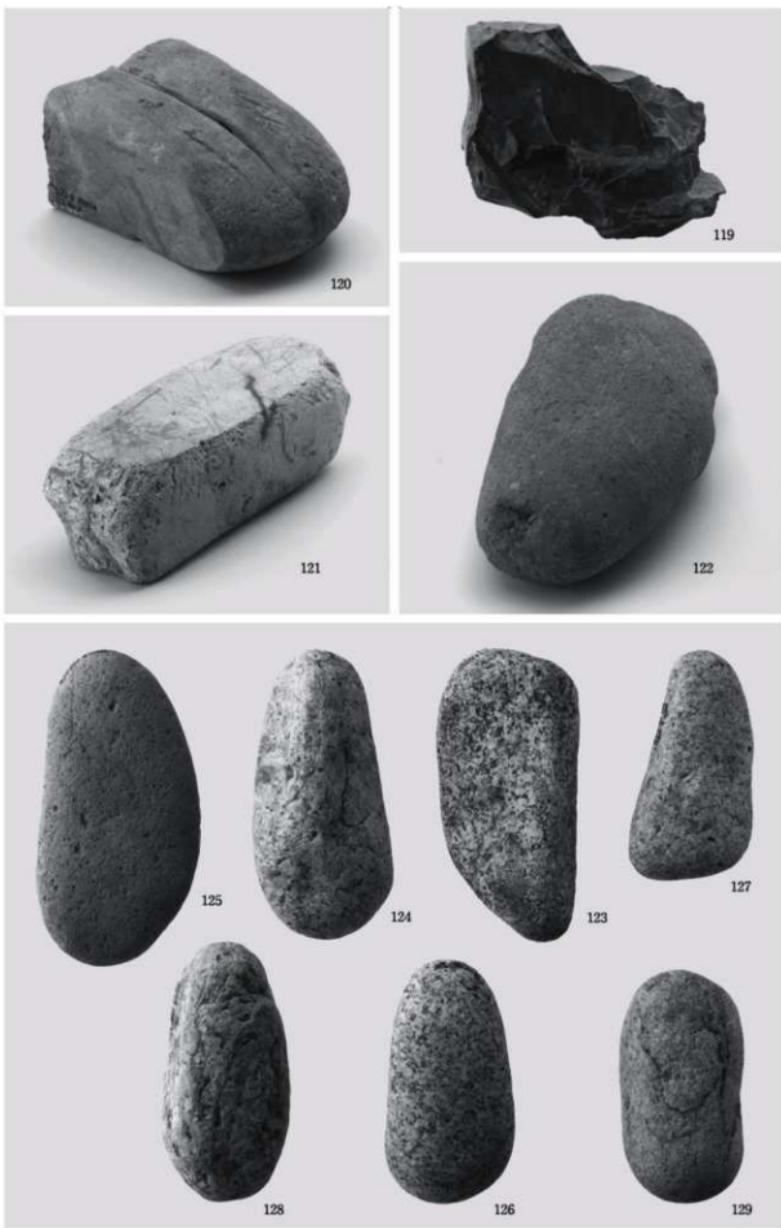


上梅沢遺跡 土器
S I 1 S I 3 S I 4 S I 5 S D1152 包含層



上梅沢遺跡 土器・陶磁器

S I 2 SK27 SD23 SD34 SD1105 SD1117 包含層



上梅沢遺跡 石製品

S I 1 S I 2 S I 3 S I 4 S I 5 S I 6 S K 1028 S K 1188 S D 1155



航空写真

1. 水橋金広・中馬場遺跡（1961年） 2. 水橋金広・中馬場遺跡（2007年）



水橋金広・中馬場遺跡

1. 調査区西侧遠景（南西から） 2. 調査区中央遠景（東から）



水橋金広・中馬場遺跡

1. 調査区中央遠景（南西から） 2. 調査区東側遠景（西から）



水橋金広・中馬場遺跡

1. A1地区全景（北東から） 2. A2地区全景（南西から）



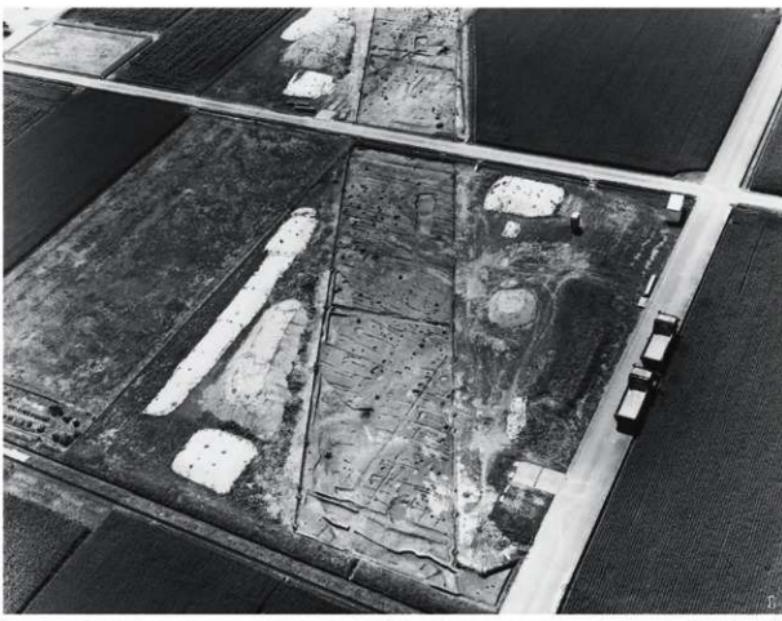
1



2

水橋金広・中馬場遺跡

1. A3・4地区全景（北東から） 2. A3・4地区全景（南西から）



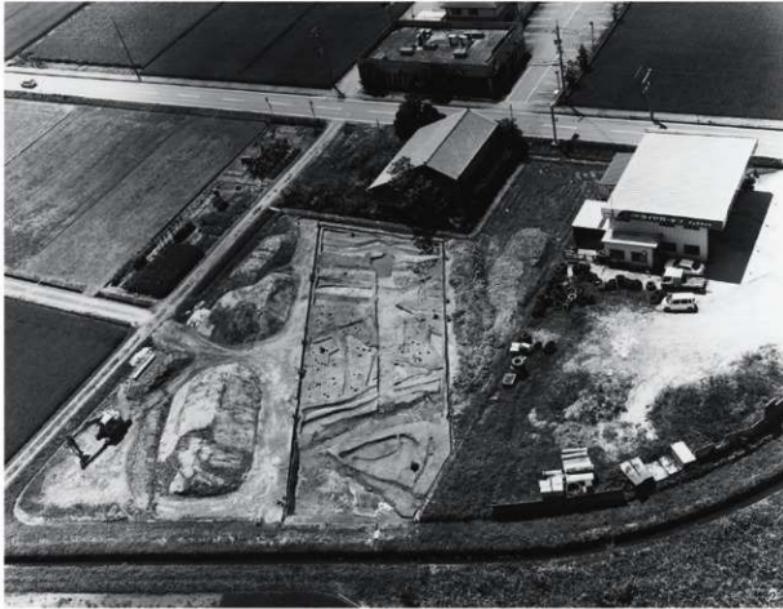
水橋金広・中馬場遺跡

1. A4地区全景（北東から） 2. A4地区全景（北から）



水橋金広・中馬場遺跡

1. A5地区全景（西から） 2. A9地区全景（北から）



水橋金広・中馬場遺跡

1. A12地区全景（西から） 2. A6地区全景（北東から）



水橋金広・中馬場遺跡

1. A 7地区全景(南から) 2. A 8 S・N地区全景(南から)



水橋金広・中馬場遺跡

1. A10地区全景（南から） 2. A11地区全景（南から）



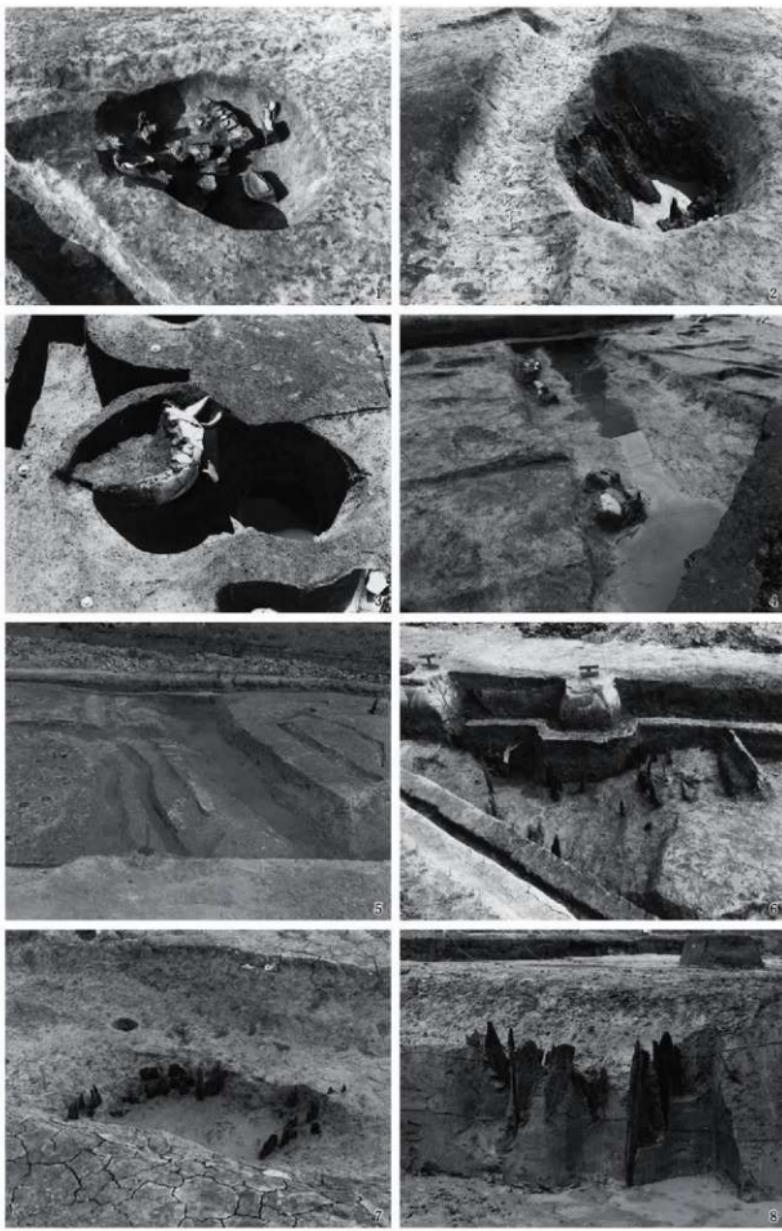
1



2

水橋金広・中馬場遺跡

1. SD 3 A・B (西から) 2. SD 5 (北東から)



水橋金広・中馬場遺跡

1. SK1 (南から) 2. SK3 (北西から) 3. SK4 (東から) 4. SD1A・B (南から) 5. SD5 (南から)
6. SD5 (北から) 7. SD13 (東から) 8. SD13 (南から)



1



2

水橋金広・中馬場遺跡

1. SF 1 (南東から) 2. SE 1 (北から)



水橋金広・中馬場遺跡

1. SD18-19 (北から) 2. SD19 (南から)



1



2



3



4



5

水横金広・中馬場遺跡

1. A9地区さく状遺構（北から） 2. A8 S・N地区さく状遺構（東から） 3. SE1遺物出土状況（北から）
4. SD18（西から） 5. SD18（南から）



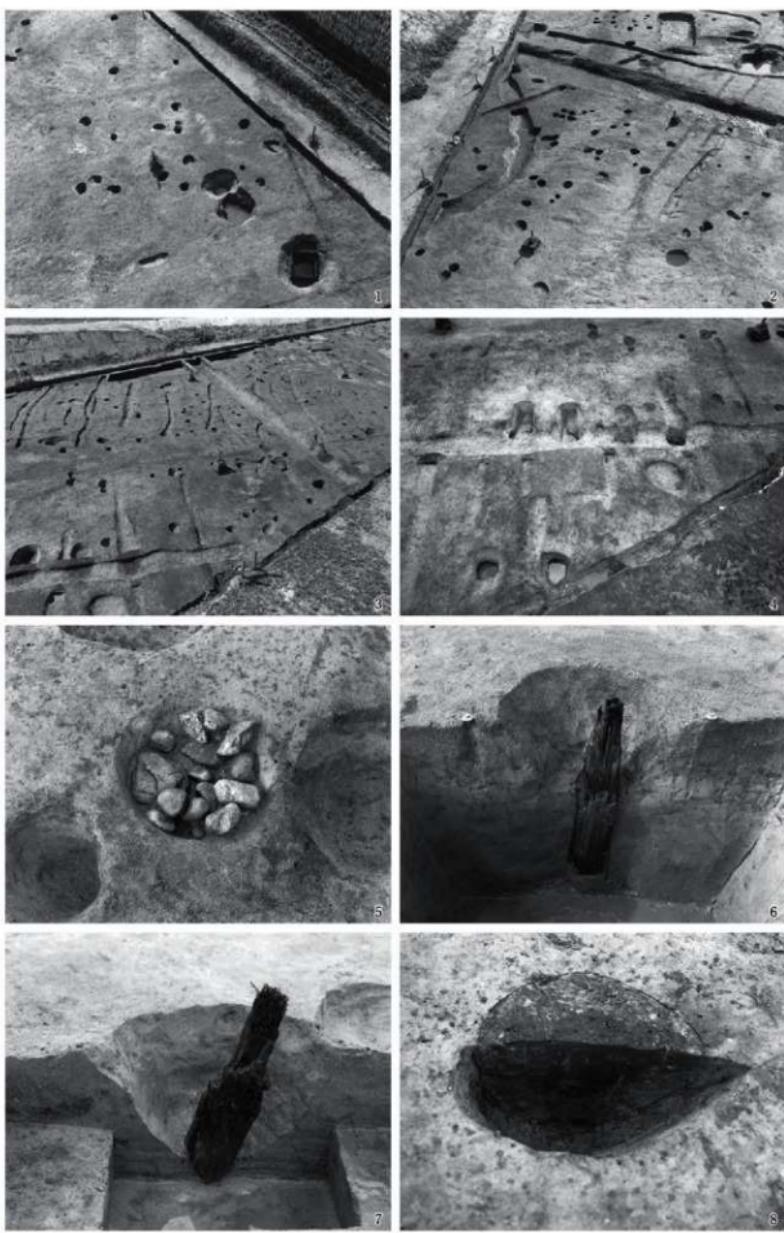
水橋金広・中馬場遺跡

1. SB 2~4 (北から) 2. A 3 地区西側 (南西から)



水橋金広・中馬場遺跡

1. S B 17・18 (西から) 2. S B 1 (北から) 3. S B 2 (北東から) 4. S B 7・10・11 (南から) 5. S B 8 (南西から)



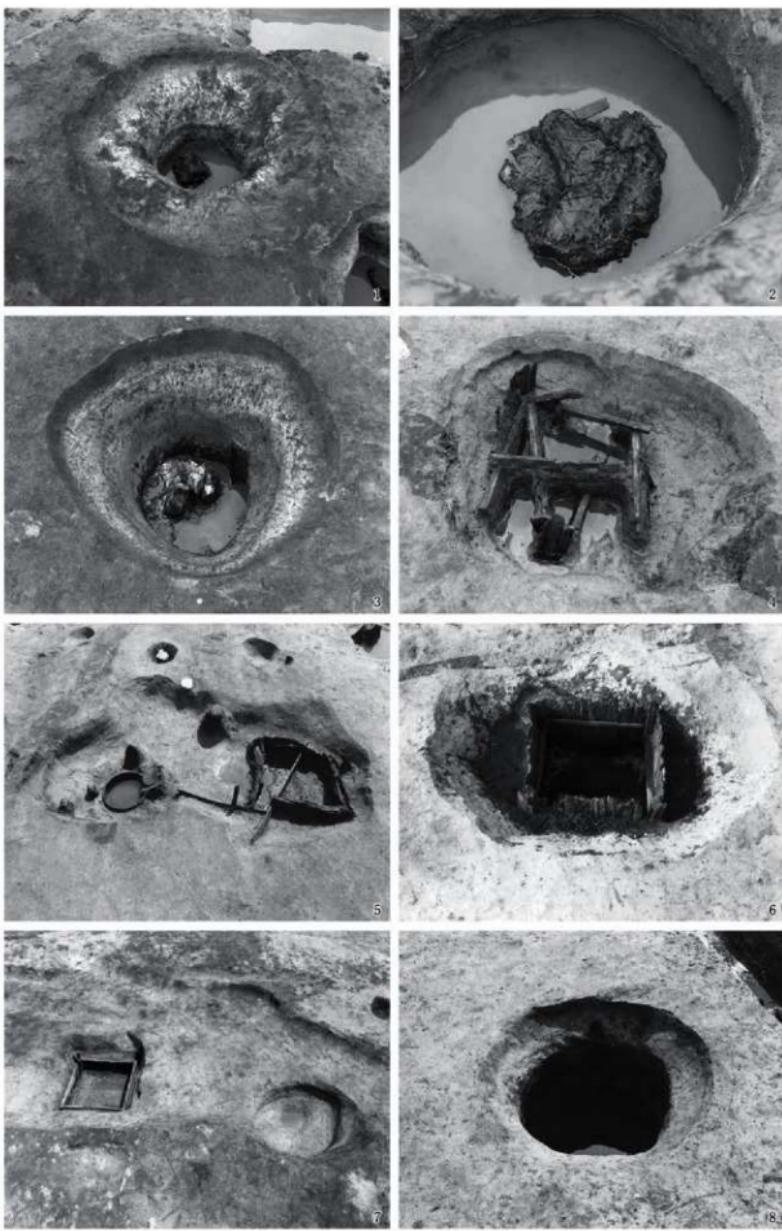
水橋金広・中馬場遺跡

1. S B12・13, S E21~23 (東から) 2. S B14・15 (北東から) 3. S B19 (北から) 4. S B21 (北から)
5. S P86 (南から) 6. S P100 (南から) 7. S P125 (南から) 8. S P134 (北東から)

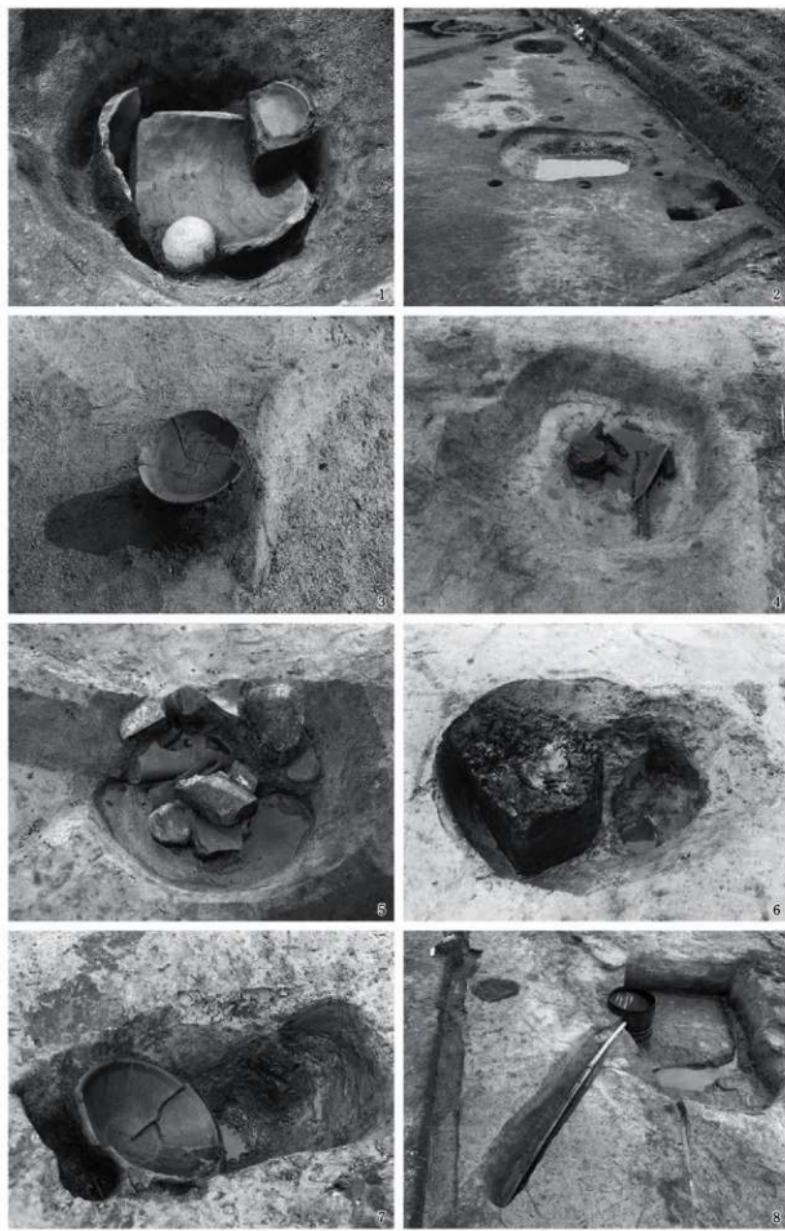


水橋金広・中馬場遺跡

1. A10地区東側（南から） 2. A11地区全景（西から）

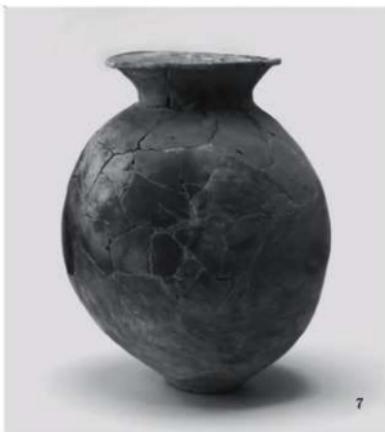
**水橋金広・中馬場遺跡**

1. SE 5 (南から) 2. SE 5 遺物出土状況 (北から) 3. SE 3 (東から) 4. SE 13 (北から)
5. SE 14-15 (北西から) 6. SE 23 (南から) 7. SE 25-26 (西から) 8. SE 28 (西から)



水橋金広・中馬場遺跡

1. SK 8 (東から) 2. SK12 (西から) 3. SK37 (北から) 4. SK32 (東から) 5. SK47 (東から)
6. SK52 (北東から) 7. SK55 (南西から) 8. SK60 (西から)

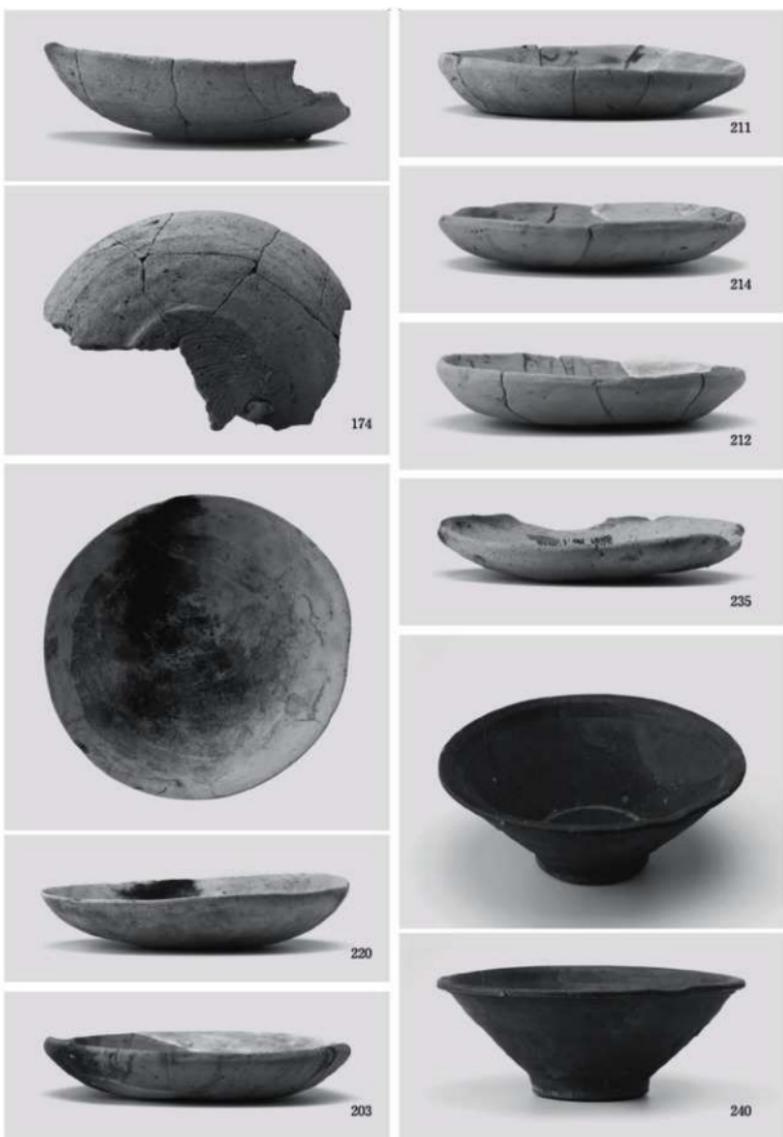


水橋金広・中馬場遺跡 土器
SK4 SD5 SD19 SD128 包含層

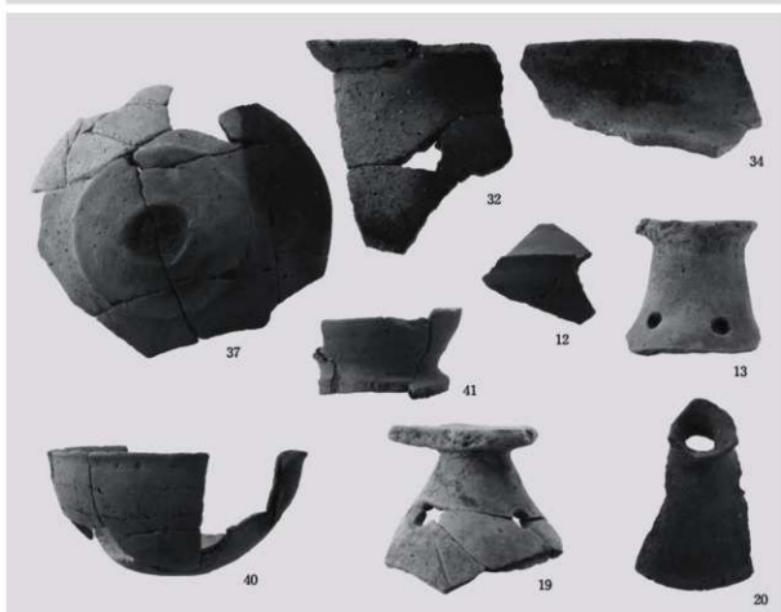
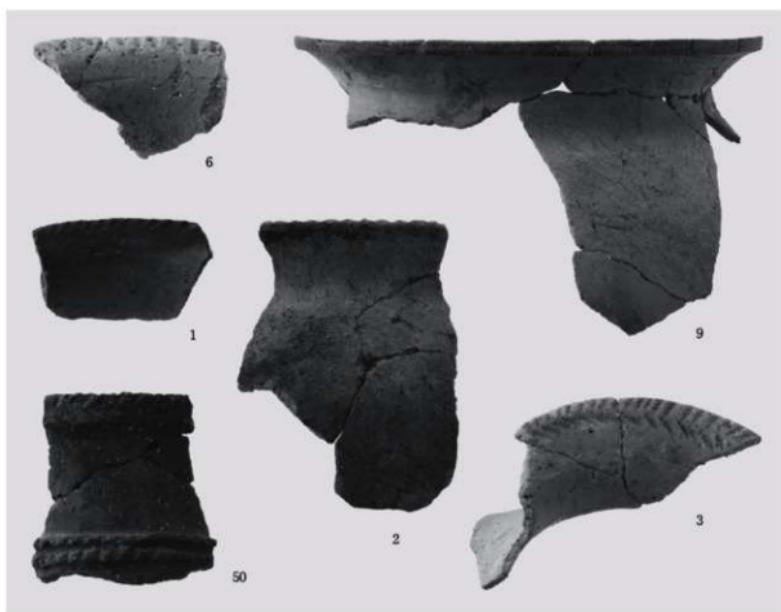


水橋金広・中馬場遺跡 土器

SE 1 SD19 包含層

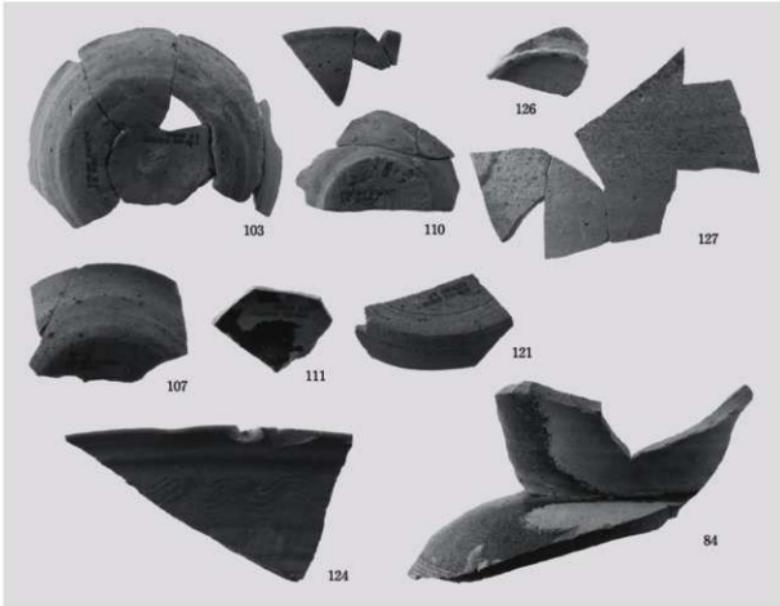


水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器
S E26 SK36 SK37 SK39 SK55 SK63



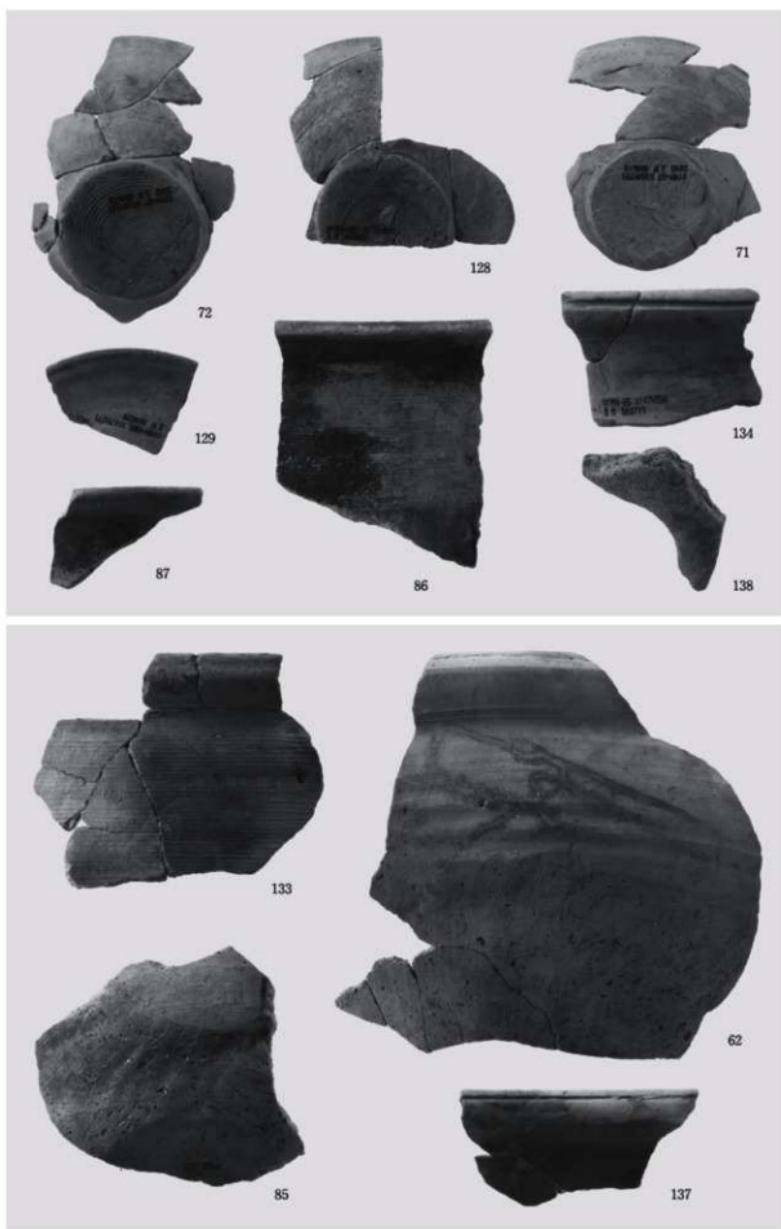
水橋金広・中馬場遺跡 土器

SK1 SK2 SD1 SD3 SD4 SD15 包含層

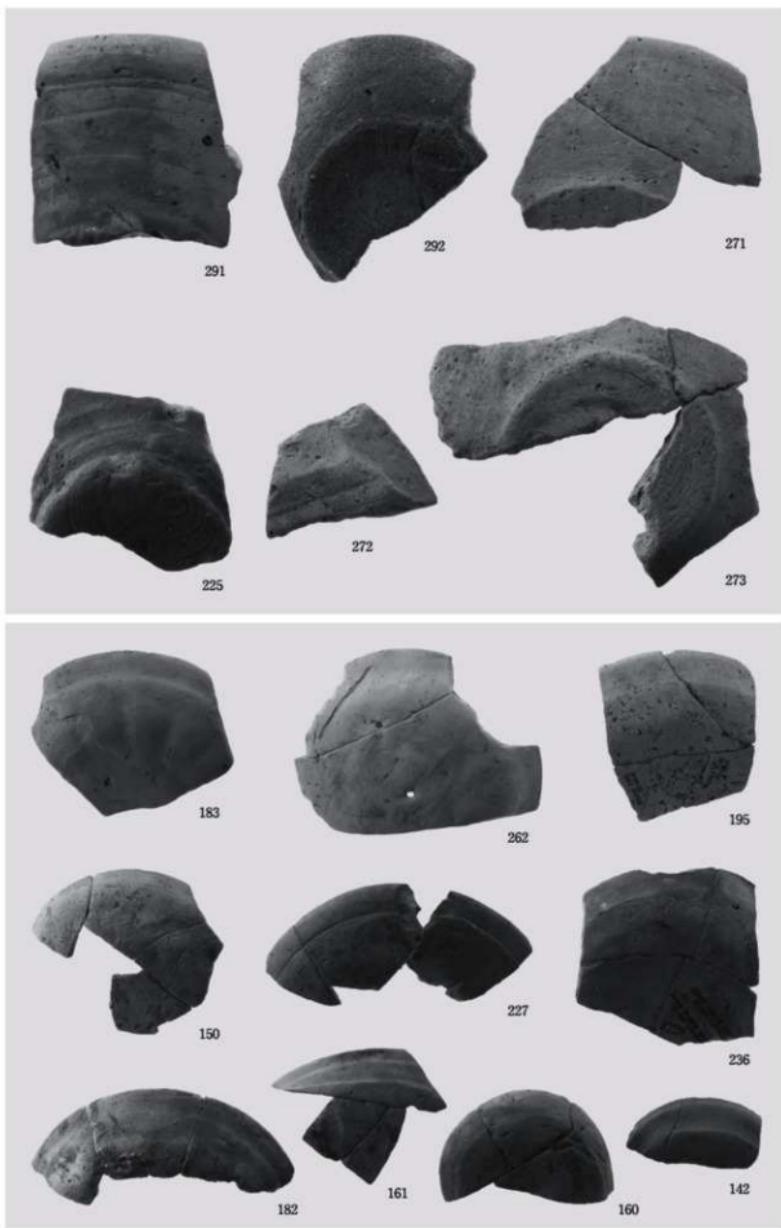


水橋金広・中馬場遺跡 土器

SD18 SD19 SD90 SD96 SD102 包含層



水橋金広・中馬場遺跡 土器
SK49 SD18 SD19 包含層



水橋金広・中馬場遺跡 土器

SE 7 SE 16 SE 18 SE 20 SK 7 SK 8 SK 26 SK 38 SK 44 SK 48 SK 64 SD 126 SD 138 SD 141
SP 61 包含層

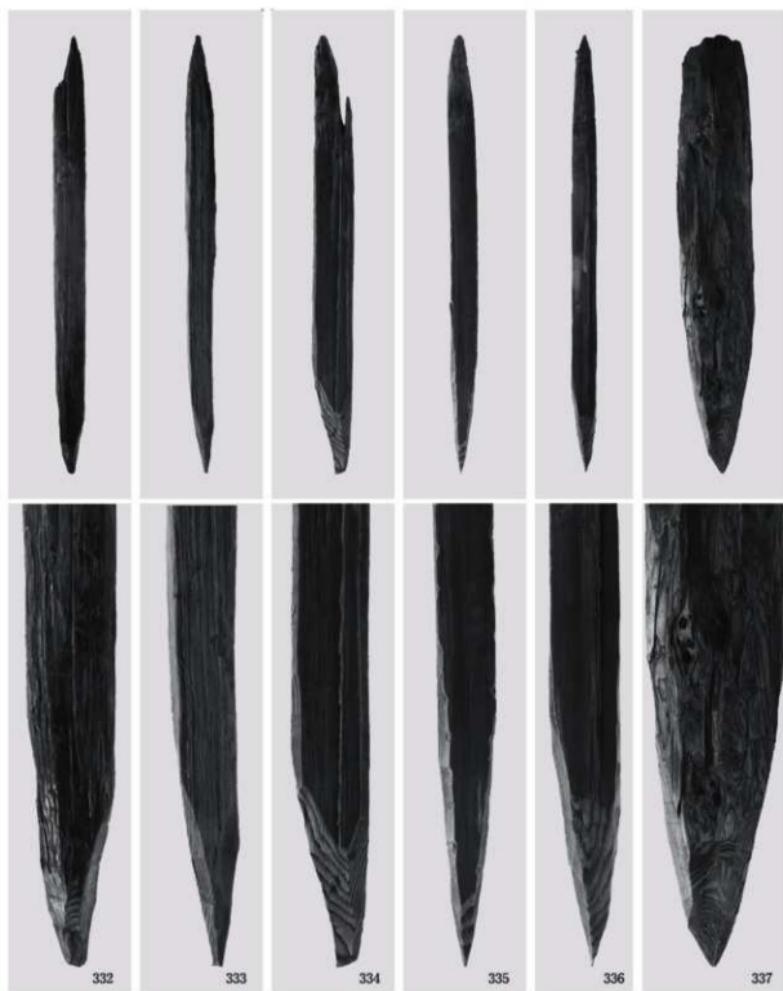


水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器
SP95 SK8 SK27 SK47 SD106 SD126 包含層



水橋金広・中馬場遺跡 土器・陶磁器

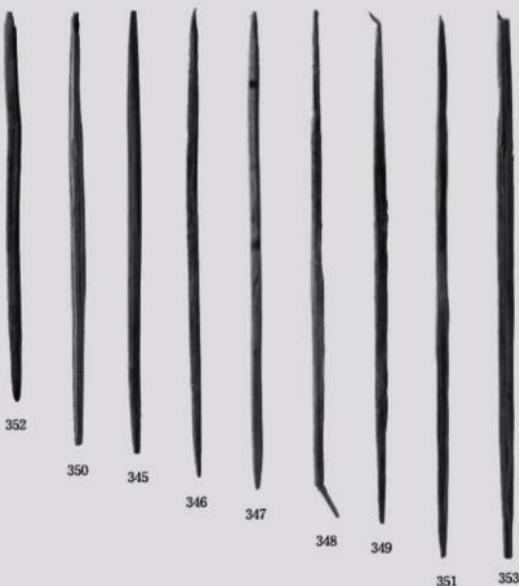
SE 6 SE 29 SK 37 SK 42 SK 48 SD 137 SD 146 SD 151 SD 154 包含層

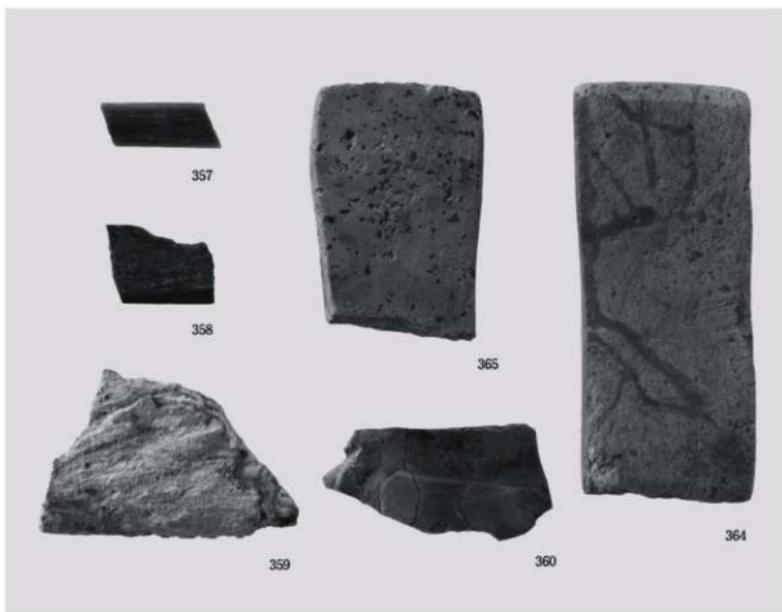


水橋金広・中馬場遺跡 木製品
SD5 SD13 SD19



水橋金広・中馬場遺跡 木製品
SE15 SE36 SK58 SD5 SD106 SD126





水橋金広・中馬場遺跡 石製品
SK22 SK27 SD18 SD19 包含層



航空写真

1. 新堀西遺跡（1961年） 2. 新堀西遺跡（2007年）



1



2

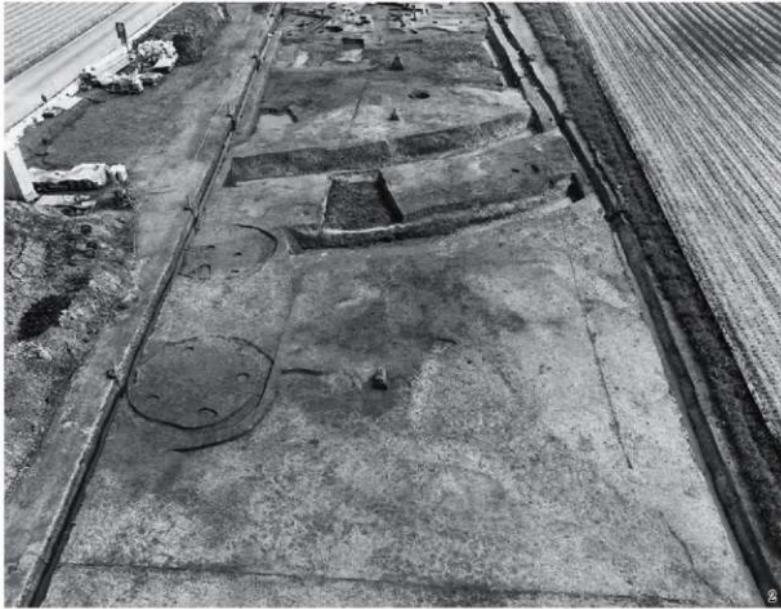
新堀西遺跡

1. A地区遠景（北西から） 2. A地区遠景（南東から）



新堀西遺跡

1. A地区全景（北東から） 2. A地区建物群（北西から）



新堀西遺跡

1. A地区中央（北東から） 2. A地区西侧（西から）



1



2

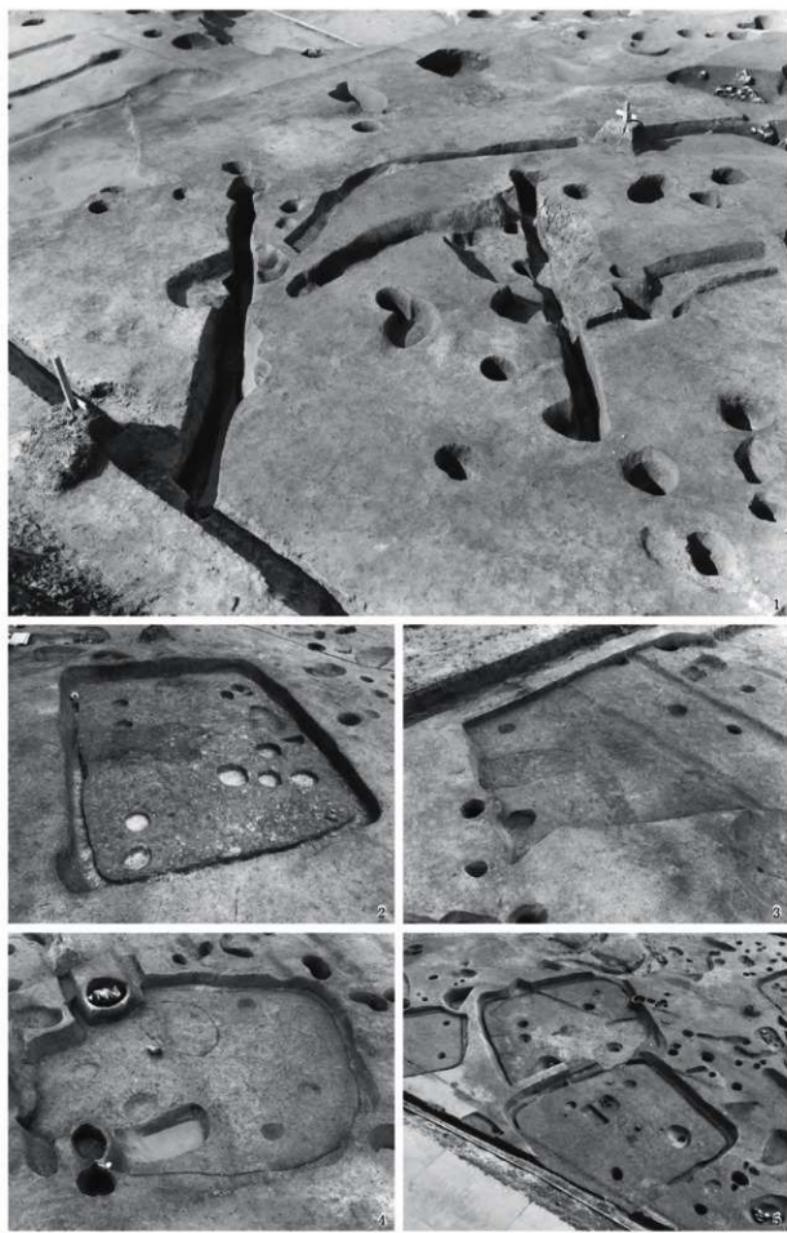
新堀西遺跡

1. B地区全景（西から） 2. B地区東側（北西から）



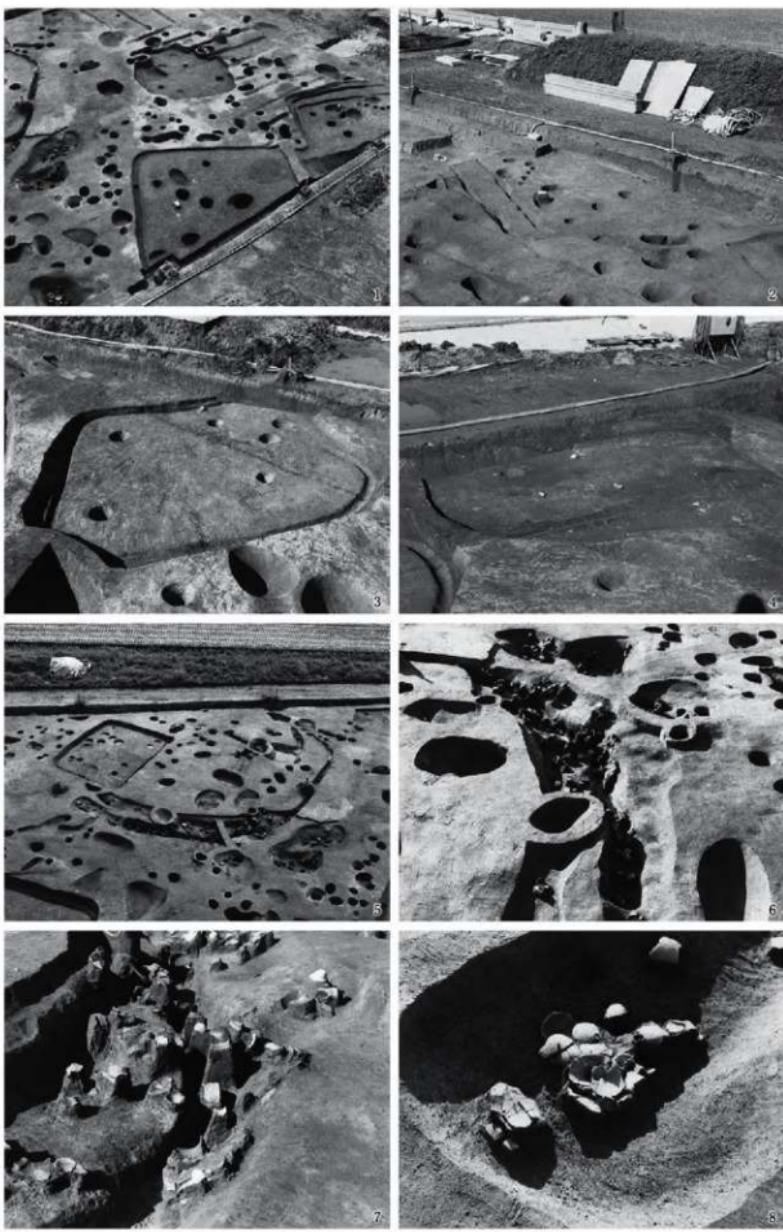
新堀西遺跡

1. S I 1・2 (北から) 2. S I 3～9・13 (北から)



新堀西遺跡

1. S B 1 (南東から) 2. S I 3 (南から) 3. S I 4 (北から) 4. S I 5 (東から) 5. S I 6・7 (北西から)



新堀西遺跡

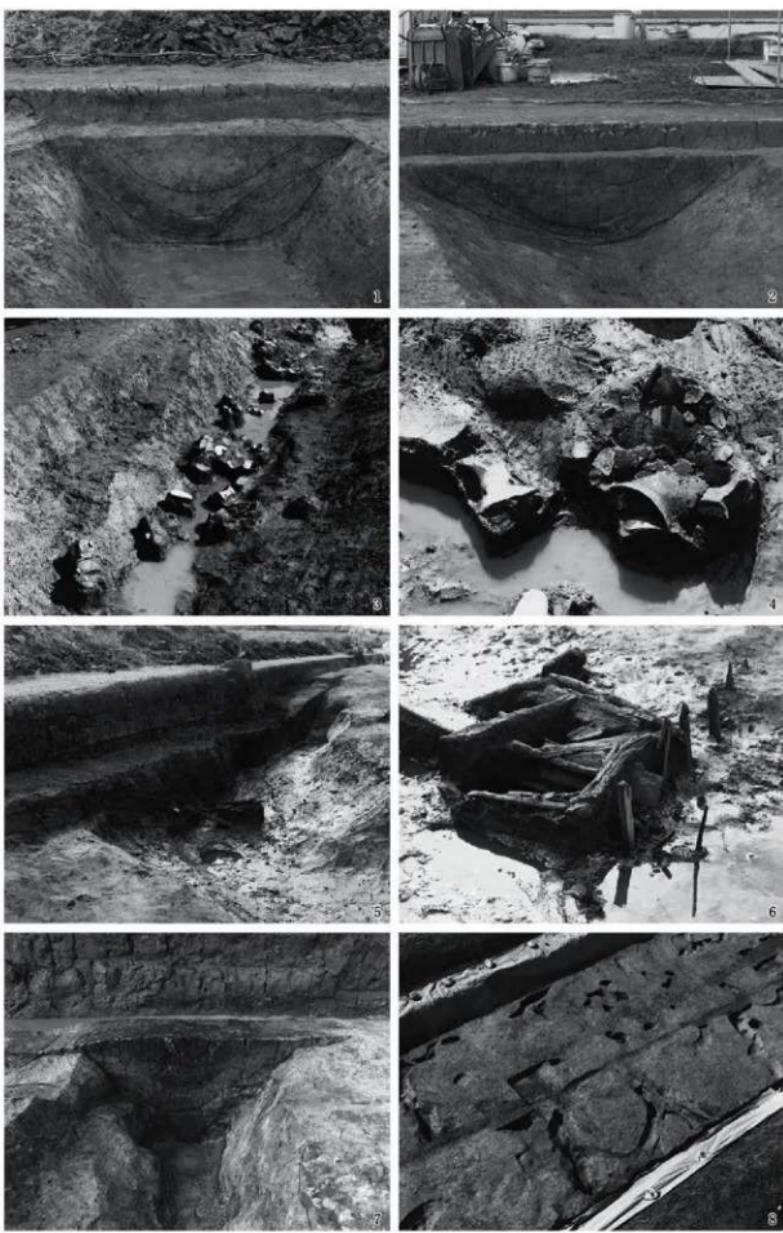
1. SII 8 (北から) 2. SII 9 (南東から) 3. SII 11 (南東から) 4. SII 12 (南西から) 5. SII 13, SD10 (北から)
6~8. SD10 遺物出土状況 (東から)



2

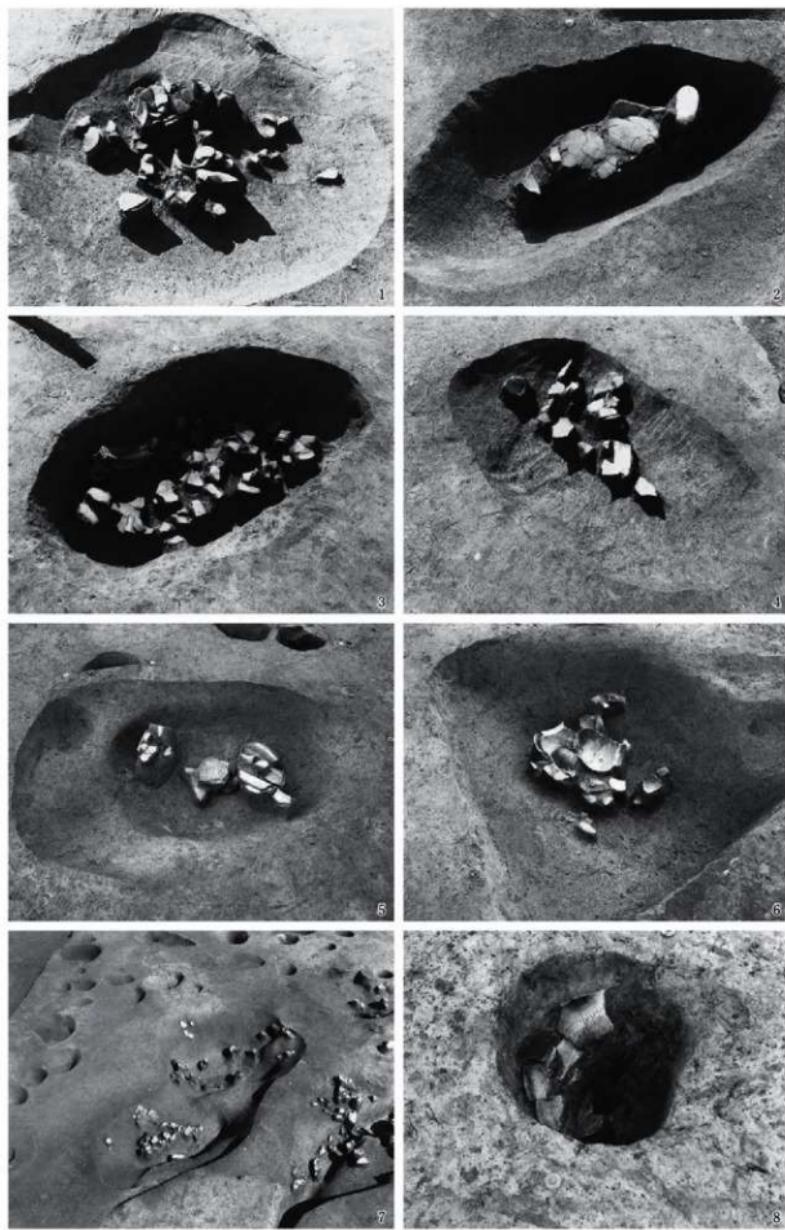
新堀西遺跡

1. SD 2・3 (北から) 2. SD 5 (北西から)



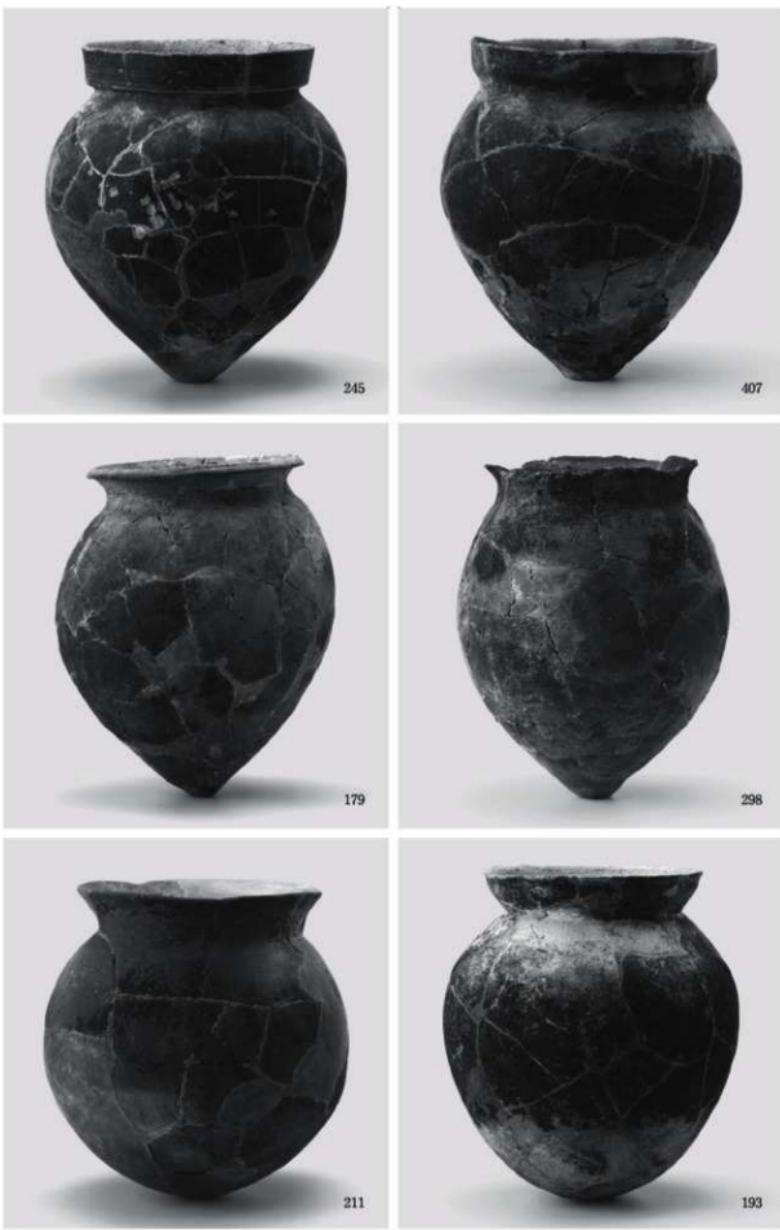
新堀西遺跡

1. SD 2 (南から) 2. SD 3 (南から) 3. SD 3 遺物出土状況 (北から) 4. SD 3 遺物出土状況 (東から)
 5. SD 5 (北から) 6. SX 1 (北東から) 7. SD 16 (南から) 8. SD 17 (北から)



新堀西遺跡

1. SK 2 (東から) 2. SK 3 (北から) 3. SK 6 (東から) 4. SK 7 (東から) 5. SK 15 (南から)
6. SK 17 (北から) 7. SK 24-25 (南から) 8. SK 32 (北東から)



新疆西遺跡 土器
SK3 SK17 SK24 SD3 SD5 SD10



新堦西遺跡 土器

S18 S19 SK18 SD3 SD5 SD10

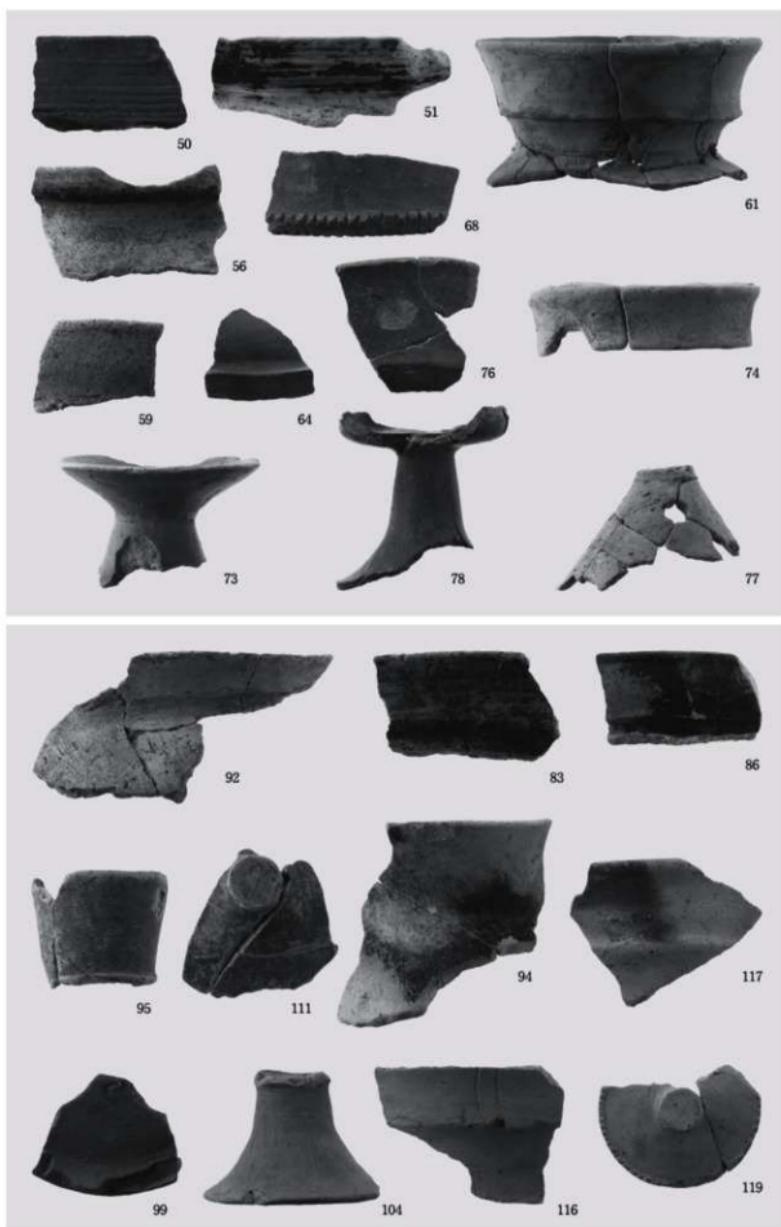


新疆西遺跡 土器
SK15 SD2 SD5 SD10





新疆西遺跡 土器
S13 S14 S15

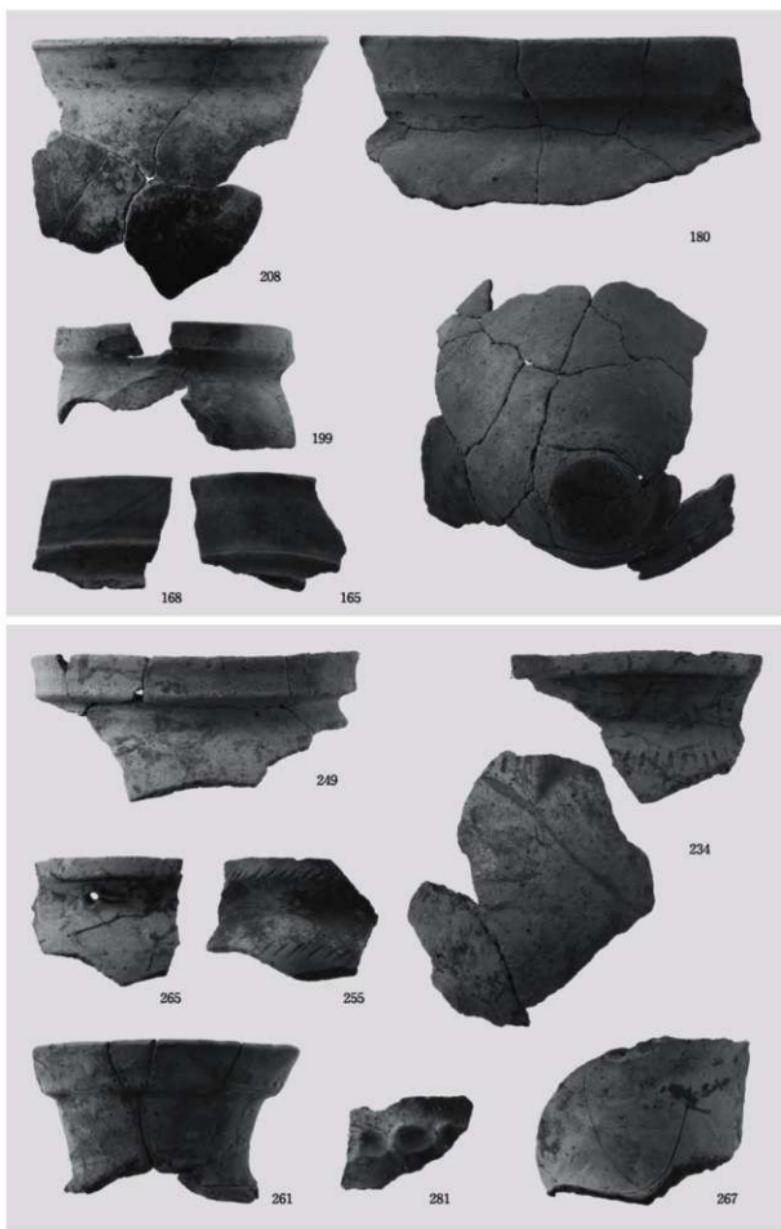


新堀西遺跡 土器
SI 6 SI 7 SI 8



新疆西遺跡 土器

S I 9 S I 11 S I 12 SK 1 SK 2 SK 4 SK 15 SK 20



新堀西遺跡 土器

SK6 SK9 SK10 SK18 SK21 SD2 SD3



新疆西遺跡 土器
SD1 SD2 SD3 SD5

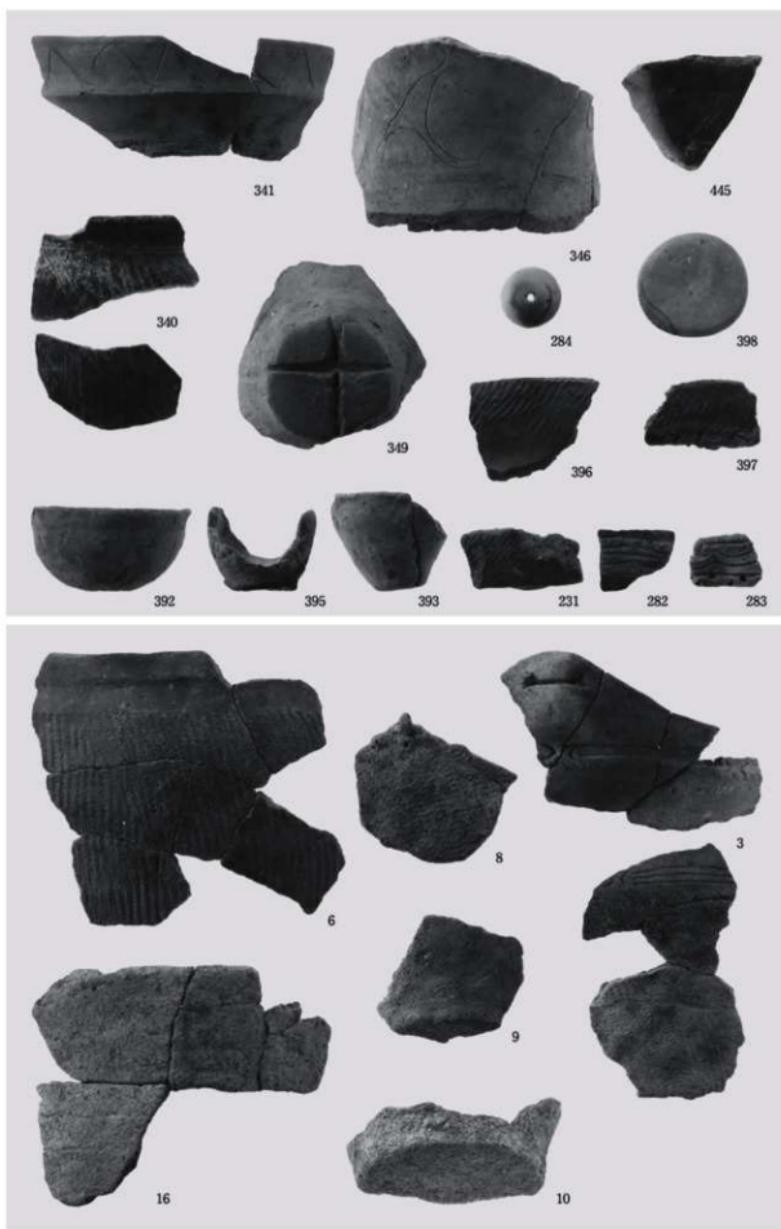


新堦西遺跡 土器
SD 5



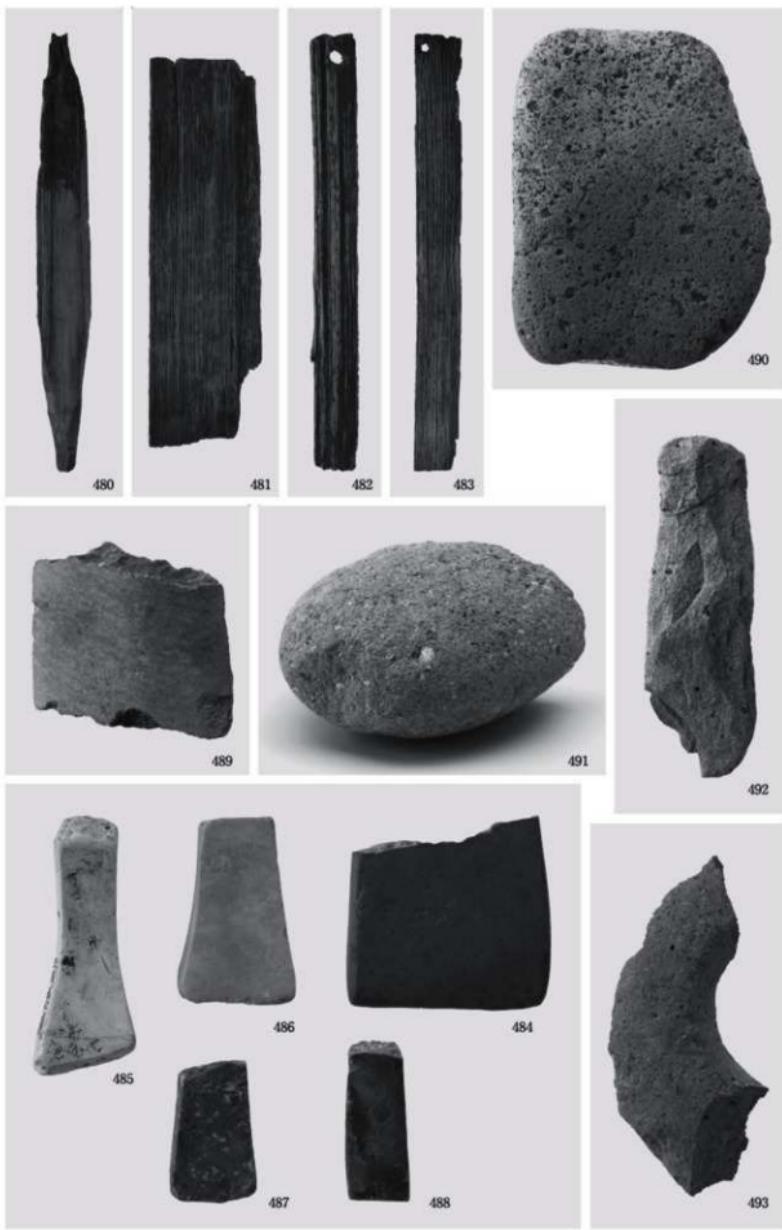
新疆西遺跡 土器

SK9 SK15 SK22 SK24 SK25 SK32 SD10 SD15 SX1



新堀西遺跡 土器

SK27 SK30 SD1 SD2 SD3 SD5 SD10 包含層



新堀西遺跡 木製品・石製品

S I 7 S I 8 SK17 SD5 SX4 包含層

報告書抄録

2013（平成25）年3月7日 印刷
2013（平成25）年3月15日 発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第52集

**上梅沢遺跡
水橋金広・中馬場遺跡 発掘調査報告
新堀西遺跡**

－北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告VI－

編集・発行 公益財団法人富山県文化振興財団
埋 藏 文 化 財 調 査 事 務 所
〒930-0887 富山市五福4384番1号
TEL 076-442-4229

印 刷 中 村 印 刷 工 業 株 式 会 社
〒930-0039 富山市東町2丁目3-22
TEL 076-424-4616

